

大江文学における「『第三世界』と日本」の表象——
「アルジェリア戦争の時代」と『われらの時代』周辺作
品を中心に

**Representations of “‘Third World’ and Japan” in Oe’s Oeuvre—with
a particular focus on *Our Time* and related works written in “the time
of the Algerian War”**

ギュヴェン デヴリム チェティン
(GÜVEN Devrim Cetin)

目次

凡例	7
序章 「第三世界」論と大江健三郎の初期小説	10
第一章 「始まりの現象」としての最初期小説と「第三世界」という「始まり」——「見るまえに跳べ」を中心に	18
I.1. はじめに	19
I.2. 「見るまえに跳べ」における「イニシエーション」	24
I.2.1 「イニシエーション」としての ^{ノヴェル} 新規の「小説の方法」——「性」	24
I.2.2 先行研究における「跳べない」というモチーフの重視と「イニシエーション」	25
I.2.3 「大人らしい」 ^{アンガジュマン} 「政治的な参加」の渴望と「かれら」の「性急さ」——日本学生たちのアルジェリア戦争をめぐる内部「闘争」	28
I.3. イニシエーションの「失効」に利用される「世界文学」——オーデン詩の「解釈」と「新しすぎる」植民地主義	33
I.3.1 英語に「捕獲」される「ぼく」	33
I.3.2 “Look if you like, but you will have to leap”の邦訳と「ぼく」のイニシエーションの「失効」の確保	37
I.3.3 「ぼく」の ^{デザンガジュマン} 「離脱」と日本の学生運動	43
I.3.4 西ヨーロッパの <i>New Left/Nouvelle gauche</i> と「かれら」	47
I.4. 「新植民地主義」の「擬人化」としてのガブリエル	50
I.4.1 「ぼく」の保守主義の相対性とサルトルの「新植民地主義論」	51
I.4.2 エンクルマの「新植民地主義論」とガブリエル	57
I.4.3 ガブリエルの職業——「外国誌の特派員」という設定	62
I.5. おわりに	67
第二章 戦後日本の「荒地」における ^{オタンティシテ} 「正真正銘性」の探求——「喝采」の「第三世界論」	71
II.1. はじめに	72

II.2. 「 ^{デザンガジュマン} 政治的離脱」と「 ^{オタンテイシテ} 正真正銘性」の探求	74
II.2.1 ^{アイデンティティ} 職業的自己同一性の「あいまいさ」という設定	75
II.2.2 ^{アイデンティティ} 性的自己同一性と ^{アイデンティティ} 政治的自己同一性の交叉——「学生」たりえぬ「ヒモ」と「男」たりえぬ「学生」の遭遇	76
II.2.3 物語の記憶の原点としての1955年と夏男の「不能」	83
II.3. 「 ^{エロティック・トライアングル} 性愛の三角形」と「 ^{オタンティック} 正真正銘」な自己の形成過程	86
II.3.1 「元服」と夏男の性的 ^{アイデンティティ} 自己同一性の形成過程	89
II.3.2 西洋人の「念者」に求められる「元服」——夏男の自己欺瞞	90
II.4. 「喝采」の「第三世界論」	92
II.4.1 「海の向こう」に求められる「 ^{オタンテイシテ} 正真正銘性」	92
II.4.2 新植民地主義の「欺瞞工作」の「工作員」としての康子	95
II.4.3 <i>Engager</i> という単語の「誤訳」が意味するもの	99
II.4.4 <i>Désengagement</i> の推進のイデオロギー装置としての文化帝国主義	105
II.4.5 サルトルの反植民地主義理論と「喝采」	107
II.4.6 「植民地の問題」と「喝采」における「喝采」・「痼疾」というイマージュ	110
II.5. おわりに	117
第三章 『われらの時代』における「世界文学」の「脱文脈化」と「南」の「 ^{マッピング} 地図作成」を中心に	119
III.1. はじめに	120
III.2. 「世界文学」における「姿勢と言及の構造」としての「 ^{マッピング} 地図作成」	124
III.2.1 『われらの時代』における「世界地図」のモチーフ	128
III.2.2 ミラーのアジアの「 ^{マッピング} 地図作成」の「 ^{リマッピング} 再地図作成」——日本の「第三世界」＝「南」の地図からの「消去」をめぐって	130
III.3. 「脱文脈化法」による「世界」の「 ^{マッピング} 地図作成」——『チャタレイ夫人の恋人』と『われらの時代』	141
III.3.1 「脱文脈化法」とは？	141
III.3.2 「脱文脈化」される「植民地地理」——物語の方向性としての「南」	146
III.3.3 「反ローレンス」的な小説としての『われらの時代』	151

III.3.4	大英帝国の衰退の「地図作成」 ^{マッピング} と『われらの時代』における「南インド諸島」という「地名」	155
III.3.5	『チャタレイ夫人の恋人』の脱文脈化による古典帝国主義＝旧植民地主義の停滞状態の「地図作成」 ^{マッピング}	159
III.4.	おわりに	161
第四章 『われらの時代』における『路上』の脱文脈化による「世界地図」の再・地図作成^{リマッピング}		
IV.1.	はじめに	164
IV.2.	『われらの時代』における『路上』の「地図作成」 ^{マッピング} の脱文脈化	164
IV.2.1	『路上』をめぐって	164
IV.2.2	「高揚感」と「トラック」のモチーフの参照先としての『路上』	167
IV.2.3	『路上』の古パネル・トラックから『われらの時代』の「米軍から放出の軍用トラック」へ	169
IV.2.4	南滋の「トラック・フェティッシュ」と「テロル」の試み	172
IV.2.5	「 ^{インベリアル} 皇帝という感じはしない」天皇と疑似テロル事件	178
IV.2.6	沖縄の「アルジェリア化」と「武装解除されるトラック」	181
IV.2.7	「ジャズ」、「トラック」と米兵暴行事件	184
IV.2.8	ジャズ・ドラムとトラックに積載された「 ^{スチール・ドラム} ドラム缶」の記憶と「第三世界」の「地図作成」 ^{マッピング}	192
IV.2.9	「ジャズ」と文化帝国主義	196
IV.3.	『われらの時代』における『路上』でのアラブ人に対する「姿勢と言及の構造」の「脱文脈化」という方法	199
IV.3.1	『路上』における北アフリカのアラブ人に対する「姿勢と言及の構造」による「世界地図」の作製	200
IV.3.2	『路上』の脱文脈化と南靖男の「北アフリカ」フェティシズム	208
IV.4.	『われらの時代』と「世界文学」の「地図」における大江文学の位置	215
IV.5.	おわりに	221
第五章 『われらの時代』以後の作品における「怪物」^{モンスター}のイマージュと「第三世界」——「セヴンティーン」と『叫び声』を中心に		
		226

V.1. はじめに	227
V.2. 『われらの時代』における「疑似怪物」と「正真正銘」な「怪物」の対置.....	228
V.2.1 高の「正真正銘」な「怪物」へのイニシエーション	228
V.2.2 『われらの時代』における「怪物」の参照先としての「黒いオルフェ」.....	231
V.2.3 アルジェリア的な「テロル」の「空間」としての『われらの時代』	238
V.3. 1960年安保闘争の「参加」・「第三世界」訪問と「怪物」	240
V.3.1 「セヴンティーン」における「鬼」としての「おれ」	240
V.3.2 「疑似」「怪物」としての「おれ」	245
V.3.3 アメリカニゼーションを中心にする「保守化」を「明視」= “monstrare”する「奇怪」な小説「セヴンティーン」	246
V.3.4 「セヴンティーン」における保守主義とアメリカニズムの融合	249
V.3.5 新安保体制と「世界地図」における日本の再配置	253
V.3.6 「中国体験」と安保闘争の敗北——「第三世界」に一時的接近と「第三世界」からの「離脱」として.....	255
V.4. 『叫び声』における「怪物」のイメージとサルトルの「ファノン論」.....	260
V.4.1 ダリウス・セルベゾフの遠洋航海という奇妙な計画	261
V.4.2 「虎」の奇怪な行動	263
V.4.3 『叫び声』とサルトルの「ファノン論」における「怪物像」	268
V.4.4 「植民主義的暴力」の循環と呉鷹男	273
V.4.5 『叫び声』における「第三世界」のヴィジョン	282
V.4.6 「強権に確執をかもす志」を抱いている青年の「叫び声」——フランスと日本	291
V.5. おわりに	300
VI. 結論.....	308
VI.1. 「『第三世界』としての日本」という「意識的誤用」=「意識的誤配置」——大江の日本をめぐるポストコロニアルのヴィジョン	308
VI.2. 「初期の仕事」に潜在するパレスチナ問題	318

VI.3. 日本の「植民地の問題」としての「朝鮮」、とフランスの「植民地の問題」としての「アルジェリア」	321
VI.4. 「自己処罰への欲求」のモチーフと「第三世界」	333
VI.5. 大江文学の「世界性」と「第三世界」文学	351
VI.6. 大江文学の世界化と渡辺一夫	367
VI.7. 「 ^{アーリー・ワーク} 初期の仕事」から「 ^{レイト・ワーク} 晩年の仕事」へ「第三世界」のイメージ	372
参考文献	394
謝辞	406

凡例

題名

1. 日本語の単行本の題名は、二重鉤括弧『』で表記した。例、『われらの時代』。
2. 外国語の単行本の題名は、斜体文字で表記した。例、*Culture and Imperialism*。
3. 日本語の文芸雑誌に掲載された短編小説や中編小説の題名は、鉤括弧「」で表記した。例、「喝采」。
4. 外国語の短編集などに収録された短編小説や中編小説の題名はギユメ[〃]で表記した。例、“Les Chevaux”。
5. (単行本になっていない) 日本語の短編、中編小説などの出典を脚注で記す場合は、作品の題名を鉤括弧「」で、作品が掲載されている雑誌の題名を二重鉤括弧『』で表記し、順番に巻、号、刊行日、頁番号を記した。例、大江健三郎、「喝采」、「文芸春秋編集」『文学界』、12(9)、1958年9月号、12頁。
6. 短編集などに収録されている短編のなどの出典を脚注で記す場合は、作品の題名を鉤括弧「」で、作品が収録されている短編集などの題名を二重鉤括弧『』で表記し、順番に巻、号、刊行日、頁番号を記した。例、大江健三郎、「見るまえに跳べ」、『見るまえに跳べ』(1964年初版)、新潮文庫、東京、2001年、132頁。
7. (単行本になっていない) 日本語の雑誌論文、エッセイ、評論などの題名は、鉤括弧「」で表記した。例、菊地昌典、「想像力における政治—『ヒロシマ・ノート』『沖縄ノート』を中心に——大江健三郎—方法化した想像力」、国文学 解釈と教材の研究 24(2)、1979年2月、102頁。
8. (単行本になっていない) 外国語の雑誌論文、エッセイの題名は、ギユメ[〃]で表記した。脚注で出典を記す場合は、論文、エッセイの題名はギユメ[〃]で表記し、次に作品が掲載されている雑誌名は斜体文字で表記した。順番に、出版社、出版の場所、刊行日、頁番号を記した。例、Dirlik, Arif, “Global South: Predicament and Promise,” *The Global South*, Volume 1, Numbers 1 & 2, 2007年
9. 短編集の題名を斜体文字で表記し、順番に、出版社、出版の場所、刊行日、頁番号を記した。例、Gascar, Pierre, “Les Chevaux,” *Les Bêtes*, (1953年初版), Editions Gallimard, Paris, 1978年所収、12頁。

10. (単行本になっていない) 外国語の雑誌論文、エッセイ、評論は題名をギョメ“”で表記し、次に作品が掲載されている短編集の題名を斜体文字で表記し、順番に、出版社、出版の場所、刊行日、頁番号を記した。例、Gascar, Pierre, “Les Chevaux,” *Les Bêtes*, (1953年初版), Editions Gallimard, Paris, 1978年所収、12頁。
11. 短編集に収録された作品の題名は、鉤括弧「」で、表記した。出典を記述する場合は、脚注に作品名を鉤括弧「」で表記し、次に作品が掲載されている短編集の題名を二重鉤括弧『』で表記し、出版社、出版の場所、刊行日、頁番号を記した。例、大江健三郎、「見るまえに跳べ」、『見るまえに跳べ』(1964年初版)、新潮文庫、東京、2001年、132頁。
12. エッセイ、評論、研究書などの単行本の場合も、単行本の題名を二重鉤括弧『』で記した。例、『あいまいな日本の私』。

エビグラフ 題辞

1. 「序章」と「結論」以外のそれぞれの章の最初の頁において題辞を挿入した。この題辞は、その章で分析する作品からの引用、作品の分析ないしは対比の上で扱うテキストからの引用という構成になっている。筆者の題辞を採用するという戦略は大江健三郎の題辞の使用を意識してのことである。例えば、大江は、『ヒロシマ・ノート』や『沖縄ノート』をはじめとする一連の作品において題辞を設置している。大江は、「初期の仕事」の『万延元年のフットボール』や「晩年の仕事」の『臆たしアナベル・レイ 総毛立ちつ身まかりつ』において、題名と題辞を融合するような戦略を取った。大江は、とりわけ、『水死』などのような「晩年の仕事」において「世界文学」のテキスト引用による題辞を採用している。題辞は、本ないしは章の題名を支え、テキストのテーマを外部からの例によって具体的に示し、本文への「大手門」の役割を果たす。
2. 筆者が題辞を取り込むことにあたって意識しているもうひとつの参照先は、(本論文で大江文学の分析のうで援用した)『文化と帝国主義』や『オリエンタリズム』のようなサイドのポストコロニアル理論である。サイドは、テキストの理論的な枠組みを規定する一方で、読者の関心を刺激するために題辞を用いた。筆者は、分析の対象にする大江文学のテキストと、分析の手段にするテキストから、章の論旨・論点ともっとも深い繋がりを持つ引用文を呈示することによって本文の理論的な枠組みを規定することを意図している。

ルビ

1. 筆者は、「^{オタンテイシテ}正真正銘性」、「^{オタンテイック}『正真正銘』な」、「^{アンガジュマン}政治的な参加」、「^{デザンガジュマン}政治的離脱」、「^{シンパシー}共感」、「^{アイデンティティ}自己同一性」、「^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢」、「^{アーリー・ワーク}初期の仕事」、「^{モンスター}怪物」などをはじめとする一連のキーワード、キーコンセプトを、ルビをふった形で用いた。
2. 上記の概念のほとんどが背景にしているのは、西洋の文学理論、反植民地理論、ポストコロニアル理論である。そのキーワードの日本語訳と、原語のカタカナ表記を併用することを可能にする「ルビ」という日本語独特の機能を使うことによって照応する概念を包括的に、多義的に表現するという本論文での技法の参照先は、大江文学そのものである。
3. 「^{オタンテイシテ}正真正銘性」、「^{オタンテイック}『正真正銘』な」、「^{アンガジュマン}政治的な参加」、「^{デザンガジュマン}政治的離脱」、「^{モンスター}怪物」というキーワードの原語は、フランス語であるので、ルビをふる際には単語のフランス語発音を基準にした。「^{シンパシー}共感」、「^{アイデンティティ}自己同一性」、「^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢」、「^{アーリー・ワーク}初期の仕事」のような英語の理論から援用したキーワードの場合は、英語発音を採用した。

序章 「第三世界」論と大江健三郎の初期小説

大江健三郎の作品が、日本文学＝国文学 (*national literature*) といった中心指向的、自己準拠的なカテゴリーの境界を越え、世界文学(*Weltliteratur*)の地図に占めてきた位置は、1994年に彼にノーベル文学賞が授与されたことで再確認された。大江文学の「世界性」は、1968年に同じ賞を受賞した川端康成（そして当時世界的に注目された三島由紀夫）の作品のように「世界から孤立している」¹一種の文化ナショナリズムに依拠した文学の「世界性」とは異なるものである。この差異は二人の作家の受賞講演にも反映している。「美しい日本の私」と題された講演において川端は——本論文の文脈からすると「周辺世界」ではヴェトナム解放戦争を中心にする「第三世界」指向の運動や、「第三世界」論を掲げた学生運動が世界的な規模で爆発的に高揚した1968年という——「現代」に「生きる自分の心の風景を語るために」「中世の禅僧の歌」における「閉じた言葉」を引用し、日本文化を東洋風のニヒリズムの審美的な観点から肯定し称揚した。その反面、大江は、川端の題名をパロディ的に拵った「あいまいな日本の私」と題された講演において、26年前に同じ場所に立った同国人に対してより、71年前に同賞を受けたアイルランドの詩人・劇作家ウィリアム・バトラー・イェイツへの共感を持つことを表した。²³

大江が文壇デビューした1957年は、世界史における「始まりの現象」としての「第三世界」というカテゴリーが現在進行形で形成されている最中であった。「第三世界」非同盟運動とは、19世紀以来、旧植民地主義体制下に組み込まれてきた「周辺世界」の「被圧迫民族」が、第二次世界大戦の終結と東西冷戦の開始を機に、西洋による帝国主義的（新・旧）植民地支配から独立し、資本主義に（そして既成の社会主義にも）取って代わる新たな「世界」を建設する試みだった。大江がこの時期に書いた『われらの時代』を中心とする「見るまえに跳べ」、「喝采」、「セヴンティーン」、『叫び声』といった一連の作品は、『『第三世界』と日本』という視点を共通項にして内的に有機的なつながりを持っており、またここには広義の反植民地主義的な色合いが濃厚に立ちこめている。これらの作品が「第三世界」が建設されつつある世界の地図に日本を再配置す

¹ 大江健三郎、「世界文学は日本文学たりうるか?」、『あいまいな日本の私』、岩波書店、東京、1995年、208頁。

² 大江健三郎、「あいまいな日本の私」、『あいまいな日本の私』、5頁。

³ 同上書、6頁。

るいとなみであったことが本論文の主な論点である。「アルジェリア戦争の時代」(1954～1962年)と本論文で命名する「時代」に、これらの一連の作品を発表し続けたことは、大江文学の独自性と「世界化」の道程にどのように貢献したのか? 先行する大江研究で見逃されてきた世界文学の一部としての大江文学の「始まり」にかかわるこの問いへの答えを本論文では探求していく。

また、大江が前述のノーベル文学賞受賞講演で表しているイエイツへの共感^{シンパシー}は、大江が当時執筆中であった『燃え上がる緑の木』三部作⁴(1993年9月～1995年3月)において強く意識している、イエイツの詩に対する感銘のみに由来するだけのものではないことにも触れておきたい。大江の共感^{シンパシー}は、対英独立運動やアイルランド文芸復興運動に積極的に関わり、大英帝国による中心指向的権力^{アンガージュマン}に政治・文化などあらゆるレベルで抵抗したイエイツの「政治的な参加」にも向けられているのだ。「国際社会」によってその主権が永らく認められなかったアイルランドの「文明」を世界に評価されることを可能にしたのみならず、「破壊への狂信から人間の正気を守る」文学を作ったイエイツの「役割になりたい」と大江は言う。しかし、イエイツがアイルランドの文化の発展に貢献することを目ざした反面、大江は日本文化の発展というよりは、むしろ「近い過去において、その破壊への狂信が、国内と周辺諸国の人間の正気を踏みにじった歴史を持つ国の人間として」⁵、自国が破壊をもたらしたアジア近隣諸国の文化の発展に貢献することを志向している。

大江は、ここで20世紀前半において——当時は存在しなかったが、20世紀後半の冷戦体制下の地政学的カテゴリーに譬えて言う——「第三世界」の国のような位置にあったアイルランド、そしてその作家の役割と、同じ20世紀前半において大英帝国のような帝国主義国家であった日本とその作家の役割を対比

⁴ この作品の物語内容のレベルで、大江文学における「世界文学」の役割の重要さを大江は読者に露呈する。とりわけ、この作品の第二部『揺れ動く(ヴァシレーション)——燃え上がる緑の木・第二部』では、「四国の森の中の谷間の村」で、広義の「世界文学」に基づいて、不思議な宗教を立ち上げようとしている青年たちの物語が男性から女性に性転換した両性具有の語り手サッチャンの目をとおして語られている。

また、ギー兄さんというこの「宗教」の指導者＝「救い主」は、“Vaccillation”と題されたイエイツの詩に描写される、片側は緑に覆われていて露が滴っており、もう片側は燃え上がっている「燃え上がる木」の絵を彼らの教会の入り口に掲げる。信者たちは、「私たちの福音書」という「聖典」を書くことに着手するが、この聖典は、信者たちそれぞれの生涯のいくつかの場所に刻まれている、イエイツをはじめとする、ドストエフスキー、マルカム・ラウリなどの「世界文学」の言葉のコラージュから作り上げられていく。

⁵ 大江健三郎、「あいまいな日本の私」、7頁。

し、二国間における対照に焦点を与えているのだ。そして、「第三世界」と日本との対比が、大江文学の初期作品から近年の作品にかけて持続していたモチーフのひとつであることも本論文の主な論点である。

第二次世界大戦後の脱植民地化=*decolonization* の過程は、脱植民地化した国の経済体制、政治政策を外部から指揮することによる新たな支配形態である、アメリカ合衆国が主導する新植民地主義=*neocolonialism* と、「第三世界」非同盟運動 (*non-aligned movement*) といった反帝国主義的・反(新・旧)植民地主義的な「共同体」の建設企図といった二つの対立し合い、拮抗し合うカテゴリーを生み出した。⁶フランスのジャン・ポール・サルトルやマルティニークのフランツ・ファノンをはじめとする「第三世界」論の理論家の「政治的な参加」した言論活動をとおして世界の世論に「明視」されることになったアルジェリア解放戦争=*La guerre d'indépendance d'Algérie*=*Davra Jazā'irīya* (「アルジェリア革命」)は、この「第三世界」というカテゴリーの形成にあたってとりわけ大きな役割を果たした。言い換えるとアルジェリア解放戦争は「第三世界」の形成期における一定のシンボルとなった。この時代を本論文において「アルジェリア戦争の時代」と命名したのはそのためである。この「時代」に創作活動を始めた大江が「第三世界」の観点から日本を、そして日本の観点から「第三世界」をいかに見据えたかをこの論文で分析する。そこでまずこのカテゴリーの形成過程やその異なる定義を紹介し、簡素な時代区分^{ベリオディゼーション}をする必要がある。

「第三世界」という概念が初めて表出されたのは、中国革命(1949年)直後、米ソの経済政治的・地政学的対立=「冷戦」が東アジアを舞台に「熱戦」の形式をとって勃発した朝鮮戦争(1950~1953年)の最中であった。1952年にフランスの経済学者・人口統計学者のアルフレッド・ソーヴィは、植民地支配下の被圧迫民族およびこの圧迫から独立した民族を指して、『第三身分』=*[tiers état]*のごとく不可視化され、搾取され、屈辱を与えられたこの *tiers monde* そのものも、*tiers état* のように大したものになるはずだ⁷と予言した。ソーヴィは、「第三世界」という萌芽しつつある「始まりの現象」を、フランス革命期に「全国三部会」^{オタンテイク}⁸から離脱して「正真正銘」な議会を成立させた「第三身分」と重ね合

⁶ この対立構造には、東西冷戦における米ソ対立が影を落としていたが、「第三世界」とソ連が主導する既成の社会主義の関係は、安定したものではなかった。中ソ対立が浮き彫りになった1960年代以降は、「第三世界」とソ連の関係も複雑になっていった。

⁷ Sauvy, Alfred, “Car enfin ce tiers monde ignoré, exploité, méprisé comme le tiers état, veut lui aussi, être quelque chose”, “Trois mondes, une planète,” *L'Observateur*, 14 août 1952, n°118, 14 頁. (引用文の翻訳は筆者による)

⁸ 全国三部会 (*États généraux*) とは、中世から近世にかけてフランスに存在した身分制議会の

わせて、「第三世界」も「第三身分」のように自立し、新たな^{オタントイック}「正真正銘」の「世界」を建設する可能性を孕んでいることを示唆したのだ。

この理論レベルのヴィジョンが血となり肉となりはじめたのは、アルジェリア解放戦争に代表される一連の反植民地主義闘争と同時に、1960年代初頭から浮上してきた社会主義内部の中ソ対立を契機としてのことであった。中華人民共和国の既成の社会主義体制からの「^{デザンガジユマン}離脱」と「自立」の試みの過程から、「三つの世界論」= *théorie des trois mondes* = *three worlds theory* が誕生したのであった。世界を三つに区分する方法は判断が分かれるところである。例えば、毛沢東による「三つの世界論」は、世界を、「アジア・アフリカ・ラテンアメリカなど、国家の独立・民族の解放・人民の革命をめざして前進する第三世界」と、「これを抑圧・支配・干渉・懐柔しながら世界制覇をねらうアメリカ（帝国主義）・ソ連（社会主義帝国主義）の二つの超大国からなる「第一世界」、この両者のいわば中間にあつて動揺するヨーロッパ（EC）、カナダ、日本、オーストラリアなど資本主義の発達した国々の^{リマッピンダ}第二世界」⁹として「再地図作成」し、世界を三つの地政学的なカテゴリーに区分するものである。¹⁰つまり毛沢東は、中華人民共和国とアジア・アフリカ・中・南^{ラテン}アメリカ諸国を「第三世界」に配置している。アジア・アフリカ・中・南^{ラテン}アメリカ諸国からなる「第三世界」が、米ソ＝「第一世界」に「勝利する」過程で、「第二世界」＝ヨーロッパ（EC）、カナダ、日本、オーストラリアなどが「第三世界」と連帯せざるを得なくなり、このような連帯を契機に「そこに新しい展望が」ひらく¹¹としている。

ことを指している。第一身分である聖職者、第二身分である貴族、そして第三身分である平民として三つの身分からなる三部会制度では、すべての議員は平等に各人が一票の議決権を持っていた。フランス革命直前の国内の混乱状態の中で、全国三部会は1789年5月5日、ベルサイユ宮殿に集まり、シェイエスら第三身分議員は合同討議を主張し、6月17日国民議회를宣したのである。これは、全国三部会から国民議会への移行といった画期的な出来事であったと言えよう。こうして、第三身分は、フランス革命やフランスの共和制の確立過程において重要な役割を果たした。ソーヴィエの理論は、「第三世界」の「覚醒」と「反乱」をフランス革命における代議制的なレベルでの階級闘争にたとえることで、なによりも、第二次世界大戦以後の世界において、「第三世界」が主導権を取ることにによる「国際関係」の平等化・民主化を呼びかけるものであった。

⁹ 坂本徳松、「序章 現代世界史の推進力——第三世界」、『第三世界論』、東方書店、東京、1976年、23頁。

¹⁰ 毛沢東が、この発言を行ったのは、南部アフリカのザンビア（1964年独立）の初代大統領のケネス・カウンダとの1974年2月22日の首脳会談においてである。

¹¹ 坂本徳松、「序章 現代世界史の推進力——第三世界」、『第三世界論』、24頁。

一方で、1947年に大英帝国の支配から独立したインドの初代首相ジャワハルラール・ネルーは、バンドン・アジア・アフリカ会議（1955年）演説¹²において提起した資本主義の新植民地主義体制＝「第一世界」と「既成の」社会主義＝「第二世界」両者に対して排他的な「非同盟」のモデルのヴィジョンを呈示している。

大江は、上述の『われらの時代』周辺の作品において、一定の「正真正銘」な自己同一性を探求する日本の青年たちを描いている。毛沢東主義的な「三つの世界論」に従って言うと、主人公たちは「第二世界」と「第三世界」のモデルの間を行き来するものとして設定されており、ネルー＝バンドン・アジア・アフリカ会議の「三つの世界論」からすると「第一世界」と「第三世界」のモデルの間を行き来するものとして設定されていると言える。

*

本論文では、あたかも一つの龐大な作品を構成しているかのように密接に繋がっている上述の大江作品群を分析するうえで、とりわけ、サルトルの「反植民地主義理論」・「第三世界論」をはじめとする「仕事」と、パレスチナ系アメリカ人の文学研究者エドワード・サイードによる『文化と帝国主義』などのポストコロニアル理論や、『始まりの現象』のような文学理論を手掛かりにする。

本論文には三つの目的がある。第一に、『われらの時代』を中心とする内的に有機的な繋がりを持つ一連の初期作品において、1950～60年代に形成されつつあった非同盟の「第三世界」という新たな政治的、経済的、文化的なカテゴリーと日本を対比し、この対比を基に自国を世界地図に再配置するという「戦略」を作者大江健三郎が取っていることを、テキスト分析をとおして明確に示すこと。第二に、本論文で焦点を絞った、上述の一連の小説が、1994年に大江にノーベル文学賞が授与されたことで再確認された大江文学の世界化の過程にどのように貢献したかということを描き出すこと。第三に、大江文学の世界の「中心」の文学（西洋文学としての「世界文学」）と、世界の「周辺」の文学（「第三世界」文学）それぞれとの連動を、影響受容研究や対比研究双方を取り込んだ比較文学的な方法をとおして分析し、明らかにしながら「世界文学」の地図において大江文学を位置づけなおすことである。

第一章では、「『第三世界』と日本」というテーマを共通項にした一連の作品の「始まり」となっている「見るまえに跳べ」を取り上げる。「見るまえに跳べ」は、北アフリカや東南アジアの青年による反帝国主義的な「政治的な参加」に

¹² Kahin, George McTurnan, *The Asian-African Conference Bandung, Indonesia, April 1955*, Cornell University Press, Oxford University Press, Ithaca, 1956年、64～72頁。

憧憬を抱いており、自分より 15 才年上の外国人相手の娼婦良重と同棲し、彼女とその「客」である外国誌の特派員ガブリエルに経済的に従属しているフランス文学科の大学生「ぼく」の物語である。「見るまえに跳べ」は、大江の表現の「方法」においても一定の「始まり」となった作品である。「見るまえに跳べ」以降の作品において、大江はそれまで扱った「監禁状態」、「閉ざされた壁のなかにいる状態」というテーマを放棄し、政治的な力関係をヴィヴィッド且つ衝撃的に表現する「意図」を実行させる上で、「性」のイメージを「方法」にしている。このような「性の方法化」は、『われらの時代』で小説全体を貫いているテーマとして活用されている。1957～58 年の「プレリュード的な時期」において書かれたこの短編の題名と主題の参照先は、アメリカ合衆国で活躍したイギリスの詩人 W. H. オーデンの同名の詩 “Leap Before You Look” である。この短編では、フランス文学科に在籍している大学生「ぼく」の挫折に終わる「イニシエーション」の試みのストーリーが、北アフリカと東南アジアにおける「イニシエーション」としての「反・(新) 植民地主義」的な「政治的な参加」の試みといった同時代現象を背景に語られている。安保闘争直前期の日本の学生運動を、被圧迫民族による一定の「始まりの現象」= *beginning* となった「政治的な参加」= 「第三世界」指向の民族解放運動という歴史・地政学的な文脈に位置づけ直すうえで大江が「見る」と「跳ぶ」というモチーフをいかに転用したかを第一章で呈示する。この「始まりの現象」の問題を扱うにあたって、サイドの *Beginnings*=『始まりの現象』を、そして小説における新植民地主義の表象を分析するうえで、サルトルや、(ガーナの初代大統領でもあった)「第三世界」理論家クワメ・エンクルマの「新植民地主義論」を援用する。

第二章では「喝采」を取り上げる。「喝采」は、外交官リュシアンと同棲する同性愛の「情夫」兼フランス文学科の大学生夏男の(帝国主義的植民地支配下における「周辺世界」と照応するような)「非・正真正銘」で屈辱的な生活と、そこから抜け出る試みを扱う短編である。「『第三世界』と日本」というテーマと密接不可分の関係にある「正真正銘性」と「政治的な参加」という概念の物語構造における連動を分析するうえで、この問題をめぐるサルトルの理論とともに、アルジェリア解放戦争に関する一連の雑誌論文を参考にする。また、夏男とリュシアンの中に結ばれている「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」が交叉する師弟関係を分析するために英米文学研究者イヴ・K・セジウィックの「男の絆=ホモソーシャル論」やスティーブン・マリーの「比較同性愛論」を手掛かりにする。

第三、および第四章においては『われらの時代』に焦点を絞る。この初めての書きおろし長編小説は、荒廃した日本の 1950 年代後半を舞台に、外国人相手の娼婦である頼子と屈辱的な関係を結んでいる南靖男の、フランスへの逃避計

画と、その弟でジャズ・トリオの演奏家の南滋の物語を軸としている。南靖男は *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の極東代表者として日本に派遣されたアラブ人と遭遇することを契機に、フランス逃避計画がただの自己欺瞞でしかないことに覚醒し、アルジェリア解放戦争への「政治的な参加」を志すようになっていく。日本青年の「正真正銘」な自己同一性の探求としての安保闘争が始まろうとしていた「時代」に書かれたこの小説には、英米仏文学など「世界文学」のテキストへの言及が多い。第三章においては、大江が 50 年代の地政学的「世界地図」における日本の政治・文化的な位置を「再配置」するうえで、アメリカのヘンリー・ミラーとイギリスの D.H.ローレンスを動員し、それらにおける西洋中心主義的な「姿勢と言及の構造」をいかに「暴力」的に反転し、再構築したかを分析する。第四章においては、同様にフランス系アメリカ人のジャック・ケルアックのテキストの大江の作品との関わりを分析し、こうした「小説の方法」に依拠する『われらの時代』が、大江文学の「世界文学化」の道程にいかにより貢献したのかを呈示していく。

第五章では、『われらの時代』、「セヴンティーン」や『叫び声』における「怪物」のイメージを分析の対象にする。「セヴンティーン」と『叫び声』は双方とも、安保闘争敗北直後の日本における「政治的離脱」や保守化といった社会政治的な現状を、アルジェリア、中華人民共和国など「第三世界」における「政治的な参加」を引き合いに出しながら描かれている。「セヴンティーン」は、17 歳の極右テロリスト山口二矢による（安保闘争における重要な人物の一人であった）日本社会党委員長浅沼稻次郎の暗殺事件に着想を得て書かれた二部構成の中編小説である。また、『叫び声』は、それぞれ社会から排除された、3 人のドロップ・アウトの青年が、ブルガリア系アメリカ人のダリウス・セルベゾフが造船させているヨットでアフリカ旅行に出る計画とその挫折の過程を語る長編である。大江がこの三作において採用した「怪物」のイメージの参照先は、セネガル共和国初代大統領をも努めた詩人センゴールが編纂したアフリカとマルティニークの詩集にサルトルが付けた「黒いオルフェ」と題された「序」、およびフランツ・ファノンの『地に呪われた者』にサルトルが付けた「序」という「第三世界」文学論のテキストである。これらのテキストにおける「怪物」= *monstre* のイメージは、帝国主義的権力の暴力的行使を被ることによって被植民者¹³・原住民が暴力的な存在に変身するという現象を表出するうえでサ

¹³ 本論文における「被植民者」という用語は、サルトル（やファノン）の反植民地主義理論の主要なキーワードであり、フランス語の *colonisé* や英語の *colonized* の翻訳語として用いている。この用語で指し示しているのはとりわけ、ナポレオン・ボナパルトが率いたフランス軍によるエジプト遠征（1798～1801 年）とそれに次ぐ「アフリカの奪い合い」（*scramble for Africa= partage*

ルトルが構想したものである。大江は、『われらの時代』、「セヴンティーン」やとりわけ『叫び声』においてこのイメージを媒介に安保闘争前後の社会状況を、アルジェリア解放戦争をはじめとする「第三世界」の解放・非同盟運動と絡ませながら表現した。この「怪物」のイメージが『第三世界』と日本のテーマといかに連動するかを第五章で分析する。

結論においては初期作品における「第三世界」のイメージが、『個人的な体験』や『万延元年のフットボール』そして、この二作と深い繋がりを持つエッセイ『ヒロシマ・ノート』と『沖縄ノート』を経て「後期の仕事」までにいかなる形で持続したかということに言及する。

de l'Afrique) を発端とする西洋の古典帝国主義によって植民地化された地域の民族なのである。以下、この概念は、サルトル・ファノンを意識して「被植民者」というルビを当てた形で採用することにする。また、植民地支配を遂行する側という意味で、フランス語の *colonisateur* や英語の *colonizer* の翻訳語として「植民者」を用いることにする。

第一章 「始まりの現象」としての最初期小説と「第三世界」 という「始まり」——「見るまえに跳べ」を中心に

アジアの西の方とアフリカの片隅^{かたすみ}、
と机のはり紙には書かれていた。そこで泥まみれの汚らしい戦争がおこなわれている、実にながいあいだ、フランス人と土民との血が流され、まったくこんぐらかってしまっている。それはぼくにもよくわかっている。¹⁴

In language, [...] writing or thinking about beginning is tied to writing or thinking a beginning.¹⁵

Je voudrais vous mettre en garde contre ce qu'on peut appeler la «mystification néo-colonialiste».¹⁶

¹⁴ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、『見るまえに跳べ』（1964年初版）、新潮文庫、東京、2001年、132頁。（以下、「見るまえに跳べ」の引用はすべて『見るまえに跳べ』、新潮文庫、東京、2001年による。）

¹⁵ Said, Edward, W., “Preface,” *Beginnings: Intention and Method*(1975), Granta Books, London, 1997, xxi 頁.

「言語では、[...]〈始める〉ことについて書いたり考えたりすることは、<ひとつ>の始まりを書いたり考えたりすることと結びつきます。」（サイド、エドワード、W.、「序文」、『始まりの現象——意図と方法』、山形和美、小林昌夫訳、法政大学出版局、東京、1992年）

¹⁶ Sartre, Jean-Paul, “Le colonialisme est un système,” *Les Temps modernes*, 7~8月号1957年に掲載）、*Colonialisme et néo-colonialisme, Situations V*, Gallimard, Paris, 1964年、125頁.

「《新植民地主義の欺瞞》ともいうべきものを警戒してほしいと思う。」（「植民地主義は一つの体制である」（サルトル、ジャン・ポール・著『植民地の問題』、多田道太郎ほか訳、人文書院、京都2000年、31頁。）

I.1. はじめに

すべての独自に充実した言語活動を行った小説家には、「プレリュード的な時期」が存在する。大江健三郎の「プレリュード的な時期」は、彼が創作活動を始め、最初期の作品を続々と書き上げた1957～58年の二年間であり、本論文ではこの時期の作品を「最初期小説」として分類^{カテゴライズ}する。作家によってはかなりの年月を要する場合があるこの「始まり」の時期は、大江健三郎の場合、「例のないほど充実」したものであった。¹⁷

世界史的に俯瞰してみると、大江が文壇デビューをした1950年代後半の世界は、「イニシエーション」としての様々な「始まりの現象」の舞台であった。この「始まりの現象」のなかでもっとも重要な事象は「第三世界」というカテゴリーの誕生である。アメリカ合衆国が主導した資本主義による「西側」の軍事経済的な支配に逆らい、またソ連が主導した社会主義ブロックの衛星国になることを拒否した形で組織されるようになったこのカテゴリーの形成過程において、中国革命（1949年）や（中国革命の東アジアへの拡大の試みでもあった）朝鮮戦争が大事な役割を果たした。中国革命は半植民地的且つ半封建的な「停滞状態」に置かれていた「周辺」の国の解放と自立の達成を意味していた。¹⁸ゆえに、世界における「中心」と「周辺」（「北」と「南」）の力関係に転倒をもたらしたパラダイムとなったと言えよう。「第三世界」民族解放・非同盟運動の世界化に拍車をかけたもう一つの事象は、バンドン＝アジア・アフリカ会議（1955年）である。この会議は、1950年代後半から1960年代初頭にかけての世界のアクチュアリティを決定した現象であり、中国革命の北アフリカへの拡大の試みとしてのアルジェリア解放戦争への支持がここで宣言されたのである。

本論文において「アルジェリア戦争の時代」と呼ぶことにした1950年代後半～1960年代初頭の時期は、「第三世界」という新たな地理的・経済的・政治的・

¹⁷ 渡辺広士は、『見るまえに跳べ』短編集のために書いた「解説」において「プレリュード的な時期」と定義するこの過程を次のように記述している。

『奇妙な仕事』で東大新聞の五月祭賞を受賞してから一年足らずのうちに、作品集『死者の奢り』（昭和二十三年三月刊）にまとめられる作品群を書きあげて、目覚ましく個性的な小説家であることを一般に認めさせてしまった。そして『芽むしり 仔撃ち』（昭和三十三年六月）という画期的な長編小説でその最初の狩猟の獲物にまとまりをつけてしまうと、思いきった方向転換を試みて『われらの時代』（昭和三十四年七月刊）を書いた。（渡辺広士、『見るまえに跳べ』への「解説」、新潮文庫、東京、2001年、361頁。）

¹⁸ Woods, Alan, “The Chinese Revolution of 1949,” 01 October 2009, <http://www.marxist.com/chinese-revolution-1949-one.htm>. （この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による）

文化的なカテゴリーの形成という「始まりの現象」と、(徐々に「世界文学」の一部となっていくことになった) 大江文学という「始まりの現象」とが重複した「時代」であった。

大江が「第三世界」という「始まりの現象」を十分に認識していたことは、「見るまえに跳べ」(『文学界』、1958年6月号)や「喝采」(『文学界』、1958年9月号)、『われらの時代』(1959年7月)、「セヴンティーン」(1961年1月)、その続編「政治少年死す」(1961年2月)、『叫び声』(1962年11月)などの一連の作品において、「第三世界」そして「北アフリカ」のモチーフが物語の背景に布置されていることから明らかである。

本章で取り上げる「見るまえに跳べ」は、北アフリカや東南アジアの青年による反帝国主義的な「政治的な参加」に憧れている日本の大学生兼「ヒモ」である「ぼく」の物語である。「ぼく」は、自分より15才年上の外国人相手の娼婦良重と同棲している。「ぼく」は、良重と、彼女の「客」である大男の外国誌の特派員、(フランス系アメリカ人だとおぼしき)ガブリエルに経済的に従属している「ヒモ」と「ジゴロ」の間の存在である。物語言説のレベルで考えると、「ぼく」の良重とガブリエルに対する経済政治的従属は、「ぼく」と良重異性愛的な関係と、「ぼく」とガブリエルが互いに抱いている隠された同性愛的な欲望のモチーフによって支えられている。三人の間の、異性愛的な三角関係は、二人の男が互いに抱いている暗示的な同性愛的な欲望、そして二人の間の「男同士の絆」に脅かされており、このことが、時には、良重に癩癩を喚起する。¹⁹

自立できず、こうした寄生虫のような依存関係に基づく生活を送るという屈辱的な性／政治の三角形に巻き込まれたことは、彼の自己同一性の「正真正銘性」を完全に無効にしている。後述するようにその発端は、彼が「政治」から「離脱」したことである。また、「ぼく」自らの「少年」＝「子供」ならではの未熟さ、幼稚さ、そして十分に「男らしくない」ことに対する不満も、この「正真正銘性」の喪失の苦い感覚をさらに悪化させる要因となる。「ぼく」は、「少年」＝「子供」の世界から、大人の「男らしい」世界に通過する欲望を抱いており、「ぼく」の「政治的な参加」への憧憬は、こうした屈辱的な状態から、「第三世界」の青

¹⁹ 例えば、「ぼく」は「良重の情人のなかでガブリエルをかなり好きだった」(大江健三郎、「見るまえに跳べ」、139頁)と言う。また、横浜の地下のナイト・クラブでストリープ・ティーズを見ながら、ガブリエルと「性」を主題化した西洋の作家をめぐる会話の交わす場面で、「ぼく」がサドに触れると、ガブリエルが興奮し、大仰に感激して「ぼく」の手を握りしめた時、この光景に腹をたてて良重は、彼らに対して次のような小言を言う。「男色みたいなことをしないでよ」(同上書、149頁)。

年の「世界」への「イニシエーション」＝成長の渴望を意味している。

「ぼく」は自分自身を幼稚且つ「男らしくない」青年にすり替える「現状」から脱出することを望んでいるにもかかわらず、良重の「客」である大男の外国誌の特派員、ガブリエルによってヴェトナムに渡り現地の解放戦争に「参加」する機会が、提供されると、気が挫けてしまう。結局「ぼく」は、「政治的離脱」の穴ぼこに陥ってしまい、「イニシエーション」＝「成長」の「計画」も失敗に終わる。

「第三世界」問題は、とりわけ『われらの時代』においてアルジェリアのアラブ人という主要な作中人物の一人において結晶化され、テーマのレベルにまで高められ、『叫び声』においてさらに深められている。ここで注目すべきは大江が「第三世界」というカテゴリーをロマン主義的に美化することを目論んでいるわけではないことにある。大江はむしろこの「第三世界」という「始まりの現象」が誕生した1950年代後半の世界情勢の文脈から日本を見据え、日本のこの「第三世界」というカテゴリーとのかかわりを把握し表現することを「意図」としたと言える。

（中略）〈始まり〉の概念は先行および／または優先の概念と結びつく。最後に、そしてもっとも重要なことは、いずれの場合も、〈始まり〉は〈後の〉時間、場所、行動を指し、明らかにし、限定するために指定されているということである。つまり、始まりの指定は通常、必然的な〈意図〉の指定をも含むということである。実際のところ、いつでもこう言えるというものではない。しかし、たとえば、小説の始まりを指摘するとき、私たちは原理における〈その〉始まりから〈この〉小説が続いていると言っているのである。あるいは、始まりとは持続と意味を持ったひとつの達成ないしは過程の（時間、空間、行動における）最初の地点であると理解している。すなわち、〈始まりとは意味の意図的生成の第一歩なのである〉。²⁰

サイードは「始まり」について上記のように語っている。大江の『われらの時代』周辺の一連の作品における「意図」が、物語内容のレベルにおいては、「第三世界」といった同時代の「始まりの現象」を日本と関わらせ、それに表象を与えることであったことからすると、「見るまえに跳べ」という短編は、『第三世界』と日本」という「意味の意図的生成の第一歩」となり、この短編と内部的な繋がりを持つ一連の作品に展開されることになったのだ。

²⁰ サイード、エドワード、W.、「始まりとなる発想」、『始まりの現象』、5頁。

*

本章では、この『第三世界』と日本』をテーマにする「見るまえに跳べ」の分析をとおして、「第三世界」という新たな地理的、経済的、政治的、文化的なカテゴリーの「始まりの現象」と、「第三世界」の問題がモチーフの形で物語空間に導入された「始まりの現象」としての大江の最初期小説の相互作用について論じる。この作業のうえでサイドの『始まりの現象』がきわめて有効で理論的な手がかりを提供すると考える。以下に援用する「イニシエーション」としての創作活動をめぐるサイドの「始まりの現象論」は、とりわけ大江文学におけるある一定の「始まりの現象」である「見るまえに跳べ」という小説の分析にあたって新規の観点を提供している。「第三世界」問題という共通項において、あたかも、ひとつの「連作小説」を構成しているかのように有機的に繋がっている大江の一連の初期作品を分析するうえで、『始まりの現象』のみならず、サイドの他の書『文化と帝国主義』などをも必要に応じて援用する。

「世界文学」の「創作」分野で活躍している大江健三郎が、同じカテゴリーの「文学研究」といった分野で活躍しているサイドと深く関わったことは周知のとおりである。「サイド」は大江にとっての親友²¹であり、『水死』(2009年)のような「後期の仕事」の形成に大きな影響を与え、1990年代以降の大江のエッセイや講演においてしばしば言及される知識人である。大江は自身の創作や言論活動50年間をめぐる自伝的対談『大江健三郎 作家自身を語る』において、その始まりから現在までの全作品を、サイドの主要な理論、キーコンセプトを通じて、^{レトロアクティヴ}遡及的に位置づけ直している。本論文でも、大江自身にならって、大江健三郎の『第三世界』と日本』の問題をテーマにする『われらの時代』周辺の初期作品を読み直すうえで、必要に応じてサイドの理論を援用することにする。

大江はエッセイ集『読む人間』において、『始まりの現象』がいかにサイドとの交流の「始まり」と深く関わったかを次のように解説している。

²¹ 大江は、同じ世代の知識人としてのサイドについて次のように述べている。「パレスチナ人だけれども、エジプトで育ち、アメリカで大学教育を受けて、ニューヨークで終生、大学教授をしたエドワード・W・サイド、かれも一九三五年生まれで、二〇〇三年に亡くなりましたが、パレスチナ人として社会的に発言し、行動して、まさに波風が立つ人生を送りました。非常にいい家の息子で、選ばれた教育を受けた人ですが、かれもまさに同年代、同じ世代の感覚を持っていた友人でした。」(大江健三郎、尾崎真理子、「子供の時代に発見した言葉の世界」、『大江健三郎 作家自身を語る』、新潮社、東京、2007年、23頁)

私がサイドさんと最初に言葉をかわしたのは、一九九〇年のことです。カリフォルニア大学サンディエゴで行なわれたシンポジウムで、発表した後、まだ質問に答える席に座ったままで資料を鞆に入れていた——英語でテキストを読んだことで、『ポストモダンの前、われわれはモダンだったか?』という自分の話が聴衆に理解してもらえたかどうか確信がなく、憂い顔でいたはずの——私に向けて、大きい鳥が翼をひろげて近づくように、早足で講堂中央の通路を降りて来た、なんとも美丈夫というほかない人物が、——いまの文章を自分たちの雑誌にもraitたい、と声をかけてくれたのでした。もちろん『オリエンタリズム』“Orientalism”の著者としてのかれの名と、その内容は早くから知っていました。たまたま私は、コロンビア大学のモーニングサイド・ブックというペーパーバックで新しい版がでたばかりの『始まりの現象——意図と方法』“Beginnings——Intention and Method”を大学の書店で見つけ、読み始めていました——いまでもこの本の「始まり」から『「後期スタイル」について』の「終わり」へというかたちで私の頭のなかのサイド著作が並んでいます——そこで鞆から取り出した当の本に署名をしてもらいました。学生のようなことをする、と討論の同僚にからかわれましたし、サイドさんも照れくさくなって小さな文字で走り書きをしています。私にはただ本についてだけの直観力があって、はじめて出会った本から、この著者の全作品を読むことになるだろうと知ることがあり、たいていその著者に会うことがあれば最初の本にサインをしてもらってきました。²²

この引用文中のキーワードはまぎれもなく「始まり」である。また、大江がサイドを「翼をひろげて近づく」「大きい鳥」に喩えていることも注目に値する。『大江健三郎——その文学世界と背景』の著者、一條孝夫は大江の「鳥」(1958年8月)から『個人的な体験』(1964年8月)にかけての初期作品に登場する「鳥」のモチーフの役割の一つを「イニシエーション」(通過儀礼)の象徴として位置づけている。このことを考慮すると大江がサイドを描写するにあたって採用している「鳥」の暗喩が有意義になってくる。

あえていえば、大江は、自身とサイドが行ってきた、あらゆるレベルの「中心」的な権力に対し、「周辺」的な立場から抵抗し、その「暴力に逆らって書く」という行動において、連帯関係を結ぶことの「始まり」を、彼にとって

²² 大江健三郎、「後期のスタイルという思想——サイドを全体的に読む」、『読む人間: 読書講義』、集英社、東京、2007年、211～212頁。

の一定の「イニシエーション」として考慮しているかのようである。

1.2 「見るまえに跳べ」における「イニシエーション」

1.2.1 「イニシエーション」としての新規の「小説の方法」——「性」

「イニシエーション」のモチーフは、文学、とりわけ、小説において重要な位置を占める。例えば、「イニシエーション」を大江の一連の初期作品における共通のテーマとした一條孝夫は次のように述べている。

民俗学や人類学の成果として広く知られているように、前代には（中略）成人式（成人儀礼）は呪術・宗教的な内容を持ち、通過儀礼のうちでも最も重要な位置を占めるイニシエーションであった。[なお] 成人式は第二の誕生とも呼ばれ、西欧ではしばしば誕生そのものより、大きな意義を付与されてきたという。²³

そして、大江自身に言わせると「イニシエーション」とは、次のような「始まりの現象」なのである。

たとえば人間が育って青年になる際に、大人の社会に入れてもらうための儀式がある。まず、一般社会から隔離されて、いったん死んだものとなる。死んだものとなって苦しい経験をして、たとえば森の中で無言で一週間過ごすとか、そういう種類の試練を経験して、その上で新しい人間として再生する。²⁴

大江の「アーリー・ワーク初期の仕事」を取り上げた松原新一は、『大江健三郎の世界』において、「見るまえに跳べ」が大江文学における新しい「始まり」＝「イニシエーション」であったことを次のように示している。

大江は、人間における性の本質を描いたのではなく、（中略）性を手段として採用しただけである。大江の企てた真の狙いは、閉ざされた壁のなかからどうかして脱出しようと志しながら、ついにそれが不可能に

²³ 一條孝夫、「初期作品の構造」、『大江健三郎——その文学世界と背景』、和泉書院、大阪、1997年、90～91頁。

²⁴ 一條孝夫、「大江健三郎の人と作品」、『大江健三郎——その文学世界と背景』、32頁。

終わる挫折の表現にあった。性はそういう狙いを有効にうかびあがらせるための方法的な要求にもとづいてとりあげられているにすぎない。²⁵

ここで、松原は大江文学における「性」が、一定の「小説の方法」として初めて用いられるようになったことを示している。つまり、政治的な現象を「性」の言説を媒介に暗喩的にあらわすという手法である。さらに松原は、「見るまえに跳べ」の前作である『芽むしり 仔撃ち』（1958年6月）や「飼育」（1958年1月）のような最初期作品において採用された「監禁状態」、「閉ざされた壁のなかにいる状態」というテーマと、後の「性」の方法の間における連関も示唆している。「ぼく」の性的な不能のモチーフは、松原が示唆するとおり「ぼく」の「政治的な不能」と共鳴し、それを象徴的にあらわす仕掛けである。

しかし、松原は、先述したとおり「見るまえに跳べ」以降の、『われらの時代』を中心にする一連の作品において大江が、「性」の言説の「方法化」と平行して、「第三世界」のモチーフを戦略的に物語世界に取り込むようになったことを他の先行する研究者の大半と同様に見落としている。

換言すると、「アルジェリア戦争の時代」における「第三世界」というモチーフと、日本ないしは日本青年のこのような同時代状況における「ありよう」を「性」のイメージをとおして表現するという新たな方法が初めて採用された点で、「見るまえに跳べ」という作品そのものが、大江文学における、一定の「イニシエーション」であったということである。このことは「言語では、」<始める>ことについて書いたり考えたりすることは、<ひとつ>の始まりを書いたり考えたりすることと結びつきます²⁶というサイドの見解に相応する。「第三世界」といった同時代文脈を捉え、その文脈に自国を配置するという「意図」を持ち、それをどのような「方法」を用いて、「書き始める」かということをめぐる考えざるを得なかったはずだ。そして大江はその意図を実行に移す上で「性」のイメージを動員したのであった。

1.2.2 先行研究における「跳べない」というモチーフの重視と「イニシエーション」

「見るまえに跳べ」の創作にあたって大江が、子供たちの「牧歌的な世界」を描くことを放棄し、「大人」の「世界に自覚的に足を踏みいれよう」とした姿勢も、この作品の「イニシエーション」としての位置を示している。松原は前

²⁵ 松原新一、「順応主義の拒否」、『大江健三郎の世界』、講談社、東京、1967年、110頁。

²⁶ サイド、エドワード、「序文」、『始まりの現象』、xv頁。

作『芽むしり 仔撃ち』を引き合いに出して「見るまえに跳べ」の「イニシエーション」を次のように位置づけている。

『見るまえに跳べ』の芸術的なサブリメイションの度合いは、『芽むしり 仔撃ち』のそれに、むろん遠く及ぶところではないのだ。生活空間も、生活経験も、極めて狭く限定されている少年の世界を描くことと、妊娠という生活現実の重さをはらんだ事態に当面している青年を扱うことと。その文学的处理の方法が、後者の側に多くの困難を予想していることは、あえて断るまでもない。『見るまえに跳べ』の未完成は、しかし同時に大江健三郎の新しい出発でもあった。子供たちの世界への憧憬を棄てて、「大人たち」の世界に自覚的に足を踏み入れようとする姿勢の、それは前ぶれであったのだからである。それを、大江が、容易に統一的なイメージとして把握し表現することのできにくい時代の現実と人間の現実との格闘を勇敢にわが身に引き受けようとした、というふうにはいかえてもよいであろう。²⁷

松原新一がこの作品に対して否定的な立場を示している主な理由は、「見るまえに跳べ」の物語空間における「否定性」の色合いの濃厚さに由来する。その前作として同月に出版され、大江の最初の長編小説『芽むしり 仔撃ち』に見られるような「人間の積極的、肯定的な側面の表現」がこの短編の場合欠如しているというのだ。松原新一によれば「問題」なのは、「両者の隔絶が作品のうえにどういう形であらわれているかをさぐることであり」、「『芽むしり 仔撃ち』において小さな英雄をつうじて肯定性の要素を一挙に噴出させることのできた大江健三郎が、ほとんど同じ時点において書き上げた『見るまえに跳べ』では否定性の圧迫をうけて、むなしくうなだれている」²⁸ということである。すなわち、「見ているだけで跳ぶ勇気を欠いている」²⁹「ぼく」が、「政治」にも、「性」にも何事に対しても「賭けない」、「不能」な男であることが醸し出す「否定性」の空気が物語空間を覆うことが松原の批判の的になっているのだ。

言うまでもなく、「見るまえに跳べ」という題名は、イギリス生まれでアメリカ合衆国において活躍した詩人 W. H. オーデンの“Leap Before You Look”の日本語訳である。大江は、深瀬基寛^{もとひろ}によって翻訳された『オーデン詩集』を20歳の時に購入し愛読した経験をめぐって次のように述べる。

²⁷ 松原新一、「無垢のヒーロー」、『大江健三郎の世界』、93～94頁。

²⁸ 同上書、95頁。

²⁹ 同上書、96頁。

私は [1955 年] に出たオーデンについての本に移り、『エリオット』という本をもう少ししてから改めて読む本の箱に入れたのです。オーデンの方法が私にはわかりやすかったし、若いころの、また中年になっても、私の小説にはオーデンの詩を引用したタイトルのものがいくつもあります。『見るまえに跳べ』がそうで [した]。³⁰

そして、“Leap Before You Look”という詩の、「見るまえに跳べ」への影響の問題に着眼した助川得是^{のりよし}に言わせると大江はこの小説で「にがい静寂」というキーワードを媒介にして、「占領下の日本の青年たちの閉塞された状況を、このみじめな青年 [=ぼく] を通じて描」いた。助川の小論の結びは次のようになっている。

蛇足だが、Look before you leap は昔からあるイギリスの諺である。オーデンはそれを逆転させて、荒野を疾走したし、大江は、[昭和] 三十年代前半の日本の青年の沈黙に鞭打ちながら抒情的な荒地に穴をほりはじめ、オーウェルのいわゆる、「鯨の腹の中で」もがきつづけたわけである。³¹

助川は大江がこの小説に引用し、主題的且つ文体的な奥行きの上で利用しているオーデンの詩における「政治的な参加」^{アンガージュマン}のテーマに着目している。助川^{のりよし}の分析を含む、先行する「見るまえに跳べ」論の大半において、小説の題名に重点が置かれ、主人公の「不能」と同義と解釈される「跳べない」といったモチーフが重視されてきた。松原新一が、「ぼく」の「喉の渇き」を「昭和三十年代という非ロマネスクの青春」を端的に象徴する一個の詩的暗喩³²とみなし、渡辺広士が「見るまえに跳べ」以下の作品で日本人青年の「屈伏感と自己欺瞞の意識と、それから脱しようとする心との葛藤の関わり」が問題化されていると指摘するのはそのためである。これらの評論が依拠しているのは、「オキュパイド・ジャパン」という平野謙のアプローチだと思われる。従来の「見るまえに跳べ」論は、この作品の、題名や主旋律である表現を、「政治的な参加」^{アンガージュマン}の観点

³⁰ 大江健三郎、「子供らに話したことを、もう一度」、『「話して考える(シンク・トーク)」と「書いて考える(シンク・ライト)」』、集英社、東京、2007年、132頁。(傍点は著者による)

³¹ 助川徳是、「『見るまえに跳べ』——にがい静寂」、「70年代の政治と性・大江健三郎特集——大江健三郎・主要作品の分析」、『国文学解釈と鑑賞』、36(8)、1971年7月号、93頁。

³² 松原新一、「順応主義の拒否」、『大江健三郎の世界』、102頁。

から見据えている。換言すると、この小説は、「跳び」こむこと＝「始める」ことができない、「政治的離脱」の世代としての 1950 年代後半の日本青年の停滞状態のアレゴリーとして読まれてきたのだ。

本論文の論点の一つは「見るまえに跳べ」における「政治的な参加」のモチーフにおいて、「見る」という要素の方が決定的な重要さを持っているということにある。松原の「見るまえに跳べ」論をはじめとする先行する研究において重点が置かれた「跳ぶ」ことを中心にするアプローチではこのことが見落とされてきた。

1.2.3 「大人らしい」^{アンガジュマン}「政治的な参加」の渴望と「かれら」の「性急さ」——日本学生たちのアルジェリア戦争をめぐる内部「闘争」

物語は、フランス文学科の学生「ぼく」が、大学の中庭に入り、仏文学研究室に向かって歩く場面から始まる。下に引用した一節はこの短編の始まりの部分である。

冷たく湿っている石壁のあいだをぬけると、研究室の建物に囲まれた中庭に夜明けのような薄明かりがみなぎっている。冬のあいだそれはずっとかわらない。そして春が来ると、中庭はたちまち祭りのように花々と光にあふれ、高い木立の芽がひろがり硬い葉のむらがりになって空をますます狭く限るときまで、眼もくらむほど輝きつづけるのだ。しかしその年は春の到来が遅かったから、中庭を横切りながらぼくは、自分の外側と内側とともに、にがい静寂がしつかり腰をすえているのを感じていた。そしてそれは決して悪い感情ではなかった。ただそれは二十歳の学生にとってほんの少し明るさに向け、ほんの少し若々しくなかった。

33

「ぼく」は、「自分の外側と内側」に「腰をすえている」「にがい静寂」の感覚をめぐって沈思黙考しながら歩き続ける最中に、「中庭のすみのバロック風の造りの石台から曇った空へむかってつき出ている蛇口が水に濡れた指のように柔らかく光っているのを横眼に見」る。いったんそれを通り過ぎるが、「喉が渴いていることに気づいて立ち止ま」る。この一節における「喉の渴き」は長期間にわたって続いてきた、「ぼく」の子供の世界から、大人の世界への通過＝「イニシエーション」の欲望の暗喩であろう——「冬のあいだずっとぼくは喉を渴

³³ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、130 頁。(傍点は引用者による)

かせていた。「ぼく」はひきかえして、その蛇口の水を飲むのが危険であることを認識しているにもかかわらず、その蛇口からの水をあえて飲むことにする。

その蛇口からの水が不純な成分を含んでいて、飲むものの喉と胃をこわすということは大学当局のくりかえす警告がぼくにおしえていた。しかし背を^{かが}屈め^{くちびる}唇をまるめて、ぼくは噴出する水を飲んだ。渴いた喉をほてらせながら忍耐するより、^{からだ}身をこわすことは知ったうえで喉をう^{こうこう}るおすほうが良い。これは無気力な傾向だな、とぼくはまずい水を口腔いっぱい^いにふくんで頭をあげ考えた。しかし、その一種の風潮は大学に威をふるって、ぼくのまわりにも危険をおかして渴きをいやしたあげく、^{しわが}声を嗄らせ、下痢に青ざめて元気がない学生たちはたくさんいた。結局無関心ということなんだ、とぼくは唇のまわりをこぶしでぬぐいながら考えた。政治にも無関心、あとあとの病気にも無関心、恋人を見つけ出すことにも無関心、そして、とうめんの喉の渴きを大切にする青年たち。それは少なくともやっかいではないだろう。それらのものたちは友だちにあいそがよく、人をいやがらせない。じゃまにならない。

34

この場面からも明らかであるように「ぼく」は「^{アンガージュマン}政治的な参加」に興味を持たない日本の学生の一人である。「ぼく」が考察の中で少数派としての「政治」に熱中する青年のタイプを、大半を占める「政治」に「無関心」なタイプに対置し始めたとしたん、「政治」に熱中するタイプの学生たちが「ぼく」と、読み手の目の前に姿を現してしまう。「かれら」の「性急さ」によって、「ぼく」の静寂な沈思黙考が乱される展開となる。「にがい静寂」というテーマに照応するような物語のやや遅いテンポが速くなり、「かれら」の高揚感に照応してテンションが一気に高まっていく。

ところがおなじ大学に、無関心どころか眼をぎらぎらさせて他人と議論し、政治に熱中し、明日のために体をきたえている青年たちもいるのだ。階段をのぼりきり、一年中昼のあいだも暗い廊下をぬけ、英文学研究室のまえまで来ると、そのやりきれない青年たちが待ちうけて罨をはっていた。かれらは光の入ってくるがわの窓に背をむけ、低い机を前にして立っていた。かれらの机の上には、署名用紙と闘争資金募集用紙が

³⁴ 同上書、130～131頁。

おかれていることにきまっている。

ぼくはおとなしく発育不良の子供がいじめっこの前を通りすぎるときのように、緊張し、頬や唇をなげなさをよそおうためにことさらゆるめ、かれらと反対側の壁のややたかめをみながら歩いて行った。かれらの一人がなにかいった。ぼくはすっかり自分の内部のざわめきに気をとられているふりをして歩きつづけようとした。

「署名に協力してください」と力をこめた声がぼくにおそいかかってぼくのおごをかれらにむけさせた。

「あとで」とぼくは眼をふせていった。³⁵

「ぼく」に付与される「発育不良」の「子供」のイメージは、「ぼく」の政治的な自己同一性アイデンティティーの形成が中断された過去と密接に繋がっている。この問題については後に詳しく論述するが、「ぼく」は砂川反米基地拡張闘争アンガージュに参加し、機動隊の暴力を体験した政治運動から「離脱」したという「政治的な参加」と「政治的離脱」デザンガジュマンの経歴を持つ学生である。

この場面において「ぼく」は受動的な観察者として、そして政治運動家の学生たち＝「かれら」は攻撃的な運動家として対置されている。つまり、「かれらと反対側の壁のややたかめをみながら歩いて」「かれら」を避けようとする「ぼく」は、一貫して「見る人間」として描かれているのだ。反面、行動する人間として描かれ、「性急さ」と「高揚感」に操られている「かれら」の攻撃性は、「待ちうけて罨をはっていた」、「力をこめた声がぼくにおそいかかって」などの暴力的な表現をとおして構築されている。

上記の引用で「かれら」にかかわる「眼をぎらぎらさせて」という表現も、「見る」= *look* という主体的な視覚的認識行為というよりはむしろ、「射るような異様な感じで研ぎつく」³⁶「光」を他者に向けて発射するといった、他者の眼に対する攻撃性を指し示していると言えよう。そのうえ、「かれら」がぎらぎらさせている眼が、「かれら」がそれに「背をむけて立っていた」、「光の入ってくるがわ」にあり、日差しを反射するはずの「窓」とほとんど変わらない、それと一体化したもののよう設定されていることも、攻撃的な行動性のイメージを濃厚にしているのである。そして、かれらの一人の「力をこめた声がぼくのおごをかれらにむけさせた」という記述も「ぼく」の観察者／「見る人間」としてのイメージを強化する。このようにして、「見るまえに跳べ」の物語空間において、学生運動家の「かれら」は「行動する人間」、そして「ぼく」は「見る

³⁵ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、131～132頁。

³⁶ 『広辞苑 第五版』、岩波書店、2003年。

人間」として、対極的な位置に立たされている。

また、「かれら」が熱狂的に固執している「署名」の目標を、作中作者としての「ぼく」は、次のように文脈化しようとする。

アジアの西の方とアフリカの片隅^{かたすみ}、と机のはり紙には書かれていた。そこで泥まみれの汚らしい戦争がおこなわれている、実にながいあいだ、フランス人と土民との血が流され、まったくこんぐらかってしまっている。それはぼくにもよくわかっている。³⁷

「かれら」の一人が、「かれら」のアルジェリアに対するフランスの帝国主義的権力の暴力的行使に反対するための抗議の方法を「フランスの内閣へ抗議文をおく」ること、そして「フランスの進歩的な学生と連絡をとること」として説明する。「かれら」のフランスによる暴力に対する憤怒をあらわすのは、(フランスの内閣の)「あいつら」「の葡萄酒ぶとりした喉袋をしめつけて、ぎゅうぎゅういわせてやる」³⁸というその学生の、暴力的な内容を含意する辛辣な言葉である。

しかし、保守的な傾向を持つ「政治的離脱」^{デザンガジュマン}をしたばかりの学生である「ぼく」は、断固として「かれら」の「闘争」に「参加」^{アンガージュ}することを拒む構えを取る。その理由は、「かれら」の「闘争」そのものに対する「ぼく」の懐疑からではない。「ぼく」は、「かれら」の「闘争」をめぐる「言説」や攻撃的な態度にこだわっているのである。「かれら」の態度は、論理的な考察を抜きにして、まるで「見る」まえに「跳ぶ」ように、性急且つ高揚的に行動に「参加」^{アンガージュ}するよう呼びかける、ないしは、より正確に言うと、「叫びかけ」ていると言える。

鉛筆を握り、腰を屈め、自分の名前を書いて硬貨を紙箱に入れるさえすればいいのだった。しかしぼくは学生たちの言葉の押しつけてくる勢いにこだわっていた。

「きみは現在のフランスの植民地の関係をよく知らないんじゃないか」といちばん端に立っている三番目の学生がいった。

「おれが知っているのは」とぼくはいった。「フランスがどんづまりへおちこんでしまっていて動きがとれないことなんだ。署名くらいでどうにかなる場合と違う。追いつめられているのだからな」³⁹

³⁷ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、132頁。

³⁸ 同上書、132頁。

³⁹ 同上書、133頁。(傍点は引用者による)

三番目の学生は「ぼく」のまえに立ちふさがり、興奮して臉をひくひくさせながら「きみの態度はおかしくないか」と怒りにふるえる声で言う。そして、「ぼく」の断固とした拒否に反発したこの三番目の学生が「力づくで」もって署名をさせようとする、滑稽且つ幼稚な「闘い」の場面が発生する。「ぼくはかれの腕がからみついてくるのから自分の右腕をふりほどこうとして体をよろめかせ」、「そのはずみにぼくの右手の甲がかれの頬にあたって小さな音をたて」る。この故意でない平手打ちに憤激する三番目の学生は「逆上してぼくに殴りかかり、それを防ぐために」「ぼく」は「闘う」ことを余儀なくされる。やがて二人の学生は引き分けられたがぼくの右の鼻孔から血が流れる。この滑稽且つ幼稚な喧嘩を契機に「ぼく」は、一時的に「行動する人間」のように「見られる」立場になる。いくつかの研究室のドアが開き、助手を含めて多くの学生たちが「ぼくら」を眺めたからである。その結果として、ぼくは指で鼻孔を押さえながら廊下を駆け、角をまがりフランス文学科の研究室に入っていく。

ここまで、「ぼく」という作中人物が「見る人間」として構築されてきていることは否定できない。その反面「かれら」は、性急さや高揚感を喚起する記号を媒介に築き上げられている。しかしこの挿話における「ぼく」が取った態度を、松原が言うように受動的で、挫折のイマージュに結びつくものとして位置づけることは妥当ではないだろう。前にも引用したとおり、松原は、『芽むしり 仔撃ち』において小さな英雄をつうじて肯定性の要素を一挙に噴出させることのできた大江健三郎が、ほとんど同じ時点において『見るまえに跳べ』では否定性の圧迫をうけて、むなしくうなだれている⁴⁰と言うが、この場面において主人公の「ぼく」が「否定性の圧迫をうけ」ているとは到底思えない。

「叫ぶ」というモチーフにおいても認められるように、「かれら」は、有効な行動を取っているわけではなく、性急且つ権威主義的な高揚に駆り立てられているだけなのだ。そこにも「発育不良の子供」ならではの幼稚さの雰囲気を感じ起こすようなものがあり、「かれら」の「政治的な参加」は「正真正銘」な「イニシエーション」ではなく、自己欺瞞にほかならないのだ。従って「かれら」を「行動する人間」＝「跳ぶ人間」としてではなく、「叫ぶ人間」として定義しなおした方が妥当であろう。

「ぼく」は「見る人間」として構築されており、「ぼく」の「見る人間性」は、保守的な傾向を持つ半知識人特有のものでありながらも、この場面では、卑怯で受動的なものではなく、一定の政治認識をあらわすようなものとして現象している。「ぼく」は、ここで無意識ではあるものの一定の権力拠点による「権威

⁴⁰ 松原新一、「挫折と性のイメージ」、『大江健三郎の世界』、95頁。

主義」的な圧迫に抵抗しており、「市民的不服従」の名に値するような態度を示すわけである。

松原は、「見るまえに跳べ」と『芽むしり 仔撃ち』の間における「隔絶」を、肯定性のイメージが、「不能」のイメージを媒介に＝挫折＝否定性のそれに変質するという転機に見いだしていた。だが実際は「ぼく」と「僕」の中心的な権力に対する態度は相応している。「ぼく」の抵抗の構えは、『芽むしり 仔撃ち』で疎開された子供たちを疫病の流行する村に「監禁」したまま、大人たちだけが村を去り安全な場所に避難した事実を通報しないように迫る村長に抵抗して惨たらしく拷問される「僕」の構えに照応する。つまり、「見るまえに跳べ」の「ぼく」も、『芽むしり 仔撃ち』の「僕」のように、暴力的な体験を契機に、「子供の世界」から「大人の世界」へのイニシエーションを一時的に結実させたと言えるのだ。「見るまえに跳べ」の都会的な「ぼく」と、『芽むしり 仔撃ち』の牧歌的な「僕」の両者がこうした一時的な「始まり」の契機を掴めたのは、性急な「かれら」のように行動する人間のそれとは正反対の、「見る人間」としての構えを取っていたからこそであろう。

1.3. イニシエーションの「失効」に利用される「世界文学」——オーデン詩の「解釈」と「新しすぎる」植民地主義

1.3.1 英語に「捕獲」される「ぼく」

「ぼく」が「見る人間」として、「かれら」との試練により一時的な「イニシエーション」を結実させたことには触れたが、「ぼく」のこうした達成は、すぐさま無効にされることとなる。「闘って」顔に軽傷した「ぼく」はフランス文学科で手当てを受けた後、良重とその「客」ガブリエルとともに六本木のフランス料理店へ行く。食事中、飲んでいた酒に酔ってきた「ぼく」に突然ガブリエルが「おまえはエジプトかヴィエトナムで戦いたいとってたな」と問う。「ぼく」は、「戦いたいよ、ぼくは平和にはあきあきしているんだ。戦争がおこってくれないかと思っているくらいだしね」と「ロマネスク」な高揚感に駆られて答える。

ここまで彼らは日本語で話してきたが、ふとガブリエルが「ぼく」に共通語を英語にするよう促す。「ぼく」は、英語で「若い人間が」「その成長期を、しごく平穩ぶじな世の中ですごすことは不幸だ。戦争の激しい混乱をくぐって成長すること、それは立派な人間をいやおうなしに造るだろう」と言い、背をのばしてあくびしてから「遅く生まれてひどい損をした」とつけ加える。良重と同様に、おいしい食事と酒に満足している「ぼく」に、ガブリエルが急に「そ

れでおまえはエジプトかヴィエトナムへ行って戦いたいと思ってたんだな」と、「ぼく」の「第三世界」運動への憧憬を刺激しようとする。酔いの影響もあって「ぼく」は、英雄主義的な口調で北アフリカないしはヴィエトナムの民族運動へ「参加」する意思を語り始める。

「エジプト人といっしょに土の家で泥まみれになって寝るんだ、そして戦う。ケンブリッジのやつらを撃ちたおしてやる。ヴィエトナムのにごった川にひそんで暑さにうだりながら、パリ生まれのやつらを殺す計画をねってやる」⁴¹

ガブリエルの挑発に刺激された「ぼく」は徐々に、先に「闘った」「かれら」の「性急」且つ「英雄主義」的な言説を借用するようになっていく。つまり、「ぼく」は自分自身の考えではなく、「行動する人間」＝「跳ぶ人間」になろうとする「かれら」の考えを英語に訳して、表現しているのだ。例えば、「かれら」の一人の（フランスの内閣の）「あいつら」「の葡萄酒ぶとりした喉袋をしめつけて、ぎゅうぎゅういわせてやる」という話し振りとは、上に引用した「ぼく」の言葉（「ケンブリッジのやつらを撃ちたおしてやる」、「パリ生まれのやつらを殺す計画をねってやる」）が共鳴していることには疑問の余地はないだろう。

ここで注目すべきは、「ぼく」の「植民地の問題」をめぐる歴史認識の未熟さである。「ぼく」は「ヴィエトナムのにごった川にひそんで暑さにうだりながら、パリ生まれのやつらを殺す計画をねってやる」という意思をあらわすが、歴史認識からすると、このような「行動」に「参加」するにはすでに「遅すぎる」のである。後に、「ぼく」が「政治的離脱」の始点を規定する際に、「二年まえ、ぼくは基地拡張を反対する闘争に加わっ」たという言い方をするが、ここで言及される闘争が1955年に始まった砂川反米基地拡張闘争であることからすると、物語内時間は1957年と設定されていることが判然とする。フランスが植民地保持政策として行使した「汚い戦争」=*guerre sale*（サルトル）としての第一次インドシナ戦争は、1954年のヴィエトナム人民軍によるディエンブエンフーの勝利で終わっているのだ。つまり、フランスによる第一次インドシナ戦争は物語内時間より三年前に終わっているのである。現行の第二次インドシナ戦争で、植民地保持政策をフランスに肩代わりしていたのは、南ヴィエトナムの「同盟国」=*allied* としてのアメリカ合衆国であった。それにもかかわらず、*FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の激しいゲリラ戦で精一杯のフランス軍がまだヴィエトナムでも戦っていると勘違いしていることから「ぼく」の同時代認識が未熟である

⁴¹ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、142頁。

ことが伺える。

また 1956 年 11 月の時点でイギリスとフランスにかぎっていえばすでにスエズ侵攻も 1957 年という時間設定からするとすでに終わっており、(イスラエル軍だけは 1957 年 3 月まで撤退しなかった)「ぼく」が「戦い」に身を投じようとする「第三世界」の二つの戦争をめぐる認識は現実と一致しておらず、この欲求は「ぼく」のロマン主義的且つ唯我論的な「閉じた」「世界」の産物に他ならないのだ。「見る意志をもって」ものに「視線を向ける」(=*look*) ことができないため、ものをよく「見る」ことができない「ぼく」の半知識人としての姿は、この場面の彼のヴェトナム戦争やスエズ侵攻をめぐる「時代錯誤」^{アナクロニズム}において明瞭にあらわれている。物語言説のレヴェルからすると、大江は「見るまえに跳べ」の「ぼく」を「信用できない語り手」=*unreliable narrator* として布置しているのである。

半知識人としての「ぼく」が「かれら」の「性急さ」を包含した言説で話す理由は、外国からの他者の眼に「大人らしく」且つ「男らしく」見えることを望んでいるためであろう。そのために「ぼく」が一定の大人のモデルとして想定している「かれら」の言説を借用したわけだ。そして、「ぼく」を「大人らしく」且つ「男らしく」見えるようふるまうように挑発したのはガブリエルの意図なのであった。ガブリエルの「煽動工作」^{アジテーション}は、すでに車で「ぼく」をレストランに連れていくために向かえにきた時から始まっていたのだ。

「殴られたんだな」と外国人特派員のガブリエルがぼくをのぞきこんでいった。

「闘ったんだ」とぼくはいった。

「日本の青年は、とくにインテリの青年は決して闘わないという定評ができかかっている」とかれはいった。「なぜ闘ったんだ」⁴²

ガブリエルの言葉が、挑発作用を狙った「煽動工作」^{アジテーション}の名に値する刺激的なものであることは明白である。ガブリエルがこの「煽動工作」^{アジテーション}を行ううえで利用した最も有効な戦略は、「英語」という新植民地体制を主導するアメリカ合衆国やその主な同盟国のひとつであるイギリスの「国語」である。「ぼく」の英語力の乏しさは、ガブリエルの仕掛けた罠^{はま}に嵌っていくことを容易にする。同じ会話は次のように続く。

ぼくはかれの外国語でしゃべられた言葉の解釈にごく短い時間とま

⁴² 同上書、138 頁。

どっていた。ガブリエルは倫理的に非難しているのかもしれない。しかしそれはそうでもないのだろう。

「どんな理由で」とぼくはいった。「闘ったか、と聞いているのか？」

「ああ」

「フランスの政策をめぐって」とぼくはいった。「アルジェリアのおかげでね」

ガブリエルは再び口笛を吹き肩をすくめた。ぼくは良重の情人のなかでガブリエルをかなり好きだった。そこでぼくはかれの低い笑いにあわせて笑った。しかし笑いは鼻に衝撃をあたえるのだ、ぼくは呻いた。⁴³

どの読み手の眼にも明瞭であるように、「ぼく」は自らの「大人さ」を「友情」を抱いているガブリエルに認めさせようと苦労している。そのために「ぼく」が考えついたもっとも単純な方法は「かれら」の言説をそのまま英語に訳すことである。そもそも「ぼく」の英語力の乏しさは、自己表現を制限しており、「かれら」の幼稚且つ性急な「第三世界論」の言説を英語に訳すことしかできない。

「ぼく」がいかにか英語に「捕獲」されていったかを明確にするうえでレストランでの会話の場面に立ち戻る必要がある。

「おまえはエジプトかヴィエトナムで戦いたいとってたな」と急にガブリエルがいった。「ああ」とぼくは静かな酔いにひたっている声でいった。「戦いたいよ、ぼくは平和にはあきあきしているんだ。戦争がおこってくれないかと思っているくらいだしね」

「戦争がおこったら」と良重が眼をうるませていった。「鼻が膨れるくらいじゃすまないわよ」

「戦争がおこったら」とぼくもいった。「それはそうだろうな。若い人間にとってどんなに闘ってもせいぜい鼻が膨れるくらい、というのは辛いからな」

「英語でいってくれ」とガブリエルがいった。

「若い人間が」とぼくは英語でいった。「その成長期を、しごく平穩ぶじな世の中ですごすことは不幸だ。戦争の激しい混乱をくぐって成長すること、それは立派な人間をいやおうなしに造るだろう」

(中略)

「ぼくは遅く生まれてひどい損をした」とぼくはのろのろ背をのぼしてあくびしてからいった。ぼくもまた良重と同じように、おいしい食事と

⁴³ 同上書、138～139頁。

酒、明るい部屋、礼儀正しい給仕、それらに満足していた。

(中略) ぼくはほんとうに損したんだ、それははっきりいえないけれども、とぼくは酔いに指さきまでみたされて考えた。とにかく友だち十人あつまれば、六人は人間を殺したことがある、そういう世代もあるんだからな。⁴⁴

ここで、「ぼく」が不意に抽象的な好戦主義の言説の穴ぼこに墮ちるのは表現手段としての英語力の乏しさに由来する。「ぼく」の英語による自己表現力の乏しさは、戦中の日本の「帝国の時代」に対する好戦的な憧憬というレベルと、「第三世界」における反帝国主義闘争のレベルを混同してしまうという軽い錯乱状態をもたらす。

「しらふ」のガブリエルが「ぼく」のこのような話を注意深く聞いたあげく、度胸試しでもするような口調で、「本社とかけあってみたんだが」「この秋おれがベトナムへ特派される時、おまえを連れて行ってやる可能性がある」と攻めてくる。ベトナムの地に着いたら「ぼく」が「うまく脱走して現地人の軍隊に加わ」ることを提案する。これを受けて「ぼく」は喉をしめつけられるような恐怖心と無力感に捕獲される展開となる。「ぼく」がうなだれると彼の「指を良重のやわらかいあせばんでいる掌がとらえ」る。「ぼく」は、良重が「自分のセクスを指や掌のくぼみでたくみに暗示することができた」と思い、そのことを「外国人相手の娼婦としての彼女の一つの技術で」⁴⁵あると解釈する。

1.3.2 “Look if you like, but you will have to leap”の邦訳と「ぼく」のイニシエーションの「失効」の確保

この段階では、「ぼく」の「かれら」との「闘い」を契機にして結実させたイニシエーションは、完全に無効にされている。しかし、ガブリエルは、恥辱にまみれてうなだれている「ぼく」のイニシエーションの失効をさらに強固なものにするために、東西冷戦体制の影響下で資本主義の「西側」の共通語と化しつつある「英語」のみならず、「世界文学」としての「英文学」をも動員してくる。

「そうだろうと思ってはいたんだ」とガブリエルが快活さを回復した

⁴⁴ 同上書、140～141頁。(傍点は引用者による)

⁴⁵ 同上書、142頁。

声でいった。「平和というものは体にいいよ」(中略)

ガブリエルはぼくへ勝ちほこった追い撃ちをあげてきた。(中略)
「戦争は向こうからおそいかかって来るんだ、静かな生活からわざわざ自分をひっこぬいてこちらから戦争へとびこんでゆくのは難しい。考え込んだり、検討したりしてはととてもだめなんだ。なあ、そうだろう」
(中略)

「誰の詩だったか忘れたが、ポピュラー・ソングの一節だったかもしれないが」とガブリエルはいい、上機嫌で朗読した。

Look if you like, but you will have to leap.

「見たけりゃ見なさい、けれどもあんたは跳ばなきゃいけない。そういうことだな。」⁴⁶

良重がその「^{キャッチ・フレーズ} 惹句」的な詩句の意味を理解できず、それをどのようなケースにおいて用いるのかを確かめようとして「女の子を口説く時？」と訪ねるとガブリエルは、「生活一般さ、なにをやるにも見るまえに跳べということさ」、「見ているやつと跳ぶやつ二種類ある」と「再び酔いのなかへのめりこんで行きながら」自分の陳腐な「解釈」を二人の日本人に押し付けてくる。

ここで、ガブリエルは、人間を「見る人間」と「跳ぶ人間」として二つのタイプに区分する。この「解釈」によれば、「跳ぶ人間」のみが「^{オクタンテイツク} 正真正銘性」を持ち得るということである。ガブリエルが「^{オクタンテイツク} 正真正銘性」の前提にしているのは「行動」=actionである。ガブリエルは何らかの目標を達成するための手段であるはずの「行動」をむやみに目標に置き換えるわけである。かれは、「行動」を形而上学的なレベルで抽象化し、「行動」の正当性をあいまいにし、この「行動」を何らかの形で遂行する人/民族を、「^{オクタンテイツク} 正真正銘性」なものとして定義し、それができない人/民族を「^{オクタンテイツク} 正真正銘性」を有しないものとして不用意に対置する。つまり、この屈折した「解釈」によれば、フランス、イギリス(やアメリカ合衆国)のような帝国主義的な暴力を行使する国々も、その暴力に暴力をもって抵抗するヴィエトナム、エジプト、キューバやアルジェリアといった「第三世界」の民族も、「^{オクタンテイツク} 正真正銘性」を有する「跳ぶ人間」ということになる。ガブリエルは、暗黙のうちにあたかも西洋の帝国主義国家の加害者性を相対化しようとしているかのようである。そして、どちらのカテゴリーにも入らない日本の「一般の学生」である「ぼく」を「見る人間」というカテゴリーに入れ、落胆させようと努めているのである。

この「解釈」が、根拠のない、無効なものであることを見抜くことができない

⁴⁶ 同上書、143頁。

かった「ぼく」は、ガブリエルと握手し、良重からタクシー代を受け取ってから黙ったままそこを去る。「ぼく」はヴィエトナムへ行けないということをはっきりガブリエルと自分自身に認めたことを「激しく恥じ」無力感にとらわれてしまう。ついに「ぼく」とガブリエルは「エジプトやヴィエトナムについて話しあわな」くなり、「ぼく」は「また、にがい静寂のなかへ戻っていった」⁴⁷のである。こうして、日本の「一般の学生」を代表するような作中人物である「ぼく」の「成人への成長」＝イニシエーションの失効は確実なものとなる。

*

フランス文学を専攻にしている「ぼく」は英語の知識の水準に限らず英文学の知識の水準も低いため、この詩がオーデンの作品であることを知らない。当然、この詩が二年まえの 1955 年に、深瀬基寛によって日本語に翻訳され、『オーデン詩集』に収録されていることも知らない。例えばこの詩の深瀬基寛による日本語訳の最初の四行は次のようになっている。

The sense of danger must not disappear:

危険の感覚は失せてはならない

The way is certainly both short and steep,

道はたしかに短い、また険しい

However gradual it looks from here;

ここからみるとだらだら坂みたいだが。

Look if you like, but you will have to leap.

見るのもよろしい、でもあなたは跳ばなくてはなりません。⁴⁸

ガブリエルの論理的な考察と見解見識を禁じ、荒唐無稽な行動へ呼びかけるような性急な態度は、一定の「煽動工作」^{アシテーション}である。つまり、ガブリエルも、オーデンが呼びかけるように *gradual* な=段階的な行動を禁じ (*However gradual it looks from here/ Look if you like, but you will have to leap*)、直接的で、性急な行動の必要性を訴える。また、ここには逆説的なことに「かれら」の性急さに照応するようなものがある。「誰の詩だったか忘れたが、ポピュラー・ソングの一節だったかもしれない」といって引用している作品のジャンルをあいまいにするガ

⁴⁷ 同上書、146 頁。

⁴⁸ オーデン、W.H.、深瀬基寛訳、「見るまえに跳べ」、『オーデン詩集』、筑摩書房、東京、1955 年／Auden, W.H., *Collected Poems*, edited by Mendelson, Edward, Modern Library, New York, 2007 年, 311~312 頁。

ブリエルの「^{ディジタリゼーション}偽情報」工作そのものも「ぼく」の無知に拍車をかける。新植民地主義の「煽動^{アジテーター}工作者」としてのガブリエルが、「ぼく」の無力感を強調するために詩が喚起する高揚感を利用し、詩の刺激的な言葉に酔った「ぼく」の戦意を高揚する。しかしそれは、闘う勇気を持たないことを自覚した時の「ぼく」の絶望を深める効果も持つ。つまり、ガブリエルは、この詩を「ぼく」の「^{アンガージュマン}第三世界」解放闘争への「参加」や「連帯」の意思を「無効」にするうえで動員したわけである。

作中作者としての「ぼく」は、ガブリエルの朗読している *Look if you like, but you will have to leap* という英語の詩句を文章にする段階で深瀬基寛の翻訳を利用せず、「見たけりや見なさい、けれどもあんたは跳ばなきやいけない」として日本語に翻訳している。逆説的なことに、「ぼく」による「翻訳」の方が、深瀬訳よりも一層刺激的な意味作用を發揮し、ガブリエルの「工作」は予想を上回る効果をあげることになる。深瀬基寛は訳詩作業にあたって日本語独自の口語文体の一つである「ですます体」を選択している。しかし「見るのもよろしい、でもあなたは跳ばなくてはなりません」といった表現様式における「ですます体」は口語文体でありながら「敬体」であるため、原文における読み手のある種の行動へと誘^{いざな}う性急さや高揚感の空気を伝達することができない。それに対し、口語性の色合いが濃厚な「だ体」を選択した「ぼく」の「訳詩」は、オーデンの原文の読み手を高揚させるような雰囲気日本語で「再生」させることに成功していると言える。

物語言説のレヴェルからするとこうした仕掛けは、「英語、フランス語そして他の言語の詩と、その日本語による優れた訳詩とをつきあわせて、その間に聞こえてくる和音、あるいは不協和音を、小説のなかに書き込み、「それをつうじて自分の小説の表現するもの、そして当の小説の文体までも、より高いものにしよう」と「試みてきた」⁴⁹大江文学の主な「小説の方法」と深く関わっている。大江のこの「方法」には、詩や訳詩そして、両者のあいだに生成する「和音」、ないしは、「不協和音」の「第三」の空間から自らの小説の文体を紡ぎ出すという「意図」があるのだ。この方法を本論文では「引用法」と呼ぶことにする。

「引用法」は、日本語における話し言葉と書き言葉の近接性に関する大江のヴィジョンとも繋がっている。大江は、渡辺一夫教授の指導下で、東京大学のフランス文学科で学んでいた時期に「フランス語では話し言葉と書き言葉」が

⁴⁹ 大江健三郎他、「大江健三郎、『後期の仕事』の現場から——国際視野における大江文学」(シンポジウム)、国際視野中的大江健三郎文学學術研討會論文集、中央研究院、中國文哲研究所、臺北、2009年、269頁。

かけ離れていることを自覚し、セリーヌの読書を仲立ちにして、「明治時代にできた言文一致体が、つまり書き言葉と話し言葉を一緒にした文体が現代文学までつながって」おり、両者が近接していることを認識するようになったと言う。

私が大学でフランス文学科に進んですぐ、フランス語では話し言葉、語り言葉と文章の言葉とは違うということを教わりました。私が生まれたころ、一九三〇年代半ばに活躍を始めた作家に、ルイ＝フェルディナン・セリーヌがいますが、かれが話し言葉に近い文体をフランス文学の世界に持ち込んだのだと習った。(中略) その時、私が思ったのは、こうです。日本語だと話し言葉と書き言葉はそんなに違わないのじゃないか？ わが国では明治時代にできた言文一致体が、つまり書き言葉と話し言葉を一緒にした文体が現代文学までつながっているのじゃないかということです。⁵⁰

大江には、テキストをより書き言葉的なものにするという「意図」があったことが明瞭である。その意図を実践に移す上で、フランス語や英語の文体、それらの翻訳の文体＝翻訳調を参照し、利用したと言える。例えば、「見るまえに跳べ」のテキストには、日本語の読者に違和感を覚えさせるような「非日本語」的な表現や言葉使いが頻出する。また、「ひらがな」表記の多用も、大江の初期作品の特徴の一つであり、この仕掛けにおいて大江はガスカールなどの渡辺一夫によるフランス文学の翻訳を強く意識していたと思われる。

フランス近代現代文学作品の文体（例えば渡辺一夫の翻訳によるガスカール著『けものたち 死者の時』の文体）と重なるような比喩を多く取り込んだ文体が特に小説の冒頭において見られる。その他の特徴として、フランス語や英語の言いまわしをそのまま日本語に直訳したような表現を多く採用していることがある。例えば、先にも引用した冒頭における次の文章を例にあげることができる。

その蛇口からの水が不純な成分を含んでいて、飲むものの喉と胃をこわすということは大学当局のくりかえす警告がぼくにおしえていた。⁵¹

「くりかえす警告がぼくにおしえていた」という表現はフランス語の表現を日本語に直訳したものである。この文章は読み手に日本語を読みながらフラン

⁵⁰ 大江健三郎、尾崎真理子、『大江健三郎 作家自身を語る』、13～14頁。

⁵¹ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、130～131頁。(傍点は引用者による)

ス語の文章を読んでいるかのような感覚を与える。この作品はフランス語に訳されていないが、ここで、この文章をフランス語に翻訳してみると、大江がこの「方法」をもってどのような効果を発揮することを意図したかが浮き彫りになってくる。

Les avertissements répétés de l'administration de l'université m'avaient appris que l'eau de ce robinet contenait des composants impurs, qui irritaient la gorge et l'estomac de ceux qui la buvaient.⁵²

このフランス語訳と原文を対比すると、大江は、ここで、フランス語の接続詞 *que*、関係代名詞 *qui*、動詞フレーズを名詞のように使った限定表現としての *les avertissements répétés* など、フランス語の文法特有の要素を、日本語の文体において生かそうとしていることが明確になるのだ。なお、「ひらがな」表記の多用において大江の参照先が渡辺一夫の翻訳であることには先にも言及したが、例えば、ここで大江は「非日本語的な表現」の特異性を強調するために通常「漢字と送り仮名」で表記される単語をひらがなのみで表記しているのである。

「非日本語」的な文体は「第三世界」運動、反植民地主義運動をめぐる記述の箇所においても見てとれる。

アジアの西の方とアフリカの片隅^{かたすみ}、と机のはり紙には書かれていた。そこで泥まみれの汚らしい戦争がおこなわれている、実にながいあいだ、フランス人と土民との血が流され、まったくこんぐらかってしまっている。それはぼくにもよくわかっている。⁵³

例えば、この段落の二番目の文章の語順は、フランス語の語順を基にしたものである。この文章をフランス語に翻訳することが容易にできるのもそのためである。

Là-bas, une guerre boueuse et sale est en train d'avoir lieu, pour vraiment longtemps, le sang des Français et des indigènes coule, en se mêlant complètement.⁵⁴

⁵² 翻訳は筆者による。

⁵³ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、132 頁。

⁵⁴ 翻訳は筆者による。

*

以上、「引用」と、広義の「翻訳」という言語行為を新たな文体を紡ぎだすために活用するという大江の「小説の方法」をめぐって論じた。サイードの言語活動における「始まりの現象論」からすると、こうした「小説の方法」は、言語活動としての小説が表現の手段であるはずの自らのテキストそのものを、つねに、批評の対象にするといったダイナミズムを可能にする一定の物語装置なのである。例えばサイードは次のように言っている。

言語次元の始まりは結果として、創造的な行為であると同時に批評的な行為でもあることとなります。それはちょうど、言語を規律のとれたやり方で用い始めるときに、批評的思考と創造的思考の間の正統的区別が崩壊し始めるのと同じです。⁵⁵

「創造的な行為」と「批評的な行為」とを相互に結びつける言語活動において、「批評的思考と創造的思考の間の正統的区別」が崩壊し始めるという現象は、「見るまえに跳べ」でオーデンの詩がテキストへ引用され、翻訳されるという作業においても明らかである。この小説の独創性のひとつは、その題名の参照先となっている“Leap Before You Look”という詩、とりわけ、この詩における *leap* と *look* の翻訳のあらゆる可能性を追求していることにある。つまりこの小説のテキストに「翻訳」という「方法」がテキストにおける「批評的思考」と「創造的思考」の区別を崩壊させるうえで用いられ、テキストにダイナミズムを与えるのだ。「ぼく」には、「翻訳」という一定の言語空間に属する言語現象を、それとは異なる別個の言語空間に転置し再構築するという作業の実行が担わされている。「翻訳」が「批評的思考」と「創造的思考」の区別を崩壊させる要素としてテキストに動員されているという戦術は、物語内部のレベルにおいても「露呈」される。例えば、良重と離別し、家庭教師として教えることになった若い音楽学校の受験生田川裕子と関係を持つようになった時に、良重やとりわけガブリエルへの経済的な依存から自立するために「ぼく」がいとなむようになった「仕事」とは、「通俗小説の翻訳」だったのである。

1.3.3 「ぼく」の「デザンガジュマン離脱」と日本の学生運動

言うまでもなく、「ぼく」の「イニシエーション」としての「アンガジュマン政治的な参加」やそれへの意思を無効にしようとするのは、ガブリエルだ。しかし「ぼく」の

⁵⁵ サイード、エドワード、W.、「序文」、『始まりの現象』、xiv~xv 頁。

「^{デザンガジュマン}政治的離脱」は、ガブリエルだけに由来するものではない。「ぼく」がかつて「^{デザンガジュマン}政治的離脱」の穴ぼこに陥ったのは、学生運動にかかわった際の体験と深く連動しているのである。「ぼく」は「かれら」と「闘った」直後に、自身の「^{デザンガジュマン}政治的離脱」への歴史を次のように回顧している。

二年まえ、ぼくは基地拡張を反対する闘争に加わって雨に濡れた髪から滴^{したた}る雨水が眼や唇をつたい、あごを流れえりくびに流れこんで下着を濡らすのを疲れきり寒さに身ぶるいしながら耐えていたものだった。そして汚らしい喉の皮膚に^{かみそりきず}剃刀傷のあとのある勤人と腕をくみ、ぬかるみに立って歌い、頭をがながんさせた。しかし警官に殴りつけられて列からはじきだされた時、ぼくの体は怒りから針の刺された貝の肉のように^{こうこう}ごういんに縮みあがり、切れた歯茎からの血の味が口腔いっぱいひろがって、ぼくにおちついたかいがいしい感情を回復させたものだった。そしてあの時、血の味には小市民的な、けなげな感じがあった。⁵⁶

先にも触れたとおり、「二年まえ、ぼくは基地拡張を反対する闘争に加わった」という表現をとおして想起される記憶は、1955年に始まった砂川反米基地拡張闘争のそれである。1957年という時間設定は、アルジェリア戦争が激化し、東南アジアではアメリカ合衆国が主導する対北ベトナム戦争が続き、クワメ・エンクルマのガーナがブラック・アフリカにおいて脱植民地化した初めての国となったなど種々の「始まり」の時点と重なり合う。これらの民族解放運動には学生^{アンガジュマン}の積極的な「政治的な参加」の貢献が大きかったのだが、1957年は、日本の学生運動が停滞状態に陥った時期でもあった。「ぼく」が明確に示すとおり、1955年は、一般の学生としての「ぼく」の「^{デザンガジュマン}政治的な離脱」の、換言すると、日本の学生の「イニシエーション」の中断の時点なのである。

「ぼく」は、ガブリエルからの欺瞞に満ちた「提案」を受け入れることができず、落胆させられたあの夜、ガブリエルのホテルから戻ってきたばかりの良重と同じベッドに寝たまま、学生運動に参加した体験をめぐる回顧を次のようにつづける。

良重は胴の長すぎるふとった体を褐色の木枠のベッドにうずめて獣のように眠っていた。それは二年まえはじめて一緒に夜をすごした時もおなじことだった。そのときぼくは大学へ入ったばかりで、学生運動に熱中し、検挙され、しかもぼくを過激な行動へみちびいた政治団体から

⁵⁶ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、136頁。

不意に背をむけられ、とほうにくれているところだった。ぼくはきわめて凶暴に、せっかちに良江を愛した。⁵⁷

この一節において注目すべきは、「ぼく」の保守的傾向の発端をなすこの「デザンガジュマン離脱」と、外国人相手の娼婦良重との関係の開始とのタイミングが、重なり合っているということにある。

1955 年は、社会党の統一や自由民主党の結成による「五五年体制」の出現、高度経済成長期の開始などのような、様々なレベルで日本の「学生」にとって決定的な重要性を持つ一連の事件が生起した年であった。この年は、歴史的にいわゆる「保守合同」と命名されることとなる、半世紀以上にわたり政党政治の可能性が喪失され、長期的な不毛な政治環境ができあがった転換点でもあった。⁵⁸

そのなかで「学生」にとってもっとも衝撃的だったのは、「民族解放民主革命」路線、つまり、武装闘争方針の放棄が決定された共産党の「六全協」（「第六回全国協議会」）であった。これは、当時まで「学生党员」として反レッド・パーヅ闘争、朝鮮戦争反対運動や全面講和運動などの日本戦後の歴史において重大な大衆的な闘争に「アンガジュマン政治的な参加」をしつづけた全学連の、共産党からの「デザンガジュマン離脱」という結末をもたらした。もとより、この共産党の「方向転換」は、新植民地主義体制を主導するアメリカ合衆国と、社会主義の世界を主導するソ連、両大国の中心指向的な権力に対する非同盟主義を唱えたバンドン会議（1955年4月）が孕んだ「第三世界」の精神とはかなり対照的であった。

全学連は 1955 年の「六全協」以後の過程において共産党から「デザンガージュ離脱」し、また砂川反米基地拡張闘争の過程で、社会党や総評にも背を向けられることになった。このような孤立は、全学連の指導部における権威主義、英雄主義や「アジテーション煽動」の傾向に拍車をかけ、一般の学生と指導部の間における種々な問題をもたらした。

砂川反米基地拡張闘争における警察官の暴力行使に衝撃を受け、学生組織の指導部の無責任な態度に違和感を抱いて政治に参加することができなくなった大学生の「ぼく」のストーリーを語る「見るまえに跳べ」に登場する「かれら」は、こうした全学連をモデルに構想されていると思われる。「ぼく」が抱えている「にがい静寂」というイメージは、「五五年体制」、「六全協」や「砂川闘争」

⁵⁷ 同上書、145 頁。

⁵⁸ 杉田敦著、「五五体制——政党政治の喪失」、(岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 2 60・70 年代』、紀伊國屋書店、東京、2009 年、47 頁。

の閉塞的な状況、換言すると、「監禁状態」⁵⁹において徐々に「自立化」する一方で「孤立」もしていた全学連とあいまいな絆で繋がれている「一般の学生」のありようを併せ持って暗示するものなのである。

1955年の砂川闘争からこの小説が掲載された1958年の夏にかけての期間における一般の学生の「政治的離脱」^{デザンガジュマン}という社会的な停滞状態の全景を概観するうえで、当時は「学生作家」であった大江自身が、この短編の発表からおおよそ5ヵ月後の1958年の秋に執筆した「叫ぶ全学連とふるえる学生——全国三十万の学生に背を向けられないために——」⁶⁰というエッセイが多くの手がかりを与える。このエッセイでは、全学連の性急な高揚感に基づく行動方針や、それが「上意下達」的に一般の学生に強引に押し付けられるというやり方など、権威主義的な「煽動」^{アジェーション}が批判的にされている。この「内部」からの批判は、一般の学生と全学連執行委員会とのあいだにおけるつながりの希薄さや一方性に注目を集めようとする内容のものである。エッセイの終わりの部分では、肯定的な色合いが濃厚で、全学連第11回大会代議員グループ会議での暴力事件⁶¹の結果、共産党から除名された当時の全学連中央執行委員長の香山健一や、「砂川闘争」などの大衆的な運動を通じて全学連の自立化に大いに貢献した森田実とその事件の経緯をめぐって話し合った学生作家の大江が、他の進歩的な政党組織よりは（日教組とともに）全学連に期待をかけていることを示している。そこには、「ポスト・スターリン批判」の過程においてイギリスやフランスで形成されるようになった新左翼=*New Left*=*Nouvelle gauche* といった「始まりの現象」の、東アジアにおける対^{カウンターパート}応物を全学連に求める大江のヴィジョンがあることに注目すべきである。このヴィジョンは、10年後の1968～69年の大規模な全共闘という大衆的な学生運動を先見するような先鋭性をも含んでいるのだ。

⁵⁹ 「僕はこれらの作品を一九五七年のほぼ後半に書きました。監禁されている状態、閉ざされた壁のなかにいる状態を考えることが、一貫して僕の主題でした。秋のおわりまで、僕の日常はフランス語の勉強に比重が大きくおかれていて、小説については *amateur* にすぎませんでした。やがて逆に、小説のなかの主題が僕を拘束しはじめ、僕はその結果、悪い学生にかわりました。」（大江健三郎、『死者の奢り』、後記、1958年3月）と大江は述べている。「奇妙な仕事」、「飼育」や「死者の奢り」などの初期作品における「監禁状態」のイメージをとおして、こうした暗黒の「時代の精神」を把握し表現することを意図としたのである。

⁶⁰ 大江健三郎、「叫ぶ全学連 とふるえる学生——全国三十万の学生に背を向けられないために——」、『文芸春秋』、1958年11月号。

⁶¹ 1958年6月1日、全学連第11回大会代議員グループ会議の際、一人の学生党員が日本共産党の代表に暴行を加えた事件。

これは明らかに予測できることだが十年後、日本の革新政党のリード・オブ・マンは全学連の中央執行委員会で育ってきた鋭い頭と逞しい行動力の若者たちに握られるだろう。そしてそこに新左翼と呼ぶべきものがうまれるだろう。今、げんに全学連の中央執行委員会はそれ自身が集中的指導権をもつ政党、新左翼となりつつあるのである。そしてそれと同時に、中央執行委員の浮き上がりはますます度をこしつつあるということもつけくわえなければならない。⁶²

しかし、大江のこの期待は「条件付き」のものである——「全学連の中央委員たち、君たちは叫びたてる嵐であることをやめて現実にも密着する必要がある。どなりちらして30万の学生から背を向けられるかわりに、レアリテのある言葉で説得し、腕をくみあう必要がある」。⁶³

以上が「見るまえに跳べ」が執筆された1958年における全学連と一般の学生の関わり方や、それに向けられた期待といった現状の全景である。「そのときぼくは大学へ入ったばかりで、学生運動に熱中し、検挙され、しかもぼくを過激な行動へみちびいた政治団体から不意に背をむけられ、とほうにくれているところだった」という「ぼく」の言葉には、復綻化した形で、様々な「離脱」現象が表現されている。学生運動が共産党の傘下で行われる時代が「六全協」を契機に終止符をうたれたことによる学生たちの共産党からの「離脱」、その結果、全学連の自立としての「再生」＝「イニシエーション」、砂川反米基地拡張闘争の過程で、社会党や総評にも背を向けられることになるという「離脱」、そして砂川闘争以降の全学連の指導部における「性急さ」、「英雄主義」や「権威主義」などによる一般の学生の「離脱」の危機の発現……一般の学生としての「ぼく」の「政治的離脱」の「内部」的な理由はこのようなものである。

1.3.4 西ヨーロッパの *New Left/Nouvelle gauche* と「かれら」

一方「かれら」は同時代を十分に見据えることも、世界における地政学的権力関係の現状を十分に見抜くこともできない性急さと権威主義の態度を持つ「叫ぶ人間」として位置づけられている。つまり「かれら」において、「跳ぶ」こと＝*leap* することは、大人らしく「参加する」ことではなく、実質的には「叫

⁶² 大江健三郎、「叫ぶ全学連とふるえる学生」、112頁。（傍点は引用者による）

⁶³ 同上書、112頁。

ぶ」こととして行われるのだ。そこには、「かれら」の「第三世界」をめぐる見解見識の未熟さの問題が潜んでいると思われる。「かれら」の「第三世界」の民族解放運動との関わり方は、西ヨーロッパの行動や思想をモデルにしたものであり、「正真正銘性」を欠いている。

「砂川闘争」という反（新）植民地主義的運動を主導して以来停滞状態に陥っている全学連は、自らを「第三世界」における「脱（新）植民地化」を推進する主体としては位置づけなかった。むしろ、イギリスやフランスの「第三世界論」を掲げている「新左翼」を同一視し、それと同一化しようとしたのだ。このことは、「見るまえに跳べ」における「フランスの進歩的な学生と連絡をとることにしている」という「かれら」の一人の発言においても明白である。

歴史的な文脈からすると、イギリスの新左翼の誕生においてスエズ侵攻批判や「ナセル主義」が大きな役割を果たした。そもそも、西ヨーロッパの新左翼は、1952～55年の高度経済成長期と繁栄を迎えたイギリスの「豊かな社会」環境の中における「労働者のブルジョア化」や国民の政治的無関心といった社会現象に対するイギリスの中産階級の青年の反発、すなわち、『怒れる若者たち』の反逆^{アングリー・ヤング・メン}⁶⁴として発現したのであった。1956年に発生した「三つの危機」⁶⁵は新左翼の登場の契機を作った。そのひとつは「第三世界」としての北アフリカをめぐるものであり、「植民地の問題」としての「スエズ侵攻」に対するイギリス国民の大半や労働党による政府支持といった態度が新左翼の形成過程に多大に貢献したのである。例えば、『新左翼の遺産』の著者大嶽秀夫は次のように述べている。

一九五六年、イギリスとフランス[そしてイスラエル]によるエジプトに対する制裁としての「スエズ（運河）侵攻」に対して左翼的知識人は大々的な反対運動を組織しようとしたが、イギリス国民の多数（中略）は、愛国主義、帝国主義の立場から政府の立場を支持した。労働党首脳も政府の植民地主義的政策それ自体を批判することはなかった。スエズ侵攻においては、[イギリスの]知識人による反戦運動は、（中略）アルジェリア戦争におけるフランス知識人と同様孤立に陥ったのである。この

⁶⁴ 大嶽秀夫、「イギリスとフランスにおける新左翼」、『新左翼の遺産』、東京大学出版会、東京、2007年、197頁。

⁶⁵ 他の二つの危機は、(1) スターリン批判（1956年2月）とハンガリー事件（1956年10月～11月）がイギリス共産党に与えた打撃や、(2) 労働党の55年の総選挙での敗北と、修正主義論争が失敗に終わったといった政治的な危機である。（同上書、197～198頁。）

事実は、左翼的知識人にとって大きな衝撃であった。⁶⁶

日本の学生としての「ぼく」がかかえている「にがい静寂」も、孤立しつつ自立する道程を歩んだ全学連の抱えた「にがい静寂」も、当時の「同時代」的な現象がもたらしたものであり、イギリスとフランスの新左翼運動も同様に孤立を体験したのであった。フランスの新左翼の登場においても「同国の目覚しい経済成長による労働運動および」共産党・社会党など「社会主義政党の（急進的なレトリックを残したままの）穏健化、現状維持化に対する反発とともに発現し、ヴィエトナムやアルジェリアにおける反植民地主義闘争へ支援した。フランスの新左翼の二つの潮流の一つである「サルトルなど共産党に対する批判的同調者ないしは元共産党員」グループは、「反反共産主義」アンティ・アンティ・コミュニズムを掲げた革命的左翼のグループであり、ときには絡み合い、ときに反発しあいながら、既成の進歩的な政党に対する激しい批判者であった。⁶⁷

1948年に結成され、1955年までに共産党と有機的に結びついていた全学連の自立化の過程は、イギリスとフランスの新左翼の形成とほぼ同じ時期に当たる。絳秀実によれば全学連の自立化過程において「スターリンの民族主義的傾向に対抗して、先進国革命主義を採用し」ており、それは「戦後日本が再び先進資本主義たらんとし出発したという事情も重なって」いた。このような視点からすると、アルジェリア解放運動やナセル主義としての「アラブ・ナショナリズム」を含む反植民地主義的な「第三世界ナショナリズム」は「スターリン主義の亜流でしかない」⁶⁸と解釈される。「かれら」＝全学連は、日本や日本学生運動の「第三世界化」の潜在力を考慮しなかったということだ。つまり、自立化（＝孤立化）した全学連が主導した学生運動は、自己規定をする時日本の「第三世界化」の潜在力を視野に入れず、「第三世界」そのものではなく、被圧迫民族の解放と、自立し統一した「第三世界」の建設を支援する「第一世界」における *New Left/Nouvelle gauche* をモデルにしたわけである。

大江には、「ぼく」という、つねに、読み手に戸惑いを与え、読み手をミスリードする「信用できない語り手」や、「かれら」という世界政治をめぐる認識が未熟な作中人物らを構想するにあたって、とりわけ「全学連」の自己規定における見解見識を「内部」から批判するという意図があったであろう。そしてこ

⁶⁶ 同上書、197頁。（傍点は引用者による）

⁶⁷ 新左翼のこの潮流は、安保闘争における日本の「共産主義者同盟」＝「ブント」に対応するようなものだったと言える。

⁶⁸ 絳秀実、『革命的な、あまりに革命的な——「1968年の革命」史論』、作品社、東京、2003年、84頁。

うした故意の「^{ディジンフォーメーション}偽情報」をとおして、1950年代後半という「アルジェリア戦争の時代」と、この時代における「日本」とりわけ、日本学生運動の位置についての読み手の認識を刺激し、読み手をより正しく、より広い視野の同時代をめぐる見解見識へと導き入れることを目ざしたと言える。

I.4. 「新植民地主義」の「擬人化」としてのガブリエル

Nouvelle gauche の主要な理論家の一人であったサルトルの「第三世界論」へのもっとも重大な貢献は、「新植民地主義」という新たな支配形態を見据え、その仕組みを見抜き、その実相を誰の眼にも明らかになるように暴きだしたことにあった。サルトルの反植民地主義理論のヴィジョンを視野に入れている「見るまえに跳べ」の目標の一つも、この新支配形態を正しく把握し表現することである。

例えば、先行する研究においてガブリエルは日本の対米従属関係を象徴的にあらわす役割を担った物語装置として見なされてきた。つまり日本とアメリカ合衆国という二要素だけからなる二項対立の枠組みで捉えたわけだ。この「日米」という二項対立を「民族的な屈辱」というモチーフをも必然的に取り込むものとし、「人間の羊」や『われらの時代』などのような他の初期作品を貫く主題として位置づけたのは平野謙の「オキュパイド・ジャパン論」であった。例えば、松原新一は、「オキュパイド・ジャパン論」に依拠して、「人間の羊」と「見るまえに跳べ」における「アメリカ」の位置づけの問題を取り上げている。注目すべきは、松原によると、主人公を「民族的な屈辱」に陥らせるのは、「新植民地主義」という支配体制を主導するものとしてのアメリカ合衆国ではなく、日本を占領した連合国としてのアメリカ合衆国である。

この組み合わせのなかに、著者はオキュパイド・ジャパンそのものを象徴化させようと企てたのである。そこにこの発想そのものの積極的な意味がある。(中略) 無論、著者がはじめて作品を発表したところの昭和三十年代の日本は、すでにオキュパイド・ジャパンではなくて一応は独立した国家であった。しかし、沖縄の現状が現代日本そのものの縮図であるという意味においては、昭和三十年前後の日本も、明らかに占領下の延長線上にあった、といていい。すくなくとも日本は現在でもアメリカの従属国にほかならない。そうでなければ、虚無的な監禁状態というような人間認識は若い著者の頭にやどるわけもなく、『人間の羊』のようなみじめに鋭い作品が書かれたわけもなかった。その点では、著者はいわゆる第一次戦後派の人々よりむしろ戦後的だった、といえるかもしれない。いずれにせよ『人間の羊』のような汚辱にみちた作品は、

占領下日本あるいは従属国日本のみじめさをぬきにしては絶対に成立し得ない。そういう著者が、アメリカであれ、フランスであれ、外国につながることによって十年間も生をたえ、しのいできたヴェテラン娼婦と、その娼婦に組みしかれ、ヒモとなりさがった大学生という組み合わせという特異な性の世界のなかに、いわば現代日本の社会政治的位置づけをこめようとしたことは一つの必然だろう。そこにこの小説の大前提がある。」⁶⁹

しかし、このような「日米」の二項対立のみに基づいた分析において見逃されているのは、「第三世界」という第三の要素なのであった。「見るまえに跳べ」における大男の外国誌の特派員ガブリエルは、単にアメリカ合衆国という大国に限らず、新植民地主義という、旧植民地主義の古典帝国主義に比べてさらに網羅的で複雑な支配形態を擬人化しているのである。ガブリエルが日本の一般の学生としての「ぼく」とかかわるようになることも偶然によるものではなく、ガブリエルが自らに与えられた一定の帝国主義的な使命を果たすためなのである。

1.4.1 「ぼく」の保守主義の相対性とサルトルの「新植民地主義論」

「新植民地主義」がテキストにおける重要なモチーフの一つであることが、^{プロレブシス}前説法的に「露呈」されるのは、「ぼく」と「かれら」の論争の場面においてである。この論争が物理的な衝突に展開する直前に、「かれら」は、「ぼく」がその言語や文学を専攻にしているフランスの「植民地の問題」としてのアルジェリアやヴィエトナムにおける帝国主義的権力の暴力的な行使に無関心であることを非難する。

「おい」と最初の男がいった。「きみはフランス文学の学生だろう。とくに署名すべき立場じゃないか」

(中略)

「おれは止め^やめところ」とぼくがいった。

「おかしなことをいうなよ、インドシナの戦争を平気なわけじゃないだろ？」

「おれには関係がない」

「きみはフランス文学をやっている」

⁶⁹ 松原新一、「挫折と性のイメージ」、『大江健三郎の世界』、102頁。

「おれは十六世紀をやっているのだからな。植民地の問題は新しすぎる」

70

「ぼく」が保守的傾向を持つ半知識人のタイプを体現していることにはすでに触れた。その根拠の一つは、「ぼく」が専攻分野の「十六世紀のフランス文学」の範囲のみで世界観を制限しようとするものである。つまり「ぼく」は閉鎖的な「プロフェッショナル専門家知識人」の姿勢に固執しているのだ。サイードは、*Representations of the Intellectual* = 『知識人とは何か』において、こうした権力と協力し、それにへつらう保守的な知識人のタイプに対置し、理想的な知識人のモデルとして *amateur intellectual* = 「アマチュアの知識人」について述べている。「アマチュアの知識人」は、専門以外の分野に強い関心を持ち、そこから得た知識に基づき自国ないしは世界における中心指向的な権力構造を「周辺」的な立場から批判しつづける「アンガジュマン政治的な参加」をする人物である。このアプローチからすると、大学生の「ぼく」は将来、「権力に対して真実を語ることができる」「アマチュアの知識人」とは正反対の「プロフェッショナル専門家知識人」という保守的なタイプの知識人となる帰趨を持つ人物であると言えよう。⁷¹

「ぼく」の「デザンガジュマン政治的離脱」や保守主義を促進し、保持するのは、「外国誌特派員」という文字通りの「プロフェッショナル専門家知識人」としての職業的自己同一性を持つガブリエルであると言える。しかし、「保守合同」 = 「五五年体制」が始まった1955年に「デザンガジュマン政治的離脱」をした「ぼく」の「保守主義」は、一貫性を持つものでもなければ、絶対的なものでもない。例えば、「ぼく」は、「かれら」の西ヨーロッパの「かたよ第三世界論」に偏る「方針」に反対する。それにもかかわらず、「ぼく」は、ガブリエルの挿話では、「第三世界ナショナリズム」ならではの姿勢を示すのである。

つまり、「ぼく」は、「内部」の進歩的な他者 = 「かれら」に対し保守的な姿勢を取る反面、「外部」の保守的な他者 = ガブリエルに進歩的な姿勢で対応するのである。このような「インベリアル・レスボンサビリティー相対的」な保守主義は、自国における中心指向的な権力構造や「インベリアル・レスボンサビリティー帝国責任」に対しては批判的にならないにもかかわらず、他の国の問題に対しては批判的になるという保守的「第三世界論」の根本的な特質である。読み手は、このような分裂した政治意識を体現する「ぼく」による帝国主義の歴史や地政学に関する情報を信用することができないのである。

⁷⁰ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、132～133頁。

⁷¹ Said, Edward, W., *Representations of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures* Vintage Books ed., New York, 1994年 / サイード、エドワード W. 「専門家とアマチュア」、「権力に対して真実を語る」、『知識人とは何か』、大橋洋一訳、平凡社、東京、1998年、を参照。

物語言説のレベルからすると、「ぼく」という主人公兼語り手は、情報を断片化し、あいまいにする物語装置として構想されている。もっとも格好な一例は、「新植民地主義」という言葉に向けられる言語のレベルの暴力である。引用文における「植民地の問題は新しすぎる」という表現において断片化され、欺瞞されているのは、「ぼく」がサルトルの“Le colonialisme est un système”というテキストにおいて読んだと思われる「新植民地主義」という「第三世界論」の用語である。

良重やガブリエルから自立することを決心し、田川裕子と恋愛関係を始めるが、田川の墮胎を契機に離別し、憂鬱状態に陥った時期ですら、「丸善へ新着のフランスの雑誌をとりにい」って「アルジェリアの大学生のデモ行進が刷られている表紙の週刊誌」⁷²を購入することを諦めない。「ぼく」が西ヨーロッパの「植民地の問題」にフェティシズム的な関心を持ち、フランス文学科に入学しフランス語を学んで以来つねに読みつづけた雑誌は、*Les Temps Modernes* 誌である可能性が高い。(アルジェリア解放戦争をめぐる報道に対しフランス政府が厳格な検閲措置を取っていたが、サルトルが編集した *Les Temps Modernes* 誌だけは体制側の弾圧に逆らって、アルジェリアの解放に共感する立場から報道を続けていたからである)

長期間にわたって「ぼく」が愛読していたと思われる *Les Temps Modernes* 誌の編集長を担ったサルトルの“Le colonialisme est un système”は、1956年1月にフランスのアルジェリア政策に対して開催された集会における自らの講演をもとにしたものである。サルトルは、「植民地主義」が制度的な経済的搾取と人種差別に基づく「体制」であることを、フランス帝国の19世紀以降の対アルジェリア植民地政策を中心に解説する。1956年における宗主国フランス政府や経済界の推進する「和平工作」を否定し、この工作を「新植民地主義」として定義している。

《新植民地主義の欺瞞》ともいうべきものを警戒してほしいと思う。

[=*Je voudrais vous mettre en garde contre ce qu'on peut appeler «la mystification néo-colonialiste».*]

新植民地主義者は、植民者に良いのと悪いのといると考える。植民地の状況が悪くなったのは、悪い植民者の罪だという。[=*Les néo-colonialistes pensent qu'il y a de bons colons et des colons très méchants. C'est par la faute de ceux-ci que la situation des colonies s'est dégradée.*]

欺瞞はつぎのようにして行われる。君たちを案内してアルジェリアを

⁷² 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、192頁。

見せてくれる。人民の悲惨を親切に見せてくれる。実際それはひどいものだ。性悪の植民者がイスラム教徒に与えた数々の陵辱を物語ってくれる。さらに、君たちが憤慨の色を見せるとこうもつけくわえる。「だから良質のアルジェリア人たちが武器をとったのです。彼らにはもう我慢できなかったのです」。⁷³

なお、次の箇所では、*néo-colonialistes* という言葉とは異なる *nouveau colonialisme* という表現が用いられる。

こうしたありさまでは、植民地の企業はいつまでたってももたもたしたものだった。それが明確な存在となったのは、第二帝政下のことで、商工業の膨張とつながりがある。つぎつぎと植民地の大会社が設立されてゆく。(中略) こうなると、資本主義そのものが植民地主義的となる。この新しい植民地主義の理論家となるのがジュール・フェリである。[=*Cette fois, c'est le capitalisme lui-même qui devient colonialiste. De ce nouveau colonialisme Jules Ferry se fera le théoricien.*]

「いつも資本にみちあふれ、さうとうの資本を輸出してきたフランスとしては、当然こういう角度から植民地問題を考えねばならない。産業の本質からして多額の輸出に精をだしているわがフランスのような国々にとっては、植民地問題とはまさに販路の問題である。政治的優越のあるところ、そこには生産物の優越があり、経済的優越がある。」⁷⁴

Nouveau colonialisme = 「新しい植民地主義」という表現は、「植民地主義」が宗主国としてのフランスの経済を活性化し、産業や商業の拡大をもたらす体制として組織されるようになった資本主義の19世紀後半における新しい段階を示

⁷³ サルトル、ジャン・ポール、「植民地主義は一つの体制である」、31頁。

⁷⁴ 同上書、34頁。(傍点は引用者による)

サルトルによれば、初めて「植民地帝国主義」を定義づけたのは、歴史における最初の社会主義国家の創始者としてのレーニンではなく、フランス第三共和政の下で首相を二度にわたって務めたジュール・フェリ（1832～1893）だった。

フェリはフランスの植民地領土の拡大を熱狂的に推進した政治家であった。北アフリカのチュニジアの保護国化、ブラック・アフリカのマダガスカルやコンゴ、アジアのヴィエトナムへとフランスの植民地領土を拡大することに大いに貢献した。ところが、フェリは、ヴィエトナム侵攻の結末として勃発した清仏戦争を引き起こした責任がある人物として議会で強い批判を受け、失脚した。

すものである。本論文の文脈においてもっとも注目すべきはこの部分における「新植民地主義の欺瞞」という表現である。「新植民地主義」とは、ファシズムならではの人権違反と、封建制度ならではの搾取の「体制」と化しているフランスの（旧）植民地主義体制をより自由主義的に民主化することに基づく「新しい体制」へと改善するという戦略である。つまり、サルトルは、フランスの植民地政策における実質的な帝国主義・植民地主義的な支配を中心にする「ハード・パワー」的な支配政策から、植民地地域の文化的存在感や政治体制に対する寛容を中心に実施される「ソフト・パワー」的な植民地政策への方向転換という自由主義者の戦略を見抜いているわけである。

サルトルによると「新植民地主義」のこの戦略は、1950年代におけるアルジェリア人による民族解放運動は従来の植民地政策が誤っていたことのみ由来するとフランス市民に信じ込ませる「宣伝工作」^{プロパガンダ}に他ならない。この問題を経済的、社会的そして、心理的な要因に由来するものとし、「自由選挙だの、憲法制定議会だの、アルジェリア独立だの」といった政治的な要因を背景に退けること⁷⁵が、新植民地主義的「宣伝工作」^{プロパガンダ}＝《新植民地主義の欺瞞》のもっとも主要な目的なのである。

「信用できない語り手」としての「ぼく」の発言においてサルトルが作り出したこの二つの表現は、断片化され、変形されている。物語言説のレヴェルでは、このような変形^{デフォルマシオン}によって、読み手が新植民地主義という新しい現象をさらに「よく見ること」を可能にすることこそが、作者の「意図」であったと考えられる。⁷⁶ロシア・フォーマリズムのターミノロジーに翻訳すると、ここには

⁷⁵ 同上書、31～32頁。

⁷⁶ サルトルのこのテキストは「反植民地主義理論」、「第三世界論」の形成において一定の「始まりの現象」となり、1950～60年代の日本においても世界各国と同様に、広く読まれ、高く評価された。哲学者であり作家でもあるサルトルは、スターリン批判以降期において西ヨーロッパで形成されるようになった新左翼の主要な理論家の一人である。サルトルの独自性は、マルクス主義を「第三世界」問題としての「植民地主義」や「新植民地主義」という帝国主義批判のカテゴリーに応用したことにあつたと言えよう。サルトルは、ヴィエトナムとアルジェリア解放戦争^{アンガーージュ}支援運動に、思想や行動のレヴェルにおいて「参加」した。彼は1949年、中国革命が呈した反帝国主義的なイニシエーションの「世界化」の潜在力を植民地や半植民地的な地域において見てとった。イギリスのポストコロニアル理論家のヤングによれば、サルトルの「反植民地主義理論」や「第三世界論」は、後のポストコロニアル理論においてほとんど忘却の淵に沈められた。

（それにもかかわらず、本論文で取り上げる、「見るまえに跳べ」のような『われらの時代』周辺の一連の大江文学作品にはサルトル流の「反植民地主義理論」の同時代的な存在感が濃厚に反映されているということをここで強調する必要があるであろう）

「明視」の仕掛けが作動しているのである。

「明視」とは、「異化」(=*défamiliarisation*)・「変形」(=*déformation*) という技法によって作者が読者に喚起することを意図する効果のことである。作者が読者の想像力、集中力や記憶力を全的に活性化することによって、読者が描写される「もの」をよく「見る」ようにすることが、「明視」である。大江は、「見るまえに跳べ」から20年後に書いた『小説の方法』においてロシア・フォルマリストのヴィクトル・シクロフスキーが考案した概念である「明視」を「自動化作用」、「習慣化の作用」という現象に対置しつつ次のように解説している。

シクロフスキーは、レフ・トルストイの日記を引用しながら、日常生活の実際の中で意識にとどめられず過去のものとなった事物は、思い出そうとしても再現不可能であり、もともとなかったも同然ということを示す。もののいちいちが、それは人間自体もふくみ、人間の心のなかに起伏するあらゆることどもをふくむが、それらが意識によってとらえられぬままに過ぎさってゆけば、そのように生きられた生活は人間にとって実在しなかったも同然なのだ。

《こうして無に帰せられながら、生活は消え去って行くのである。自動化作用は、ものを(中略)のみ込んでいくのである。／「もし多くの人たちの複雑な生活全体が無意識的に過ごされてしまうのであれば、その生活は存在しなかったも同然である。」「そこで生活の感覚を取りもどし、ものを感じるために、石を石らしくするために、芸術と呼ばれるものが存在しているのである。芸術の目的は認知(中略)、すなわちそれを認

ヤウングが主張するとおり、ポストコロニアル理論は、その「始まり」をフランツ・ファノン、アルベール・メンミ、W・E・B・デュボイス、アントニオ・グラムシやカール・マルクスらの理論として位置づけ、サルトルの歴史的また理論的な役割を過小評価し、排除するという傾向を持つ。またポストコロニアル理論が反植民主義理論の延長線上にあるということを否定しようとする。しかしこうした単純な否定的なアプローチへのアンティテーゼが、サルトルの「反植民主義理論」＝「第三世界論」そのものなのである。反植民主義的な闘争をめぐって書くことのみならず、それに政治的な行動をとることをとおしても積極的に「参加」を行ったサルトルは、この二つの分野の間における架け橋のような位置を占めているからである。(Young, Robert, "Preface: Sartre: the 'African Philosopher,'" Sartre, Jean-Paul, *Colonialism and Neocolonialism*, Translation by Azzedine Haddour, Steve Brewer and Terry Mc Williams, With a preface by Robert Young and a new introduction by Azzedine Haddour, Routledge Classics, Oxon, 2006年、IX～X頁。この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

め知るこゝ [=reconnaissance]としてではなく、明視すること [=vision] (中略) としてもものを感じさせることである。また芸術の手法 (中略) は、ものを自動化の状態から引き出す異化 (中略) の手法であり、知覚を難しくし、長引かせる難渋な形式の手法である。⁷⁷これは芸術においては知覚の過程そのものが目的であり、したがってこの過程を長引かせる必要があるためである。芸術は、ものが作られる過程を体験する方法であって、作られてしまったものは芸術では重要な意義を持たないのである。⁷⁸

1.4.2 エンクルマの「新植民地主義論」とガブリエル

要するに、大江は、「新植民地主義」という現象を「明視」させるうえでサルトルの理論を援用し、それを「見るまえに跳べ」の「信用できない語り手」である「ぼく」に変形させて使わせたわけである。「国内の」政治情勢には保守的に対応する反面、「海外の」＝「世界政治情勢」に進歩的な姿勢をもって対応する「ぼく」とは異なり、サルトル自身は帝国主義的な権力の暴力的行使の問題を、自国との関係性において考え、批判する「アマチュアな知識人」なのである。

「見るまえに跳べ」で表象されるところの新植民地主義の射程は、フランス帝国主義の文脈における植民地主義政策の自由主義的な修正という特殊なものより広いものだ。なぜなら、ガブリエルという^{アンタゴニスト}かたき役には、アメリカ合衆国が主導する「新植民地主義体制」(そしてその「欺瞞」の「^{プロパガンダ}宣伝工作」)の全体像が書き込まれているからである。ガブリエルという^{アンタゴニスト}かたき役において擬人化されているこうした新植民地主義の表象を分析する上で、ガーナの民族解放運動の指導者であり、初代大統領でもあったエンクルマが、自国の「イニシエーション」とその「失効」の体験をもとに、「見るまえに跳べ」より7年後に書い

⁷⁷ “Le but de l'art, c'est de donner une sensation de l'objet comme vision et non pas comme reconnaissance; le procédé de l'art est le procédé de singularisation des objets et le procédé qui consiste à obscurcir la forme, à augmenter la difficulté et la durée de la perception.” Chklovski, Viktor “L'art comme procédé”, Todorov, Tzvetan, (éditeur), *Théorie de la littérature, textes des formalistes russes*, Seuil, Paris, 1965 年、82 頁。

⁷⁸ 大江健三郎、「文学的表現の言葉と『異化』」、『小説の方法』、岩波書店、東京、1978 年、4～5 頁。(傍点は著者による)

た『新植民地主義』= *Neo-Colonialism, the Last Stage of Imperialism*⁷⁹が重要な手掛かりとなる。

*

「見るまえに跳べ」を含む大江の『われらの時代』周辺の一連の作品における「第三世界」のヴィジョンの構想にあたってサルトルの反植民地主義理論の影響が濃厚であることは本論文の論点の一つである。サルトルの理論の影響を受けたのは（大江などの）小説家に限らなかった。ファノンやメンミのような反植民地主義理論家、ポストコロニアル理論の創始者としてのサイドや、ラテン中・南アメリカの解放のための行動と思想の両レベルにおいて「アンガジュマン政治的な参加」をしたチェ・ゲヴァラ、そして「アフリカ合衆国」⁸⁰の建設を志したエンクルマのような「第三世界」解放運動の指導者もサルトルの反植民地主義理論・「第三世界論」に多大な影響を受けたのである。

大江文学の「始まり」の年であり、「見るまえに跳べ」の物語内の時間でもある1957年に脱植民地化された「最初の」ブラック・アフリカの国ガーナの指導者エンクルマは、1950年代後半に西ヨーロッパや日本のジャーナリズムにおいて焦点化される存在となった。⁸¹『われらの時代』において、主人公南靖男が憧憬を抱く「第三世界」の指導者の一人として言及されるエンクルマは、新植民地主義の陰謀と思しき軍事介入によって失脚させられ、結局のところ「アフリカ合衆国」、つまり、自立し、統一したアフリカ大陸の建設への「イニシエーション」を結実させることができなかった。新植民地主義体制による「デコロナイゼーション脱植民地化政策」は実際のところ、大規模な「リコロナイゼーション再植民地化」の企画であることを見抜くようになっていたエンクルマは、『新植民地主義』においてこの帝国主義の新支配形態とその「欺瞞」を徹底的に分析した。この新植民地主義体制が促進する「デコロナイゼーション脱植民地化政策」=「リコロナイゼーション再植民地化」の企画は、アルジェリアやヴイエトナム解放戦争のような反新植民地主義的である「オタンテック正真正銘」な解放運動とはまったく対照的な「疑似」のものであり、サルトルの言うところの「レトロアクティヴ新植民地主義の欺瞞」に照応するような帝国主義的企画であったのだ。遡及的に

⁷⁹ Nkrumah, Kwame, *Neo-Colonialism, The Last Stage of Imperialism*, Thomas Nelson & Sons, Ltd., London, 1965年/クワメ・エンクルマ 『新植民地主義』、家正治、松井芳郎共訳、理論社、東京、1971年。

⁸⁰ クワメ・エンクルマは、この「第三世界」のヴィジョンを1958年の全アフリカ人民会議でおこなった演説の際に提唱した。

⁸¹ エンクルマ、クワメ、「『アフリカは目覚めた』」、『世界』(137)、195～198頁、1957年5月号を参照。

見て、それより 7 年もまえに書かれた「見るまえに跳べ」の作中人物ガブリエルはエンクルマが『新植民地主義』で開示するところの「新植民地主義」という支配形態の文学的な擬人化であるように見える。⁸²

エンクルマによれば、そもそも古典帝国主義の主要な支配形態であった植民地主義は、19 世紀における「アフリカの奪い合い」(*scramble for Africa= partage de l'Afrique*)⁸³で始まった。「世界の植民地部分の再分割」且つ資本主義への代替の政治・経済的体制としての社会主義の初登場をもたらした第一次世界大戦⁸⁴が 20 世紀初頭に勃発した。また第一次世界大戦と、社会主義の登場に付随した「独占資本主義の行動分野」の縮小のためドイツ、南ヨーロッパ⁸⁵や日本で資本主義を支えるために推進させられたファシズムの台頭によって「敵対的帝国主義間の激しい闘争」の戦場となった第二次世界大戦は、植民地主義体制に大きな打撃を与えた。結果、両世界大戦の攻撃からほとんど物理的に無傷であったアメリカ合衆国が国際的金融独占体の指導的役割をイギリスから継承する形となったのである。

世界史の第二次世界大戦後の段階は地球が社会主義圏の「東側」と資本主義圏の「西側」として分断される冷戦の陰の中にあった。分断の当事者であるアメリカ合衆国主導で確立された新植民地主義体制とは、先述したとおり、「脱植民地化」した植民地的ないしは半植民地的地域を「再植民地化」することを目的としていた。ファイナンス部門における優位性の結果、アメリカ合衆国は「栄光ある孤立」を「国際問題における支配」の立場へと転換させ、植民地国の政治的宗主関係を除去するという新しい条件に植民地主義を適合させ、植民地主

⁸² エンクルマは、『新植民地主義』を出版した翌年の 1966 年中国訪問中に本国で行われた軍事介入によって失脚させられ、それ以降は亡命生活を送ることになった。エンクルマが着手した非同盟の「第三世界」へのイニシエーションの失効には、「新植民地主義」体制による間接的な「介入」の作用が大きかったと思われる。

⁸³ 19 世紀において、帝国主義諸列強の植民地獲得競争の主な舞台はアフリカに移り、たとえそこが原住民が居住し占有している土地であっても、「先占の法理」が適用され、原始取得の対象とされたのであった。このことが、「アフリカの奪い合い」と呼ばれることになったのである。(エンクルマ、クワメ、「訳者のあとがき」、『新植民地主義』、262 頁。)

⁸⁴ 当時、「独占資本主義の国際的団結化」を指導したのはドイツとアメリカ合衆国であった。レーニンを援用するエンクルマによると、第一次世界大戦は、「資本主義の不均衡発展」の枠組みで、「世界の原料資源や投資資本および工業の市場の再分割」をめぐる欧米の激烈な競争に根ざして勃発したのである。(エンクルマ、クワメ、「序論」、『新植民地主義』、14 頁。)

⁸⁵ これらの南ヨーロッパの国は、イタリアや「西欧帝国主義の半植民地的付属物にとどまっていた前哨地点」であった「スペイン・ポルタガル」である。(同上書、14 頁。)

義が他の手段によって維持されねばならないという局面を開始した。しかし植民地主義の古い直接的な形態は、完全に捨てられたわけではなかった。帝国主義諸国が物理的に植民地を保持し続けようとして、大規模な軍事的武力行使を遂行した事例としてエンクルマが言及するヴェトナム、朝鮮半島、スエズ、アルジェリアといった「第三世界」の地域⁸⁶が、「見るまえに跳べ」においても言及されていることにここでも注目すべきである。

エンクルマは、古典帝国主義の支配形態から新植民地主義への歴史的なパラダイム・シフトを経済政治的に開示したうえで、新植民地主義の定義をする。

新植民地主義の本質は、その下にある国家は、理論的には独立しており、国際法上の主権のあらゆる外面上の装飾を有しているということである。現実には、その経済体制、政治政策は、外部から指揮されている。

この指揮の方法と形態は、種々の形を取りうる。たとえば極端な場合には、帝国主義の軍隊が新植民地主義の国家領域に駐屯し、その政府を支配する。しかし多くの場合、新植民地主義的支配は、経済的もしくは金融的手段を通じて行なわれる。新植民地主義下の国家は他の国家からの競争的生産物を排除して、帝国主義の工業製品を受け入れざるをえない。新植民地主義下の国家の統治政策に対する支配は、この国をまかなう費用を支払うことによって、政策を左右できる地位に文官を置くことによって、また帝国主義国が支配している銀行制度の設置を通じての外国為替に対する金融的支配によって、確保される。⁸⁷

エンクルマの「新植民地主義論」のキーワードの一つは「援助」である。「援助」は対象国を支配搾取するうえでの新植民地主義による一定の戦略にすぎない。そしてこれは矛盾だらけの戦略でもあるのだ。新植民地主義は、支配下に置いている国や地域の人びとの生活水準向上をすることができるものとして自らを示さねばならない。しかし自国や同盟国の経済的な発展のみが目標である

⁸⁶ 「帝国主義が自分の植民地に、いかに執拗にしがみついているかを示す多くの証拠がある。ベトナム、朝鮮、スエズ、アルジェリアは帝国主義諸国が物理的に植民地を保持し続けようとしている事例であり、その態度は、金融資本の世界独占支配のための闘争における主役としてのアメリカが関与することによって、強化されている。この闘争は、世界の社会主義諸国を西欧金融独占体の搾取的支配の下に引きもどすための戦いの主要動機として、反共主義をとることにによって、イデオロギックの内容を与えられている。」(エンクルマ、クワメ、「帝国主義の金融」、『新植民地主義』、57～58頁)

⁸⁷ エンクルマ、クワメ、「序論」、『新植民地主義』、11頁。

新植民地主義は、この水準を自国や同盟国＝「第一世界」諸国の利益のために、低いままにしておくのである。新植民地主義体制下の諸国の支配者たちに統治する権威を与えているのは、人民の意志ではなく、新植民地主義の主人の支持なのである。「援助」は、新植民地主義の主人により支払われ、「新植民地主義の国家を通過し、増大した利益をもって新植民地主義の主人に帰ってくる回転クレジットにすぎない」のである。なおエンクルマによれば、「個々の発展した諸国の競争が、まず現れるのは『援助』の分野においてであり、この支配体制「が存続するかぎり、勢力範囲が存続する」。「そしてこのことは、多面的な援助を不可能にしている」のである。⁸⁸エンクルマは実際には「唯一の効果的な援助の形態である」多面的な「援助」が不可能になる理由を説明する際に「多面的な援助が始まれば」、新植民地主義者は「自国の既得利権の敵意に直面する」と述べている。

「既得利権」は教育の分野における援助にまで反対するのである。なぜなら、そのような援助が「学生運動を生み出すのではないかと疑われる」からである。「多くの低開発諸国では、学生は新植民地主義に対する闘いの先鋒であった」という歴史的な経験がこの懐疑心と警戒心を惹起する要因なのである。⁸⁹エンクルマは、新植民地主義の「援助」戦略と連動する新植民地主義的な支配下の地域の学生運動に対する反共的な警戒心について述べる時、「共産主義による破壊の危険」という警告は、「それが新植民地主義制度下に生きている人びとに、体制変更の可能性を与えて以来、[両刃]の剣となりそうである」と言う。要するに「新植民地主義者」は、対象国における学生が、「援助」を「反新植民地主義」的な「組織化」や「政治的な参加」の資金にする可能性をヒステリックに、あるいは、「病的興奮をもって」警戒しているのである。

「援助」は、「見るまえに跳べ」においても主なモチーフのひとつである。例えば、「ぼく」は「良重の情人のなかでガブリエルをかなり好きだった」と言う。六本木のフランス料理店の場面で「良重と同じように、おいしい食事と酒、明るい部屋、礼儀正しい給仕、それらに満足していた」⁹⁰「ぼく」がガブリエルを好きなのは、友愛のみに基づかない。一般の学生としての「ぼく」の心に、良重を共有している外国雑誌特派員への「愛情」を芽生えさせるのは、その特派員から良重を媒介に受け取っている経済的「援助」である。つまり、ガブリエルは、日本の一般の学生としての「ぼく」を経済的に支援する保護者／スポンサーのような存在である。しかし、「ぼく」の大学生としての自己同一性は、

⁸⁸ 同上書、16頁。

⁸⁹ 同上書、17頁。

⁹⁰ 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、141頁。

ガブリエルの警戒心を喚起する要因となっているのである。

戦後の日本においても、反新植民地主義的な運動を主導したのは学生であった。教育や大学が、様々な「援助」の対象とされたことは、逆説的に、反新植民地主義的な運動における学生の主導権の形成に貢献した。例えば、一般の学生としての「ぼく」も「政治的な参加」^{アンガジュマン}を行った。しかし、彼が「政治的な参加」^{アンガジュマン}をした砂川反米基地拡張闘争は、日本の「自立化」としての「イニシエーション」へと展開する危険性を孕んでいたとして警戒され、国家の暴力機関としての機動隊によって中断され、無効にされている。

ここで、ガブリエルが「日本の青年は、とくにインテリの青年は決して闘わないという定評ができかかっている」のに、「ぼく」がなぜ闘ったかを問いたがす場面を思い起こす必要がある。「ぼく」は外国語の言葉の解釈にごく短い時間躊躇し、ガブリエルが自身を「倫理的に非難している」のではないかと懸念し、後に「倫理的に非難されていない」と、誤った判断を下す。しかし、ガブリエルの「なぜ」は、新植民地主義体制が、経済的な利益を目指して、「援助」を行う支配下の国の学生に対して抱く「反・第三世界」^{アンティ・コミュニズム}(= 反 共)的な警戒心からくるものなのである。ガブリエルには、「ぼく」のいかなる形での「イニシエーション」をも中断し、無効にする使命を担任されているのだ。

ガブリエルが警戒している事項の一つに、経済的に支援している一般の学生としての「ぼく」が、「かれら」と接することがある。「ぼく」が「かれら」を批判し、「かれら」と「闘争」することはまた、「和解」による一定の連帯へ展開する可能性を孕んでいるため危険なのである。ガブリエルの目標は、「ぼく」をつねに「かれら」から遮断し、両者をつねに隔離状態で保持することにあると言えよう。換言すると「ぼく」の「政治的な離脱」^{デザンガジュマン}を強固なものにするということだ。そして、こうした一定の「分割統治」= *divide and rule* 戦略の根底には、内的な隔離状態を仲立ちにして日本の学生全般を「第三世界」における学生運動という「全体」から遮断するという、より大規模の企図があるのだ。これらを考慮すると「ぼく」の「外側と内側とともに」、「しっかり腰をすえているのを感じていた」「にがい静寂」をもたらす主な要因はガブリエルのこうした「欺瞞工作」なのだと考えられる。

1.4.3 ガブリエルの職業——「外国誌の特派員」という設定

ガブリエルの職業が「外国誌の特派員」と設定されていることもこの作品の仕掛けのひとつである。エンクルマは、「新植民地主義」という新支配形態の文化の局面をめぐって分析する際に「独占体に支配」されている「外国」雑誌の

反「第三世界」的「^{プロパガンダ}宣伝工作」手段としての機能を指摘している。エンクルマによれば、大衆メディアは大衆娯楽と連携して反「第三世界」的な「宣伝」を行っている。新植民地主義の^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢のサブカルチャーが「周辺世界」の「^{デザンガジュマン}政治的離脱」の上で有効な手段であることは、反植民地主義理論において言及される問題点の一つである。ガブリエルがオーデン創作の詩“Leap Before You Look”/「見るまえに跳べ」について、「誰の詩だったか忘れたが、ポピュラー・ソングの一節だったかもしれないが」といって、「世界文学」の領域に属する作品をサブカルチャーの領域に転位させようとするという場面での「欺瞞工作」は、のちにエンクルマが指摘する「^{プロパガンダ}宣伝工作」と重なり合うようなものである。エンクルマは、大衆娯楽業界のみならず、大衆メディアとしての「賢明で贅沢な雑誌」をも酷評の的にする。

ハリウッドがフィクションを扱うのにたいして、無数の独占の新聞、および、口先がうまくて賢明で贅沢な雑誌の流出は、それが「ニュース」と呼ぶことに決めたものに仕えている。個々の国において、一つか二つの通信社がニュースの通信を支配しているので、——多くの別個の新聞や雑誌があるにもかかわらず——致命的な統一性がえられる。他方、国際的には、[アメリカ] 合衆国の金融上の優越性は、その外国通信員や在外支社を通じて、また、国際的な資本主義ジャーナリズムを通じて、ますます強く感じられる。ジャーナリズムを装って、西側諸国の大都市からの反解放宣伝の洪水が、中国、ベトナム、インドネシア、アルジェリア、ガーナおよび自由への独立の道を歩みつつある全ての諸国に向かって発されている。偏見が流行している。たとえば、反動の武力に対抗する武力闘争が行なわれているところではどこでも、民族主義者は反徒、テロリスト、あるいはしばしば「共産主義のテロリスト」と呼ばれるのだ！⁹¹

冷戦体制下における新植民地主義のメディア機関の主な役割は、「周辺世界」の学生を「第三世界」との連帯からの「^{デザンガジュマン}政治的離脱」に導くことである。他方、外国誌特派員としてのガブリエルの態度において明瞭なことは、「ぼく」の政治的な欲望、つまり、「第三世界」における解放闘争への「^{アンガジュマン}政治的な参加」(=「イニシエーション」)への欲望を、非政治的な対象に転位させようとするということである。この試みはサルトルが定義するところの「新植民地主義の欺瞞」という「帝国主義」にかかわる諸問題における「政治」的な次元を、表象のレヴ

⁹¹ エンクルマ、クワメ、「新植民地主義のメカニズム」、『新植民地主義』、249頁。

エルにおいて、後景に退け、経済的、社会的、文化的、心理的な側面を前景化するという戦略であると言えよう。

例えば、ガブリエルの「平和というものは体にいいよ」という発言にもそのような「欺瞞」が潜んでいる。「平和」という言葉は日本が「限定戦争」というものに新植民地主義の協力者として関わったこと、それに経済的な利益を獲得したことだけに限らず、時には、同盟国の暴力を被ることになったことをも隠匿しているわけである。そしてそのことを明らかにするのは、ガブリエル自身である。

「ぼく」は、良重やガブリエルとともに横浜の地下のナイト・クラブへ裸の女の踊りを見に行く。ガブリエルと「ぼく」はフランスの「サド」やアメリカのヘンリー・ミラーといった「性」を主題化した作家をめぐって会話を交わす。三人がナイト・クラブを出て、京浜国道を走るガブリエルの車のなかでサドに関する話をつづけるうちに悪酔いしたガブリエルは、日本人にはサドを理解することができまいと主張し始める。ガブリエルによればその理由は日本人の侮蔑に対する従順さである。ガブリエルの差別的な議論の対象となった「性」は、徐々に「西洋中心主義的」な「政治」と絡むようになる。

「おれは朝鮮戦争の時に兵士だったんだ」とガブリエルがいった。「そしておれたちは汚くてちっぽけな日本人を有楽町のドブ河へ投げ込んで溺死させた。その時日本人の群集はおれたちをリンチするかわりに、黙って見ていたぜ」

ガブリエルはかれらの投げ込んだ日本人がドブのなかでいかに地虫のようにみじめできたならしくてつまらないものであったかを説明し、とぐとぐくりかえした。ぼくは腹をたてはじめていた。⁹²

ガブリエルは、日本国民の「戦後のおとなしき」を嘲弄しつづける⁹³、このことが、「ぼく」を徐々に激怒させるに至る。ガブリエルは「おとなしい国民」の一人として、「ぼく」に嘲弄の対象を焦点化する。「おまえだって、たいしたことはないよ」と言い、「ヴェトナムへ行ってフランス人を撃ちころす機会をあたえてやったのに、返事もできなかつたろう」とつづけ、「ぼく」を「跳べない人間」として位置づけている。ガブリエルは、「怒りもしない、ましてや跳びだす勇気は持っていない」人間であると「ぼく」を罵り、それに対して、サド

⁹² 大江健三郎、「見るまえに跳べ」、149～150頁。

⁹³ 「戦争いらい、日本人はじつにおとなしくおだやかになったんだ。かれらは決して怒らない。ドブ河で溺死させられても黙ってじっと見てるだけ。」(同上書、151頁)

が「一生見るまえに跳んだ連中の代表」⁹⁴だったと対比し、さらに「ぼく」を貶めるのだ。

ここでガブリエルは、第一次インドシナ戦争は三年前に北ヴィエトナムによるディエンビエンフーの勝利ですでに終結していることや、現行の第二次インドシナ戦争がアメリカ合衆国によって行われつつあることを知らない「ぼく」の無知を極めて巧妙に利用し、増強させようとしている。この「欺瞞工作」のモチーフをとおして大江は、「第一世界」のみならず、「周辺世界」の青年の「第三世界」の解放運動をめぐる知識や意識を歪曲させ、「第三世界」問題を自らの視点から「見させる」新植民地主義の宗主国中樞のメディア機関の「欺瞞工作」を変形していると言える。

ガブリエルは、小説の主旋律を「ぼく」や良重だけではなく読み手にも「聞かせてあげ」ながら、「幸福にみちて歌い」はじめる——「Look if you like, but you will have to leap」⁹⁵。「新植民地主義」の「本当の」暴力的な顔に「覚醒」したことが「ぼく」を暴力的な行動へと導く。

ぼくは決意して車の外を眺めた。車は夜明けちかひ荒あらしい霧のなかを鉄の支柱のつらなる長い橋をわたったところだった。ぼくはガブリエルに車をとめるようにいった。かれはぼくが尿を排泄したがっていると思っただけだった。かれは敏捷に車をとめドアを開いた。霧と冷たく硬い空気が流れこみ、良重が身震いして目覚めぼくらを罵った。

ぼくはフロントの隅に吊るしてある銅製の重いメタルを拳いっぱい握り紐をひきちぎって車の外へ出た。ガブリエルは鉄柱のあいだから橋の下の沼沢地へむかって湯気のゆたかにたちのぼる尿を勢いよく噴出させていた。ぼくは背後からかれに近づき、重く大きくなった拳でその頭部を一撃した。かれはゆっくり前へ屈み、そのまま静かに二米ほど下の沼沢地へ崩れこんで行った。⁹⁶

この小説の独創性のひとつが、“Leap Before You Look”の翻訳のあらゆる可能性を追求することを通じて、それをひたすら解釈しようとしているといふことなみであることには、すでに触れた。ここで「見るまえに跳べ」の読み手は、*leap* という命令形の動詞のオーデンの意図とは異なる、この単語の翻訳における「変形」を見て取ることになる。つまり、*leap* には、他動詞として用いられ

⁹⁴ 同上書、151頁。

⁹⁵ 同上書、151頁。

⁹⁶ 同上書、151～152頁。

る場合、「跳ばせる」という意味もあり、それがこの段階でテキストに動員されているのだ。大江はこの場面において「見るまえに跳べ」という句を、「見るまえに跳ばせ」として意識的に誤訳したわけだ。「ぼく」は、新植民地主義という支配形態を擬人化している「ガブリエル」を沼沢地へ「跳ばせ」、彼を殺してしまうのである。

この体験は、「ぼく」に「イニシエーション」の契機を与える。これによって一時的にはあるが一般の学生としての「ぼく」は新植民地主義の圧迫を断ち切ることになるのだ。しかし、事件の一ヶ月後、良重と「ぼく」は「海に近い避暑地へ出かけ」た時、ガブリエルに再会する。ガブリエルは「遠くからあいまいに腕をふっただけで」、「ぼく」と良重へ「近づいて来ようとはしなかった」⁹⁷。「ぼく」が殺したはずの「ガブリエル」が「再生」したことで、この「暴力事件」がガブリエルにとっても「死と再生」という意味での「イニシエーション」であったことが判明する。

後に「ぼく」は、外国人相手の娼婦の良重とは離別し、彼女を媒介にする新植民地主義の「援助」を受けずに、若い音楽学校の受験生田川裕子との結婚の計画のため自立化を図る。しかし、恋愛関係を結ぶようになった田川裕子との結婚の計画は妊娠した彼女の墮胎により挫折に向かわざるを得なくなる。「ぼく」の「大人の世界」への「イニシエーション」を中断し、無効にするのは、ガブリエルの「死と再生」の循環としての「イニシエーション」なのである。小説の終わりの部分において、ガブリエルの「不死身性」は、「ぼく」が離別してから数ヶ月後に再会した良重によって宣言される。

「もう六ヵ月になるわね」と良重は平静にいった。「ガブリエルがヴィエトナムから絵葉書をくれたわ」

「まだ生きてる？」

「生きてるわ、なかなか死なない。おそろしく不死身な男なのよ」と良重がいった。⁹⁸

「ぼく」が、後に良重と食事し、酒を飲んだあと、二人が彼女の家に行って性交渉しようとしたところ彼は不能になる。「信用できない語り手」としての「ぼく」はこのことの原因を読み手に離別したばかりの田川裕子の墮胎による彼の憂鬱と解説する。しかし実際には「ぼく」の性的不能には、ガブリエルの「不死身性」に対して抱いた無力感や屈辱感の作用が大きかったことは想像に難く

⁹⁷ 同上書、152頁。

⁹⁸ 同上書、193頁。

ない。ガブリエルは、物語全体にわたって一貫して、「ぼく」の「イニシエーション」を無効にする権力装置として機能しているのだ。

またガブリエルが「不死身な男」であることは、帝国主義の「不死身性」に照応する。古典帝国主義＝旧植民地主義を主導したフランスやイギリスを体制下に組み込んだまま誕生した新植民地主義は、「西ヨーロッパ」による帝国主義の延長線上に立っている。つまり、アメリカ合衆国が主導した新植民地主義体制は、一旦死んだ古典帝国主義の「再生」であったのだ。この再生は、「周辺世界」の民族の「帝国主義との再会」ということをも意味している。反植民地主義闘争を行っているアルジェリア、ヴェトナム、スエズ、朝鮮などの青年の「政治的な参加」に対して、1950年代後半の日本の学生が様々なレベルにおいて、政治から「^{デザンガージュ}離脱」され、「停滞状態」に陥ったこともガブリエルの「不死身性」を支える要因の一つである。ガブリエルは、「砂川反米基地拡張闘争」流に「反新植民地主義的な行動」への「一般の学生」としての「ぼく」の「政治的な参加」＝「イニシエーション」を中断させ、無効にするということに成功しているのである。そしてその根底には、「新植民地主義の欺瞞」の「工作」の作用があったのだ。

1.5. おわりに

本章で見てきたように、「見るまえに跳べ」において帝国主義の、「死と再生」の（悪）循環をつねにつづけ、種々な方法を採用して世界を支配しようとする新植民地主義という支配形態の異なる側面が、「不死身な男」であるガブリエルにおいて擬人化されている。このような仕掛けは、読み手を「見るまえに跳べ」が書かれた時代の「第三世界」のありようをめぐる新しい認識の「始まり」へと導いている。エンクルマが提唱するように、「新植民地主義者の手段」は「多種多様であり、「彼らは経済の領域のみならず、政治」、「宗教、イデオロギーおよび文化の領域においても活動している」からこそ、「新興諸国の諸問題に対して外国の干渉を止めさせるためには、新植民地主義がいかなる装いであらわれようとも、それを研究し、理解し、暴露」する必要がある。⁹⁹

そして、大江が読み手を導こうとする「政治的な参加」の「始まり」の可能性とは、このような見解見識と照応する「見る」行為を前提にしているのだ。「第三世界」の知識人の主な使命は、「もの」をよく「見て」、その実相を読み手の眼に明瞭になるように「見させる」＝「明視」させるということである。「よく見なければ、何も見ないと同じ」ということを少年時代に自覚した大江は、「見

⁹⁹ エンクルマ、クワメ、「新植民地主義のメカニズム」、『新植民地主義』、242頁。

る、または考えることは、言葉にすることだ、ということも早くから意識している¹⁰⁰と述べている。サルトルに着想を得て、日本青年の、「第三世界」で反乱する青年とは対照的な「政治的離脱」^{デザンガジユマン}を、また、安保闘争直前の「嵐の前の静けさ」の雰囲気、「にがい静寂」というイメージをとおして表現するこの作品は、エンクルマに先立ち「新植民地主義」という支配形態のあらゆる側面を文学的な表象をとおして「明視」させたと言える。

60年代において全学連などの進歩的な組織が掲げた「護憲」、「反戦」、「原水爆禁止」などといった社会的認識を言論活動のみならず、最近の「九条の会」、「大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判」や東日本大震災に起因した福島第一原子力発電所事故以後「脱原発運動」での活躍においても示し、一貫して中心指向的な権力を「研究し、理解し、暴露し」、批判しつづけている「アマチュアな知識人」である大江によるこの小説は、エンクルマの「新植民地主義論」のように「イニシエーション」としての新しい認識へと読み手を導くものであり、読み手に「跳ぶまえに」「見る」ことを提唱しているのみならず、その手段ともなっている。なぜなら、広い意味での小説という仕掛けは、以下に示された通りだからである。

人間の認識および肉体のすべての機能を活性化させて、その全体を、想像力のむかう方向へ推進させようとする。言葉によって、一人の個としての自分の、人間的な根源にいたり、そのような人間である自分を、社会、世界、ひいては宇宙的な構想のうちに位置づける。そのような作業にむけて人間を押し出す力が、想像力である。それは実際、ここにあるかれ自身にとっては、到達不可能なところへ、われとわが身を投げ出す力である。¹⁰¹

*

『大江健三郎作家自身を語る』において指摘される「見る」＝「書く」という見解見識や、それよりほぼ半世紀まえに書かれた「見るまえに跳べ」における「見る」というテーマの形成においてサルトルの「黒いオルフェ」(“Orphée noir”, 1948年)というテキストの作用が大きかったであろう。序章での説明と反復するが、「黒いオルフェ」は、セネガル共和国初代大統領をも努めることになった詩人レオポルド・センゴールが編纂したアフリカとマルティニークの詩人による詩集にサルトルが付けた「序」＝“Préface”である。

¹⁰⁰ 大江健三郎、「子供時代に発見した言葉の世界」、『大江健三郎作家自身を語る』、18頁。

¹⁰¹ 大江健三郎、「活性化される想像力」、『小説の方法』、83頁。

サルトルがこのテキストに登場させている「オルフェ」の参照先は、ギリシア神話に登場する吟遊詩人オルフェウス＝オルフェである。オルフェウスは、他界した妻エウリュディケーを連れ戻そうと冥界に行った。一度は妻を取り返したオルフェウスであったが、帰り道に冥界の王者ハデスとの約束を破り、後ろを振り向いて妻を「見た」ゆえに、妻を永遠に失う結末となった。

オルフェウスの物語において「眼差し」は主要なテーマである。「黒いオルフェ」という「序」でサルトルは、アフリカ（人）やマルティニーク（人）の自己を形成させるのは西洋人の人種差別的な「眼差し」であると言う。「世界文学」としてのフランス文学に学んだアフリカの詩人たちは、帝国主義的権力を暴力的に行使してきたフランスの国語（や文学）に対し、自らの創作した詩の空間＝「第三世界」文学の空間において、言語的な暴力を行使し、それを解体しようとする。そしてサルトルは、この言語のレベルにおける「脱植民地化」の「行動」を、アフリカの黒人が送り返してくる「眼差し」に喩えるのだ。サルトルは、「黒いオルフェ」の冒頭において次のように表現している。

これらの黒い口を閉ざす^{くつわ}轡を外したとき、君たちはいったい何を期待していたのか。その口が君たちの讃歌を歌い出すとでも思ったのか。われわれの祖先は、彼らの頭を力づくで地にねじ伏せていた。その頭が再びもたげられるとき、その目の中に君たちに対する崇拜の心でも読みとるつもりだったのか。ところがここにいるのはすくくと立ってわれわれを見つめている人間たちだ。願わくば私同様、この見られているという^{おのの}戦きを君たちにも感じて欲しい。それというのも白人は、相手に見られずに見るという特権を三千年にわたって享受しつづけてきたからだ。白人は純粋な眼差しだった。彼の眼の光は、誕生の闇のなかからいかなるものでも引き出してきた。彼の皮膚の白さは、それもまた一つの眼差しであり、光の結集にほかならなかつた。白人——人間である故に白く、陽の光のように白く、真理のように白く、美德のように白い白人が、松明のように創造を照らし出し、もろもろの存在の秘められた純白の本質を露わにしていたのだ。今日では、これらの黒い人々がわれわれを見つめており、われわれの眼差しはわれわれ自身の眼に送り返されてくる。今度は黒い松明が世界を照らし出す番だ。¹⁰²

¹⁰² サルトル、ジャン・ポール、「黒いオルフェ」、『シチュアシオン』、海老坂武、鈴木道彦訳、人文書院、京都、1964年、159頁。

大江は、創作活動を、広義の帝国主義ないしは自国における中心指向的な権力による暴力に逆らう方法として想定する。そしてこの見解見識の根底には、サルトルの、「宗主国」フランスの帝国主義的権力に「逆らって書いた」アフリカとマルティニークの詩人がその「眼差し」を詩＝文学という形式で宗主国の人々の「眼に送り返す」という「第三世界」文学論があるのだ。

サルトルによるこの「第三世界」文学論の、大江文学への働きかけに関しては、第四章で詳述するのでここでは詳しく触れない。その問題に「跳ぶ」まえに、「喝采」という「見るまえに跳べ」から三ヶ月後に書かれた短編において大江が、サルトルによる *engagement* やそれと連動する *authenticité* という概念を『第三世界』と日本』という問題を把握し表現するうえでいかに活用したかを「見る」ことにする。

第二章 戦後日本の「荒地」における「オタンティシテ正真正銘性」の探求 ——「喝采」の「第三世界論」

「植民地をなぜフランスが放棄しないか聞きにきたんだ」とリュシアンは笑いにいきはずませながらいった。(中略)

「汚らしい学生ども、日本人の学生ども、自分の尻をなめるがいい」と歌うようにリュシアンはいった。「海の向こうを気にかける身分か」¹⁰³

L'écrivain « engagé » sait que la parole est action: il sait que dévoiler, c'est changer et qu'on ne peut dévoiler le monde qu'en projetant de le changer. Il a abandonné le rêve impossible de faire une peinture impartiale de la Société et de la condition humaine.¹⁰⁴

L'authenticité, cela va de soi, consiste à prendre une conscience lucide et véridique de la situation, et plus que du courage à assumer les responsabilités et les risques que cette situation comporte, à la revendiquer dans la fierté ou dans l'humiliation, parfois dans l'horreur et la haine. Il n'est pas douteux que l'authenticité demande

¹⁰³ 大江健三郎、「喝采」、12頁。以下、「喝采」の引用はすべて「喝采」、「文芸春秋編集」『文学界』、12(9)、1958年9月号による。

¹⁰⁴ 「束縛された」 [= 政治的な参加をした] 作家 [= *l'écrivain « engagé »*] は話が行為であることを知っている。彼は、暴露することは変えることであり、変えるという企てにおいてしか暴露することはできないということを知っている。」(Sartre, Jean-Paul, *Qu'est-ce que la littérature?* Gallimard, Paris, 1948年, 30頁/サルトル、ジャン・ポール、『文学とは何か』、加藤周一、白井健三郎訳シチュアション 2、改訂版、京都、人文書院、1952年、22頁.)

beaucoup de courage et plus que du courage.
Aussi ne s'étonnera-t-on pas que
l'inauthenticité soit la plus répandue.¹⁰⁵

II.1. はじめに

大江の最初期小説の歴史的な展開に着目した時、「見るまえに跳べ」（1958年6月）と内部的にもっとも密接な繋がりを持つ作品は「喝采」（『文学界』、1958年9月号）である。¹⁰⁶「見るまえに跳べ」では、アルジェリア解放戦争、スエズ侵攻やヴィエトナム戦争などの、西洋の新・旧植民地主義という支配形態に対する「第三世界」の抵抗運動といった同時代状況の文脈における日本の青年の「政治的離脱」^{デザンガジュマン}状態が位置づけ直されていた。「喝采」においては、このような「政治的な参加」^{アンガジュマン}をめぐるテーマが、再整理され、再活用されたうえで、さらに展開されている。「見るまえに跳べ」における「『第三世界』と日本」というテーマを表現するという「意図」やその「意図」を言語化するうえで選択した「方法」によって、「喝采」の物語内容や物語言説のレベルにおける形成が決定されたと言える。このことは、サイードの「書こうとしていることの始まりを選択することがきわめて重大であることを知らない作家はいない」、なぜならこのことが「後続部分の多くを決定するのみならず、実際のところ、作品の始まりは作品」（や後続の作品群）「[が提供するもの]¹⁰⁷への大手門である」¹⁰⁸と

¹⁰⁵ Sartre, Jean-Paul, *Réflexions sur la question juive*, présentation par Arlette Elkaïm-Sartre, Gallimard, (Collection Folio/essais : 10) Paris, 1954年, 109頁.

「正統性 [= 正真正銘性] は、言うまでもなく、状況を、明晰且つ正当に自覚し、その状況に内在する責任と危険を引き受け、誇りをもって、あるいは、辱恥にもかへても、そして時には、恐怖や憎悪によっても、その状況の権利を主張するところにある。従って正統性が、非常な勇気を要し、更に、勇氣以上のものも必要とすることは、疑う余地がない。従って、非正統性の方が、むしろ一般に拮がっているのも、驚くには当たらないわけである。」(ジャン・ポール・サルトル、『ユダヤ人』、(*Réflexions sur la question juive*, 1946)、東京、岩波書店、1956年、111～112頁.)

¹⁰⁶ 筆者による「大江健三郎の最初期小説における「政治的な参加」の問題—『喝采』を中心に—」という論文は、本章での研究に基づいている。(ギュヴェン、デヴリム、C.、「大江健三郎の最初期小説における「政治的な参加」の問題——『喝采』を中心に——」、『言語情報科学』、(9)、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2011年を参照)

¹⁰⁷ 原文では“the main entrance to what it offers”となっている。(Said, Edward, “Beginning Ideas,” *Beginnings*, 3頁.)

¹⁰⁸ サイード、エドワード、「始まりとなる発想」、『始まりの現象』、2頁.

いう指摘に相応している。

「アンガジュマン政治的な参加」は、大江健三郎の「喝采」や「見るまえに跳べ」をはじめとする初期作品において重要な構成要素であっただけではなく、それ以降の（半世紀以上にわたる）作家生活においても主要なモチーフでありつづけている。この二作において「アンガジュマン政治的な参加」は、50年代後半に多発し「脱植民地化」と歴史的に命名された「第三世界」の反植民地主義的な解放運動のモチーフと絡まり、「性」のイメージをとおして捉えられ、「性」の言説に翻訳され表現されている。「アンガジュマン政治的な参加」、「第三世界の解放」、「性」という三つの構成要素の連動に基づく創作法は、『われらの時代』（1959年7月）でさらに洗練された形で再活用された。「喝采」において「性」の言説をとおして表現されている「アンガジュマン政治的離脱」と「アンガジュマン政治的な参加」といった相互補完的なモチーフは、小説の主要なテーマである「オダシテ正真正銘性の探求」のテーマとは密接不可分の関係にあると言えよう。

大江があらゆるレヴェルの中心指向的権力に批判的な距離を保ち、それらにあらが抗う「アマチュアな知識人」としてのモラル意識をつねに抱えつづけた作家であることにはすでに触れたところである。「アンガジュマン政治的な参加」そのものも大江の作家としてのモラル意識の形成に多大に貢献してきた。このことは、例えば、1960年代の「原水爆禁止運動」（『ヒロシマ・ノート』（1965年6月）はその結実である）や『沖縄ノート』（1970年9月）で総括された「沖縄返還運動」などとの関わり方に示されている。またそれは、前章でも言及したとおり、日本の主要な知識人によって結成された反戦団体である「九条の会」や「大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判」（＝『沖縄ノート』裁判¹⁰⁹）における最近の大江の「アンガジュマン政治的な参加」においても持続している。¹¹⁰このような「アンガジュマン政治的な参加」の

¹⁰⁹ 大江健三郎の『沖縄ノート』を中心にする一部の書物において、沖縄戦での集団自決が日本軍の指揮官によって強いられたことを記述する内容に対し、元指揮官や遺族が名誉毀損を訴えた裁判である。2008年10月31日の大阪高裁の判決により、大江健三郎や岩波書店の勝訴で終わった。

¹¹⁰ 2011年3月の東日本大震災に起因した福島第一原子力発電所事故以後、「ポスト・フクシマ」の時代と呼ぶことができるアクチュアリティへの積極的な「参加」もこれらの「アンガジュマン政治的な参加」につけ加えるべきである。大江は、「さようなら原発」をはじめとする「非核」＝脱原発運動へ講演者として関わったのみならず、国内外のメディアにこの新たな「核の危機」の時代に関する見解を発表し、「非核」運動を主導する主要な知識人となった。（大江健三郎、「九条を文学の言葉として」、大江健三郎、内橋克人、なだ・いなだ、小森陽一、『取り返しのつかないものを、取り返すために——大震災と井上ひさし』、岩波書店、東京、2011年、を参照）

ほとんどが「第三世界」問題（沖縄、アフガニスタン、イラクなど¹¹¹）と深くかかわっているのは紛れもないことだが、こういったモラル意識の形成の始まりを「喝采」のような最初期の小説の物語内容のレベルにおいて見て取ることができる。¹¹²

「アンガジュマン政治的な参加」と「オタンテイシテ正真正銘性の探求」の問題が大江文学における「第三世界」のヴィジョンの構築過程に如何に深く関与するかを開示する上で、「喝采」という、先行する大江研究では——同じ主題を題材にする「見るまえに跳べ」や『われらの時代』とは相違して——ほとんど見落とされてきた作品を読み直すことは必要不可欠である。

II.2. 「デザンガジュマン政治的離脱」と「オタンテイシテ正真正銘性」の探求

「喝采」は、F（＝フランス）大使館の外交官であるリュシアンメイル・ミストレスの同性愛の「情夫」であり、彼と同棲するフランス文学科の大学生夏男の屈辱的な生活やそこから抜け出る試みを物語る。主人公は、「オタンテイック正真正銘」な自己同一性のモデルを求め、そのモデルを模倣し、それと同一化することによって自身が喪失した「本物の」何かを回復しようとする青年として設定されている。

本章では、第一章において着手した「第三世界」と、大江の最初期文学という二つの「始まりの現象」の連動の分析を、「喝采」のケースに当て嵌め、「喝采」において発揮される「第三世界論」を開示する。「喝采」の「第三世界論」

¹¹¹ 周知のとおり「九条の会」は自衛隊のイラクやアフガン派兵に強く反対する姿勢を示した。

¹¹² 「アンガジュマン政治的な参加」の問題は『水死』（2009年12月）においても言及されている。『水死』の主人公である作家長江古義人が敗戦の夏に洪水の川に船出し水死した父をめぐる小説を書こうと苦闘する過程で、その小説を題材とした演劇を計画する「ザ・ケイヴ・マン穴居人」という劇団とかかわるようになる。「水死小説」を創作する企画が挫折したことを契機に、看板女優の穴井ウナイコは、劇団から独立し長江の妹であるアサの支持を受け、フェミニストの色合いが濃厚で前衛的な「政治的に参加」した演劇活動＝「死んだ犬を投げる芝居」の企画に着手する。

このことを手紙で兄の長江に報告する際にアサは次のように書いている。

「さてウナイコが新しい体制で演劇活動を始めようとしていることには、そうするほかない事情がからんでいます。今度の大成功をきっかけに、『死んだ犬を投げる』芝居への、この地方の右派からの批判は強まっています。それが現実的な妨害に発展すれば闘うほかありませんが、それをウナイコは、生き方のスタイルとして政治的なアンガジュマンはしたくないマサオ[＝劇団のリーダー]の、ザ・ケイヴ・マン「穴居人」から独立した劇団としてやる、と明確にしておきたいのです。」

（大江健三郎、『水死』、講談社、202頁）このことは、大江文学全体にわたって本格的な役割を担ってきた「アンガジュマン政治的な参加」の問題が作家の「レイト・ワーク後期の仕事」＝「レイト・ワーク晩年の仕事」においても重要な位置を占めていることを示す一例である。

のヴィジョンは、主人公夏男における「^{オタンティック}正真正銘なるもの」への渴望と深く関わったものである。そこで、まず、夏男における「^{オタンティック}正真正銘なるもの」への渴望と、彼の「^{デザンガジュマン}政治的離脱」の問題の相互作用を呈示する必要がある。

II.2.1 ^{アイデンティティ}職業的自己同一性の「あいまいさ」という設定

「喝采」の物語全体にわたって一貫して漂っている雰囲気は、「^{オタンティシテ}正真正銘性」を奪われ、頹廢状態に陥った、あえて言えば「荒地」としての50年代後半の日本社会のそれである。もとよりこの作品には、文学的な^{リアリズム}現実主義というより、悲劇と喜劇を絡み合わせたスタイルによる現状の意識的歪曲、一部のモチーフの余剰とあってよいほどの反復、そして一連の誇張したイマージュをとおして表象するという意味のグロテスクなパロディーとしての戦略を見て取ることができる。

「^{イノ}非・^{オタンティック}正真正銘」な社会の雰囲気をかもし出すうえで導入される一つのグロテスクな仕掛けは、物語に出てくる作中人物の大半が異性愛者であるだけでなく、同性愛の売春・娯楽業で生計を立てる娼婦・男娼・「ヒモ」・(ゲイ・クラブの)「マスタア」、そして、その売春・娯楽業の顧客としての滞日の外国人となっていることにある。また「外人バイヤー」など売春業界に属しない残りの作中人物も、(外国の大使館の)秘書や運転手、給仕、店員、(外国人夫婦の住っている家の)女中など、主に滞日西洋人に奉仕する低い社会階級の人々ばかりであり、このことは物語のセッティングとなっている「日本」に「(新)植民地」的な空気をもたらしている。

しかし、それよりもっと効率的に「^{オタンティシテ}正真正銘性」を奪われた、頹廢状態の社会環境の物語内的な雰囲気生成に貢献する仕掛けは、作中人物のいとなんでい「職業」やそれとの相関関係における作中人物の職業的な^{アイデンティティ}自己同一性のあいまいさという設定なのだ。「喝采」の作中人物たちは、一つ特定の職業に就いてはおらず、その職業の^{オタンティシテ}「本物さ」を相対化し、その職業のそれなりの「^{オタンティシテ}正真正銘性」をあいまいにするような副業、あるいは一連の副業を併せ持っていることが、徐々に明らかになってくる。主人公や作中人物のいとなんでい「仕事」ないしは「アルバイト」のグロテスクな「奇妙さ」・^{イデオシクラー}「特異性」というテーマが、デビュー作「奇妙な仕事」(1957年5月)やそれに次ぐ「死者の奢り」(1957年8月)を始めとした最初期の大江文学の独創性の一部をなしている。

「喝采」においては、例えば夏休みの間に家事の世話をするために雇われた康子は、単なる女中ではなく、「三箇月ほどずつ日本に滞在して《家庭的な》生活をこころみたがる外人のバイヤー」を相手にする娼婦である。それだけでな

く、物語の終局の段階に至って、彼女が実際のところ、「男同士」の「愛人たちと三人ひとぐみでくらす種類」で、「男たちの愛を傍からたすけたり、疲れた片方のかわりにたのしませたり」し、「不能と寝たってちゃんときまりをつける」特異な技能を併せ持った娼婦であることが判明する。

さらに、「本郷の」大学生の学生服を購入し、身につけることにより「擬似」の「学生」になろうとする「商売女の相談相手」＝「ヒモ」を職業に持つ「男」と呼ばれる作中人物、ないしは、外国人相手の同性愛の「^{メイ}情^{ミス}夫」兼「学生」である主人公の夏男も、自らの社会的な位置の「^{ステークス}正真正銘性」が周りの「仲間」のみならず、自分自身によってすら認められない、それが奪われた人物として布置されている。

II.2.2 ^{アイデンティティー}性的自己同一性と^{アイデンティティー}政治的自己同一性の交叉——「学生」たりえぬ「ヒモ」と「男」たりえぬ「学生」の遭遇

例えば、「ヒモ」＝「男」の挿話を例に出そう。「ヒモ」＝「男」は物語の冒頭部に登場し、学生服を購入する方法を、不意に呼びとめた夏男に相談してくるのだが、それゆえに、この「男」は一見「学生」であるかのような印象を読み手に持たせる。しかし、実際のところ、彼は、「商売女の相談相手をやっているヒモ」であり、彼の「女」が学生の服装、特に、本郷の大学生の服装をすすめるので、そのような学生服を購入したい旨を説明する結果、主人公夏男と読み手は彼が「本物の」「学生」ではないことを知る。

夏男が「男」の古着を売っている店に案内したところ、「男」は、学生服と学帽を試着するが、鏡に反映する姿に不満を抱く。ついに、学生服が体に似合わない判断し、購入するのを断念してしまう。

古着屋の店先に立ちどまり、夏冬おかまいなしにつるされている学生服と帽子とを夏男と男とは見つめた。

「ずいぶん沢山あるな」と男はぼんやりした様子でいった。「卒業して行くとき売らなんでしょう？」

「ええ」と夏男はあいまいにいった。

男はそのなかの背ぬきのしてある上着をえらんだ。そして夏男と店の男のいる前で着てみようとした。シャツを一枚ぬぐと男は貧弱で汚らしい裸になった。その脇腹をひそかなむずかゆさをひきおこすやり方で汗が流れていた。男はボタンをきちんとかけてから夏男にきまり悪そうな

薄笑いをみせた。かれは小使いか駅員のような感じで顔色が青ぐろくかわってみえた。

「似合うものじゃないな」と男はいい、ゆっくりボタンをはずして再び裸にかえった。(中略)

「ああ学生さんどうもありがとう」と男は夏男にいった。「服を買うのをよしますよ」

古着屋の男はむっつりして黙っていた。夏男と男はそのまま電車道へひきかえした。

「ああいうものを着ると尻まで汗びたりになる」と男はいった。「じゃどうも、ありがとう。女にそういいますよ」¹¹³

こうして、「喝采」の冒頭部においては、上記の引用文に見られるような「あいまい」で「非・正真正銘」な色合いが濃厚に書き込まれている——そして、言うまでもなくそのような色合いがじわじわと物語全体へと拡大していく。「学生」になろうとする「商売女の相談相手をやっているヒモ」、その「ヒモ」が異常な感心を寄せる「本物の」学生たちが卒業して行くときに売った、着古された学生服、そして、「本物の」学生のみを相手にする正門の「洋服屋」とは質を異にし、「和風の門」を出てから二人が入ったセカンドハンドの(=本物ではなくなった)学生服の「古着屋」……こうした「非・正真正銘」な環境が二人の作中人物に喚起しているのは「正真正銘性」への渴望であるが、この場面において二人の「男」それぞれが、自分には欠落し、相手には備えられていると思いついた特質・性質に魅惑されている。先にも述べてきたように、「男」の欲望の対象は夏男の「学生」としての社会的位置に孕まれた「正真正銘性」であり、夏男が「男」において憧れている「本物の」特質は「男らしさ」の感覚である。しかし、実際には夏男が「男」に見いだした「正真正銘性」に対して抱く欲望にもまた、その「男」の「非常識な」申し出の「偽物性」が潜んでいるのである。

男はいちおう夏男に自分の申し出を聞いてもらおうと、それがまったく常識的なことを頼みでもしたように、平然として黙ってついてくるのだ。それは男らしい好もしい感じだった。¹¹⁴

「男らしい好もしい感じ」という言いまわしにすでに「喝采」における主要な

¹¹³ 大江健三郎、「喝采」、9頁。(傍点は引用者による)

¹¹⁴ 同上書、9頁。(傍点は引用者による)

モチーフとしての「同性愛」・「男色」を髭鬚とさせるような仕掛けが内包されているが、先の引用文においても見てきたように、学生になろうとしている、「ヒモ」を「本職」にしている「男」が、古い学生服を「夏男と店の男のいる前で着てみよう」として、「シャツを一枚ぬぐと男は貧弱で汚らしい裸になり、「男らしい好もしさ」が奪われた、文字通りのカッコつきの「男」に還元されてしまう。夏男の憧憬の対象であった、その「男」の「男らしさ」は、「男」が「地下鉄の駅の方へおりて行くのを見おくる」時点で、ついには滑稽の対象へと後退し、夏男が声をたてて笑う展開となる。

先に取り上げた挿話においても主要なキーワードとなっている用語が「男」であることはあえて言うまでもない。夏男が「ヒモ」＝「男」の「男らしさ」に魅惑されるのは、夏男がリュシアンというF大使館に勤務している40歳の「男色家の外交官」の「情夫」であり、自分に欠落している「男らしさ」へ欲望を抱いているからである。

50年代後半の日本の文脈において「学生」といった自己同一性・社会的位置に「正真正銘性」を与えるのは、その「政治」との関わりである。第一章でも指摘したとおり、砂川反米基地拡張闘争（1955～57年）を主導したのが、共産党、社会党ないしは労働組合ではなく全学連であったことを想起すると、「学生」が当時担った社会政治的な役割は現在とは比べられない程影響力のあるものだった。当時「学生」とは、単に大学で学業を修めるだけの人たちではなく、自国や、世界の政治運営に質的な変化を与えるうえで「参加」する権限を積極的に行使する社会階級を意味していたのである。「ヒモ」を職業に持つ「男」が、「学生」になることに深い憧憬を抱くことには、そのような「正真正銘性」のイメージが放つ魅力の作用があるのだ。しかし、夏男の「学生」としての「職業的」な自己同一性の「本物さ」は、「学生」の「仲間」には認められていない。夏男の屈辱的な体験が小説で次のように綴られている。

かれは教室のいちばんうしろの席に寝そべって、同じクラスの学生たちがかれについて話すのを聞いたのだ。あいつは、フランス人にやしなわれて一緒に寝てるんだ。どういうふうにするか知ってるか？とにかくあいつが痔を悪くして、その小父さまに治療費まで出させていることは確かなんだ。まあ、厭ね、わざわざ同情に満ちた声を出した女子学生がいうのだ。あの方は、本物のフランス語をおそわるために同じ部屋でくらすしてるのよ。本物のフランスと接触するためといってもいいわ。本物のフランスとお尻で接触するの？そして感情を昂ぶらせた笑い。かれは体をおこし猛然とその学生たちにたちむかって行ったか。かれは屈辱にまみれて唇をかみしめ、軀をかたくしてじっと寝そべったまま、そ

これらの学生たちが教室を出て行くのを待っていたのだ。¹¹⁵

この引用部分は、夏男がリュシアンメイル・ミストレスの「情夫」であることを学生たちが読み手に露呈する場面である。女子学生によるこの批判に、「政治」と「性」が絡み合わされていることに注目すべきである。50年代後半における「学生」というカテゴリーは濃厚な政治的色彩を放っているものであったが、ここで女子学生は「性」を夏男の政治的な立場を批判するための手段にしている。すなわち、女子学生の批判的的に曝されているのは、夏男の「同性愛」そのものではなく、彼のリュシアンとの「接触」による「政治的な離脱」デザンガジュマンなのである。「性」は、背景にあり、「本物の」フランス語・フランス文化に魅惑され、「中心指向」的な「文化帝国主義」¹¹⁶という一種の権力装置によって捏造された「幻想」の「正真正銘性」に魅惑され、それに対する「批判的な距離」を完全に失った「周辺」の国の「学生」に向けられた辛辣な風刺しんらつに用いられているにすぎない。

「見るまえに跳べ」以降の作品において大江がそれまで扱ってきた「監禁状態」、「閉ざされた壁のなかにいる状態」というテーマを放棄し、政治的な力関

¹¹⁵ 同上書、12頁。(傍点は引用者による)

¹¹⁶ レトロアクティヴ 遡及的に見て、1958年の「喝采」の著者として的大江健三郎の、一種の権力装置として作用する文化帝国主義の日本社会における支配力に対する感心と警戒心は、この小説よりほぼ半世紀後の2002年に、エドワード・サイード宛に書いた書簡においても明らかである。大江によれば『文化と帝国主義』(サイード著)は、文化帝国主義という権力構造を暴き出すものであり、大江に当時の日本のアメリカ合衆国との文化的な力関係のありようを考えさせている。アメリカの文化帝国主義は、それに「進んで吸収されようとする」日本社会が、アメリカの中近東の「第三世界」の国々に対する帝国主義的武力行使に協力する日本政府を支持することに多大に貢献する宣伝装置として機能する。

「すでに雑種ハイブリッド的で、異種混交ヘテロジニアス的で、国境を横断し、こまかくされてゆく文化の時代が来ている。その時どうして、アメリカ人の文化のアイデンティティーと国家的アイデンティティーがひとつになり、巨大な暴力と手をたずさえて、世界を支配しているのか？

あなたは、あの本でそのように課題を提示されました。それはまだ、湾岸戦争直後のことです。

ところが、いまアフガン戦争のただなかの日本人は、アメリカの文化帝国主義に、希望と不安ぐるみであれ、進んで吸収されようとしています。確かに、この間までのジャパン・パッシングは西側から消えて、経済の混迷に苦しみながらも日本は、アメリカの政治と文化の二元性にそのまま従ってゆくことを二十一世紀の生き方としていたようです。いちはやくブッシュ交戦路線に全面的な参加を申し出て、わが国の憲法の抵抗力をなくしにした[小泉純一郎]首相は、いまのところ国民に支持されています。」(大江健三郎、「エドワード・W・サイードとの往復書簡」、『暴力に逆らって書く』、朝日新聞社、朝日文庫、東京、2003年、267～268頁。)

係をヴィヴィッド且つ衝撃的に表現する「意図」を実行させる上で、「性」のイメージを「方法」にし、このような「性の方法化」が『われらの時代』で小説全体を貫いているテーマとして活用されたことについてはすでに指摘した。「喝采」のこの部分でその「小説の方法」が物語内的に「露呈」されているのである。

ここで「^{オタンティック}正真正銘」なものとして位置づけられている「異性愛」的な性的自己同一性＝「男らしさ」のイメージも、「学生」という職業的^{アイデンティティ}自己同一性も、夏男の「政治的離脱」を浮き彫りにするうえで利用されていることが判然とする。換言すると、ここで問題視されているのは、夏男の^{アンガジュマン}「政治的な参加」にかかわる「機能不全」なのである。そして、夏男の「政治的離脱」が物語内容のレベルでは「性的」なイメージをとおしてアレゴリー的に表現されていることが彼の康子との異性愛的な性交渉の成功の直後の場面で判明する。

康子は、雇われた翌日、夏男とリュシアンを「安料理店」に案内する。料理店で、「外人むきの場所」につれていこうとリュシアンに話かけてきた「隈どりをしたように眼のまわりの黒い男」の執拗さに立腹し、夏男はその男を叱りつける。リュシアンが夜勤のため店を去った後、二人について「この御姉妹は、おとなしく坐っているね」「妹さんがとくにね」と夏男のことを指して言ったその「男」に怒った夏男は殴りかかるが、逆に殴られてしまう。帰宅してから、夏男の怪我に対してだけでなく、異性愛者に対する「不能」と「同性愛」という「三年もまえからの痼疾」をも治癒する救済者に康子は変身する。¹¹⁷

康子は黙ったまま夏男をベッドにつれて行った。首の痛みを刺激しないで横たわることはなかなかの難事だった。(中略) それから康子はそのままベッドにもぐりこんで来た。(中略)

夏男は恐慌にとらえられて震えはじめた。(中略)

「おれにはできない」とかれは羞恥にほてりながらいった。「おれは女と寝ることができない」(中略)

「おれは男色だ、あいつのいうとおりに、おかまやろうだ」とかれは胸をつめつける哀しみにあえぎながらいった。¹¹⁸

そして、康子が夏男に性交渉を促し、夏男が不能に陥らず異性との性交渉に

¹¹⁷ 篠原茂が指摘したとおり康子は後の作品である『個人的な体験』に登場する火見子の母性的なイメージと重なり合った存在なのである。(篠原茂、『個人的な体験』、『大江健三郎事典』、森田出版、東京、1998年、49頁.)

¹¹⁸ 大江健三郎、「喝采」、17～18頁。

成功したことに解放感を抱く場面が続く。

毎夜リュシアンルシアンの躰にくみしかれて、快樂のために女のようにすすり泣いていたおれが、いま男としてこいつを愛したのだ。おれは立派にそれをやったのだ。ほんとうに勇気を出すだけでよかったのだ。夏男は嗚咽におそわれ肩をなみうたせてそれにのめりこんでいった。かれは自分が三年もまえからの痼疾こじけから回復したところであることを感じていた。そしてそれに付随する数知れないコンプレクスからまったくときはなたれているのを感じていた。かれは康子の、おだやかなほほえみをうかべた眼に、むせびなきながらくちづけた。康子のかれの頭をゆっくりした腕の動作でなでてくれていた。¹¹⁹

ここでは夏男が「男」によって暴力をふるわれたばかりでなく、「おかまやろう」と罵られ侮辱されたことを読み手に想起させるが、この暴力的な体験は、あたかも夏男の「男」としての「再生」、「男らしさ」を回復することによる「イニシエーション」のための過酷な「試練」だったのではないかと考えられる。¹²⁰ 同性との「暴力」と「連帯」への「試練」、そして異性との「性交渉」の体験といった「通過儀礼」により成就した「イニシエーション」を契機に夏男は「男らしさ」を「一時的」に回復するのである。

「できるわよ、ぼうやにだって」と康子は声をひそめてつぶやきかけてきた。「ほんとうに、ぼうやも立派にできるじゃないの。あんたは男よ」
「おれは男だ」と夏男はむしろ自分自身のなかにかすかにのこっている臆病なためらいの芽をひねりつぶすためにくりかえした。「男らしいことのできる人間だ」
「わかって良かったわね、おめでとうということにするわ」と康子がいった。
「拍手喝采」と夏男は康子の汗ばんで熱い胸に片頬をうずめて幸福にいった。¹²¹

¹¹⁹ 同上書、18頁。

¹²⁰ その男が夏男の救済＝「オタンティシテ正真正銘性」の（再）獲得に貢献したことが後に運転手によって夏男と読み手に報告される。『あいつは、あのあたりの地まわりでは名がとおっているんだそうです』運転手が雄辯にいった。『あなたを車へ運び込むとき手伝ってくれましたよ』。(同上書、16頁。)

¹²¹ 同上書、18～19頁。

また先に引用した部分において、喪失した「正真正銘性」を文化帝国主義の「本物さ」に求める夏男のありさまを、「性」的な言説をとおして、しかも「政治的」な女子学生に風刺させるという設定が、全学連に見られた男性中心主義的な言説のパロディー化であるという仕掛けを見逃すわけにはいかない。フランスのアルジェリアの入植者階級出身の小説家・哲学者アルベール・カミュのキーコンセプトとしての「男の美学」を基軸とした「英雄主義」は、西ヨーロッパの新左翼やその日本における対応物として理想化された全学連および共産主義者同盟＝ブントなどにも見られ、後に、フェミニズムから厳しい批判を浴びることになる問題点であったことは大嶽秀夫が指摘するとおりである。このことに関して大嶽は次のように述べている。

運動にも参加したある研究者によれば、英米の運動もフランスの作家カミュなどの影響を強く受けており、彼の「実存的叛逆」の主張を体現するものであったという。(中略)日本も同様であったことは後に詳しく述べる。それ故、彼らの直接行動主義はアドホックで自発的(したがって不安定)なものであり、組織への帰属とは異質なものであった。ここでも実存主義的「決断」「選択」の理論が認められる。(中略)この実存主義的心情は、組織や規律への反発を表現しているし、同時に(ともしればくじけそうになる)不条理な暴力に立ち向かう勇気をエリート主義的、貴族主義的な抒持、誇り、高貴さ、品位、一言で言って「男の美学」によって与える役割も演じていた。この意味では、歴史上の他の革命運動と同様、あるいはその伝統を引き継いで、新左翼運動も「男らしさ(マスキュリニティ)」を強調する傾向が濃厚で、それが後にフェミニズムから厳しい批判を受けることになる。¹²²

こうした「男の美学」の言説のパロディー化は、女子学生の挿話に付け加えて、夏男の不能を「一時的」に治癒した康子の「偽善」に満ちた言葉遣いにおいても展開されている。夏男の「政治的な参加」の問題に関する考察を進める前にここで押さえるべき点は、「喝采」という短編小説において大江が、西欧の新左翼のみならず、全学連をはじめとする日本の学生運動における「男性中心主義」的な傾向に、後にフェミニズムが向けることになった批判を先取りしていたということである。

¹²² 大嶽秀夫、「新左翼運動の誕生から『ポストモダン型』社会運動へ」、『新左翼の遺産』、17頁。

II.2.3 物語の記憶の原点としての 1955 年と夏男の「不能」

この段階での、夏男の不能やリュシアンへの同性愛的な執着＝従属を捉える「三年もまえからの痼疾」という表現は、この小説に^{ほいたい}胚胎された歴史認識を發揮するうえで重要な指標ともなっている。「喝采」が掲載された 1958 年を基準にすると「三年まえ」という表現が指し示しているのは、1955 年である。

1955 年は、世界の権力構造における新たなカテゴリーとしての「第三世界」の形成期を背景に、日本の学生の「^{アンガジュマン}政治的な参加」の問題を扱う「見るまえに跳べ」と「喝采」という最初期小説の物語内容のレベルにおいて重要な歴史的な時点として布置されている。「見るまえに跳べ」の分析において見てきたように、1955 年は、日本の学生にとって極めて重要な、一定の「紀元」となった年であるとさえ言える。

1955 年は、日本に限らず世界的な規模において「^{オタンテイシテ}正真正銘性の喪失」の年、そして、新たな「^{オタンテイシテ}正真正銘性の探求」が始まった年として位置づけることができる。例えば、ソ連は、第二次世界戦後、世界各国の左派知識階級によってアメリカ合衆国や西ヨーロッパ＝「第一世界」に取って代わる「^{オタンテイック}正真正銘」な「^{アナザー・ワールド}別世界」＝「第二世界」として神話化されたにもかかわらず、そうした「^{オタンテイシテ}正真正銘性」を喪失しつつあった。（言うまでもなく、ソ連の「^{オタンテイシテ}正真正銘性の喪失」は、一年後の「スターリン批判」やハンガリー侵攻事件を機に強固なものとなった。）そしてこの「第二世界」に求められた「^{オタンテイシテ}正真正銘性の喪失」は、（1949 年の中国革命の延長線上に立つ）1955 年のバンドン＝アジア・アフリカ会議に象徴される、新しい「^{オタンテイック}正真正銘」な「^{アナザー・ワールド}別世界」＝非同盟の「第三世界」の建設という「^{オタンテイシテ}正真正銘性の探求」の運動を惹起したのだ。さらに 1950 年前半にイギリスとフランスにおいて萌芽した新左翼運動＝*New Left*＝*Nouvelle gauche* が、バンドン会議によって活性化され、「第二世界」が喪失しつつある「^{オタンテイシテ}正真正銘性」を、「第三世界」という非同盟の社会主義の「世界」の建設を意図する運動に求めるようになったのである。

このような「^{オタンテイシテ}正真正銘性の喪失」と「^{オタンテイシテ}正真正銘性の探求」という現象は、日本の文脈においても発現した。第一章でも述べたとおり、保守合同による「五五年体制」と高度経済成長期が開始したのはこの年においてである。——サンフランシスコで、1951 年に「日本国との平和条約」と同日に署名され——1952 年に執行された「日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約」＝「旧安保」の締結以降選択した「新植民地主義」の極東における主な「協力者」＝「同盟国」としての日本の位置や、その「あいまい」で「^{イノタンテイック}非・正真正銘」な「^{アイデンティテイ}職業的自己同一性」は、「五五年体制」を契機にさらに強固なものとなった。日本のこの方針は、「西洋」の二大国に主導された「第一世界」と「第二世界」に対する「非同盟」主

義を唱えたバンドン会議（1955年4月）が体现した「第三世界の精神」とはかなり対照的なものであった。日本におけるこうした「非・正真正銘イノタンテイック」な状況と、共産党による「六全協」（「第六回全国協議会」）「民族解放民主革命」路線、つまり、武装闘争方針の放棄の決定は、高度経済成長期の開始による日本社会の「ブルジョワ化」に対応するものだった。

とりわけこの「六全協」による「方向転換」こそが、日本学生に「正真正銘性オタンテイシテの喪失」という感覚を喚起した。日本戦後の歴史において当時まで「学生党员」として重要かつ大衆的な闘争に「政治的な参加アングージュ」した全学連の共産党からの「離脱デザンガジュマン」という結末をもたらした。しかし、全学連によるこの「離脱デザンガジュマン」や自立化の試みは、新たな「正真正銘な自己同一性オタンテイック アイデンテイテイー」建設の試みであったとも言える。

「自分が三年もまえからの痼疾から回復したところであることを感じ」、「そしてそれに付随する数知れないコンプレクスからまったくときはなたれているのを感じていた」という夏男は、1955年という「紀元」以前の時期に「政治的な参加アングージュ」をした日本の学生の姿において一定の「正真正銘性オタンテイシテ」のモデルを見出している。つまり、夏男は1955年以前の三年間（1952～55年）における学生党员が「第三世界」の「民族解放民主革命」に「参加アングージュ」しようとした時代を理想化しているのだ。

「喝采」の主人公が理想化しているところの1955年以前の「政治的な参加アングージュ」の時代を生み出したのは、あえて言えば日本共産党における「アメリカニズム」としての「政治的離脱デザンガジュマン」に向けられたソ連による批判である。「第三世界論」を主な原則の一つとして掲げ、西欧や日本の新左翼の形成過程において「スターリン批判」を行った結果発生した一連の出来事の影響が「政治的な参加アングージュ」の時代を生み出すことに決定的であったことにはすでに述べた。この現象は、「スターリンに対する批判」であったのだが、スターリン自身が日本共産党に寄せた批判そのものが、短期間のみにおいてではありながら、日本の学生や労働者に「反新植民地主義」的な意識をもって、「従属国の革命としての民族解放」に「政治的な参加アングージュ」をさせることに大いに貢献したのである。

スターリンは、ソ連や東ヨーロッパの衛星国の共産党・労働者党情報局であり、1956年に解散されることになったコムインフォルム＝*Communist Information Bureau*の機関紙『恒久平和と人民民主主義のために』の1950年1月号に掲載された「日本の情勢について」と題する文章で「占領軍の解放軍規定」と「平和的な議会主義戦略」¹²³といった野坂参三（当時共産党衆議院議員）の政策路線

¹²³ 「占領軍について、野坂は、日本共産党の目的を阻害しないばかりでなく、反対に、占領軍は、その使命を遂行しつつ、日本の民主化に貢献するであろうという意見を述べている。」（岩崎

を酷評したのである。¹²⁴この批判を受けた徳田球一書記長は、まずこの批判を「帝国主義者によるデマと一蹴してしたが、批判文が公式に日本に到着するや」¹²⁵、『『日本の情勢について』に関する所感』を掲載した。この論稿において徳田は、「はいき拝跪の姿勢」を示しながら、それを「人民大衆の受け入れがたい」ものとして否定しようとした。しかし、革命直後の中華人民共和国の『北京人民日報』の社説「日本人民解放の道」においても日本共産党に対する「スターリンによる批判」が支持されると、これに「所感を表明した」「所感派」としての指導部は、「国際派と呼ばれる部分を残して地下に潜行」し、中華人民共和国に渡った。引き続き、地方では山村工作隊、都市部では1952年半ばに結成され、「朝鮮戦争下での軍需産業施設などに対する武力闘争を遂行した」「遊撃隊」¹²⁶の形式を取った「民族解放民主革命」路線への方向転換が行われた。このことは、「国際派・所感派」としての内部的な分裂をもたらすとともに、GHQ=連合軍最高司令官総司令部との「ハネームーン蜜月」をも終結させた。¹²⁷

ここまで援用してきた岩崎稔の「日本革命の挫折」によれば、当時日本共産党は、「経済的、軍事的にアメリカ帝国主義に支配された半植民地状態にあり、日本の保守政権と大企業は買弁、売国資本であると」戦後日本の現状を再定義しており、「それに対して民衆は愛国闘争に立ち上がらなくてはならない」¹²⁸という戦術を布告したのであった。このような原則に基づく「民族解放民主革命」方針は、共産党の「四全協」（1951年8月）で提起され、「五全協」（同年10月）において決議されたのであった。

夏男が、暗示的な形でありながら、彼の「不能」とフランス人外交官との「同性愛」関係＝「三年もまえからの痼疾」に対比し、それがあたかも一定の解毒剤でもあるかのように理想化しているのは「四全協」と「五全協」の「革命的な精神」である。また1955年は「半植民地状態」に置かれた日本を「ときはな

稔、「コミンフォルム批判と反米軍事闘争」、「戦後日本革命の挫折」、岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 1 40・50年代』、紀伊國屋書店、東京、2009年、124頁。）

¹²⁴ 「野坂参三は、日本人民に向かって、平和的方法で国家権力をかちとるために、ブルジョア議会を利用できると説いている」。(同上書、125頁)

¹²⁵ 小島亮、『ハンガリー事件と日本：一九五六年・思想的考察』、東京、現代思潮新社、2003年、133頁。

¹²⁶ 岩崎稔、「戦後日本革命の挫折」、127～128頁。

¹²⁷ 共産党の「方向転換」に対するGHQ・政府からの反発が、無情で大規模なレッド・パージであったことは周知のとおりである。

¹²⁸ 岩崎稔、「戦後日本革命の挫折」、126～127頁。

つ」＝「解き放つ」＝「解放」するために結成された「山村工作隊」や「遊撃隊」が担った「民族解放民主革命」による「民族解放路線」が放棄された「年」であった。上記の引用文で、「三年もまえからの痼疾から回復した」、「ときはなたれている」という二つの言いまわしが同じ段落に包括されていることが、この年の記憶を想起させている。「見るまえに跳べ」において始めて大江の最初期小説の記憶の原点とされた「1955年」は、「喝采」においてその1955年以前の三年間（「政治的な参加」の三年）と1955年以後の三年間（「政治的離脱」の三年）といった期間を踏破する形でさらに深められている。

先に触れたとおり、1955年に始まった砂川反米基地拡張闘争における警察官の暴力行使に衝撃を受け、かつ学生組織の指導部の無責任な態度に違和感を抱いて「政治的な参加」ができなくなった日本の一般の学生のストーリーである「見るまえに跳べ」において、「政治的離脱」のモチーフはすでに扱われていた。「見るまえに跳べ」と、その延長線上にある「喝采」という両作品の物語世界における記憶の原点が1955年であることをここであらためて指摘する必要がある。

「六全協」が開催されたのが1955年の7月（という真夏）であったことを考慮すると、物語言説レベルにおける、「夏男」という主人公の固有名の選択が意識的戦略によるものであったことが判然とする。この固有名は紛れもなく「タイプ名」であり、この「タイプ名」の設定においてすら「政治」＝「夏」と「性」＝「男」の意味作用が意図されているのだ。

物語言説のレベルで考察すると、「疑似」の「男」である主人公に与えられた「夏男」という「固有名」も、「ヒモ」という「贗」の「学生」に与えられた「男」という一般名と同様にアイロニー的な仕掛けなのである。二人は、「喝采」において1955年7月の「正真正銘性の喪失」の雰囲気を体現している。

II.3. 「性愛の三角形」と「正真正銘」な自己の形成過程

異性愛的な不能に苛まれる主人公夏男は、政治的に不毛な「荒地」としての50年代後半の日本＝「政治的離脱の時代」と、1952～55年の「五全協」の『革命』／『政治的な参加』の時代」という二次元の間を往復する「綱渡り」を行っており、両者を関連付ける機能を果たす。そして夏男は、暗示的な形でありながら、1952～55年の「五全協」の学生たちを一定の自己同一性の役割モデルにしている作中人物として構想されている。このことについては後述する。夏男は「学生党员」の過去の「革命」活動に、そして他方ではフランスやフランス文化（帝国主義）を体現するリュシアンという外国の大使館に勤務する外交官という他者に「本物の」自己同一性の役割モデルを求めるのである。

「喝采」は、夏男という青年の「男らしさ」と「大人の世界」への「イニシ

エーション」の試みとその挫折の物語、すなわち「反・成長小説＝*anti-bildungsroman*」として位置づけることができる。(この点においても「喝采」は、「見るまえに跳べ」と内部的な繋がりを持つ。) 主人公は「オタンティック正真正銘」で「アイデンティティ男らしい」自己同一性のモデルを探求し、ひたすらそのモデルを模倣することによってそれと同一化することを試みる。しかし夏男のこのような自己形成の過程 (*self-making process*) は、冒頭の学生服を試着し、「学生」になることを渴望した「ヒモ」＝「男」の挿話に見てきたように徒労に終わり、挫折する。この挿話は、後に挫折に終わる夏男の自己形成過程を予告する前説法的な仕掛けなのである。

*

「見るまえに跳べ」において「ぼく」と良重とガブリエルの三人の間における異性愛的な三角関係は、二人の男が互いに抱いている暗示的な同性愛的な欲望に脅かされており、このことが、時には、良重に癩癩を喚起していることに第一章で触れた。異性愛的な関係と同性愛的な関係が交叉する性愛の三角形は「喝采」でより複雑な形式で再び登場する。以下に示すとおり、大江は、この作品において、「ぼく」とガブリエルの間における暗示的な、隠された同性愛的な欲望と、「男同士の絆」のモチーフを、明示的なものに反転し、深めている。大江は「喝采」で「同性愛」を「男同士の絆」＝ホモソーシャルのテーマへと展開することを試みているのだ。

夏男という青年の「男らしさの世界」＝「大人の世界」へのイニシエーションの試みとその挫折をめぐる考察を推進するうえで、イヴ・K・セジウィックの *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire* = 『男同士の絆 : イギリス文学とホモソーシャルな欲望』¹²⁹に展開された「エロティック・トライアングル性愛の三角形」における「模倣」と「同一化」をめぐる理論が有効な観点を与える。

西洋における「子供」の性的自己同一性の形成過程において、「エロティック・トライアングル性愛の三角形」というパラダイムは、重要な役割を果たす。セジウィックによれば、ルネ・ジラルールの初期の著作『欲望の現象学』におけるヨーロッパの小説に頻出する「エロティック・トライアングル性愛の三角形」のパラダイムは、「通俗的な知恵」の図式化のみにとどまる

¹²⁹ セジウィック、イヴ、K.、『男同士の絆 : イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、名古屋、2001年 / Sedgwick, Eve, Kosofsky, *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press, New York, 1985年。

セジウィックはこの著作において18～19世紀の英米文学において顕著な現象として出現した「ホモソーシャル男同士の絆」というテーマをめぐる徹底的な分析によって、女性弾圧(そして時には同性愛者の弾圧)を中心にして機能する男性中心主義的なイデオロギーを暴き出した。

ものでない。このパラダイムは、「フロイトの、権力をもった父と最愛の母との間で幼児が自己を位置づけようとする過程を」示す「オイディプスの三角形」にもかなり依拠したものである。¹³⁰「性愛上の対立がいかなるものであれ、ライヴァル二人の絆は、愛の対象とふたりをそれぞれ結びつける絆と同程度に強く、多くの点で等価」であるというのは、ジラルルの「性愛の三角形論」^{エロディック・トライアングル}の要点である。そのことと「オイディプスの三角形」との関係をセジウィックは、リチャード・クラインの概括を援用して解説する。

(前略) 男児が正常な発達を遂げて異性愛者となるためには、「陽性」のエディプス段階を経なければならない。この陽性のエディプス段階とは、男児が異性愛者の役割モデルを発見するための不可欠な条件であり、具体的には男児が父と同性愛的同一化を、父への女性的従属を行うことである。この理論によると、男児が逆に同性愛者となるには、父が不在か、あるいは父との関係が疎遠であること、加えて、男児が異常なまでに極度な母との同一化を経て、その同一化で父の代理となることが必要条件として挙げられている。この図式から得られる結果は、二つの正反対なもの驚くべき中和作用であろう。すなわち、男性が異性愛者という(中略) 正常な発達を遂げるためには同性愛の段階を、逆に同性愛者となるには強度の異性愛的同一化を経なければならない。¹³¹

セジウィックは、ジラルルの性差に対する無関心な姿勢や、女性と男性の成長過程を「等価」なものとして位置づけることなどに由来する「対称性」の傾向を批判している。しかしセジウィックは「異性愛的自己形成→同性愛的な性交渉を抑制した同性愛的同一化」、「同性愛的自己形成→異性愛的な性交渉を抑制した異性愛的自己同一化」といった自己形成過程の指向性の有効さを否定しない。そしてこの構図は、夏男の「男らしさ」としての「正真正銘性」の「役割モデル」の探求、その役割モデルとの同一化による自己形成がなぜ成就されないかという問題を解説するうえで一定の観点を提供するのだ。ここではまず夏男の自己形成過程の展開を概観することが妥当であろう。

「三年もまえからの痼疾」という言葉遣いからすると、1955年において夏男が政治から「離脱」^{デザンガージュ}したと同時に、異性愛的な不能を患うようになったことであり、彼がリュシアン^{メイクル・ミストレス}の「情夫」になったのもこの1955年以後のことである。夏男が、リュシアンとかかわるようになったことは先に引用した「女

¹³⁰ 同上書、34頁。

¹³¹ 同上書、34頁。

子大生」が言ったとおり「本物のフランスと接触するため」である。夏男は、セジウィックが指摘するところの「父との同性愛的同一化と、父への女性的従属」をリュシアンに対して行うが、このことは、「男らしい」ものとの「同性愛的同一化」の枠内にとどまらず、同性愛的接触「そのもの」の形式を取っている。

夏男の自己形成過程が一旦、挫折に向かわざるを得なくなった理由として、女子学生の「本物のフランスと接触するため」に「本物のフランスとお尻で接触するの？」という批判においてもあらわされていたような「正真正銘性」の役割モデルに対する同性愛的な性交渉を抑制するといった「距離」の喪失があるのではないかと考えられる。

しかしながら夏男が西洋の宗教的価値観に支配される環境ではなく、「同性愛」を西洋ほどタブー視しない極東の国の日本において生まれ育ったことを考慮すると、セジウィックの西洋における「同性愛」のみを基準にする「性的自己同一性論」の「喝采」の分析のうえでの有効性の射程は、ここまでに限られる。

II.3.1 「元服」と夏男の性的自己同一性の形成過程

周知のとおり、前近代日本社会における一連の職業的共同体、とりわけ、僧侶の世界、武士階級、歌舞伎の世界や公家階級などにおいて同性愛に基づいた「男の絆」の制度があった。そして、このような職業的共同体に幼いころに弟子として受け入れられる青少年の「性的自己同一性」や「職業的自己同一性」の形成＝「イニシエーション」において、同性愛的な「接触」は抑制されたり禁圧されたりすることはなかった。そこで、世界における「同性愛」の伝統や制度を歴史的に概観するスティーブン・マリーの *Homosexualities—Worlds of Desire: The Chicago Series on Sexuality, Gender, and Culture* における武士階級の「同性愛」の制度＝「衆道」をめぐる理論¹³²を援用しながら「性的自己同一性」の形成過程における日本のケースの特殊性を取り上げることにする。これは、夏男の自己形成過程の挫折を分析するうえで必須な作業である。

キリスト教圏の西洋とは異なり、「支那」、朝鮮半島や日本列島のような仏教が支配的である東アジアの地域では、同性愛はタブー視されなかった。実際にはタブー視されるどころか、仏教圏では、寺院にはじまり、武士階級などにお

¹³² Murray, Stephen, O., “Samurai Boy-Love,” *Homosexualities—Worlds of Desire: The Chicago Series on Sexuality, Gender, and Culture*, University of Chicago Press, Chicago, 2000 年, 77～86 頁. (この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

いて同性愛が普及し、制度化されるまでに至ったのだ。日本の武士階級は、誕生した時点からつねに仏教の諸原理を尊重し、その「東アジアの女性嫌悪」や「ヒエラルキー」のような諸価値観を取り入れた。そして、寺院の師弟関係における根本的な構成要素である同性愛・ホモソーシャルの制度も武士階級における師弟の形成においてモデルにされたのであった。¹³³

寺院における師弟の絆は、武士階級に導入された段階で顕著な変貌を被った。例えば、寺院における年配の僧侶の同性愛の相手としての「稚児」は、武士階級の場合「若衆」へと変えられた。寺院に召し使われた少年であった稚児の年齢は11歳～16歳であった反面、若衆の年齢は13歳から～19歳、場合によっては20歳として定められるようになった。¹³⁴「念者」と呼ばれた年配の＝「兄分」としての武士が、「若衆」つまり、「元服」＝「イニシエーション」前の前髪立ちの「弟分」としての少年を教育するということは、武士道における主な義理であった。そして、若衆は、「本物」な武士になる道程において、念者の師事に「無私」に従うことが求められた。¹³⁵そしてこの無私の従属には、念者の「剣」のための「鞘」になるということに喩えられた同性愛の関係が中心的な位置を持っていた。

「喝采」の分析との関係にあたって、念者／若衆のホモソーシャルの絆においてももっとも注目すべきところは、念者の「男らしさ」のモデルとしての役割なのである。念者は、若衆の「職業的自己同一性」のみならず、「性的自己同一性」の形成においても一定の「役割モデル」となっていた。¹³⁶要するに、セジヴィックの理論において見てきたように、西洋の「子供」の性的自己同一性の形成過程では「父と同性愛的同一化」、「父への女性的従属」において性的接触が抑制されているが、前近代日本における武士階級のような職業的共同体の性的自己同一性の形成過程においては、それが抑制されなかつただけでなく、むしろこの過程における前提条件であったのだ。

II.3.2 西洋人の「念者」に求められる「元服」——夏男の自己欺瞞

夏男は「異性愛的自己形成→同性愛的な性交渉 + 同性愛的同一化」という方針を念頭に置いている。つまり、夏男はリュシアンを「念者」＝「兄分」に相当する存在として、そして、「本物の」「若衆」に近い年齢の自分自身を「若

¹³³ 同上書、77頁。

¹³⁴ 同上書、77～78頁。

¹³⁵ 同上書、82頁。

¹³⁶ 同上書、79～80頁。

衆」という「元服」＝「イニシエーション」¹³⁷前期の青年として想定しているわけである。夏男はリュシアンとの同性愛的な関係を、「男らしさ」という性的、そして「フランス文学研究家」という職業的な自己同一性アイデンティティーの形成＝「イニシエーション」を結実させるうえでの手段として考慮していたと言える。

女子学生が「あの方は、本物のフランス語をおそわるために同じ部屋でくらしてのよ。本物のフランスと接触するためといってもいいわ。本物のフランスとお尻で接触するの？」と、古典帝国主義国フランスの外交官の「情夫」メイル・ミストレスである夏男を批判していた。夏男が念頭に置いているのが、念者との同性愛的「接触」を媒介にする「念者＝兄分」アイデンティティーと同性愛的同一化、「念者＝兄分」アイデンティティーへの「女性的従属」をすることによって職業的自己同一性と性的自己同一性を獲得するという意味での「イニシエーション」＝「元服」であったことからすると、この皮肉な問いかけへの答えは「イエス」である。

さらに、夏男が自らの「正真正銘」オタンティックな性的且つ職業的自己同一性アイデンティティーへの「イニシエーション」のうえでモデルにしているのが武士階級の「元服」であることは、リュシアン・夏男・康子からなる奇妙な「性愛の三角形」エロティック・トライアングルの女性構成員である康子に対する夏男の（後に感心に変ることになる）嫌悪感からも明瞭である。先にも触れたとおり、女性嫌悪は、武士階級における「若衆と念者」のホモソーシャルな絆の根本的な要素のひとつである。

他方、夏男が前近代の武士階級特有の、「若衆」を「元服」へと導く指導者としての「念者」＝「兄分」の役割モデルを日本文化と無縁の（日本語すらできない）フランス外交官に求めることが示しているのは、彼のヨーロッパ文化に関する知識の未熟さである。夏男も、「見るまえに跳べ」の「ぼく」と同様な半知識人であると言える。

先にも指摘したとおり同性愛はキリスト教圏のヨーロッパにおいて倒錯としてタブー視されていた。それゆえリュシアンは、自国においてタブー視されている性行為に対する欲望を「周辺世界」において満たす「植民者」コロニアルの位置にいる。

つまり、夏男は、リュシアンとの「情夫」メイル・ミストレスと「客」の関係を、若衆と、

¹³⁷ 武士階級における元服は、そもそも中国古代の儀礼に倣った男子成人の儀式であり、公家、武家を通じて行われた。元服における「元」とは首こうべ、「服」とは冠かんむりの意味を指し、「儀式の中心核は、元服以前には童わらわとよばれて頭頂をあらわにしていた男児に、成年の象徴としての冠を加え、髪形、服装を改めることにあり、これを期に社会的に一人前の扱いを受ける。」そして、「本来、通過儀礼としての成年式自体は民族誌的にも普遍性をもち、起源もきわめて古いと考えられる」のである。（『日本大百科全書』、『日本大百科全書』+『国語大辞典—スーパー・ニッポニカ』 CD-ROM Windows 版）、小学館、東京、1998年）

若衆を「男らしい大人の世界」へと導き、職業的^{アイデンティティ}自己同一性の形成を指導する念者との関係同然のものとして誤解釈しているのだ。夏男の「本物のフランス」との接触による自己形成の企画が挫折に終わったのは主にリュシアン^{イノタンティシテ}の「男らしさ」の役割モデルとしての至らなさ、「男」としての「疑似性」に由来するのだ。

夏男の誤解釈とは異なり、リュシアンは夏男との関係を、念者と若衆のホモソーシャルな連帯関係としてではなく、性的（＝政治的）な支配関係として考慮する。リュシアンは、夏男が男らしく、「正真正銘」の自己を獲得し、自立することを望んではおらず、日本の一般の学生の一人である彼を「情夫^{メイル・ミストレス}」という下位の位置で維持することを意図しているのだ。

リュシアンは念者であるどころか、「見るまえに跳べ」におけるガブリエルと同様に、新植民地主義を擬人化する存在なのである。リュシアン^{デザンガジュマン}の物語内容のレベルにおける役割は、夏男の「保守主義」の根拠となっている「政治的離脱」という「現状」を「維持」することにある。リュシアン^{アングージュ}のこの政治的な「工作」において「性」は重要な手段となる。リュシアンは、夏男をアルジェリア解放戦争のような「第三世界」運動に関心を示さない「ノンポリ」の青年にすること、そして、アフリカやアジアにおける「植民地の問題」に関心を示し、抗議行動に、無効でありながら、「参加」している日本の「学生ども」から「隔離」させることを目論む。リュシアン^{かなめ}のこの欺瞞工作の要は、彼らの「性愛の三角形^{エロティック・トライアングル}」の女性の構成員、康子である。

II.4. 「喝采」の「第三世界論」

II.4.1 「海の向こう」に求められる「正真正銘性^{オタンティシテ}」

物語の記憶の原点が、（一連の同時代現象とともに）「六全協ショック」が経験された1955年である以上、政治運営に「参加^{アングージュ}」することによる「正真正銘性^{オタンティシテ}」を喪失し、「三年もまえからの痼疾」に煩わせられているのは夏男だけではない。夏男と同じ大学に通っている「政治的な」学生たちもその喪失の償いを捜し求めているのである。その意味で、なによりも興味深い点は、「正真正銘^{オタンティシテ}」なモデルへの渴望が、夏男において「第一世界」＝フランスへの憧憬、そして、同間の学生たちには、「第三世界」＝アルジェリア解放戦争への支援活動の形で発生することにある。リュシアンが、康子との最初の夕食の際にアルジェリア問題に抗議するために大使館に「政治的な参加^{アングージュ}」をしに来た日本人学生の話をする

場面で二つの異なる政治的な姿勢は顕在化する。

「植民地をなぜフランスが放棄しないか聞きにきたんだ」とリュシアンは笑いに息をはずませながらいった。「それで、おれがどう答えたと思う？」

「答えたの？親切に」

「植民地がなければフランスはやっていけない、日本だって四国をもっているじゃないかとおれはいったんだ」とますます笑いながらリュシアンはいった。「四国をね」

夏男はリュシアンを前にして憤激している学生たちの顔を思いうかべリュシアンにあわせて笑った。かれのクラスにも怒りっぽい若者たちがうようよいて、かれらは英国やフランス、アメリカにいたるまで、あらゆる国々の大使館へ声明文を持ちこむのだ。大使館の植こみへ投石してつかまった男さえいる。

「フランスの政治があいつらに、あの黄色の小男どもに何の関係を持つんだ」とリュシアンはいった。「現にフランス人のおれだって関係もなにもないんだ」

「みんな政治に熱中しているんだ」と夏男はいった。「とくにフランスの政治となると眼の色をかえるんだ」

「汚らしい学生ども、日本人の学生ども、自分の尻をなめるがいい」と歌うようにリュシアンはいった。「海の向こうを気にかける身分か」¹³⁸

日本の学生運動家が、共産党からの「デザンガジュマン離脱」の結果、喪失した政治的な「オタンテイシテ正真正銘性」の代替物を「海の向こう」に求めるようになったことが、リュシアンの人種差別的な口調で風刺されている。ここでの「英国やフランス、アメリカにいたるまで、あらゆる国々の大使館へ声明文を持ちこみ」、「大使館の植こみへ投石」という「怒りっぽい若者たち」の行動様式は幼稚なものにしか見えない。¹³⁹

他方、日本の「学生」の「海の向こう」＝「第三世界」への関心は、無媒介なものではなく、「第三世界論」を掲げ、スエズ侵攻やアルジェリア戦争に反対

¹³⁸ 大江健三郎、「喝采」、12頁。

¹³⁹ 例えば、「怒りっぽい若者たち」という言葉遣いは、「怒れる若者たち」(Angry Young Men)というイギリスの *New Left* の形成過程に大事な役割を果たした一群の作家への言及である。この文学運動は、イギリスにおいて、アメリカのビート・ジェネレーション運動とほぼ同時期の1950年代に発生したものである。

したイギリスやフランスの *New Left=Nouvelle gauche* を仲立ちにしていることにはすでに触れたとおりである。しかし、西欧の新左翼に対する模倣ミメティック・ディザイアの欲望に基づく「正真正銘」オタンテイックなモデルの探求が、学生たちの目を自国の問題から逸らすのではないかという危機感が、逆説的な形でリュシアンインベリアル・レスボンサビリティーの科白に登場するのである。「海の向こうを気にかける身分か」や「植民地がなければフランスはやっていけない、日本だって四国をもっているじゃないかとおれはいったんだ」というリュシアンインベリアル・レスボンサビリティーの言葉は、日本の戦前・戦中における「帝国責任」の問題を読み手に突きつけてくる。

例えば岩崎稔は「ガイドマップ 40・50年代」という座談会で「帝国責任」、言い換えると、大日本帝国の「植民地の問題」といった認識をめぐる記憶が日本の戦後表象において忘却されており、抽象的な「国民化」のイメージが形成されていったことを指摘している。つまり、終戦までに日本の領土であった朝鮮は、アメリカ合衆国の占領や国の分断によって、朝鮮戦争を経て80年代までに「暴力的な時代」に巻き込まれる展開となり、中国でも中華人民共和国の建国（＝革命）まで内戦は続いていったのであった。また日本が植民地支配の宗主国ではなかったにしても戦中占領していた、対英・対蘭反帝国主義的闘争を遂行したインドネシアや、対仏や後に対米民族解放戦争を行なったインドシナの問題¹⁴⁰は大日本帝国の植民地主義と深く関わっているのである。さらに「アジア各地で」、「コロニアリズムをめぐる非常に緊張した状況が、そして戦争状態が、戦中から戦後に連続してずっとあ」ったにもかかわらず、「日本の戦後表象というのは、そういう東アジア全体のなかの配置関係というのをすっかり欠落させて、硬く国民化した形で一九四五年八月十五日の経験をつくっていったのである¹⁴¹。

岩崎は、50年代の言説において「民族」の問題は「反米愛国ナショナリズム」の形で論じられ、そのことが、49年に革命を成就した中国人民のナショナリズムが、「民族たることの一つの模範として」考慮されたことを力説している。このことは、当時の日本の知識階級インテリゲンツィヤの言論活動において支配的な位置を占める姿勢であったが、岩崎に言わせればそこには一つの転倒があった。岩崎は次のように続ける。

自分たち自身が、帝国のコロナイザー（植民者）として破壊してきた

¹⁴⁰ このモチーフが「見るまえに跳べ」において登場することは、前章で述べたとおりである。

¹⁴¹ 岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一、「ガイドマップ 40・50年代」、『戦後日本スタディーズ 1 40・50年代』岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一、編著紀伊國屋書店、東京、2009年、14～15頁。

ものについての自覚がすぼっと落ちた後に、今度は逆に自分たちに欠如しているような、ナショナルな何かというものを考えていくときのモデルとして逆に一九四九年の中国があったり、あるいは朝鮮戦争下の朝鮮人民たちがあったりする。日本の知識人や左派のなかでは、朝鮮や中国の民衆の民族的主体性をモデルにし、またそれを謳いあげ、それに対する羨望が表明されるのです。その前に必要な手続きがあるにもかかわらず、ただちにそうした民族のレトリックに共鳴してしまう。こういうふうに、加害と被害、コロナイザーとコロナイズドという関係が入り組んだ形で四〇年代から五〇年代まで存在していて、この混乱状態が整理されないままにそのこと全体が忘れられていくようになるのだと思います。¹⁴²

「50年代前半」の「民族解放民主革命」を担った「五全協」世代は、1949年の中国革命の中国人や朝鮮戦争下の朝鮮人民の革命運動、そして「民族的主体性」を、自らの「^{オタンテイック}正真正銘」な「主体性」の形成の上での「モデル」にしたということになる。このような「第三世界論」的な、「男らしい」役割モデルとの同性愛的な同一化を仲立ちにする自己形成の試みを、大江は「喝采」における夏男の物語の流れや、リュシアンが言及したところの「植民地をなぜフランスが放棄しないか聞きに」行ったフランスの *Nouvelle gauche* の「第三世界論」をモデルにする学生たちの挿話において変形している。

例えば、夏男は暗示的な形で、党指導部の自画自賛としての「民族解放民主革命」という規定を中心にした「^{こうりょう}五一年綱領」や非公然軍事作戦文書『球根栽培法』に呈示される非現実的英雄主義的なヴィジョンに基づく「五全協」世代の革命運動に「役割モデル」を求めている。「五全協」世代の革命運動が、憧憬と模倣のみに基づく、実効性のない「偽物の」「革命」運動であったことは岩崎稔の認めるところである。「喝采」の批評的カテゴリーに踏まえて言うと、この役割モデルには「男らしさ」(=^{オタンテイシテ}「正真正銘性」)が欠落しているのだ。

II.4.2 新植民地主義の「欺瞞工作」の「作業員」としての康子

リュシアンの発言に表象されている見解（「海の向こうを気にかける身分か」）は、自己の「^{インベリアル・レスボンサビリティー}帝国責任」を抜きにした「^{アンガジュマン}政治的な参加」においては「^{オタンテイシテ}正真正銘性」があいまいになってしまうということをあらわにしている。ここで注目すべき点は、この口調と、夏男が帝国主義やその文化に従属すること

¹⁴² 同上書、14～16頁。（傍点は引用者による）

を「性差別」的な言説をとおして批判した女子学生の口調との類似性にある。正当で、論理的な観念に基づく批判が、その正当性を根底から揺るがすような差別的な文体をとおして行なわれることは、異化作用の一種であることに相違ない。

物語の終局の部分において夏男は、「^{オタンテイシテ}正真正銘性」を、彼の同胞である康子に見出すといった自己欺瞞に陥ってしまう。言い換えれば、半知識人としての夏男が「五全協」の「時代の精神」を見出しているのは、康子という娼婦においてである。

康子は、先に引用した箇所^{アンテイ・コムニスト}でリュシアンによる「日本人の学生ども」に対する人種差別的且つ反共的な嫌悪感の意を孕んだ言葉に、違和感を感じず、異議も申し立てない、夏男のスタンスを批判するような構えを示している。「海の向こうを気にかける身分か」というリュシアンの言葉に「海の向こうのことで死なんばかりだ」といって共鳴し、「第一世界」的な存在と協力するような内容を持つ夏男の言葉に康子は、「どうしたの？あんたの学校の仲間でしょう？」と反発する。のちに三人の間にフランス語と日本語といった二カ国語を取り込んだ次のような会話が展開される。

「友達を大切にするものよ」と康子は熱心にくりかえしていた。「わたしは思うんだけど、友達は大に大切にするものよ」

「夏男はおれたちを大切にしているよ」とリュシアンがいった。「友達とはおれさ」

「フランス人なんか友達のもんか」と康子は日本語でいった。「ぼうや、学校の友達を大切にしないと後悔するわよ」

「ああ」とうるさがつて夏男はいった。「大切にしていますよ」¹⁴³

ここにおける康子の日本語で発言した（つまり、リュシアンに排他的である）言葉は、反（新）植民地主義的「第三世界ナショナリズム」的な立場を喚起するものとして夏男に受け止められる。彼女の言葉が夏男には、彼を「日本人の学生ども」と「^{アンガジュマン}政治的な参加」をさせるよう呼びかけるごときものに見える。夏男の「^{アンガジュマン}政治的な参加」に対する「抵抗感」は徐々に緩和し、こうした彼女の「第三世界ナショナリズム」的な立場を評価するようになるのである。

安料理店での暴力的な体験と康子との異性愛的な性交渉を契機に夏男はこの外国人相手の娼婦を「^{オタンディック}正真正銘」な「男らしい」役割モデルにまで高める。例えば、夏男におけるこのような方向転換は、康子とその 18 歳のときからの 10

¹⁴³ 大江健三郎、「喝采」、12 頁。（傍点は引用者による）

年にわたる娼婦生活を語る場面において見てとれる。

はじめフランス人の船員を主な顧客とする施設のあいまい宿にいたとき、船が入って来ると、一晩中、十人あまりの外人と取引をおこなうので、便所で屈みこむことさえ苦しいかぎりだったと康子は淡々と話した。夏男は感動してその中年ぶとりのはじまっている娼婦の顔を見まもり、もの思いにふけるのだった。

「それで、これっぽちもよくないのよ」と康子はいった。「痛いだけよ。なぜそれを我慢していたかという、毛唐をいい気にさせたくなかったからね。手袋でもはめさせるみたいな顔して十八歳のわたしが毛唐たちに身をまかせていたのは、めそめそしたら、あいつたちがいい気になると思ったからよ」

この女は公然としている、英雄的だ、と夏男は考えた。「立派な人間だ」と夏男は率直にいった。「ぼくはあんたに、ぼくの学校の女子大生の厭らしさを見せてあげたいよ」¹⁴⁴

夏男は、暗示的な形でありながら、康子の「毛唐たち」との奇妙な「闘い」において、1955年以前の「地方では、山村工作隊、都市部では朝鮮戦争下での軍需産業施設などに対する武力闘争を遂行した遊撃隊」に照応するような「精神」を見出すようになる。それは、夏男が、康子の「手袋でもはめさせるみたいな顔して毛唐たちに身をまかせていた」り、「めそめそ」しなかったりすることによって「毛唐たち」をいい気にさせないという意図に依拠する闘争心を、物語内時間の1955年後半における政治的な運動家としての女子大生に対置していることにおいても明白である。そして、夏男がこうした康子の行動を「英雄的」だと褒めたたえ、彼女を、彼の「男らしい世界」＝「大人の世界」への「イニシエーション」の役割モデルとしてみなすという設定も、小説のグロテスクな雰囲気高める効果を挙げている。グロテスクな形で表現されているこの挿話において、1950年代前半の「学生党员」が「政治的な参加」をした行動の無効さや、非現実的なロマン主義としての自己欺瞞が暗示されている。

夏男は自らの「男らしさ」を回復することを助けた存在だと思いこんでいる康子と結婚することを決断し、そのことをリュシアンに知らせる。二人の異性愛としての性愛関係には反対しない姿勢を示したリュシアンだったが、結婚の話を知ると動揺する。そしてリュシアンは、康子の「偽善」を夏男に「力づくでも」知らせることにする。リュシアンは彼の「狂気じみた高揚を無視するた

¹⁴⁴ 同上書、19頁。(傍点は引用者による)

めに、かれに背を向けて歩き出そうとした」夏男の片腕を「力強い掌」で掴んで引き戻した。

リュシアンは彼を銀座にある、同性愛の外国人むけのクラブに連れて行く。そのクラブの中年のマスターとリュシアンによって、康子が男同士の「愛人たちと三人ひとぐみでくらす種類」の女で「男たちの愛を傍からたすけたり、疲れた片方のかわりにたのしませたり」すること、そしてホストの若い男に「不能と寝たってちゃんときまりをつける」種類の娼婦であることを知らされた夏男は、その時点まで抱えてきた自己欺瞞に覚醒する。彼女は「不能」か「男らしくない」「男」としか寝ないとマスターが付け加える。

「あの女は乱暴な男、男らしい男とは寝ないんです、怖がってしまっ
ね」とマスターがいていた。「若いころに痛めつけられたらしいから」

145

衝撃を受け、そこを飛び出して去った夏男の若い娼婦との「男らしさ」の「試し」が挫折すると、ゲイ・クラブのマスター、ホストやリュシアンによる主張が立証され、屈辱感に満ちた青年をやさしく迎えるリュシアンのもとへ戻る。まず「毛唐」のリュシアン、そして、同胞の康子と自己を同一化することによる夏男の「男らしい」自己の形成＝「イニシエーション」、つまり「自立化」の企画は、つぎのような悲喜劇的なフィナーレで挫折に終わる展開となる。

「昨日から今日、どたばた騒ぎだったなあ、comédie だった」とリュシアンはいった。「しかもちょっとした地獄編の comédie だ」

ああ、おれは地獄の苦しみだ、と夏男は考え涙をわきあがらせた。おれのおかまやろう。地獄の苦しみだ。

「休暇がとれしだい、フランスへ行ってみよう、おまえはおれの両親の気にいるだろう」とリュシアンが満足と快楽の前ぶれにみたされた、いくぶんせつやかな声でいった。「そしてこんな comédie は忘れてしまおう、さかんな喝采、それでおわりだ」

夏男を裸にしてからリュシアンは山羊の頭と紫いろの花々を刺繍したピジャマを着せようとしていた。おれのおかまやろう、おれにこそ拍手喝采だ、とかれは細心な注意をはらって胸のホックをあわせてくれているリュシアンの作業を容易にするためにあごをあおむけて頬の両脇

¹⁴⁵ 同上書、23 頁。

へ涙をこぼしながら考えた。¹⁴⁶

このようにして夏男の、彼を「元服」に導く「念者」だと誤解釈したリュシアンを役割モデルにする「自立」の自己同一性の形成の試みも、1955年以前の「時代の精神」を体現しているものとして誤解釈した康子を役割モデルにする自立した自己同一性形成の試みもことごとく挫折に終わる。自立で独自の自己同一性を形成しようと試みた夏男はもはや自分自身を「元服前」の「若衆」としてではなく、西洋的な性差別の観点をとおして「おかま」の「男娼」としてみなすようになっている。「男らしくない」愛玩かペット同然の「少年」に還元された夏男の自立の探求は、リュシアンの「新植民地主義の欺瞞」そして夏男自身の「(自己) 欺瞞」によって完全に「無効」にされているのだ。このような「非・正真正銘」の降伏状態＝「政治的離脱」の状態は、「かれは細心な注意をはらって」「山羊の頭と紫いろの花々を刺繍したピジャマ」の「胸のホックをあわせてくれているリュシアンの作業を容易にするためにあごをあおむける」という表現においても明瞭に反映されている。

II.4.3 Engager という単語の「誤訳」が意味するもの

この短編での *engager* という言葉の使い方は両義的であり、それゆえその「正真正銘」な意味が相対化されている。例えば、小説の終局において夏男がリュシアンに、康子に恋心を抱いているため、もはや彼と別離したいと言い出すと、このことに衝撃を受けたリュシアンは自分が夏男に「*engager*」しているので彼と別れたくないと反発する。*engager* の非政治的な文脈での、つまり「性的」な意味合いでの使用は夏男を 憤らせ、彼の屈辱感を一層強める。しかし、そこには夏男のフランス語力の乏しさによる「誤訳」の問題が潜んでいる。

ああ、*engager* している、と夏男は怒りにかられて考えた。恋人たちが婚約するときにつかうような意味でこいつはこの言葉をつかっているのだろう。そしておれときたら、リュシアンと一緒にくらすために、政治にたいしてはもとより、ほんとうの現実にさえ手も足も出ない、なにひとつ *engager* しない男だった。¹⁴⁷

¹⁴⁶ 同上書、26頁。

¹⁴⁷ 同上書、21頁。

引用した箇所では、*engager* という外国語の単語がカタカナに変換されずローマ字で表記されることによって「政治的な参加」のモチーフに焦点が絞られていると言えよう。一方で夏男は、*engager* を「恋人たちが婚約するときにつかう」言葉だと説明しているが、それは誤訳である。なぜなら *engager* というフランス語の動詞には「恋人たちが婚約する」という意味が存在しないからである。他動詞としての *engager* という動詞には、1950年代の日本のような「半植民地」的な立場に置かれた国の「新植民地主義」体制における位置と役割を思い起こすような意味があるのである。

- ・「雇用する、雇い入れる」、
- ・「<人>に……（すること）を強く促す」、
- ・「……を狭い場所に入りこませる」、
- ・「戦闘を開始する」、
- ・「を（企て・状況などに）巻き込む」、
- ・「を質に入れる、抵当に入れる」、
- ・「<資金・兵力など>をつぎ込む、投入する」¹⁴⁸

主要な仏和辞典のひとつである『プチ・ロワイヤル仏和辞典』における *engager* という単語の意味は、上記のようになっている。これらの意味の中でとりわけ「戦闘を開始する」、「<資金・兵力など>をつぎ込む、投入する」という政治的、パワー・ポリティックス権力政治的な意味がある。1950年代の文脈からすると、フランスによる第一次インドシナ戦争やアルジェリア戦争、アメリカ合衆国が深く関わった朝鮮戦争、そしてイギリス、フランス、イスラエルが「兵力を投入した」スエズ侵攻を思い起こすのである。

そして、夏男は、*engager* の政治的な意味合いに触れる際「おれときたら、リュシアンと一緒にくらすために、政治にたいしてはもとより、ほんとうの現実にはさえ手も足も出ない、なにひとつ *engager* しない男だった」と言う。しかし、この場合においても、語り手である夏男の翻訳は誤っている。なぜなら、フランス語で、「(知識人や作家が) (社会・政治的に) コミットする、社会 [政治] 問題に積極的に関与する」¹⁴⁹、つまり「政治的な参加」アンガージュマンをすることを示す単語は *engager* という他動詞ではなく、その代名動詞形 (*verbe pronominal*) つまり *s'engager* なのであるからだ。このように *engager* というフランス語の言葉には、「婚約」という「恋人たちが婚約するときにつかうような」「性的」な意

¹⁴⁸ 『プチ・ロワイヤル仏和辞典』、第三版、旺文社、2003年。

¹⁴⁹ 同上書。

味が存在しないことや、「^{アングージュマン}政治的な参加」という「政治」にかかわる意味合いも同語の代名動詞形のみにあることから、夏男のこの単語の翻訳における誤りが確認できる。

この言葉が「婚約」という意味を帯びるようになったのは、外来語として 15 世紀に取り込まれた英語のみにおいてなのである。すなわち、英語では *to engage* が「(人が) (...と) 婚約している」そして *to be engaged* は古フランス語から伝来した「婚約する」という意味を指す外来語として使用されている。夏男は、フランス語の *engager* の意味を変形させて英語に導入された *to engage*・*to be engaged* とそれを派生させた原語の意味を混同しているのである。

そこには、英語化され、フランス語における「^{オタンティック}本物の」意味を喪失したこの単語の両義性において、「同時代を支配するイデオロギー」としての文化帝国主義が内包されていることに注目すべきである。つまり、フランス文学科の学生であると思われる夏男は、戦後の文化帝国主義の主力としてのアメリカ合衆国の「^{オタンティック}国語」、英語の強力な影響下に置かれており、「^{オタンティック}本物の」フランス語やフランス文化と「接触」しようとする際にでさえ「新植民地主義」の言語や文化が介入し、彼の意識や観点に誤った方向付けを与えているのである。

他方、物語言説のレヴェルでは、夏男の誤訳・誤解釈という設定からリュシアンが、「見るまえに跳べ」の外国誌の特派員のガブリエルのように、「フランス的なるもの」＝「旧植民地主義的なるもの」と同時に、冷戦体制下における「新植民地主義」という支配形態をも体現しているという仕掛けが顕在化する。このことは先の引用文において、政治に行動的な学生たちが「第三世界」問題を抗議するためにフランスやイギリスのような旧植民地主義の宗主国に限らず、アメリカという「新植民地主義」を主導する国の大使館にも声明文を持ち込むという設定において明白である。そして、このことは、物語運動における *(s')engager* という単語の「意識的誤訳」＝「意識的誤用」という仕掛けによって可能となるのだ。本論文ではこの「小説の方法」を「意識的誤訳法」と命名することにする。

(s')engager をめぐる「意識的誤訳法」は、「喝采」の文体に「非日本語」的な雰囲気を与える要素のひとつである。つまり大江は、「見るまえに跳べ」でそうしたように、この作品においても、フランス語や英語の雰囲気を日本語において生かすという方法を採用しているのだ。とりわけ「非日本語」的な雰囲気が漂っている箇所は、先にも一部を引用した小説のフィナーレの部分である。

「昨日から今日、どたばた騒ぎだったなあ、*comédie* だった」とリュシアンはいった。「しかもちょっとした地獄編の *comédie* だ」

ああ、おれは地獄の苦しみだ、と夏男は考え涙をわきあがらせた。お

れのおかまやろう。地獄の苦しみだ。

「休暇がとれしだい、フランスへ行ってこよう、おまえはおれの両親の
気にいるだろう」とリュシアンが満足と快樂の前ぶれにみたされた、い
くぶんせつかな声でいった。「そしてこんな *comédie* は忘れてしまおう、
さかんな喝采、それでおわりだ」¹⁵⁰

「喝采」の随所において、日本語の文体とは異なる雰囲気^{イデオクラーシ}の生成に貢献する
のは、(s')engager と同様にローマ字で表記されている *comédie* というフランス語
の単語である。また、「地獄編の *comédie*」、「地獄の苦しみ」といった「地獄(の)」
という単語をキーワードにした比喩的な表現も、(大江が渡辺一夫の指導の下で
フランス文学を学ぶようになってからセリーヌをはじめとした作家らにおいて
見てとった) フランス近代文学特有の文体の空気を漂わせている。さらに、渡
辺一夫の翻訳調を思わせるような「ひらがな」の多用は、(言った→「いった」、
湧き上がらせた・わき上がらせた→「わきあがらせた」、幾分→「いくぶん」、
満たされた→「みたされた」、終わり→「おわり」)、「国語」としての日本語の
文体と表記のレベルで質を異にする特異性を孕んでいる。

引用文ではリュシアンの科白における *comédie* という単語が、反復強調されて
いる。*comédie* という単語に対応する「喜劇」という単語が日本語に存在するの
にもかかわらず、敢えてフランス語の *comédie* を採用することによって大江は、
「喜劇」という概念を「括弧に入れる」ことを意図したのである。つまり、作
者は、*comédie* という文学用語の多義性を解放するうえで、「喜劇」ではなく、
comédie を選択したわけである。

例えば、「第一世界」に属するリュシアンにとっての *comédie* の意義と、「第一
世界」＝新植民地主義体制の半植民地の位置に置かれながら、アルジェリア、
エジプトやヴィエトナムのような「第三世界」とも繋がっていない日本に属す
る夏男にとっての *comédie* の意義は、同一なものでは決してない。リュシアンが
企んだ「工作」——つまり、康子という同性愛者の男を相手にする「娼婦」を、
夏男と関わらせることによって、彼を落胆させ、彼の自立した、「正真正銘」な
人間への成長という自己形成の試みを失効させるという「工作」——は、リュ
シアンにとっては滑稽且つ愉快的「ハッピーエンディング」の「喜劇」(「どた
ばた騒ぎ」)＝*comédie* である。その反面、リュシアンと康子の共同工作の罫に
嵌った、つまり、その *comédie* の「餌食」にされた夏男にとってこの体験は、決
して「喜劇」などではなく、悲劇的な体験＝*tragédie* なのである。そして読み手
にとってはこの「康子工作」は喜劇＝*comédie* でも、悲劇＝*tragédie* でもなく、「悲

¹⁵⁰ 大江健三郎、「喝采」、26頁。

喜劇」= *tragi-comédie* なのである。

リュシアンによる「地獄編の *comédie*」という発言は、敢えて言えば「うその涙」= *larmes de crocodile* にすぎない欺瞞である。この表現が喚起するイメージは、夏男の「悲劇」を把握することにこそ適している。夏男が、内心、リュシアンに応答する形で、自らの心情を、「地獄の苦しみ」として記述するのはそのためである。リュシアンと夏男の間における非対称性は、帝国主義国家と、その政治的、経済的、文化的な植民地支配を、直接に、ないしは、(半植民地として) 間接に被っている被圧迫民族の間における支配者と非支配者の関係の非対称性に照応しているのだ。

大江は、西洋文学としての世界文学の根本的なカテゴリーである *comédie* をその原語学的多義性に言及しつつ活用している。中世において「喜劇」という意味を帯びるようになった *comédie* であるが、古代ギリシアや古代ローマの劇では、「ハッピーエンディング」の作品を意味していた。例えば、13～14 世紀のイタリアの詩人ダンテ・アリギエーリが叙事詩に *La Divina Commedia* (1308～1321 年) という題名を付けたのはこうした文脈においてである (*Oxford English Dictionary*)。しかし、大江が「喝采」で意識しているのは、ダンテの叙事詩ではなく¹⁵¹、フランスの 19 世紀の小説家オノレ・ド・バルザックがダンテの『神曲』に「対抗」して *La Comédie Humaine* として題した作品群¹⁵²のひとつであった *La peau de chagrin* (1831 年) である。「喝采」において大江が『あら皮』を意識していることは、上に引用したフィナーレの部分における *comédie* と「地獄の苦しみ」という表現からも明瞭である。

*

『あら皮』(*La Peau de chagrin*, 1831 年)の主人公、ラファエル・ド・ヴァランタンという青年は、父の死後、フランスの植民地に所有した土地を含むあらゆる財産を喪失し、フェドラというパリの社交界の公爵夫人にも拒まれたあげく自殺を決意するに至る。しかし、日が暮れるまで時間を潰すために入った古物商にて店主から一枚のあら皮を譲り受け、彼の人生は一変する。なぜなら、*peau de chagrin* という「オリエント」からきたこの「あら皮」は、その表面にアラビア語の呪符= *talisman* が刻まれており、その所有者のあらゆる願望を叶える魔力を有するからだ。願望が叶うごとに、あら皮とその所有者の寿命は縮まってい

¹⁵¹ 大江が、ダンテの『新曲』をも含む作品の「集中精読」を基にして『懐かしい年への手紙』を書くことになったのは、「喝采」の発表からおおよそ 30 年後の 1987 年である。

¹⁵² 渡辺 一夫、鈴木力衛、「19 世紀」、「バルザック」、『増補——フランス文学案内』、岩波書店、東京、2012 年、168 頁。

き、所有者は自分の余命をその皮において見てとることになる。

結局、このあら皮の魔力によって、裕福な、社交界の一員となったラファエルの一連の物質的、出世主義的な夢は実現する。だが、彼は余命をこれ以上縮めぬために望むことを厳しく自制せざるを得ない人生を送る。結局彼が恩師の教授の地位回復に貢献するという願望と、ポリーヌという彼に恋心を抱いている女性と性交渉するという願望をあら皮に叶えさせることによって、あら皮は消失し、ラファエルは衰弱死する。

Enfer = 「地獄」やその形容詞形としての *infernal(e)* = 「地獄の」、「地獄のような」という単語は、『あら皮』に多用されるキーワードのひとつとなっているが、「地獄の痛み」は、*une douleur infernale* として小説の第二章に出て来る。これは、貧困に陥っているラファエルが、一方的に恋い慕うパリ社交界のフェドラとともに演劇を見終わった後、^{みぞれ} 曇の中で傘をさして二人を馬車に案内した門衛に心付けを与えることができずに抱いた「屈辱」を描くために使った表現である。¹⁵³

他方、この小説における *chagrin* は、トルコ語の *sağrı* 「(主に製本用の) 粒起なめし皮」という意味の単語のフランス語化としての *chagrin* と、「悲しみ、悩み」を意味するその同音語 *chagrin* という二つの意味を併せ持つ多義的な単語として多義的に活用されている。「あら皮」= *chagrin* は、没落した貴族ラファエルの物質的、出世主義的な夢を叶える反面、彼に取り返しがつかない破壊や「地獄的な」「悲しみ」、「悩み」= *chagrin* をもたらすものとして描かれている。

「あら皮」は、クリストファー・マーローやゲーテが『ファウスト』で描いたところのメフィストフェレスとともに『千夜一夜物語』の「アラジンと魔法のランプ」といったモチーフを主な参照先にして構想されているだろう。「人間喜劇」という作品群においてバルザックの主要な意図を「金銭と権力へのあくなき欲望のとりこになっている」市民階級の分析を行うこと¹⁵⁴と渡辺一夫は位置づけているが、この作品群に「始まり」を刻んだ小説のひとつとして『あら皮』でバルザックは物質的、出世主義的欲望の問題を扱っている。

¹⁵³ “Je n’avais rien : j’eusse alors vendu dix ans de ma vie pour avoir deux sous. Tout ce qui fait l’homme et ses mille vanités furent écrasés en moi par *une douleur infernale*. Ces mots : — Je n’ai pas de monnaie, mon cher ! furent dits d’un ton dur qui parut venir de ma passion contrariée, dits par moi, frère de cet homme, moi qui connaissais si bien le malheur ! moi qui jadis avais donné sept cent mille francs avec tant de facilité ! Le valet repoussa le commissionnaire, et les chevaux fendirent l’air.” (Balzac, Honoré de, *Oeuvres de H. de Balzac*, Tome Deuxième, Méline, Cans et Cie Bruxelles, 1871 年, 292 頁. 斜体強調は引用者による)

¹⁵⁴ 渡辺一夫、鈴木力衛、「19 世紀」、「バルザック」、『増補——フランス文学案内』、169 頁。

「喝采」においては、リュシアンが、夏男にとっての「正真正銘」^{オタンテイック}な性的、そして政治的な自己同一性^{アイデンティティー}を獲得するという志を叶える「あら皮」になっている。しかし、あら皮の寿命が、その所有者の願望を叶えるごとに、所有者の寿命と平行して縮まっていったのにもかかわらず、夏男が「正真正銘」^{オタンテイック}な自己形成や、フランス文学者になるという出世主義な夢を叶えるうえで「あら皮」= *peau de chagrin* となったリュシアンは、夏男の自立と「正真正銘性」^{オタンテイック}のための活力を奪うことによってさらに強化するものとして設定されている。

以上論述してきたとおり、当時までオスマン・トルコ帝国の支配下にあったアルジェリアをフランスが植民地化する時期にバルザックが書いたこの作品を、大江はフランスの「植民地の問題」を扱った「喝采」で強く意識しているのだ。大江の「喝采」での意図の射程は、フランスの「植民地の問題」を批判することに限らない。大江がラファエルと「あら皮」= *peau de chagrin* の関係を、夏男とリュシアンの関係のモデルにしたのは、「周辺世界」の「政治的離脱」^{デザンガジュマン} = *désengagement* を推進するための帝国主義国家が採用する支配装置としての「文化帝国主義」の問題との関連を表現するためなのである。

II.4.4 *Désengagement* の推進のイデオロギー装置としての文化帝国主義

植民地化された諸地域において第二次世界大戦後には、「脱植民地化」という大規模な同時代現象が発現し、それが「第三世界」という新しいカテゴリーの誕生をもたらした。しかし「脱植民地化」は、世界がヤルタ会談において米ソによって東西に分断され、世界の支配権が再分配されたことの結果成立した「冷戦構造」という新しい世界秩序下において屈折した形で展開することになった。つまり、旧植民地はアメリカ合衆国が主導する「新植民地主義」支配下に組み込まれ、軍事的・政治的・経済的に搾取されることになり、これらの諸国には「疑似の」独立しか許されなかったのである。その反面、ナチス・ドイツに対して西欧の普遍的な価値としての「自由」と「民主主義」を守るために闘ったとして神話化されたソ連も、そのような「正真正銘」^{オタンテイック}の性質を、とりわけスターリン批判・ハンガリー動乱といった一連の重大事件の結末として、徐々に喪失しつつあった。ソ連が「脱植民地化」した諸国を、完全にあるいは、部分的に自らの体制に組み込むことによって、それらを「ゲリラ国家」に変身させ、このことがそれらの国々において内戦・民族問題などを引き起こしたことからす

ると、社会主義圏に入った脱植民地化した諸国にも「擬似」の「自立性」しか付与されなかったことは明白である。

前章でも触れたとおり——アフリカではガーナなどブラック・アフリカ、アジアでは、南朝鮮、南ヴェトナム、台湾、インドネシア、フィリピンなど英仏欄や日本による——旧植民地主義体制の支配下に置かれていた地域において西洋が許容し、推進したところの「脱植民地化」=*decolonization* は、実際のところ決して二つの大国による解放なのではなく、元・植民地地域の「再植民地化」=*recolonization* として遂行されたものなのであった。ここには、「脱植民地化」という言葉における、「植民地を解放する」という意味と「脱植民地化」の実践的なレベル=再植民地化の間の「ズレ」からくる「偽物さ」を見逃してはならない。これらの元植民地の諸国は、脱植民地化という「偽物さ」の名の下に「再植民地化」に「強く促」された=*engager* されたわけである。

アメリカ合衆国とソ連に「強く促」されても=*engager* されても、これらの二つの西洋大国のどちらの体制にも「入りこませられ」たくない(=*engager* されたくない)、そのような帝国支配的な体制に「巻き込」まれたくない(*engager* されたくない)、「雇用」(=*engager*) されたくない「第三世界」は、このような二項対立の「圏外」において「正真正銘」の独立を採求する=*s'engager* するようになった。「非同盟主義」をとらえたバンドン=アジア・アフリカ会議は、そのもっとも顕著なあらわれである。なお、既存社会主義の「擬制性」に不満を抱いていた西ヨーロッパの *New Left=Nouvelle gauche* や日本におけるその対応物として見なされた全学連は、「新植民地主義」(アメリカ合衆国)や「一国社会主義」(ソ連)といった双方の西洋大国の中心指向的で一方的な支配形態に組み込まれることを拒んで、非同盟主義を唱えた「第三世界」に「正真正銘性」のモデルを求めるようになったのである。

この短編において「正真正銘」な自己同一性の確立が、「男らしさ」というモチーフによって支えられたことに言及したが、「新植民地主義」を体現するがたき役としてのリュシアンが康子という主婦兼娼婦を雇い入れる(=*engager*)ということは、異性愛者になる欲望と希望を持つようになった夏男の、そのような希望の「芽を」決定的に「ひねりつぶすため」の罠である。

「喝采」において読み手は、同時代を支配するイデオロギーとしての「新植民地主義」的な文化帝国主義の中心指向的で一方的な権力行使の働き方を読むことになる。例えば、夏男の康子との一時的・擬似的な「連携」は、リュシアンが仕掛けたものであり、リュシアンはこれを仲立ちにして夏男に不能であることを受け入れさせ、あらゆる「政治的な参加」の企図の放棄を「強く促す」(=*engager*) ことを目論んでいる。

夏男は、「本物の」フランス文化と接することを望み、それによって「正真正銘」

アイデンティティ
な自己同一性を達成しようとするが、かえって「新植民地主義」の支配形態に以前よりも徹底的に組み込まれてしまう展開となる。そこには、「新植民地主義」的な支配を「容易にする」という文化帝国主義の働きかけが介入しているのだ。

「新植民地主義」の「宣伝工作」は、例えば、「正真正銘性」を備えていることを訴えるソ連の「宣伝工作」^{プロバガンダ}とは異なるものである。両者の間における差は、「新植民地主義」が、「正真正銘性」を備えることを訴えるよりは、むしろ、「正真正銘」の「モデル」を探求しつづける「第三世界」の青年に、「文化帝国主義」というイデオロギー装置を動員することによって、そのような「正真正銘性」の「モデル」の不在やそのようなモデルへの「政治的な参加」^{オタンテイシテ}の不可能性を納得させるよう「強く促す」こと（=*engager*）にある。

II.4.5 サルトルの反植民地主義理論と「喝采」

結局、夏男も、「日本人の学生ども」も「正真正銘性」^{オタンテイシテ}を発見することができないまま物語は終わる。ここで、「正真正銘性」=*authenticité* も、「政治的な参加」=*engagement* もジャン・ポール・サルトルが展開した概念であることを指摘しなければならない。*authenticité* が実存主義の概念であることは周知のとおりだが、大江の初期小説においてとりわけ濃厚な存在感を帯びているのは、戦前・戦中の実存主義の哲学者としてのサルトルの *authenticité* という概念ではなく、サルトルが戦後に展開させた政治哲学の概念としてのそれなのである。なお、フランス語における *engagement*・*s'engager* という単語に「政治的な参加」といった特異な意味を与えたのもサルトルの政治哲学であった。

サルトルは、1950～60年代の日本においても世界各国と同様に、広く読まれ、高く評価された哲学者・作家である。大江自身も、サルトルを愛読し、サルトルの「想像力論」を分析する「サルトルの想像力について」と題した卒業論文を執筆した。¹⁵⁵ サルトルが戦後に展開した、実存主義とマルクス主義を総合した政治的実存主義によると「正真正銘性」^{オタンテイシテ}は、人間存在に関わる主要な美德である。

例えば、1956年に『ユダヤ人』という題名のもとで日本語に翻訳された政治的エッセイ *Réflexions sur la question juive* (1946年) においてサルトルは、人種差別という現象の力学を分析している。サルトルによれば人種差別を誘発させ

¹⁵⁵ 大江健三郎著、尾崎真理子聞き手・構成、『大江健三郎 作家自身を語る』、東京、新潮社、2007年、34頁。

るのは被差別民族ないしは人種に内在する特殊的なキャラクターではない。(被差別者に対する支配搾取行為を事後的に正当化するために) そうした否定的なキャラクターは差別者によって恣意的に作られるものだからだ。そして、権力行使による支配は、主体を客体に還元する。主体性を奪われ、客体に還元された被差別者が、主体性を回復することを自ら拒んだら「非・正真正銘」= *inauthentique* な、「疑似」の状態に還元されてしまう。つまり、こうして「人間以下のもの」として位置づけられた被差別者が示す反応の一つに彼/彼女を排除した差別者の共同体と協力し、自らをそれに同化させ、組み込ませようとするというものがある。しかし、これでは、「非・正真正銘」= *inauthentique* な状態に置かれ、「疑似」の自己同一性 (= *identité*) に包まれたまま生きるということになる。被差別者にとって彼/彼女の「正真正銘性」= *authenticité* を回復することへの唯一の道は、差別の対象となっている自らの(民族的ないしは人種的)自己同一性 (= *identité*) にかかわる条件(この場合ユダヤ人としての条件)を全的に生きることなのである。

サルトルは「^{オタンテイシテ}正真正銘性」= *authenticité* をめぐって次のように述べている。

もし今、われわれの考えるように、人間とは、状況における自由体であるということが認められれば、その自由が正統 [= 正真正銘] である (*authentique*) か否かは、それが、自分の生まれ出た状況の中において、如何に自己を選択するかによって決まることになろう。正統性 [= 正真正銘性] は、言うまでもなく、状況を、明晰且つ正当に自覚し、その状況に内在する責任と危険を引き受け、誇りをもって、あるいは、辱恥にもかえても、そして時には、恐怖や憎悪によっても、その状況の権利を主張するところにある。従って正統性が、非常な勇気を要し、更に、勇氣以上のものも必要とすることは、疑う余地がない。従って、非正統性の方が、むしろ一般に拮がっているのも、驚くには当たらないわけである。

156

つまり、「^{オタンテイシテ}正真正銘性」とは、人間が、自らが置かれている状況を「自覚し」、「その状況の内在する責任と危険を引き受け」ることによって行われる真の意味の「自由」を探求する行為である。そして、「^{アンガジュマン}政治的な参加」は、政治的なレヴェルの「^{オタンテイシテ}正真正銘性」の探求であると言える。そのうえ、サルトルは、小説など散文としての「^{アンガジュマン}創作活動」はつねに「^{アンガジュマン}政治的な参加」をしたものではなくてはならないという論点を提起し、当時の大半の批評家の酷評に曝されたので

156 サルトル、ジャン・ポール、『ユダヤ人』、東京、岩波書店、1956年、111～112頁。

あった。『文学とは何か』=*Qu'est-ce que la littérature?*(1947年)は、そのような酷評を跳ね返すために書かれた、「政治的な参加」をした文学の「マニフェスト」である。本書において、「言葉」を「装てんされたピストール」に譬えるサルトルは次のように述べる。

「束縛された」[=*アンガジュマン* 政治的な参加をした]作家 [=l'écrivain «engagé»] は話が行方であることを知っている。彼は、暴露することは変えることであり、変えるという企てにおいてしか暴露することはできないということを知っている。社会と人間との不偏不党の画面をつくろうという不可能な夢は放棄された。¹⁵⁷

ここで注目すべきは、とりわけ1947年以降、サルトルにおける「政治的な参加」が「第三世界」へのコミットメントという形式を取るようになったことである。「政治的な参加をした」作家=*アンガジュマン* l'écrivain «engagé」としてのサルトルはエッセイや行動によってフランスにおける「アルジェリア戦争反対運動」を主導した知識人であり、その他の「第三世界」民族解放運動をも支持しつづけた。このことは、サルトルが「第三世界」の解放運動において「*オタンテイシテ* 正真正銘性」の探求に照応するようなものを見いだしたことに由来するのである。そうした解放運動を方向付けたフランツ・ファノン、レオポール・セダール・センゴール、エルネスト・(チェ)・ゲバラ、フィデル・カストロ、パトリス・ルムンバや——その「新植民地主義論」を前章で引用した——クワメ・エンクルマのような「第三世界」運動の指導者の参照先はサルトルそのものであったのだ。アフリカを始めとする、「第三世界」の解放運動への「*アンガジュマン* 政治的な参加」やポストコロニアル研究の形成への貢献の結果、サルトルは、後に「アフリカ人の哲学者」¹⁵⁸と呼ばれるようになる。とりわけ、サルトルの「*オタンテイシテ* 正真正銘性」の探求としての「第三世界」の民族解放運動をめぐる考察の結実である『植民地の問題』=*Colonialisme et néo-colonialisme* (1964年)や『弁証法的理性批判』=*Critique de la raison dialectique* (1960年)は、後のポストコロニアル研究の形成において重要な役割を果たした。

大江の最初期小説における「性と政治」のテーマも、「第三世界」をめぐるこ

¹⁵⁷ Sartre, Jean-Paul, *Qu'est-ce que la littérature?* Gallimard, Paris, 1948, 30頁／サルトル、ジャン・ポール、『文学とは何か』、『シチュアション II』所収)、加藤周一、白井健三郎訳、改訂版、人文書院、京都、1952年、22頁。

¹⁵⁸ Mudimbe, V.Y., *The Invention of Africa: Gnosis, Philosophy, and the Order of Knowledge*, Indiana University Press, Bloomington, 1988年, 83頁。

うした問題意識とは密接不可分の関係にある。「喝采」においては「^{オタンテイシテ}正真正銘性」や「^{アンガジュマン}政治的な参加」といった問題は「第三世界」の問題との連動性において捉えられている。「見るまえに跳べ」、「部屋」、『われらの時代』、『叫び声』のような、「喝采」以外の初期小説においても、「アフリカ」を始めとする「第三世界」は、主人公ないしは他の作中人物の熱情的な憧憬の対象の形を取っている。「喝采」における独自性は、サルトルの政治哲学における「^{オタンテイシテ}正真正銘性」という概念が、60年代の言説空間を支配することになる、反植民地理論・「第三世界論」において重要な役割を果たすことを見抜いたところにある。

*

反植民地主義理論・「第三世界論」もポストコロニアル研究も——異なるレヴェルにおいてではあるが——「第三世界」の地域の文化を、西洋の文化に同化させることによって、それらの「^{オタンテイシテ}正真正銘性」を破壊しようとしつづけた文化帝国主義への異なるレヴェルの抵抗である。「喝采」は、夏男という一人の日本の一般の学生の物語をとおして、「帝国主義」と「文化」の相互作用を極めてヴィヴィッドに把握し表現している。そのような中心指向的な「文化」とかかわる際に、その文化が必然的に包含している権力装置に対して、「批判的な距離」に基づく「周辺」的な立場を保つことの重要性をこの短編は強調する。つねに、「周辺」的な立場から国内外のあらゆる中心指向的な権力に逆らって書いてきた大江の文学作品に独自性を与えた要因の一つは、作家におけるこのような「政治的な参加」= *engagement* に依拠するモラル意識なのであると言っても過言ではない。

II.4.6 「植民地の問題」と「喝采」における「喝采」・「痼疾」というイメージ

最後に、「喝采」における主要なイメージである「拍手喝采」や「痼疾」の参照先も、サルトルのアルジェリア解放戦争をめぐる反植民地理論であることに触れておく必要がある。

康子が夏男の「三年もまえからの痼疾」= 異性愛的な不能を一時的且つ「擬似」的に治癒する場面において、「男らしさの世界」への「イニシエーション」を結実させたと思いきんでいる夏男が、自分自身に「拍手喝采」を送っている——『拍手喝采』と夏男は康子の汗ばんで熱い胸に片頬をうずめて幸福にいった」

この場面において短編の題名である「喝采」という単語が初めて登場する。「喝采」という単語が再び出現するのは、物語の終局の段階においてである。「『こんな *comédie* は忘れてしまおう、さかんな喝采、それでおわりだ』と高揚感に駆られて言うリュシアンは、自らが仕掛けた（新植民地主義の）「欺瞞工作」を *comédie* と呼び、この「工作」が夏男にとって悲劇的な体験=*tragédie* であるということをぼかそうとしていた。その反面、「男らしい」「正真正銘オタンテイック」な自己の形成が無効にされたところの夏男は、「おかまやろう」といって自らを侮蔑し、そうした自らのみじめな姿に辛辣な皮肉に満ちた「拍手喝采」を送ることにしていた——「おれのおかまやろう、おれにこそ拍手喝采だ」。¹⁶⁰

1954年11月1日未明、アルジェリアの各地に、(フランス政府の解釈によれば)「テロリストの少人数の集団」=[アルジェリア]民族解放戦線=*FLN*/*Front de Libération Nationale* =*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*)による武装蜂起として、一斉に発生したアルジェリア解放戦争は、ヴェトナムの「一時的」な独立を可能にしたディエンビエンフーの敗北(1954年5月)直後、跛行をつづけていたフランスの第四共和政を根底から揺るがす「大事件の火口」となった。¹⁶¹このことが、戦中に「祖国の救世主」として理想化されたところのド・ゴールの、反民主主義的な形での、首相としての再登場に至ることには、この時点では誰も予想できなかった。ところが、アルジェリア戦争が泥沼化した1957~58年代にそのような奇妙な結末をもたらしたのである。

歴史的に「5月危機」ないしは「アルジェのクーデタ」(*Le putsch d'Alger*)と名づけられた事件は、「周辺」から「中心」へという指向性で、ファシズムの危機をもちたした結果、英雄視された、「男らしい」「正真正銘オタンテイック」な指導者としてのド・ゴールの再登場の好機を作ったのであった。1958年5月13日、アルジェで極右勢力が植民地総督府の建物を占拠し、その周辺に集まった「群衆の歓声」で歓迎されたマシュー将軍は、総督府に到着して臨時政府としての「公安委員会」を組織した。パラシュート部隊の指揮官で、入植者に人気があったマシューは、熱情的なド・ゴール主義者であり、*FLN* = *Jabhat at-Tahrir al-Vatani* を無効化し、「植民地保持」に成功するうえでド・ゴールの政権復帰を呼びかけたのだ。¹⁶²マシューに指導されたパラシュート部隊がコルシカを占領し、支配権を確立

¹⁵⁹ 大江健三郎、「喝采」、19頁。

¹⁶⁰ 同上書、26頁。

¹⁶¹ 鈴木道彦、「第四共和国の運命——ド・ゴールの神話をめぐって」、『中央公論』、73(7)、1958年7月号を参照。

¹⁶² この呼びかけは、臨時政府の中心となったアルジェリア総司令官のサラン将軍にも共鳴され

したことは、本国に対する軍部によるクーデタの危機のリハーサルのようなものであった。

大嶽秀夫によると、このようなファシズムの危機に直面されたフリムラン首相は、入植者や軍部による極右勢力に対し1万5千人の「戦闘要員」を動因できるとされた共産党と協力することができたのにもかかわらず、極右勢力の無効化を契機にフランスが共産化する「危険」に怯え、それを回避するためにド・ゴールに政権を譲ることを選択した。フランス共産党は、「共和国の防衛」を掲げていたのにもかかわらず、元首相で社会党党首であるモレも反共ヒステリーを踏まえた態度を取っていた。このことは、共産党やCGT (Confédération Générale du Travail=フランス労働総同盟) という共産党系労働組合の孤立を引き起こし、また「共和国の防衛」の呼びかけに対して国民の大半は無関心だった。社会党議員の半分は「ファシストへの対決」ではなく、「平和」を求める保守的な姿勢を取った。この過程においてサルトルは、フランス人民に反ファシスト「人民戦線」の結成を呼びかけたりもした。この「空気は、」戦中「ナチス・ドイツの脅威を前にしたときのフランス国民の反応の再現であ」ったが、1958年6月1日にド・ゴールは「救世主」として国民議会の要請のもとに首相に就任した。¹⁶³

しかしフランスにおける長期的な不毛な政治環境の発端となったこうした情勢¹⁶⁴に対する批判の声も少なくなかった。その声のなかでももっとも注目を集めたのが、サルトルのものである。とりわけ、日本の言論空間の一部において、こうしたフランスの「植民地の問題」は「ド・ゴールとサルトルの対立」として表象されるようになり、人気を集めた。1957～58年、つまり、アルジェリア解放戦争に付随した「植民地の問題」の時期において、日本雑誌ジャーナリズムに掲載されたサルトルをめぐる、ないしはサルトル自身による論文の数は30に近い。アルジェリア問題を契機にして一定の「サルトル・ブーム」が発現したとさえ言える。この知的なブームにおいて、サルトルの「第三世界ナショナリズム」的な「政治的な参加」^{アンガージュマン}の仕事による影響が大きかった。論文と言う形で結実したこれらの一連の仕事は、アルジェリア解放戦争を中心にするフラン

た。

¹⁶³ 大嶽秀夫、「イギリスとフランスにおける新左翼」、『新左翼の遺産』、234～236頁。

¹⁶⁴ この過程は、フランスにとって保守的強権の始まりともなった。ド・ゴールは、大統領に強権を与え、議会の力を抑制する根底に依拠する新憲法を立案した。国民投票で賛成を得て新憲法が制定された。こうして、フランス第五共和政が成立するとともに、1959年にド・ゴールはその初代大統領に就任した。フランスは、ド・ゴールが1969年に退陣するまでの11年間、ド・ゴール主義の強権のもとに置かれる展開となった。

ス情勢を扱うサルトルによるもの¹⁶⁵と、サルトルの広義の「政治的な参加」^{アンガジュマン}に関する日本の批評家によるもの¹⁶⁶からなる。

「喝采」における主要なイメージのひとつ、そして、「喝采」の題名のもとである「拍手喝采」という単語は、サルトルがド・ゴールの独裁者ならでは「強権」、彼が推進する植民地保持政策やそれを歓迎する国民といった現状を、把握し表現するうえで動員したイメージのひとつなのである。例えば、次のテキストはサルトルがこの危機より一年まえに書いたものの訳文であり、『世界』の1957年3月号に掲載されている。

あらゆる場面で、右翼が勝利を待っている。彼らはその目的を達し、社会主義勢力などは物のかずではない。モレ氏には、彼の誤謬のためにさげなかつたあらゆる反人民的な方策を実施するだけの時間があたえられるだけである。だがそのつぎにくるのは、右翼がこの上皮を破りすて、満場一致の拍手のもとに政権を握ることだろう。¹⁶⁷

次の引用はド・ゴールの首相就任直前の5月22日の*L'express*紙に掲載されたサルトルの論文からであり、「^{オタンテイク}正真正銘」な「救世主」としてフランス国民に理想化されたド・ゴールの「^{イノタンテイク}疑似」な「救世主」としての「あいまいさ」を暴き出している。

名誉をうけた人物は国民にとって危険である。例えば彼が寒村に隠退していた。彼が沈黙していても、ひとびとは彼の過去が耳に入る、ドゴール将軍は長い間沈黙を守っていたが、彼の過去はわれわれの間で忘れ

¹⁶⁵ 「私は弾劾する サルトル」、(『世界』(133)、1957年1月号)、「フランスの左翼再建のために」、(『世界』(135)、1957年3月号)、「ひとつの勝利」、(『中央公論』73(5)、1958年5月号)、「王位をねらうもの」、(内山 敏訳、『中央公論』73(7)、1958年7月号)、これらの論文のほとんどは後に、『植民地の問題』= *Colonialisme et néo-colonialisme* (1964年)に収録された。

¹⁶⁶ 以下は一連の論文の題名の一部である。

「サルトルと共産主義」、(『世界』(137)、1957年5月号)、清水幾太郎、「歴史の中の人間——サルトルについて」、(『思想』(395)、1957年5月号)、佐々木俊次、「サルトルと政治——現代思想の動き」、(『理想』(296)、1958年1月号)、竹内芳郎、「サルトル」、(『悲劇喜劇』12(1)、1958年1月号)、藤島宇内、「沖縄とアルジェリア」、(『中央公論』、73(5)、1958年5月号)、平井啓之、「サルトルの提起した問題」、(『中央公論』、73(2)、1958年2月号)

¹⁶⁷ サルトル、ジャン・ポール、「フランスの再建のために」、(『世界』、1957年3月号、138頁。

られていなかった。¹⁶⁸ (中略) すでに海の彼方では、サランがドゴール万歳を叫んでいた、アルジェ市民全体が「ドゴールを政権につけろ」と叫んでいた。

(中略) ドゴールは共和制については明言を避けていた。もし彼が言葉のついでにでも「自分は共和制には手をふれない」とかほんの一言言うだけの好意があったとしたら、フランスは一九四五年のときのように彼に拍手を送り¹⁶⁹、モレ氏はフリムラン氏を辞職させる手段を見つけだしたことであろう。¹⁷⁰

¹⁶⁸ フランスが解放された後、臨時政府がフランスの統治を行うことになり、国民議会は満場一致でド・ゴールを首相に選出した。ド・ゴールは首相になってから、ポピュリストの強権を発動した。フランス民衆からの声望を背景に他の指導者・政党の意見を無視することが多かった。とりわけ社会党や共産党から「独裁者」との批判を受けた。

¹⁶⁹ サルトルは同じ論文の冒頭でマッシュューについて述べる際も、高揚感の雰囲気をかもし出す単語を用いている。「アルジェのフォーラムでは、ラジオがたてつづけに放送するや、喚声が起こり、アルジェリア政庁を襲撃し、街頭では『マッシュュー万歳』を叫んだ。」(サルトル、ジャン・ポール、「王位をねらうもの」、『中央公論』1958年7月号、64頁)

¹⁷⁰ 「同上書」、64～66頁。

本論文の第一章で引用したサルトルのフランス流の「新植民地主義の欺瞞」に対する批判の中心に位置する人物の一人は、紛れもなくギー・モレ(フランス社会党)である。モレは、大江が新植民地主義を擬人化する「ガブリエル」や「リュシアン」の構想において参考にした人物の一人でもあった。

ここで、サルトルの「王位をねらうもの」から引用した一節において言及されるのは、ド・ゴールの反民主主義的な首相就任過程におけるモレの関与をめぐるものである。ピエール・フリムラン(国民共和運動)は「5月危機」と同日の1958年5月13日にフランス国民議会によって首相に指名された。フリムランは *FLN = Jabhat at-Tahrir al-Vatani* と独立に向けた交渉に着手した。それにもかかわらず、アルジェリアに駐屯している軍部による本土襲撃の脅威の危機をもとに、フリムランが率いる第四共和制政府は崩壊に追い込まれたのであった。フリムラン首相が辞職したのは、この雑誌論文が発表された数週間後のことである。この論文でサルトルは、ド・ゴールの再登場過程において役割が大きかったモレを酷評的にしている。

モレの新植民地主義の形成企画がもっとも明確にあらわれているのは、フランスがスエズ侵攻に、ナセルの *FLN = Jabhat at-Tahrir al-Vatani* 支持を口実に参戦したという行為においてである。エジプトによるスエズ運河国有化に反対してイーデン英首相と謀り、1956年10月モレ政権はスエズ侵攻に部隊を派兵したが、エジプトを支持した「第二世界」(ソ連)のみならず、「第一世界」(米国)の反対をも受け、この侵攻は失敗した。

首相に就任した頃のギー・モレは、アルジェリアにおいて融和政策を掲げた新植民地主義者で

第一章において引用した一節における「まず、一般社会から隔離されて、いったん死んだものとなる。死んだものとなって苦しい経験をして、例えば森の中で無言で一週間過ごすとか、そういう種類の試練を経験して、その上で新しい人間として再生する」という大江の「イニシエーション」の定義を手掛かりにすると、サルトルは「寒村に隠退し」、「長い間沈黙を守った」ド・ゴールの再登場を一定の「イニシエーション」として表現している。サルトルはド・ゴールの再登場に「拍手喝采」が向けられていること自体もこうした強権の「イニシエーション」であったとしている。

1957年の時点で、ファシズムの襲来の危機に直面したフランスという時空に置かれたサルトルは、フランス人民に、戦中人民戦線の指導者であったド・ゴールに対しての「人民戦線」の結成という「政治的な参加」を呼びかけた。この「人民戦線」のアピールにおいてサルトルは「ただ人民戦線のみが、わが国を救うことのできるものである。ただ人民戦線のみがわが国の植民地の病を癒」¹⁷¹すと述べている。

なお、夏男の「異性愛的不能」＝「政治的離脱」^{デザンガジュマン}を表現するうえで用いられた「三年もまえからの痼疾」という表現における「久しくなおらない病気」、「持病」の意味を指す「痼疾」という「病」に関する「喝采」におけるキーワードは、「病気をおこす毒」、「病気の原因となる毒」¹⁷²の意味を指す「病」に関する対ド・ゴール人民戦線アピールのキーワードと共鳴している。サルトルが、

あったが、入植者や軍部の反発の結果 1956年3月に方向転換をした。国民議会で圧倒的多数の支持で非常大権を獲得し、緊急事態法が公布され、4月11日に20万人の予備役の招集が決定された。この政策の悲劇的な結末は、「アルジェの戦い」（1957年1月～10月）と、それにかかわる仏軍による虐殺や制度的拷問などの大規模の人権違反の行使であった。

「左派」政治家ギー・モレは、イギリスとフランスが主導するヨーロッパ特有の新植民地主義の形成企画の推進者でもあった。これは一定の新規のヨーロッパ帝国形成のヴィジョンに繋がるに至ったのである。例えば、モレはアルジェリアにおいて深刻化する「植民地の問題」を抱えているフランス共和国首相を担った 1956～57年の期間において、アンソニー・イーデン首相に「フランスとイギリスの合併」を提案し、それが拒否されると、「イギリス連邦へのフランスの加盟」を提案したりするほど「奇妙」のヨーロッパ帝国のヴィジョンを持っていた。モレのこうした働きかけは 1958年のローマ条約調印を経て現在の欧州連合＝EUの形成へと繋がる過程の「始まり」となったのである。

つまり、欧州連合＝EUの形成過程においてフランス（やイギリス）が抱えていた広義のアルジェリアやスエズをはじめとする「植民地の問題」の作用が決して少なくはなかったわけである。

¹⁷¹ サルトル、ジャン・ポール、「フランスの再建のために」、139頁。

¹⁷² 『広辞苑 第五版』、岩波書店、東京、2003年。

フランスの帝国主義的権力の暴力的行使を批判するために用いる「病毒」という単語を同時代の読み手に想起させる「痼疾」という単語は、日本の「第三世界」というカテゴリーからの「デゼンガジュマン離脱」を表現するうえで発されている。フランスの「停滞状態」のように、日本の（とりわけ、安保闘争直前における学生運動の）「停滞状態」の「病因」＝「病毒」が、二国の公式の歴史観における「インペリアル・レスポンサビリティー帝国責任」の抑制、忘却と拒否の保守的な帰趨に由来することからすると、「痼疾」というイメージが一層有意義になってくる。

このようにして大江は「植民地の問題」を「病」に喩えるにあたってサルトルのイメージを意識していた。大江は、このような構想を『われらの時代』においてさらに拡大し深化させ、イギリスとフランスが主導した古典帝国主義（＝旧植民地主義）の衰退状態を「ロッド・マラド病人」＝「シック・マン病人」のイメージをとおして把握し表現している。そして、この作業にあたって「世界文学」のテキストを媒介にしたのだ。このことについては第三章及び第四章において詳述する。日本列島の地政学的文脈における「アルジェリア」的なる「(新) 植民地の問題」として定義することができる沖縄問題を扱った『沖縄ノート』において、沖縄にかかわる日本の「インペリアル・レスポンサビリティー帝国責任」に触れる際、大江は「病」のイメージを再び動員しているのである。¹⁷³

¹⁷³ あいまい且つ屈折した形で進行する「沖縄返還交渉」の過程を、「大日本帝国」の形成過程における大事の一步としての「琉球処分」の記憶を引き合いに出して考察する「内なる琉球処分」（『沖縄ノート』）において大江が、サルトル論文と「喝采」双方における「やまい病」のイメージを意識していることは、次の一節において明瞭である。

「[沖縄の壮年の] 学者の傍らに、言葉もなく坐っていて、僕が自分が見ている深淵、しかも、沖縄についていくらか知識を確かにするにしたがって、ますます奥底の償いがたく遠ざかる恐ろしい深淵について思わないではいられなかった。その深淵が、なぜ恐ろしいかといえば、それは、日本人とはこのような人間なのだと、自分自身の疾患からふきあげてくる毒気をもろにかぶってしまうような具合に、目のくらむ嫌悪感ともども認めざるをえない、まがまがしいものの実質を、内蔵しているところの深淵にほかならないからである。」（大江健三郎、「内なる琉球処分」、大江健三郎、『沖縄ノート』（1970年初版）、岩波書店、東京、2011年、90頁）

大江は「琉球処分」以来の植民地主義的意識を、「強権」の側だけでなく沖縄の脱植民地化運動に「アンガージュ参加」した行動的な抵抗者の側にも見出す。この現象を浮き彫りにするうえで大江は「喝采」のイメージを再び採用し、この現象を「日本人全体に深く根ざす痼疾」に喩えるのである。さらに、大江によるとこの痼疾は、「日本人の中華思想」的な感覚に起因しており、一般の日本人の政治的想像力における「疾患」をもたらしているのである。

「そしてそれは単に強権の側においてのみならず、野党の側にあり、そこからもまたはみでている、もっとも行動的な抵抗者たちのうちにすらも発見しうるところの、すでに日本人全体に深

II.5. おわりに

大江が『われらの時代』を書いた年でもある 1959 年以降、ド・ゴールの「植民地の問題」に対する態度は、現実的になり緩和した。この方向転換の結果は、同年 7 月に発表された「アルジェリア平和計画」であったが、これは極右勢力の反発のもととなり、11 月に入植者による反ド・ゴール暴動が発生した。1961 年 1 月に本土でのアルジェリア独立をめぐる国民投票において、フランス国民はド・ゴールが提唱するアルジェリアの民族自立を支持した。こうした方針の結果、ド・ゴールが、極右勢力のテロルの的にされるという「悲喜劇的」な展開となった。このことは第五章で再び取り上げるが、アルジェリアの解放に至る過程においてサルトルの「政治的な参加」の影響の大きさは見落とすことができないのである。

アルジェリア人民の「^{オタンティック}正真正銘な自己同一性^{アイデンティティー}」の探求に対するサルトルの「^{アンガジュマン}政治的な参加」に大江は無関心でいらなかった。アルジェリア解放戦争の泥沼化によって 1950 年代後半のフランスを取り憑くようになった「ファシズムの幽霊」に逆らううえでサルトルが書いた一連の雑誌論文において動員された「拍手喝采」や「病毒」のような一連のイメージを意識するようになる。サルトルは、それらのイメージをフランスの内政としての保守主義やフランス流の新植民地主義を批判するうえで動員している。大江はこれらのイメージ、そして「^{オタンティック}正真正銘性^{アンガジュマン}の探求」としての「政治的な参加」のテーマを、日本の、アメリカ合衆国が主導する新植民地主義との従属・協力（＝「同盟」）関係を把握し表現する手段に転用しているのだ。

く根ざした痼疾としかいいようのないものではないか、というのが僕の暗い疑いのである。それがほかならぬ日本人の『中華思想』的感覚に起因しているのであり、その感覚によって想像力の欠如を慰撫されるように思えることを、僕は本土から沖縄へ乗りこんでくる政治的な遊説隊に接するたびに、ひそかに感じてきたのであるが、それはもっと筋みちだてた論理によってしか伝達しえず、しかも僕の内側でなおその論理の熟していない反説のごときものである。（中略）

しかしともかく、われわれ日本人に、いったいなにに由来して生まれたのかあいまいであり、たとえその理由をつきとめえたにしても、それがいったいなにに由来して、いまなおいきつづけているのかは、もっとも複雑にあいまいであるところの、世界の中心としての日本というその感覚があり、例えば僕のそもそものはじめの命題たる、日本が沖縄に属する、というような発想には、肉体および精神の奥底を逆なでされる不愉快を感じるのが一般であるように見えるという観察には、いまも僕は固執する。もしかしたらそれが、日本人の政治的な想像力における最悪の疾患をかたちづくっているところのものにつうじる鍵ではないであろうか？」（同上書、98～99 頁、傍点は引用者による）

大江は、サルトルの反植民地主義理論・「第三世界論」や時事的雑誌論文のみならず、世界の様々の言語に翻訳され「世界文学」と化した——長編『嘔吐』= *La Nausée*、『自由への道』三部作= *Les chemins de la liberté*、劇作の『出口なし』= *Huis Clos*、『汚れた手』= *Les Mains sales* などの——「創作」をも耽読したのであった。そして大江文学そのものが、徐々に「世界文学」と化していった過程には、集中的に精読した一連の「世界文学」のテキストから得た成果を自作において生かすという「小説の方法」と、自作を歴史への「政治的な参加」として創作するという作家意識の作用が大きかったことを次の章で詳しく述べていく。

大江が、1950年代の地政学的「世界地図」における日本の歴史地理的な位置を、「オタンティック アイデンティティな自己同一性」を探求しつつある「第三世界」と比較し、「再配置」するうえで、ある一連の「世界文学」のテキストを動員した作品は、『われらの時代』であった。

第三章 『われらの時代』における「世界文学」の「脱文脈化」と「南」の「地図作成」を中心に

アフリカが真紅にぬられた仰々しい
世界地図、地図だらけの部屋だ。¹⁷⁴

Asia. Just Asia, and the mind trembles.
Who can fill in the picture of Asia? ¹⁷⁵

"You've never been to the Colonies, have you?" he asked her.

"No! Have you?"

"I've been in India, and South Africa, and Egypt."

"Why shouldn't we go to South Africa?" ¹⁷⁶

After Lukacs and Proust, we have become so accustomed to thinking of the novel's plot and structure as constituted mainly by temporality that we have overlooked the function of space, geography, and location.

¹⁷⁴ 大江健三郎、『われらの時代』（1959年）、新潮文庫、東京、2002年、252頁。

¹⁷⁵ Miller, Henry, *The Air-conditioned Nightmare*, New Directions, New York 1945年, 182頁。「アジア！アジアというだけでも心がふるえる。アジアを残りくまなく描きだせるものが果たしてあるであろうか。」（ミラー、ヘンリー、『冷房装置の悪夢』、大久保康雄訳 出版地、東京、新潮社、1954年、187頁。）

¹⁷⁶ Lawrence, D.H., *Lady Chatterley's Lover*, Penguin Twentieth Century Classics, London, 1994年, 215~216頁。

「あなたは植民地へ行つたことはありませんか？」と彼が尋ねた。

「いいえ、あなたは？」

「僕は印度にも南アフリカにもエジプト [埃及] にも行つたことがある。」

「私達は南アフリカへ行つてもいいじやありませんか？」（ローレンス、D.H.、『チャタレイ夫人の戀人』、伊藤整譯、小山書店、1950年、下巻、115~116頁。）

III.1. はじめに

本論文の主な論点の一つは、『われらの時代』(1959年7月)¹⁷⁸ という長編小説が、大江健三郎の他の主要な作品である『個人的な体験』(1964年8月)や『万延元年のフットボール』(1967年7月)のように多くの外国語に翻訳されておらず、海外では広く読まれているわけではないにもかかわらず、大江文学の「世界化」の過程に貢献した作品であるということにある。¹⁷⁹1960年代に出版され、1994年のノーベル文学賞受賞への筋道をつけたこの二作は、大江が『われらの時代』に採用した「小説の方法」を、さらに推^{エラボレート} 敲し、洗練することによって結実した¹⁸⁰、『われらの時代』の延長線上にある作品であると言えよう。

大江文学の「世界化」には、「小説の方法」を重視する一方で、他方ではつねに「世界文学」を見据え、その作用につねに身を曝すという大江健三郎の作家意識の作用が大きかった。『われらの時代』は文字通りそのような作品なのであ

¹⁷⁷ Said, Edward, “Consolidated Vision,” *Culture and Imperialism*, 84 頁.

「ルカーチとブルースト以後、わたしたちは小説のプロットと構造を、主に、時間によって構築されていると考えることに慣れっこになってしまい、空間や地理や位置の機能をみすごしてきた。」(サイード、エドワード、「強化されたヴィジョン」、『文化と帝国主義』、168 頁.)

¹⁷⁸ 以下、引用・頁数は『われらの時代』(1959年)、新潮文庫、2002年による。

¹⁷⁹ 『われらの時代』は現在までに、英語、フランス語やドイツ語などの西欧の言語に翻訳されていない。

¹⁸⁰ 二作の主人公とも障害児が生まれたため、精神的危機を抱えるようになった父として設定されている。『万延元年のフットボール』の密三郎がスワヒリ語の通訳としてアフリカに行く反面、『個人的な体験』の「ぼく」は「アフリカ」へ渡る憧憬を抱いている。このような「アフリカ」のモチーフは、『われらの時代』(そして「見るまえに跳べ」、「喝采」や次章で分析する『叫び声』)におけるアルジェリア解放戦争のモチーフの延長線上にある。

なおかつ、「性」のモチーフが成功していると作者が自認するところの『個人的な体験』は、「性と政治」をテーマにした『われらの時代』周辺の初期作品の延長線上にたっている。

『われらの時代』のように「兄弟物語」である『万延元年のフットボール』の主人公の弟鷹四が、反新植民地主義的な大衆運動となった安保闘争をおこした日本国民を代表して、アメリカ合衆国に謝罪しに行く劇団に参加する挿話がある。つまり大江は、この作品においても、『われらの時代』周辺の作品でしたように、「^{オタンティック}正真正銘な^{アンガジュマン}政治的な参加」と「^{イノタンティック}非・^{デザンガジュマン}正真正銘な^{政治的離脱}政治的離脱」というテーマを「第三世界」問題と絡ませた形で扱ったのである。

る。第一章と第二章で扱った「見るまえに跳べ」や「喝采」においても「世界文学」が意識されていた。第一章において「見るまえに跳べ」の文体は、大江がW. H. オーデンの「見るまえに跳べ」＝“Leap Before You Look”の原文の詩の文体と日本語の訳詩の文体とを比較し、「第三」の文体の創出の可能性を探求することによって成立したことを指摘した。また日本の一般の学生を体現する「ぼく」、「第三世界論」を掲げた西ヨーロッパの新左翼を模倣している日本の学生運動家を象徴する「かれら」、「新植民地主義」の擬人化であるガブリエルらの力関係を表現するうえで、大江がオーデンの詩における「見る」と「跳ぶ」という「政治的な参加」^{アンガジュマン}をめぐるモチーフを活用していることを明示した。第二章では、大江が「喝采」という短編において、フランスの小説家で、反植民地理論家サルトルの「政治的な参加」^{アンガジュマン}と「真正銘性」^{オタンテイシテ}という概念の相互作用を、「第三世界」の文脈における日本の「政治的離脱」^{デザンガジュマン}状態に表象を与えるうえでいかに動員しているかについて分析した。また、大江がバルザックの『あら皮』における一連のモチーフと表現をどのように「喝采」に取り込んでいるかということも開示した。本論文において、この二作におけるこうした「小説の方法」を「引用法」と「意識的誤訳法」¹⁸¹と命名する。

『われらの時代』において大江は、1950年代後半の日本青年を独房で執行の時を待つ死刑囚に喩え¹⁸²、当時形成しつつある「第三世界」とは対照的な、彼らの停滞状態＝「政治的離脱」^{デザンガジュマン}の状態を、性的なイマージュを媒介にして言語化することを試みている。この作品と内的に有機的な繋がりを持つ「見るまえに跳べ」や「喝采」において新規の想像力を発揮するため、「引用法」や「意識的誤訳法」といった「小説の方法」¹⁸³を採用した大江は、この章で詳述するとおり『われらの時代』においてさらに新規の「引用法」¹⁸⁴を動員しているのだ。

『われらの時代』という作品に独自性をもたらすものは、ある一連の「世界文学」のテキストを自作の活性化のうえで活用するという「戦術」なのである。「世界文学に学んだ」作家だと自らを定義する大江¹⁸⁴の初期文学作品の中では、

¹⁸¹ この方法に関しては、「喝采」における (s') *engager* という単語の「誤訳」の問題を分析した第二章で詳述した。

¹⁸² このイマージュはサルトルの「壁」(1939年)におけるスペイン内戦の際に逮捕され、ファシストの反乱軍の兵士たちに銃殺される時を待っている三人の青年たちのそれと重なりあっている。

¹⁸³ 「意識的誤訳法」や「引用法」という命名は筆者によるものである。

¹⁸⁴ 大江は「世界文学は日本文学たりうるか」という『われらの時代』の出版から35年後に、ノーベル文学賞受賞直後に行った講演において、日本の近現代文学の「世界文学性」の問題を取り上げ、「世界化」した日本文学を「世界文学」の地図^{マッピング}において再配置している。この「地図作成」

とりわけ『われらの時代』が「世界文学」の小宇宙のようなものを孕んでいることに注目したい¹⁸⁵。『われらの時代』では、アメリカ文学のヘンリー・ミラー、ジャック・ケルアック、ノーマン・メイラー、エドガー・アラン・ポー、イギリスのD. H. ローレンス、フランスのジャン・ポール・サルトル、ピエール・ガスカール¹⁸⁶などによる「世界文学」のテキストに言及しており、その一部が「第三世界」の問題と絡み合わされている。

こうした方法は『われらの時代』に、日本文学でありながら、日本文学ではないような特質を付与している。この小説が初めて世に出たとき「世界文学」的な雰囲気漂わせるテキストとしての影響を当時の読み手に与えたときと言

の作業において、大江は、大岡昇平と安部公房や自らの文学を、「フランス文学やドイツ文学や英文学から、あるいはロシア文学」といった「世界の文学から学んだ」うえで、「独自の経験に立って日本文学を作った」作家たちの文学と定義する。そして自らも属するこの文学のラインを、谷崎潤一郎・川端康成・三島由紀夫による東西ヨーロッパ、南北アメリカ、さらに「アフリカ、そして特にアジア」から、つまり、全「世界から孤立している」一定の文化ナショナリズムに依拠した文学のラインや、村上春樹と吉本ばななによる「世界全体のサブカルチャーがひとつになった時代の」文学のラインと区別する。(大江健三郎、「世界文学は日本文学たりうるか」、『あいまいな日本の私』、208～209頁。)

¹⁸⁵ 大江の文学の「世界文学」的越境性に関しては、小森陽一著『小説と批評』（世織書房、横浜、1999年）における「差別と排除の言説システム——『芽むしり 仔撃ち』、『《乗り越え点の修辞学》——『万円元年のフットボール』の冒頭分析』、「日本的近代をはねのけて——大江健三郎の文学と『日本』」、沼野充義著「世界（文学）とは何か？」、『UP』、東京大学出版会、東京、2005年）および「世界の中の日本文学——越境それとも境界の変更？」、『W文学の世紀へ：境界を越える日本語文学』、五柳書院、東京、2001年）を参照されたい。

¹⁸⁶ 「しかし靖男は幸運にも、かれの下腹部に育てつづけた芽をしばませることなしに順調な過程へおしあげることができた。急激な上昇、かれの火のように赤く熱い頭のなかで、希望、《広大な共生感》、孤独、充血したゴム棒がぐるぐるまわり勢いよく破裂した。かれ自身の荒い呼吸の音、女の呻き、そしてすべては静かに遠ざかった。かれはもう孤独な思考をつづけなかった。そしてつい今しがたかれをおそった快樂のなごりに溶けこんでいった。これが労働した者の権利である。」(大江健三郎、『われらの時代』、8～9頁、傍点は引用者による)

情人頼子との性交渉を描写する際に南靖男が用いる《広大な共生感》という表現の参照先は、ガスカールである。大江が言及しているのは、“Les Chevaux”という短編において、非人間的な従属と暴力の対象にされた人々の共同体が抱える自由への意志と連帯感の暗喩として用いられた“cette immense communion” (Gaspar, Pierre, “Les Chevaux,” *Les Bêtes*, (1953年初版), Editions Gallimard, Paris, 1978年、12頁)の渡辺一夫、佐藤朔、二宮敬訳による(『けものたち 死者の時』、岩波書店、東京、1955年)日本語訳である。

えるのだ。多くの批評家によって批判的にされながらも、この作品が安保闘争直前の青年世代の関心を惹起し、彼らの知的な育成や世界観の形成に貢献したことは桂秀実が指摘するとおりである¹⁸⁷。

安保闘争の高揚より一年前の1959年に、「第三世界」運動がアフリカ、東アジアや——同年一月にキューバ革命が結実したところの——^{ラテン}中・南アメリカで活発になっていた時代、つまり本論文で「アルジェリア戦争の時代」と呼ぶことにした当時、「^{ディザン}政治的離脱」の停滞状態を経験していた日本の青年たちは、『われらの時代』の「国文学」的な制限を越境する「世界文学」的な雰囲気魅了されたのである。大江はこの小説において、外国文学からの翻訳の言説を自らの文章の空間に取り込み、それを日本語の言説と連動させることをとおし、日本語による「世界言語」¹⁸⁸的な文体をつくり出すことに成功したと言えよう。

¹⁸⁷ 桂秀実、『革命的な、あまりに革命的な——「1968年の革命」史論』、作品社、東京、2003年、71~72頁。

¹⁸⁸ 例えば、小森陽一が、大江文学が日本文学として位置づけられることの不適当性に触れ、それを「日本語文学」として再定義していることも、この「世界言語」的な文体の仕掛けの問題と照応している。（小森陽一、「日本的近代をはねのけて——大江健三郎の文学と『日本』」、『小説と批評』、世織書房、横浜、1999年を参照。沼野充義の『W文学の世紀へ：境界を越える日本語文学』もこのことに詳しい）

なお、先にも触れたところの「世界文学は日本文学たりうるか」において大江は、「世界言語」の問題を、「世界文学」や人間コミュニケーションのレベルにおける「^{リングア・フランカ}共通語の必要性」という観点から取り上げる。どの作品が「世界文学」としての価値を持つか、そしてどの作品がそれを持たないか判断することの困難さに触れ、「世界文学という定義のかわりに、世界言語ということを考え」るべきと提唱する。大江は、ほとんどの国の文学が、当の国にある多くの言語の一つである「国語」によってのみ、実際には存在することを指摘する。このことは、単一民族の幻想を醸し出す。もとより、アイヌ語や琉球語の文学は、日本の単一民族説を無効にする。大江はこのことを認めたくて、一定の世界言語を夢見ようと望む。例えば大江は、渡辺一夫の翻訳で繰り返し読む『パンタグリユエル物語』からの一挿話を例に出す。

「(中略) 繰り返えし渡辺一夫の翻訳を読むのですが、パンタグリユエル王が、あの愉快的パニユルジュと初めて会うシーン。旅をしてきたパニユルジュはお腹がすいています。お酒も飲みたい。さらにベッドに入りたい。(中略)

そこへパンタグリユエル王の一行が通りかかるのです。パニユルジュは、外国人が来たと思って、自分の国の言葉とは違う言葉で話しかけます。はじめてドイツ語で話す。(中略) それからイタリア語、スコットランド語、バスク語、オランダ語、エスパニア語、デンマーク語、ヘブライ語、古代ギリシャ語、ガスコニュー語、ハンガリア語、ブリターニュー方言と次々に話しますが、いずれも通じない。とうとうあきらめて、フランス語で話したおかげで、食べ物と酒とベッドを

そしてこの世界言語という表現手段は、同時代の地政学的な力関係を把握し表現するという大江文学の意図を達成するうえで不可欠だったのである。

『われらの時代』は帝国主義国家の、「周辺世界」に対する直接的かつ実質的な支配（＝旧植民地主義）を、間接的且つ経済的、軍事的な支配に組み替える戦略を採用して形成されつつある「新植民地主義体制＝「北」（の西側）と、それに逆らおうとする「第三世界」＝「南」という新規のカテゴリーの権力関係を日本の青年の眼を通して描かれた小説である。『われらの時代』という題名に暗示されるような歴史認識とともに、この小説は「第三世界」運動とは密接不可分の関係にある地理認識を併せ持っている。すなわち、「北」の支配と搾取からの自立を目指す「第三世界」＝「南」を焦点とする「世界地図」が作成されるこの作品は、発現しつつある「第三世界」という同時代の地政学的な現象を認識しているテキストなのである。

『われらの時代』においては、20世紀の一連の「世界文学」のテキストを引用や言及という形で、一定の批判的な距離から導入し、それらを「第三世界」運動の文脈によって「日本」を位置づけ直すために活用するという大江の「物語戦術」を顕著にみることができる。

III.2. 「世界文学」における「姿勢と言及の構造」としての「地図作成」^{マッピング}

「世界文学」とは、文化的のみならず地理的なカテゴリーでもある。そもそも「世界文学」＝*Weltliteratur* とは、ゲーテが書記のエッカーマンとの対話の際に用いた、簡素な発言にのみ基づく概念ないしは「大志」^{アンビション}¹⁸⁹であった。ゲーテは、ドイツ文学という「国文学」の自己準拠的閉鎖性や偏狭さを越境することが「国文学」を外国の文学の影響に曝すことに限って可能となると主張し、「国文学」の終焉と『世界文学』の時代の始まりを宣言したのである。¹⁹⁰

もらった。」

大江は、「世界中に通じる普遍的な言葉がありえるかどうかについてのラブレターの考え方」を含意するこの挿話を援用することにより、自らの「世界言語」のヴィジョンを解説している。（大江健三郎、『あいまいな日本の私』、213～215頁。）

¹⁸⁹ “ambition of *Weltliteratur*,” (Moretti, Franco, “Conjectures on World Literature”, *New Left Review* 1, January-February 2000 年, 54 頁)

¹⁹⁰ ゲーテのこの発言は、『ゲーテとの対話』(*Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*, 1835 年) の「1827」という章の「1月31日付」の対話に含まれている。

「われわれドイツ人は、われわれ自身の環境のような狭い視野を抜け出さないならば、ともするとペダンティックなうぬぼれにおちいりがちとなるだろう。だから、私は好んで他国民の書を

「世界文学」という「国文学」の制限を越境することを提唱する文学観は、「文学」という文化的なカテゴリーにおける一種の「始まりの現象」であった。しかしサイドは、ゲーテの考案したところの「世界文学」は、「偉大な書物」＝ *great books* という考え方と、「世界のあらゆる文学という考え方」の間を揺れ動く両義的な意味¹⁹¹を併せ持っているとしている。¹⁹²そのうえで、サイドはこの概念に依拠して確立されていった学問分野や「世界文学」の正典の選択過程などにおける西洋中心主義の問題に着目する。「世界文学」と「地理」の相互作用を開示することはサイドの『文化と帝国主義』の主な論点の一つとなっているのだ。つまり、サイドは「世界文学」というカテゴリーを全否定はしないものの、その歴史的な展開過程のなかで帯びるようになった意味に対してはかなり懐疑的なのである。サイドによると 20 世紀において、「救済的な役割を」「獲得したこの有益的な」「ヴィジョン」は、地理学の観点からすると、「植民地地理の理論家たちが語っていたこととも照応している」¹⁹³。また「比較文学」という学問分野の「世界観」にも特定の地理のヴィジョンが包含されている。¹⁹⁴

渉猟しているし、誰にでもそうするようにすすめているわけさ。国民文学というのは、今日では、あまり大して意味がない、世界文学の時代がはじまっているのだ。だから、みんながこの時代を促進させるよう努力しなければだめさ。[*Nationalliteratur will jetzt nicht viel sagen; die Epoche der Weltliteratur ist an der Zeit, und jeder muß jetzt dazu wirken, diese Epoche zu beschleunigen.*]」（エッカーマン、ヨハン、P.、『ゲーテとの対話』、山下肇訳、岩波書店、東京、1968～1969年、292頁。）

¹⁹¹ サイド、エドワード、W.、「帝国を世俗的な解釈とむすびつける」、『文化と帝国主義』、(1)、102頁。

¹⁹² *What is World Literature ?* (2003) の著者、比較文学者のデイヴィッド・ダムロッシュは、「世界文学」という概念の両義性にゲーテ自身の「コスモポリタニズム 世界主義と愛国主義、ジンゴイズム 古典主義とロマン主義、多岐にわたる知的好奇心と自己陶醉の独断主義」(Damrosch, David, *What is World Literature ?*, Princeton University Press, Princeton, 2003年、1頁) の間を揺らいでいる両義性の影を見てとっている。ゲーテは、「国文学」を外国文学の影響に曝すことを提唱しながら、それに限界を設けている。古代ギリシア文学以外の「非ヨーロッパ」地域の文学の読書を推奨する一方で、それを創作のモデルにすることを禁じているのだ。(この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

¹⁹³ サイド、エドワード、W.、「帝国を世俗的な解釈とむすびつける」、『文化と帝国主義』、(1)、106頁。

¹⁹⁴ 「世界文学」のヴィジョンは、戦後の比較文学研究の活発化に拍車をかけたエーリヒ・アウエルバッハの『ミメシス』(1953年) に着想を与えた。この書物を中心にして展開していった「比較文学研究の核にある西洋文学という考え方は、ある種の歴史概念だけに光をあて、それを

「世界文学」というゲーテが初めて考案したところの概念ないしは「^{アンビション}大志」は、「西洋文学」という、「国文学」よりもさらに大規模な中心指向性へと変質していった。中心指向性とは、帝国主義という構造の、文化のレベルにおける権力装置である。この装置は、地球における「周辺」の地域（＝「南」）を支配し、統治すべき世界の「中心」として自らを位置づける広義の「ヨーロッパ」（＝「北」の西側）という観念に根拠と権威を与え、それを促進する役割を果たしてきた。「世界文学」におけるこうした「帝国主義」と「文化」といった二つの領域の相互作用を浮き彫りにするうえで、サイドは「^{フレーズ}姿勢と言及の構造」(*structures of attitude and reference*) という「一句」を利用している。

もし主要な[^{メトロポリタン}宗主国]文化のいくつか(中略)を、帝国を求める(そして帝国をめぐる)闘争という地理的コンテキストのなかで研究するならば、そこに明確な文化^{カルチュラル・トポグラフィ}地形学をみとめることができるだろう。この地形学をわたしは念頭においている。とりわけ「^{フレーズ}姿勢と言及の構造」という一句をつかうときには。(中略)つまり、わたしが語ろうとしているのは、位置づけと地理的な言及の構造が、文学とか歴史とか民族誌の文化言語のなかに、いかにしてあらわれるかということである。ふつうなら相互に関係づけられないが、あるいは「帝国」の公式のイデオロギートとも関係づけられることのない複数の作品を横断するかたちで、そのような構造があらわれるのだが、これはときには相互言及の網の目をとおして、またときには慎重な調査の結果、特定できるのである。¹⁹⁵

それぞれが異なる動機、様式や地理歴史的な文脈を持ちながらも、イギリス、フランス、アメリカ合衆国といった「北」(の「西側」)の(世界)文学が共有している「^{フレーズ}姿勢と言及の構造」は、次のように現象するのである。

劇的に示し、祝福している」反面、「その概念を強化しているところの、もっとも根源的地理的かつ政治的現実」を隠蔽する。(同上書、105頁)

(アウエルバッハがレオ・シュピツァなどのような多くのユダヤ系研究者とともに、ファシズムの温床に変わりつつある西ヨーロッパからケマリスト革命後のトルコ共和国に避難し、イスタンブール大学でロマンス語を指導するときに大半を執筆した『ミメシス』は、ヨーロッパの現実主義と合理主義の古代ギリシアから近代へかけての展開を描いた巨大な文学史論である。エミリー・アプターの“Global Translatio: ‘Invention’ of Comparative Literature, Istanbul, 1933”, *Debating World Literature*, Verso Books, 2004年、はこのことに詳しい)

¹⁹⁵ サイド、エドワード、W.、「強化されたヴィジョン」、『文化と帝国主義』、114頁。(傍点は引用者による)

例えばイギリス文化の場合、スペンサーやシェクスピアやデフォーやオースティンなどが執拗に関心をよせるのは、社会的に望ましい権力的な拠点を宗主国のイギリスあるいはヨーロッパに設定し、つぎに企図とか動機とか発展等の理由を持ち出して、そのような権力拠点を遠隔の「国々、ないしは」「周辺」世界、それも望ましいがしかし劣等なものと言及されつづけられる世界（アイルランド、ヴェネチア、アフリカ、ジャマイカなど）に接続することである。このように周到に維持され反復される言及に寄り添うようにして、支配や管理や利益や魅惑や適合性に関するさまざまな姿勢が存在し、この姿勢が、十七世紀から十九世紀のおわりまで驚くほど力を持ちつつ発展するのである。このような構造は、あらかじめ存在していた（それゆえに陰謀としてある）計画から発生することはないし、前もって存在するそのような計画に作家たちがただのっかるといふことでもない。そうではなくて、そのような構造は、イギリス文化が、自らの文化的アイデンティティを地理的にみた世界のなかで構想するという趨勢と、分かちがたくむすびついているのだ。同じような構造は、フランスやアメリカ文化のなかにも、育まれていること——たとえばイギリスとは理由が異なり、またはつきり様式が異なっていると——が認められるだろう。¹⁹⁶

イギリス、フランス、アメリカ合衆国の文学は、それぞれ異なる歴史や地理的（地政学的）な文脈において、「周辺世界」に対し「位置づけと地理的な言及の構造」を応用している。このことを仲立ちにして、「北」（の「西側」）の一部としての自国（ないしは広義の「ヨーロッパ」）を世界の「中心」、「権力的な拠点」として設定し、この作業によって「みずからの文化的アイデンティティ」を構築しているのだ。また宗主国^{メトロポリタン・センター}中枢としての自国の読者に加え、翻訳を媒介に世界各国の読者にそれを押し付けることは、「世界文学」の効果の一つである。言うまでもなく、このような「言及の構造」は、帝国主義政治の実践のレヴェルにおいてそれらの「周辺世界」に対して遂行される支配と搾取の非合法性を相対化する作用がある。「世界文学」における「言及の構造」と平行して作動するのは、宗主国^{メトロポリタン・センター}中枢特有の支配や搾取に関するさまざまな「姿勢の構造」なのだ。そして、この二つの構造の連動によって成立するのが「姿勢と言及の構造」である。

本論文の批評的なカテゴリーに従って述べると、「姿勢と言及の構造」を豊

¹⁹⁶ 同上書、113~114頁。（傍点は引用者による）

富に包摂した「世界文学」において作成される「世界地図」は、「周辺」(＝「南」)の民族や地域を「支配されるべき人種／民族と地域」として位置づける一方で、広義の「ヨーロッパ人」を「永続的にみずからの領土を越えて膨張してゆくべき主体としての人種／民族」として位置づけた西洋(＝「北」の西側)の地政学のヴィジョンと照応している。「姿勢と言及の構造」といった装置を枢軸にした中心指向的な「世界文学」は、ヨーロッパと北アメリカとしての「北」(の西側)の位置が強調された「世界地図」を潜在させてきたと言い換えることが可能である。

先述したサイドの「世界文学論」は、「世界文学」というカテゴリーにおける西洋中心主義の帰趨による屈折した展開を呈示することのみに留まらない。この「世界文学論」は、「周辺世界」の作家ら(ないしは思想家)、つまり歴史的に「第三世界」文学と命名されることになったカテゴリーを作った作家らが、このような「地理」をいかに批判的に自らのテキストの文脈コンテキストに導入し、それにいかに応えたかということを示すものなのである。

大江健三郎の『われらの時代』には、「北」(の西側)の「世界文学」での西洋中心主義に逆らって書くという「第三世界」文学の作家のそれに照応するような構えが見てとれる。本章においては、とりわけ北アメリカ文学のヘンリー・ミラーとイギリス文学のD.H.ローレンス、そして、第四章においては北アメリカ文学のジャック・ケルアックを扱い、そのテキストに内在される、「姿勢と言及の構造」に依拠する文学表象の形式を取った「世界地図」が、いかにして『われらの時代』のテキストに導入され、またこの作業がいかなる効果をもたらしたかについて分析する。

III.2.1 『われらの時代』における「世界地図」のモチーフ

本章の題辞エピグラフに引用した一節においてサイドは、ハンガリーの哲学者・文学理論家ジェルジ・ルカーチとフランスの小説家マルセル・ブルースト以後、西洋の文学研究者が「小説のプロットと構造を、主に、時間によって構築されていると考えることに慣れっこになってしまい、空間や地理や位置の機能をみすごしてきた」¹⁹⁷と指摘する。彼はまた20世紀の文学研究が物語構造のレヴェルにおける「時間」に重点を置く趨勢となり、歴史との相関関係における「空間」／「地理」／「位置」の要素が後景に退けられてしまったことを批判している。本章では、サイドのこのような問題意識に導かれながら『われらの時代』に

¹⁹⁷ 同上書、168頁。

おける「地理」の問題に焦点を合わせることにする。

＊

『われらの時代』のテキストに批判的に導入されているミラー、ローレンスやケルアックのテキストは、それぞれが異なる形で「姿勢と言及の構造」に基づく「世界地図」を内包している。そして『われらの時代』には、こうした「姿勢と言及の構造」に対して「周辺」の位置から「応える」という意図があるのだ。『われらの時代』の読み手が「参加」させられる読書行為の形式は、一定の「地図作成」の作業なのである。言うまでもないことだが、この「地図作成」は深い歴史認識をも必要不可欠の条件とする。『われらの時代』のテキストにおいて、断片的なモチーフの形で潜在する「世界地図」は、読み手の積極的な「参加」によって作成されるものである。物語におけるこのような「小説の方法」は、「地図」のモチーフの後半部分においての劇的な登場により読み手に「露呈」する。小説におけるこの「手法の露呈」の部分に言及する前に、小説の主なプロットを紹介する必要がある。

『われらの時代』には、二つの並行する物語の流れがみられる。一つは、23歳のフランス文学科の学生南靖男の世界である。この流れでは、外国人相手の娼婦を職業にしている情人兼「スポンサー」頼子と彼の「性的」な関係や、「アルジェリアの実情を日本人に訴えるために」来日し、「アルジェリアの民族戦線」=FLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の「極東代表部を作ろうとしている」¹⁹⁸「アラブ人」と「民学同」という学生組織の指導者で「共産主義者」である八木沢との「政治的」な関係が描かれている。南靖男は、駐日フランス大使館とフランスの保守的な出版社が共同で主催した懸賞論文に「フランス文化と日本文化の相互作用」をテーマにした論文を応募して入賞し、褒賞としてフランスに三年間留学する権利を与えられる。フランスでのFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の宣伝活動というアルジェリア解放戦争への「政治的な参加」をアラブ人に依頼された南靖男¹⁹⁹は、「第三世界」＝「南」との連帯か、フランス＝「北」（の西側）との協力かの選択を迫られている。南靖男がフランスへ行くことを嫌が

¹⁹⁸ 大江健三郎、『われらの時代』、127頁。

¹⁹⁹ アラブ人は南靖男を彼の帝国主義と結ぼうとする共犯関係を糾弾してから彼に次の様なFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の闘争への「政治的な参加」の提案をする。

「あなたを招いた保守系の出版社に対して、アルジェリアのわたしの同胞を支持するむねの説明をしてくれたら、そしてあなたが一人の義勇兵としてFLNに参加してくれたら、宣伝活動という面だけに限ってもわたしの同胞は非常に利益をこうむることになるでしょう」(同上書、167頁。)

ったため癩癩^{かんしゃく}を起こし無理心中をはかった頼子に反発してアラブ人との連帯を選択するまで、この緊迫した状態は解かれることはない。

もう一つの物語の流れは、南靖男の弟で16歳の南滋がピアノを担当している《不幸な若者たち》^{アンラッキー・ヤングメン}というジャズ・トリオをめぐるものである。小説の後半部で、南滋が《不幸な若者たち》^{アンラッキー・ヤングメン}の残りの二人である、クラリネットの田谷康二とドラムスの高征黒が（自）爆死することに終わる虚無主義的なテロリズムの遊^{ゲーム}びに巻き込まれてしまい、助けを求めに彼が兄・南靖男のもとに行くことによって、この二つの「南」の物語の流れが合流する。この二つの物語の合流点において「世界地図」のモチーフが登場することや、その地図に地球の「南」に位置する「アフリカ」が強調^{ハイライト}されていることに注目すべきである。

南靖男とアラブ人は、南滋をアラブ人のアパートに連れて行って、動揺している少年をなだめるため睡眠薬を飲ませる。二人が出かけてから眼を覚ました南滋が居間へ出ていくと、壁に貼りつけられていて、まるで彼を威嚇するような「世界地図」が目に入ってくる。

兄たちが出て行くけはいは夢うつつように聞いていたが、居間に誰もいないとなると後ろめたい変な気分だった。アフリカが真紅にぬられた仰々しい世界地図、地図だらけの部屋だ。²⁰⁰

III.2.2 ミラーのアジアの「地図作成」^{マッピング}の「再地図作成」^{リマッピング}——日本の「第三世界」＝「南」の地図からの「消去」をめぐる

『われらの時代』の3章において、南靖男が、頼子をアメリカ人実業家ウィルソン氏に委ね、「客」が家を去るまで時間をつぶすために、夜の暑く暗い「アジア」の町を彷徨^{ほうこう}したあげく、ジャズ喫茶に入ってH.ミラーの本を読み始める場面が登場する。この本の題名は、『われらの時代』のテキスト内で言及されていない。また、先行する大江研究においても、明らかにされたことがない。しかし『われらの時代』における引用文を手掛かりにすると、この作品が *The Air-Conditioned Nightmare* (1945年)²⁰¹であり、『冷房装置の悪夢』²⁰²という題名の下に邦訳され、1954年に新潮社から出版されたものと断定することができる。

²⁰⁰ 同上書、252頁。

²⁰¹ Miller, Henry, *The Air-Conditioned Nightmare*, New Directions, New York, 1945年。

²⁰² ミラー、ヘンリー、『冷房装置の悪夢』、大久保康雄訳、新潮社、東京、1954年。

る。

パリにおける 10 年近くのミラーの国外居住生活は、第二次世界大戦の勃発を契機に中断され、彼は帰国せざるを得なくなった。帰国してから彼は、アメリカ合衆国の中心地であり、ある意味特別な環境のニューヨークとは異なる「本物の」^{オタンティック}「アメリカ」を（再）発見する意図をもって全国を対象にする自動車旅行に出た。『冷房装置の悪夢』は、この三年にわたる自動車旅行^{モータートリップ}をめぐるノート^{モータートリップ}を題材にして書かれた。『冷房装置の悪夢』では、アメリカ、フランスやイギリスのみならず、アジアをはじめとする世界の各地域への言及があり、この本は一定の「世界地図」を呈示している。

『われらの時代』において、南靖男の朗読によりテキストに導入される引用文は、『冷房装置の悪夢』に所収されている「私のモバイルの夢」＝“My Dream of Mobile”というテキストの一部である。このテキストは友人によってすすめられたマルコ・ポーロの『東方見聞録』(Il Millione, 1300 年)における、13 世紀の世界最大都市であったとされる「支那」^{チャイナ}の杭州市 (Hang-cheu) を取り上げた章を、ミラーがニューヨーク公立図書館に読みに行く場面から始まる。マルコ・ポーロが描写するところのこの古都は、ミラーの友人が時空を超えて国外居住^{エキスパトリエイト}をすることを望む理想的な時空間である。テキストの前半ではマルコ・ポーロの文章やとりわけイギリスの詩人・小説家ジョン・メイスフィールドによる序における杭州市やアジアの描写に関する感想を読み手に伝え、そして後半では、子供時代から行きたがっていたアメリカ合衆国の「南」部に位置するモバイル湾への旅をめぐる感想を綴っている。²⁰³

『われらの時代』の 3 章は、南靖男がミラーのマルコ・ポーロのアジア表象に関する感想を読み手に朗読することで開幕する。

《アジア！アジアというだけでも心がふるえる。アジアを残りくまなく描きだせるものが果たしてあるであろうか。マルコ・ポーロは無数の詳

²⁰³ モバイル湾という言葉は、アメリカの国史において重要な地名であるのみならず国内外への旅の欲望の意味合いを持つ暗喩として——言うまでもなく *mobile* という単語には「移動式の、移動性をもった」という意味もある——も用いられる。モバイル湾は、奴隷制廃止に反発し独立宣言をした南部州と北部州との間における確執を契機に勃発した「南北戦争」(1861～65 年)の運命を決定する地政学的に重要な地域である。

1864 年 8 月に、ミラーのテキストにも明記されているファラギー北軍艦隊司令官が指揮した船隊が、南下していった、モバイル湾の戦いの際に(南部諸州が構成した)アメリカ連合軍が防衛している港を、南部の最後の主要な港として占拠した。テキストでは、この軍人はミラーの感情移入の対象となっているのである。

細をつたえているが、それはバケツのなかの一滴にしかあたらない。じらい、どんな大事業を完成しようと、どんな奇跡を働こうとアジアという言葉は、人々の記憶に、比すべくもない豪華、絢爛の洪水を、どっとばかりあふれさせる。預言者、学者、賢者、神秘家、夢想家、狂人、偏執狂、暴君、皇帝、征服者。ヨーロッパの、はかり知れぬほど偉大なそれらすべてはアジアから起こったのである。宗教、哲学、寺院、宮殿、城壁、砦、絵画、壁掛、宝石、薬物、酒、乳香、衣類、食料、調理法、金属製品、大発明、すぐれた言語、偉大な書物、偉大な天地創造説。すべてアジアから出たのである。星すらアジアから出た。神々や半神半人がいた——それは何千、何万といた。また神人たちもいた。化身や先覚者たちもいた。アジアは啓示をあたえられた。いまもなおあたえられている。もし十三世紀においてアジアが人々の思い描く夢のようなものであったとしたら、こんにちは、なおさらそうである。くめどもつきない。》

204

ここでは、『東方見聞録』におけるアジアの描写に触発されたミラーが、(ユーモアを豊富に含んだ)誇張したロマン主義的な「アジア」像を作り上げている。ミラーがこのような「^{マッピング}地図作成」をする上で、マルコ・ポーロの前近代的な中世の観点よりは、むしろイギリスの詩人・劇作家・小説家のメイスフィールドがつけた「序」における近代的な(「姿勢と言及の構造」による)「アジア」像の方に依拠している。

正直にいうと、私はマルコ・ポーロに失望した。退屈なのである。三十年ほど前にも、これを読もうとして、同じ結論に達したのをおぼえている。しかしながら、今度、私に興味をおぼえさせたのは、ジョン・メイスフィールドの解説であった。「マルコ・ポーロが東洋へ行った当時」とメイスフィールドは書いている。「中央アジアは隅々まで豪華、絢爛に満ちあふれ、いろいろな国民といろいろな王様とで、まことに騒がしく、さながらわれわれの描く夢に似ていた」私はこの文章を幾度かくり返し読んだ。興奮をおぼえさせるのである。こんな文章を私自身も書いてみたい。簡潔な筆致で、メイスフィールドは東洋の豪華絢爛を目のあたりにした当のマルコ・ポーロが伝えることに失敗している光景を——私に——まざまざとよみがえらせてくれるのだ。²⁰⁵

²⁰⁴ 大江健三郎、『われらの時代』、63~64頁。

²⁰⁵ ミラー、ヘンリー、『冷房装置の悪夢』、185頁。

つまり、ミラーによれば、中世の「東洋学者」としてのマルコ・ポーロはアジアの光景を伝えることに「失敗」したのであるが、1908年という、「周辺世界」（＝「南」）の大半が、大英帝国やフランスをはじめとする西ヨーロッパの帝国主義国家によって植民地支配下に置かれた時点において、メイスフィールドが「簡潔な筆致」でつけた序がミラーに興奮をおぼえさせたわけである。さらにミラーは、「私はこのメイスフィールドの序文から、もうすこし引用してみたい」という。その引用文は次のようになっている。

「この世界の他の半分の異邦人のなかをさまよい、キャンプ・ファイアーのかたわらで彼らのパンを食うのは、ロマンチックなものとされている。じっと坐って動かぬ生活によって、とんだ見当ちがいの行動への憧れを植えつけられた人々は、ロマンスを高く買いかぶりすぎているとはいえ、たしかにそのような行動にはロマンスがある。マルコ・ポーロは異邦人のあいだを放浪した。だが誰でも（勇気と行動力さえあれば）同じことができるわけである。放浪それ自体は放縦の一形式にすぎない。もしそれが人智の獲得にもつけ加えることがなければ、あるいは世界のいずれの土地の空想上の〔所有の契機〕〔=*the imaginative possession of some part of the world*〕²⁰⁶を他の人に与えることがなければ、放浪は無無益の習癖である。知識の獲得、事実の集積もつまらぬ粘土を高貴な永遠な黄金に変える錬金術を知っている少数の人々にあってこそ、はじめて貴いのである。…… 驚異を見る人こそ、すばらしい旅行家なのだ。そして驚異を見たのは、世界史上、わずか五人の旅行家がいるだけだ。他の人たちは、鳥やけもの、川や湖水、土地とその（地方の）繁栄を見ただけである。五人の旅行家とは、ヘロドタス、ガスパー、メルキオール、バルタザール、そしてこのマルコ・ポーロである。マルコ・ポーロの驚嘆すべきことは、彼がヨーロッパ人の知性のためにアジアを創り出したことである。〔=*The wonder of Marco Polo is this – that he created Asia for the European mind....*〕²⁰⁷ ²⁰⁸

メイスフィールドは、「世界史上、わずか五人しか」いない²⁰⁹旅行家の一人と

²⁰⁶ Miller, Henry, *The Air-conditioned Nightmare*, 180 頁. (斜体強調は引用者による)

²⁰⁷ 同上書, 180 頁. (斜体強調は引用者による)

²⁰⁸ ミラー、ヘンリー、『冷房装置の悪夢』、185～186 頁. (傍点は引用者による)

²⁰⁹ 14 世紀に「支那」の杭州市を含む世界を、マルコ・ポーロやその他の当時の旅行家よりも

して高く評価しているマルコ・ポーロを、ヨーロッパ人の知性のためにアジアを創り出した」人物として位置づけている。メイスフィールドによると海外旅行の体験とは、世界のいずれかの土地を「空想上」「所有」することを意味している。このことからメイスフィールドが、「アジア」や「周辺世界」＝「南」を西洋中心主義的な観点から「地図作成」^{マッピング}していることが判明する。メイスフィールドは、サイドが指摘するところの「世界文学」と「植民地地理」とを結びつけるような帝国主義的な「姿勢と言及の構造」に依拠しているのだ。そして、彼の言葉を援用するミラーのアジア表象の背景には、この「周辺世界」＝「南」に対する「姿勢と言及の構造」があることを見逃してはならない。要するに、メイスフィールドは、マルコ・ポーロの中世²¹⁰における「アジアのヴィジョン」を、西洋の帝国主義が「周辺世界」の大半を支配下に置くことに一時的に成功した時代において「再評価」しているが、こうしたメイスフィールドの「アジアのヴィジョン」をミラーは、「新植民地主義」という新しい「帝国の時代」が始まろうとしている 20 世紀半ばにおける「アジア」を「地図作成」^{マッピング}するうえで利用しているのだ。

ここでなによりも注目すべきは、ミラーのアジアに対する関心が、新植民地主義を主導する大国としてのアメリカ合衆国の第二次世界大戦後における、「周辺世界」とりわけ中国^{チャイナ}をはじめとする極東に対する地政学的な関心に照応しているところにある。例えば、「もし十三世紀においてアジアが人々の思い描く夢のようなものであったとしたら、こんにちは、なおさらそうである」と言うミラーによるアジアは、マルコ・ポーロのような西洋人を魅了する天国でもあれば、その領域に踏み入り、空想上あるいは実質的に取り囲み、所有しようとした西欧人を発狂させる潜在力を持つ地獄でもあるのだ。ミラーが、13 世紀の「支那」^{チャイナ}を中心に据えるアジアを 1940 年代のアジアに結びつける。つまり、彼による「アジア」とは、超歴史的且つ不変の連続体のようなものなのである。これらの言及を、イギリスやフランス（そしてアジアでは日本）をはじめとした帝国主義国家が頼ってきた、旧植民地主義の停滞を暗示するものとして読むことは、十分に可能である。「『アジア』＝『周辺世界』＝『南』が古い方法で支配できない、アジアを支配するには新たな方法が必要だ」という見解見識は、第二次世界大戦の攻撃からほとんど物理的に無傷であり、国際的金融独占体の

はるかに広く遍歴した北アフリカの旅行家のイブン＝バトゥータを、メイスフィールドも、彼を援用するミラーも、無視しており、そうすることによってこの著名な旅行家を読者の眼に不可視化している。

²¹⁰ マルコ・ポーロがおかれた時代とは、(東アジアでは「支那」、西アジアではアラブ、トルコなどの東洋帝国という意味で)「東風が西風を圧していた時代」であった。

指導的役割を担うようになった、アメリカ合衆国の国際関係の専門家たちが立てた地政学的な戦略であった。その結末が軍事同盟や経済を中心とする新植民地主義なのだが、その新たな支配形態の到来がミラーのテキストによって暗示されているかのようである。

なおかつ、ミラーのテキストには、アメリカ合衆国を上位に配置し、英仏をその下位に配置する暗示的な「北」（の西側）のヴィジョンがある。²¹¹そしてこのテキストに描かれているアジアは、こうしたヒエラルキーの形で構築された「北」（の西側）の他者として布置されていると言えよう。周知のとおり、戦後のアメリカ合衆国は、アフリカの新植民地的な支配においてイギリスとフランス、そしてアジアの新植民地的な支配において日本と協力した。

しかしながら、「第三世界」問題を扱う小説である『われらの時代』のテキストに移植されると、この引用文は、アジアに対する「姿勢と言及の構造」といった背景から解放される。ミラーの引用におけるアジアの「地図作成」は、『われらの時代』において現行の「第三世界」民族解放運動と結びつけられるのである。すなわち大江は、ミラーのテキストにおける「アジア像」を解体し、1950年代後半の「第三世界」に造りかえているのだ。そしてこのことは、日本の「世界地図」における位置づけを確認する「戦術」にほかならない。例えば物語内容のレベルでは、ミラーの文章を読む南靖男は、『東方見聞録』の著者マルコ・ポーロが中央アジアや「支那」のみならず極東に位置する列島である「日本」に言及するのにもかかわらず、『冷房装置の悪夢』の著者ミラーが日本に触れていないことに意味を見いだしている。南靖男は、「アジア、アジアというだけでも心がふるえる」と唱えるミラーの文章に次のように応える。

おれの心はアジアという言葉にふるえない、と靖男は苦い味を舌にのこす後悔のような感情といっしょに考えた。《この後悔、それは日本の青年の生まれつきの後悔、皮膚が黄色いということへの後悔のようなものだろう。しかし黄色い皮膚を選んだのは神であるが、アジアの民族という言葉にふるえぬ心をえらんだのは明治以後の日本であり、おれだ。ヘンリー・ミラー、このあまりにも西欧的な男の胸をジンのように焼くアジアは日本をふくまない、それは蒙古、チベット、インド、支那だ。

²¹¹ 例えば、ミラーのアメリカに異常な関心を持つフランスの友人はその一例である。つねにアリゾナについて語るよう執拗にミラーに要求してくるこの友人を、ミラーはスタインベックの『二十日鼠と人間たち』(Mice and Men, 1937年)の「知恵おくれ」の作中人物レニーに喩えている。この友人は戦時である当時、徴兵されており、ヨーロッパを「解放」するためにイギリスに駐屯している米軍の兵士に対しても、アリゾナについて執拗に訪ねるだろうと推測している。

日本は心をふるわせるアジアではない。心をふるわせ胸をうつアジア人は日本の土地に生まれてこない。日本の経済、日本の文化、それは心をふるわせ胸をうつ切実に緊張したエネルギーを所有していない。日本の青年は、経済や文化をつうじて胸をうつ希望を育てることができない。政治をつうじて？それはまるっきり茶番だ。》²¹²

南靖男の自国をめぐる独白^{モノローグ}において、ミラーの対アジア「姿勢と言及の構造」が、きわめて否定的な日本の文化的経済的なイマージュを構築するために転用されている。南靖男の語りに即して読むと、自民族中心主義的な「日本人論」^{エスノセントリック}／「日本文化論」にしか見えないこの独白^{モノローグ}は、一部の先行する研究で対米従属関係による「民族的屈辱」^{ナショナル・ヒューミリエーション}として定義されてきた。²¹³しかし、第一章でも指摘したとおり、そのようなアプローチでは、「第三世界」問題やそれと密接不可分の関係にある新植民地主義体制を、主な比較の基準点^{レフェランス・ポイント}として設定する『われらの時代』が呈示する地理認識のヴィジョンが後景に退けられてしまう。ここでは、南靖男の「屈辱感」というモチーフを「第三世界」の地政学という文脈において位置づけ直すべきである。

『われらの時代』で表象されている戦後日本は、もとの文脈から切り離されて「第三世界」の文脈に転置されたミラーの「アジア」とは質を異にする、新植民地主義を主導するアメリカ合衆国の文化、とりわけサブカルチャーの支配下に置かれた空間である。例えば、頼子がウィルソン氏に売春している間に時間をつぶすために入った喫茶店では、エルヴィス・プレスリー²¹⁴やモダン・ジャズが流れており、南靖男はそれを耳にしながらか、頼子と「客」との性交渉を考えつつ、あたかも「自瀆行為」を行っているかのように「ヘンリー・ミラー」を読んでいた。（そしてこの物語の流れと同時に、弟の南滋はジャズ・バーでジャズ・ライブを演奏しているのである。）「疲労からやどかりのようにとじこもって殻のなかでぐったりしてヘンリー・ミラーを読んでいた」南靖男は、情人と客との売春としての性交渉に遠隔操縦されて、自瀆行為を促される「傀儡」として描かれている。²¹⁵

²¹² 大江健三郎、『われらの時代』、65頁。

²¹³ 松原新一の『大江健三郎の世界』、篠原茂『大江健三郎文学辞典』や『大江健三郎論』、^{こうの}紅野謙介の『われらの時代』——クリエの森」を参照。

²¹⁴ 「再生装置はエルヴィス・プレスリーの《ざりがに》をやっていた、女声コーラスが犬に噛みつかれた幼女のような、あらんかぎりの絶叫で、ぎやあ、と叫ぶのが合の手に入るやつだ。」（大江健三郎、『われらの時代』、65頁。）

²¹⁵ 「夜の暑く暗いアジアの町を彷徨し疲れきり、性的な疲労、自瀆のあとの根づかい疲労のよ

ミラーを「あまりにも西欧的な男」と定義する南靖男は、自らの独白^{モノローグ}における 1950 年代後半の日本青年に触れる部分において、「この後悔、それは日本の青年の生まれつきの後悔、皮膚が黄色いということへの後悔のようなものだろう」と言って、人種的なカテゴリーを示す記号と「第三世界」としての「正真正銘」な「アジア」^{アイデンティティ}的な自己同一性の間に一定の平行性を見出す。なおポストコロニアルな歴史認識を持つ読み手たちは、「アジアの民族という言葉にふるえぬ心をえらんだのは明治以後の日本」という表現に、日本の帝国主義の歴史の略図が潜在されていることに気がつくだろう。日本は、19 世紀半ば以降の西洋列強の実質的な支配の危機に曝され、それを回避するうえで、それを徹底して模倣した。それによって、明治維新を皮切りに、なし崩し的に非ヨーロッパ的な地域におけるヨーロッパ的な帝国主義国家に転身していったのだ。近代化に伴う「帝国主義国化」過程において大日本帝国は、「(大) アジア主義」という、本来は「19 世紀後半における西洋列強によるアジアの植民地化に対して、アジアは連帯して対抗すべき」であった理念を、日清戦争以降東アジアにおける帝国主義的支配政策を正当化するイデオロギーとして利用した。しかし 1945 年の敗戦で植民地地域を喪失し、なおかつ朝鮮半島、^{チャイナ}「中国」や東南アジア諸国をはじめとするアジア諸国に対する「^{インペリアル・レスポンスビリティ}帝国責任」を忘却し、新植民地主義体制^{アイデンティティ}に組み込まれるようになった日本は、「黄色い皮膚」＝「アジア」的な自己同一性から疎外したアジアの国となったのである。そしてこの疎外に対して、南靖男は、「第三世界民族主義」に傾くような言説において、「黄色い皮膚を選んだのは神であるが、アジアの民族という言葉にふるえぬ心をえらんだのは明治以後の日本であり、おれだ」と悲嘆するのである。

「喝采」では、外交官のリュシアンが「フランスの政治があいつらに、あの黄色の小男どもに何の関係を持つんだ」と言って、フランス政府のアルジェリア政策を批判している学生たちを人種差別的な言説をとおして批判していた。小説の後半において、リュシアンと夏男の間に発生した一時的な葛藤の要因ともなる「黄色い皮膚」のモチーフは、「姿勢と言及の構造」の一種であった。しかし、『われらの時代』においては、そのモチーフが転倒させられ、「第三世界」の文脈に位置づけられているのである。

例えば、上で引用した南靖男がミラーの「アジア論」に「答える」一節を見ると、物語言説における「黄色い皮膚」という表現の「第三世界」問題との連動をさらに特定することができる。

うな全身的な疲労のため背をおりまげ、ジャズを叫びたてる再生装置のかげで坐って書物を読んでいる。夜はふけている。自瀆のあとの疲労、かれは夜の町を歩きまわりながら自瀆しつづけたのかもしれない。^{しゅと}嫉妬とは違う感情、遠隔操縦による自動人形の自瀆。」（同上書、64 頁）

〔前略〕若い日本人に〔中略〕中国人の若者がもっているほどの黄色の未来もない。若い日本の人間には、未来などはない。とくに現代の若い日本人にそれが無い。〔中略〕現代の若い日本人は猶予の時間をすごしているのさ、やがて執行される時を待って独房に座っている。なにを執行されるかわからない、とにかく執行は他人まかせだ。おれたちが決定するわけじゃない。²¹⁶

ストイックな兄とは正反対の「^{アップビート}上機嫌」な性格を持つ南滋は「猶予の期間、そのあいだにぼくは楽しむんだ」と軽率に答えるが、物語のこの段階に至って、「黄色」という人種的なカテゴリーをあらわす記号が、「第三世界」というカテゴリーを示唆するものであることが判然とする。例えば「黄色の未来」は、アメリカ合衆国が主導するところの新植民地主義に逆らって「第三世界」の非同盟運動を主導している中華人民共和国の「現在」をあらわしている。つまり『われらの時代』で、ミラーのテキストの主要な構成要素となっている超歴史的且つ抽象的な「^{チャイナ}支那」のイメージが、1949年に西洋や日本の帝国主義的な支配から、そして国内では国民党という新植民地主義の「傀儡」政権になろうとする立場から「自己」を解放し、独立した国となった中華人民共和国という「第三世界」の文脈に転置されているのだ。

ここでは日中それぞれが新植民地主義に対して取った態度を中心に、日本と「第三世界」というカテゴリーに属している中華人民共和国とが対置させられているのだ。そしてこの対置作業にあたって大江は、ミラーの「^{チャイナ}支那」をテーマにするテキストからの引用文を活用している。これは意識的な選択によるものなのである。

ミラーの「^{チャイナ}支那」を中心とするアジアに対する関心が、新植民地主義を主導する大国としてのアメリカ合衆国の1950年代における「周辺世界」に対する地政学的な関心に照応していることには先に触れた。例えばウェールズのマルクス主義政治理論家のアラン・ウッズによると、そもそもアメリカ合衆国は、戦後中国を自らの影響圏に配置し、一定の「直轄の半植民地」にする意図を持っていた。しかし、この意図を実践に移すうえでアメリカ合衆国は中国の内戦（1946～1949年）において、共産軍に対し直接に戦争に参戦する必要があった。しかし第二次世界大戦直後において、米軍には新たな戦争に突入するための準備は整っていなかった。そのため、直接に中国を「^{チャイナ}所有」するための戦争を勃発させるよりも、共産軍と国民軍の戦争において、共産主義に対して「民主主

²¹⁶ 同上書、87頁。（傍点は引用者による）

義」を代表する勢力とみなした国民軍を支持したのだ。このようにして国民軍には援助金や、爆撃機、戦闘機、戦車、ロケット弾発射機、機関銃などの兵器が提供された。実際のところ、国民党は、「民主主義を代表する」どころか、極端に「反共」の独裁者であった蒋介石が率いる東洋専制主義的で腐敗した政党に他ならなかった。それでも蒋介石を中心にする「傀儡」政権を樹立させることによって、中国を新植民地的な支配下に組み込むことが、アメリカ合衆国のアジアにおける地政学的な戦略であったのだ。多国籍的な支配形態として構成されている新植民地主義体制の西ヨーロッパにおける主役であるイギリスとフランスも、国民党が中国本土から台湾島に駆逐される最後の段階までそれを支持しつづけた。²¹⁷

イギリスとフランスをはじめとするヨーロッパや大日本帝国の帝国主義政策によりアジア大陸における半植民地的な状態におかれていた中国において成就された革命が、「第三世界」運動を発足させる一定の「始まりの現象」となったことはすでに指摘したとおりである。中国を新植民地主義体制下の半植民地として再植民地化する企画の挫折は、日本の地政学的な重要性を高める要因となった。戦後、ソ連との間でヨーロッパ大陸を東西に分割し、アフリカでは新植民地的な支配をイギリスやフランスに委ねたアメリカ合衆国は、アジアの新植民地主義的な支配にあたってはイギリスとフランスの肩代わりをしようとした。その典型的な例が、インドシナにおける米仏の権力政治的な協力や役割交代の場となった第一次・第二次インドシナ戦争である。

アジアにおける新植民地主義を樹立するうえで、日本が前線基地とされることとなった。例えば、「第三世界」流の非同盟の社会主義の日本への波及を予防するために、1947年に沖縄がアメリカ合衆国に渡され、「要塞化」²¹⁸され、その新植民地主義的な半植民地となった——沖縄の基地は朝鮮戦争時に積極的に利用された。朝鮮戦争の勃発によって日本の地政学的な重要性が一層増大し、日

²¹⁷ ウッズは、「20世紀歴史における（ロシア革命に次ぐ）第二の最も重大な事象と」呼ぶ中国革命を高く評価しているにもかかわらず、この論文の後半において革命後の社会主義の建設過程に対してそれほど肯定的な立場を示さない。とりわけ社会主義建設過程におけるスターリン主義の影響を濃厚に帯びており、労働階級を建設の手段にしない官僚主義や上意下達的な政治運営の帰趨はウッズの（内部）批判の的になる。（Woods, Alan, “The Chinese Revolution of 1949,” 01 October 2009, <http://www.marxist.com/chinese-revolution-1949-one.htm>、引用文の翻訳は引用者による）

²¹⁸ 小森陽一、「敗戦後の植民地的無意識」、『ポストコロニアル』、岩波書店、東京、2001年、87～90頁を参照。

本は新植民地主義の前線基地となった。予定を当初よりも早めて、1951年9月8日にサンフランシスコ講和条約が結ばれ、アメリカ軍の爆撃機が日本の米軍基地から飛び立って北朝鮮を攻撃するようになった。この条約をもって、日本は独立国になったという前提に立ち、日本列島における基地の米軍による使用を合法化するという一方で、「サンフランシスコ講和条約と同時に日米安全保障条約が結ばれ」、「日米安全保障条約が九条を持った憲法の上に立つ、という対米従属的な国家体制がはじま」ったのである。²¹⁹

すなわち、日本は1951年に一旦独立した（サンフランシスコ講和条約）うえで、アメリカ合衆国が主導する新植民地主義という支配形態における一定の半植民地としての位置（日米安全保障条約=旧安保）を与えられたと換言することができる。日本の新植民地主義への協力に対して、中華人民共和国はまったく逆の方向へ向かった。²²⁰そもそも北朝鮮では、中国革命は東北アジア全体に拡大するものとして捉えられており、朝鮮半島における南北戦争が国共内戦の延長線上にある「第三世界」＝「南」の解放運動として考慮されていた。²²¹

『われらの時代』において、高という作中人物に体现され、現行のアルジェリア解放戦争との引き合いに出されている「朝鮮戦争」は、「第三世界」運動の形成において重要な転換点であった。朝鮮戦争の最中に締結された日米安全保障条約によって日本は、新植民地主義体制の支配下における一定の半植民地として、（南朝鮮＝韓国のように）中国と北朝鮮と間接の戦争をする国となり、このことによって、日本の「第三世界」との連帯の可能性が奪われたことが決定的になった。

『われらの時代』でのミラーの引用文における地政学的「^{マッピング}地図作成」は、南靖男の独白^{モノローグ}＝ミラーへの応答という仕掛けの形で反転している。この仕掛けを、ミラーの「^{マッピング}地図作成」の「^{リマッピング}再地図作成」として差し当たり定義することが可能である。大江は、ミラーのアジア＝「^{マッピング}周辺世界」の「^{マッピング}地図作成」の作業を、同

²¹⁹ 姜尚中、小森陽一、「平和国家」の幻影——「戦後日本」の戦争史『戦後日本は戦争をしてきた』、角川書店、東京、2007年、107～108頁。

²²⁰ ソ連がアジアというよりヨーロッパの支配に力を入れた西洋中心主義的な政策をとっていたことは、朝鮮戦争の勃発に大きな影響を及ぼした。例えば姜尚中はこのことについて次のように述べる。

「西側で、ヨーロッパ冷戦が主戦場となります。そして、東側では朝鮮半島の分捕り合戦が非常に大きな意味を持つてくる。とはいえ、ヨーロッパにおける境界線をどこに引くかがスターリンにとっては最大のテーマでしたから、東側、つまり朝鮮半島では譲歩していい、と思っていた。」（同上書、101頁）

²²¹ 朝鮮戦争では、100万人以上の中国人が戦死したと思われる。（同上書、116～117頁）

時代現象としての「第三世界」の文脈に転置し、再構築する。つまり、大江は、ミラーのアジアに注目する「地図作成」^{マッピング}を、「第三世界」の「地図作成」^{マッピング}を行ううえで活用するが、50年代に「第三世界」（例えば、中華人民共和国、北朝鮮、ベトナム）と連帯を結ぶよりも新植民地主義体制と協力すること／同盟国になることを選択した日本はその地図から排除されているのだ。

「ヘンリー・ミラー、このあまりにも西欧的な男の胸をジンのように焼くアジアは日本をふくまない、それは蒙古、チベット、インド、支那だ」と、南靖男に言わせる仕掛けにおいても暗示されているとおり、小説で作成されている「世界地図」の「第三世界」の部分から日本は「消去」されることになったわけである。

III.3. 「脱文脈化法」による「世界」の「地図作成」^{マッピング}——『チャタレイ夫人の恋人』と『われらの時代』

III.3.1 「脱文脈化法」とは？

先に、ミラーのテキストでの、「姿勢と言及の構造」に基づく世界の「地図作成」^{マッピング}作業を、そのテキストの文脈^{コンテキスト}から切り離し、「『第三世界』と日本」の問題と関わらせるという大江の仕掛けを、差し当たり「再地図作成」^{リマッピング}として定義した。また大江が「引用法」を初めて「見るまえに跳べ」において採用したことにも触れたが、この「再地図作成」^{リマッピング}として定義した「小説の方法」は、大江文学における「引用法」と重なり合うところがある。

大江自身によると、この方法＝大江の「引用への偏愛」の「始まり」は『叫び声』（1962年11月）という長編である。第五章で詳述するとおり『叫び声』の冒頭で語り手の述べている内容は、サルトルがスペイン市民戦争のルポルタージュのために書いた「解説」からの引用である。また大江は、この「引用への偏愛」を「空の怪物アグイー」（1964年1月）、『個人的な体験』（1964年8月）にも持続させたと言っている。²²²

大江はフランス文学科の学生時代に限らずその後の作家生活においても師事した、フランス文学者の恩師渡辺一夫教授の勧めに従い、三年にわたって一人の作家の作品全体や当の作家を対象にするあらゆる研究書を集中的に読み、それを自作の物語内容や物語言説の多様化のうえで活用するという「小説の方法」を採用した。こうした、読書行為と創作行為を相互に接近させるダイナミズム

²²² 大江健三郎、「引用には力がある」、『私という小説家の作り方』、新潮社、東京、1998年、100～101頁。

を孕んだ方法は、大江文学の独自性の源流の一つとなった。²²³本論文では、この独自の「小説の方法」を「集中精読法」と呼ぶことにする。

大江が「集中精読法」に基づく「引用法」をとりわけ徹底的に実施したのは、イギリスの詩人のウィリアム・ブレイクの作品の「集中精読」の結実である『新しい人眼ざめよ』（1983年6月）やイタリアの詩人ダンテの作品の集中精読に基づく『懐かしい年への手紙』（1987年10月）であったと言う。大江によると、作品に引用されるテキストは、引用された時点で異なった文脈を持つようになり、二つの文体の併置と拮抗が作品全体の文体の多様化に役立つのである。大江は、『新しい人眼ざめよ』に関して次のように述べている。

この連作では、ブレイクのテキストからのみならず、さらに様々な書き手の文章を——自分の評論さえもふくめて——引用している。それらの内容が作品の展開に必要であったのはもとよりのこと。さらにおのおのが、ブレイクの翻訳とも私の小説の文章とも違うテクスチュアのもので、それらが作品全体の文体の多様化に役立つと感じていたのであった。²²⁴

²²³ 渡辺一夫のこの「小説の方法」に関する発言は、以下のようである。

「ジャーナリズムの評価というか、端的にかれらのきみへの態度は、すぐにも変わるものでアテにならない。批評家の先生方の、きみへの対し方も同じ。かれらは偉い人たちだから、とくに！きみは自分の仕方生きてゆかねばなりません。小説をどのように書いてゆくかは僕にわかりませんが、ある詩人、作家、思想家を相手に、三年ほどずつ読むということをするれば、その時どきの関心による読書とは別に、生涯続けられるし、すくなくとも生きてゆく上で退屈しないでしょう！」（同上書、103頁）

読書行為と創作行為を相互に接近させるこの「小説の方法」は、大江文学を活性化する契機となった。「私を若い年齢でマスコミに出たことからの頹廃から救い出してくれたし、その読書から次の小説への頼りになる呼びかけも聞こえてきたのである」（同上書、103～104頁）と言う大江は、この「方法」を自身の文学の多様化の契機となった「小説の方法」として位置づける。

²²⁴ 同上書、106頁。

大江は、文字表記といった形式的なレヴェルにおいても、一定のテクスチュアの多様化を意図している。例えば『新しい人よ眼ざめよ』ではウィリアム・ブレイクの一部の原文の詩句を引用したことにに関して、「アルファベットによる原詩を織りまぜることで、日本語の文章に多様なテクスチュアの感覚をみちびく、ということも私の意図にはあった」（同上書、105頁）と解説する。

ここで指摘する必要があるのはこの技法の「始まり」が『われらの時代』においてであるということである。例えば、南滋と事務の女がホールの事務室の裏の狭く暗い廊下で話しながら、ア

大江が『われらの時代』において採用し、差し当たり「^{リマッピング}再地図作成」として定義してきた「小説の方法」は、『叫び声』以降の一連の作品に採用された「引用法」と重なり合うところもあるが完全には一致しないものである。大江が記述するところの『新しい人眼ざめよ』などに採用されている「集中精読」に基づく「引用法」は、サイードの『始まりの現象』における「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール論」を思わせる。

サイードは、作家による自らの作品より前に書かれた一連の権威的な作品をあらゆる形で意識するというこうした傾向を「書物の書物らしさ」= *the bookishness of books* と定義する。また「重ね書きすること = *writing over*、[書きなおすこと] [= *re-writing*]、それについて書くこと [= *writing about*]、それに [逆らって] 書くこと [= *writing against*] という形で、間テクスト的に意識される対象としての他の作品のことを「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール」= *other writing* と呼んでいる。このようにダイナミックに「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール」にかかわるという趨勢は、ゲーテ、フロベール、ジョイス、ベケットなど「世界文学」の主要な作家に「^{アザー・ライティング}生き生きとした想像力」を与えた。もとより、こうした「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール」が、作家たち自身の^{アザー・ライティング}エクリチュールに与えるのは、「^{アザー・ライティング}生き生きとした想像力」だけではない。「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール」が「現在のエクリ

アメリカのジャズ・シンガーのアニータ・オデイの曲“A Nightingale Sang in Berkeley Square”（《パークレイ街でナイチンゲールが歌った》）を聞いている場面で、その曲の一節、“I still remember how you smiled and said, / Was that a dream or was it true?”（大江健三郎、『われらの時代』、183頁）とともに、それとの相似性との関係でアメリカの詩人・小説家エドガー・アラン・ポーの“A Dream Within A Dream”（「夢のなかの夢」）という詩の原文の一節、“All that we see or seem, / Is that a dream within a dream?”（同上書、184頁）が原文のまま引用されている。

オデイの曲のごとく「サブカルチャー」のレヴェルではあるが、ロックの創始者の一人であるアメリカ合衆国の歌手リトル・リチャードの“Lucille”の歌詞も、「天皇をびっくりさせる」ためにその自動車の前に手榴弾を落とすという「疑似テロル」の試みが綴られている部分において引用されている。この歌詞が登場するのは、高の挿話においてである。高の疑似テロル計画における役割は、天皇の車が曲がり角にあらわれたら赤い紙片でくるんだ小石を落とし、三階の女子トイレにいる彼らに信号を送ることである。その赤い紙には“Lucille”の歌詞が印刷されているのだ。

“You ran away with another man but I love you still

Lucille, please come back where you belong

Lucille, please come back where you belong

I'll be good to you baby please don't leave me alone”（同上書、135頁）

チュール」を肩代わりしようとする潜在力をもっており、このような潜在力が、「現在のエクリチュール」を威嚇するような一定の「不安定な影響」を及ぼすのだ。

エクリチュールの全経験領域を通じて（中略）引用は、エクリチュールが転移＝ずらしの一形式であることを絶えず思い起こさせてくれる。というのも、引用は多くの形を取ることができるけれども、いずれの形においても、引用文は他のエクリチュールが現在のエクリチュールを侵犯として、また現在書かれていることを潜在的に肩代わりしようとする困った力として象徴しているのである。引用は修辭的的技巧として和解、合体、（翻訳が間違っていた場合、あるいは正しくても）偽装、蓄積、防衛、征服などの役に立つことができる。しかし、いつでも、それがわずかに触れる程度であっても、引用というものは、他のエクリチュールが現在のエクリチュールを、その絶対的、中心的で、正当な場から多かれ少なかれ追放しようとしていることを気づかせる。²²⁵

この引用においても明瞭であるとおおり、サイードの「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール論」においては、現在のエクリチュールが「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール」の暴力に曝されることによって文体が「多様化」するという色合いが濃厚である。そしてこの「方法」は、大江の「引用法」において、「世界文学」のテキスト翻訳の文体＝「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール」と、自らのテキストの地の文を拮抗させることによって文体を多様化するという「方法」と重なり合う。

『われらの時代』における大江の「引用法」は、「^{アザー・ライティング}他のエクリチュール」の「絶対的、中心的で、正当な場から多かれ少なかれ追放しようとしている」「西洋中心主義」的な「姿勢と言及の構造」の「暴力」に「暴力」的に対応するものである。『われらの時代』におけるこのような「引用法」を把握するうえで、スロヴェニア人の哲学者・理論家のスラヴォイ・ジジェクが、『われらの時代』の発表より半世紀後に展開した「脱文脈化論」=de-contextualization が有効なアプローチとなる。

ジジェクによれば、芸術作品に孕まれている「普遍的」な側面を浮き彫りにすることは、当の作品をその特殊な文脈から切り離すことによつてのみ可能となりうる。「われわれ人間は特定の原初的な生活世界に完全に規定され」ており、「それゆえ、あらゆる普遍性がこの生活世界の特徴をもち、そこに埋め込

²²⁵ サイード、エドワード、W.、「始まりの現象についての省察」、『始まりの現象——意図と方法』、28頁。

まれているという事実は解消できない」かのように見える。それにもかかわらず、ジジエックは、このような考え方を逆転すべき「紋切型」と位置づけている。

「普遍的な次元が、特殊な文脈の内部から突発的に現れて『対自』の状態にいたり、普遍的なものとしてそのまま経験される」瞬間が「脱文脈化」=de-contextualization が起こる時なのである。ジジエックが「対自の状態」と呼ぶ、こうした状態にある普遍性は、「たんにその特殊な文脈の外部あるいは上部にあるのではな」い。「それは、その文脈の内部からかき乱し、この文脈の内部から作用」し、「そのため特殊なものアイデンティティは、その特殊性の側面とその普遍性の側面とに分裂する」。²²⁶

例えば、ある芸術作品の価値を決めることも「脱文脈化」の過程である。芸術作品の偉大さを解釈学的に判断するうえでもっとも重要な決め手は、ルーツである文脈から引き剥がれても生き残ることができるという、その作品の勢力だからである。「真に偉大な芸術作品の場合、当の芸術作品が各時代によって作り直され、再発見される」とジジエックは言っている。²²⁷またジジエックによれば、歴史的な文脈に拘りすぎることは、当の作品の「本質的な理解」を妨げる結末をもたらさう。彼は、ドイツの作曲家ワグナーの作品を例に出す。

読解の第一の問題は、努力して手に入れたはずのこの明察 [=歴史的に正しい「文脈化」] が、たとえ正確ではあっても、作品の本質的な理解にあまり貢献しないということである。実際歴史主義的紋切型は、われわれと芸術との接触をくもらせる可能性がある。『パルジファル』を正しくとらえるためには、そうした歴史的細部から身を引くこと、作品を脱文脈すること、作品をそれが埋め込まれた文脈から抜き取ることが必要である。『パルジファル』の形式的構造——これはさまざまな歴史的な文脈に置くことが可能である——には、その作品元来の歴史的な文脈よりも、多くの真理が含まれている。」²²⁸

ジジエックは、芸術を読み取る「方法」としての「脱文脈化法」を芸術作品、そして作家の「仕事」の特殊性の中に潜む「普遍的な形式」を抽出するための作業として見なしている。しかしジジエックが考案したこの脱文脈化法は、脱文脈

²²⁶ ジジエック、スラヴォイ、「とてもゆるやかに——あるくような速さで（モルト・アダージオ——アンダンテ——イデオロギー的カテゴリーとしての寛容）」、『暴力：6つの斜めからの省察』、中山徹訳、青土社、東京、2010年、187頁。

²²⁷ 同上書、187～188頁。

²²⁸ 同上書、187～188頁。

化されるべき「普遍的形式」に重点を置きつつも、当の芸術作品の元の歴史的な文脈を貶めるわけではない。作品の「読解が、歴史的に正しくなくとも、その芸術的ないしは思想的な仕事の基礎にある普遍的な枠組みと、それが特殊な歴史的な文脈のなかに置かれていることとのあいだの緊張」そのものが、当の仕事の「体系そのものに刻印されている、つまり、その体系そのものの一部である、ということ」なのである。²²⁹

『われらの時代』における「世界文学」のテキストを対象にする「引用法」を、大江自身による「引用法」論、「若きサイド」の「他のエクリチュール論」、そしてそれにもっとも照応するようなジジエクの「脱文脈化論」に照らし、「脱文脈化法」と呼ぶことにする。

ここまで大江が、ミラーのテキストにおけるアジアの地図作成^{マッピング}に内在する「姿勢と言及の構造」という「暴力」に、そうした「姿勢と言及の構造」を「脱文脈化」することによって抵抗していることを呈示してきた。以下の文章では、ローレンス（そして、第四章ではケルアック）の分析をとおして、「脱文脈化」が、「第三世界」と「日本」を対比し、日本という国の「第三世界」という同時代現象とのダイナミックな関わりあいを把握し表現するうえで『われらの時代』の全体を貫く「方法」として活用されていることを明示する。

III.3.2 「脱文脈化」される「植民地地理」——物語の方向性としての「南」

『われらの時代』における脱文脈化法は、ミラーの『冷房装置の悪夢』に含まれているテキストの脱文脈化において見てきた「引用文」の形式だけではない。それは、一連の断片的なモチーフやイメージを^{デフォルメ}変形して、『われらの時代』の物語空間に転置するという形でも遂行されているのだ。これらのモチーフは、「第三世界」の地政学との関係において再構築され、再文脈化されている。こうした世界地図の作成作業としての脱文脈化において^{マッピング}強調^{ハイライト}されているのが、「南」という地政学的なカテゴリーである。

『われらの時代』における物語の方向性は「南向き」になっている。そのことは、小説の二つの物語の流れそれぞれを担っている靖男と滋に作者が与えた「南」という^{サーネーム}苗字においても明白である。大江文学において「南」という用語が作中人物の命名に活用されることは初めてではない。大江の最初の長編であ

²²⁹ 同上書、189頁。

る『芽むしり 仔撃ち』に登場する主な作中人物の一人が、「南」をあだ名²³⁰に持つことをここで想起する必要がある。太平洋戦争の末期、四国・松山市の「開墾作業」といった植民地主義的な「仕事」を任命された、感化院の15人の少年の集団疎開を題材にした作品の作中人物は、南の地方に憧^{あこが}れているので仲間内から「南」と呼ばれる²³¹。

また、「南」を苗字^{サーネーム}に持つ『われらの時代』の主人公に、靖国神社にちなんで靖男という名前をつけたのは、太平洋戦争時に「南方へ出撃」しに行行って行方不明になった若い航空隊の将校の父親である。

若い父親は航空隊の将校で、(かれに靖国神社にちなんだ名前をつけたのは父だ) そのときは南方へ出撃する命令がくだったための別れの面会だった。明るい日だった。父はその出撃後、行方不明になった。²³²

この箇所、『われらの時代』が読み手に突きつけてくるのは、戦前戦中の言説空間における帝国主義的暴力の対象となっている「南」²³³なのである。同様な見解を「おれは決してトラックをあきらめない、一七歳になるまでには轟々と走る大型トラックに家財道具を積みこんで北陸を一周し、九州をめざして南下する体験をもっているだろう」と夢想する南滋の「トラック・フェティッシュ」が語られる部分においても見て取ることができる。

²³⁰ 大江文学の他の作品にも同様な命名の仕掛けを見いだせる。例えば、「セヴンティーン」(1961年1月)に登場し、大江自身をモデルにしていると思われる進歩的な小説家「南原征四郎」という作中人物に当てられた固有名詞はその一例である。

²³¹ その理由を『芽むしり 仔撃ち』の語り手は次のように解説している。

「南の地方について憧^{あこが}れており、それについて語ることで自分の日常を埋めていたので僕は彼を《南》と呼んでいた。」(大江健三郎、『芽むしり 仔撃ち』、10頁)

『芽むしり 仔撃ち』がジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』(*Deux Ans de Vacances*, 1888年)、ロバート・バラントインの『珊瑚島』(*The Coral Island*, 1857年)のような少年たちによる植民地主義的営為を題材にしており、西洋中心主義的「聖典」^{キャン}に位置する一連の「ロビンソン・クルーソー的」な「世界文学」テキストのパロディーとして構想された小説であることは先行研究で明確にされている。(小森陽一、「差別と排除の言説システム——『芽むしり 仔撃ち』、『小説と批評』、世織書房、横浜、1999年)

²³² 大江健三郎、『われらの時代』、91頁。

²³³ 筆者は、ここで、「南」という用語を、植民地化政策の対象にされた「周辺」の地域という意味で、比喩的に使っており、この「南」は戦前日本が侵略した満州、朝鮮半島、樺太など、北に位置する地域を排除しない。

「南下」という表現は、大日本帝国の戦前・戦中の「アジア主義」という疑似アジア連帯のイデオロギーによって正当化された、拡大主義政策をめぐるパロディの仕掛けである。しかし『われらの時代』における「南」というモチーフの射程は、そのパロディの範囲のみにとどまらない。その射程はより広大なものである。『われらの時代』において、「南」は「疑似」ではなく、「本物」^{オタンティック}な連帯を呼びかける「第三世界」（アジア・アフリカ・中・南アメリカ）と取り替え可能なモチーフとして布置されているのだ。このことは、本論文の主な論点のひとつである。

『われらの時代』における「南北」の拮抗というモチーフは、「第三世界」としての「南」と、「新植民地主義」としての「北」（の西側）の拮抗という同時代現象の物語空間における再構築なのである。しかし、「第三世界」としての「南」という概念は、この小説が創作される過程においてまったく新しいものであった。「南北問題」という概念を始めて考案したのは、イギリスのロイズ銀行会長オリバー・フランクスであった。『われらの時代』の出版と同年に表現されたこのアプローチによると、第二次世界大戦後15年近くたった時点で、世界が直面している経済政治的な問題は、資本主義陣営と社会主義陣営の対立のそれではなく、「北」（の西側）の富裕国と「南」の貧困な「周辺世界」との経済的格差ということであった。それ以降の社会主義の崩壊までの過程においては、南北問題がつねに「東西問題」とも複雑に絡み合いつづけた。「北」（の西側）新植民地主義体制も、「北」（の東側）としての既成社会主義体制も、「南」の国々を地政学的な世界戦略の一環として利用し、つねに自らの体制下に組み込もうとしていったからである。経済のレベルにおける「第三世界」としての非同盟の「南」は、南北の経済的格差を解消する方法として、「新植民地主義」の構造的改革を通じてのみ可能であるという見解を示した。アメリカ合衆国をはじめとする新植民地主義体制の諸国は、「現状維持」という保守的な立場に立った。²³⁴こうした対立が南北間の国際政治的な拮抗をもたらす要因となった。そして、「南」の自立を求める立場は、1950～60年代の「北」（の西側）としてのヨーロッパや北アメリカの左翼運動の理論的枠組みにおいて中心的な位置を占めるようになったのだ。

トルコ人の（中国）歴史家、「第三世界論」の理論家アーリフ・ディリキは、“Global South: Predicament and Promise”において「（グローバルな）南」という現象の1950年代から21世紀初頭にかけてのドラマティックな変遷過程を概観し、21世紀の現在にもっとも適切な「南」のヴィジョンを呈示することを試みてい

²³⁴ 「南北問題」、(『日本大百科全書』、『日本大百科全書』+『国語大辞典—スーパー・ニッポニカ』 CD-ROM Windows版)、小学館、東京、1998年)

る。ディリリキによると「南」は、新植民地主義体制のエコノミストが考案した概念であるが、このような「南」は1950～60年代の新左翼運動が掲げるようになった「第三世界論」における「南」と完全に一致するものではなかった。前者が注目したのは経済的に富裕な先進工業国と貧困な開発途上国との経済的格差という側面に限られており、この格差を解消するために必要な近代化は、資本主義の採用によってのみ可能であるとしている。また一方で、スターリン主義的社會主義陣営が呈示していた近代化モデルは、それら「南」の国がソ連の衛星国になることにあった。ディリリキによると、この「東西」としての米ソ＝「北」のそれぞれの「近代化」のモデルは、「南」に対する覇権掌握の意図シンメトリックという観点からすると対称的であったとさえ言える。つまり、脱植民地化した「周辺世界」諸国には、資本主義と既成社會主義といった二つの近代化＝再植民地化のモデルのどちらかを選択することが強いられたわけである。「第三世界」としての「南」は、(スターリン主義とは異なる)「非同盟」の社會主義を掲げつつ、この二つの「北」の近代化・再植民地化のモデルに取って代わるような、経済的、政治的、軍事的な非同盟主義を掲げるようになった。ディリリキによれば、このような「世界」の実現への潜在能力を示した出来事は、「南」の諸国の民族が、「第一世界」からも、「第二世界」からも自立した形式で、自主的に組織し、参加した大規模な国際会議となったバンドン・アジア・アフリカ会議であった。1968年は、「第三世界」＝「南」の年となり、「第三世界」が新たな歴史を作ろうとしていると、西洋の新左翼運動によって理想化された。しかし1970年代以降、「南」は世界を救済する潜在力を持つアクターの立場から、(1980年に発表された「ブラント・レポート」においても明白であるように)先進国からの同情の対象へと後退した。²³⁵

このように21世紀初頭の現在の「南」と、1950年代後半の「南」のイメージはかけ離れている。ここでは『われらの時代』が出版された時点においては、「第三世界」という用語の同意語としての「南」が、一般的に用いられていなかったということに注目すべきである。そこに大江健三郎における同時代認識の尖鋭さを認めることができる。

他方、「新植民地主義」の台頭が決定的になった1950年代には、「北」(の西側)としての資本主義陣営において、多種多様な一連の「南下」現象が出現した。そしてそれらのすべてが「第三世界」問題と密接不可分の関係にあった。中華人民共和国の建国を伴って共産主義の「南下」を懸念したアメリカ合衆国は、対東アジア「アンティ・コミュニズム反共」政策を徹底化した。「共産主義の南下」の防止を

²³⁵ Dirlik, Arif, "Global South: Predicament and Promise," *The Global South*, (1), 1, 2007年、12~23頁。(この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

目指した最初の「冷戦的な熱戦」として勃発した朝鮮戦争²³⁶は、古典帝国主義の植民地保持の戦争として開始した。米仏の権力政治的な協力や役割交代の場となった「反^{アンティ・コミュニスト}共」的／反・「第三世界」的なヴィエトナム戦争＝第二次インドシナ戦争においても同様な「南下」防止政策があった。

「南下」防止政策においては、「北」大西洋条約機構＝*NATO* が主役を演じるようになったことは周知のとおりである。資本主義陣営の「集団的自衛」を保障するために設立されたこの「反^{アンティ・コミュニスト}共」的な軍事機構によって、東西冷戦体制下の西ヨーロッパがひとくくりにされ、さらに複数の「同盟国」がこの組織のもとに組み込まれた。このことを「北」（の西側）の結晶化として定義することも可能である。中華人民共和国の建国を引き金に「周辺世界」へ社会主義が波及することを警戒した新植民地主義体制は、とりわけアジアと中・南アメリカに関して、一国ずつ軍事同盟を結んでいき属国にしていく戦略（1951年日米安全保障条約の締結はその一例である）を立てていったのである。

つまり、大江はこのような「北」（の西側）を基準に、それと対抗する元植民地の地域を「南」というモチーフにおいて具象化したのである。そしてそのうえで媒介にしているのが、ミラー、ローレンスやケルアックなどの世界化した「文学」のテキストにおける「南」という記号の多用、そのほとんどが南半球に位置する「周辺世界」に対する表象における「姿勢と言及の構造」である。

「世界文学」という文化的なカテゴリーが、「南北」や「東西」としての世界の地政学的な「地図作成^{マッピング}」において「北」を支える根拠の役割を果たしたことも触れておく必要がある。例えば、比較文学者ワーナー・フライドリーヒは、比較文学分野における西洋中心主義を、「世界文学」というカテゴリーが「北大西洋条約機構の文学として再定義されるべき」とアイロニー的に批判している。この批判は、「世界文学」と新植民地主義体制の地政学の対応性という点からみて、極めて有意義なものである。²³⁷

²³⁶ 日本がこの戦争への「直接の」参戦を免れたのも、アメリカ合衆国によって制定された日本国憲法における「九条」であった。

²³⁷ “Apart from the fact that such a presumptuous term makes for shallowness and partisanship which should not be tolerated in a good university, it is simply bad public relations to use this term and to offend more than half of humanity. . . . Sometimes, in flippancy moments, I think we should call our programs NATO Literatures — yet even that would be extravagant, for we do not usually deal with more than one fourth of the 15 NATO-Nations.” (“On the Integrity of Our Planning,” 14～15 頁。引用は Damrosch, David, “From the Old World to the Whole World,” *What is World Literature?*, 110～111 頁より。引用文の翻訳は引用者による)

III.3.3 「反ローレンス」的な小説としての『われらの時代』

ここまで見てきたように、『われらの時代』は、「南北」間における緊張が日本との関係性において問題にされているテキストである。「第三世界」の部分が高^{ハイライト}強調される「世界地図」を潜在させる小説として見なすことができる『われらの時代』において、靖男と滋という二人の主人公の^{ファミリー・ネーム}名 字 としても設定されている「南」という記号は、物語における主要なキーワードであり、この記号の異なる形式での多用によって物語の方向性は「南向き」になっていることに先にも触れた。ここで、このような脱文脈化の実践への一例として「南インド諸島」といった「地名」をめぐる挿話を取り上げることにする。「南インド諸島」という地理的なモチーフは、20世紀のイギリス文学の長編小説 *Lady Chatterley's Lover* (1928年) = 『チャタレイ夫人の恋人』(1950年、完訳)の一連のモチーフの脱文脈化と深く関わっているのである。このモチーフは、性的なイメージと絡まった形で『われらの時代』に「南」として登場している。それゆえ、この問題を分析するまえに、『チャタレイ夫人の恋人』において展開されるところのローレンス流の「性」ないしは「性愛」のイメージをめぐる大江の見解に触れることは必須である。

『チャタレイ夫人の恋人』は、第一次世界大戦で戦傷し、下半身不随となったクリフォード・チャタレイ^{じゅんだんしゃく} 准 男 爵^{アッパーミドルクラス}の上流中産階級ならではのエリート意識に由来する保守的な人格や冷ややかさ、彼の性的機能不全に不満を抱くようになったコンスタンス・リード(=チャタレイ夫人)が、森番のオリバー・メラーズと結ぶようになった性愛の関係において真の愛情を見出す物語である。「性」を主要なテーマにしたこの作品は、「英語圏」の国々や日本において検閲と猥褻裁判といった迫害の対象にされたため世界的なレベルでの問題作となった。²³⁸大江が『われらの時代』において性的イメージ、性的言説を一定の「小説の方法」にするにあたって手掛かりにした主な作品が、ローレンス独自の「性」のヴィジョンを大いに取り込んでいるこの長編であったといっても過言ではない。

『われらの時代』は、作品における性的な言説を単なる^{エロティシズム}性 愛 への偏愛に基づく「色情狂の失敗作」と誤解した正統な批評家の^{ひんしゆく}響 聲 を買うことになった。このことに対して大江健三郎は一連の「擁護射撃」的なエッセイを書き²³⁹、自

²³⁸ 1950年代のD.H. ローレンス著『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳は、「猥褻物頒布罪」で起訴され、1957年に最高裁によって発行者と翻訳者両者が有罪とされた。

²³⁹ 『われらの時代』が「大半の批評家から色情狂の失敗作」と酷評された(『厳粛の綱渡り』、309頁)理由は、作品に意識的に活用されている「性」のイメージが誤解されたことにあった。

らの「小説の方法」について解説せざるを得なくなった。²⁴⁰大江は、このようなエッセイのなかで、『われらの時代』における「性」という「小説の方法」と「意図」を次のように解説している。

ぼくは読者を荒あらしく刺激し、憤らせ、眼ざめさせ、揺さぶりたいのである。そしてこの平穏な日常生活のなかで生きる人間の奥底の異常へとみちびきたいと思う。その手がかりとして性的なるものを方法に採用していたのであって、ぼく自身は性的なるものが目的世界をかたちづくる要素のひとつとなっているロレンス風の流派とは違う場所に
いるつもりだ。²⁴¹

この引用においても明確であるように、大江の「意図」は刺激を与えることによって、読者を平穏な日常生活のなかで生きる人間の精神の奥底の異常へとみちびくことにあった。なお、「われらの性の世界」で解説しているとおり、このような「方法」をとおして「政治的な参加」^{アンガージュマン}ができない「性的人間の致命的な行動不能、停滞をえが」²⁴²くことにも大江の意図があった。そして、大江はこういった「意図」や「方法」を採用することによって、反ローレンス的な立

大江は、前作の「見るまえに跳べ」や「喝采」のように『われらの時代』においても日本の青年の停滞状態^{デザンガジュマン}＝「政治的離脱」を表現するうえで、「性」の言説を方法にしたことを一連のエッセイによって解説せざるを得なくなった。例えば、当時まで、大江を評価してきた江藤淳は、「見るまえに跳べ」以降分裂しはじめた「観念と抒情」が、『われらの時代』において完全に分裂したことを批判した。(江藤淳、平野謙、山本健吉、「座談会——1965年文壇総決算」、『文學界』19(12)、1965年12月号、大江健三郎・江藤淳の対談「現代をどう生きるか」、『群像』、23(1)、1968年1月号、江藤淳、「大江健三郎——自己回復と自己処罰」(1965年)、『崩壊からの創造』(勁草書房、東京、1969年)および「《江藤淳と大江健三郎》特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971年1月号はこのことに詳しい)

²⁴⁰ なお、それらの一連のエッセイの一つにおいて、大江は「性」のテーマを構想するにあたり、「性」を「十九世紀と二十世紀の初期の小説家によってまだ掘りつくされていないでいる、最後に残った開拓分野」(『ぼく自身のための広告』、「69年の問答」、新潮社、東京、1962年)としたアメリカ合衆国の小説家ノーマン・メイラーのヴィジョンに着想を得たと書いている。(大江健三郎、「第四部 性的なるもの」、『厳粛な綱渡り』(1965年初版)、講談社文庫、東京、1991年、を参照)

²⁴¹ 大江健三郎、「『われらの時代』とぼく自身」、『厳粛な綱渡り』、336頁。(傍点は引用者による)

²⁴² 大江健三郎、「われらの性の世界」、『厳粛な綱渡り』、320頁。

場に立つことを目指したわけである。

しかし、大江は「ロレンス——日々新しいロレンス」という「擁護射撃」的な一連のエッセイの範疇とは異なるエッセイにおいて、とりわけ「性」のイメージを利用するうえでの参照先が『チャタレイ夫人の恋人』をはじめとするローレンスの作品であると言っている。つまり、大江の性的イメージの構想過程でのローレンスの性愛のヴィジョンによる影響を、大江自身は否定していないのだ。「死後も独創的な力を持続しつづける魔神のような作家が、廿世紀に幾人も出現すると観測する文学研究家がいれば、かれは相当なオプティミストにちがいない」²⁴³という言葉をもって、『チャタレイ夫人の恋人』の著者としてアーリー・ワークのローレンスを高く評価している大江は、自らの「初期の仕事」における『チャタレイ夫人の恋人』影響の重要性を次のように表現する。

文学における性の意味、役割ということを考えるたびに、ぼくはあらためてロレンスの偉大さに思っていたらないではない。ぼくが伊藤整氏訳『チャタレイ夫人の恋人』をはじめて読んだのは大学の初年級のころだった。考えてみればぼくはその時、ごくありきたりの感動しかうけなかったように思われる。『チャタレイ夫人の恋人』が、ぼくにかかわってきはじめたのは、しばらくあとのことだった。そして、それ以来、この小説はぼくにとってもっとも主要な現代文学のひとつである。ぼく自身が性について考え、性をめぐって文章を書くとき、この小説はつねにぼくを監視していた。しかもそれはしだいに、深く広く奥行きが広がりつづける作品としてぼくに感じとられてきた。ぼくはロレンスを再読するたびに新しい秘密を発見してきたとっていいかもしれない。²⁴⁴

つまり大江健三郎が性について文章を書くときに、『チャタレイ夫人の恋人』が一定のモデルになっているということだ。この作品は、階級社会を批判的に見据え、「性」をその問題の表現手段として設定するばかりならず、階級社会という問題の「解毒剤」として「性」の可能性を開発しようとしているものであると言える。大江は『チャタレイ夫人の恋人』のこのような側面を次のように解釈する。

いうまでもなくロレンスの新しさは、性の側面のみにとどまらない。ロレンスはたとえば『チャタレイ夫人の恋人』で明確にかたちづくった

²⁴³ 大江健三郎、「ロレンス——日々新しいロレンス」、『厳粛な綱渡り』、595頁。

²⁴⁴ 同上書、595頁。

人間の階級のあいだのミゾとそれを克服して人間を真に回復させるものとしての愛の主題は、《怒れる若者たち》^{アングリー・ヤングメン}の作家たちがしばしばとりあげざるをえないテーマであった。²⁴⁵

大江が、一方では反ローレンス的な「性」のイメージを構想したいといひながら、他方でローレンスの「性」のヴィジョンを高く評価していることは、一見矛盾しているように見える。つまり、大江がローレンスの美的な性愛のヴィジョンを評価しつつ、そのロマン主義的かつ美的な表象には違和感を抱かざるを得ないという矛盾である。ローレンスの「性愛」のイメージは、「幸福の時代、性的高揚は太陽の光輝にかざられた生命の高揚であった」時代と深く繋がっているのにもかかわらず、大江が置かれた 1950 年代後半の世界では、そうしたロマン主義的なイメージをとおして表現することは適切でなくなっていた。このような違和感が大江に一定の批判的な距離をもたらし、それをとおして『われらの時代』におけるローレンス的要素をも含んでいる反ローレンス的な「性」のイメージの構想が可能になったと言えよう。

『われらの時代』と、その「他のエクリチュール」^{アザーライティング}のひとつとしての『チャタレイ夫人の恋人』を併読すると、まさに『われらの時代』の性のイメージの構想において、大江がこの作品を強く意識していたことが判明する²⁴⁶。20 世

²⁴⁵ 同上書、598 頁。

²⁴⁶ 例えば、南靖男の性に関する感想が伝達される部分における「震え」という下記のイメージは、「かれが性交において好む唯一のものが快樂の消えゆくまぎわの、皮膚いちめんにおこる小さな可愛らしい震えだった。そのときかれは自分の震えている皮膚を、自分とは無関係な一つの物のように感じる。それは気持ちいい。追いたてられたり、他者から見つめられたりする感情と逆のものである。」(大江健三郎、『われらの時代』、9 頁)

『チャタレイ夫人の恋人』におけるコニーによる性をめぐる抽象的な議論と性交渉そのものの質的な非対称性が取り上げられる次の場面に表現される「痙攣」や「戦慄」と翻訳されたところの *thrill* という単語を大江が意識していたことに疑問の余地はないだろう。

「だから、これ等の生き生きした、魂を明るくするやうな議論のために生まれた親密さの続きとして身体の上の交渉が避けられないといふならば、それは仕方のないことだ。

それは一つの章の終わりのやうのものであった。それにはそれ自体の戦慄があった。結末の一語のように興奮させるもので、自己主張の最後の痙攣のように肉体の内側で不思議に反影する戦慄であった。それは一つの項の結末を示し、主題の切れ目を示すために挿入される星印の列の様なものである。」(ローレンス、D.H.、『チャタレイ夫人の恋人』、16 頁、傍点は引用者による)

(“And if after the roused intimacy of these vivid and soul-enlightened discussions the sex thing became more or less inevitable, then let it. It marked the end of a chapter. It had a thrill of its own too: a

紀前半のイギリス社会における階級のミゾの問題を、「性愛」のイメージをとおして扱う『チャタレイ夫人の恋人』における「性」は、肯定的である。『われらの時代』における脱文脈化の実践の一つは、ローレンス流の解放的な「性」のイメージを反転させることにある。また、世界の植民地部分の再分割とともに、資本主義に取って代わる政治・経済的体制としての社会主義の登場をもたらした第一次世界大戦において、クリフォード・チャタレイ准男爵は負傷し下半身不随となっているが、彼の身体的な不随とそれによる性的機能不全といった二つのモチーフは、『われらの時代』における二人の副次的な作中人物それぞれに配分されている。性的機能不全の表象が付与される作中人物は、「英国の船会社の事務長」であり、身体的な不随の作中人物として設定されているのは、フランス大使館の書記官の地質学者の兄である。

III.3.4 大英帝国の衰退の「^{マッピング}地図作成」と『われらの時代』における「南インド諸島」という「地名」

「南インド諸島」という「地名」が登場するのは、小説の始まる部分で南靖男が頼子と性交渉した直後の場面においてである。南靖男は、悲劇的なもの的一切から遮断された日本人学生として、自身が置かれている屈辱的な状況を憂う最中に、頼子がかつて交際していた「英国の船会社の事務長」を想起する。

ああ、おれは悲劇的なもの的一切からさえぎられた楽園で生殺しにされている一匹の若い生き物、みだらでぶよぶよした厭らしいなにかだ。
(中略) おれたちは戦って死ぬことのできる英雄的な時代、若い人間の時代に生きているのではないのだ。色ごのみのおいぼれを養成するための世の中に生きている。この硬く若々しい筋肉、それは無意味だ。このなめらかに漲りきった皮膚、熱く豊かな血、それもインポテンツの男の性器のように無意味で滑稽なかざり、花かざりにすぎない。ああ、と靖男は声をたてた。ふいに、小さな笑いがこみあげてきた。頼子をしばらく情人にしていた英国の船会社の事務長が四十歳の若さで不能だった。かれはぎょうぎょうしく大きいだけでつねにぐんやりしている性器に花かざりをつけて眠るのだそうだった。これは南インド諸島の一つの部

queer vibrating thrill inside the body, a final spasm of self-assertion, like the last word, exciting, and very like the row of asterisks that can be put to show the end of a paragraph, and a break in the theme.”
Lawrence, D.H., *Lady Chatterley's Lover*, 8頁、下線は引用者による)

落の風習だった。²⁴⁷

「不能」は、前章で取り上げた「見るまえに跳べ」や「喝采」をはじめとする大江文学の初期作品においても頻用され、強調されるモチーフである。ここで、「不能」が、戦後の冷戦体制下に置かれた日本の政治的な「機能不全」、換言すると日本の「学生」の「政治的離脱」^{デザンガジュマン}を把握し表現するためのみでなく、そのこととともに「植民地の問題」を抱えた西ヨーロッパの衰退といった現象のパロディーをするために用いられている。

このイギリスの船会社の事務長や彼の不能をめぐる挿話は、『チャタレイ夫人の恋人』の第1章においてチャタレイ准男爵が戦傷し下半身不随になり性的機能不全に陥る挿話と、第15章においてメラーズとチャタレイ夫人のグロテスク^{デフォルマシオン}で性愛的な遊びにかかわる二つの異なる場面を、転置と変形によって再構築したものである。『チャタレイ夫人の恋人』は次のように始まる。

現代は本質的に悲劇的時代である。我々が此の時代を悲劇的なものとして受け容れたがらないのもそのためである。大災害はすでに襲来し、我々は廢墟の真只中であつて、新しいささやかな棲息地を作り、新しいささやかな希望を抱かうとしている。それはかなり困難な仕事である。未来に向つて進むなだらかな道は一つもない。しかし我々は遠まほりをしたり、障害物を越えて這い上がつたりする。いかなる災害がふりかからうとも我々は生きなければならない。

一九一七年に彼女はクリフォード・チャタレイと彼が休暇を得て一ヶ月故国にかえつていた時に結婚した。彼等は一ヶ月の蜜月を送つた。それからクリフォードはフランダズ（中略）へ戻つて行つた。だがその六ヶ月後には彼はすでにずたずたに負傷して英国へ送り返へされた。妻のコンスタンスはその時二十三歳で、彼は二十九歳であつた。

彼の生命への執着力は驚くべきものであつた。彼は死ななかつた。ひどい負傷もどうにか癒着しさうになつた。二年の間医者の手に乗ねられていた後、彼は治癒の宣言を受けた。それで彼は人生へ戻る事が出来たが、彼の腰から下の半身は永久に麻痺したままであつた。²⁴⁸

大江がローレンスのテキストを意識していることは、「悲劇的」という言葉の選択からもすでに明らかである。双方のテキストにおいて「悲劇的」という形

²⁴⁷ 大江健三郎、『われらの時代』、17～18頁。（傍点は引用者による）

²⁴⁸ ローレンス、D.H.、『チャタレイ夫人の恋人』、上巻、11頁。

容詞は戦争の時代を指し示す暗喩である。^{デザンガジュマン}「政治的離脱」した大学生としての南靖男は、戦争を政治的・歴史的なものではなく「形而上学的」なものとして見なし、それを捨象し、抽象化しているからこそ、自らの世代を「悲劇的なもの一切からさえぎられた楽園で生殺しにされている一匹の若い生き物」に貶めるわけである。他方、南靖男の考察の中に登場するのは、英国の船会社の事務長の不能のモチーフである。彼の「ぎょうぎょうしく大きいだけでつねにぐんやりしている性器に花かざりをつけて眠る」といったグロテスクなイメージの参照先は、『チャタレイ夫人の恋人』の15章の場面なのである。

大江が脱文脈化したこの章では、コニー（チャタレイ夫人）が妹のヒルダとヨーロッパの「南」部に位置するヴェニスへ旅行する直前の出来事が語られている。コニーは、彼の子を宿していることを知らせるためにメラーズの小屋に行く。二人の愛人それぞれが、現在の配偶者と離婚し、結婚する決心をして、そのことを話しているうちに、コニーが^{アップビート}上機嫌さのあまりに突然高揚感に満たされ、真裸のまま外に駆け出して行って、雨に身を曝す。後にメラーズも彼女の奇妙な遊びに加わるが、小屋に戻ると、あたかも想像上の結婚式をあげているように、性器の周りの陰毛に「花かざり」をつけるというグロテスクな遊びが始まる。

完全な沈黙が続いた。コニーは半ば耳を傾けながら、彼の腹の下部にある毛のなかへ、彼女が小屋へ来る途中で拾ってきた二三本の^{わすれなぐさ}〔勿忘草〕を挿した。（中略）

彼は自分の陰毛の中の、乳色の勿忘草の花を見下した。

「おや！勿忘草は、ここの毛の中に挿すのがふさはしいね。だが君は未来のことは気にならないかね？」

彼女は彼を見上げた。

「ええ、ひどく気になりますの！」と彼女は言った。²⁴⁹

このようにして、上記のコニーがメラーズの陰毛に花かざりをつけるというイメージを大江が自らのテキストに移植したことを確認することができる。大江は、クリフォード准男爵に付与された性的機能不全というイメージと、メラーズとコニーのグロテスクな遊びの場面に出てくる「陰毛に花かざりをつける」というモチーフを組み合わせ、「英国の船会社の事務長」という『われらの時代』の^{マイナー}副次的な作中人物の形象に活用したわけである。なおかつ、この「陰毛に花かざりをつける」というモチーフは、『われらの時代』で「南イン

²⁴⁹ 同上書、123頁。

ド諸島」という耳慣れない植地的な「地域」における不能を癒すための土着の風習に変形されている。

『われらの時代』における「^{マッピング}地図作成」の仕掛けにおいて、『チャタレイ夫人の恋人』の15章のこの場面が選択されているのには意味がある。『われらの時代』の物語の方向性が南向きとなっていることには触れたが、『チャタレイ夫人の恋人』のこの部分においても、「姿勢と言及の構造」に依拠した「世界地図」が作成されているのだ。この章において注目すべきところは、コニーが姉と一緒にヨーロッパの「南」としてのヴェニスへ旅行すること、またコニーとメラーズが結婚し、二人の間の階級の差が消去される場として大英帝国の当時の植民地地域に逃避することを欲望しているという設定である。例えば、次の二人の愛人同士の会話において、大陸のレヴェルではアフリカ大陸とオーストラリア大陸、そして国のレヴェルでは、「南」アフリカ、インド、エジプトといった「南」に位置する植民的な地域の地名が言及される。

「帰ったら」と彼女はいつた。「別れなければならないということクリフォードに話します。さうすれば、それであなたと私は出て行けますわ。誰にもあなたのことは決して解りはしません。私達は外国[to another country]に行けますわね。アフリカかオーストラリアへ、ね？」

彼女は自分の計画にすっかり興奮した。

「あなたは植民地へ行ったことはありませんか？」と彼が尋ねた。

「いいえ、あなたは？」

「僕は印度にも南アフリカにも[^{エジプト}埃及]にも行ったことがある。」

「私達は南アフリカへ行ってもいいじやありませんか？」

「行かうと思へば行けるさ」と彼はゆつくりと言った。

「それともあなたは行きたくないんですの？」と彼女が尋ねた。

「僕は構はん。どうしようと僕はかまはないんだが。」

「それで幸福になれませんか？何故でせう。私には一年に約六百ポンド入りますわ。私は手紙を書いてそのことを頼っておきましたの。多くはないですけど充分でせう？」

「僕の眼からすれば大変な財産だ。」

「ああ、なんてなんて楽しいでせうね！」²⁵⁰

引用文においても明らかであるとおおり、異なる階級に属する二人の愛人がそれぞれ配偶者と離別し、被植民者・原住民に対する植民者という新しい

²⁵⁰ 同上書、115～116頁。

アイデンティティ

自己同一性を共有するようになり、階級的束縛から解放され、それを癒す「空間」として「南」＝「植民地」に逃避することを夢想しているのである。

大江は、『われらの時代』のこの部分における「性器に花かざりをつける」というイマージュと、クリフォードの不能とを融合させることをとおして「南インド諸島」のグロテスクな「風習」を作り上げたわけである。しかしここで留意すべきは、「南インド諸島」という「地名」が読み手に違和感を与える耳慣れないものであることである。「南インド諸島」＝“*The South Indies*”が耳慣れないのは当然であろう。なぜなら、このような「地名」も、そしてこの「地名」をとおして命名された地域も存在しないからだ。

この「地名」に近似する地名は、いうまでもなく西インド諸島=*The West Indies* という、フロリダ半島とヴェネズエラの北部沿岸との間に並んだ中央アメリカの東方に位置する島群を指し示すものと、東インド諸島=(*Dutch*) *East Indies* という17世紀から第二次世界大戦直後にかけてオランダ領、そして戦中に大日本帝国の植民地となった、現在のインドネシア諸島を指し示すものである。

つまり、「南インド諸島」は、ある一定の語ないしは、表現を「意識的に」変形し、「誤用」する修辭技法である誤転用の名に値するような造語なのである。大江は、『チャタレイ夫人の恋人』における「姿勢と言及の構造」を中心とする「世界地図」の「地図作成」に示される「南」に位置する「南・アフリカ」と「インド」という地名を組み合わせ、それに「南」という形容詞を付けることをとおして、「南インド諸島」という西インド諸島や東インド諸島といった地名を彷彿とさせる「地名」を造語として生み出したわけである。この「南インド諸島」という造語としての「地名」は、古典帝国主義的な植民地支配の、アジア、アフリカ、オーストラリアやアメリカといった地理的な規模を網羅的に把握し表現することを意図としているのである。また、この造語としての「地名」は、「英国の船会社の事務長」の不能を東アジアの風習をつうじて憂うという、南靖男を笑わせる記憶の設定と併置されている。このようにして、同時代における古典帝国主義＝旧植民地主義の衰退状態が、第一次世界大戦後のクリフォード・チャタレイ准男爵に見てとるような「病人」[*sick man*]^{シック・マン}のイマージュをとおしてパロディー化されているのだ。

III.3.5 『チャタレイ夫人の恋人』の脱文脈化による古典帝国主義＝旧植民地主義の停滞状態の「地図作成」^{マッピング}

そもそも「病人」^{シック・マン}＝「病人」^{ロッド・マラド}は、「古典帝国主義」が衰退しつつある「世界帝国」を定義するにあたって採用した差別的な地政学用語である。「姿勢と言

及の構造」の一種であるこの用語は、オスマン・トルコ帝国＝*Sick Man of Europe/L'homme malade de l'Europe*＝「ヨーロッパの病人」や中国＝*Sick Man of Asia/L'homme malade de l'Asie*＝「アジアの病人」、両国に対する現行の帝国主義的な襲来や搾取の試みを正当化する言説の根本的要素として行使されたものである。1918～22年に大英帝国、フランス、イタリア、ギリシア（ボルシェヴィック革命が結実した1917年まで）ロシア帝国による圧迫を受けたオスマン・トルコ帝国、そして、長期間にわたって「西洋列強」や大日本帝国の半植民地にされていた中国、両者はともに解放戦争によって、（トルコは1922年、中国は1949年において）独立を得、「病人」＝「病人」ではなくなったのであった。

第一次世界大戦による「荒廃」、対オスマン帝国侵攻におけるガリポリの闘いでの25万人に至る大規模の死者が出たほどの連合軍の大敗北、ボルシェヴィック革命による社会主義の登場、占領下に置いていたオスマン・トルコにおけるケマリスト民族解放運動の勝利、アイルランドにおける「暴力」的な解放運動・インドにおける「非暴力」の解放運動などの要因によって、大きな打撃を受け、衰退しつつある大英帝国の現状を把握し表現するうえで、ローレンスは1920年代に書き上げた『チャタレイ夫人の恋人』において、そもそも衰退しつつある「帝国」を描写するために考案された「病人」のイメージを動員したと思われる。

フランスの地質学者の挿話は『われらの時代』の後半部の14章に登場する。南滋は、（自）爆死事件の直後にアラブ人の家に避難したが、そこに警察官が来ると、パニックにとらわれ、6階の部屋の窓の脇までまっすぐ降りている雨樋に身を移そうとして墜死してしまう。爆死事件や墜死事件との関係で、南靖男とアラブ人が警察署に連行され取り調べを受けることになる。二人の無罪が明白になった後、今度は署長室で、南靖男は「反・フランス政治運動を行っている」*FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani*のゲリラであるアラブ人との関わりをめぐってフランス大使館の書記官と大学の研究室の助手によって面接調査される場面である。

「喝采」のリュシアン^{リュシアン}の再登場とも思われるこの書記官は、もし南靖男がアラブ人の同調者ないしは協力者だったら、フランス側として彼をフランスに招待することが不可能になるといって、彼を「政治的離脱」へと導こうとする。あっけにとられた南靖男は、しばらく躊躇したあげくアラブ人の政治運動を支持している旨を言う。これを受けて書記官は、彼の兄がアルジェリアのゲリラに拷問された結果「廢人」になったという逸話を語り、アルジェリア解放運動に反対する「個人的」な理由を打ち明ける。

「ぼくはアラブの政治運動を支持しているのです」と靖男はむしろ自身自身を説得するためにいった。

「わたしはアラブ人の政治運動を支持しないばかりか憎悪ぞうおしています。わたしの兄は平和的な地質学者でしたがアラブ人のゲリラに拷問ごうもんされたショックで廃人はいじんになりました。四十歳いじですが尿さえひとりじゃできないのです、そして義姉をサディックに虐めます。毎日が地獄です」²⁵¹

フランスの地質学者は、ある意味クリフォードのように「戦争」において「廃人」になったわけであり、彼もクリフォードのように、主に性的機能不全によるルサンチマンを妻に向けている。『われらの時代』におけるフランスの地質学者とアルジェリアの挿話にも、「英国の船会社の事務長」と「南インド諸島ロム・マラド」の挿話のように、古典帝国主義＝旧植民地主義の衰退が一定の「病人」(*l'homme malade*) のイメージを媒介にして把握され、表現されている。すなわち「世界文学」としてのイギリス文学作品『チャタレイ夫人の恋人』における「性」と植民地地理をめぐる一連のイメージを脱文脈化することによって大江は、東西冷戦体制下の 1950 年代における「北」と「南」の間の地政学的な権力関係をあらわす「地図作成マッピング」をしていると言えるのである。

III.4. おわりに

英国の船会社の事務長や、フランスの地質学者の性的機能不全と重なり合う、「北の西側」としての 50 年代のイギリスとフランスの「不能」の理由は、古典帝国主義＝旧植民地主義と新植民地主義の間を揺らいでいるというあいまいさによるものであるといえる。(このことは、そのすべてが挫折に終わった第一次インドシナ戦争、スエズ侵攻、アルジェリア植民地保持戦争において認めることができる。) それに対して、「第三世界化」の潜在力をいまだに持っている日本の市民としての南靖男に「発症」する「不能」は、アラブ人＝「非同盟」の「第三世界」との連帯とフランス＝「北」(の西側)との協力、「北」(の西側)の同盟国になることの間を揺らぐ、あいまいな政治的な立場に由来するものである。

南靖男の「北」(の西側)と「南」のどちらに「参加アンガージュ」するかという、「帝国主義」と「第三世界」の間における躊躇は、物語に緊迫感を与えるものである。そして言うまでもなく、この躊躇は、新植民地主義陣営に組み込まれるか、「第三世界」に「参加アンガージュ」するか、といった二つの選択の間で揺らいだ安保闘争直前

²⁵¹ 大江健三郎、『われらの時代』、263 頁。

の日本のそれに照応するものである。

ここまで大江がいかに『チャタレイ夫人の恋人』を脱文脈化し、それを、新・旧植民地主義＝「北」（の西側）、アルジェリア＝「南」や日本の地政学的な「地図作成」のうえで生かしたかを論述してきた。『われらの時代』に呈示されているこの地政学的な「世界地図」において日本は「北」と「南」の間を揺らいでいる国として配置されている。南北の拮抗と日本のその拮抗における位置づけという問題に表象を与えるうえで、大江が脱文脈化の対象にしたもう一つの「世界文学」テキストは、フランス系アメリカ人の作家ジャック・ケルアックが朝鮮戦争の最中に書き、アルジェリア戦争の時代の最中に——アルジェリア戦争が泥沼化するようになった——1957年までに書きなおしを加え続けた *On the Road* である。

第四章 『われらの時代』における『路上』の脱文脈化による「世界地図」の再・地図作成

アラブ人の狭い寝室には裸のベッドとアフリカの地図、それにフランス軍のトラックを武装解除している解放軍の写真が一枚、壁にはっているだけだ。²⁵²

「アラブ人などというとは血なまぐさい感じがするからね、爆弾をたくさんもっておって、あなたの弟さんの仲間を、爆殺したように、逮捕にむかった警官まで爆破されかねない、そう思ったわけです。」²⁵³

Dean had a sweater wrapped around his ears to keep warm. He said we were a band of Arabs coming in to blow up New York.²⁵⁴

I had to go to south, I got on the road.²⁵⁵
....“We’re in the South! We’ve left the winter!”²⁵⁶

²⁵² 大江健三郎、『われらの時代』、246 頁。

²⁵³ 同上書、259 頁。

²⁵⁴ Kerouac, Jack, *On the Road*, Penguin Books, London, 2000 年, 106 頁.ケルアック、ジャック、『路上』、福田実訳、河出書房新社、東京、1977 年、116 頁。

²⁵⁵ Kerouac, Jack, *On the Road*, 72 頁。「ぼくは南へ行かなければならない。そこで路上に立っていた。」(ケルアック、ジャック、『路上』、81 頁)

²⁵⁶ Kerouac, Jack, *On the Road*, 112 頁。「南部に来たぞ！冬とはさらばだ！」(ケルアック、ジャック、『路上』、139 頁)

IV.1. はじめに

本章においても第三章に引き続き、『われらの時代』のテキスト分析をとおし、大江文学が「世界文学」の「地図」のどこに位置づけられるべきかを明確にしてゆく。

ジャック・ケルアックの *On the Road* は『われらの時代』において、見逃せない存在感を持って登場している。²⁵⁷大江とケルアックは、二人とも、異なるレベルにおいて第二次世界大戦後の「世界文学」における「始まりの現象」となったことにおいて共通している。*On the Road* は、大江の最初の書き下ろし長編小説である『われらの時代』の出版より三ヶ月前に、日本において『路上』という題名のもとで出版されている。大江が、ケルアックのテキストから選んだ一連のイメージを自らの物語空間へ批判的に導入し、その様々な要素を自らのテキストのダイナミズムのうえで活用したことを本章で示していきたい。

『われらの時代』のテキストの活性化に貢献しているこうした間テクスト的な作業、つまり脱文脈化の作業は、物語内容のレベルで『われらの時代』における「第三世界」＝「南」と「新植民地主義」＝「北」（の西側）の拮抗というテーマを支え、深化させているのだ。

IV.2. 『われらの時代』における『路上』の「地図作成」の脱文脈化

IV.2.1 『路上』をめぐって

『路上』は、サル・パラダイスとディーン・モリアティ（前者は著者ケルアックの、後者は彼の友人ニール・キャサディ²⁵⁸のモデルである）という二人の主人公のアメリカの南部（や西部）への、そして「南」に位置する隣国メキシコへの自動車旅行を語る。

²⁵⁷ 例えば、石田一真、「大江健三郎とジャック・ケルアック：『われらの時代』と *On the Road*（『路上』）についての考察」、(『人文学論叢』(4)、愛媛大学人文学会、2002年)との比較文学の観点から分析する小論である。

²⁵⁸ ニール・キャサディ (Neal Cassady) は、ケルアック、アレン・ギンズバーグ、ウィリアム・バロウズなどのビート・ジェネレーションの作家たちの親友であった。1968年に作品を残さないうまま死んだにもかかわらず、独特な生き方をもってビート・ジェネレーションおよびヒッピー運動に大きな影響を与えた。

『路上』を読むにあたって、読み手はつねに世界地図におけるアメリカ大陸の部分を想像しなければならない。なぜなら、小説全体にわたって中・南アメリカ、北アフリカ、中近東、南部ヨーロッパ、南アジア・東アジアなど「周辺世界」をはじめとする世界の様々な国への言及がなされているからである。ミラーの『冷房装置の悪夢』と同様に、「本物」な「アメリカ」の再発見の探検物語である『路上』は、世界地図において北アメリカを強調し、その地図のアメリカ合衆国の部分においてはニューヨークといった新植民地主義の宗主国中枢を強調する中心指向的な地政学を盛り込んでいる。ミラーとローレンスのテキストにおいてもそうであったとおり、この小説において、アメリカの「周辺」としての南部（そして西部²⁵⁹）、また「南」に位置する隣国メキシコは、ミラーが（メイスフィールドを援用して）いうところの「世界のいずれの土地を空想上所有」するという欲望の対象にされている。

『路上』における「トラック」（そして「ジャズ」）のモチーフを大江がアルジェリア解放戦争や朝鮮戦争と絡ませていること、またケルアックが「アルジェリア解放戦争」やナセル主義との関係において「アラブ」という民族や「南」としての北アフリカおよび中近東という地域に対して行使した「姿勢と言及の構造」を自らのテキストに移植するだけでなく、それらを反転させていることを本章で呈示する。

しかしこのような暴力的な行為を行ったにもかかわらず、『路上』の一読者としての大江健三郎のこの作品に対する評価は、かなり肯定的である。例えば大江は、モダン・ジャズをめぐる考察を述べた「モダン・ジャズとぼく自身」において、ジャズとの接触の契機となった『路上』の読書経験を次のように述べている。

²⁵⁹ 『路上』では、アメリカ合衆国国内のレベルにおける「姿勢と言及の構造」の一つが、東部＝中心としてのニューヨークと、古いアメリカを象徴する「周辺世界」としての西部の関係に見てとれる。

英米文学者のハンガーフォードによれば、サルにとっての西部は、若々しい活力の源泉であり、彼はその活力をつねにニューヨークに引き戻す。サルは、ニューヨークを永らく離れることができず、つねに路上で遭遇した西部の友人を連れてニューヨークに帰省するのである。（Hungerford, Amy, “Lecture 9 - Jack Kerouac, *On the Road*,” <http://oyc.yale.edu/english/american-novel-since-1945/content/sessions/session-9-jack-kerouac-on-the-road>, April 8, 2011. この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による。）

本論文の文脈に従って言うと、『路上』において、大衆消費文化の中心であるのみならず新植民地主義の宗主国中枢の一つでもあるニューヨークは、「周辺」から活力を吸収することによって活性化する「権力の拠点」として布置されている。

ぼくには書物から現実生活をまなびはじめる、そういう習慣がある。ジャズについてもそうだ。最初ぼくはジャック・ケルアックの小説のなかで、ジャズに出会ったのであった。ジャック・ケルアックをぼくは愛読していた。『路上』^{オン・ザ・ロード}の文庫版をいつ、どのような動機で手に入れたのかは、すでに忘れてしまった。やがてぼくはそれに熱中している自分自身を見いだしたわけである。そこではサル・パラダイスという若い作家と、ディーン・モリアティという青年が、自動車をかけてアメリカ大陸を駆けまわる。冬のさなかの北西部から、春たけなわの南部へ、かれらは数十時間、車を走らせて移動したりする。ぼくはあのように興奮させる情熱的な小説が、この二十世紀に五冊以上、書かれうとは思わない。ともかく、ある夏、毎日くりかえしてこの小説を読みつづけ、ついには秋まで、他の本を読まなかった。²⁶⁰

大江が自らの読書行為を、現実と接する媒介として定義し、そして、『路上』が自らのジャズとの接触において一定の契機となったと言うこの一節において、『われらの時代』における「南向き」の物語の方向性の、ミラーとローレンスに並ぶもうひとつの参照先が、『路上』における「南北」間の縦断の運動であることをも認めることができる。

他方、「ある夏、毎日くりかえしてこの小説を読みつづけ、ついには秋まで、他の本を読まなかった」という表現から、大江がケルアックの『路上』を三ヶ月の期間にわたって「集中精読」の対象にしたことが判明する。先にも述べたとおり、大江は（ローレンスの場合もそうであったように）この作品をエッセイにおいて高く評価する一方で、創作としては『われらの時代』において、この作品における西洋中心主義的な「姿勢と言及の構造」を脱文脈化しているのである。『路上』の脱文脈化も、単独の作品のレヴェルでありながら、「集中精読」に基づくものであったことが想像に難くないのである。

そこに見られるのは、大江のエッセイのレヴェルにおけるケルアックとローレンスのテキストに向けられる高い評価と、創作のレヴェル（＝『われらの時代』）におけるこれらのテキストに向けられている批評的「暴力」^{テロル}の間の一定のズレである。後に示すとおり、「ジャズ」という音楽ジャンルも、エッセイにおいて肯定的に位置づけられている反面、『われらの時代』においてはかなり否定的な要素として布置されている。

²⁶⁰ 大江健三郎、「モダン・ジャズとぼく自身」、『厳粛な綱渡り』、538頁。（傍点は引用者による）

『われらの時代』における脱文脈化の特徴は、脱文脈化という「暴力」的な作業の対象にされる作品が、大江が愛読した作品であるということである。大江は、ローレンスやケルアックやミラーの作品の文学的な価値をエッセイにおいて高く評価している反面、小説空間において同じ作品における「姿勢と言及の構造」に基づく世界の西洋中心主義的な「地図作成」を、解体し、その「構造」を「再地図作成」の対象にしている。つまり大江は、これらの一連の「世界文学」のテキストが内包する植民地主義的暴力に対し、脱文脈化的な「暴力」をもって逆らうという「小説の方法」を採用しているのだ。この問題については本章の終わりにおいて再び検証するが、まずは『路上』の考察をつづけることにする。

IV.2.2 「高揚感」と「トラック」のモチーフの参照先としての『路上』

「モダン・ジャズとぼく自身」において焦点化されているのは、「興奮させる情熱的な小説」という表現からも明瞭であるように、『路上』における「上機嫌さ」ないしは「高揚感」の雰囲気なのである。ヨーロッパとアジアの一部を「荒廃地」に変えた第二次世界大戦の終結を、世界で最も富んだ国として迎えたアメリカ合衆国の社会に現れた新世代をケルアックは『路上』において表現した。この新世代を構成している若者たちは、「ヒッピー」と呼ばれており、「ジャズの強烈な迫力の虜」となり、酒とマリファナに陶酔する一方で、因習的で安易な文明に公然と反抗して、体制から疎外された集団を形成していた。²⁶¹

『路上』において、この世代をもっともヴィヴィッドに体現している作中人物は、「上機嫌さ」や「高揚感」を併せ持っており、つねに半狂乱のディーンである。ディーンの人柄は『われらの時代』における三人の作中人物、つまり、ジャズ・トリオ＝《不幸な若者たち》に配分され、彼らの構想において活用されている。

『路上』の主人公たちの上機嫌さには、「世界」をドイツ・イタリア・大日本帝国のファシズムの台頭から解放し、戦後には「世界」の新たな大国として「再生」し、そして現時点では「世界」を「共産主義から守ろう」としている福祉社会としての富裕国の市民である誇りと優越感の意識を見てとることができる。戦後のアメリカ合衆国特有の消費主義に基づく快樂主義を反映させ、それを

²⁶¹ 石田一真、「大江健三郎とジャック・ケルアック：『われらの時代』と On the Road (『路上』) についての考察」、『人文学論叢』、(4)、愛媛大学人文学会、2002年、219頁。

プロモート
促進するようなイデオロギーが、『路上』での「上機嫌さ」のイメージに潜在しているのだ。²⁶²

『われらの時代』において日本の若いジャズ・トリオである《不幸な若者たち》の演奏家が魅了されているのは、アメリカの青年世代が有するエネルギーである。《不幸な若者たち》と自称しながら彼らは「上機嫌」であるが、その「上機嫌さ」は、後述するとおり、大日本帝国の帝国主義政策と戦後日本の新植民地主義との協力による「周辺世界」に対する二つの異なる「帝国主義的権力の暴力的行使」の「忘却」によるものである。

ジャズ・トリオには『路上』の作中人物ならではの「上機嫌さ」が、「笑い」によって強調されている。

路上で、野で、海辺で、山林のなかで、あいつは貨物自動車を運転しながら満足のあまりに笑ってばかりいるだろう。(中略) 開拓者用のトラック写真には運転台から陽にかがやく頭をつきだした南米の労働者の笑顔もうつついていた。そしてその屈強なメキシコの息子はきっとあいつに似ているだろう。²⁶³

上機嫌な生活を送っている《不幸な若者たち》の(とりわけ南滋の)トラックに対する熱情的な愛着は一種のフェティシズムである。南滋がその写真を収集しており、ただひたすら購入することを夢見ている「トラック」の参照先は、『路上』である。このことに関して詳述する前に指摘しておかなければならないのは、このフェティシズムのモチーフが『われらの時代』の二つの「南」の物語の流れ両方において登場するということである。

政治に無知でありながらファシズムに傾向している南滋の「トラック」に対するフェティシズムも、南靖男のナセルや「アルジェリアから来た男」としての「アラブ人」に対するフェティシズムによる崇拜も、ケルアックの『路上』の一連のイメージを媒介にしている。言い換えれば、この二つのモチーフは、『路上』に登場する一連のイメージを脱文脈化することによって構想されたものなのである。『われらの時代』では、快樂主義的で、外向的かつ行動的な

²⁶² 例えば、そうした消費主義のイデオロギーは、サルの「アップルパイ」に対する食欲さにおいて具象化されている。(Hungerford, Amy, "Lecture 9 - Jack Kerouac, *On the Road*," <http://oyc.yale.edu/english/american-novel-since-1945/content/sessions/session-9-jack-kerouac-on-the-road>, April 8, 2011)

²⁶³ 大江健三郎、『われらの時代』、59頁。

人格を持つ南滋も、ストイックで、内向的且つ受動的な南靖男も「第三世界」の問題と深くかかわるようなイニシエーションを体験する。二つの対照的なイニシエーションの結末として、南滋は、ニヒリストな、(多少反アメリカニズム的な要素をも含む) アメリカニズムから、「第三世界論」＝「周辺世界」の解放運動に共感し、それを支持する立場へと移行し、南靖男はナセル主義的「第三世界論」と新植民地主義の「北」(の西側)の間をゆらぐような位置から、ニヒリストの「デザンガジュマン政治的離脱」の穴ぼこに落ち込むのだ。

IV.2.3 『路上』の古パネル・トラックから『われらの時代』の「米軍から放出の軍用トラック」へ

トラックのモチーフの構想において、『路上』の影響がもっとも著しく認められる部分は、下に引用した一節である。この一節は、南滋がトラックを、アンラッキー・ヤングメン《不幸な若者たち》をラッキー・ヤングメン《幸運な若者たち》に切り替える潜在力を孕んだもの、すなわち一定のイニシエーションの契機を与えるものとして理想化する場面である。

すばらしい積載量と頑丈な耐久力、そして効能性のエンジンをもったトラック、できるなら米軍から放出の軍用トラック、それが絶対に必要なのだ、と南滋は断固として考えていた。仔牛ほどのタイヤが総計十個ついているすさま凄じい大型トラック、それを手に入れるほかはない。それは長いあいだ考えつづけたことなのだ、他に希望のある方法はおれたちの生活に残されていない。大型トラックを手に入れたら、おれたちは家財道具を積みこんで北海道まで旅行するだろう。おれたちは自分たちの気にいったどんな場所にでも住める移動住宅をもっているわけだから旅行はさいげんもなく長びくだろう。そしておれたちはここそこのナイト・クラブや劇場で稼かせぎながら旅で暮らすのだ。何年も、何年も、おれたちがすでに若くないことをさとる日まで、大型トラックを運転して。おれたちはラッキー・ヤングメン《幸運な若者たち》と自分たちのトリオを改称することにもなるだろう。軍用トラック、大型の超積載能力、超耐久力のトラック、それこそおれたちのアンラッキー・ヤングメン《不幸な若者たち》が求めているもの、おれたちアンラッキー・ヤングメン《不幸な若者たち》の希望だ。²⁶⁴

南滋は、「大型トラック」を「家財道具を積みこんで北海道まで旅行する」も

²⁶⁴ 同上書、44～45頁。(傍点は引用者による)

のとして思い描く。「トラック」は南滋にとって、ジャズ・トリオが「自分たちの気にいったどんな場所にも住める移動住宅」の役割を果たすキャンピングトレーラーと運搬用トラックの間のなにかだ。

『路上』が「ロード・ストーリー」であるがゆえに、トラックのモチーフは『路上』全編にわたって頻出する。特にサルがヒッチハイクのため大型貨物自動車を拾う場面が、過剰といってよいほど頻出する。『われらの時代』における「トラック」の参照先と思われる『路上』からの二カ所を紹介する。一カ所目は、小説の第一部・2において、サルの中学校のフランス人の旧友のレミ・ボンクールがサンフランシスコから手紙をよこして、いっしょに世界一周定期船に乗って出かけようという提案をした後の部分である。サルは快諾し、「長期間の太平洋旅行をやって、戻ってくるときには、小説を書き終えるまで叔母の家で自活していただけるだけの金をもって帰ることができるならどんなおんぼろ貨物船でも我慢する」と返信する。そして、数ヶ月の間「合衆国の地図をのぞきこみ、開拓者のことなどの」の読書に耽ったうえで、サンフランシスコへの西部旅行に出るが、この北アメリカの地理の勉強はフェティシズムの探究であり身にはついていない。彼は誤って、西ではなく北に向かって動いていたことに気がつくとニューヨークへ引き返し、シカゴに向かって再出発する。第一部・3においてニューヨークからシカゴへバスで旅行してから、最初のヒッチハイクで拾った車は、「赤い旗を掲げたダイナマイト運搬トラック」だった。後にもダヴェンポートの郊外の大型トラックが何台も轟音を立ててやってくる給油所で、その大型トラックの一台に飛び乗ったり、またその大型トラックの運転手が、他の道に曲がることになっているからといって、後尾灯を点滅してくれた大型トラックに乗りかえたりする。²⁶⁵

サルが最終的に友人たちが集まっているデンヴァーに行くことを決心した段階で拾ったトラックは、南滋の夢想の場面における「家財道具を積みこんで北海道まで旅行する」という記述と似通った表現で記述されるものである。

まるで、車輪をつけた道具小舎のように、道具を満載したトラック
[*kind of toolshack on wheels, a truck full of tools*] を、モダンな牛乳屋のよう
に立ったまま運転している男に乗せてもらって、長い登り坂を上がり、
そこでまたアイオワのアデルに行く息子づれの農夫の車に便乗した。²⁶⁶

この一節における「まるで、車輪をつけた道具小舎のように、道具を満載し

²⁶⁵ ケルアック、ジャック、『路上』13～19頁。

²⁶⁶ 同上書、19頁。

たトラック」という表現は、大江は『われらの時代』において「家財道具を積みこんだトラックのイメージへと変形した。

南滋が想像するところのトラックには、「引っ越し」ないしは「移住」の手段という意味合いが織り込まれている。『路上』の最終章の挿話における、サルとディーンの中古のパネル・トラックに対するフェティシズムを盛り込んだ欲望は、南滋やジャズ・トリオのそれにもっとも照応するものだと思われる。

二カ所目はサルが新しい恋人と、「パネル・トラック」でサンフランシスコへ居を移す計画をたて、その手助けをさせるためにディーンに声をかける部分である。しかし、過度の麻薬常習者であるディーンが高揚して予定より早くやってきたので、引っ越し作業に必要な金額を集められずその計画は失敗する。

冬になってぼくたちは、ぼくたちの壊れた家具や所持品を、ぼろ自動車のパネル・トラックに積んで、サンフランシスコに移る計画を立てた。ぼくはディーンに手紙を書いて、そのことを知らせた。彼は一万八千語に及ぶ長い厚い返事をくれた。手紙はほとんどデンヴァーですごした彼の少年時代のことを書いてあったが、とにかく、ぼくを訪ねてきてぼくのいうことをきいて、自分で古トラックをえらんで連れて行こうというのだ。ぼくたちはトラック用に六週間貯金しなければならなかった。そこで働き始めて、一セントでも勘定に入れた。ところが突然、ディーンは、五週間半前に着いてしまったので、その計画を実践する金を誰も持ち合わせていなかった。²⁶⁷

サルが古パネル・トラック (*jalopy panel truck*) を望んでいるのは、単なるフェティシズムによって動機づけられたものである。この「ぼろ自動車のパネル・トラック・フェティッシュ」のモチーフと、前述のサルがヒッチハイクで拾った奇妙な「車輪をつけた道具小舎のように、道具を満載したトラック」といったトラックのモチーフを、『われらの時代』において大江は統合し、変形しているのだ。南滋のロマン主義的な捉え方によって、『路上』のみすぼらしい「トラック」は、「すばらしい積載量と頑丈な耐久力、そして効能性のエンジンをもつ」ものとして、誇張され、美化されている。またそれは、南滋をはじめとするジャズ・トリオのミリタリズムを中心にする「権力への意志」を媒介に「米軍放出の軍用トラック」として変形されている。

『路上』という「世界文学」から借用されたトラックのモチーフは、『われらの時代』のテキストにおいて「脱文脈化」の装置にかけられている。それは

²⁶⁷ 同上書、302頁。

意識的に屈折させられ、誇張させられ、多義性を解放されたうえで、同時代の地政学的な力関係の文脈を表現するために転用されているのだ。トラックは、この作品においてきわめて多義的な物語要素に転換され、アルジェリア解放戦争、朝鮮戦争やジャズといった同時代の「第三世界」問題と結びつけられていく。

IV.2.4 南滋の「トラック・フェティッシュ」と「テロル」の試み

「トラック」のモチーフが、『われらの時代』のテキストにおいて決定的な重要性を持つ要素であるにもかかわらず、この作品を対象にする先行研究では、この問題に焦点を当てたものがほとんど存在しない。²⁶⁸ところが、先にも述べたとおり、『路上』から借用され、脱文脈化されたところの「トラック」のモチーフは、南滋をめぐる物語の流れ全体を一貫してつらぬく主要な要素であるのみならず、『われらの時代』における「第三世界」の地政学のヴィジョンとも深く関わっているのである。完全に幼稚な無邪気さに包まれたように見える南滋のトラックへの情熱的な欲望は、物語の流れにおいて、ジャズ・トリオを以下のきわめて奇妙な四つの暴力事件に巻き込んでいく。

²⁶⁸ ただ一つの例外は、「トラック」を南滋のグロテスクなロマン主義の欲望の対象とし、このモチーフに焦点を当てたスーザン・J・ナピエの*Escape from the Wasteland*における“Summer Had Passed Them By”と題されたテキストである。(Napier, Susan, J., “Summer Had Passed Them By,” *Escape from the Wasteland: Romanticism and Realism in the Fiction of Mishima Yukio and Oe Kenzaburo*, Harvard University Press, Cambridge, 1995年、を参照)

この研究においてナピエは、三島由紀夫と大江健三郎の主要な作品におけるリアリズムとロマン主義の相互作用を比較文学的方法論をとおして分析し、両者の作品をこの観点から位置づけ直すことを試みる。

ナピエによれば、『われらの時代』の主要な作中人物たちは、戦後日本の冷酷な現実＝「ウェイストランド 荒地」オールタネイティブに取って代わるような「世界」を探し求めている。こうしたロマン主義的な「別世界」の探求というテーマは、南滋が渴望している「大型トラック」のイマージュにおいて結晶化されている。

しかし、ナピエが、「トラック」を、「第三世界」と日本、そして「新植民地主義」という支配形態にかかわる歴史と地政学的な文脈——第二次世界大戦、朝鮮戦争、アルジェリア解放戦争の文脈——に布置せず、このイマージュの参照先がケルアックの『路上』であることを見落としているため、ナピエの分析では「トラック」は南滋が固着する単なる不条理なオブセッションのみに還元されてしまう。(この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

第一の暴力事件：天皇の自動車の前で手榴弾を破裂させて《静かなる男》としての天皇をびっくりさせる疑似テロル未遂事件

第二の暴力事件：高が男娼情夫の立場で関わっていた元米兵、現・実業家のジミーを絞殺する殺人事件＝（元）米兵暴行事件

第三の暴力事件：高と康二の手榴弾による度胸試しの結末として発生した（自）爆死事件

第四の暴力事件：警察に威嚇され、パニック状態に陥った南滋が墜死させられる事件

ここでは、未遂に終わったトラック・フェティッシュと奇妙な繋がりを持つ「第一の暴力事件」に焦点を合わせることにする。

《不幸な若者たち》が、それに乗って日本列島全域を自動車旅行することを夢見ている「トラック」は、彼らのロマン主義的な欲望の対象であるだけでなく、「希望」の対象でもある。先に触れたとおり、彼らは、「トラック」を彼らの「不幸」を根こそぎにし、彼らを「幸運な若者たち」に転換させる潜在力を内包する魔法の手段、ないしは、（古代ギリシアの悲劇で、空から機械仕掛けで舞台に降り、紛糾した事態を円満に收拾する神という意味で）デウス・エクスマキナとして理想化しているのだ。《不幸な若者たち》というジャズ・トリオの中で、自らの救済をトラックを入手することに、もっとも情熱的に求めているのは、南滋である。

南滋の奇妙な愛着がフェティシズムの名に値するようなものであるとしてきたが、例えば下の引用文では、南滋の「トラック」に対する憧憬がいかにも熱狂的なレベルに達しているかを見ることが可能である。

貨物自動車へのはてしない願望、それが滋の生活を方向づける唯一のものだった。かれはさまざまな種類のトラックの写真、木製あるいは金属製の模型、カトログ、パンフレットを蒐集していた。映画を見ても、かれが夢中になるのはトラックの走るシーンばかりだ。ワイド・スクリーン、それは大型貨物自動車の運転台におけるラブシーンを写すときのみ本質的な機能をはたすのである。滋は京浜国道の定期便の大型トラックに助手として志願したことがあったが、年齢の点と、体が小さすぎる点で採用されなかった。かれは背が低くこじんまりしているうえに、トルーマン・カポートのような顔をしているので、第一にそれが運送会社の労務課員の気にいらなかったのである。しかし、採用されたにしても滋はトラック運転について一通り知識をできさえすれば、トラックをおりるつもりだった。かれはトラックが買え、それで放浪の旅に出発で

きるのでなければ、かれの心に真の喜びは湧かないはずだったのだ。それにしても運送会社の車庫にらんでいた何十台もの貨物自動車、あれは凄まじいかぎりだった。滋はため息をついた。²⁶⁹

南滋は、カトログ、パンフレット、雑誌の写真を集めるだけではなく、映画におけるトラックのシーンを観賞すること、木製あるいは金属製の模型を組み立てることに夢中になっている。南滋のトラックとの関わりを、フェティシズムたらしめる要因は、達成不可能といってもよいほどトラックが入手困難であることだろう。

トラックを購入するために必要な予算がないジャズ・トリオは、サルとディーンのように、「トラック」を購入するために様々な方法を試みる。しかし、このことが彼らを一連の暴力事件に巻き込むことになる。最後には、彼らの計画も、『路上』の主人公たちのぼろ自動車のパネル・トラックを購入する計画同様失敗に終わる。

南滋のトラックに対するフェティシズムは、アメリカニズムをも含むミリタリズムへの欲望²⁷⁰を内包するファシズム的な権力への意志に動機づけられている。南兄弟には父親がいないことを考慮すると、南滋は父的な存在の空白をトラックのフェティッシュによって埋めようとしているようにも思える。

しかし、より政治的なレヴェルからすると、南滋のフェティシズムは、国家・国民の父なる存在としての「エンペラー天皇」の戦後における「てんのう天皇」としての希薄且つあいまいな存在に対する不満に「耐える」ための架空の鎧なのである。フェティシズムと天皇との繋がりを暴露するのは、小説における天皇が独裁者として国を治めることを要求する右翼の集会の場面である。

ジャズ・トリオが、街を「西方」にむかって歩いていると、「駅前広場の低い舞台に黒いシャツの袖をまくりあげた男たちが並んで立ち、そのなかのは禿げた頭を陽に灼いている初老の男が」²⁷¹「日本国民は独裁者をもとめている！天皇こそ日本国民の唯一の独裁者！」²⁷²と叫んでいる右翼の集会に遭遇する。この集会の目的は、天皇が映画を観賞しに行くという「絶対の好機」を契機に、天

²⁶⁹ 大江健三郎、『われらの時代』、45頁。

²⁷⁰ このことは先に引用した部分における「できるなら米軍から放出の軍用トラック」という言い方においても明瞭である。

²⁷¹ 同上書、104頁。

²⁷² 同上書、105頁。

皇に「瀕死の」かれらを救うような「独裁者」になることを「訴えかけ請願する」²⁷³ことにある。

ジャズ・トリオは夢中になって「初老の男」の話を聞いている。そのうちに、中年の黒シャツの「男」が、高に、映画見物に行く天皇を歓迎する集会の「サクラ」という500円の報酬の「奇妙な仕事」を提案する。それを受けて、大型トラックを購入するために貯金するという動機もあり、彼らはすぐさまこの提案を引き受ける。

ファシズムへ傾斜している高が、日本人である残り二人のジャズ・トリオを「処刑されたファシストの生まれ変わりだろう。お前たちの体にはナチスの死霊がのりうつっているんだろう」²⁷⁴と「褒めちぎる」。ジャズ・トリオは、もし戦前戦中に生きたとしたらムッソリーニのファシスト党ないしはヒトラーのナチス親衛隊に参加して、ユダヤ人の大虐殺に加担し、そしてユダヤ人の娘を強姦したかったという残虐な欲望をあらわにする。

ジャズ・トリオは、天皇に、ヒトラーやムッソリーニのような独裁者を期待しているわけである。「サクラ」として雇われた彼らに渡された^{のぼり}幟に、大書されている「激越で血なまぐさいキャッチュ・フレーズ」、「《日本国民は独裁者をもとめている！》」²⁷⁵というスローガンにふと「癒し」のようなものを見いだす。集会を開催している右翼を模倣しているファシスト青年としてのジャズ・トリオは、徐々に右翼が抱いている欲望を内面化していくことになる。

天皇の自動車が接近するにつれ、日本列島の山村に住んでいた在日朝鮮人高が、戦前戦中に「^{エンペラー}天皇」に対して抱いていた恐怖がよみがえってくる。テキストにおいてこの恐怖感が、「夜尿症」、「自瀉」、「チンポコ」などの性的で生理的なイメージとして取り込まれ、グロテスク・アイロニーの形で表現されている。高の考察がアイロニカルなのは、彼が死ぬほど恐^{こわ}かった戦争の時代を「黄金時代」と見なすという屈折したノスタルジアの感覚に由来する。

「おれは天皇が恐^{こわ}くてたまらなかつたなあ、おれの寝小便は天皇のおかげでなおったんだぜ。お袋が天皇をひきあい^{せきし}にだして怒鳴ってからは、おれは死ぬくるしみで止めたんだ」

(中略) かれは日本国民であり陛下の赤子であったころを、黄金時代を懐かしんでいた。ああ、あのころ、天皇はおれたち朝鮮人の頭の上にも神々しく君臨していたのである。おまえが寝小便をやめられないなら天

²⁷³ 同上書、112～113頁。

²⁷⁴ 同上書、111頁。

²⁷⁵ 同上書、112頁。

皇陛下におまへのチンポコを切りとってもらおう！その言葉、その母の強迫以後、かれにとって夜尿症は、一種の反国民的な自瀆のごときものとなり、かれはそれを恥じて死ぬほど苦しんだのであった。おれは、夜のあいだ決して眼をつむるまい、眼をつむることは反国民的な自瀆につながることだ。そしてかれは不眠症にかかって骨と皮だけにやせほそり、膀胱は枯れて一滴の小便をも夜の床にはもらさなくなっていたのであった。高は戦争が永遠につづき、かれが日本陸軍の兵士になり天皇陛下のために死ぬことになるのを疑わなかった。本当に黄金時代であったのだ。²⁷⁶

ここでは高の個人的な記憶をとおして、戦前戦中に国民が「天皇」^{エンペラー}に対し抱いた恐怖感と崇拝が、グロテスクな文体をとおして想起されている。そして、この部分においてジャズ・トリオが「独裁者」のモデルにしているのは、戦前戦中の西欧の独裁者たちを媒介にしながら、実は極東の戦前戦中の「天皇」^{エンペラー}そのものであることが判然としてくる。

20世紀の歴史からして、教育や大衆メディア機関をとおして行われる宣伝活動^{プロパガンダ}に曝された国民が、国の指導者と国家に対して感動や崇拝のみならず、つよい恐怖感をも抱くようになったことは、ヒトラー政権のドイツ、そしてムッソリーニ政権のイタリアにも共通の特徴である。そして宣伝活動^{プロパガンダ}にあたって指導者の写真が重要な役割を果たしたのである。

日本の場合は、「御真影」がこのような役割を果たした。例えば、在日朝鮮人の高は、(1941年の公布の国民学校令により従来の小学校を改め設立された皇国民の基礎的練成を目的とする初等教育機関である)国民学校における「天皇」^{エンペラー}をめぐる「洗脳」^{ブレイン・ワッシング}的な教育の記憶を想起し、南滋や康二とその回想を共有する。彼の科白においてもっとも焦点化されているものは、教育勅語の直前以降普及するようになり、1930年代にすべての国民学校に飾られるようになった「天皇」^{エンペラー}(や「皇后」^{エンプレス})の写真という意味を指す「御真影」のモチーフなのである。

「おれはほんとうに天皇を神様だとおもっていたぜ、天皇の写真をまつた社のまえで祈ったぜ、国民学校のときだ。」

「あ？」

「おれは天皇にまいっていたんだ、おれは天皇が人間宣言したときには食欲をなくしたよ、種明しつきの奇術だ、滋もおぼえているだろう。」

「おぼえていないよ、きっと朝鮮人の学校が教えたんじゃないか？」

²⁷⁶ 同上書、113～114頁。

そして、南滋の戦前戦中の天皇崇拜の忘却による無知な発言に介入するのは、^{ジャバニーズ・エンバイヤー}康二である。さらに、康二は、高に、「御真影」という大日本帝国で使われた専門用語を教える。

「ばかをいうなよ、みんな夢中だったんだぜ、おれも奉安殿のことをおぼえているよ」と康二がいった。

「御真影というんだぜ、高、天皇の写真のこと」²⁷⁸

ジャズ・トリオは、このようにして戦前戦中の^{エンペラー}「天皇」をめぐる「恐怖」と「崇拜」の感覚の記憶を回復させる。物語言説のレヴェルからすると、「御真影」という公式なフェティシズム現象の記憶を想起させることは、のちにジャズ・トリオが目撃する戦後天皇の実際の姿が、彼らに喚起することになるアンテイ・クライマックス的な感覚を強調するための仕掛けであろう。「黒ぬりの凄い上等の外国製自動車」に乗った天皇が白いオートバイに乗った警官に守られながらジャズ・トリオの眼前にあらわる。次の箇所では、南滋のフェティシズムの対象としての「トラック」が、天皇が乗った「黒ぬりの凄い上等の外国製自動車」と暗示的に対置されるのである。

かれらの前を白いオートバイに乗った警官が肩をきどって張り唇をひきしめて走って行く、そして黒ぬりの凄い上等の外国製自動車が行く、そのなかに白っぽい温和な紳士の顔がぎこちなく首をねじって一瞬、^{アンラッキー・ヤングメン}《不幸な若者たち》を見ていたような気がする。黒いシャツの男たちは狂喜して足の踏むところを^{のぼり}しらず怒鳴りたて幟をうちふる。《日本は独裁者をもとめている！》²⁷⁹

しかし、結局のところ、「御真影」の記憶にかかわって、国民に恐怖を起こさせる（＝テロライズする）一方で崇拜の感覚をも喚起していた^{エンペラー}「天皇」のイメージと、あまりにもかけ離れた天皇の実際の姿にジャズ・トリオは幻滅を覚える。南滋が「『あああれは天皇か、おれははじめて見たぜ』」とあって、そし

²⁷⁷ 同上書、114頁。

²⁷⁸ 同上書、114頁。

²⁷⁹ 同上書、115頁。

て、『ああ、おれはばかをみたな、好奇心もへったくれもないね』²⁸⁰とつけ加える。これらの言葉が、ジャズ・トリオが求めている「独裁者像」と天皇の実際の姿の間における「ズレ」に対する幻滅を反映しているのである。

ここで、南滋がカトログ、パンフレット、雑誌の写真を切り取って集めていた「トラック」の写真と、「御真影」が対置されていることが判然とする。戦後の「象徴天皇制」という制度の確立がもたらした空白感を埋めるために、南滋のトラックの写真を集めることを中心とするフェティシズムが、「御真影」に象徴される「天皇崇拜」に取って代わるようなものであることが明確化するのだ。この空白感が南滋を中心にするジャズ・トリオにおいて、「トラック」の幻想によって償われるようになったことを、ジャズ・トリオの「トラック」に対する欲望と「独裁政権」に対するファシストの欲望の重複を示す次の部分において見てとることができる。

かれら三人の少年たちは情熱をこめて独裁者をもとめていた、勃起させる独裁者を声をかぎりに血をはく思いで追いもとめていた。しかし独裁者というよりは大型トラックのほうに、まだ実現の希望はあるだろう。だからといってかれら《不幸な若者たち》^{アンラッキー・ヤングメン}にとって大型トラックを手に入れるための困難はほんのひとかけらも減少するわけではないのだが。

281

つまり、「トラック・フェティッシュ」は、戦前戦中の公式なイデオロギーの延長なのである。「トラック・フェティッシュ」は、戦前戦中のファシズム的な独裁政権と帝国主義の記憶を、戦後日本が「新植民地主義」体制下に組み込まれ、現行の「帝国主義」の運営にかかわるようになった「現在」と相互に絡み合わせ、「帝国主義」の連続性を読み手に突きつけるうえでの仕掛けなのだ。

IV.2.5 「^{インペリアル}皇帝という感じはしない」天皇と疑似テロル事件

ジャズ・トリオが抱いたアンティ・クライマックス的な幻滅の主な理由は、「御真影」に取って代わられた、それに照応するフェティシズムの対象物としての「トラック」が喚起するミリタリズム的な権力に包まれた高揚感を、戦後の天皇の実際の姿に見いだせなかったことにある。戦後直後のメディア表象の文脈

²⁸⁰ 同上書、115 頁。

²⁸¹ 同上書、112 頁。

に遡ると、「天皇」と「写真」という記号と幻滅という感情が想起させる記憶は、まぎれもなく昭和天皇裕仁とマッカーサー元帥とがいっしょに写された1947年の会見写真であろう。服装の面からしても、姿勢の面からしても、リラックスし、自信に満ちたマッカーサーに対し、緊迫した昭和天皇の姿を写したこの写真は、国民に「敗戦の屈辱」を衝撃的に実感させるものであった。当時の主流の新聞に載ったこのカジュアルな写真は、戦前戦中の「御真影」をとおして形成された国民の意識における「皇帝」の権力と崇高なイメージを覆す事件だった。『われらの時代』のこの挿話において、昭和天皇とマッカーサー元帥との会見写真をめぐるパロディーがなされているのだ。

しかし、小説における「会見写真事件」への暗示的な言及は決して無媒介に行われているわけではない。この言及は戦後日本の「北」（の西側）としての新植民地主義の体制下に組み込まれ、その「第三世界」＝「南」に対する地政学的な戦略において協力するようになった過程の記憶を想起させるうえで必須の媒介である。例えばつぎの一節では、ジャズ・トリオが昭和天皇に対して、日本帝国主義の創始者であった明治天皇の御真影を引き合いに出す。より「皇帝」且つ男らしい「正真正銘性」のオーラを持つ明治天皇を引き合いに出すことで、しばらく前に見かけ、その姿に幻滅を覚えたところの昭和天皇の、戦前戦中における「皇帝」のイメージを回復する術を工夫しようとする場面である。

「皇帝インベリアルという感じはしなかったなあ、がっかりよ、おれは」と康二は不機嫌にいった。

「明治天皇の写真みたいに、鬚ひげをはやすべきだよ。日本国民は天皇の顎あごに独裁者の鬚の出現を待望している。」

「のんびりして静かにしていたね」

「おれは国民学校インベリアルのとき、死ぬほど恐かったよ」と高は回想に執着した。²⁸²

ここで、用いられている「皇帝インベリアル」という単語が読み手に喚起するのは、帝国主義である。そして、ファシズムに傾倒している上機嫌な《不幸な若者たち》は、戦後の天皇が充分に「皇帝インベリアル」ではないというイメージに曝されて抱いたアンティ・クライマックス的な幻滅を、彼らを「勃起」させる高揚にすり替えようと試みる。南滋は、天皇の車のまえに手榴弾を破裂させ、天皇や日本中を「びっくりさせる」計画を発案する。

²⁸² 同上書、116頁。

「《静かなる男》をびっくりさせてやろうじゃないか！」
「どうするんだ」
「自動車の前で爆弾を破裂させるのさ」
「やろう！日本中にスキャンダルがうずまくぜ！」
「インペがびっくりして、日本中がスキャンダルだ」と康二はいった。
「天皇の車は、映画が終わったらあの道を帰るだろう？ビルの窓から投げよう、車の前十メートルのところで爆発だ」
(中略)
二人の日本人の少年は快活に叫んでいた。
「爆弾を投げるとき、おれたちは変な気分になるぜ、きっと。こいつは勃起させるぞ！」²⁸³

日本をアルジェリアのような空間に変質させる潜在力を持つこの「テロル」の計画は、小説における第一の暴力事件なのである。ジャズ・トリオは、しばらく前の右翼の集会で曝されたファシストの言説の中心となっている大志、つまり、天皇の戦前戦中の「本来の」^{インベリアル}「皇帝」の立場を「復帰」させるという欲望を内面化しているのである。しかしジャズ・トリオは、「黒いシャツの右翼」とは異なり、その欲望を暴力手段をとおして実行に移そうとする。ジャズ・トリオは、この計画が成功すれば、自分たちも男らしくて大人らしい「正真正銘」^{オタンティック}な自己同一性を獲得することができ、イニシエーションを達成できると思いこんでいるのだ。

南滋が練ったこの疑似テロル計画の詳細は、次のようなものである。ビルの屋上で見張番を担わされた高が、天皇の乗った車が曲がり角にあらわれたところで赤い紙片でくるんだ小石を信号として落とす。三階のトイレにいる南滋と康二はそれを見たとき、二人は車のそばに手榴弾を投げる。

高は、朝鮮戦線において、中国本土を爆撃することを独断で主張したために罷免されたマッカーサー元帥が指揮する国連軍の米兵であった友人に、この計画で使用する手榴弾を贈られたという。ジャズ・トリオの意図は、映画館から戻る途中の天皇の自動車の10メートルほど先で手榴弾を破裂させ、天皇や一般の市民には無害の「疑似」のテロル行為を遂行することである。この疑似テロルが「本物」のテロルと化して、死傷者が出ることを避けるうえでタイミングはかなり重要となる。

²⁸³ 同上書、116～117.

手榴弾が入っている皮のバッグを持っている康二は、窓のブラインドの手入れ作業のためトイレに入ってきた小使に見つからないように、手榴弾を取り出し、「女子および大使用」と書かれた陶器の板がはめこまれている一つだけのコムパートメントの汚物缶に寝かせて隠す。しばらく後になって、手榴弾を投げるための信号が送られたときに、康二が汚物缶から手榴弾を取り出そうとするが、使用済みの生理用ナプキンがそのうえに置かれているのに気づくと嫌悪感にとらわれ嘔吐おうとしてしまう。微妙なタイミングを要した疑似テロル計画は、康二の「幼稚」な反応の結果、失敗する。

IV.2.6 沖縄の「アルジェリア化」と「武装解除されるトラック」

ジャズ・トリオは、トラックをめぐるフェティシズムのごとく彼らに高揚感を与え得なかった戦後天皇の実際の姿を、彼らを高揚させるものに転換させるうえでこの第一の暴力計画に着手した。すなわち、ジャズ・トリオは、南滋の指導で、天皇を爆発の衝撃によって戦前戦中の「御真影」という写真が喚起したような権威と恐怖のオーラを持つ「皇帝インベリアルという感じ」がする「天皇エンペラー」にすり替えることを試みたのである。ファシズムに傾倒しているジャズ・トリオのこの試みは、インベリアリズム「帝国主義」を復帰させることも目指していた。

『路上』から借用され、脱文脈されたトラック・フェティッシュと天皇の関係が「第三世界」問題の雰囲気を濃厚に漂わせるようになる契機は、南滋がアラブ人の部屋で見ることになるトラックの写真である。「第二の暴力事件」（高による元米兵暴行事件）そして「第三の暴力事件」（高と康二の手榴弾による度胸試しの結末として発生した自爆死事件）後に逃走した南滋を、兄とアラブ人がアラブ人の部屋に避難させ、彼らが出かけた後にその写真が登場する。南滋は彼のフェティシズムの対象となっていた「トラック」の写真とかけ離れた文脈におかれた「アフリカが真紅にぬられた仰々しい世界地図」に曝される直前にトラックの写真を見る。

壁にアラブ人のゲリラが銃を振りかざしてフランス人のトラック運いかく転手を威嚇している写真が貼りつけられているのをかれは軽蔑はいべつして見た。フランスの自動車会社が造るトラックにはろくなやつがない、映画で興味をひくトラックがあらわれるときまってアメリカから買入れたやつだ。²⁸⁴

²⁸⁴ 同上書、251頁。

先にも述べたとおり、物語のこの部分は、二つの「南」の物語の流れが「アルジェリア解放戦争」という「第三世界」＝「南」といった同時代現象とかわった写真やアフリカの部分が強調された「世界地図」のモチーフを媒介にして合流する箇所である。数頁前に布置されている南靖男がアラブ人とともに弟を寝室に連れていく場面において、同じ光景は兄の「南」の目には次のように見える。

靖男は弟の汗に濡れた脇わきに腕をさし入れて立ちあがらせた。弟は歩く気力もないほどだった。アラブ人の狭い寝室には裸のベッドとアフリカの地図、それにフランス軍のトラックを武装解除している解放軍の写真が一枚、壁にはっているだけだ。²⁸⁵

トラックの写真において二人の「南」への興味を引く側面が大いに異なる。北アフリカにおける「第三世界」運動、とりわけナセル主義にフェティシズムならではの関心を抱いている南靖男は、この写真の政治面に注目する。その反面、アメリカ産のトラックに対するフェティシズムを抱いている南滋は、「武装解除」されるころのトラックの品質の方に注意を払い、アメリカ産のトラックに劣っているというフランス産のトラックに見下しの視線を注ぐ。他方、「武装解除」されるフランス軍のトラックに注がれる南滋の視線は、天皇の実際の姿を初めて目撃し『あああれは天皇か、おれははじめて見たぜ』そして、『ああ、おれはばかをみたな、好奇心もへったくれもないね』という皮肉と見下しの言及と重複オーバーラップするものである。

先述の一節における「武装解除されるトラック」というイマージュの登場は、ケルアックの『路上』から借用されたトラックのモチーフの脱文脈化の過程における新たな段階に達したことをあらわしている。この段階で「トラック」のモチーフは、「第三世界」＝「南」の問題とつながるのだ。しかし、この「武装解除されるトラック」は、アルジェリア解放戦争の激化・泥沼化によるフランス帝国主義の衰退、という同時代現象だけを把握し表現するために用いられるわけではない。「武装解除」というイマージュは、大日本帝国の「武装解除」の過程の記憶を想起させるような言葉でもある。天皇というモチーフと相互に作用するものとして扱われてきた「トラック」のモチーフは、この段階において、日本の「武装解除」過程が「極東」の「第三世界」＝「南」的な地域（沖縄、朝鮮半島）に対する新植民地主義的拡大政策と深くかかわっていたこ

²⁸⁵ 同上書、246頁。（傍点は引用者による）

とを想起させる役割を果たす。

このようなアメリカ合衆国の戦略は、日本を新植民地体制下における一定の傀儡政権にするものであった。日本における脱帝国主義化政策は、戦前戦中の旧体制を部分的に温存するという屈折した形で行われたのである。こうして日本の広義の「武装解除」戦略とヨーロッパのドイツやイタリアのそれとの間に一定のズレが生じていったと言えよう。²⁸⁶

昭和天皇による玉音放送という「ラジオ放送一発」のみによって「武装解除」²⁸⁷が可能となったことからすると、マッカーサー総司令官の占領戦略は成功をおさめたわけである。マッカーサーは天皇制を温存する際に、ソ連や他の連合国からの反発を考慮して、「戦争の放棄」、「戦力の不保持」、「交戦権の否認」といった三原則から構成されている憲法九条を作って日本を軍事的に「去勢」させ、そして列島をいつでも空爆できるように沖縄を直轄に移すという二重性を孕んだ方針を取った。²⁸⁸ 沖縄は日本列島の文脈における「アルジェリア的なる地域」と化したわけである。²⁸⁹

沖縄が日本列島における「第三世界」的なる地域と化される過程は、新植民地主義の戦略家たちばかりによって遂行されたわけではない。そこには、天皇の容認が必要なのであった。天皇はこの計画を容認したわけだが、この容認の前提には日本の「第三世界化」に対する「反^{アンティ・}共」的な警戒があったと言えよう。「冷戦構造はヨーロッパだけではなく、中国大陸で人民解放軍は国民党を追い出していく方向になり」、「日本に共産主義革命が波及してしまえば、現人神ではなくなってしまう自分の地位が危うくなる」ことを懸念した昭和天皇は、沖縄が新植民地主義体制の直轄地になることを容認するに至ったのだ。1947年に「アメリカが軍事支配をした」、「本土決戦の演習として多くの非戦闘員を巻き込んだ決戦をした沖縄」はこうして戦後の日本における「第三世界」的なる地域となり²⁹⁰、「冷戦下における最も過酷な軍政支配の犠牲になっていった」²⁹¹

²⁸⁶ 姜尚中、小森陽一、『『平和国家』の幻影——『戦後日本』の戦争史』、『戦後日本は戦争をしてきた』、86～87頁。

²⁸⁷ 同上書、90頁。

²⁸⁸ 同上書、95～96頁。

²⁸⁹ 大江が沖縄問題に特別な関心や「共感」を抱いていることは、『われらの時代』の発表から10年後に『沖縄ノート』(1970年9月)というエッセイ集を書き上げたことにおいても明らかである。

²⁹⁰ 例えば「沖縄とアルジェリア」という小論において藤島宇内は、沖縄問題をアルジェリアという同時代の問題をとおしてとらえようとしている。(藤島宇内、「沖縄とアルジェリア」、『中央公論』、73(5)、1958年5月号を参照)

のである。

ライシャワーが考案し、マッカーサーが実施した「日本武装解除論」によって、天皇は戦前戦中と戦後の間における権力の連続性において象徴的な存在となった。このことを考慮すると『われらの時代』における「トラック」と「天皇」のモチーフの対置が有意義になってくる。南滋のトラック・フェティッシュというモチーフは、戦前戦中の大日本帝国の「アジア主義」に基づく東アジア政策から、^{アンティ・コミュニスト}多国籍的搾取支配形態としての新植民地主義体制が取った「反共」的・反「第三世界」的な極東政策への移行を「明視」させるための異化作用の仕掛けなのである。

つまり、戦後日本も新植民地主義のアジア政策に積極的に関与したことからすると、『路上』から借用されたところの「トラック・フェティッシュ」は、帝国主義の連続性という問題を暴露している。言い換えれば、「トラック・フェティッシュ」を中心とする南滋の物語の流れは、大日本帝国の崩壊＝「死」の物語である一方で、新植民地主義体制の協力国＝「同盟国」としての「戦後日本」としての「再生」の物語でもあるのだ。

第三章で、ローレンスの脱文脈化を分析した時には、大江が『チャタレイ夫人の恋人』における「^{はいじん}廢人」＝「^{シック・マン}病人」＝「^{ロム・マラド}病人」のイメージを脱文脈化することをとおして、1950年代の民族解放運動による英仏帝国の古典帝国主義の衰退を表現しようとしていると論じた。『われらの時代』では、ケルアックの『路上』から借用された「トラック」のモチーフの脱文脈化によってイギリス、フランスと日本の古典帝国主義の崩壊という「死」と（新植民地主義の協力国＝「同盟国」としての）「再生」の物語が展開する。

IV.2.7 「ジャズ」、「トラック」と米兵暴行事件

「トラック」との関連性において『路上』から脱文脈化されるもうひとつのモチーフは、ジャズという軽音楽ジャンルである。南滋の渴望するところのトラックは、フェティシズムの対象であるのみならず、ジャズ・トリオの国内ツアーを可能にする交通手段としても想定される。他方、『路上』のサルとディーンを繋げる媒介がジャズであるように、『われらの時代』の南滋を高や康二と繋げるのも同じジャズである。ジャズは彼らの新植民地主義の^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢であるアメリカ合衆国文化への崇拝、換言すると「アメリカニズム」の主要な媒介でもあるのだ。

²⁹¹ 姜尚中、小森陽一、『『平和国家』の幻影——『戦後日本』の戦争史』、『戦後日本は戦争をしてきた』、98～99頁。

『われらの時代』における「ジャズ」の活用にあたって注目すべきは、「ジャズ」が、物語内容のレベルにおけるモチーフであるのみならず、物語言語のレベルにおける表現技法としても活用されていることにある。そして、『われらの時代』におけるジャズにかかわるモチーフやジャズのリズムを動員するという文体上の技法の参照先は、ケルアックの『路上』である。

そもそも、ジャズとは 即興^{インプロヴィゼーション}を中心にした、独特なリズムのパターンや和音・和声を含んでいる、アフリカ系アメリカ人の音楽家が開発した軽音楽ジャンルである。ジャズは、フランスでは、実存主義文学（サルトルやボリス・ヴィアンなど）そして、アメリカ合衆国では、国内のレベルにおける「第三世界」文学と位置づけることができるアフリカ系アメリカ人による現代文学（ラルフ・エリスンやリチャード・ライトなど）作品に強い影響を及ぼした。例えば、サルトルの『嘔吐』(*La Nausée*, 1938)²⁹²は、ジャズに関する描写の色合いが濃厚であり、ジャズ特有の 即興^{インプロヴィゼーション}の精神や独特なリズム感覚が小説の空間において再現されている作品である。ジャズは、「ビート²⁹³・ジェネレーション」にも影響を及ぼし、創作の方法の構想において多くの 発想^{インスピレーション}を与えた。ジャズに発想を受けて書き上げられた文学作品という意味でもっとも顕著なものは、ケルアックの『路上』であるといっても過言ではないだろう。ケルアック自身によれば『路上』には、ジャズ・サクソフォン演奏家のチャーリー・パーカーの音楽の及ぼした影響がかなり大きかったとのことである。²⁹⁴

ケルアックは『路上』を、ジャズ特有の 即興^{インプロヴィゼーション}をモデルにした自由な文体、一連の単語や音の反復 (*yes, yes, yes* など)、ジャズの旋律^{メロディ}やリズムを再現するうえで採用される擬音語・擬声語的なサウンド・エフェクトをとおして書き上げたのである。この作品が「世界文学」において一定の「始まりの現象」となったことには、そのような技法をとおして「モダン・ジャズ」という音楽のカテゴリーに属するジャンルを「小説化する」という「方法」の作用が大きかった。本論文でこの「小説の方法」を「モダン・ジャズの小説化法」と呼ぶこ

²⁹² なお、『嘔吐』は、『われらの時代』において意識される世界文学のテキストのひとつでもある。大江は、ジャズ喫茶で本を読みながら形而上学的な考察を進める南靖男という作中人物の構想において、『嘔吐』の主人公アントワヌ・ロカンタンをモデルにした。

²⁹³ ビートという命名自体が「強いアクセントのあるリズム」というジャズ用語である。なお、ケルアック文学において、ジャズ・アルト・サクソフォン演奏者・作曲家チャーリー・パーカーのビーバップの影響が決定的であったことは周知のとおりである。

²⁹⁴ Quinn, Edward, *Dictionary of Literary and Thematic Terms*, Facts on File, New York, 2006 年、171 頁。

とにする。²⁹⁵

例えば、『路上』の第三章の「4」において、サルとディーンは友人とともにジャズ・クラブに行って酒とジャズに泥酔する場面における描写で、「モダン・ジャズの小説化」という方法が実施されている。

- 「ぼくたちは、暖かい狂わしい夜の中へとびこんで行った。熱狂したテノーマンが『イー・ヤー！イー・ヤー！』と掛声をかけながら、サクソホーンを吹きならし、そのビートに合わせて手をたたいて、人々が『やれ、やれ、やれ！』と金切り声をあげているのが道を横ぎって聞こえてきた。ディーンは親指を宙に立てて、『吹け、そら、吹け！』と叫びながら、もう道を横ぎって走っていた。」²⁹⁶
- 「帽子をかぶったテノーマンはすばらしく満足で自由な思いつき

²⁹⁵ 大江の初期小説における「ジャズ小説」的な技法の問題を一條孝夫が『大江健三郎——その文学世界と背景』において取り上げている。大江が「孤独な青年の休暇」においてラルフ・エリスンの『見えない人間』(*Invisible Man*, 1952年) やリチャード・ライトの『アウトサイダー』(*The Outsider*, 1953年) のジャズ小説的な技法を強く意識している、と論じる一條は、「孤独な青年の休暇」における「ジャズの手法」の「始まり」は『われらの時代』にあったと規定する。

「大江の〈これまでの短い節度のある文体〉が、『休暇』では〈軽薄めいたテンポのはやい文体〉に変化していることをいちやく指摘したのは日野啓三である。しかし、日野は大江の文体の変貌を正しく把握しながら、〈作品全体との関連を一見無視したようなイメージやヴィジョンが、奔放に強烈に無礼に、露出してくる〉文章にとまどい、これを速断して構造の破綻として否定的にとらえているが、これは『われらの時代』で、日本で最年少のジャズ・トリオ〈不幸な若者たち〉を登場させて以来、この時期の大江が意識的に用いたジャズの手法なのである。初期モダン・ジャズの本質が即興演奏にあることはよく知られている。『休暇』にチャーリー・パーカーを中心に、40年代から50年代に活躍したジャズメンたちが頻出するのはそのためだ。どこか〈軽薄めいたテンポの速い文体といい〉、あるいは〈作品全体の関連を一見無視したようなイメージやヴィジョン〉の散乱、これを招来したのはバップ即興を利かせた文章・文体の効果といえよう。」(一條孝夫、『大江健三郎——その文学世界と背景』、和泉書院、1997年、152頁)

一條の分析に立つて考えると、『われらの時代』の「モダン・ジャズの小説化」という方法において、ケルアックのみならず、北アメリカの黒人文学作家としてのエリスンやライトが書いた小説の作用もあったことを認めることができる。

²⁹⁶ ケルアック、ジャック、『路上』、196頁。“Out we jumped in the warm, mad night, hearing a wild tenorman bawling horn across the way, going «EE-YAH! EE-YAH! EE-YAH!» and hands clapping to the beat and folks yelling, «Go, go, go!» Dean was already racing across the street with his thumb in the air, yelling, «Blow, man, blow!»....” (Kerouac, Jack, *On the Road*, 178頁)

の絶好に立って吹いていた。『イー・ヤー！』からもっと熱狂的な『イー・デリー・ヤー！』という掛声に達する上下の反復楽節だ。彼は、牛のような首をした大男で獣的なニグロの叩く樽のようなドラムのすさまじい音に合わせて吹いた。その黒人は彼の壊れたタライのようなドラムをしゃにむに夢中になって『ドン・ラトル・ティ・ブーム・ドン』とひっばっていた。²⁹⁷

- 「六フィットも丈のあるやせこけた一人の黒人女が彼女の体をテナーマンのホーンベルに向かってころがしてきた。すると彼は『イー！イー！イー！』と叫んで、それを彼女にひと突きした。」²⁹⁸
- 「あのドラマーはドラムを一階にズシンと蹴り落として、彼の殺人的なバチでラトルティ、ブーンと二階でビートを流していた。」²⁹⁹
- 「[背の低い黒人のアルトホーンの演奏家] は決してやめなかった。彼の考え方はとても単純なものだった。彼の好んだのは、コーラスの新しい単純なヴァリエーションでおどろかすことだった。『ター タップ タダ ララ・・・ター タップ ター ダーララ』から始まり、それをくりかえしたり、それに合わせて踊ったり、ホーンを接吻したり、にっこりほほえみかけたりして、『ター タップ イーイー ダ デ デラ ラップ！ ター タップ イーイー ダ デ デラ ラップ！』となる。それは彼にとっても、また彼の演奏を聴いている他のものたちにとっても、笑いとう理解のすばらしく偉大な瞬間であった。」³⁰⁰

²⁹⁷ ケルアック、ジャック、『路上』、196 頁。 “The behatted tenorman was blowing at the peak of a wonderfully satisfactory free idea, a rising and falling riff that went from «EE-yah!» to a crazier «EE-de-lee-yah!» and blasted along to the rolling crash of butt-scarred drums hammered by a big brutal Negro with a bullneck who didn’t give a damn about anything but punishing his busted tubs, crash, rattle-ti-boom, crash.” (Kerouac, Jack, *On the Road*, 179 頁)

²⁹⁸ ケルアック、ジャック、『路上』、196 頁。 “A six-foot skinny Negro woman was rolling her bones at the man’s hornbell, and he just jabbed it at her, «Ee! ee! ee!»” (Kerouac, Jack, *On the Road*, 179 頁)

²⁹⁹ “Boom, kick, that drummer was kicking his drums down the cellar and rolling the beat upstairs with his murderous sticks, rattlety-boom!” (Kerouac, Jack, *On the Road*, 179 頁)

³⁰⁰ ケルアック、ジャック、『路上』、200～201 頁。

“[The little short Negro with the alto horn] never stopped. He was very simple in his ideas. What he liked was the surprise of a new simple variation of a chorus. He’d go from «ta-tup-tader-rara . . . ta-tup-tader-rara,» repeating and hopping to it and kissing and smiling into his horn, to «ta-tup-EE-da-de-dera-RUP! ta-tup-EE-da-de-dera-RUP!» and it was all great moments of laughter and understanding for

この一連の引用文においても明瞭であるとおおり、ケルアックはモダン・ジャズのドラムのビートや吹奏楽器のメロディーなどを可能な限り「言語」の次元に翻訳した。そして、『路上』における他のジャズをめぐる描写の部分においても、アップビートのテンポに付随する高揚した上^{アップビート}機嫌な雰囲気^{アップビート}が漂う。アップビートのテンポは、同様に『われらの時代』のテキストに採用されるのだが、それは必ずしも肯定的な意味でのアップビートではない。以下に詳述するとおり、大江は『われらの時代』において「ジャズの小説化法」を、朝鮮戦争やアルジェリア解放戦争に表象を与えるという「意図」のために「方法」に転用したのである。この方法がとりわけ元米兵のジミーとジャズ・トリオのドラムス演奏家の高の挿話にあらわれることにも頷ける。

ジャズ・トリオのなかで「北」（の西側）としてのアメリカ合衆国にもっとも強い関心を持つのは、高である。朝鮮人を親に持つにもかかわらず故国を知らない高は、朝鮮半島で戦争があった時期に、兵隊の友達の世話で「キャンプ」＝米軍基地で働くことができるようになり、楽団の下働きや、靴みがき、料理人などのアルバイトをしたのである。モダン・ジャズのドラムスの叩きかたもその「キャンプ」で覚えたという。高は、雑役夫の資格で兵隊と一緒に朝鮮へわたり、「地獄のような戦争と不愉快な生活がある」朝鮮戦線で「（従米軍）慰安婦的な男娼」として働くことになる。男娼として働かされたとき、「汚辱にみちたふるまいも強いられた」。高の仲良しの若い兵隊が不意に「気が狂って朝鮮を呪いながら、手のこんだやりかたで首をくくって」自殺すると、「じつに天涯^{てんがい}孤独で行き場のない人間である自分を発見」する。高は「隊を離れ、釜山^{ぶさん}で二箇月くらし、そのあげく非合法に日本へ渡る男たちにくっついて」戻ったのである。³⁰¹南滋や康二とジャズ・バンドを結成したのは、おそらく日本に帰ってから数年後のことであろう。

高が「北」（の西側）としての「アメリカ」と再び接するのは、天皇に対する疑似テロル計画が失敗した後、「ジャズ・ホール」において朝鮮戦線にて「慰安婦的な男娼」として関わったことのある元アメリカ軍の伍長で、現在は実業家であるジミーとの再会を契機とする。（おそらくジャズ・トリオが疑似テロル計画に使おうとした手榴弾を朝鮮戦線で高に贈ったのもジミー伍長だったのであろう。）高は、在日朝鮮人という自らの「^{オクタンティック}本^{アイデンティティ}来の」自己同一性を一貫して否定し、「北」（の西側）に憧憬を抱く青年である。ジミーとの再会を契機に高は、ジミーの「^{メイル・ミストレス}男娼情夫」として渡米する決心を固める。

him and everyone else who heard.” (Kerouac, Jack, *On the Road*, 182~183 頁)

³⁰¹ 大江健三郎、『われらの時代』、42 頁。

下記の引用文では、高とジミーが再会したときの、ジミーの高揚した上機嫌アップ・ビートさに包まれた、過去の朝鮮戦線へのノスタルジアと、ジミーほど「明るく」ない高の朝鮮戦争に関する回想が併せ持つて綴られている。

「高！」と外人はくりかえして呼びかけ、やにわに銃をかまえる格好かつこうをすると唇の隅から唾をはじき飛ばしながら叫んだ。「バン、バン、ババン、バン、くたばれ朝鮮人の коммуニストども、バン、バン」

朝鮮の荒廃に帰した山河、硝煙の匂い、轟々と走る戦車、沼にうかんだ血と肉とぼろきれのかたまり、飢えた子供ら、ジャズ、戦線慰問のディマジオ夫婦、死体にかかる蠅はえ、行軍、それらの凄まじいイメージ、悪夢となつてつねにかれをおびやかす戦乱のイメージが、不意に高の全身を揺りうごかす勢いで回復した。おお、おお、ジミー、馬のように大きく赤い陰茎ごちようをもっているジミー、伍長のジミー、おれは信じられない！

「朝鮮以来だ、バン、ババン、くたばれ朝鮮人の коммуニストども！」

302

ジミーの科白における、彼があたかもジャズの曲を歌っているかのような短文や 惹 句キャッチ・フレーズと反復句リフレインに基づく奇妙な話し振り、とりわけジャズ・ドラムス特有のビートの擬音語・擬声語オノマトペ的なサウンド・エフェクトの参照先は『路上』である。戦争がもたらした悲劇に鈍感で好戦的な元アメリカ軍兵士ジミーにとって、「 коммуニスト」を殺したことは、聴き手を高揚させ、上機嫌アップビートにさせるジャズ曲を聞くような愉快なものである。反面、高は、同じ過去を、戦争の悲劇がもたらしたトラウマとジミー伍長との性交渉による快楽を混淆させた形で想起している。そのうえで読み手の聴覚に訴える発射音として設定されているはずの「バン、バン、ババン、バン」や「バン、ババン」という音の表現は、ジャズ・ドラムス特有のビートの擬音語・擬声語オノマトペ的なサウンド・エフェクトを媒介にしている。読み手に突きつけられる朝鮮戦線の武力衝突のイメージには、つねにジャズ・ドラムスのアップビートのリズムが付随してくるのだ。

激化し、泥沼化しつつあった朝鮮戦争のただ中に書き始められた『路上』での「モダン・ジャズの小説化法」としてのアップ・ビートのリズムを、大江は朝鮮戦争の暗黒な側面を把握し表現するうえで、自作の「小説の方法」として転用していると言えよう。このようにして『路上』から借用された「ジャズ」は、『われらの時代』の物語内容のレベルにおいて、朝鮮戦争という、日本も深く関与した「第三世界」＝「南」の地政学の文脈に転地される。

302 同上書、186頁。(傍点は引用者による)

*

「喝采」において「^{メイブル・ミストレス}情夫」である夏男が外交官のリュシアンとフランスへ行くことを計画していたように、高もジミーと性交渉をしたあとに、アメリカに行くことやジャズ・トリオから離脱することを決心する。彼は二人の仲間を「天皇に頭があがらないで地下室で泣く」「天皇の子」と軽蔑するようになる。それにもかかわらず、「北」（の西側）と協力しようとするところの高は、せめて、南滋に「大型トラック」を買ってやることにする。結局、その代金をジミーに求めるが、断られる。

ジミーは高の足を拭っていた。ジミーの頭が時どき高の性器にふれたが、高の性器の方がむしろジミーの頭よりも硬いような感じなのだ。不意に高は一つの着想にとらえられ、たちまちそれに熱狂した。滋に大型トラックを買ってやろう！それがおれの置土産だ、ジミーは喜んでおれのために金をはらうだろう！高は興奮した声をあげた。

ジミー、頼みがあるんだ。

O.K! なんでも **O.K!** だ！

おれの仲間に大型トラックを買ってやりたいんだ、百万円もあればいいんだおれにそれだけ出してくれないか？

高の性器の下で奴隷の労役を果たしていたジミーの褐色の頭がぎくっと動きをとめた。それからジミーはぬっと立ちあがり高とむかいあって立った。

あ？とジミーはいった。

百万円でいいんだ、おれに出してくれ。ジミー、おれの仲間に大型トラックを贈るんだよ、いいだろう？

だめだ、**NO!** だ！

ああ！ジミー？

だめだ、だめだ、**NO!** だ！

高は呆然として性器が萎んでゆくような思いだった。ジミーがそういう態度に出る！

ジミー、金がないのか？

金ならいくらでもある、ばかにするな！³⁰³

ジミーは化粧筆筒のなかから黒い皮のボストン・バッグを取り出す。そのジ

³⁰³ 同上書、213～214頁。

ッパーを開くと、そのなかに紙幣がぎっしりとつまっていた。高はジミーに「非合法の従（米）軍の慰安婦活動」の代償としてとおぼしき「援助金」を依頼するが、ジミーはこの依頼を固く断り、高を「東洋人の淫売」といって侮辱する。

おまえは淫売じゃないか、と外国人は毒づいた。やったあとですぐに代償を欲しがらざる恥しらずの淫売だ。東洋人はみんな同じだ。どいつもこいつもマネー、マネー、マネーだ。お前は東洋人の乞食の淫売だ！そしておまえは東洋人を裏切ってさえいるんだ。おれが朝鮮女を強姦したといってもお前はにやにやしている。お前のお袋を強姦したのかもしれないじゃないか。³⁰⁴

上記の一節において、「マネー、マネー、マネー」という反復的な表現においても明瞭であるようにジミーは、ジャズ曲ならではのリズム感覚に包まれた文体をとおして話す作中人物として構想されている。そして、ジミーの「南」＝「第三世界」＝「東洋人」に対する「東洋人はみんな同じだ。どいつもこいつもマネー、マネー、マネーだ。お前は東洋人の乞食の淫売だ！」という、ジャズ曲の形式を取った「第三世界」＝「南」全体に向けて発せられた侮辱の「姿勢と言及の構造」としての言葉に憤慨した高は、ついにジミーを絞殺してしまう。そして、黒い皮のボストン・バッグを盗んで、殺人現場から逃げるのである。

絞殺事件の後に、高は南滋と康二がいる「ホール」の地下倉に行って、南滋とともに脱走することを提案する。南滋は、一瞬戸惑ったあげく頷くが、卑怯さを理由に康二は連れて行かないということにした高の決断に侮辱を感じた康二の挑発によって二人は度胸試しをする展開となる。百貨店の巨大なビルの脇にある駐車場で行われることになったこの度胸試しは、手榴弾の安全装置を外してから15秒経ったら審判を担わされた南滋が合図を送り、二人が現場から逃げるというルールに基づく危険なものである。二人とも愚かな虚栄に束縛され、南滋が合図を送っても動かないまま、自殺と他殺のあいだを揺らぐような「あいまい」な形で爆死する。

他方、「元米兵暴行事件」としての「第二の暴力事件」は、「^{オタンティック}正真正銘」な自己同一性^{アイデンティティー}の回復という意味で、高にとって一種の暗黒なイニシエーションとなった。なぜなら、これを契機に高は、アジアを「離脱」し、アメリカ合衆国に移住するという、「北」（の西側）に対する西洋中心主義的な欲望から、「南」としての北朝鮮に渡るという「第三世界論」的な立場に移行するからである。

³⁰⁴ 同上書、214頁。

同じことが高について、北朝鮮か中国といった「第三世界」の地域に渡ることを望むようになった南滋にも当てはまる。

ここで先に触れた場面に再び立ち戻る必要がある。南滋は、(自)爆死事件の後、兄によってアラブ人の部屋に避難させられ、兄は滋を休ませるために睡眠薬を飲ませた後、殺人の証拠隠滅のためにボストンバックを拾いに「ホール」に行く。眼を覚ました滋は、「武装解除されるトラックの写真」や、「真紅に塗られたアフリカ地図」に曝される。

滋はベッドを乱したまま居間へ出て行った。兄たちが出て行くけはいは夢うつつように聞いていたが、居間に誰もいないとなると後ろめたい変な気分だった。アフリカが真紅にぬられた仰々しい世界地図、地図だらけの部屋だ。机には電話とインク壺の他には何ひとつ置かれていない。紙とペンがあったら、兄に置手紙を残して行くのだが、と滋は考えた。かれは次のように書くだらう。

《兄サン、オレハ出発スル。船買ッテ朝鮮カ中国ニ密航スルツモリダ、オレハ冒険シタイ。オレハ兄サンを尊敬シテイルガ、兄サンノヨウナ生キ方ハ厭ダ、滋》³⁰⁵

この引用文から明白であるように南滋はこの段階では、もはやトラックではなく、日本を離れ、(北)朝鮮か中華人民共和国とおぼしき「南」＝「第三世界」に渡ることを望むようになっている。例え理由が政治認識を抜きにした、「冒険心」に基づくものであったとしても、これはイニシエーションの名に値するものである。しかし結局、彼がアラブ人に殺されるのではないかと心配し、ヒステリーになった事務の女の通報でやってきた警官たちに「発射するぞ」と威嚇されると、南滋はパニックにとらわれ墜死させられてしまう。この第四の暴力事件をもって、自爆した高のそれと同じように、南滋のイニシエーションも徒労に終わるのだ。

IV.2.8 ジャズ・ドラムとトラックに積載された「^{スチール・ドラム}ドラム缶」の記憶と「第三世界」の「^{マッピング}地図作成」

物語内容のレベルにおいて注目すべきもう一つの点は、「性」のモチーフとジャズ、そして「トラック」の連動である。英語での *jazz* の第一の意味は

³⁰⁵ 同上書、252 頁。(傍点は引用者による)

copulation (=交尾)³⁰⁶である。なおこの単語には、「精力的な活動、セックス」(黒人の隠語)、「ジャズの興奮、活気」(口語では)や、「性交、女陰、精液」(卑語)³⁰⁷などという「性」と密接にかかわった意味もある。大江がジャズのこのような意味合いを認識したうえで登場させていることは、上記の引用文における「ジミー伍長」の性器や、二人の性交渉のグロテスクな描写がジャズのドラム・ビートに付随されたまま行われるという仕掛けにおいて明らかである。

例えば高の足を拭っていたジミーの頭が時どき高の性器にふれるという描写をとおして大江は、高が性器でジミーの頭をドラムのように叩くというグロテスクなイメージを構築している。高が南滋にトラックを買ってやるという着想にとらえられるのも、このグロテスクな「ドラムたたき」の行為が行われている最中においてであることに注目したい。

『われらの時代』において、高に、ジャズ・ドラムス演奏家と、「慰安婦的な男娼」という二つの職業的自己同一性^{アイデンティティ}が与えられるという仕掛けに、ジャズの性的な意味合いの認識が濃縮されている。³⁰⁸高は、米軍基地でジャズ・ドラムスの叩きかたを覚え、後にジャズ・バンドを結成し指導する人物であると同時に、(従米軍)「慰安婦的な男娼」として非合法に朝鮮に渡った人物として設定されている。またジミーが朝鮮戦争で、中国人や朝鮮人の「第三世界」民族解放運動の闘士=「 коммуニスト」を殺した過去の記憶を想起させる時、ジャズ・ドラムスのビートを彷彿とさせるような擬音語・擬声語^{オノマトペ}的なサウンド・エフェクトが採用される——「朝鮮以来だ、バン、ババン、くたばれ朝鮮人の коммуニストども！」)。

結論から言うと、高の二つのあいまいな職業的自己同一性^{アイデンティティ}として設定されるころの「ジャズ・ドラムス演奏家」と「慰安婦的な男娼」というモチーフは、朝鮮戦争における日本の「帝国主義的植民地支配の責任」の問題認識を読み手に突きつけるうえで構想された「戦術」なのである。この問題認識は、「慰安婦」という、女性に対する帝国主義暴力^{インペリアルリスト・ヴァイオレンス}の戦中と戦後、列島と半島といった時空を超えた連続性をめぐるものである。³⁰⁹

³⁰⁶ *Webster's Third New International Dictionary of the English Language, Unabridged, G. & C. Merriam Company, Springfield, 1981 年, 1212 頁.*

³⁰⁷ 『ジーニアス英和大辞典』、大修館、東京、2001~2002 年

³⁰⁸ 本論文の第二章に詳述したとおり、「職業的自己同一性^{アイデンティティ}のあいまいさ」というモチーフは、『われらの時代』の前に、「喝采」において焦点化されたものである。例えば、ジャズ・ドラムス演奏家兼「情夫^{メイル・ミストレス}」であるという高の職業的自己同一性^{アイデンティティ}という設定は、「大学生兼情夫^{メイル・ミストレス}」である夏男の延長線上にある。

³⁰⁹ 例えば、高が自身の同性愛者そして、「慰安婦的な凄腕の男色家」としての実相を読者に打

慰安婦制度は、戦中、大日本帝国軍が占領した地域の駐屯地で、占領地の婦女子に対する兵士たちの「暴行行為を予防」するために、九州地方の遊廓、国内や朝鮮半島の貧困家庭の出身者を（一部を強制的に）従軍させることによって設立された公式売春制度のことである。戦後は、日本女性（とりわけ、天皇によって「英霊」にされ戦死した日本兵遺族としての妻や娘）を外国兵の暴行行為から守る意図をもって、占領軍の兵士に「慰安婦」を提供するという形でも持続した。戦中の「慰安婦制度」の延長線上にあったこの「慰安制度」は、特殊慰安施設協会＝*RAA: Recreation and Amusement Association* として戦後日本政府によって設置された。

しかし、設置から半年後に、「性病の蔓延」を理由として、アメリカ大統領の妻ルーズベルト夫人の依頼により廃止された。廃止後、補償金が提供されなかった施設の女性は、「パンパン」という差別的な表現で呼ばれる街娼として生計をたてざるを得なくなった。³¹⁰大江は戦中の慰安婦制度の延長線上にあるこの

ち明ける場面は、戦中の女性に対する暴力の記憶を背景にしている。

「高は《日本人の国歌》をハミングをやりながら二人の日本人の少年の熱狂的な会話を聞いている。かれは自分の民族が強姦され、銃剣でひとつきされる戦場にいたわけだ、それはかれのなめらかな下腹部に香りたかい恥毛がはじめて生えるころのこと。こいつらは、確かに強姦したり銃剣で刺したりするだろう、小さな鬼のような欲望とサディズムでわくわくしながら弱い民族の畠を駆まわり踏みあらし敵を撃つだろう。かれは二人の少年ファシストにたいして性的な激しい情熱をそだて胸を熱くした。ああ、おれはこの二人の少年ファシストをどんなにか抱きしめ頼りし、かれらの野菜のようにみずみずしく硬い性器でおれの情念そのもののようなあたたかく濡れた直腸の奥ふかくまでつらぬきとおしてもらいたいことだろう。かれは、二人の少年ファシストに強姦されるユダヤ女、銃剣でえぐられる女陰をもったユダヤ女だった。しかしかれは自分が性的倒錯者であることを、朝鮮戦線でしこまれた男色家、慰安婦的な凄腕すごうでの男色家であることを、これらの二人の少年ファシストにうちあけることはできないだろう。」（大江健三郎、『われらの時代』、110～111頁）

上記は右翼の集会において「同性愛者嫌悪」に対する「病的恐怖」を抱く高の心情が描かれる場面である。ここでは、「ユダヤ女」という記号をとおしてナチス・ドイツによる制度的なファシストの暴力が示唆されるように見えるが、「強姦したり銃剣で刺したりする」や「銃剣でえぐられる女陰」という表現をとおして暗に示されるのが大日本帝国軍による南京事件（1937年）であることがなし崩し的に判明する。この「慰安婦」の言及を契機にして、大日本帝国が行使した女性に対する帝国主義暴力インベリアリスト・ヴァイオレンスの記憶が読者に突きつけられているといえよう。

³¹⁰ 山田盟子の『占領軍慰安婦——国策売春の女たちの悲劇』、（光人社、東京、1992年）はこのことに詳しい。

社会問題を「人間の羊」(1958年2月)という短編において取り上げている³¹¹が、『われらの時代』で言及される「慰安婦」問題は、朝鮮戦争中に韓国政府が、韓国軍兵やアメリカ軍兵のために設置した「慰安婦制度」にかかわるものである。

韓国軍は、戦中の大日本帝国の慰安婦制度や戦後の短命の特殊慰安施設協会＝RAAをモデルにして、朝鮮戦線の慰安婦制度を設置した。慰安婦として搾取されることになった女性の中には、拉致と強姦により慰安婦となることを強制されるものも多かった。『われらの時代』の文脈において「慰安婦的な男娼」であると同時に「ドラム演奏家」であるという設定は、「朝鮮戦争の時代」におけるこの事象を異化変形した物語言説上の仕掛けにほかならない。この仕掛けは、南滋のフェティシズム的な関心の対象となる「トラック」とも密接不可分の関係にある。朝鮮戦線において慰安婦として働かされた女性は、韓国軍やアメリカ軍の前線に、「トラック」に積載された「ドラム缶」^{スチール・ドラム}に押し込められたまま「運搬」されたからである。³¹²

読み手は『われらの時代』における「慰安婦」というモチーフによって、戦前戦中と戦後における、女性に対する帝国主義的暴力の連続性を「明視」させられる。この暴力行使には、朝鮮戦争を機にアメリカ合衆国が主導する新植民地主義体制の半植民地となった韓国政府とともに、戦中の大日本帝国や戦後の連合軍の占領下の日本政府も責任を持つものである。『われらの時代』における「ジャズ」と「米軍放出の大型トラック」のモチーフのテキスト内在的な連動には、戦前戦中の大日本帝国と、戦後の新たな帝国主義的支配形態としての——大江がアイロニー的に「われらの時代」と呼んだ——「新植民地主義が台頭する時代」における「文化」と「帝国主義」の連動がこめられているのだ。

一方で、物語言説のレヴェルからすると、『路上』から脱文脈化された「トラック」のモチーフや「モダン・ジャズの小説化法」は、極東の「地図作成」^{マッピング}の上で活用されている。ジャズ・トリオの戦中の天皇に対する恐怖心と崇拜を

³¹¹ 占領時代を舞台にするこの短編には、バスの中で主人公「僕」が同伴の娼婦に暴力をふるったという誤解を契機に外国兵が主人公や他の乗客の尻を裸にし、歌に合わせて尻を「パン、パン」というリズムを作りながら叩く場面がある。この短編は「外国人と日本人娼婦との『セックス』を媒介にしながら占領体制を描く」(篠原茂、『大江健三郎事典』、35頁)という主題意識の形成において最初の作品となった。『われらの時代』における高とジミーの挿話において大江は、「人間の羊」におけるこの「性と政治」をめぐるテーマ意識を深化させ、展開させている。

³¹² 「朝鮮戦争時の韓国軍にも慰安婦制度 韓国の研究者発表」、朝日新聞 2002年2月23日号や、李榮薫、『大韓民国の物語：韓国の「国史」教科書を書き換えよ』、(永島広紀訳、文藝春秋、東京、2009年)はこの問題に詳しい。

併せ持つ「あいまい」なフェティシズムは、戦後の「米軍放出の大型トラック」というミリタリズムを内包する「北」（の西側）＝新植民地主義の崇拝にすり替えられている。また高は、朝鮮戦線で、南朝鮮の「同盟国」として北朝鮮と戦う米兵の「慰安婦的な男娼」であり、渡米を欲望する人物であったが暴力的なイニシエーションを経て、「南」としての「北朝鮮や中華人民共和国」に渡ることを望むようになる。

つまり、『われらの時代』で作成される「世界地図」のアジアの部分では、（南滋が目撃した）アフリカが真紅に塗られた「世界地図」のように、「南」としての北朝鮮や中華人民共和国の部分が高^{ハイライト}強調されており、高と南滋におけるこうした転機を媒介にして、「北」（の西側）と協力する「南朝鮮」＝韓国も、日本とともに、世界地図の「第三世界」＝「南」の部分から消去されるのだ。

IV.2.9 「ジャズ」と文化帝国主義

大江は、先に引用した「モダン・ジャズとぼく自身」というエッセイで、『路上』の読書経験がジャズとの接触の契機となったと述べている。このエッセイでは、『路上』という小説と、モダン・ジャズという軽音楽ジャンルそれぞれに対する評価がかなり高い。それにもかかわらず、『われらの時代』では、ジャズは日本をも含む「周辺世界」の青年を上機嫌^{アップビート}なニヒリズムやファシズムに導く文化帝国主義の思考停止の手段として位置づけられている。そして大江が、そのために利用している作中人物は、ジャズの思考停止の装置にかけられ、「米軍放出の大型トラック」を人生における究極の目標とした「トラック・フェティシスト」の日本の青年、南滋である。

「周辺世界」の青年を「性的人間」に化するというジャズの危険な「魔力」は、日本の青年に限定されるような局地的な問題ではなく、「第三世界」全体を威嚇するようなものであった。このことは作中の *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の極東代表者として日本に派遣されたアラブ人も指摘している。下に引用した一節は、南靖男の物語の流れで、南靖男がフランスに渡った後、*FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の宣伝活動に「政治的な参加」^{アンガージュマン} をすることを決心した段階において、アラブ人と会話をする場面である。この場面は、高と康二の無意味な度胸試しの暴力事件の直後に布置されている。

この段階では、アラブ人も、南靖男も、南滋がこの暴力事件に関与したことを知らないが、二人の青年とも待ち合わせ場所に来る途中で、この暴力事件に関する断片的な情報を獲得する。アラブ人は爆破現場を目撃し、南靖男は新聞でこの暴力事件に関する報道を見かけるという設定である。二人の青年の「東にむかって歩き」ながらの会話は、ジャズ・トリオが「成し遂げた」この「不

能」かつ「不毛」な暴力事件を倫理的な観点から批判する形式を取っている。そして、この批判ではジャズが極めて否定的な要素として言及されている。

靖男とアラブ人とは書店の横の陽覆いがある歩道へ曲がり、東にむかって歩いた。

「わたしは、あなたとの約束の場所へ来る途中で、爆破されたビルの脇を通りました。ビル全体が爆破された訳じゃない、ビルの大部分は健在で、ビルの百貨店は華麗なショー・ウィンドーを輝かせながら営業しています。ビルのごく一部の爆破、手榴弾らしいのです。わたしは、北アフリカでのFLNの戦闘を懐かしみましたよ、市街戦を」

「少年が爆破されたという記事が夕刊に載っているようです」

「ああ、少年が犠牲者ですか！」とアラブ人は情熱をこめていった。「わたしの国にも危険を冒すことにしか快樂を感じない少年たちがいます。フランスにも、アメリカにも革のジャケットを着た一群が爆弾を破裂させてがっている。希望のない状況のなかで青春をおくる者たちが熱中できるということといえば、エロティシズムと暴力です。」(中略)

「FLNにも、銃をとって戦う機会があたえられなければ、ジャズを生きがいにしたろうと思われる若者がいます(中略)」

おれは北アフリカで、ジャズを銃にきりかえたアラブ人の若者と友達になり真の青春を知るだろう、これこそ荒唐無稽だが完全に不可能だというわけではない。³¹³

ジャズが青年を不可避免的に「政治的離脱」^{デザンガジュマン}や、エロティシズム、またニヒリストの暴力に導くような「魔力」を孕んだものである、という見解が見て取れる。大江は、ジャズが青年の「政治的離脱」^{デザンガジュマン}を促進するという効果の問題を、『われらの時代』の発表から2年後に出版された作品である「セヴンティーン」(1961年1月)、そしてその続編「政治少年死す」(1961年2月)の主人公の兄において再び取り上げている。

「セヴンティーン」の作中人物も、『われらの時代』のジャズ・トリオのようにジャズと、そしてとりわけ南滋のトラックへのフェティシズムの愛着と重なりあうような、「模型飛行機」を組み立てることにしか関心を持ってない。彼は、東京大学でクラスを引っ張る存在であり、学生祭においても凄い働きをしたのにもかかわらず、会社に入ってから過労ですべてに疎外されており、「モダ

³¹³ 大江健三郎、『われらの時代』、228～231頁。(傍点は引用者による)

ン・ジャズに病的に凝り、模型飛行機づくりのマニアになった」。³¹⁴

大江健三郎のエッセイにおける『路上』を契機に接したモダン・ジャズに対する高い評価と、小説の世界におけるモダン・ジャズの否定的な位置づけの間の「ズレ」は明瞭である。この「ズレ」は、芸術ジャンルとしてのジャズという受け止め方と、ジャズが「周辺世界」の青年の「第三世界」運動への「政治的な参加」のエネルギーを奪い取り、「政治的離脱」を促進する文化帝国主義の権力装置であるという位置づけのあいだで揺らぐものである。

また、この「ズレ」は、「第三世界」の知識人がかかえる一種のジレンマにも照応するものである。それは、「周辺世界」に対する支配に基づく帝国主義とほとんど相互に入り組んだ宗主国中枢の文化を、完全に受容することも、全否定することもできないというジレンマなのである。『路上』における「ジャズ」や「姿勢と言及の構造」に対する『われらの時代』の作者としての大江が示している批判的な態度と、ケルアックの愛読者としての大江が持つ高い評価との間にあらわれるこのジレンマは、ミラーの『冷房装置の悪夢』やローレンスの『チャタレイ夫人の恋人』にも当てはまる。大江が読者として愛読した作品である反面、『われらの時代』において「脱文脈化」され、批判的になっているからだ。

このジレンマは、新植民地主義体制の宗主国中枢の「文化」に対する感服と、「文化帝国主義」に対する反発という二項対立に基づくものである。『われらの時代』の物語内で、このジレンマは、「北」（の西側）としてのフランスの文化に感服しつつ、この国のアルジェリアに対する植民地主義的な支配に逆らうFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の民族解放戦争に「政治的な参加」をしようとするという設定においていささか変形された形で再構築されている。南靖男は、南北のあいだを揺らいだあげく、いったん「北」（の西側）との協力を放棄したにもかかわらず、弟の墜死の結果、「南」への「政治的な参加」の形式をとったイニシエーションに失敗する。

文化帝国主義をめぐるジレンマの問題を取り上げるうえで、南靖男のアルジェリア解放戦争やナセル主義に対する（フェティシズムの名に値する）憧憬の問題を取り上げることは必須作業である。そして、南靖男の「北アフリカ」フェティシズムのモチーフの参照先も、フランス系アメリカ人の小説家ケルアックの『路上』なのである。

³¹⁴ 大江健三郎、「セヴンティーン」、『性的人間』、137頁。

IV. 3. 『われらの時代』における『路上』でのアラブ人に対する「姿勢と言及の構造」の「脱文脈化」という方法

『われらの時代』では、対称的といってもよい二人の「南」の物語がある。それぞれの「南」の物語の流れの中心に布置されているものは、フェティシズムのモチーフ（南滋の、「米軍放出の大型トラック」へのフェティシズムと、南靖男のアルジェリア解放戦争や当時の「第三世界」のもっともポピュラーな指導者ガマール・アブドゥル＝ナセルへのフェティシズム的な関心）である。

＊

南滋は小説の後半に、第二と第三の暴力事件に巻き込まれ、警察に追われるようになる。この部分においてアラブ人は、「血なまぐさい感じがするテロリスト」という「姿勢と言及の構造」をとおして構築されている。こうした「構造」を物語内のレベルで行使するのは、南滋に恋心を抱いているとおぼしき「事務の女」と南靖男の取り調べをおこなう警官である。次の引用は南滋がジャズ・ホールに電話し事務の女に、アラブ人に監禁されているので「斧かなんかドアを破るやつをもって来」るように頼む場面である。

「アラブ人の野郎の部屋に閉じ込められているのだ（中略）斧かなんかドアを破るやつをもって来てくれ」

アラブ人のためにとじこめられてるのね、アラブ人に殺されないで！アラブ人に爆弾で殺されないで！

アラブ人は爆弾を投げてばかりいるテロリストだ、あの人も殺されてしまう。（中略）アラブ人に監禁されているあの人のところへ斧を持って救い出しに行く！³¹⁵

「事務の女」は、南滋との電話の後に、外国人嫌悪・恐怖症のヒステリーにとらわれ、「うわごと譚言のようにアラブ人について訴えつづけているあいだに」教わったばかりのアラブ人の所在地を警官に言い漏らしてしまう。そして武装警官が、アラブ人の住んでいるビルの前に集まる様子を目の当たりにして、滋は彼を裏切ったのは、アラブ人と兄ではなく、事務の女であることを悟る。南滋の「南」＝「第三世界」への志向性は、確実なものとなる。しかし、「中心」の権力を象徴している警察に脅迫されるとパニックにとらわれ、「憎悪と恐怖のあまりに涙を流しながら滋は」³¹⁶ 階の部屋の窓の脇までまっすぐ降っている雨樋に身を移

³¹⁵ 大江健三郎、『われらの時代』、254 頁。

³¹⁶ 同上書、258 頁。

そうとして、喚きながらついには墜死してしまう悲劇的な展開を迎える。

アラブ人と南靖男も、第二と第三の暴力事件と関係があるという疑いで逮捕されるが、結局二人ともこの事件に関わっていないことが警察の取り調べで判明する。無罪が判明すると、南靖男の取り調べをおこなった警官は、彼の弟を不用意に墜死させてしまった警察側の手落ちを自己批判するような口調になる。日本の権力の「中心」を代表しているこの警官の口調も、「南」としての北アフリカのアラブ人に対する「姿勢と言及の構造」によって構築されている。

「あなたの弟さんはね、アラブ人に閉じこめられてると電話でいったわけです。アラブ人などという血なまぐさい感じがするからね、爆弾をたくさんもっておって、あなたの弟さんの仲間を、爆殺したように、逮捕にむかった警官まで爆破されかねない、そう思ったわけです。武器なしの弟さん一人が閉じこもっているのだとは思わなかった。武装警官が大勢押しかけてあなたの弟さんを怯えさせてしまったのはまずかった」

317

「事務の女」や警官の表現において北アフリカのアラブ人に対する差別的な表現が採用される反面、南靖男の物語の流れのほぼ全般にわたって、アラブ人の表象はあまりにも肯定的である。本論文における主要な論点の一つは、こうした「あまりにも」肯定的なアラブ人のイメージの構築が、ケルアックの『路上』における北アフリカのアラブ民族や地域の差別的な布置（＝「地図作成」）を転倒させ、脱文脈化の作業に基づいているということにある。この仕掛けの分析を遂行するためには、まず、『路上』における差別的な構造を呈示する必要がある。

IV.3.1 『路上』における北アフリカのアラブ人に対する「姿勢と言及の構造」による「世界地図」の作製

『路上』において、北アメリカが強調され、アメリカ合衆国の部分のレベルにおいてはニューヨークといった新植民地主義の宗主国中枢が強調される、中心指向的な「世界地図」が作成されていることは先述したとおりだ。サルは、ディーンとその情人とモルフィン依存者の教師オールド・ブル・リー（アメリカ人小説家ウィリアム・S・バロウズはそのモデルである）に会いに、アメリカ南部に位置するニュー・オーリンズの *Algiers* という周辺区域に行く。そこ

³¹⁷ 同上書、259頁。

でサルがオールド・ブル・リーを描写する一節は、『路上』における「世界地図」作成に格好の場面である。

ブル・リーのことを語るのには一晩中かかるだろう。(中略)あの長身のやせた体を引きずって、彼は若い頃、合衆国全部とヨーロッパと北アフリカの大部分を歩いてまわったが、それは現実の姿を見るためだった。彼は一九三〇年代にナチスから救ってやるためにユーゴスラビアで白系ロシア人の伯爵夫人と結婚した。彼が三〇年代の国際コカイン仲間といっしょにとった写真がある。髪はぼうぼうとさせて、互いに寄りかかっている一味だ。パナマ帽をかぶってアルジラス [=Algiers] の町のとおりを測量している写真もある。白系夫人とその後会ったことがない。彼はシカゴでは害虫駆除人夫、ニューヨークではバーテンダー、ニュー・アークでは召喚状送達吏であった。パリではカフェのテーブルに坐って、通りすぎる無愛想なフランス人の顔をながめ、アテネで酒を飲みながら彼が世界でもっとも醜い国民と呼ぶ人たちをながめた。イスタンブールでは、事実をもとめて、アヘン常用者やじゅうたん売りの群れの間を縫って歩いた。³¹⁸

『路上』における世界地図の「^{マッピン}地図作成」において、注目すべきは作品に登場する北アフリカや *Algiers* といった地名である。また(北アフリカ出身とおぼしき)「アラブ人」³¹⁹に対する執拗な言及は見落とせないものである。『路上』における北アフリカやアラブ人に対する「姿勢と言及の構造」は、アルジェリア解放戦争とスエズ侵攻という「第三世界」をめぐる同時代の文脈と深く繋が

³¹⁸ ケルアック、ジャック、『路上』、143~144頁。

³¹⁹ 例えば、ケルアックは、ディーンが、^{モータートリップ}自動車旅行で「南部」に着いて、ガソリンを買うためにガソリンスタンドに寄った場面において従業員が机でぐっすり寝ているのをいいことにガソリンを取り、代金を払わずに逃げる様子を、アラブ人の「逃げ去り方」に喩える。

「『南部に来たぞ！冬とはさらばだ！』

かすかな夜明けのひかりが道端の緑の新芽に映えていた。ぼくは深呼吸をした。モービル行きの機関車が大きな音をたてて闇の中を通過して行った。ぼくもモービルに行くのだ。ぼくはシャツを脱いではいやだ。十マイルほど道路を進んだ時、ディーンはエンジンを止めて給油所に乗り入れた。すると、従業員が机でぐっすり寝ているのに気がついたので、車から飛び出し、そっとタンクにガソリンを一杯つめこみ、ベルがならないのを見とどけ、アラビヤ人のようにとんと逃げ去った。ぼくらの巡礼のために、五ドル分ほどのガソリンがタンクいっぱいに入っただけだ。」

(同上書、139頁、傍点は引用者による)

っている。

ケルアックが、朝鮮戦争が激化した時期である 1951 年に、『路上』を三週間という極めて短い期間において書き上げたことは周知の逸話である。しかしこの小説は、1957 年までに世に出なかった。ケルアックが、六年間にわたって様々な書きなおしを行ったからだ。この六年の間に、アルジェリアにおける対仏解放運動やナセルの反新植民地主義的な「第三世界化」政策が世界の注目を集めることになった。以下にこの六年間の歴史的な展開を概観する。1952 年 1 月のチュニジアの解放運動弾圧の結果、フランスは国際的規模の酷評の的にされるようになった。1954 年のディエンビエンフーの勝利やジュネーヴ協定によってホー・チ・ミンが指導するベトナムが独立を遂げ、このことが北アフリカにおけるフランスの植民地の諸民族を力づける要因となった。同年に *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* がアルジェリア解放戦争を開始した。1955 年にはチュニジア・モロッコにおける対仏民族解放運動が強力になり、二国は 1956 年に独立した。その一方で、前にも触れたとおり、1956～57 年にエジプトに対し、イギリス、フランス、イスラエルが「スエズ侵攻」を実行したが、この新植民地主義的占領の試みは、エジプトを支持した「第二世界」(ソ連)のみならず、「第一世界」(米国)の反対をも受け、失敗した。つまり、ナセルの勝利に終わった。なおかつ、同じ 1956～57 年は、アルジェリア解放戦争が激化し、泥沼化するようになった時期でもあった。*FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* によって東部山岳地帯で小規模の武装蜂起として始まったアルジェリア民族解放戦争は、しだいにアルジェリア全域の農村地帯、そしてついにカフェや映画館の爆破というテロル行動を契機に都市へと拡大していき、第二章でも触れたとおり「本国」の第四共和制を威嚇する「怪物」へと変身したのである。

『路上』において、*Algiers* という地名は、8 回、そして *Algeria* という地名は一回³²⁰、*Egypt* という地名は三回、*Tunis* や *Morocco* という地名は一回ずつ用いられる。このことから、『路上』で作成している北アメリカの部分が強調された「世界地図」において、ケルアックが、(南としての)北アフリカに特別な地政学的な関心を寄せていることが判明する。ここで「世界地図」において、*Algiers* という地名が二つのまったく異なる地域を示す地理学の用語であることに注目

³²⁰ 二人がアメリカの南隣の国メキシコに行く挿話において、親米かつ従順な現地の青年ヴィクトルがディーンとサルを、後にサルが「アラビアのパラダイス」と定義する「淫売屋」に導く次の場面で、「アルジェリア」への言及がある。

「『よし』といってディーンは車の向きを変え、せまいアルジェリア風の街なみを通って行った。おだやかな驚きの表情でわれわれを見守っている顔がそのとおりの両側にずらりとならんでいた。われわれは淫売屋に着いた。」(同上書、284 頁、傍点は引用者による)

すべきである。

一つは、いうまでもなく、フランスが 19 世紀前半から植民地化していった、フランス＝本国の経済を支える直轄地となったアルジェリアの都市である。もう一つの *Algiers* は、アメリカのニュー・オーリンズがフランス直轄地であったころ、アフリカにおける仏領植民地の都市の地名にちなんで命名された周辺地区である。

つまり、サルとディーンが友人のオールド・ブル・リーを訪れに行き、滞在する場所として設定されている後者の *Algiers* の命名の歴史は、フランスの帝国主義の歴史と深く関わっているのだ。1719 年にジャン・バプティスト＝ルモアヌ卿³²¹に付与されたこのミシシッピの西岸に位置する広い土地と、ニュー・オーリンズは、地理的にアルジェリアとフランスの位置に相似すると思われる、*Algiers* という地名を与えられたという。³²²

言うまでもなく、『路上』にでてくる *Algiers* の多くにおいて言及されるのは、オールド・ブル・リーの所在地と設定されているミシシッピの *Algiers*、つまり「アルジラス」である。しかし、例えば先に引用した友人リーの挿話において言及されるのは、北アフリカの *Algiers*＝「アルジェ」なのか、ないしは、ミシシッピの *Algiers*＝「アルジラス」なのかは明確ではない。同じ一節でサルは、リーが北アフリカやフランスに旅したことにも触れる。読み手は、この地名は、*Algiers*＝「アルジェ」なのか、*Algiers*＝「アルジラス」なのかが判断できなくなるのだ。

さらにサルとディーンが二人の友人とともに自動車旅行モータートリップから戻ってニューヨークに入ったとき、体温を保つために耳のまわりにセーターを巻きつけていたディーンが自分たちを、ニューヨークを爆破しに行くアラブ人に喩える場面や、サルが危険なアラブ人に取り憑かれる悪夢を見る場面の直前で、この多用される *Algiers* という両義的な地名が布置されているのである。

夜明けごろぼくらは雲に覆われたはるかかなたに巨大な雲のように
聳り立つニューヨークを目前にして、ニュー・ジャージーを通過していた。
ディーンは体温を保つために耳のまわりにセーターを巻きつけていた。
おれたちは、ニューヨークを爆破しに行くアラビア人のいったいみ

³²¹ Jean-Baptiste Le Moyne de Bienville (1680～1767) は、カナダ生まれの開拓者である。フランス領ルイジアナの植民地知事。本論文で扱ったミラーの‘My Dream of Mobile’＝「私のモバイルの夢」と題したテキストの対象となるモバイル湾を含め、ニュー・オーリンズやビロクシなどを開拓した。

³²² “Algiers History,” <http://algierspoint.org/AHS/history.html> algierspoint.org

たいだな、と彼はいった。[Dean had a sweater wrapped around his ears to keep warm. He said we were a band of Arabs coming in to blow up New York.]³²³リンカーン・トンネルを通りぬけ、タイムズ・スクエアに向かった。³²⁴

物語内容のレヴェルからすると、一行をアラブ人のテロリストに喩えるディーンのイメージがサル印象に残り、それが夢において彼に取り憑くアラブ人としてよみがえってくる。次に引用した一節で、この悪夢をカルロ・マルクス（アラン・ギンスバーグがそのモデルである）やディーンに語ることによって、サルは「死の象徴」としての「アラブ人」のイメージから解放される。

外では雪が舞っていた。（中略）ぼくらが凍った道をカーブしながらニューヨークへ車を飛ばした。ディーンが運転しているときは、決して心配はいらなかった。彼ならどんな状況のもとでも操縦することができるのだ。（中略）

ちょうどそのころ、不思議なものがぼくに取りつき始めていた。つまり、何か忘れてしまったという感じだ。ディーンがあらわれてくる前に、ぼくには、あるやろうとした決心があったのだ。今ではそれがぼくの心からきれいに追いだされていたが、それでも相変わらずぼくの心の舌の先にひっかかっている感じだ。それがどんな決心だったか思い出そうとして、ぼくは指をならしつづけた。ぼくはそれを口に出しきえた。それでも、はたしてそれが本当の決心なのか、それとも、ど忘れしてしまった一つの考えにすぎないのか、分からなかった。そいつが自分につきまとして、自分をどぎまぎさせ、悲しませた。（中略）カーロ・マルクスとぼくは一度、ひざをつき合わせ二つの椅子に向き合って坐ったことがあった。ぼくは、自分の見たある夢のことを話した。一人の異様なアラビア人が砂漠を横ぎってぼくを追いかけてきたのだ。ぼくは逃げようとしたが、警備都市のほんの少し手前でとうとう追いつかれてしまった。

[a dream I had about a strange Arabian figure that was pursuing me across the desert; that I tried to avoid; that finally overtook me just before I reached the Protective City.]³²⁵「それは何者だ？」とカーロはいった。二人で考えてみた。ぼくは、それは経かたびらを着た自分自身だったのだろうといっ

³²³ Kerouac, Jack, *On the Road*, 106 頁.

³²⁴ ケルアック、ジャック、『路上』、116 頁.

³²⁵ Kerouac, Jack, *On the Road*, 112 頁.

てみたが、それでもなかった。何かが、誰かが、ある悪魔が、人生の砂漠を横ぎって、われわれみんなを追いかけていて、われわれが天国においつかないうちにわれわれを捕まえようとしているのに違いない。もちろん、いまそれをふりかえってみれば、それは死だったのだ。死は天国の手前でわれわれにおいつくだろう。われわれがその生きている日々恋い求める一つのもの、われわれに溜息をつかせ、呻かせ、あらゆる吐き気を感じさせる一つのもの、それはある失われた至福の記憶なのだ。われわれはおそらくそれを母の胎内で経験したのだろうし、また、(認めたくないことではあるけれど) それを再現しようとするれば死の中以外にはなかろう。しかし誰が死にたいなどと望むだろうか? 慌ただしい日々の出来事の中で、ぼくは心の奥底で、このことについて考え続けた。ディーンに話したところが、彼は即座にそれをただ単に純粋な死に対する憧れだと判断した。われわれはすべて二度と生命を持つことはないのだから、そんなことにかかずらう必要はないというのだ。ぼくはそのとき彼に同意した。³²⁶

この一節におけるアラブ人のイマージュは、ほぼ「死」という「人間条件」にかかわるもっとも根幹的なものと結びつけられ、またサルが「天国」へ行き着くことを妨げる悪魔同然のものとして構築されている。この読み手に恐怖感を与えるような「アラブ人」に対する「死の象徴」としての表象、そして先の引用文における「テロリスト」としての表象と、執拗に反復される *Algiers* という両義的な地名の双方が喚起する同時代現象は、アルジェリア戦争なのである。

しかし本論文の文脈からすると、問いたださなければならないのは、なぜ、ディーンの差別的な冗談における「死の象徴」としてのアラブ人が、のちに悪夢のもとになるほどの印象をサルに残したのかということである。そのことは、ケルアックが自分自身をモデルにして構想した、サル・パラダイスという作中人物の「フランス系」カナダ人という民族的自己同一性^{エスニック・アイデンティティー}に淵源を持つのである。

本名が *Jean-Louis Lebris de Kerouac* であった——*Jack* は、ケルアックのあだ名であった——カナダからアメリカに移民したケルアックの両親は、かなり保守的であった。とりわけ彼は、右翼に傾く父親の影響を大いに受けたと思われる。例えば、「保守主義——^{コンサーバティズム}ジャック・ケルアックのもうひとつの顔」の筆者中上哲夫によれば、「近年アメリカ本国におけるケルアック評価がかつてのビート・ジェネレーションの旗手一本槍からカソリック的要素とフランス系カナダ人的要素(つまり伝統的で保守的な要素)の強調の方へ軸点を少しずつずらしてきて」

³²⁶ ケルアック、ジャック、『路上』123、124頁。(傍点は引用者による)

いるにもかかわらず、日本におけるケルアック評価にはまだそれが欠けている」という。³²⁷

『路上』が出版された以後、「ディーン・モリアティ＝ジャック・ケルアックという短縮した固定観念がにわかにでき上がってしまい」、つまり、「世間はディーン・モリアティのように振舞うようにケルアックに欲求したのである。」このような『路上』の読者の期待は、生涯ケルアックに取り憑き、彼をなやますことになった。「ジャックの社会的政治的保守主義は、一般的なビートのイメージとは食いちがって、父親のレオから受け継いだもので、」レオ・ケルアックは「十九世紀的なアメリカの個人主義の感覚をフランス系カナダ人の農民の保守主義に結びつけたのだった」。レオ・ケルアックは「社会ダーウィニズム説を固く信じる、叩き上げた男だった」。なおかつ中上によれば、ケルアックの晩年の1960年代後半における「圧倒的に愛国的な「反共主義」と、フラワー・ジェネレーションのようなカウンター・カルチャーに対する嫌悪は、二〇年前の父親の態度に似通って」いた。『路上』という前衛的な小説の作家であり、ビート・ジェネレーションの生みの親であるジャック・ケルアックには、保守主義への傾斜があったのである。³²⁸

さらに、『『帝国』のデソレイション・エンジェルズ、つまりは・・・』において文芸評論家丹生谷貴志は、『路上』の、とりわけ最後の段落の最初の文章に焦点を当て³²⁹、ケルアックの作品における、「帝国主義」を肯定するような中心指向的なイデオロギーを呈示する。従って丹生谷によれば、『路上』は、戦後以降の世界におけるアメリカが主導する新植民地主義の勝利を予言し、それが祝福される言説空間であると言えよう。

[戦前戦中における] 日本とムッソリーニーとヒトラーが抱いた「帝国」の夢は、(中略) ファナティックな暴力性の中に固着した幼稚なパラノイアックな「帝国」の出来の悪いマケットだった。(中略) 彼らはその幼稚さの中で、唯一無二としての「帝国」を建設するのに、他国を

³²⁷ 中上哲夫、「保守主義——コンサーバティズムジャック・ケルアックのもうひとつの顔」、『現代詩手帖』、31(2)、1988年1月号、193頁。

³²⁸ 同上書、191頁。

³²⁹ 「アメリカに太陽が沈むとき、ぼくは古い崩れた河の栈橋に腰をおろし、遠くニュー・ジャージーを覆う長い長い空を見つめ、太平洋沿岸まで一つの信じがたい巨大なふくらみとなつてうねっているあの生々しい大陸を感じ、そして通っているすべての道や、その巨大な国の夢の中で夢見ている人々を感じる」(ケルアック、ジャック、『路上』、305頁)

滅ぼすという手続きしかもたらさなかった。その結果むしろ、彼らは他国の反撃的憎悪を増幅させ、むしろ「帝国」の条件を破壊してしまったのだ。(中略)

そして、勝利したのは新たな「帝国」の運営の可能性なのである。それは他国を滅ぼそうとはせず、むしろ「協調」を選ぶ。そしてその「協調」の中で、契約と交通の中で、他国をゆっくりと無化して行く可能性が生み出されるのだ。「協調と協和の帝国」の可能性、それが勝利したのだ。(中略)

[アメリカ合衆国流の自由主義的帝国の勝利]の予言にたぶん間違いはない(中略)。「サルとディーン」はそれを、あたかも完全なる統一によって構成された唯一無二の強固な「国」、かつて存在したことのない新たな「国」の設立の可能性であるかのように語る。しかし、「帝国」は(中略)統一という観念の蒸発の場所であり、あらゆるものが堅固さのない浮薄な不安定性を脆弱さの中に開かれるということの意味するものに違いない。³³⁰

丹生谷は、この『路上』論において、『路上』の主人公たちを、(新植民地主義という)「巨大な」「帝国」において、^{めいてい}酩酊の中でジグザクに走る天使的放浪者として位置づけている。しかし、丹生谷は、ケルアックの「アメリカ人」というナショナル・アイデンティティーにのみ重点を置き、ケルアックの「フランス系アメリカ人」としての二重の民族的自己同一性^{アイデンティティー}に注意を払わない。それゆえ、この二重の民族的自己同一性^{アイデンティティー}に由来するフランス帝国主義への共感、アルジェリア民族解放運動への反感^{アンティパシー}が、小説における「帝国主義」のヴィジョンにいかに作用するか、という問題を見逃しているのだ。

『路上』において、新植民地主義のなかの半植民地として言及される「メキシコ」は、フランスの植民地としての「アルジェリア」のあるべき姿のモデルにされている。新植民地主義の通貨としての米ドルの力で、安い酒と南米の娼婦を楽しむためにメキシコに行く挿話にそれがもっともよく見てとれる。この挿話に登場する、「ボランティアの」「ヒモ」と「執事」の間を揺らぐ過剰に親米的なメキシコ人のヴィクトル(やメキシコの親米的なものとして言及されている警察官なども含めて)は、理想的な新植民地の現地人として描かれている。

かわいそうなヴィクトルは、その間中背中をカウンターに向けて、酒

³³⁰ 丹生谷貴志、「『帝国』のデソレイション・エンジェルズ、つまりは・・・」、『Eureka』、31(12)、1999年11月、192～193頁。

場の真鍮の手すりによりかかって立っていた。そして、三人のアメリカ人の友達が騒ぎ回っているのを見て、嬉しそうに飛びはねていた。ぼくたちは彼に酒を買ってやった。彼の眼は一人の女を見て輝いたが、細君に忠実なので、どんな女も受けつけようとしなかった。ディーンは彼に金を押しつけた。この混乱した気狂いの騒ぎの中で、ぼくはディーンが何をたくらんでいるかを知るにいい機会をつかんだのだが、彼はすっかり生气ではなくなっていて、ぼくが彼の顔をのぞきこんでも、ぼくが誰だかわからなくなっていた。「うん、うん」としか彼はいえなかった。この騒ぎは底なしのように思えた。まるで別の人生の長い、空虚なアラビアの午後の夢 [Arabian dream in the afternoon]³³¹のようだった——アリ・ババとその仲間と遊女たちだ。ぼくはまた自分の女と彼女の部屋へ急いで去った。ディーンとスタンは前の女をとり変えた。³³²

「アラビアの午後の夢」という言いまわしの採用を考慮すると、ケルアックがこの挿話においてまるでアルジェリアのアラブ人のあるべき姿を描こうとしたとさえ思わずにはいられない。このメキシコの淫売屋は、ケルアックにとって「天国」のようなものであるが、それも（物語言説のレヴェルからすると）意味ありげな形で「アラブ」というイメージと接続される。³³³

IV.3.2 『路上』の脱文脈化と南靖男の「北アフリカ」フェティシズム

ケルアックが「アラブ人」や「北アフリカ」に言及するとき念頭にあるの

³³¹ Kerouack, Jack, *On the Road*, 264 頁.

³³² ケルアック、ジャック、『路上』、287 頁。（傍点は引用者による）

³³³ 「ところで、ヴィクトルが急に烈しくぼくの腕をつかんで、何かくるったように合図をした。

『どうしたんだ？』 彼はいろんな仕草でぼくたちにわからせようとした。それから彼は酒場に駆けて行って、いやがるバーテンから勘定書をひったくり、それをもってきて見せた。勘定は三百ペソ、つまり、三十六ドル以上になっていた。いくら淫売屋でもこれでは高過ぎる。それでもぼくたちは酔いがさめて引き揚げようとはしなかった。ぼくたちはすっかり疲れきっているくせに、つらい、つらい旅路の果てにやっと見つけ出したこの奇妙なアラビアのパラダイスで、かわいい女たちといつまでもうろついていたかった。（中略） ついに、ぼくは何としても出かけようといった。「先にいっても、結構同じ楽しみがあるぞ。」（ケルアック、ジャック、『路上』、288 頁、傍点は引用者による）

は、フランスの植民地問題としてのアルジェリア解放戦争である。「死の象徴としてのアラブ人」のイメージを構想するにあたって、ケルアックは、西洋における「北アフリカ」をめぐる表象をも意識していただろう。この「北アフリカ」表象は、アルジェリア解放戦争のそれに限らず、『われらの時代』においても存在感を示すエジプトの指導者「ナセル」にかかわるものである。

本論文でスエズ侵攻についてはすでに触れたが、ここでナセルが「死の象徴」として表象されるようになる過程に言及する必要があるだろう。1952年に自由将校団 (*Al-Dubbat al-Ahrar*) によるエジプト革命に参加し、1954年に団体内の権力争いに勝利しエジプトの指導者となったナセルは、ナイル川にアスワン・ハイ・ダムを建設することに着手した。アメリカとイギリスとの融資交渉が進まなかったためにソ連と交渉することになると、アメリカとイギリスは融資の撤回を通告した。その結果ナセルは、イギリスのスエズ運河会社を国有化し、その収益によってアスワン・ハイ・ダムを建設する方針を取った。イギリス・フランス・イスラエルがこの行動に即座に反発し、スエズ侵攻を決定した。この過程において侵攻の正当化政策として、とりわけイギリスやフランスの政界および大衆メディアでナセルは、差別的な酷評の標的にされたのだ。

「南」＝「第三世界」に対するこの侵攻を正当化するうえで、ホロコーストから脱出し、イスラエルを建設したユダヤ人を防衛するという「ユダヤ人防衛論」が掲げられ、ナセルは「ナイル川のヒトラー」という屈折した比喻をとおして表象されるようになった。³³⁴アルジェリア解放戦争を支持したナセルがエジプトを占領し支配下に置くことは、とりわけ植民地の問題を抱えているフランスの政治家にとって一定の強迫観念オブセッションとなった。³³⁵スエズの国有化をとおして自国の「第三世界化」を目指したナセルが、あたかもイギリスとフランスの「油断」によって生まれ、戦前戦中の過程で統制できなくなった「ヒトラー」という「死の象徴」の、北アフリカにおける「再生」であるかのように英仏で報道されたのである。

その反面、日本のジャーナリズムにおける事情は、ヨーロッパのそれとは大いに異なっていた。例えば、スエズ侵攻の開始時点から『われらの時代』の出版直前にかけて、ナセル自身による、ないしは彼に関する雑誌論文・特集など

³³⁴ Alteras, Isaac, *Eisenhower and Israel: U.S.-Israeli relations, 1953-1960*, University Press of Florida, Gainesville, 1993年, 189~190頁。(この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

³³⁵ Lang, Anthony, F., *Agency and Ethics: the Politics of Military Intervention*, State University of New York Press, New York, 2001年, 129~149頁。(この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

の数が 20 以上もあった。さらに、スエズ侵攻やアルジェリア戦争との関係において、「アラブ」問題を肯定的に取り上げた雑誌論文の数は莫大なものである。遠きアフリカのアラブ人の指導者に対するこのような不意の関心は、日本の雑誌ジャーナリズムにおいて、一定の「ナセル主義の言説」の生成をもたらしたのである。この言説は、ナセルを「死の象徴」へと変形したイギリスとフランスの主流ジャーナリズムとは対照をなす反面、マイナーの「新左翼」メディアのそれとは重なりあっていた。

これらの雑誌論文のほとんどに、ナセル大統領の「写真」がついていたことはいうまでもない。南靖男のフェティシズムの対象は、一時期この「写真付き」の論文におけるナセルをめぐるロマン主義的な表象であった。アラブ人と接することになった南靖男は、そのナセル戦線に「政治的な参加」をしようとした「時期」を想起するのである。

靖男は（中略）泳ぎつづけるアラブ人の若わかしい体の背後にナセルの幻影を見ているような気がした。すべてのアラブ人がナセルを象徴として背後に背負っている。精力的、強靱、意志、欲望、高揚、花粉にまみれるようにそれらのイメージにまみれた蜂がナセルだ、かれはアラブ民族の「雄渾」な花のひめられたくぼみから勇気に武者ぶるいして這い出て来る。靖男はナセルの写真を様ざまな刊行物から切りぬいてスクラップした一時期のことを思い出した。（中略）バンドン会議に出席した時の公然と胸をはったナセル、国民投票に勝って共和国憲法を成立させた時のナセル、ユーゴを訪問した時のナセル。それらの網反で印刷された写真の数かずはいまもなお靖男の情念のもっとも熱い部分に灼きつけられているのだ。かれはエジプトに行くこと、ナセルのためにそこで戦うことを熱望していたものだった。エジプトから日本の青年に義勇兵募集のよびかけがあるということで、かれはそれに応募しようとしたのである。エジプトの地獄のように暑いカイロ、砂漠のなかの土の家、泥をかためた床、おれとともに銃を取るサイド地方の逞しい農民。³³⁶

スエズ運河国有化やスエズ侵攻の時期における南靖男の「ナセル・フェティシズム」は、小説のこの部分において描かれている。また大江はケルアックにおける「死の象徴」としての「アラブ人」のイメージを転倒するうえで、日本のジャーナリズムにおけるロマン主義的な「ナセル主義」＝「第三世界民族主義」の言説を媒介にしていることがこの一節において明瞭である。つまりこ

³³⁶ 大江健三郎、『われらの時代』、153～155 頁。（傍点は引用者による）

ここで、「ナセル主義」の言説をめぐるパロディーの仕掛けが作動しているのである。しかしこのパロディーは、「第三世界」による非同盟運動そのものを狙ったものではなく、日本のジャーナリズムの「不意」のロマン主義的な「第三世界論」に対して動員されたものであり、「第三世界論」に対する内部批判のような内容を持つ。

このような不意のロマン主義的「第三世界論」に対する「内部批判」は、「エジプトからの義勇兵募集という噂うわさがデマにすぎない」ことを理解し、「ナセル的理想像を見うしなってしまった」と述べる南靖男の言葉においても暗示されている。『われらの時代』は、ケルアックにおける「反・第三世界」的且つ保守的な「姿勢と言及の構造」のみならず、日本の雑誌ジャーナリズムにおける「第三世界論」の言説をも言語的な暴力の的にしているのである。

この一節は、南靖男の「ナセル・フェティシズム」をあらわにする一方で、『われらの時代』における世界地図の「地図作成マップピング」とも深く関わっている。ここでは、ナセルの「写真的」なイメージへの言及をとおり、テキストにおいて作成されている世界地図の「第三世界」＝「南」の部分が強調ハイライトされるのである。例えば、「バンドン会議に出席した時の公然と胸をはったナセル」という表現をとおして、バンドン＝アジア・アフリカ会議に「参加アンガージュ」した、非同盟の「第三世界」社会主義を掲げた主要な諸国としてのネルーのインド、周恩来の中華人民共和国、スカルノのインドネシア、そしてもとよりナセルのエジプトなどが世界地図に配置されるのだ。なお、「ユーゴを訪問した時のナセル」という表現により、「第二世界」＝ソ連が指導した社会主義陣営において、非同盟の「第三世界」＝「南」を代表した南部ヨーロッパのティトのユーゴスラヴィア³³⁷が、同じ世界地図の「第三世界」の部分に、ヨーロッパを代表するものとして位置づけられている。

*

「靖男は（中略）泳ぎつづけるアラブ人の若わかしい体の背後にナセルの幻影を見ているような気がした。すべてのアラブ人がナセルを象徴として背後に背負っている。」という表現においても明瞭であるように、南靖男は、*FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の極東代表者としての「アラブ人」を直接に認識したり、彼

³³⁷ 『われらの時代』に潜在する「第三世界」の地図において、ヨーロッパの「第三世界」としての「南」を代表するユーゴスラヴィア共和国は、1948年まで「第二世界」、すなわち、「北」の「東側」に所属していた。しかし同年「民族主義国家」であるがゆえにコミンフォルム（共産党情報局）から除名された。ユーゴスラヴィアの「第三世界化」の体験は、50年代後半にソ連の枢軸から離脱するようになった中国のそれと相似している。

と無媒介に接したりすることができない。また『われらの時代』における「アラブ人」に固有名がないことも、南靖男の認識不足の問題をあらわしている。例えば、 коммуニストの友人八木沢が初めてアラブ人を紹介した時、アラブ人の名前を言ったはずだが、靖男は彼の名前を即座に忘却してしまう。

「ああ、忘れていたよ（中略）アルジェリアから来ている男だ、アラブ人だよ」

靖男はアラブ人と握手しあったが、八木沢がアラブ人の名前をかれにつたえたとき、アラブ人の手がやせほそって垢じみているのに気をうばわれていたのでそれを聞きもらした。アラブ人はアルジェリアの実情を日本人に訴えるためにやって来た、そしてアルジェリアの民族戦線の極東代表部を作ろうとしている。³³⁸

そして、南靖男は「アラブ人」を弟に紹介するときも読者に違和感を与えるような奇妙な言い方をする——「おれの友達だ、アルジェリアから来ている男だ。」³³⁹南靖男は、一時期フェティシズムの対象にしていたナセルの「写真的」なイメージの記憶を媒介にしてしか「アラブ人」を認識することができず、また、その記憶を媒介にしなければ彼と接することもできないわけである。

南靖男が、「アルジェリアから来た男」としてのアラブ人を、ナセルの「写真的」なイメージをとおしてしか認識できない理由のひとつには、彼がアルジェリア解放運動を把握できていないことがあるだろう。この運動は、第二次世界大戦後の他の反帝国主義民族解放運動とは相違し——例えば、毛沢東が指導した中国解放運動、ないしはホー・チ・ミンが指導した対仏ヴィエトナム解放運動など——長期間にわたって、どの指導者の固有名も全面にでない、特定の指導者を持たない、匿名のものであった。

言い換えると、南靖男がそうしたアルジェリア解放運動を無媒介に認識することができない理由には、この運動に主体的な指導者がいないことがある。その反面、彼は、ナセルが指導したエジプトの反新植民地主義運動にはたやすく感情移入ができ、先述したとおり義勇兵アンガジュマンに応募することすら望む。靖男はアルジェリア解放戦争の宣伝活動への「政治的な参加」の決心をする際にも、この記憶を呼び起こせずにはいられない——「このアラブ人の背後にある象徴がナセルだ、おれはエジプトに出発しようと考えていたところ、ナセルの鋼色の像はがねいろ

³³⁸ 大江健三郎、『われらの時代』、126頁～127頁。

³³⁹ 同上書、241頁。

をとおして、このアラブ人とともに戦おうとしていたのだ。」³⁴⁰

南靖男の「アラブ人」に対する感情が、徐々に同性愛的色合いが濃厚になる崇拜的な関心に変質して行く過程の媒介もまた、彼の過去におけるナセルの「写真的」なイメージに対するフェティシズムなのである。南靖男がアラブ人を「オタンテイック正真正銘」な男らしい主体性の象徴に転換する時には、過去のフェティシズムに依拠しているのにすぎないのだ。

「そして靖男の眼は女陰的な世界とまったく無縁の、すばらしく徹底して男性的な人間を（中略）見たのだ。アラブ人だ、不意に幸福な眠りからさめて、立ちあがり、飛込台に登っていくアラブ人（中略）は、（中略）ほとんど動物的ひょうかん剽悍なその全容をあらわにしている。（中略）かれの体のまわりに、不意にアフリカ的なすべてがぎしゅう蟻集してきたようだった。（中略）靖男は体をふるわせ嘆息した。アラブ人の胸きょうこう腔が突然ふくれあがる、上体が屈む、そしてあたかも靖男に猛禽のようにおそいかかる勢いで、アラブ人は飛び出してきた。（中略）脱出、男らしい脱出、それを行わなければならない！おれは衰弱し消耗している、しかし衰弱しても、消耗してもいない男がいるのだ、おれは快復しなければならない。

341

南靖男の *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* への「アングージュマン政治的な参加」が結局失敗してしまう理由は、彼があらゆる政治的な現象を性的な崇拜の対象に転換してしまうという精神的な傾向による。ナセルの「写真を様々な刊行物から切りぬいてスクラップ」していたという彼のフェティシズムは、暴力事件の連鎖による転機までは、トラックの写真を集めることに夢中になっていた弟の「トラック・フェティッシュ」に照応するようなものである。そしてナセルの「写真」に対する南靖男の無意識的なフェティシズムをもって、戦前戦中の「御真影」フェティッシュにおける「オタンテイック正真正銘」で男らしい主体性の象徴となり、日本国民に恐怖とともに崇拜の念を喚起した、「インベリアル皇帝」のイメージが戦後に残している空白域を埋めようとしたわけである。

先に、『路上』においてケルアックは、「死の象徴」としての「アラブ人」というイメージを登場させていること、そしてそれがナセルや *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* という同時代現象と繋がりを持っていることに触れた。ケルアックが「アラブ人」に付与した差別的な「死の象徴」というイメージを、

³⁴⁰ 同上書、155頁。

³⁴¹ 同上書、153～155頁。

大江は、『われらの時代』において、戦前戦中の天皇を描くうえで動員している。ここで注目すべきは、天皇を「死の象徴」として定義するのが「アラブ人」そのものであることだ。「アラブ人」は、戦後に「象徴」天皇制という形で「再生」した天皇の、戦前戦中における日本国民にとっての意味について述べる。

「あなたは日本人の青年が、死について無関心な態度を示すことに気づいてはいらっしゃいませんか？ 第二次世界大戦のあいだ、日本人の青年は死に憑かれていました。天皇は、現在では日本人および日本の象徴だということに憲法が規定していますが、戦時には、天皇は死の象徴でした。特攻隊の若者をおびやかす死、性的な恍惚をあたえる死、それは天皇のイメージをつうじてかれらに君臨していたわけです。しかし、戦後死は遠ざかった。若者は、死について情熱的でなくなった。」³⁴²

「現在では日本人および日本の象徴だということに憲法が規定してい」るのにもかかわらず、天皇が戦時中には「死の象徴」だったことは、天皇に対する疑似テロルに関与したジャズ・トリオの三人が、朝鮮戦線から運ばれた手榴弾や警察の「暴力」によって死に、物語空間から消去された展開に示されている。とりわけ、高と南滋が、ちょうど日本＝「北」（の西側）という「中心」から、北朝鮮か中華人民共和国といった「周辺」＝「南」へ「通過」しようとした時点において死ぬことから明らかである。

南靖男が、アルジェリア解放戦争を、ナセルをとおしてしか認識できないことは、天皇という「主体」を中心とする明治維新以降の中心指向的な構造が、未だに日本青年に取り憑いていることに起因している。それゆえ彼は、ナセルという「主体」の媒介をとおしてしか、「第三世界」と接することができないのである。

「アラブ人」の上記の科白からも明瞭であるように、物語言説のレベルからすると反帝国主義の「第三世界」＝「南」を象徴する「アラブ人」と、戦前戦中の帝国主義的暴力行使を象徴する主体としての天皇という、二つの「死の象徴」が対置され、拮抗している。この二つの要素は、相互に排他的なものとして布置され、明治維新以降の過程において構築され、再生産されるようになった天皇という主体を中心とする国民国家としての日本と、日本人という国民の中心指向的な構造は、ナセル主義の言説において再生産されているのだ。大江は『われらの時代』において日本のジャーナリズム空間におけるこのような二重構成のフェティシズムに、批判的に表象しているのである。

³⁴² 同上書、234～235 頁。（傍点は引用者による）

『路上』という「世界文学」のテキストでは、保守的な「姿勢と言及の構造」をとおして、西ヨーロッパやアメリカ合衆国＝「北」（の西側）を中心に据える「世界地図」が作成されていることについて先に詳述した。大江はこの「地図」を、『われらの時代』で「第三世界」の部分が強調される世界地図を作成するうえで転用しただけではない。こうした「地図作成」の作業において、戦後の「象徴天皇制」を中心にする中心指向的な構造が、日本を「第三世界」から疎遠にさせ、日本が排他的に新植民地主義体制と協力する過程に貢献するのだというヴィジョンを呈示しているのだ。『われらの時代』において、一連の「前衛的」な「世界文学」のテキストの脱文脈化を媒介にして作成される「世界地図」の「第三世界」＝「南」の部分から、日本が消去されるのもそのためである。

IV.4. 『われらの時代』と「世界文学」の「地図」における大江文学の位置

先に、『われらの時代』で脱文脈化という言葉レベルの暴力の対象にされた「世界文学」のテキスト（ミラーの『冷房装置の悪夢』、ローレンスの『チャタレイ夫人の恋人』、ケルアックの『路上』）は、同時に大江が愛読していた作品でもあるということに触れた。愛読した作品を部分的にであれ、脱文脈化という批評作業の対象にする「方針」は、「第三世界」文学の作家特有の、「北」（の西側）の「文化」に対する感服と、その文化に内在的な「帝国主義」的権力に対する反発とのジレンマに照応している。この問題は、物語内容のレベルでは、フランス文化に敬意を抱いている反面、この国がアルジェリアに対し行使している帝国主義的暴力に反発するという、南靖男の姿勢において象徴的にあらわされている。

『われらの時代』において脱文脈化されている作品は、出版された時期において「前衛的」な位置に立っており、「世界文学」のカテゴリーにおける一定の「始まりの現象」となったものばかりである。しかし、これらの作品は前衛的ではあっても、保守的西洋中心主義的な「構造」を孕んでいる。本論文では、このような「構造」をサイドの理論を援用して「姿勢と言及の構造」と呼ぶことにした。『われらの時代』における脱文脈化作業にあたって、大江はとりわけこれらの「構造」に焦点を絞り主な対象にしているのである。

大江のこのような「小説の方法」は、西洋文学としての「世界文学」の主な作品を「書きなおし」、それらに反帝国主義的な立場から「逆らって書く」「第三世界」文学の作家の「小説の方法」と重なりあう。例えばサイドによると、ケニアのジェイムズ・グギ（後にグギ・ワ・ジオンゴ）は、『河を隔てて』(The

River Between, 1965年)³⁴³において、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899年)³⁴⁴をまさに「書きなおし」しているのである。しかしこの過程において、「河、探検、神秘的な光景といったコンラッド的」イマージュは、読者の意識から消されることなく、「むしろ、まったく異なるかたちで強調され、異なるかたちで、体験しなおさせられる」。グギは「『闇の奥』では抑制されていた新たなパターン」を解放させることによって、「新しい物語型を創出する」ことに成功する。この新しい物語の型は、コンラッドの西洋中心主義の視点から見据えたアフリカではなく、「アフリカ人のアフリカへの回帰のありようを暗示しているのである」。³⁴⁵

『われらの時代』の「脱文脈化法」に近似するこの「小説の方法」を、サイドは「模倣しつつの反転」=*mimetic reversals*と定義する。例えばサイドによると、この「方法」はタイプ・サーレフの『北へ遷りゆく時』(*Mavsim al-Hiġra*

³⁴³ 『河を隔てて』は、主人公ワイヤキやその部族をとおして、大英帝国によって破壊された東アフリカの文化遺産に焦点を集める小説である。エングギが英語で書いたこの小説は、ケニアの大多数民族であるキクユ族を中心に結成された「ケニア土地自由軍」による独立運動「マウマウ団の乱」(*Mau Mau Uprising*)をキクユ族の視点から語る。1952年から1960年にかけて植民者の農場、警察署、政府軍用地や親植民地派のケニア人に対するテロル襲撃に基づいたこの叛乱は、1964年のケニアの独立を早める主な要因となった。

ケニアの独立から一年後に刊行された『河を隔てて』においてエングギは、宣教師と現地の部族との衝突に焦点を集め、植民地的支配が残した長期的な「傷跡」の影響や民族解放闘争の成り行きを綴って行く。エングギは、この作品(や他の作品)において、屈折したアフリカのイマージュを構築した『闇の奥』のような「北」(の西側)の文学としての「世界文学」のパースペティーフを相殺し、それに自らのパースペティーフを置き換えているのである。(Ngugi, Wa Thiong'o, *The River Between*, (African Writers Series) Heinemann, London, 2008年、を参照)

³⁴⁴ イギリスに移民したポーランド生まれの作家ジョゼフ・コンラッドの中編小説である『闇の奥』は、「世界地図」のアフリカの部分を見て、そこに見いだした暗黒世界の魅力に引きつけられたマーロウ船長が、アフリカの奥地を訪ねたときの体験を物語る。マーロウ船長が魅せられていた「暗黒」は、コンゴ川をさかのぼる時、人間性の暗黒の色合いを濃厚にするようになる。『闇の奥』は「アフリカの奪い合い」(*scramble for Africa*)という、「北」(の西側)のヨーロッパ人によるアフリカに対する支配と搾取の実施を、自らも精神的に荒廃してゆく白人たちを中心にして描写する。『闇の奥』は、植民地主義という支配搾取形態に対するというより、その実施の仕方に対する保守的な立場からの(自己)批判を内包する小説である。

³⁴⁵ サイド、エドワード、W.、「抵抗文化の諸テーマ」、『文化と帝国主義』、36～37頁。

ila ash-Shamal, 1966年)³⁴⁶においてもコンラッドの『闇の奥』に対して動員されているのである。

コンラッドの一人称イギリス小説スタイルとヨーロッパ人の主要登場人物は、この小説では、ある意味で、反転する。第一点、アラブ語が使用されるから。第二点、サーレフの小説によって対象とされるのが、ヨーロッパへの北上の旅をするスーダン人であるから。そして第三点、語り手がスーダンの村落から語りかけるから。かくして闇の奥への旅は、いまだ植民地時代の遺産の重圧にあえぐスーダンの田舎から、ヨーロッパの奥〔中心部〕への聖なる〈逃避行〉へと転換される。(中略)サーレフがいかにも周到な用意のもと、コンラッドを模倣しつつ反転させたかは、クルツの住居を囲む柵のうえに飾られた頭蓋骨までもが、[ムスタファ・サイード]の秘密の書齋にぎっしりとつめこまれたヨーロッパの文献というかたちで反復され転倒されていることからわかる。北から南へ、また南から北への、干渉と横断が、コンラッドによって〔逆〕られた植民地的航路の往復をさらに広いコンテクストにおき、より複雑なものにかえている。その結果は小説の題材となった領域の再利用のみにとどまらず、コンラッドの威風堂々とした散文が押し殺してしまったいくつもの矛盾や食い違い、そしてその帰結を明示することとなった。³⁴⁷

³⁴⁶ サーレフが1966年に発表した『北へ遷りゆく時』は、30カ国語以上の言語に翻訳され——『河を隔てて』のごとく——世界的なレベルの人気を集めた小説である。ストーリーは、大英帝国の植民地支配の時代とポストコロニアルの時代を体現するドッペルゲンガー的な二人の作中人物である、ムスタファ・サイードと無名の語り手の対話を中心に展開する。語り手は、植民地支配の時代にイギリスに留学した優秀な知識人であるにもかかわらず、その複雑な過去を隠蔽しようとする神秘的なムスタファ・サイードに魅せられる。ムスタファ・サイードはつねにアフリカ人としての自己同一性と、ヨーロッパ人に同化した自己同一性の葛藤を経験するが、それは彼のイギリス女性との性交渉に象徴的に反映されている。

『河を隔てて』のように、敢えて言えば「反・『闇の奥』」的な小説である『北へ遷りゆく時』において、過剰な支配と搾取による破壊をもたらした「北」(の西側)の帝国主義国家のみならず、ファノンがナショナル・ブルジョワジーと呼んだ、解放後の支配階級の腐敗も批判的にされている。(Salih, Tayeb, *Season of Migration to the North*, Translated by Johnson-Davies, Denys African Writers Series Heinemann, London, 2008年、を参照)

³⁴⁷ サイード、エドワード、W.、「抵抗文化の諸テーマ」、『文化と帝国主義』、37～38頁。(傍点は引用者による)

同時代的といえる、1959年に刊行された『われらの時代』と60年代半ばに書かれた『北へ遷りゆく時』、『河を隔てて』などのアフリカの小説における共通点は、サイードが「模倣しつつの反転」= *mimetic reversals* と定義する物語言説レベルの「小説の方法」のみではない。両者の間には物語内容のレベルにおいても共通点が存在する。例えばこの「模倣しつつの反転」という物語言説レベルの「小説の方法」における「周辺」と「中心」=「南北」の力関係を逆転する仕組みが、物語内容のレベルにおいて「北」（の西側）の帝国主義に対する「第三世界」としての「南」の抵抗運動というモチーフと連動していると言えよう。「南」=「周辺世界」における脱植民地化の過程において、^{プライマリ・レジスタンス}「原初的〔第一時的〕抵抗」の後に発現した（解放後の）第二段階としての「第二次的=イデオロギー的抵抗期」³⁴⁸の「抵抗文学」と大江作品には、重なりあうところが少なくないと言える。

「北」（の西側）の文学としての「世界文学」の一連のテキストに対する言語レベルの暴力である「脱文脈化法」の採用において、大江が念頭に置いているテキストは、サルトルの「黒いオルフェ」(“Orphée noir”, 1948年)である。第一章においても触れたとおり、「黒いオルフェ」は、(フランスの植民地的な支配から解放された1960年から1980年にかけて)セネガル共和国初代大統領を努めた詩人センゴールがアフリカとマルティニークの詩人の詩から編集した *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache* (1948) と題された詩集に、サルトルが付けた「序」である。

先に、「第三世界」の作家ないしは知識人が抱えた「文化と帝国主義」をめぐるジレンマに触れた。そしてこのテキストにおいてサルトルは、世界化させられ、「共通語」(*lingua franca*)化させられた^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の国語の問題に着目する。サルトルによれば、「周辺世界」における民族解放運動は、19世紀ヨーロッパのアイランド人やハンガリア人などの少数民族の独立運動に相似している。ヨーロッパの少数民族は、「独立のために闘うと同時に、自分らの民族言語を復活させるべく情熱を傾けてきた」のだ。自立し、^{オタンテック}「正真正銘」な民族的自己同一性^{アイデンティティー}を確立しうするためには、「経済政治的に公汎な自治権を持つ集団に属している必要がある」と同時に、自らの言語を持つことも必須条件である。しかし、ヨーロッパの植民地的支配を「撥ね除けようとする」ネグリチュードの詩人を待ち伏せる危険は、彼らが作品を表現し（他のネグリチュードの民族にも）意志を疎通できる言語は、^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の国語としての（「彼らにとって半ば死んだも同然」、「すぐれて中性的な」）フランス語なのであるということである。

³⁴⁸ 同上書、34頁。

そしてサルトルによれば、「見るまえに跳べ」の「ぼく」が英語に、また「喝采」の夏男がフランス語に「捕獲」されていたように) ネグリチュードの詩人も^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の権力を内在させるフランス語という国語に「捕獲」されているのである。

^{コロニゼ}被植民者のあいだに^{コロニザテュール}植民者が、永遠の媒介者たらんと割り込んで来たのである。^{コロニザテュール}植民者はそこにいる、つねにいる、たとえ不在であってもそこにいる、極秘の集会のなかにまで。そして言葉は観念である以上、ニグロが、フランス文化を拒否するとフランス語で宣言するとき、彼は一方の手で斥けるものを他方の手でつかんでいるのであり、自分のうちに敵の思考器具を、粉碎器のように据えていることになる。それもたいしたことではないかも知れない。だが同時に、異なった時代に、何千里も離れた場所で、別の欲求に応えるべく、また別の対象を指示すべく作り出されたフランス語の^{サンタックス}語法や語彙は、黒人に、自己を語り、自己の懸念や希望を語る手段を、提供することができないのである。³⁴⁹

サルトルによって述べられた、反植民地主義的民族解放運動における、異なる民族に共通の^{メトロポリタン・センター}コミュニケーション手段としての^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の国語のレヴェルでの「文化と帝国主義」のジレンマを、大江は、南靖男とフランス語でしかコミュニケーションをとれないアラブ人の科白において共鳴させている。

「フランス語！わたしたちの同胞にとってフランス人は憎悪すべき敵です。しかもわたしはフランス語によってあなたに話しかけるほかに方法をもたない。わたしのおちいつている悲劇的な状況、それをわかっていただけますか？」³⁵⁰

FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani の極東代表者にこのように言わせるにあたって、大江が念頭に置いていたのは、紛れもなく「黒いオルフェ」における^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の国語をめぐる「第三世界論」的な見解見識であっただろう。他方、^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の国語は、植民地地域の黒人の作家＝知識人にとって「外国語」ではない。フランス語での教育を受けてきた彼らは、とりわけ、技術者、学者、ないしは政治家としてフランス語を容易に使いこなせる。しかし、サルトルが以下に示しているとおりの黒人の作家＝知識人にとってフランス語は母国語にもなりえない。

³⁴⁹ サルトル、ジャン・ポール、「黒いオルフェ」、170 頁。

³⁵⁰ 大江健三郎、『われらの時代』、238 頁。

彼らはフランス語では「的確かつ効果的な言葉」で「自己」を語るができないのだ。

黒人が口を開いて自己を語り始めると、彼の言いたいことと実際に言うことが、わずかな、だが絶えざるずれによって隔てられてしまうということだろう。黒人は、北方の〈精霊〉が自分から思想を盗みとり、それをやんわりと屈折させ、彼が望んでいた以上、ないしは以下のことを意味させてしまうように思われる。砂が血を飲み干すように、白人の言葉が自分の思考を飲み込んでしまうように思われる。もし彼が突然われに帰り、思考を集中し、距離をおいて見るならば、単語 [les vocables³⁵¹] は半ば記号半ば事物という異様なさまで、彼の面前に横たえられる。黒人はけっして、絶えず的を射あてるような的確かつ効果的な言葉で、ネグリチュードを語ることはないだろう。³⁵²

「周辺世界」の異なる民族の知識人の唯一のコミュニケーション手段である、「共通語」= *lingua franca* として、「宗主国中枢の国語」^{メトロポリタン・センター}を使用することによる「不能」= *impuissance verbale*³⁵³ そのものは、この作家たちを詩的表現へと導く動機となると、サルトルは言う。そして、彼らが話す宗主国中枢の国語（この場合フランス語）の内部に「抑圧者が姿を現す以上、彼らはこの国語を破壊せんがためにこれを話そうとするだろう。」そしてこの作家たちは、サルトルが「北方の〈精霊〉」(*un Esprit septentrional*³⁵⁴) と呼ぶ中心指向的な権力を内在する国語=フランス語を「非フランス化」する= *défranciser*³⁵⁵ = 「非中心化」するのである。³⁵⁶ 言い換えると、このような「創作の方法」は、「武装蜂起」= 「脱植民地化」という「計画」を言語のレベルで再構築するようなものである。

サルトルの「文化と帝国主義」をめぐるこの「第三世界」文学論は、早熟なものであった。中国革命、朝鮮戦争、アルジェリア解放戦争、アジア・アフリ

³⁵¹ Sartre, Jean-Paul, “Orphée noir,” Senghor, Léopold Sédar, *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache*, Presses Universitaires de France, Paris, 1948 年, XIX 頁.

³⁵² サルトル、ジャン・ポール、「黒いオルフェ」、171 頁。(傍点は引用者による)

³⁵³ Sartre, Jean-Paul, “Orphée noir,” XX 頁.

³⁵⁴ 同上書、XIX 頁.

³⁵⁵ 同上書、XX 頁.

³⁵⁶ サルトルの^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の国語をめぐるこのような考察は、*Colonialisme et Neocolonialisme* の英訳に序文を付けたアゼディン・ハドゥールによると「脱構築主義」を先取りしたものである。(Haddour, Azzedine, “Remembering Sartre,” *Colonialism and Neocolonialism*, 12 頁.)

カ＝バンドン会議やスエズ侵攻など、「第三世界」という「始まりの現象」を発芽させた一連の出来事が発生する前の1948年に、この「第三世界」文学論を考案したからだ。大江は、『われらの時代』を、このテキストが発表されてからほぼ20年後に書いた。当時は、「南」＝「周辺世界」が脱植民地化しつつあった一方で「新植民地主義の台頭の時代」も始まっていた。「黒いオルフェ」では、サルトルが宗主国中枢の国語に焦点を集めるが、このカテゴリーは不可避免的に宗主国中枢の「国文学」というカテゴリーをも内包する。『われらの時代』において大江は、サルトルの「文化と帝国主義」をめぐるこの「第三世界」文学論を、「世界文学」として「世界化」した旧植民地主義および新植民地主義の宗主国中枢の「国文学」のテキストを「非中心化」するうえで転用しているのである。

IV.5. おわりに

大江は、古典帝国主義＝旧植民地主義が衰退し、「第三世界」＝「南」や「第二世界」＝「北」（の東側）以外の国々に対する新植民地主義体制の支配が決定的となりつつあった1950年代後半に文壇デビューをし、最初期小説を書き上げた。この時期において、東西冷戦構造の影響もあり、「北」の（西側）の、欧米の文化（とりわけ、モダン・ジャズとハリウッド映画などサブカルチャージャンル）は、社会主義圏や非同盟の「第三世界」以外の地域に位置する諸国に積極的に普及させられるようになった。冷戦が終わった1990年代の経済、政治、文化の分野における「地球一体化」の発端となった、この「反共」的保守主義に基づく、中心指向的かつ一方的な文化の均質化の過程は、ある意味で、文化のレベルにおける植民地的支配であった。アメリカ合衆国との政治的な関係が緊密になりつつある日本においても、とりわけアメリカ合衆国を始めとする「北」（の西側）の文化の存在感が強くなっていた。『われらの時代』における「脱文脈化法」は、このような過程に対する大江の「抵抗」をあらわしているのである。

「脱文脈化法」による「地図作成」という「小説の方法」を動員している『われらの時代』は、「模倣しつつの反転法」を動員しているこれらの反植民地的「第三世界」文学の「抵抗文学」というカテゴリーと大いに共通していることは否定できない。しかし「植民地主義の時代」において極貧状態にされるほどの過酷な搾取の対象にされ、強制重労働や虐殺をも含める様々な虐待を受けたあげく、広義の民族解放運動を契機に解放された「周辺世界」の作家らと大江は、当然、完全に一致してはいない。その主な理由は、日本の経済力などというより、スーダンとケニア、ないしは、マルティニーク、アルジェリアのような「南」

の国と異なり、日本が、戦前戦中および戦後に広義の帝国主義的権力の暴力的行使に積極的に関与しつづけたことにある。大江の批判の対象は、「新植民地主義」体制だけではなく、自国の中心指向的な権力構造と深く関わった「インベアリアル・リスパンスイビリティエー帝国主義的植民地支配の責任」の問題でもある。

『われらの時代』やその周辺の『第三世界』と日本』の問題を扱った一連の作品において展開された、こうした広義の「反帝国主義」的批評認識において大江は、サルトルを一定の「役割モデル」にした。サルトルの「反植民地主義理論」＝「第三世界論」は、自国フランスの「インベアリアル・リスパンスイビリティエー帝国主義的植民地支配の責任」や新植民地主義との協力の問題を中心にしており、また彼の「反植民地主義」の文学（ないしは思想）の作品を導入するような「仕事」は、フランス語の文脈における「第三世界」文学という「始まりの現象」の形成に大いに貢献したのであった。

ネグリチュードの詩での、メトロポリタン・センター宗主国中枢の国語における中心指向的な権力構造を「非中心化」し、「自壊」させる方法意識に関するサルトルの理論は、『われらの時代』における「脱文脈化法」の構想において、大江に着想を与えた。大江は、アルジェリア解放戦争をはじめとする「第三世界」解放運動に「アンガジュマン政治的な参加」した立場から、サルトルのエッセイを、自身の作品において「フランス軍のトラックを武装解除している解放軍の写真」や、「アラブ人」の部屋の壁に掛けてある「アフリカが真紅にぬられた仰々しい世界地図」³⁵⁷などのイメージに翻訳している。

サルトルは、その仕事において、アルジェリアをはじめとする「南」＝「周辺世界」の国を、「北」（の西側）が形成した抵抗主義的な世界地図から消去し

³⁵⁷ 本論文で焦点を当てている、『われらの時代』における「アフリカが真紅にぬられた仰々しい世界地図」というイメージの構想において大江が着想を得たテキストは、「黒いオルフェ」であろう。このテキストにおいてサルトルは、アフリカを西洋人の暴力によって血まみれになった大陸として表象している。

「これらの詩の大部分がかくも激烈に反キリスト教的であるのは、白人の宗教が、ニグロの眼に、ヨーロッパのプロレタリアの眼に映る以上にはっきりとミスティアカシオン瞞着として映るからである。この宗教は罪の責任をその犠牲者である黒人に分け持たせようとする。アフリカを血まみれにした拉致、虐殺、暴行、拷問などが、正当な罰であり受けるに値する試練であると考えよう黒人を説得しようとする[=*elle veut lui faire partager la responsabilité d'un crime dont il est la victime ; les rapt, les massacres, les viols et les tortures qui ont ensanglanté l'Afrique, elle veut le persuader d'y voir un châtement légitime, des épreuves méritées*]. そのかわりこの宗教は神の前ですべての人間が平等であると宣言しているではないか、そう、諸君は言われるかもしれない。」（サルトル、ジャン・ポール、「黒いオルフェ」、192～193頁、傍点・下線強調・ルビは引用者による）

た。換言するとサルトルは、「フランスのアルジェリア」という中心指向的な「地図作成」を「アルジェリアのフランス」として反転させ、「脱文脈化」し、「再地図作成」したのである。アルジェリアが世界地図におけるフランスの部分から消去され、その世界地図の「第三世界」の部分に「参加」する過程にサルトルは、このような「仕事」に関与した数少ない「フランス人」である。一方で、大江は『われらの時代』において、「脱文脈化法」という「小説の方法」とおし、1950年代後半の世界地図の、「真紅」に塗られた「第三世界」の部分から、フランスと同様に新植民地主義と協力する自国日本を消去したのである。

358

358 大江健三郎、『われらの時代』、252頁。

『われらの時代』における「第三世界」にかかわる「地図」のモチーフは、大江文学が「世界文学」化する過程において、もっとも重要な作品のひとつとなった『個人的な体験』において再登場する。「アフリカ地図」は、『個人的な体験』の全体を貫く主要なモチーフのひとつである。小説の一章において、『われらの時代』の「世界地図」において強調される「アフリカ」の部分が、『個人的な体験』においてより焦点化され、「アフリカ地図」として再活用されている。

「鳥は、野生の鹿のようにも昂然と優雅に陳列棚におさまっている、立派なアフリカ地図を見おろして、抑制した小さい嘆息をもらした。(中略) 鳥は身震いして、地図の細部に眼をこらした。アフリカをめぐる海は、冬の夜明けの晴れわたった空のように涙ぐましいブルーで刷られている。緯度、経度ともコンパスでひかれたメカニクな線ではなく、画家の人間らしい不安定と余裕とを感じとらせる肉太な線で表現されている。それはアイヴォリイ・ブラックだ。アフリカ大陸は、うつむいた男の頭蓋骨の形に似ている。この大頭の男は、コアラとカモノハシとカンガルーの土地オーストラリアを、憂わしげな伏眼で見ている。地図の下の隅の人口分布を示す小さなアフリカは腐蝕しはじめている死んだ頭に似ているし、交通関係を示す小さなアフリカは皮膚を剥いで毛細血管をすっかりあらわした傷ましい頭だ。それはともに、なまなましく暴力的な変死をよびおこす。」(大江健三郎、『個人的な体験』、5～6頁)

この書きだし部分における、鳥の、「脱植民地化」されたばかりの「アフリカ」の「地図」に対するなみなみならぬ関心は、『われらの時代』の南靖男の「世界地図」に対するフェティシズムに照応することは明瞭である。

なお地図のモチーフは、日本列島の地政学的な文脈における「アルジェリア」問題としての『沖縄ノート』においても登場させられる。最初のエッセイ「日本が沖縄に属する」においての「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という命題は、本論文に取り上げる一連の『われらの時代』周辺の初期作品の主要なテーマの延長線上にあるものである。つまり、「第三世界」特有の「正真正銘な自己同一性の探求」に「参加」している沖縄住民の「政治的な参加」(＝「第三世界化」の潜在力)は、日本の世界地図における地政学的な位置を規定するうえで基準にされているわけである。大江の幾度にも

大江の「脱文脈化法」は、「第三世界」の知識人による、「北」（の西側）の文学としての「世界文学」というカテゴリーとの関係における「文化と帝国主義」といったジレンマに対する一定の「解毒剤」である。「第三世界」の知識人にとって「世界文学」が「普遍的な価値」というものを持ち得るためには、「世界文学」における「特殊な文脈」＝「特殊なもの」としての帝国主義的・中心指向的な「姿勢と言及の構造」を無効にすることによってのみ可能になるのである。そして、『われらの時代』における「脱文脈化法」は、エングギやサーレフの「模

わたる沖縄への訪問によって得た認識をあらわしている「日本が沖縄に属する」という「周辺」的＝「第三世界民族主義」的な見解も、奇妙な「地図」のイメージによって支えられている。大江によれば、新植民地主義者は、出稼ぎに行ったヒロシマ・ナガサキで被爆した者も多い沖縄を、新たな核戦争が準備される基地に転換させたのである。大江は、「核基地としての沖縄」が、新植民地主義による極東の「地政学的な」地図において、いかなる比重を占めているかについて次のように述べる。

「僕はかつてアメリカで、核戦略の専門家と話していた時の奇妙な経験を思い出す。かれは鉛筆で極東の地図を描いたが、その地図において日本列島は、沖縄の十分の一にもみえない小っぼけさなのだ。考えてみれば核戦略家の頭のなかで、それはまことに自然な地図のかたちであったにちがいない。」

大江に言わせれば、「核時代の今日を生きる犠牲と差別の総量において」、まさに沖縄は、日本全土を囲い込んだに等しく、「しかもなおそれをこえて歴大な重荷を支えている」のである。そして、新植民地主義の核戦略家のみならず、沖縄の解放＝離島のために、「政治的な参加」をした現地の行動者の「意識においてもまた、今日の日本の実体は、沖縄の存在のかげにかくれて、ひそかに沖縄に属することによってのみ、いまかくのごとくにせの自立を示しているのだと透視される」のだろう。また大江は次のように付言する。

「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分を変えることはできないか、と貧しい心で考えあぐねつつ僕が沖縄の空港に、港におりたつ時、僕の意識にある地図においてもまた、日本は沖縄に属する。」（大江健三郎、「日本が沖縄に属する」、『沖縄ノート』、28～33頁、傍点は引用者による）

新植民地主義による世界の地政学的な「地図作成」を浮き彫りにするこの「日本」の再地図作成において基準になるのは核兵器なのである。この地図では、核兵器が設置されている「沖縄」が日本より大きく表象されている。大江は、このような屈折した「帝国主義的」^{マッピング}「地図作成」を、自らの「日本が沖縄に属する」という「第三世界論」のヴィジョンを支えるうえで活用するのである。このような異化変形の仕掛けは、『われらの時代』における日本を「世界地図」の「第三世界」の部分から消去するという仕掛けの延長線上にあり、それを「エッセイ」という言語空間において再活用したものであることに疑問の余地はないだろう。

倣しつつの反転」=*mimetic riversals* という「方法」と同様に、まさにこれらの「構造」を無効にし、「世界文学」テキストの「普遍性」を解放する一種の「解毒剤」なのである。³⁵⁹

*

一連の「世界文学」のテキストを、一定の批判的距離から自作に取り込むという大江の作業は、「第三世界」問題を扱う一連の『われらの時代』周辺作品においてのみならず、それ以後の作品においても持続した「小説の方法」である。徐々に世界化していった大江文学において、『われらの時代』は一定の「始まりの現象」となった。

大江文学の「世界文学」の地図における位置を規定したのも、このような「始まりの現象」であったと言えよう。以下に示すとおり、大江文学は、それと同時期に形成するようになった「第三世界」文学というカテゴリーと多くの共通性を持つ。それにもかかわらず、大江文学を、「第三世界」文学のカテゴリーに配置することができない。それは、主に日本という国が、自らがアジア＝「第三世界」の一員であることに対して不本意であり、「第一世界」を志向してきたことに由来している。

「アルジェリア戦争の時代」と同時期に、大江が「第三世界」問題に表象を与えるうえで書いた、『われらの時代』を中心とする一連の初期作品の独自性や「世界文学」の地図における大江文学の特異な位置を再確認するためには、『われらの時代』以後の一連の作品を概観することが必須作業である。

『われらの時代』以後、アルジェリア解放戦争の終了直後まで書かれた「セヴンティーン」と『叫び声』において、「『第三世界』と日本」というテーマとの関係でもっとも主要なモチーフは、『われらの時代』に初めて登場した「怪物」^{モンスター}である。

³⁵⁹ 例えばジジェクは、マルクスの「世界文学」の普遍性をめぐる見解に潜在されている「脱文脈化」を次のように例に出している。

「マルクスはすでにこう指摘していたのではないか。ホメロスをめぐるまことの問題は、古代ギリシア社会にみられる彼の叙事詩のルーツを説明することではない。そうではなく、あきらかにその歴史的な文脈にルーツをもつ彼の叙事詩が、にもかかわらず、その起原である歴史を超え、あらゆる時代にうったえかける力をもつのはなぜか、その理由を説明することである、と。」(ジジェク、スラヴォイ、「(とてもゆるやかに——あるくような速さで——モルト・アダージオ——アンダンテ——) イデオロギー的カテゴリーとしての寛容」、『暴力：6つの斜めからの省察』、187頁.)

第五章 『われらの時代』 以後の作品における「怪物」のイ マージュと「第三世界」——「セヴンティーン」と『叫び声』 を中心に

....かれは *authentique* でない人間なの
だ、それがかれの不安と渴望の熱病の
根元的なみなもとなのだ。³⁶⁰

《おれはこんな人間なんだぞ、おれは
こんな人間なんだぞ、おれは怪物だ》³⁶¹

[U] n homme, chez nous, ca veut dire
un complice puisque nous avons tous
profité de l'exploitation coloniale....Et
l'Europe, que fait-elle d'autre? Et ce
monstre sureuropéen, l'Amérique du
Nord? Quel bavardage: liberté, égalité,
fraternité, amour, honneur, patrie, que
sais-je? Cela ne nous empêchait pas de
tenir en même temps des discours racistes,
sale nègre, sale juif, sale raton. De bons
esprits, libéraux et tendres—des
néo-colonialistes, en somme—se
prétendaient choqués par cette
inconséquence; erreur ou mauvaise foi:
rien de plus conséquent, chez nous, qu'un
humanisme raciste puisque l'Européen n'a
pu se faire homme qu'en fabriquant des

³⁶⁰ 大江健三郎、『叫び声』、144 頁。

³⁶¹ 同上書、146 頁。

esclaves et des *monstres*.³⁶²

*Le tiers monde est aujourd'hui en face de l'Europe comme une masse colossale dont le projet doit être d'essayer de résoudre les problèmes auxquels cette Europe n'a pas su apporter de solutions....Pour l'Europe, pour nous-mêmes et pour l'humanité, camarades, il faut faire peau neuve, développer une pensée neuve, tenter de mettre sur pied un homme neuf.*³⁶³

V.1. はじめに

大江は、アルジェリア解放戦争に代表される「第三世界」の解放運動のパー

³⁶² Sartre, Jean-Paul, “Préface,” Fanon, Frantz, *Les damnés de la terre*, La Découverte/Poche, Paris, 2002年, 38頁.

「(前略) ヨーロッパの人間であるということは、われわれすべてが植民地の搾取から利益を得てきた以上、植民地主義との共犯を意味する。ぶくぶく肥って顔色の悪いこのヨーロッパ大陸は、ファノンが適切にも《ナルシシズム》と名づけているもののなかに、ついにはまりこんでゆく。(中略) そしてヨーロッパは、このほかに何をしているというのか? また超ヨーロッパ的なあの怪物、北アメリカは? なんという饒舌だろう——自由、平等、友愛、愛情、名誉、祖国、その他なにやかやだ。だがそれも、われわれが同時に、黒んぼめ、ユダヤ人め、アルジェリアの[鼠]め、と人種差別的な言葉を弄するのを妨げはしなかった。リベラルで親切な良識ある人びと——要するに新植民地主義者——は、こうした矛盾にショックを受けたと公言していた。だがこんな言葉は、錯誤でなければ自己欺瞞である。我々ヨーロッパ人にとって、人種差別的ヒューマニズム以上に筋道の通った話はない。なぜならヨーロッパ人は、奴隷と怪物を拵えあげることによってしか、自分を人間にすることができなかったからだ。」(サルトル、ジャン・ポール、「序」、ファノン、フランツ、『地に呪われた者』、27頁。斜体強調および傍点は引用者による)。

³⁶³ Fanon, Frantz *Les Damnés de la terre*, 302~303頁.

「(第三世界) は今日、巨大なかたまりのごとくにヨーロッパの面前にあり、その計画は、あのヨーロッパは解決をもたらしえなかった問題を解決しようと試みることであるはずだ。(中略) ヨーロッパのため、われわれのため、人類のため、同士たちよ、われわれの脱皮が必要だ、新たな思想を発展させ、新たな人間を立ち上がらせようと試みる必要がある。」(ファノン、フランツ、『地に呪われた者』、312~313頁)

スペクティブから「日本」を把握しなおして表現するとき、「怪物」^{モンスター}というイメージを動員した。その最初の作品が、『われらの時代』である。そこに登場するアラブ人と高は、このイメージをもとにして構想された「怪物」^{モンスター}である。『われらの時代』に続く作品である「セヴンティーン」と『叫び声』にも、極右テロリストの「おれ」、強姦殺人の犯罪者呉鷹男^{くれ}と「虎」のような「怪物」^{モンスター}が登場する。本章では、この内的に有機的な繋がりを持っている三作に重点を置きながら、本論文で扱った一連の作品を俯瞰することにする。これは、大江文学を「世界文学」の地図に配置するうえで避けられない作業である。

V.2. 『われらの時代』における「疑似怪物」^{モンスター}と「正真正銘」^{オタンティック}な「怪物」^{モンスター}の対置

V.2.1 高の「正真正銘」^{オタンティック}な「怪物」^{モンスター}へのイニシエーション

『われらの時代』の南滋の物語の流れのなかで、高は「慰安婦」的な「男娼」^{メイル・ミストレス}として「正真正銘」^{オタンティック}な自己同一性^{アイデンティティ}を探求している。同性愛的な売春という「仕事」を「正真正銘性」^{オタンティック}に達するための手段にしている自分自身を「怪物」^{モンスター}と位置づけているのだ。同時に高は同性愛という性的自己同一性^{アイデンティティ}がジャズ・トリオの仲間に発覚されるのを死ぬほど恐れている。これは不発に終わることになる、「疑似」テロル未遂事件直前の場面において、判明するのであるが、見張り役を担当させられている高は、南滋と康二とともに、黒人歌手の演奏を聴いていたときに、歌手が高に引き起こした性的な高揚を仲間に見破られ、彼の「性的な倒錯」が暴かれることに強い不安を覚えるのであった。高は同性愛の売春行為を屈折した「第三世界ナショナリズム」の観点から（誤）解釈している。つまり、高にとっての同性愛の売春は、一定の「名誉回復の儀式」なのである。

かれにとって同性愛は名誉回復の儀式である。民族的序列を一挙にひっくりかえし挽回^{ばんかい}するための息苦しい儀式だ。かれは西欧の人間、あるいはアメリカ人、どちらにしても白人としか寝なかった。夜がかれと白人とをおおうとき、かれは横たわってぐにやぐにやしている白人に鉄の堅固さをもっていどみかかる。かれは白人を支配し、白人を哀訴させ、白人をくみふせる。東洋はかれの硬い性器を武器にして西欧を鶏姦^{けいかん}する！射精しおわって晴ればれたかれの清らかな体躯^{たいく}にみなぎる勝利と優越、直腸にぬるぬるする粘液をそそぎこまれ一種の下痢の感覚にお

かされている者にたいする、男らしい勝利と優越。³⁶⁴

以上のグロテスクな描写において、高が、新・旧植民地主義の支配搾取の対象にされた「東洋」＝「周辺世界」の名誉を、アメリカ人など「北」（の西側）の男性と性交渉を結ぶことによって回復していると思ひこんでいることがわかる。第四章でも述べたとおり、疑似テロルが挫折に終わった段階で、高は、以前朝鮮戦線で「慰安婦的」な男娼としてかかわったことのあるジミーに再会し、彼の「情夫」^{メイブル・ミストレス}として彼と渡米することを決心する。ジミーとの性交渉の場面で、高は自らを「怪物」^{モンスター}と定義する。高は、かれ自身とジミーの「性器」を、「怪物的な選ばれた男根」³⁶⁵として「美化」し、ジミーに「おまえも、五百人の朝鮮女を強姦できるくらいの勇ましさだ」³⁶⁶と絶賛される。

ジミーにアメリカ合衆国に連れて行かれることが決まった後、高の屈折した「疑似」の「第三世界ナショナリズム」は、徐々に親・新植民地主義的な形式を取るようになったわけだ。彼は、ジミーを同胞だと（誤）解釈し、「北」（の西側）と手を組む決心をする。そして、朝鮮戦線で殺戮された朝鮮人たちの「栄養失調で青黒く脹れあがった汚い腹」を想起した高は、「あの汚い腹の朝鮮人の同胞ではない、おれは倒錯した性愛をつうじて朝鮮人でも東洋人でもない存在に変わった」とさらなる高揚感にとらわれながら自身を定義する。彼はもはや「東洋」＝「南」という地政学的なカテゴリーを超越した「東洋と無縁」³⁶⁷な人物なのである。一種の「脱亜（入米）論」＝*de-Asianization*＝「脱・第三世界」論を掲げた高は、ジミーに「おれは、あんたのいう通りにするぜ！おれはあんたとアメリカへ渡ることにきめたんだ！」³⁶⁸と言い、「東洋」を「くそくらえ」と罵る。

こうして、自らを被植民地地域の被圧迫民族の復讐をする「怪物」^{モンスター}として位置づけていた高の自己欺瞞が明らかになる。彼は、「疑似」の「怪物」^{モンスター}でしかないのだ。彼が「正真正銘」な「怪物」^{オタンティック モンスター}になる機会が到来するのは、南滋に「大型トラック」を買ってやるための代金をジミーに求めた時である。それが拒絶されることによって、高は、自己欺瞞から覚醒するのである。

高の怒りにふるえる体を支えている土台が大音響とともに瓦解して

³⁶⁴ 大江健三郎、『われらの時代』、137～138頁。

³⁶⁵ 同上書、207頁。

³⁶⁶ 同上書、209頁。

³⁶⁷ 同上書、210～211頁。

³⁶⁸ 同上書、212頁。

行く。東洋人野郎！かれは京城^{ソウル}の郊外で道ばたにごろごろしていた腹の膨れた死体の同胞であり、嫌悪とともに強姦される汚い女の同胞、めそめそして地下倉にひそんでいるガキどもの同胞だった。かれは怪物でもなければ変態野郎でさえもなく、かれの股倉は選ばれた男根で重みをくわえてはおらず、かれは単なる東洋人の淫売だった。³⁶⁹

高に自分の「東洋の淫売」としての本当の顔を暴露し、「自己欺瞞」から覚醒することへと導くのは、ジミーである。ジミーは、高を侮辱するような態度をとったために絞殺されることになる。覚醒による「暴力」＝テロルこそが、高の「^{オタンテック}正真正銘」な「^{モンスター}怪物」へのイニシエーションとなったわけである。「飼育」における「僕」の「大人の世界」への通過を可能にする「試練」を想起させるこの「イニシエーション」は、高に「第三世界」の解放のために闘うゲリラさながらの「^{オタンテック}正真正銘性」をもたらすに至る。³⁷⁰

高は朝鮮人のゲリラがやる残酷で執拗^{しつよう}な手で外国人の喉を押しつぶしにかかっていた。(中略)三十分あと、高はぐったりして重くなった外国人の体を床に横たえた。[外国人は]唇から血をおびただしく流していた。おれの血だ、と高は第一関節から食いちぎられている自分の左手の小指を見つめながら考えた。³⁷¹

この段階で高は、「朝鮮人のゲリラ」と同等のレベルに達している。そして高は、朝鮮戦争中に物理的、性的暴力の犠牲にされた朝鮮女や朝鮮人の少年た

³⁶⁹ 同上書、214頁。(傍点は引用者による)

³⁷⁰ 「飼育」(1958年1月)は、洪水のため「町」から遮断された戦中の村の付近に戦闘機が墜落し、生き残った黒人兵が村人によって捕虜にされ、「僕」をはじめとする子供たちによって「飼いなされる」物語である。黒人兵は、子供にとって徐々に「ペット」と「神」の間の存在へと化する。しかし、戦争に敗れた日本が米軍に占領されることになり、黒人兵は「県」に引き渡されることになった。連行されようとした黒人兵は処刑されると思いこんで痲癩を起し、「理解を拒む黒い野獣」に変身し、「僕」を人質にする。斧を武器にした父親によって救出される際、黒人兵の頭蓋骨とともに「僕」の手も砕かれる。この「試練」を体験した僕は、もはや「子供ではない」ということに覚醒する。

「ぼく」が米兵から救出される際に手を砕かれたと同様に、高は元・米兵に左手の小指を第一関節から食いちぎられる。『われらの時代』のこの試練によるイニシエーションを描く挿話は、「飼育」のストーリーと内的に繋がっていると見えよう。

³⁷¹ 大江健三郎、『われらの時代』、215頁。

ちのような「第三世界」の被圧迫民族の「復讐」に成功したと思うようになり、このことを読者に次のように宣言する。

おれは強姦された幾万の朝鮮女のために、暴力で輪姦される汚辱に耐えた朝鮮人の少年（それは高自身だ）のために復讐したのだ。³⁷²

すでに述べたとおり、この「テロル事件」を契機に「朝鮮人のゲリラ」と同様の「怪物」^{モンスター}に変身した高は、南滋をも連れて、「南」＝「第三世界」としての（北）朝鮮に渡ることを決心する。

V.2.2 『われらの時代』における「怪物」^{モンスター}の参照先としての「黒いオルフェ」

『われらの時代』やその周辺作品における「怪物」^{モンスター}というイマージュの参照先は、サルトルの「反植民地主義理論」や「第三世界論」の中にある。「怪物」^{モンスター}が、サルトルの「仕事」^{ワーク}に初めて登場したのは、1947年前後の時期である。このイマージュは、「第三世界」文学を形づくった作家＝知識人と深くかかわっていく。「黒いオルフェ」では、「怪物」^{モンスター}は、自らの土着の言語＝文化と宗主国中樞^{メトロポリタン・センター}の国語＝文化の間で板挟みとなっているネグリチュードの作家の状況を叙述するうえで用いられている。つまり、この「第三世界」の作家を「怪物」^{モンスター}へと変身させたのは、彼らが抱えた「文化と帝国主義」というジレンマなのである。

サルトルは、このイマージュを考案するにあたって、ギリシア神話におけるミノスの妃パシファエが、牡牛と交わって生んだ半人半牛の「怪物」^{モンスター}である「ミノタウロス」、そして、半人半馬の「怪物」^{モンスター}である「ケンタウロス」を念頭に置いていた。さらに、サルトルが、この *monstre* という単語を選択した背景には、この言葉の語源であるラテン語の *monstrare*（やフランス語の *montrer*）という動詞が、「見せる」、「表示する」（「明視」させる）という意味をもっていることも影響している。³⁷³

サルトルの「怪物論」^{モンスター}に従って在日朝鮮人の高の挿話を再整理すると、高を「怪物」^{モンスター}に変身させたものは、高の気持ちの中のジレンマであると言える。高には、アメリカ合衆国や日本の文化へ感服する気持ちがある一方で、その両国が朝鮮戦争によって朝鮮半島を荒廃地に変えたことに対する反発の気持ちがあ

³⁷² 同上書、216頁。

³⁷³ Leak, Andrew, N., *Jean Paul Sartre*, Reaktion Books - Critical Lives, London, 2006年、92頁。（この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による）

る。高はこのジレンマを「北」（の西側）の男性と性交渉をすることによって解消し、「南」としての朝鮮の「名誉」を「回復」し、「南」の復讐をすると信じ込み、自らの「東洋人」（＝「南」）としての自己同一性を否定しようとする。そこでの高は、「疑似」の「怪物」にすぎない。彼は、極右の対外強硬主義者の元米兵、現・実業家のジミーを絞殺するというテロル行為を遂行することを契機に「正真正銘」な「怪物」にある意味で昇格するのだ。

サルトルの「怪物論」に従って在日朝鮮人の高の挿話を再整理すると、高を「怪物」に変えさせたものは、アメリカ合衆国や日本の文化への感服と、朝鮮半島を荒廃地に変えた朝鮮戦争にアメリカ合衆国と日本の関与したことへの反発がもたらしたジレンマであると言える。そして、高はこのジレンマを「北」（の西側）の男性と性交渉をすることによって解消し、「南」としての朝鮮の「名誉」を「回復」し、「南」の復讐をすると信じ込んでいる。後に、彼は自らの「東洋人」（＝「南」）としての自己同一性を否定しようとする。先にも述べたとおりその段階での高は、「疑似」の「怪物」にすぎない。彼は極右の対外強硬主義者の元米兵、現・実業家のジミーを絞殺するというテロル行為を遂行することを契機に「正真正銘」な「怪物」に変身するのだ。つまり、こうして、高は、性的な「怪物」から政治的な「怪物」へと変身したわけである。

この「テロル」行為は、新植民地主義のあらゆるレヴェルの「同化政策」（不可視化政策）への抵抗として、自らを *monstrare* し、暴力的手段によって自立を求める「南」＝「第三世界」の被圧迫民族による解放運動を物語空間において再現している。『われらの時代』における「怪物」の参照先は、「黒いオルフェ」のそれであることには触れた。大江はここでこのイマージュを、「正真正銘」と、「疑似」な「怪物」として二つに分け、位置づけ直している。『われらの時代』のシンボリズムにおいて、「正真正銘」な「怪物」は、非同盟を掲げた「南」＝「第三世界」に照応する一方で、「疑似」な「怪物」は「北」（の西側）と協力関係を結ぶ諸国を象徴していると言える。

そして高の例において見てきたように、「正真正銘」な「怪物」と「疑似」な「怪物」という二項対立的な構造は、『われらの時代』における「性と政治」のレトリックと連動する。この構造は、小説のフィナーレの段階において南靖男の物語の流れで、アラブ人と南靖男との対置の形式をも取ることになる。この二項対立がもっともグロテスクな形で登場させられるのは、南靖男が、アラブ人やコミュニストの八木沢とともにいった水泳プールの場面においてである。

南靖男がナセルやアルジェリア解放戦争のような「第三世界」における「政治的な参加」に関してロマン主義的な夢に耽っていた最中に、プールの向こうの隅に人だかりができ、幼女が泣きわめき始める。南靖男に眺められながら泳いでいたアラブ人は、そのひとだかりから南靖男たちの側へ戻ってきて

「厭らしい」=「*salaud*」な日本人の学生が幼女にセクシュアル・ハラスメントをしていたことを怒りにとらわれたまま告げる。怒り狂った中年の男と他の学生たちに連行される「蒼ざめ唇をふるわせて」いる「二十歳ほどのまだほんの学生のような男」の「水着はたるんでいて、左腿に白濁した粘液が蛞蝓の這ったように流れている」様子がみえる。つまり、この倒錯した青年は、「性的」な「怪物」^{モンスター}として布置されているわけである。

八木沢は、アラブ人に「あいつは衰弱しきった日本の青年の汚い側面を代表している」と言う。そして、「おれは、日本人の若者にああいう男がいるということ^{みだ}をきみにみられてははずかしい」、「あの青年は日本のおちいつている衰弱、停滞状態に由来する猥らさを象徴的にあらわしている」³⁷⁴とつけ加える。南靖男はこの学生^{イノタンテイシテ}の「非・正真正銘性」が日本の若者一般の現状を象徴的にあらわしているという八木沢による現状規定に刺激を受け、後にアラブ人を役割モデルにして「正真正銘」な「怪物」^{オタンテイック}に変身するという決心に至るのだ。この決心の契機となったのは、フランス留学のため三年間日本を離れることになった南靖男への怨恨によって癩癩を起こした南靖男の情人で外国人相手の娼婦である頼子によるガス中毒・無理心中未遂という暴力事件であった。この暴力事件の結果、頼子とそのアメリカ人の客ウィルソン氏の経済的「援助」による屈辱的な生活を送ってきた学生としての南靖男は一旦死ぬ。そして、「第三世界」運動に積極的に「参加」^{アンガージュ}する「怪物」^{モンスター}になることを決心した新たな「南」として「再生」するのだ。無理心中未遂という暴力事件前後の場面が、一定の「インシエーション」として描かれていることは次の一節においても見てとれる。

《わたしはあなたと別れてウィルソン氏と結婚するわ、わたしの天使、明日も生きているとするなら！》かれの意識は完全に覚醒した。^{かくせい}(中略)かれの意識は明瞭^{めいりょう}に眼ざめた。(中略)かれは眼をひらき黒い鬼女の面^{めん}のようにかれの顔^{かほ}にのしかかっている頼子の奇怪な顔^{かほ}をつきとばし、立ちあがりガス栓に突進してそれをふさぎ、カーテンと窓とをあけはなった。夜明^{よあけ}けだ、新しい空気が甘美な果汁^{かじゅう}のようにかれを蘇生^{そせい}させる。かれは激しく咳きこみながら大量な空気を吸いこみつづけた。窒息状態からの回復、新しい精気の限りない湧出^{ゆうしゅつ}。(中略)夜明^{よあけ}けだ、軽い貧血がおこる、疲れと睡眠不足、それに過度の昂揚がとめどなくいりみだれる。³⁷⁵

³⁷⁴ 大江健三郎、『われらの時代』、158～159頁。

³⁷⁵ 同上書、224～225頁。(傍点は引用者による)

この場面における頼子も、「性的な倒錯者の学生」のような「疑似」の、性的「怪物」^{モンスター}として描写されている。そのことは、「鬼女」や「奇怪な顔」といった頼子を描写する際に動員された修飾語においても明白である。ここに喚起される「再生」の雰囲気は、1950年代における被圧迫民族の覚醒によって結実した「第三世界」の解放運動という「始まり」に照応するものなのである。それがアラブ人という「正真正銘」な「怪物」^{モンスター}において体現されることはいうまでもない。

おれに新しい生活が始まろうとしているのだ、とかれは考えた。新しい生活、海外への出発、そこでの男らしい行動、おれはかつておれが絶望的な気持ちであこがれた生活、真の若者の生活を生きるだろう！（中略）おれは自由だ、おれは解放された、危険な試練は去り、おれは積極的に生きることを選び、生きて夜明けの清冽な空気^{せいれつ}に体を洗わせている。

おれは今日、アラブ人と会い、かれの組織に協力することを誓うだろう、おれは男らしい若者として行動するためにフランスへわたるのだ！おれを、この希望にみちたおれを、湿っぽく匂う性器を欲望にぬらした中年の女が、わたしの天使とよびかけたりすることはもうけっしてないだろう。³⁷⁶

他方、「第三世界」の解放という理念を体現する作中人物であるアラブ人の「怪物性」^{モンスター}をあらわすキーワードは、「テロル」である。アラブ人は、八木沢に「怪物性」^{モンスター}を見いだしている。アラブ人によると、日本を「アルジェリア化」する、すなわち、「第三世界」における解放運動特有の「革命的暴力」の環境に転換することを意図する日本人 коммуニストの八木沢は、「正真正銘」な「怪物」^{モンスター}＝「テロリスト」のある意味での潜在力を有するのだ。アラブ人は、八木沢が結成しつつある組織の戦術を、「一つの歴史的な正統な政治意識に、端的に言えば民族的なコミュニズムによって腕をくみあった若者たちに爆弾をもたせようとする」ものとして定義する。アラブ人によれば、八木沢は「テロリストを育成し組織しようとして」いる。それを裏付けるかのように八木沢の組織は、日本の戦後における再軍備企画を担った「自衛隊や防衛大学」のような機関を警戒しているのだ。なぜならば、「進歩的な政党が政権をとっても、日本の事実上の軍備をあらためて放棄しようとする時、自衛隊や防衛大学がそれに抵抗するだ

³⁷⁶ 同上書、225頁。（傍点は引用者による）

ろう」³⁷⁷ということ八木沢が見こしているからだ。こうした非常事態の場合においての八木沢の「組織」の意図は、アラブ人の部屋に貼ってある写真で *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* のゲリラがフランス軍のトラックを武装解除するように、「自衛隊や防衛大学」を武力でもって「武装解除」することにある。八木沢によれば労働者が欠いている武力をこの「テロル」組織が補強するといふのだ。アラブ人は八木沢に「オタンテイック正真正銘な「怪物」＝「テロリスト」に変身する潜在力が備わっていることを次のように認める。

「いつまでも現状がつづくとなれば、八木沢さんは正真正銘のテロリストになって政府に爆弾をなげるでしょう」とアラブ人は快活に叫んだ。「勇敢な男だから！」³⁷⁸

Terreur という言葉は、1950年代に *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の反植民地主義的暴力に否定的な意味合いを付与することによって、アルジェリア人に対し行使されている「恐怖政治」＝*reigne de terreur* を正当化するためにフランスの体制側によって採用されたものだった。すでに指摘したとおり、ケルアックにおける北アフリカのアラブ人に対する「姿勢と言及の構造」の用語となっていた「テロリスト」ないしは「テロル」という言葉での決め付けは、読み手に違和感を与えるはずだ。

『われらの時代』の文脈における「テロル」とは、1950年代に、(新・旧)植民地主義的支配下に置かれた地域における民族解放組織が、宗主国中枢による権力の暴力的な行使に逆らい、「脱植民地化」に「拍車をかける」うえで遂行した「奇怪」な「暴力」の意味で用いられる。つまり、大江は、この言葉の同時代的な意味合いを反転させ、それに肯定的な意味を盛り込んだのである。

第四章で触れたとおりアラブ人は、「FLNにも、銃をとって戦う機会があたえられなければ、ジャズを生きがいにしただろうと思われる若者がいる」という。南靖男の解釈によると *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* は、性的な「怪物」が耽るような「ジャズ」を「銃」に置き換えた組織なのである。八木沢が結成しつつある組織は、「乱交にうつつをぬかしたりグループをくんで喧嘩したり」する西洋の青年を模倣する「桃色遊戯の常習者や、革ジャンパーを着込んでオートバイを轟走させる」——「太陽族」としての——日本青年を「テロリストに改造する」夢を前提にしている。

要するに、荒唐無稽且つ混沌カオス的な暴力の趨勢を持つ日本青年のこうした「精

³⁷⁷ 同上書、230頁。

³⁷⁸ 同上書、230頁。(傍点は引用者による)

気」を、広義の帝国主義と連携する中心指向的な権力に対抗させるという方針である。日本青年の荒唐無稽且つ混沌的な暴力はジャズ・トリオの疑似暗殺未遂事件および（自）爆死事件として物語の中で発現している。アラブ人によると、八木沢の念頭にあるのも、このような「疑似怪物」が孕んでいる暴力の混沌に秩序を与え、いささか性的なその暴力を暴力の政治化した形態である「テロル」に転換するということだ。

日本の青年を「オタンテイック正真正銘」な「テロリスト」＝「モンスター怪物」に変身させることを前提にする八木沢の「日本のアルジェリア化」のヴィジョンに、南靖男は「拍手喝采」を送る。しかし南靖男はこのヴィジョンの非現実性を認識していないわけではない。南靖男は、「民学同のテロリストとしての側面を考慮することはそれほど現実的なやりかたではない」と考える。彼は、この計画にではなく、計画を構想するドンキホーテ的な主体としての八木沢に魅了されているのである。南靖男は考察をつづける——「それをぬきにしてもあいつは勇敢な行動者だ、そしておれはあいつと友人だ、と靖男は痛快な感情になって考えた。」³⁷⁹

結局、南靖男は、アラブ人と手を組むことにする。最初にアラブ人が、南靖男に「アンガジュマン政治的な参加」の提案をしたのは、先に取り上げたプールの場面においてである。「モンスター性的な怪物」としての日本人の学生が起こした性的暴力事件の直後にアラブ人は、まず南靖男の置かれている「特殊な状況」を再定義する。アラブ人によれば南靖男の特殊な状況を決定するのは、南靖男がフランスの最も反動的な出版社と「アルジェリアで弾圧政策を強行しつづけている政治当局」が「主催する論文コンクール入賞者であるということ」である。南靖男は、この辛辣な言葉をアラブ人による「有罪布告」として受け止め、またこの論文コンクール自体を、「植民地主義の欺瞞」にほからならないと考えるようになる。アラブ人は、主催者がかつて彼の「同胞のなかから優秀な青年をひきぬいてそれに特典をあたえることによって」、北アフリカのアラブ人を分裂させ、彼らの「未来の指導者を骨ぬきに」することに成功したと言う。換言するとこの欺瞞工作とは、「分割統治」＝*divide and rule* という「帝国主義」的権力のもっとも根本的な戦略の文化のレベルにおける適用なのである。しかし、メトロポリタン・センター宗主国中枢のこうした「欺瞞工作」を見抜いて以降、アラブ人の同胞はその卑劣な策略に騙されなくなり、*FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* のもとに集まったという。そこで主催者側は「新しい方法を考案した」。この「新しい方法」、ないしは、「ヴァリエーション欺瞞工作」も、「分割統治」戦略の一変種なのであるということをアラブ人が次のように解説する。

³⁷⁹ 同上書、230頁。

それはわたしの同胞が世界の被圧迫民族の間で孤立しているという誤った観念をわたしたちにあたえるための試みだ。日本人はアメリカの帝国主義に苦しめられている被圧迫の民族の筈だ、ところが日本人の青年はアラブ民族に協力するかわりにフランスの保守的な権力のさしだす好餌にとびつく。日本人の青年はアルジェリアの同胞を抑圧する働き手だ、そういう誤った観念をあたえるための試み、その一つが今度の論文募集です。(中略) もしアルジェリアの青年と日本の青年が被圧迫民族という名において同胞であるなら、あなたは裏切り行為を働くわけです。³⁸⁰

ここでアラブ人が呈示しているのは、抽象的且つ保守的な内容を持つ南靖男の「論文」への反論のようなものである。「フランス文化と日本文化の相互関係」をテーマにした南靖男の論文は、日仏の「反アンティ・コミュニスト共」的新植民地主義体制下における協力関係を肯定し、促進する内容のものである。アラブ人の発言は、南靖男の日仏関係の文脈における「新植民地主義」体制の擁護に依拠する保守的な主旨を論破し、それに取って代わる「反植民地主義論」＝「第三世界論」の観点からの反論なのだ。つまり、フランスによる「旧植民地主義」特有の(古典)帝国主義的権力の暴力の的となっている被圧迫民族であるアラブ人が、新植民地主義を主導するアメリカ合衆国の帝国主義的圧迫に曝されている日本の一般の学生へ「連帯」を呼びかけているわけである。この「反植民地主義理論」に基づく糾弾と、連帯の提案は、南靖男を戸惑わせる。その戸惑いの理由は、単なる保守主義への傾倒のためのみではない。彼が外国人相手の娼婦である頼子をつうじて、ウィルソン氏の「援助」を受けていることのためでもある。留学や援助金の資源である「北」(の西側)を裏切るといふ勇気がこの段階において彼には湧かなかったのだ。

しかし、南靖男は、「無理心中未遂事件」という「試練」を経て、ついにこの提案に同意するに至る。この段階で、アラブ人の冷淡な態度は緩和し、二人の被圧迫民族に属する青年の間には友情が芽生える。アラブ人は、主催者側をテロライズする「宣伝活動」計画の詳細を南靖男に次のように解説している。

「アルジェリアの旅行記を、あなたが真実を語る勇気をもって書いていただくこと、それが第一の作業です。あなたを招いた書店と政府がその発表を拒んだとき。そのコピーがわたしの同胞の手をつうじてエクスプレス紙かタン・モデルヌ誌に渡されることになるでしょう。

³⁸⁰ 同上書、163～164頁。

それはセンセーションをまきおこすことでしょう！」³⁸¹

南靖男がフランスに留学するための規定によると、彼にはアルジェリアをフランス軍の保護のもとに旅行し、フランスの植民地政策を支持する内容の論文を書く義務がある。アラブ人の計画とは、その論文において主催者側が期待している「親・植民地主義」的な内容とはまったく異なった「反植民地主義的」な *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の宣言をするようなテキストを執筆するということだ。このような「テロル行為」は、「北」（の西側）の暴力に、「書く」ことによる「暴力」をとおして「文化」のレベルにおいて逆らうという戦術である。「暴力」の「毒」を書くことによる暴力の毒をもって制すというこの「奇怪」な戦術は、その書き手としての南靖男を「オタンティック正真正銘」な「モンスター怪物」に変身させるはずだ。

しかし、先にも述べたとおり、弟の墜落死へと繋がった一連の暴力事件の影響を受けて落胆した結果、南靖男は、「被圧迫民族」＝「南」との連帯関係から「デザンガージュ離脱」する。宣伝活動や武装闘争などあらゆるレベルで反植民地的な闘争を続けている他の「被圧迫民族」＝「南」の青年と同様の「オタンティック正真正銘」な「モンスター怪物」に変身するという、南靖男の企画は失敗するわけである。

V.2.3 アルジェリア的な「テロル」の「空間」としての『われらの時代』

「見るまえに跳べ」の「ぼく」も、「喝采」の夏男も、「北」の（西側）の「新植民地主義の欺瞞工作」の犠牲となった。反面、一年後に書かれた『われらの時代』の南靖男は、この中心指向的な権力に対し工作を行う潜在力を持つ立場に布置されている。つまり、南靖男は、「ぼく」や夏男よりも「行動」に近い位置に置かれているのだ。例えば、「喝采」の夏男は、*engager* というフランス語の単語を、性的な意味合いを持つ英語の *to be engaged* や、政治的な意味合いを持つ *s'engager* と混同していた。それに対して、「オタンティック本物の」アンガジュマン「政治的な参加」に夏男よりもさらに情熱的な意思を持つ南靖男の「政治的な参加」をめぐる外国語認識は正確である。

《みずからの頭をつっこむ、*s'engager* する、このフランス語代名動詞を、また連帯 *solidarité* という名詞を、おれたちフランス文学科の学生

³⁸¹ 同上書、238 頁。

はよく使った、それはおれたちの教室での流行語だった。しかし、おれたちは s'engager とも solidarité とまったく関係のない生活をおくってきたのだ。おれたちの存在とまったく逆の領域にある言葉、概念、それをおれたちはまるで親しい言葉、概念のように口にのぼせていたのだ。》³⁸²

すなわち、「喝采」と『われらの時代』の双方の物語言説のレヴェルからすると、「政治的な参加」をめぐり外国語の知識の水準は、あたかも主人公の「政治的な参加」への距離の度合いをあらわす「物差し」の役割を果たしているのである。1958年に書いた「喝采」の主人公と異なって、1959年に書いた小説の主人公に「政治的な参加」をめぐり用語を正しく用いさせるという大江の仕掛けの背景には、「アルジェリア解放戦争」の激化とともに、日本における「政治的な参加の時代」としての1959年4月～1960年7月の安保闘争という「同時代」の空気の働きかけがある。この反新植民地主義的・反・親米保守政府的な行動は、以前の砂川反米基地拡張闘争などのような社会運動の規模をはるかに越えた大衆的な「政治的な参加」へと展開したものだ。

先にも述べたとおり、この小説におけるアラブ人は、「^{オダンティック}正真正銘」な「^{モンスター}怪物」として布置されている。彼を「怪物」たらしめたのは、^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の支配搾取政策および植民地保持をめぐり帝国主義的権力の暴力的行使と、彼の、他の「被圧迫民族」との^{メトロポリタン・センター}コミュニケーションの手段としての^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢の国語＝文化への依存というジレンマなのであった。この帝国主義的権力による暴力は、あらゆるレヴェルにおいて被植民者やその言語＝文化を不可視化＝不可聴化する「同化政策」を中心にする。それに対しアラブ人の「組織」である *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* は、不可視化＝不可聴化という国家テロリズムに逆らう広義の「テロル行為」とおして、自らの「姿」や「声」を可視化＝可聴化＝*monstrare* するという戦術を動員した。アラブ人が「被圧迫民族」の一青年としての南靖男に連帯を求めることもこの方針に沿ったものだ。

しかし、アラブ人とは異なり、南靖男の「北」（の西側）に対する従属は文化のレヴェルのみにはとどまらない。彼は、頼子を媒介にしウィルソン氏の「援助」にも依存しているわけである。この経済（政治）的従属は、『われらの時代』において「性」の比喻をとおして表現される。例えば、新植民地主義体制側が、その支配・搾取行為を「自己正当化」する際に利用する論理は、「南」の「北」への経済（政治）的な従属＝依存である。ここでも新植民地主義と旧植民地といった支配搾取形態の主な非対称性である経済（政治）的な従属＝依存は、南

³⁸² 同上書、228頁。

靖男の「^{オタンティック}正真正銘」な「^{モンスター}怪物」への変身過程＝イニシエーションを失効させた主な要因のひとつだと言えよう。

V.3. 1960年安保闘争の「参加」・「^{モンスター}第三世界」訪問と「怪物」

V.3.1 「セヴンティーン」における「鬼」としての「おれ」

大江が『われらの時代』以降、「^{モンスター}怪物」のイメージを「第三世界と日本」という問題との関係性においてもっとも衝撃的に再登場させた作品は、17歳の極右テロリスト山口二矢による日本社会党委員長浅沼稻次郎の暗殺事件に着想を得て書いた「セヴンティーン」である。アルジェリア解放戦争の最終段階において書かれたこの二部構成の中編小説（「セヴンティーン」、1961年1月、「政治少年死す」、1961年2月）には、北アフリカへの直接の言及はない。しかし「セヴンティーン」は、大江の初期作品に発揮された「第三世界」のヴィジョンを把握するうえで最も重要な作品の一つである。

*

「セヴンティーン」は、大人の世界へのイニシエーションを拒む17歳の主人公の「おれ」を中心に展開して行く。それゆえ、この作品を反・成長小説＝*anti-Bildungsroman*と定義することができる。「おれ」のこのような態度は、「自立」した自己の形成過程に対する退嬰的拒絶なのである。「おれ」は、「見るまゝに跳べ」の「ぼく」、「喝采」の夏男、そして『われらの時代』の南靖男とはかなり対照的な主人公として構想されている。「おれ」以外の三人は、「男らしい」大人の世界へのイニシエーションを渴望し、これは、彼らの「第三世界」の「闘争」に参加するロマン主義的な夢とも重なり合っていた。それに対して、高度経済成長期の日本の中産階級の家族の次男である「おれ」は、大人の世界へのイニシエーション＝自己形成を嫌悪し、回避しようとする。「おれ」のこの退嬰的な拒絶は、「私心」を持ちたくないという意味に由来する。例えば、「おれ」が極右のテロリストに変身する過程において読んだ一連の書物の一冊から「忠とは私心があってはならない」という「おれ」にとっての「もっとも重要な原則を把握する」に至る。そして、物語では、「おれ」の「忠」の対象は天皇として設定されている。彼は天皇と「同一化」することを望むようになるが、それは「自立」した「^{アイデンティティ}自己同一性」を築き上げるためではなく、自己を否定し、「天皇」に対し「忠」であるためである。

他方、「セヴンティーン」におけるダイナミズムは、二つの対照的な要素の対置と拮抗によって構築されている——保守主義と進歩主義。「おれ」の役割は、進歩的な要素を無効にし、物語空間から排除することにある。あたかも、「おれ」は、一定の中心指向的な権力を肯定し、現状維持の意思に基づく保守主義を擁護し促進するような存在なのである。

当初「おれ」は、進歩主義に傾斜している少年であった。そのことには「安保闘争」という同時代的背景の影響が大きかったと思われる。そして、「おれ」の進歩的な要素を排除するという役割は、進歩主義に傾斜している自分自身から始まる。「おれ」は、同級生に誘われ、(『われらの時代』のジャズ・トリオのように) 右翼の「サクラ」として、新橋駅前でおこなわれる皇道派の指導者である逆木原国彦のスピーチを聴きにいく。「おれ」が意味不明の怒号にすぎないこのスピーチを聴いているうちに、周辺にいた三人の女事務員の一人が「おれ」を指して「あいつ、《右》よ、若いくせに。ねえ、職業的なんだわ」³⁸³とって彼を糾弾する。この言葉は、彼の「極右」への「転向」の契機となる。

おれは激しくふりかえり、おれを非難している三人組みの女事務員が一瞬動揺するのを見た。 そうだ、おれは《右》だ、おれは突然の激しい歓喜におそわれて身震いした。おれは自分の真実にふれたのだ、おれは《右》だ！ (中略) おれはいま自分が堅固な鎧のなかに弱くて卑小な自分をつつみこみ永久に他人どもの眼から遮断したのを感じた。《右》の鎧だ！ しかも、おれがなおい歩踏みだしたとき娘らは悲鳴をあげたが、足が竦んだように逃げることができないのだ、おれは娘らの熱い血がどきどき脈うつ胸のなかの恐怖に性欲のように激しい精神の喜びをそそられた。おれは怒号した、「《右》がどうした、おい、おれたち《右》がどうしたというんだ、淫売ども！」³⁸⁴

他方、この場面の直前における逆木原国彦の「安保闘争」を主導する進歩派をめぐるグロテスクな奇怪さに包まれた言葉は「東西冷戦」時代における「保守派」特有の「反^{アンティ・コミュニスト}共」的なヒステリーを反映している。

《あいつらの糞野郎めがだよ、国を売る下司の女衞の破廉恥漢がだよ、日本の神の土地の上に家をたてて女房子供をやしなっているのはお

³⁸³ 大江健三郎、「セヴンティーン」、『性的人間』(1968年初版)、新潮社、東京、1998年、168頁。

³⁸⁴ 同上書、168頁。

かしいじゃないか？ ソ連・中共のけだもの^けの国に行って日本人廃業すればいいじゃないか、おれはとめないよ、けつを蹴とばしてやるよ。あいつらのフルシチョフの男色野郎におかま掘られて尻^{わいろ}っぴる暇もねえだろう。ごろつき毛沢東にストライキ煽動してためた不浄金を賄賂にだすつもりだろう。》³⁸⁵

物語の始まりの部分において「おれ」は、「他人ども」と呼んでいる自分以外の人間全体に対する「反社会的」な憎悪を抱いている少年として設定されている。この「反社会的」な攻撃性は、逆木原国彦の憎悪に溢れる言葉においても明瞭である。「反共的」の指導によって、進歩派へと向けられ、政治的な「暴力」=terreurの形式を取るようになる。

ここで注目すべきは、「おれ」が、中心指向的な権力を代表する要素と「同一化」をし、「周辺」的な進歩主義的な要素を暴力的な手段をとおして無効にし、排除するという一貫した構造が、物語の終局の段階まで反復されることにある。例えば、物語の中で皇太子妃になる前の正田美智子と、「安保闘争」運動家の女子学生が暗示的な形で対置させられている。正田美智子は、皇太子との結婚によって歴史的に「ミッチー・ブーム」と命名される社会現象の中心人物として注目されていた。他方、「セヴンティーン」の女子学生は、安保闘争の最終段階において「警官隊の『反撃』による大規模の暴行」の結果死亡し、安保闘争のために命を捧げた人物として焦点化された樺美智子をモデルにしている——この暴力事件には政府が闘争を妨害するために雇ったとされる極右団体がデモ隊を襲撃する形で関与している。³⁸⁶異なる「ブーム」の主体としての同名の二人の女性が対置されているわけだが、「おれ」は、小説の第一部の始まりの部分において、皇太子妃に感情移入をしており、同じ第一部の終わりの部分においては、樺美智子をモデルにしている女子学生の死亡に歓喜を覚える。「女子学生が死んだ噂が混乱の大群衆を一瞬静寂に戻し、ぐっしょり雨に濡れて不快と悲しみと疲労とにうちひしがれた学生たちが泣きながら黙祷していた時」、「おれ」は、「強姦者のオルガスムを感じ、黄金の幻影にみな殺しを誓う」のである。「おれ」の残酷な「鬼」のような傾向がグロテスクにはっきりとこの場面に描かれている。

「セヴンティーン」第二部においての保守的な価値観を象徴するものと、進

³⁸⁵ 同上書、166～167頁。

³⁸⁶ 松井隆志、「六〇年安保闘争とは何だったのか」、岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 2 60・70年代』、紀伊國屋書店、東京、2009年、130～131頁。

歩的な価値観を象徴するものの拮抗という設定は、二つの都市を対照させることによって反復される——東京と広島。つまり、日本の国家権力が集中した首都と、人類史における核兵器による最初の虐殺の場となった広島の対立である。皇道派の青年たちは、広島の記念式典の妨害工作を行使するために広島に行くが、全学連と衝突の結果負傷する。「おれ」はリンチされかけたが、一人の極右シンパサイザーの警官によって救われる。その夜テレビ番組で、皇道派による妨害工作を「愚連隊なみ」と呼んだ、進歩的な広島運動家の作家「南」原征四郎を恐喝することが「おれ」に任命される。「おれ」は南原を刺殺しようと思うが、後に、南原が同性愛の習慣をもつ麻薬中毒者であることを知り、「天皇」への忠を証明するために暗殺の標的にするほどの価値が南原にはないと判断し暗殺を断念する。こうして、広島という都市と深くかかわった進歩的な人物としての南原は無効にされ、物語空間から排除される。広島から帰って来る汽車のなかで「天皇の栄光をねがわない」進歩主義者を暗殺すべきという「啓示」をえた「おれ」は、進歩党の委員長を新しい暗殺の標的に選ぶ。「おれ」は「三党首演説会場」において演説中の進歩党の委員長^{デザンガジュマン}を刺殺してしまう。

安保闘争の敗北以後の日本社会における「政治的離脱」の空気の形成において極右のテロル工作の働きかけは大きかった。例えば、石炭から石油へとエネルギー源が変化していく過程で、大量解雇の方針が決定されてから激しい闘争が展開された三井三池炭鉱の争議の最中には、組合員が極右の暴力団によって刺殺された。樺美智子が死去した「騒動の発端にも」極右団体がいた。こうしたテロル事件が連発したことで、社会において極右の暴力団への恐怖心が宿るようになった。10月12日に「セヴンティーン」の主人公のモデルである山口二矢が日本社会党委員長の浅沼稻次郎を刺殺したことで、極右勢力は、日本社会を「テロライズ」するというイメージが定着したのである。³⁸⁷

極右勢力によるテロルは、後に言論への攻撃の形を取って続けられた。安保闘争をパロディー化した深沢七郎の短編小説「風流夢譚」における皇室へのグロテスクな表象が極右勢力の反発を呼び、その小説を掲載した『中央公論』誌の出版元の社長宅が、17歳のテロリストによって襲撃された。この襲撃により、社長夫人は負傷し、手伝いの女性が殺害された。この暴力事件の直後に発表された大江の「セヴンティーン」も極右勢力によるテロルの標的にされた。大江や作品が掲載された『文学界』誌は、極右団体の攻撃の対象とされるようにな

³⁸⁷ 上野千鶴子、小森陽一、成田龍一による座談会、「ガイドマップ 60・70年代」。岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 2 60・70年代』、紀伊國屋書店、東京、2009年、17頁。

った。「セヴンティーン」における大江自身をモデルにした南原に対する恐喝の場面が、安保闘争以降の現実のレベルにおいて「鬼」として具現化し、大江を攻撃するようになったといっても過言ではないだろう。この極右勢力の攻撃に加え保守派による迫害工作の結末として、『文学界』誌において極右団体への「謝罪文」が掲載され、編集者が解任されるという悲喜劇的な事象もおこった。

『われらの時代』においてアラブ人が、「いつまでも現状がつづくとなれば、八木沢さんは正真正銘のテロリストになって政府に爆弾をなげるでしょう」という日本の進歩派をめぐる予言をしていたが、この予言が外れたことが「セヴンティーン」において暗示される。ポスト安保闘争の段階において、「テロリスト」になったのは、八木沢のような進歩派ではなく、極右勢力の方だったのである。³⁸⁸

³⁸⁸ 大江がこのような「テロル」の潜在力を安保闘争に「参加」した日本の青年に見いだしていたのは、強行採決直後に書いた「民主主義が踏みにじられた」というエッセイにおいても明瞭である。このエッセイは「謀略家の首相」岸信介をはじめとする保守派に対する全面的な批判である。このテキストにおいて安保闘争の抗議者の学生がテロルの方法を採用しなかったのは、民主主義を信じていたためであると大江が言う。

「国会前のこの学生たちがずっと幼かったころ、ある日突然に、かれらは民主主義の子となった。そして今日、かれらは雨に濡れて震え、警官や右翼のおどかしにも震えながら、十五年間それによって育ってきた、民主主義の死に立ちあっているのである。

この若者たちが雨に濡れて叫びながら、疑われないでいられない。この叫びは、警官隊たちをこえ、広場をこえ、厚いコンクリート壁をこえ、いくつものドアをこえ、首相の耳にとどくのかどうかを。こういう叫びだけでは手遅れであり、他の手段をとるべきではないかどうかを。

しかし、この若者たちはルールをまもった。テロもおこなわず、嘘もつかず、かれらは勇気をもって自己の怒りと悲しみと不安とを抑制し、ルールをまもった。

それにもかかわらず、恥知らずにも、国会議事堂のなかで岸首相はルールを破ったのだ。」(大江健三郎、「民主主義が踏みにじられた」、101～102頁、傍点は引用者による)

周知のとおり、日本の進歩的な大学生が「テロル」手段を行使するようになったのは1960年代後半以降の過程である。この過程を形づくった主役は、主に新左翼的な諸分派であった。「かれら」は、中華人民共和国における文化革命、ヴェトナム戦争の泥沼化によって全世界に漂うようになった「第三世界論」的革命主義の「高揚」に着想を得たのである。かれらのこうした過激的な行動によって形づけられたこの過程は、連合赤軍による浅間山荘事件(1972年2月19日～2月28日)を頂点とする組織内外における一連の暴力事件の舞台となった。新左翼の自己破壊的なこの方針は、あたかも、大江が13年前に書いた『われらの時代』における南滋の物語の流れにおいて先取りされているかのようだ。

V.3.2 「疑似」^{モンスター}「怪物」としての「おれ」

「セヴンティーン」に大江が「おれ」を登場させた理由は、安保闘争以後の日本社会の保守化へ「拍車をかける」ために動員された「極右」の「暴力」を示すことである。

暗殺の結果、「おれ」は検挙される。しかし、死刑にされないことを悟った「おれ」は、極右のテロリスト＝「鬼」としての「正真正銘性」^{オタニテイシテ}を喪失することを恐れるようになる。「おれ」は自己を消滅させることによって天皇への「忠」を証明することを決心する。そうすれば自らの萎れつつある「真の右翼の魂をもっている選ばれた少年」＝「鬼」としての「正真正銘性」^{オタニテイシテ}を「十分間」にわたって輝かせることができるからである。

《自殺しよう、おれは汚らしい大群集を最後に裏切ってやる、おれは天皇陛下の永遠の大樹木の柔らかい水色の新芽の一枚だ、死は恐くない、生を強制されることのほうが苦難だ、おれは自殺しよう、あと十分間、真の右翼の魂を威厳をもってもちこたえれば、それでおれは永遠に選ばれた右翼の子として完成されるのだ。》³⁸⁹

「おれ」は自らを「正真正銘」^{オタニテイック}な「怪物」^{モンスター}と思いこんでおり、その「正真正銘性」^{オタニテイシテ}を保つために選んだ方法は、自瀆と自殺を統一させた奇妙な方法である。³⁹⁰「おれ」はこの自瀆的な自殺によって、退嬰的に「自立」した存在として生きることが回避し、「自己」を完全に無効にし、排除することによって、天皇への「忠」を証明できると信じ込んでいるのである。

「おれ」が「正真正銘性」^{オタニテイシテ}を持たない、性的な＝「疑似」の「怪物」^{モンスター}にすぎないことが、一人の係官によって見抜かれる。進歩党委員長を暗殺の標的にした理由を問うた係官に「おれ」は「委員長でなくてもよかったです、日教組の連中でも共産党のやつらでも、極たんという、天皇の栄光をねがわない者なら誰でもよかったです、問題は刺殺する相手にあるのではなくて、刺殺するこちら側にあるんですからね」と答えると、これを受けて係官が「不意に冷

³⁸⁹ 大江健三郎、「政治少年死す」、『文学界』、1961年2月号、46頁。

³⁹⁰ 「幸福の悦楽の涙でいっぱい眼に黄金の天皇陛下は燦然として百万の反射像をつくる、八時五分、おれは十分間、真の右翼の魂をもっている選ばれた少年として完璧だった、おれの右翼の城、おれの右翼の社！ ああ、おお、おお、天皇陛下！ ああ、ああ、あああ、天皇よ、天皇よ！ 天皇よ！ おお、おお、あああ」（同上書、47頁）

たい顔になって低い刺とげのある声で、「《それじゃあ、まるで痴漢だ》」と言うのだ。

「おれ」も、『われらの時代』のプールの場面において幼女に性的暴力を行使した「痴漢」の大学生、ないしは、外国人と同性愛の売春をすることによって「第三世界」の名誉を回復すると自己欺瞞に陥っている高のごとく、性的な動機による暴力しか行使することができないのである。こうした退嬰的で「自己破壊」的な「暴力」＝テロルは、『われらの時代』の「アラブ人」が極東において代表しているアルジェリアの「解放」と「自立」のために闘争をおこなう「オタンティック正真正銘」な「モンスター怪物」的な組織としての *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* のテロルとは正反対のものである。

V.3.3 アメリカニゼーションを中心にする「保守化」を「明視」＝“monstrare”する「奇怪」な小説「セヴンティーン」

作者大江の批評的なカテゴリーに置き換えて位置づけ直すと、「セヴンティーン」という二部構成の小説の主人公である、極右のテロリスト＝「おれ」は、「疑似怪物モンスター」である。その反面、彼が登場している「セヴンティーン」という作品自体が、「オタンティック正真正銘」な「モンスター怪物」なのである。「怪物」としての「セヴンティーン」が *monstrare* するのは、安保闘争の敗北以降の日本における保守化と相互作用する政治、経済、社会、文化の各分野における広義のアメリカニゼーションの問題である。この現象が「セヴンティーン」においていかに表現されているかを呈示するまえに、「日米安保条約改定」や、それに対する大衆的な抗議として発現した「安保闘争」を定義する必要があるだろう。そのために松井隆志の「六〇年安保闘争とは何だったのか」が有効な手掛かりとなる。

日米安保条約改定＝新安保は、1951年のサンフランシスコ講和条約と同時に締結された「日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約」を失効させ、新条約として締結しなごとする日米政府の方針に基づいていた。この新安保も旧条約と同様に新植民地主義の「世界戦略への日本の従属的な組みこみ」という点で共通していた。新安保条約の締結による従属システムは、「日米安保体制として」2000年代の近年まで継続しており、帝国主義的な「戦争参加という形での平和憲法の空洞化や、天皇制ナショナリズムに対してすら上位規定力を発揮している」。日米関係の緊密化の礎となる新安保条約への反対運動として始まった安保闘争の最盛期である1960年6月に数十万の抗議者が国会を取り囲ん

だ。この行動は、「日本近代史上空前の規模」³⁹¹の「始まりの現象」として歴史に記録された。

「既成革新派」(社・共党や総評・日本平和委員会・原水協)、(国会突入など攻撃的な行動方式を採用し、既成革新派に批判されながら、その高揚感を周囲に伝えることで「運動」を「闘争」へと変身させ、闘争の地方への拡大や大衆化に貢献した)「新左翼」(＝全学連主流派＝共産主義者同盟)と(共産主義からやや距離のある啓蒙主義的知識人が主導した、「自発的」参加層＝「市民」に基づいた団体)「市民主義派」など様々な主体が一つの闘争を織りなしていた。闘争の基調を形づくったのは、既成革新派による「安保条約改定阻止国民会議」＝「国民会議」であり、その目標は、「新安保が戦争の危険を高め、憲法改悪・再軍備を促進」することに反対し、「日中友好など中立外交をすべき」などといったものであった。³⁹²

これらの主体は、安保闘争の敗北の後に、自らの観点から闘争を総括している。松井が安保闘争をめぐる「神話」と呼ぶこれらの総括は、「安保闘争」という不意の大規模な「政治的な参加」の動機と成果を(それを自らの組織に帰する形で)説明する試みであった。既成革新派による総括は、闘争を「民主主義勢力の前進」による「進歩派と反動派」の対立として位置づけたものであるが、全学連主流派の総括は、進歩派内部に対する批判に基づいている。例えば、詩人・文芸評論家・思想家の吉本隆明は、既成革新、とりわけ日本共産党や「市民主義」を「疑似」の、乗り越えられるべき「進歩主義」＝「擬制」として批判し、この「擬制」から自立する潜在力を孕んでいるのは、新・進歩派としての全学連主流派であると論じている。社会学者の日高六郎や思想家・評論家の久野収など共産主義からやや距離のある啓蒙主義的知識人ら＝市民主義派によると、安保闘争を可能にしたのは、政治的組織意識から独立した市民意識を持ち、闘争へ自発的に参加した「市民」であった。

松井によると安保闘争は、「民主勢力の前進」などと単純化できるものではなく、「真の前衛」による革命でもなければ、「市民」の自立だったとも言えないものである。例えそれらの要素を含んでいたとしても、一つの主体や動機に還元できるようなものではなかった。各主体がそれぞれの動機から関わり、結果的に意図を超える帰結を生んだ一つの「混沌」だった。安保闘争は、新安保条約改定反対ということを目ざした集団的努力がその基盤を準備した「祝祭」のようなものだったのである。³⁹³

³⁹¹ 松井隆志、「六〇年安保闘争とは何だったのか」、125頁。

³⁹² 同上書、126～127頁。

³⁹³ 同上書、140頁。

こうした政治的な「混沌」ないしは「祝祭」への下地を作った動機には、戦前戦中の帝国主義の復古、新植民地主義の戦争への参戦の危険性に対する反帝国主義的反戦意識が横たわっていたのであった。つまり、第二次世界大戦の記憶に対するリアクションとして発動した「アメリカの戦争に巻き込まれる」ことに対する「反戦感情」が安保闘争のもっとも主要な原動力となった³⁹⁴と言えるのだ。この戦前＝「大日本帝国による帝国主義」と戦後＝アメリカ合衆国が主導する新植民地主義という、二つの帝国主義の間における架け橋的な存在は、岸信介首相だった。松井に言わせば、「新安保自体が『戦争に巻き込まれる』危険を掻き立てたのに加え、かつての A 級戦犯・岸信介の政策と強行採決が「戦前回帰＝復古運動」の象徴として映り、巨大な爆発力となった」³⁹⁵のである。

安保闘争が高揚するようになったのは、主に A 級戦犯の岸信介が新安保条約の承認のため積極的に、敢えて言えば「私心をなくして」活躍するようになって以降のことである。岸は 60 年 1 月に新安保条約調印のために渡米した——全学連主流派はそれを阻止しようと羽田空港において渡米阻止闘争に取り組んだが失敗した。「衆院議長の衆議院本会議出席を物理的に阻止しよう」として座り込んだ社会党議員団が民主主義に相反する形で国内に導入された警官部隊によって「無効」にされ、「排除」されることで、同年 5 月 19 日岸の主導によって新条約案の採決は行われ、翌日 5 月 20 日に衆議院本会議にて通過したのだ。³⁹⁶

「セヴンティーン」の第一部のクライマックスとして設定されている 6 月 15 日の権美智子の死亡をもたらした極右団体による国民会議デモへの襲撃事件や国会突入に対する警官隊による暴力的な「反撃」の舞台裏にも岸はいた。このファシズムの名に値するような極端な保守主義に反発した大衆による抗議デモは空前の盛り上がりを見せたが、これを無視した岸政権は、ついに、6 月 19 日に参議院の議決がないまま新安保条約の自動承認に成功した。6 月 23 日条約の批准が済むと岸首相は辞任した。

岸の「新植民地主義」との協力という「反^{アンティ・コミュニスト}共」的、反「第三世界」的な企画を実現させるうえで、それに逆らう「進歩的」な要素を無効にし、排除し、それが実現した段階で自らをも排除するという方針が、「セヴンティーン」にお

³⁹⁴ 上野千鶴子、小森陽一、成田龍一による座談会、「ガイドマップ 60・70 年代」、上野千鶴子の発言。岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 2 60・70 年代』、17 頁。

³⁹⁵ 松井隆志、「六〇年安保闘争とは何だったのか」、136～137 頁。

³⁹⁶ 大江が、強行採決直後に書いた「民主主義が踏みじられた」というエッセイにおいて「謀略家の首相」と呼んだ岸信介をはじめとする保守派を全面的に批判したことはすで触れたとおりである。

いて再構築されていることが判明する。この新植民地主義という体制への加盟という保守的な企画は、「セヴンティーン」において「天皇への忠」という形で表現されているのである。

V.3.4 「セヴンティーン」における保守主義とアメリカニズムの融合

1955年の保守合同といった政治的な転機や高度経済成長といった経済的な転機によって始まったアメリカニゼーションと相互作用した日本の「保守化」の過程は、日本国民が大衆的に参加した安保闘争によって一時的に中断したものの、新安保が承認された1960年以降再び強固になっていった。この問題は、「セヴンティーン」において焦点化されている。「セヴンティーン」には安保闘争以後の広義の「政治的離脱」^{デザンガジュマン}の雰囲気^{アンティ・コミュニズム}が反映されている。

先に述べたとおり、「セヴンティーン」において、「保守主義」と「進歩主義」という二つの対立する言説の流れが存在する。「保守」的な言説の流れは徐々に進歩的な流れを無効にし、排除し、進歩的な要素が占めていた場を占領するようになる。やがて、この「保守主義」と「進歩主義」の言説的権力争いに圧倒的な勝利を収めるに至る、「保守主義」の言説の流れそのものの中にも、二つの主な構成要素がある。保守党、皇道派、警察、自衛隊、防衛大学、「反共主義」、天皇、皇室など保守的なカテゴリーと深くかかわった記号から構成されている構成要素と、広義の「アメリカ（合衆国）」と深くかかわった記号によるアメリカニズムの要素である。こうした構造は、「おれ」が自分自身や彼の家族を読み手に紹介する小説の「始まり」の部分において明確に示されている。

自衛隊の病院で看護婦をしている姉は、「天皇制ナショナリスト」であり、自衛隊や「保守党」を支持する。夕食後の場面において、政治的な知識が未熟な「おれ」の天皇制、再軍備や保守政権の親・新植民地主義的な政策に対する進歩的な立場からの批判に対して、「姉」は反対する。彼女は「おれ」の議論における矛盾と欠点などを暴き、それを論破するのである。こうした言論のレベルにおける敗北を被った「おれ」は、保守的な姉に暴力をふるうようになる。「おれ」の「保守化」の過程は、この言論のレベルにおける敗北を皮切りに始まるのだ。

姉のナショナリズムとミリタリズムに傾く保守主義に対し、父親と兄の保守主義は、「アメリカ（合衆国）」と深く結びついている。「おれ」の父は「おれ」と姉の日本の現状をめぐる論争をまったく無関心のままで聞き流す。「おれ」に

よるとその理由は「父」の「アメリカ風の自由主義」という政治的イデオロギ―にある。父が教鞭をとっている私立高校にも「アメリカ風の自由主義」の教育がおこなわれている。

「おれ」の兄は、東大ではクラスの指導者であり、学生祭において「凄い働き」をしたのにもかかわらず、会社に入ってから過労ですべてから疎外され、「モダン・ジャズに病的に凝り、模型飛行機つくりのマニアになった」という人物である。³⁹⁷この兄は「おれ」と姉の政治的な論争にほぼ無関心だ。「おれ」が庭のはずれの物置に避難したときに、母屋から「マイルス・デイヴィスの重奏音団」が聞こえてくると、「兄は十分前の小さな嵐をすっかり忘れさってハイ・ファイの再生装置のまえにうっとりした頭を不安定に揺れる首の上ののせた麻薬中毒みたいな格好でジャズに陶醉しているのだろう」³⁹⁸と推測している。兄が模型飛行機つくりやジャズに異常に強い関心を抱いている点で『われらの時代』のジャズ・トリオと重なりあう存在であることはすでに触れたとおりである。父の政治的なレヴェルにおけるアメリカニズムと兄の文化のレヴェルにおけるアメリカニズムそれぞれは、日本のアメリカニゼーションの異なる側面を表現しているのである。

兄と父のアメリカニズムと、姉が体現する保守主義という設定を考慮すると、「おれ」の家族環境は、日本社会におけるアメリカニゼーションに密接に絡んだ形で展開している保守化の雰囲気やを反映している。物語言説のレヴェルからするとこれらの二つの要素は相互に対立せず、その間には協調があると言える。「おれ」の家族において、アメリカナイズするにつれて保守化していき、保守化していくにつれてアメリカナイズするという悪循環的な渦巻きに巻き込まれた日本社会の縮図を見てとることができる。

この小説の物語空間が、『われらの時代』のジャズ・トリオの物語の流れよりもさらに濃厚なアメリカニズムに占領されていることに、安保闘争の敗北、つまり、日米安保体制の成立に対する大江の批判的な反応がある。アメリカニズムの色合いは、「おれ」個人においても小説全体をつらぬいて濃厚である。小説の始まりの部分において、「おれ」は自らを読み手に紹介する時、「十七歳の少年」という意味を指す英語の言葉のカタカナ表記「セヴンティーン」を用いる。³⁹⁹さらに、「おれ」は、風呂での自瀆を終えて服を着込んでいる間に、ポップス・ロック音楽のシンガー・ソングライターのニール・セダカ (Neil Sedaka)

³⁹⁷ 大江健三郎、「セヴンティーン」、137頁。

³⁹⁸ 同上書、137頁。

³⁹⁹ 「今日はおれの誕生日だった、おれは十七歳になった、セヴンティーンだ。」(同上書、122頁)

が、当時ほぼ 17 歳であった情人のキャロル（キング）のために作曲し、1959 年にヒットした「おお！キャロル」を「鼻歌でやる」のである。

「おまえはおれを傷つける、おまえはおれを泣かせる、けれどもし、おまえがおれを棄てるなら、おれはきっと死んでしまうだろう、おお、おお、キャロル、おまえはおれに酷いことをする」⁴⁰⁰

アメリカニズムの色合いがもっとも濃厚になるのは、新安保条約が暴力的に承認され、「おれ」が「反共」^{アンティ・コミュニスト}的な動機をもって反米的＝反新植民地主義的、親中の＝親・第三世界的とおぼしき進歩党の委員長を暗殺した以降の以下の場面においてである。「おれ」は、裁判の後に強く望んでいた「死刑執行場」ではなく、東京少年鑑別所にうつされる。「おれ」はそこでも「独房に正坐して外部と人間どもから庇護され」ることになる。そしてある日、彼が小説の始まりの部分で風呂をあがるとき鼻歌をしていた「おお！キャロル」というアメリカの軽音楽の曲に曝される展開となる。

歌声がおなじ建物の遠くから聞えてきていた、不意におれはその旋律をしっかりとらえた、おれがいつも歌っていたやつだ、おお！キャロル、おまえはおれを傷つける、おまえはおれを泣かせる、けれどもし、おまえがおれを棄てるなら、おれはきっと死んでしまうだろう、おお、おお、キャロル、おまえはおれに酷いことをする！《おれが歌っていた歌を歌っているやつら、おなじハイティーンたちがここにはいっぱいいるのだ、既にその歌声がおれの耳に届く、明日はおれもあいつらと小さな接触をもつようになるかもしれない、そしていつかは、おれはあのおなじハイティーンたちとともに人間の大群集のなかへ釈放されることになるのだ！》おれは恐怖が再びおれの胸にじわじわ滲んでくるのを感じながら歌声を聴いていた、おお、おお、キャロル、おまえはおれに酷いことをする！」⁴⁰¹

物語言説のレベルからすると、この歌は、新植民地主義に「傷つけ」られ、「泣か」されながら、それに絶望的に依存している日本の保守的な体制の、従属関係を暗喩的に表すための仕掛けである。小説のフィナーレにおける「おれ」の自己破壊的な計画の方針は、岸信介の新安保条約を承認させたうえで、この

⁴⁰⁰ 同上書、127 頁。

⁴⁰¹ 大江健三郎、「政治少年死す」、(『文学界』、1961 年 2 月号)、45～46 頁。

保守的な計画に「忠」であるための政治的な自殺を遂げるという方針に照応するものである。内部では、天皇制を根拠としている日本の保守体制が、外部のレベルでは、アメリカ合衆国の軍事的経済的保障を失うと脆くなりかねないことを、岸信介は認識していたからこそ、新安保条約の承認ために「無私的」に努力したのであった。つまり、保守政権は、「おお キャロル」という軽音楽の「おまえがおれを棄てるなら、おれはきっと死んでしまうだろう」という表現のように、アメリカ合衆国に「棄てられ」、日本が革命手段によって「第三世界化」することを懸念していたのである。そこで、「安保」体制を維持することで、天皇制を中心にする日本の保守的な政治体制を保持することを可能にしようとしたのである。しかし、岸は、この計画に対するさらなる抗議を避け、安保闘争に終止符をうつために「自己」を犠牲にせざるを得なかった。「おれ」が進歩的な要素を排除してから、天皇に「忠」であるため、そして「鬼」としての「オダントエイシテ正真正銘性」を死ぬことによって保持するために自殺するという不思議な行動方針は、岸のアメリカニゼーションと保守主義を融合させた計画のアレゴリーなのである。⁴⁰²

大江は、「謀略家の首相」と呼ぶ岸信介の政権の主導でおこなわれた反民主主義的な新安保承認過程自体が、自殺同然の自己破壊的な行為であったことを「民主主義が踏みにじられた」というエッセイにおいて表現し、衆議院議長および警察をこの過程に関与した共犯者として強く糾弾している。

警察たちは、社会党議員をつまみだしたが、そのとき日本中で数千万の人間が、その議員とともにつまみだされたのであることに気がついていたろうか？

警官たちは、人間として自分がもっている民主主義の権利を、あたかも無権利で無意思の番犬のように自分たちをあつかう首相のために、み

⁴⁰² すでに指摘したとおり、「セヴンティーン」という「奇怪」な小説が表象を与えているのは、岸信介の辞任までの日本だけではない。日本のアメリカニゼーションを伴った保守化が、岸信介の次に「自民党政権を担った池田勇人によって異なる方針で持続された時期も「セヴンティーン」の射程には入っている。池田は「所得倍増計画」を掲げ、「政治の季節」から「経済の季節」への方向転換をはかった。（松井隆志、「六〇年安保闘争とは何だったのか」、141頁。）池田は1965年に死亡したが、彼の打ち出した計画は成功を収め、「1970年までに実質成長・名目成長ともに延び、平均も倍近くまで増えて、所得倍増は本当に達成され」たのである。これは一定の長いタイム・スパンの保守革命の第一歩となり、労働者の「ブルジョワ化」と、労働者の政治の舞台からの「デザンガジュマン離脱」という現象を可能にすることになった。（上野千鶴子、小森陽一、成田龍一による座談会「ガイドマップ60・70年代」、上野千鶴子の発言、17～18頁を参照）

ずから議会の外へつまみだす仕事をしたのだが、その自殺行為に気がついていたらどうか？⁴⁰³

1955年の国内のレヴェルにおける「保守合同」に対して、新安保条約は、アメリカとの協調、アメリカが主導する新植民地主義体制への依存という意味で、外部のレヴェルにおける「保守合同」なのであった。このことは「セヴンティーン」が呈示する歴史認識であり、小説の終わりの部分において、日本の天皇制ナショナリズムを中心にする保守的な権力構造に関する記号と新植民地主義体制を主導するアメリカに関する記号が融合されるのである。次の箇所において、小説全体を貫いて日本の中心指向的な保守体制の根拠となっている天皇を修飾するために用いられてきた「黄金」という記号は、日本におけるアメリカの存在感を最も濃厚に示していた「国連ビル」を修飾するために用いられるのである。

「天皇陛下万歳、七生報国、おれの熱く灼ける眼はもう文字を見ず、暗黒の空にかぶ黄金の国連ビルのように重大な天皇陛下の轟然たるジェット推進飛行を見ている、おれは宇宙のように暗く巨大な内部で汐のように湧く胎水に漂よう、おれはビールスのような形をすることになるだろう。」⁴⁰⁴

そして、大江によるこのアメリカニゼーション／アメリカニズムと日本の保守化／保守主義をめぐるヴィジョンの呈示は、安保闘争敗北以後の日本を、世界地図へ再配置する作業となっている。

V.3.5 新安保体制と「世界地図」における日本の再配置

『われらの時代』において、一連の世界文学のテキストの脱文脈化を媒介に日本の世界地図における再配置が遂行されていることは、すでに示した。『われらの時代』では、日本が世界地図の「第三世界」の部分から消去されている。『われらの時代』において重要な要素であった「世界地図」のモチーフが、「セ

⁴⁰³ 大江健三郎、「民主主義が踏みにじられた」、『厳粛な綱渡り』（1965年初版）、講談社文庫、東京、1991年、99頁。

⁴⁰⁴ 大江健三郎、「政治少年死す」、47頁。

ヴンティーン」の後半において登場するのは、『われらの時代』で遂行された地政学的「地図作成」作業が再びおこなわれているからである。

「おれ」は、警察官の憧憬に満ちた眼差しに曝されながら独房の床の中央に正坐しているときに、幼かった頃、兄がアメリカ人の牧師から贈られたアザラシかオットセイか、「北」の海の哺乳動物が主人公となっている絵物語に夢中だったことを想起する。

その北の海の哺乳動物はたしかオーレイという名前で、すばらしいデッサン力のある画家が情熱をこめて黒の濃淡だけの挿絵をかいていた、おれがいちばん好きだったのはオーレイの旅行路を点線でかきこんだ世界地図で、それは段ボオルみたいな紙の表紙の裏に印刷されていた。オーレイはサアカスで働いたかどうかしたあと（おれはそのころ英語がまったくだめだった、それにもう記憶も薄れたのではっきりしたことがいえないが）アメリカの大湖水地帯のオンタリオ湖かエリー湖にはなされ、そこから河をくだり海をいくつも泳ぎわたりし、ほとんど全世界を旅して故郷の北海に戻るのだが、その詳細をきわめた旅行談なのだ。いまおれは独房に坐っているながら、もしその意志をもちさえすれば自分には、あの勤勉な気持ちがいの北の海の哺乳動物くらいの大旅行もできるという気持なのだ。そしておれは、あの本に夢中だったころ子供心にも、自分には一生こんな大旅行は不可能だと胸を涙でいっぱいにするほどの悲しい諦めを感じていたのだった....⁴⁰⁵

この挿話にも、新植民地主義を主導するアメリカ合衆国ととりわけその文化に関する記号が多い。ここに極右のテロリストとして「活躍」してきた「おれ」のアメリカニズムの根深さが、『われらの時代』のジャズ・トリオのそれに劣らない程度のものであることが見てとれる。この挿話において、「おれ」はオーレイという「哺乳動物」が世界を横断・縦断するという自由な姿に魅了されている。このモチーフは、紛れもなく南滋をはじめとするジャズ・トリオが米軍放出の大型トラックで日本を横断・縦断するという、帝国主義的な欲望を抱えるというモチーフと内的に有機的な繋がりを持つ。

もとより「おれ」は、一定の「世界地図」作成が行われているこの物語をたんなる子供時代へのノスタルジアとして想起しているわけではない。彼は、極右的なナショナリズムとアメリカニズムを融合させた観点から、オーレイが、「北」の海を目指した旅の物語を再考している。「おれ」は、この物語の記憶に、

⁴⁰⁵ 同上書、40～41頁。（傍点は引用者による）

戦後の「北」（の西側）として、世界を経済的・軍事的に支配する新植民地主義と帝国主義の権力を見いだしており、このヴィジョンに魅了されている。しかし、その際、彼の考察の媒介になっているのは、戦前戦中において「大アジア主義」を掲げ、アジアを横断・縦断し、植民地化した大日本帝国の帝国主義の（地理）歴史をめぐる記憶なのである。

この挿話の後半が悲観的になっているのは、日本が、戦前戦中の「大アジア主義」を「復古」させなくなったということへの憂鬱感・無力感に由来する。この戦前戦中の「帝国主義」や「ファシズム」の「復古」を不可能にしたのは、結果として敗北に終わった安保闘争の実績のひとつであった。「おれ」が、「あの本に夢中だったころ子供心にも、自分には一生こんな大旅行は不可能だと胸を涙でいっぱいにするほどの悲しい諦めを感じていたのだった」と回想することには、このような「安保闘争」の遺産の背景があると言える。

*

先にも述べたとおり、戦前戦中の帝国主義の復古、新植民地主義の戦争への参戦の危険性に対する反帝国主義的反戦意識が、安保闘争を可能にした原動力であった。「ほとんど全世界を旅して故郷の北海に戻る」オーリイをめぐる「おれ」の回想では、こうした反戦意識の警戒の対象が、そのまま再構築されている。『われらの時代』における「世界地図」のモチーフや、「地図作成」という方法から述べると、新安保条約の承認をもって日本は、「第三世界」＝「南」から孤立し、世界地図の「北の西側」に配置されるようになったと言えよう。この二部作全体を貫いている孤立・孤独のモチーフには、「第三世界」からの孤立、「デザンガジュマン離脱」による孤独という意味合いが盛り込まれているのである。

V.3.6 「中国体験」と安保闘争の敗北——「第三世界」に一時的接近と「第三世界」からの「デザンガジュマン離脱」として

ここでは、大江が、新安保条約の承認やそれに付随する保守化を、日本の「第三世界」からの「デザンガジュマン離脱」の過程を決定的にした転機として受け止めたことが明らかになる。こうした否定的な『第三世界』と日本」をめぐるヴィジョンは、進歩党の委員長暗殺直前の演説に関する挿話に、もっともヴィヴィッドに現れている。この挿話は、演説の直接の引用と言うより、「おれ」のテロル事件をめぐる情報を手紙の形で集約した書き手の解釈の形式を取っている。

かれは演説者としての自分を信じていないように見える。(中略) 委員長はあたかもこう考えているかのようである、《次の選挙にもいつものように敗けるだろう、国会ではまた完全に無力であることだろう、そして実業家は欲望と傲慢な自信にふくらんで、日本の経済を推進し、何千万の農民とサラリーマンは勤勉に愚鈍に無力に消費的に、そしてみみっちい電化生活願望にあけくれ、与党政治家は金権と派閥というハンディをぶらさげながら、ただひとつ現状維持の線をそれないようにつとめてその他はすべて有能で出世主義で時代感覚ゼロの官僚にまかせてしまい、野党政治家は負けを承知で国会のなかに坐りこみ国会の外のデモ隊の声援をわずかに聞く。》⁴⁰⁶

安保闘争の敗北以後の保守的な雰囲気に対する作者のこの否定的かつ悲観的なヴィジョンは、1955年の「保守合同」に始まり、安保闘争によって一時的に「保留」された日本の社会や政治のレベルにおける保守化の過程を見事に予見したものとなっている。この手紙の書き手による解釈の後半は、安保闘争の敗北以後の日本の進歩派が捕獲された「政治的な離脱」と結びつく。⁴⁰⁷親・新植民地主義的な保守派による、進歩的な「魂」の失効や「排除」による不毛な環境、つまり、「進歩派」の「正真正銘性」の喪失の現象は、委員長の中国訪問との関係性において次のように総括されている。

《そして文化人は手を汚さずに我々を応援するだけで満足し、我々もかれらを本当に苦しい所では頼りにせず信用しないだろう。どこにも真に左翼の魂をもった者はいず、どこにも我々の真の味方はいないだろう、なぜならおれ自身、数十年の運動のあと、自分のなかに真の左翼の魂をもっていると感じられない瞬間がたびたびあるのだ、現にいまがそうだ、あれは左翼の怒りを怒っていない。ああ、中国大陸の人民共和国！ あそこには左翼であることを現実化した六億の民がいた、その指導者とお

⁴⁰⁶ 大江健三郎、「政治少年死す」、36～37頁。

⁴⁰⁷ 例えば、松井隆志が指摘するとおり、A級戦犯岸信介の政策や特に強行採決は、「戦前・戦中回帰＝復古反動」として受け止められ、安保闘争の高揚において巨大な爆発力となった。しかし、「安保闘争」以降、岸が辞任し、池田の経済（所得倍增計画）に重心をおいた政策の結果、戦争・貧窮への被害者意識の希薄化の作用もあって（新旧左翼の分裂においても明らかであるように）安保闘争を主導した「指導部」は分解していったのである。「その意味で、安保闘争は『戦後革新』の頂点」として位置づけられる。（松井隆志、「六〇年安保闘争とは何だったのか」、137頁）

れとが、アメリカ帝国主義は日中共同の敵だと声明したときの熱情は、いまおれの激しい声にもっていない。ああ、湿地帯日本、おれは独りぼっちで虚しく、ぞっとするほど通俗で凡庸な、バナールな演説をする！ 九千万日本のだれも本気で聞いてはいはしない》⁴⁰⁸

「ああ、中国大陸の人民共和国！あすこには左翼であることを現実化した六億の民がいた」と悲歎する進歩党の委員長は、「南」＝「第三世界」としての中華人民共和国を、「本物の」進歩主義の中心地として規定する。なお、「その指導者と」彼とが、「アメリカ帝国主義は日中共同の敵だと声明したときの熱情は、いまおれの激しい声にもっていない」という委員長の言葉は、浅沼稻次郎の二回目の中国訪問（1959年3月）の際におこなった「米帝国主義は日中両国人民の敵である」と題された講演への言及である。⁴⁰⁹

⁴⁰⁸ 同上書、37頁。（傍点は引用者による）

⁴⁰⁹ この講演は、日本社会党の「祖国日本の完全独立と平和、さらにはアジアの平和」をめぐる見解を基軸にしている。「セヴンティーン」において大江はこの「第三世界論」的なアプローチを強く意識している。つまり、「セヴンティーン」における安保闘争前後の日本の保守政権や社会の保守化に対する批判のヴィジョンの構想の根底にある主な論点のひとつは、このテキストなのである。

このテキストは、アメリカ合衆国が主導する新植民地主義やそれと日本の従属関係を強化しようとする岸信介が主導する親米・保守政権への批判を中心にしている。浅沼のテキストにおける「第三世界ナショナリズム」的雰囲気濃厚さは、次に引用した始まりの部分においても見てとれる。浅沼は、毛沢東の「東風が西風を圧倒する」というスローガンを引用し、この言葉にあらわされる内容がもはや「中国のみでなく世界的」なレベルで「アジア、アフリカにおける反植民地、反帝国主義の高揚は決定的な力となった大勢を示し」という。なお、極東では、新植民地主義体制下の半植民地にされた中国の地政学的文脈においては台湾、および日本の地政学的文脈では沖縄を、また両島に設置された米軍基地における核武装化の問題を、日中の共通の帝国主義に対する問題として位置づけている。

「(中略) いま世界では、平和と民主主義をもとめる勢力の増大、なかんずくアジア、アフリカにおける反植民地、反帝国主義の高揚は決定的な力となった大勢を示しています。(拍手) もはや帝国主義国家の植民地体制は崩れさりつつあります。がしかし極東においてもまだ油断できない国際緊張の要因もあります。それは金門、馬祖島の問題であきらかになったように、中国の一部である台湾にはアメリカの軍事基地があり、そしてわが日本の本土と沖縄においてもアメリカの軍事基地があります。しかも、これがしだいに大小の核兵器でかためられようとしているのであります。日中両国民はこの点において、アジアにおける核非武装をかちとり外国の軍事基地の撤廃をたたかいとるという共通の重大な課題をもっているわけであります。台湾は中国の一部

しかしここには、中華人民共和国との連携を意図した浅沼ないしは日本社会党の中国体験というよりも、むしろ大江自身の中国体験の作用の方が濃厚であろう。大江は、1960年5月30日に野間宏、竹内実、亀井勝一郎、開高健、松岡洋子、白土吾夫らをも含む「第三次日本文学代表团」のもっとも若い団員として中国に渡り、一ヶ月にわたって中国に滞在した。つまり、大江が安保闘争の高揚を経験したのは、海外の中国の「地」においてであったのだ。

中国訪問の前にも、大江は、作家、芸術家やジャーナリストによって結成された「安保批判の会」や進歩的な文化人からなる「若い日本の会」の一員として抗議や集会に「参加」^{アンガージェ}していた。しかし大江の安保闘争に対するパースペクティブを一変させたのは、闘争の最盛期を外国のメディアをとおして経験することになった非同盟運動の中核としての中国への訪問であった。

「見るまえに跳べ」や『われらの時代』において「第三世界」への旅の渴望を抱えた日本青年を描いた大江にとって、これが初めての海外旅行であった。半植地的な位置から解放され、「北」の（東側）＝「第二世界」の衛星国的な束縛を突破しつつある中華人民共和国の青年が放つ「正真正銘性」^{オタンテイシテ}の雰囲気は、「北」（の西側）としての「第一世界」から訪れた大江を感銘させた。

中華人民共和国出身の大江研究家の王新新は、安保闘争の最盛期を中国訪問中に経験したことの大江への作用を分析する。王によれば、中国体験には、日本が「性的人間の国家と化し、強大な牡アメリカの従属者として屈服し安逸を享樂している」という初期文学作品における大江のヴィジョンを再確認する契機だった。例えば、大江は、中国外交部長に会ったときに、このことを次のように表現している。

「私は頹廢した無気力の青年をえがくことで文学的出発をしました。私は、現代日本の青年のもっとも典型的なパターンとしてそれをえがいてきました。（中略）それが日本の現実だと思えたからです。そして中国をおとずれた私が理解したのは、たとえばかつて外国人の足の下で泥にまみれていた上海の青年が、いまやいかに希望にみちているのかを見て理解したのは、こういう青春の頹廢が、外国軍の日本駐留に本質的に原因している、ということです。私は、たびたび、日本にいる外国人との

であり、沖縄は日本の一部であります。それにもかかわらずそれぞれの本土から分離されているのはアメリカ帝国主義のためであります。アメリカ帝国主義についておたがいは共同の敵とみなしてたたかわなければならないと思います。（拍手）」（日本社会党、『資料日本社会党四十年史』、日本社会党中央本部、東京、1985年）

関係においてこういう青年をえがきましたが、それは正しかったと思います。」⁴¹⁰

王によれば、帝国主義の圧迫から自らを解放することに成功した「中国は、真の独立した国家の代名詞として大江健三郎に記号化された。また『中国をおとずれた』ことがきっかけで、大江は自分の時代的把握が『正しかった』ことも確認できた」のである。王の認識を本論文の批評的なカテゴリーに位置づけし直すと、中国体験は、大江による日本の地政学的な世界地図への「再配置」の有効性を確認する良い機会であったと言える。

王も指摘するとおり、1949年の中華人民共和国建国後の「中国の主要任務」であった社会主義建設の過程は、「反右派闘争」⁴¹¹などを中心に、人権を侵害し言論の自由を制限する形でおこなわれていた。このような欠点があるにもかかわらず、中国を訪問した際に大江を魅了したのは、中国の青年に漂っている帝国主義から「自立」したという達成感による解放的な雰囲気だった。日本の青年としての大江は、中国の青年において、帝国主義的圧迫や搾取からの「解放」や「自立」による「誇り」の感覚を見いだしたのである。

1960年の春から中華人民共和国のメディアは、日米安保改定の締結に逆らう日本社会の動きを網羅的に報道するようになった。中国共産党中央機関紙である『人民日報』^{レンミンリャobao}を例に挙げると、一日八面の紙面のうちの一面から二面程度で日本の安保闘争を報道し、頻繁に社説においても取り上げたのだ。当時の中国メディアの言説では、東アジアにおける日本・[南]朝鮮・ヴィエトナム共和国、そして、西アジアのトルコ共和国における反米／反・親米保守政権闘争は「世界反植民地主義闘争の一部」と見なされていた。また中華人民共和国のメディア空間が焦点化するこれらの闘争は、中国の学生たちをはじめとする中国国民の大半によって「他人事」としてではなく、自国との関係において考えられ、支持されていたのである。

「北京のホテルで、たちまち乾燥してしまう汗をたえまなく流しながら」、^{レンミンリャobao}『人民日報』における安保闘争の高揚をめぐる報道を読んだ大江は、「現在から未来にむかうベクトルのはっきり正面にでているアクチュアルな歴史観が、い

⁴¹⁰ 「同時代への再啓蒙」、王新新、『再啓蒙から文化批評へ：大江健三郎の一九五七～一九六七』、東北大学出版会、仙台、2007年、88頁。

⁴¹¹ 「反右派闘争」とは、1950年代や1960年代初頭に断続的におこなわれた中国共産党の政策に批判的な知識人を摘発する政治運動のことである。主に知識階級に属する文化・教育・報道部門の幹部が「右派分子」として追放された。1970年代後半において共産党中央は運動の過剰さをめぐる自己批判をし、名誉回復を試みた。

かに日本の政治問題をあざやかにとらえるか、ということに最も興奮させられていた」のだった。「第三世界」＝「南」としての中華人民共和国において、中国語による自国日本をめぐるこうした報道に曝され、大江はそれ以前の自らの「第三世界と日本」のヴィジョンを一変させる。大江は、『われらの時代』において、世界文学の一連のテキストの脱文脈化をとおして、日本を「世界地図」の「第三世界」の部分から消去したのであったが、中国における「安保闘争」の経験を媒介に、大江のこのようなヴィジョンが一時的に変化したのである。

大江は、中華人民共和国が「自立」したことにより得た「^{オタンテイシンテ}正真正銘性」を、日本においても「安保闘争」をとおして獲得できるかもしれない可能性に希望を持つようになったのだ。これは、日本が中華人民共和国が主導する自立した「アジア・アフリカ」という「第三世界」に加わることへの希望であった。アルジェリア戦争の時代の文脈において『^{レンミンリベオ}人民日報』や大江のみならず、サルトルのような「第三世界論」の理論家も、「安保闘争」が全世界に展開されている「第三世界」運動の一部であると見なしたのである。しかし、韓国（反・李承晩政権）、トルコ共和国（反・メンデレス政権）や後のアルジェリア（反ド・ゴール政権）における他の反・親米保守政権（そして反仏）の闘争と異なり、安保闘争は、反民主主義的な強行採決に次ぐ岸首相の辞任によって敗北に終わった。

つまり、中国訪問という体験や中国での安保闘争の経験を契機に、大江が（アジア・アフリカとの連携に基づく）日本の「^{オタンテイック}正真正銘」な自己同一性の探求として位置づけた「安保闘争」は、敗北に終わったのである。本論文の文脈から言うと、日本を（中華人民共和国やアルジェリアのような）「南」＝「第三世界」に一時的に近づけ、世界地図の「第三世界」の部分に配置させる可能性さえ孕んだ運動が断絶されたのだ。日本は新植民地主義とさらに密接な関係を結び、体制内の位置を昇格させていく展開となった。『われらの時代』の「地図作成」の延長線上にある「セヴンティーン」における「^{マッピング}地図作成」作業は、大江が「第三世界論」的な希望を抱いた「安保闘争」の敗北体験による産物であると言えるのだ。

以上呈示したとおり、大江は、「セヴンティーン」において、日本の安保闘争敗北以降のアメリカニゼーションと保守化を把握し表現するうえで、「おれ」というアメリカニスト兼極右のテロリストを登場させている。この「鬼」ないしは、「^{モンスター}怪物」のモチーフを「アルジェリア戦争の時代」という同時代性を背景に、さらに深化させ展開した作品が『叫び声』である。

V.4. 『叫び声』における「^{モンスター}怪物」のイメージとサルトルの「ファ

ノン論」

V.4.1 ダリウス・セルベゾフの遠洋航海という奇妙な計画

『叫び声』(1962年11月)は、大江が「アルジェリア戦争の時代」を背景に「第三世界と日本」の問題を扱った一連の小説の最後に当たる作品である。『叫び声』には、共同生活を送っている四人の「準ヒーロー」が登場する。第一の準ヒーローで小説の語り手でもある「僕」は、高校生の時に性交渉を結んだ高校生相手の娼婦に性病をうつされたのではないかという「妄想」に取り憑かれているためつねに血液検査をうけたがっているという梅毒恐怖症の大学生である。「僕」の心気症的な「妄想」に特別な関心を抱いた大学の学生診療所の医師は、「僕」が妄想と一緒に住んできた場所=「日本」から出て行くことを薦める。その際に医師は、「日本人青年を三人だか四人だか乗組員として動員し、彼らを現在建造中のヨットで、ヨーロッパ一周の遠洋航海に連れ出す計画をたてている」、また「癲癇もちで医師のところへ通ってきている」ダリウス・セルベゾフというブルガリア系アメリカ人の青年を「僕」に紹介するのだ。

医師によると、(第二の準ヒーローである)ダリウス・セルベゾフは、国連軍の兵士として朝鮮戦線に派遣されたが、戦場で幼年時代に完治したはずの癲癇の発作が再発してしまい除隊させられ母国に送還されたのだという。帰国後父親に死なれたダリウス・セルベゾフは、遺産の金で、日本に渡り、ヨットを組立て、そのヨットで日本人の不幸な青年を「救済してヨーロッパ一周のヨット旅行」に連れ出す計画を立てたのである。「[彼は]朝鮮の戦場での謎の体験が、癲癇とともに、そいつにもたらした聖者の使命感にゆりうごかされている」⁴¹²と医師は説明する。つまりダリウス・セルベゾフのこの奇妙なチャリティーの企画は、彼の自国が関与した朝鮮戦争による「罪悪」を「償う」ための懺悔行為なのである。しかし「聖者の使命感」の「偽善」が、彼が障害者の青年に性的暴力をふるう加害者になる事件により暴露されてしまう。

医師を仲介に「僕」は、「歴大なアメリカ百科事典」を売るために東京都内だけではなく地方へまで勤勉にでかけることを仕事にしているダリウス・セルベゾフと知り合い、彼が借りている洋館に住むようになる。後に残りの二人の準ヒーローである「虎」と呉鷹男もこの共同体に参加する。「六本木や銀座、そして夏の軽井沢などで有閑夫人」⁴¹³相手の「ジゴロ」を生業にしている「虎」は、「アメリカ・ネグロ」の父親とアメリカ合衆国の日系移民の母親との「混血児」

⁴¹² 大江健三郎、『叫び声』、21頁。

⁴¹³ 同上書、24頁。

である。サンフランシスコで生まれたが、第二次世界大戦勃発直前に、家族で日本に居を移すことになったという。戦中、アフリカ系アメリカ人の父親は捕虜扱いされ、戦後日本を去り、行方不明になった。虎の父は日本を去る前にアフリカへ行くと言っていたが、母親は、彼がほんとうはアメリカ合衆国に帰国したのではないかと疑っている。「虎」は、横須賀の保護施設に入れられ、そこを出てダリウス・セルベゾフの主導する共同体に参加するまでに、しばらく「キャンプ」＝米軍基地で働いた経歴を持つ。アルコール依存症であり、「アフリカ系アフリカン・アメリカン・ジャパニーズアメリカ系日本人」といった重層的な自己同一性を持つ「虎」は、自らの民族的自己同一性アイデンティティともかかわっている「アフリカ」に渡ることを渴望している。この渴望の影響もあり、ヨットでの遠洋航海の目的地が、ヨーロッパからアフリカへと（方向）転換されることになる。

共同体に最後に参加する第四の「準ヒーロー」呉鷹男は、朝鮮人を父親に、日本人を母親に持つ、「虎」と同様な「混血児」である。彼の父親もおそらく人種差別的な傾向を持つ母親に虐められたため行方不明になっている。後に父親は北海道でドロップ・アウトの生活を送っていることが判明するが、呉鷹男は、父親をドロップ・アウトの生活に追い込んだ母親に朝鮮人の「混血児」である事実を隠しとおすようにしつけられて育った。「虎」がアルコール中毒という中毒症をわずらっているように、呉鷹男は、「自瀆中毒」＝「自瀆常習者」である。なお、呉鷹男も「虎」のように、アフリカとのかかわりがある。彼は、「アフリカ人の哲学者」と呼ばれることになったサルトルの愛読者であり、サルトルをフランス語で読み、小説を書く夢をもっているのだ。

ダリウス・セルベゾフの借りている洋館で共同生活を営む「僕」以外の三人は奇怪な（性的あるいは物理的な）暴力事件にそれぞれ巻き込まれていき、徐々にこの共同体は崩壊していく。発端は、ダリウス・セルベゾフが「知恵おくれ」の少年を神戸のホテルの部屋に監禁し、その少年に性的かつ物理的暴力をふるう暴力事件である。メディアにおいても注目されたこのスキャンダルの結果、ダリウス・セルベゾフの——「喝采」の F 大使館ベドフィリアの外交官リュシアンベドフィリアのそれに照応する——黄色人種のアジア人の少年に対する少年愛という倒錯が共同体のメンバーの知るところとなる。彼は、日本を立ち去り、渡欧する。こうして、セルベゾフが組立てようとしているヨット＝友人たち号でのアフリカ遠洋航海の計画は、重大な打撃を受けることになる。

本論文の批評的カテゴリーに従って言うとはブルガリア系アメリカ人のダリウス・セルベゾフは、「疑似怪物」モンスター＝「鬼」として構想されている。また、彼のみならず、「アフリカ系アフリカン・アメリカン・ジャパニーズアメリカ系日本人」の「虎」や朝鮮人と日本人の「混血児」である呉鷹男それぞれみな「怪物」モンスター的な準ヒーローである。大江は、このようにサルトルの *monstre* のイメージを自作において生かすという「方法」を

『叫び声』でも持続させているのだ。

V.4.2 「虎」の奇怪な行動

ダリウス・セルベゾフが、友人たち号でのアフリカ遠洋航海の計画から「離脱」し、「龐大なアメリカ百科事典」販売の金銭的な援助がなくなると、共同体は、経済的に窮屈な状況に追い込まれてしまう。そこで呉鷹男が、500台の古ぼけたラジオを、韓国に密輸するという新たな計画をたてる。この計画へ行き着いた過程を簡単に述べると、ダリウス・セルベゾフの性暴力事件取材したスキャンダル・メディアの週刊誌記者が、四人の共同生活を「ホモ・セクシュアルのハレム」⁴¹⁴と記述したことに憤激した「虎」が砂をつめこんだウィスキーの瓶で記者の後頭部を打撃するという暴力事件をおこし、呉鷹男が「虎」の身代わりになって自首する。呉鷹男は拘置所にいた時、同房の朝鮮人に、金儲けの方法のヒントをもらう。それは「古ぼけた真空管ラジオ」を500台蒐集し、南朝鮮に密輸するというものである。呉鷹男の計画とはこの「奇妙な仕事」で獲得した金を資金に、ヨット友人たち号を仕上げ、それに四人で乗り込んでアフリ

⁴¹⁴ 大江は、この小説において、「喝采」で扱った「男同士の絆」、「ホモソーシャル」のモチーフを再登場させている。「喝采」の場合は、同性愛を排除しないホモソーシャル関係が扱われていた。また、『われらの時代』では、高と元米兵、現・実業家のジミーの間に同様なホモセクシュアルとホモソーシャルな「絆」が交叉する関係の反面、鷹は彼が属するジャズ・トリオの共同体では、同性愛の男娼という真実が発覚することを死ぬほど恐れていた。また、第一章で呈示したように、「見るまえに跳べ」の「ぼく」と、外国誌の特派員のガブリエルは、互いに対する隠された同性愛的欲望を共有していた。

大江は、『叫び声』で、ダリウス・セルベゾフの奇怪な性暴力事件取材したスキャンダル・メディアの週刊誌記者に、四人の「共同生活」を「ホモ・セクシュアルのハレム」と記述させるが、この同性愛者の「ハレム」のイマージュは、「見るまえに跳べ」、「喝采」や『われらの時代』におけるホモソーシャルな「男同士の絆」のモチーフの延長線上にある。

さらに大江は、『叫び声』においても、「見るまえに跳べ」のガブリエル、「喝采」のフランス大使館の外交官リュシアン、『われらの時代』のジミーと同様に、「周辺世界」に対する（新）植民地主義的経済政治的支配態を体現するダリウス・セルベゾフのアジアの少年・青年に対する欲望を抱いている。小説の前半における友人たち号の乗組員の三人の青年のセルベゾフに対する「愛情」も、「見るまえに跳べ」の「ぼく」、「喝采」の「夏男」や『われらの時代』の鷹の場合でもそうだったように、彼らの外国人のスポンサーに対する経済政治的依存に動機づけられるものである。

カに向かうというものである。

歴史的な観点からすると、日本が、電気製品の輸出大国になっていく過程で、ラジオが重要な位置を占めたことは周知のとおりである。ラジオ輸出が本格化するのには、1950年代後半においてであり、呉鷹男の計画は、このような時代背景と重複オーヴァーラップするものである。大江の念頭にはこの計画の仕掛けを動員する事によって、「新植民地主義」体制に組み込まれた日本が、その体制下において独自の位置と役割を持つようになるという現象を捉えることがあったであろう。

またこの計画には、一定の「第三世界論」的なヴィジョンも含まれている。例えば、密輸先の南朝鮮への「航海図」は、瑠瑠瑠水道ごようまいをわたっていくことに基づいているが、その場合、南朝鮮でなく、北朝鮮かソ連領土の「シベリア」に流れつき、強制労働に従事させられるのではないかという「僕」の疑問に対し、呉鷹男は自信にみちて次のように答える。

「いや、いや、そういうことはない、おれにまかせておいてくれたら、そういうことはない」(中略)「もしもだよ、おれたちの五百台のラジオをのせた船が北朝鮮についたら、おれたちはその五百台のラジオを金日成將軍と人民諸君にささげにきたのというんだな、そしておれたちは北朝鮮の人民共和国にくみこんでもらうことにしよう。日本にいるよりはいいだろう？ もちろん虎は不満だよ、しかし北朝鮮にはアフリカの独立国からいろんな黒い連中が会議にきているからね、そいつたちに連絡して、結局、虎は、はるばるとアフリカをめざして旅立つのさ」⁴¹⁵

ここで呈示されている海図であるが、一行には新植民地主義的経済政治方針に基づく「航海図」と、「第三世界論」的な経済政治方針に基づく「航海図」どちらかを選ぶことが出来たのだが、「第三世界論」的な経済政治方針に基づく「航海図」を選択している。ここで「僕」は、呉鷹男の計画に懐疑的であるが、それは呉鷹男が過去に失敗に終わった北朝鮮への密航未遂を体験しているからである。「呉鷹男は十六歳の冬に、アルバイトをしてつみたてた金をおろして、東京、北海道間の、切符を買い、そして根室のノサップ岬から盗んだ伝馬船てんませんに海図も磁石もなく、ひとりぼっちで乗りこんで荒れくるう海に向かった」のだった。「そして瑠瑠瑠水道ごようまいをやみくもに押し流されているところを鳥賊いかつり船に救助された」という荒唐無稽な体験なのである。そのとき呉鷹男がむかっていたのは、北朝鮮ではなく、アメリカ合衆国であった——「かれはいつのまにか太平洋にむかっていたのだった。そして漁師たちが海鳴りにさからう大声で、か

⁴¹⁵ 大江健三郎、『叫び声』、107頁。

れに、いかに怪力で漕いだとしても朝鮮にはたどりつけなかつただろうことをおしえてくれた」。⁴¹⁶

結局呉鷹男のこの計画は、朝鮮人の仲介者に騙された結果、徒労に終わってしまうのであるが、この挿話は、共同体の「第三世界論」と入り交じって相互作用しているアメリカニズムを証拠付ける一例だ。そのことは三人のダリウス・セルベゾフへの愛情においても明らかである。三人の日本の青年は、広義の「第三世界論」的「政治的な参加」^{アンガジュマン}を意図し、何度も試みるのであるが、いつも保守的なアメリカニズムの穴ぼこに陥ってしまうのだ。「虎」の父親は、戻って来ると約束してアフリカに渡ると言って出発したが、母親は彼がアメリカ合衆国に帰還したと疑っている挿話にはすでに触れたが、三人が「第三世界」を目ざしながら、つねに、そこから離脱し、「第一世界」の中心指向的な渦巻きに巻き込まれてしまうという展開は、小説の様々な部分において反復されている。この「政治的離脱」^{デザンガジュマン}に終わる「政治的な参加」^{アンガジュマン}の試みは、ナセル主義をめぐる挿話においても反復される。

真冬になると、共同体の生活はさらに窮屈になる。彼らは、ダリウス・セルベゾフに経済的な「援助」を要求する手紙を送ろうとするが届かない。そこで、「僕」は家庭教師を、「虎」と呉鷹男は、呉鷹男が「虎」にならって「ジゴロ」としてかかわっている「中年の情人」の「古いオースチン」を借りての「もぐりタクシー業」を営まざるを得なくなる。窮境におかれた三人を精神的な面で復活させ、高揚感をも与えたのは、「第三世界」における反帝国主義的戦争への「義勇兵募集」という根拠のない「噂」だった。

「その冬、エジプトでは戦争がおこっていた。アラブ人の百姓たちは敵の飛行機から砂漠の発電所をまもるために、いわば砂袋のように建物の屋根にその軀を横たえた。ナセルは世界中に義勇軍を要請した。僕の大学にも、エジプトゆきの兵士たちがひそかに募集されているという噂がつつわり大騒ぎになった。僕はその噂を、共同の家にもちかえると、鷹男と呉も、ノアの箱船の噂をきいた獣たちみたいに興奮した。翌日、僕ら三人は大学じゅうを駆けずりまわって噂の出所をさぐった。しかし、夕暮れまでにはその噂が、英文科の暗く激しい情念と栄養失調で頭のなかに抽象的な脳腫瘍^{しゅよう}をひとつ作った青年の欲求不満からの、危険な噂にすぎないことがわかった。そこで僕らは、僕の大学に流行の熱病のように、国外脱出の気分がみなぎっていることをあらためて知った。そうであれば、エジプト義勇軍^{とっぴ}というような突飛な噂が、ガソリンをかけた

⁴¹⁶ 同上書、28頁。

稲塚に投げこまれる一本の松明たいまつのような具合に、たちまち学生たちの群衆をひとつの炎でおおいつくすといったことはおこらなかったにちがいない。」⁴¹⁷

スエズ侵攻とナセル主義の問題には以前にも触れたが、当時の日本ジャーナリズムや進歩的な環境に発現した「第三世界ナショナリズム」＝エジプトの被圧迫民族への共感シンパシーの雰囲気には、日本の不毛な政治的環境から遠ざかりたいという願望の影響が大きかったという、「第三世界と日本」をめぐる大江の視点がこの個所において呈示されているのである。つまり、「僕」たちのこの「参加」アンガジェマンへの欲望も、「正真正銘」のものではなく「疑似」オタンテイックのものなのである。

「僕」が家庭教師のバイトの最中に喀血し、「重症の肺結核」でサナトリウムに入院させられた後、「虎」と呉鷹男による「銀行強盗未遂」の挿話が続く。「第三世界論」と「アメリカニズム」の間に揺らいだあげくに、アメリカニズムの穴ぼこに陥るといふ循環に、ここで新たな展開が生じる。「僕」は、車でサナトリウムに連れて行かれる途中、共同体やヨット建造・アフリカへの遠洋航海の計画から「離脱」デザンガージュしたことに、むしろ解放感を抱いていた。車で移動しているあいだ「僕」は、後に取り残されて憂鬱なふたりに「共同の家と友人たち号」レ・ザ・ミのことについて、それが僕の最大な関心事であるかのように情熱をこめて話す。クリスマス頃にダリウス・セルベゾフから、三人を呼び寄せるための「パン・アメリカン」の航空券が届くだろうと励ましの言葉もかける。「僕」のこの保守的な慰めの言葉は届かず、「虎」は、ヨット完成に向けた資金調達のために、黒人兵になりすまして、横須賀の銀行を強盗する計画の話を持ち出してくる。「虎」が横須賀を選んだのは、「あすこが基地でアメリカのばかな黒んぼの兵隊がうようよいるから」であり、彼が「アメリカ兵みたいな外套を着て、合成樹脂の自動小銃をかかえて」銀行強盗を行ったら、警察などには「自暴自棄の黒人兵だ」と思われるはずだという。警察が犯人を黒人兵だと信じこみ、彼らが疑われることがないため、この犯罪行為は安全に済ますことができるということだ。「僕」がこの計画を、「荒唐無稽」なものだとして非難し、やめさせようとするのにもかかわらず、二人の青年はこの計画に夢中になっていく。

ある朝、「虎」と呉鷹男は、「銀行強盗」の実験のため、車で横須賀に向かう。横浜の放出物資屋でアメリカ兵の外套と戦闘靴を、そして、百貨店の玩具売場にて合成樹脂の自動小銃を購入する。彼らは「祭り気分」にとらわれ、徐々に高揚していく。ウィスキーに酔った「虎」は、「どれほど黒人兵」に似ているかを実験したくなる。車の中に坐ったまま、横須賀でパトロール中の日本人の警

⁴¹⁷ 同上書、126頁。

官たちを挑発しようとしたりする。この様子が白人の米軍憲兵ふたりに見破られ、これに呉鷹男も、「虎」も気がつく。しかし、「虎」は、「どれほど黒人兵」に似ているかの実験という奇妙な遊びをやめて外套を脱ぎ「疑似」の自動小銃を放り込むかわりに、かえってオモチャの武器をふりかざしながら路地に駆け込んでいきアメリカの憲兵と日本の警官たちに追いかけるようになる。アメリカの憲兵の威嚇発射に挑発され、「オモチャの自動小銃を脇にかまえ、まさに真の虎のように憤怒し、憲兵たちと警官たちにむかって走りはじめ」⁴¹⁸たすえに、四人から発射され撃ち殺されてしまう。

「虎」をこのような奇怪な行動に駆り立てた主な動機は、日本人という自己同一性アイデンティティのカテゴリーからも、アメリカ人というそれからも排除されるという二重の他者化であった。彼は、アメリカ合衆国国内における「第三世界」問題として考慮されるようになった、制度的な差別の対象にされてきた「アフリカ系アメリカ人」の反体制・反社会的な暴力行為を模倣する形式を取るようになる。しかし合成樹脂の＝疑似の武器をもって遂行されたこの幼稚な行為は、「自暴自棄」且つ「性的」で奇怪な行為に他ならない。「虎」も、セルベゾフと同様に、疑似「怪物」モンスター＝性的な「怪物」モンスター特有の奇妙且つ奇怪な行動をおこしたため共同体から離脱してしまったのだ。

そのあと、呉鷹男は事件のいきさつを「僕」に語るため、サナトリウムを訪問する。「虎」の射殺の知らせにショックを受けた「僕」は、異常な憤慨にとらわれ、「虎」を守ることに失敗し、彼を見殺しにしてしまい、彼を撃ち殺した日本人の警官やアメリカ白人の憲兵に異議申し立てをすることすらできなかった呉鷹男を呪う。

「出て行け！おまえは、もう仲間じゃない、敵だ、お前こそ撃ち殺されればよかったんだ、あいつは可哀相にアフリカの空をみることもできないで、横須賀なんかで死んだんだ！おまえは、怪物だなどといって、本当は、ただの不満屋じゃないか、なんでもないげすじゃないか！虎だけが本当の、友人たち号の乗組人レ・ザ・ガミにふさわしかったのに。出て行け！ 出て行かないとおれが殺してやる！」⁴¹⁹

ヨットで遠洋航海に出るという共通の意図を持つ四人の青年によって結成された共同体はこの段階では取り返しがつかないほどに崩壊している。「呉鷹男は僕」の呪いをとおして「疑似怪物」モンスターとして規定されることになった。「僕」に

⁴¹⁸ 同上書、132 頁。

⁴¹⁹ 同上書、133 頁。

「疑似怪物^{モンスター}」、換言すると「不満屋」や「なんでもないげす」として呪われ、差別され、侮辱を受けた呉鷹男は、「正真正銘^{オタンティック}」な「怪物^{モンスター}」へ「変身」することを決心する。

「虎」は、『われらの時代』のジャズ・トリオを彷彿とさせるような存在である。「虎」も、ジャズ・トリオと同様に、アメリカ合衆国の文化（例えばジャズ）やミリタリズムに対しフェティシズム的な関心を抱き、それを模倣する欲望にとらわれている。「虎」も、ジャズ・トリオのように、こうしたフェティシズムと密接不可分な悲喜劇的な暴力に巻き込まれ、自己破壊して行く「疑似怪物^{モンスター}」、「疑似テロリスト」として構想されていると言える。

しかし、『われらの時代』に初めて登場し、「セヴンティーン」においてさらに展開され、深化された、「疑似怪物^{モンスター}」というイマージュにもっとも照応する作中人物は、呉鷹男なのである。それは、『叫び声』の四章の題名が「怪物^{モンスター}」として設定されていることから明白である。そして、この設定との関係性において論述しなければならないのは、大江が『叫び声』における「怪物^{モンスター}」のイマージュの構想にあたって、サルトルの「フランツ・ファノン論」における「怪物^{モンスター}」のイマージュを強く意識していることである。

V.4.3 『叫び声』とサルトルの「ファノン論」における「怪物像^{モンスター}」

フランス領西インド諸島のマルティニーク出身の精神科医であり、「第三世界」理論家でもあるファノンは、宗主国フランスの精神科医として赴任したアルジェリアで病院に勤務していた頃にアルジェリア解放戦争に共感するようになり、病院を辞して *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* に参加した。彼はアルジェリア解放戦争に、理論家として、あるいは（アルジェリア共和国臨時政権の）外交官として積極的に貢献した。アルジェリア解放戦争の体験をもとに書いた *Les Damnés de la terre*=『地に呪われたる者』(1961年)という「第三世界論」は、西洋や「第三世界」の進歩派によって高く評価され、1960年代以降の「第三世界」民族解放運動やアメリカ合衆国のアフリカ系アメリカ人による解放運動などの主要な参考書となった。被植民者と、植民者の精神分析をとおしてヨーロッパ文明に対する根源的な批判を打ち出したこの書でのファノンの論点のひとつは、西洋諸国による植民地体制において「暴力」がもっとも根本的な要素であり、被圧迫民族の政治的、精神的な解放のうえでは、反植民地主義的な革命精神による「暴力」のみがその解毒剤となりうるということである。

ファノンによれば、植民者=*colonisateur* と被植民者=*colonisé* を相互に結びつけ、両者を解放する潜在力を孕んでいるのは、「暴力」そのものである。アルジ

エリア解放戦争において明らかであるとおりに、「脱植民地化」= *décolonisation* は「民族解放、民族復権、国家を再び人民の手へ、コモンウェルス等々、いかなる名称が使用され、いかなる新表現が導入されようとも」つねに「暴力的な現象」⁴²⁰である。またこの暴力的な現象は、被圧迫民族にとっての一定の「イニシエーション」のようなものである。つまり、「新たな人間」= *homme nouveau* の創造への過程、換言すると、植民地主義的な圧迫のすえに「物」に還元された被植民者^{コロニゼ}が「人」に変貌し、「新しい人として再生する」過程なのだ。ファノンはこの過程を「観客」から「特権的な俳優」への転換として位置づけている。ファノンは同じ書の第三章において「原住民の市民化」= 脱植民地化の過程を、被圧迫民族の「見られる人間」= 「物」から、「見る人間」へのイニシエーションの過程として位置づけている。この「被圧迫民族」から解放された「新たな人間」への「イニシエーション」の過程において、不可視化されてきた原住民=被植民者^{コロニゼ}は、「暴力」= 「流血」によって自らの「存在」の「^{オダンテイシテ}真正銘性」を——『われらの時代』における真紅にぬられることによって強調される仰々しい世界地図の「アフリカ」部分のように——植民者^{コロニザテュール}の眼に *monstrare* = 「明視」し、無理矢理に認めさせる *monstre* に変身する必要があるのだ。

しかしファノンは *Les Damnés de la terre* = 『地に呪われた者』において *monstre* という言葉をただ一回のみ、ヨーロッパを真似ることによってヨーロッパ以上の「奇怪」な帝国主義国家と化したアメリカ合衆国そしてそれが主導する新植民地主義を修飾するにあたって用いたにすぎない。⁴²¹ 「新たな人間」= *l'homme nouveau*、「全的人間」= *l'homme total* になることを志し、暴力を手段にする脱植民地化の闘争を担った主体としての被圧迫民族に「怪物」^{モンスター}としての表象をあたえたのは、このテキストに *Préface* = 「序」を付けたサルトルであった。1961年において二回にわたってフランスを訪問しサルトルをインタビューした大江健三郎は、(サルトルをフランス語で読もうとする『叫び声』の準ヒーロー、呉鷹男のように)サルトルが「序」を付けた *Les Damnés de la terre* を原文で読んだと思われる。『叫び声』における「怪物」^{モンスター}のイメージの構想において大江が意識していたのは、原文の *Les Damnés de la terre* というより、むしろ「怪物」^{モンスター}がキーワードのひとつとして動員されている *Les Damnés de la terre* に

⁴²⁰ ファノン、フランツ、「暴力」、『地に呪われた者』、35頁。

⁴²¹ 「ヨーロッパの真似はしまいと心を決めようではないか(中略)。今から二世紀前、あるヨーロッパの元植民地が、ヨーロッパに追いつこうと考えた。その植民地はこれにすばらしい成功を収めたために、アメリカ合衆国は、ヨーロッパの欠陥、疾患、非人間性を、おそるべき次元にまで高めた怪物と化した。」、(ファノン、フランツ、『地に呪われた者』、310頁、傍点は引用者による)

サルトルが付けた「序」だったのである。

『叫び声』の作者大江健三郎は、『地に呪われたる者』の著者としてのファノンと同様に、サルトルの——「植民地主義は体制である」、「黒いオルフェ」や *Critique de la raison dialectique* (1960年) = 『弁証法的理性批判』などを中心にする——反植民地主義理論、「第三世界論」の「仕事」に限らず、それらに先行する政治的エッセイ *Réflexions sur la question juive* (1946年)にも大いに影響を受けていた。この書は、10年後の1956年、に『ユダヤ人』という題名のもとで日本語に翻訳されている。本論文の第二章においても指摘したとおり、この政治的エッセイにおいてサルトルは、人種差別という現象の力学を分析しており、人種差別を誘発させるのは被差別民族ないしは人種に内在する特殊なキャラクターではなく、(被差別者に対する支配搾取行為を事後的に正当化するために)そうした否定的なキャラクターは差別者によって恣意的に作られるということを示している。なお、ヨーロッパにおけるユダヤ人差別側の世界観は、マニ教 = 二元論的なものであり、対立する差別者と被差別者を和解することはできず、それらのどちらかが「無効」にされ、「排除」されなければならないということである。また、権力行使によって主体性を奪われ、客体に還元された被差別者が、主体性を回復することを自ら拒んだら「非・正真正銘」な、「疑似」の状態に還元される。「人間以下のもの」として位置づけられた被差別者が示すその反応は、彼を「無効」にし「排除」した差別者の共同体と、協力し自らをそれに同化させ組み込もうとするというものだ。しかし、これでは、「非・正真正銘」な状態に置かれ、「疑似」の自己同一性に包まれたまま生きるということになる。被差別者にとって「正真正銘性」を回復する唯一の道は、差別の対象となっている自らの(民族的ないしは人種的)自己同一性にかかわる条件(この場合ユダヤ人としての条件)を全的に生きることである。

ヨーロッパにおけるユダヤ人差別という特殊な問題に焦点を当てたこの「人種差別論」には、制度的な人種差別に基づくあらゆる植民地主義的なイデオロギーに適用できるような内容の理論的潜在力があつた。「人種差別論」は、サルトルやファノンの「第三世界論」の形成過程において一定の「始まりの現象」となり、まずサルトル自身、彼に次いでファノンが、このヨーロッパの人種差別の力学の構図を「植民地主義の制度的な権力が行使されている」「周辺世界」の文脈に適用したわけである。⁴²²『地に呪われたる者』や、それにサルトルが付けた「序」は、この過程の結実である。

以上示したとおりダリウス・セルベゾフと「虎」、そしてとりわけ以下に詳述

⁴²² Young, Robert J. C. "Preface Sartre: the 'African Philosopher,'" *Colonialism and Neocolonialism*, XVI-XVII 頁. (この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

するとおり呉鷹男を、「怪物」^{モンスター}的な作中人物として構想するにあたって大江が念頭に置いていたのは、サルトルのファノン論であった。サルトルは言う。

「(前略) ヨーロッパの人間であるということは、われわれすべてが植民地の搾取から利益を得てきた以上、植民地主義との共犯を意味する。ぶくぶく肥って顔色の悪いこのヨーロッパ大陸は、ファノンが適切にも《ナルシシズム》と名づけているもののなかに、ついにはまりこんでゆく。(中略) そしてヨーロッパは、このほかに何をしているというのか？ また超ヨーロッパ的なあの怪物、北アメリカは？ なんという饒舌だろう——自由、平等、友愛、愛情、名誉、祖国、その他なにやかやだ。だがそれも、われわれが同時に、黒んぼめ、ユダヤ人め、アルジェリアの[鼠]め、と人種差別的な言葉を弄するのを妨げはしなかった。リベラルで親切な良識ある人びと——要するに[フランスの]新植民地主義者——は、こうした矛盾にショックを受けたと公言していた。だがこんな言葉は、錯誤でなければ自己欺瞞である。我々ヨーロッパ人にとって、人種差別的ヒューマニズム以上に筋道の通った話はない。なぜならヨーロッパ人は、奴隷と怪物を拵えあげることによってしか、自分を人間にすることができなかつたからだ。」⁴²³

この一節においてサルトルは、西ヨーロッパと北アメリカ＝「北」の西側という「怪物」^{モンスター}と、その「奇怪」な支配搾取の暴力が生み出した原住民という「怪物」^{モンスター}とを対置させている。この構図を『叫び声』において再構築するにあたって大江は——『われらの時代』でのシンボリズムの路線に従い——前者を「疑似」^{モンスター}「怪物」^{モンスター}として、「後者」を「正真正銘」な「怪物」^{モンスター}として布置している。

「虎」と呉鷹男は、ファノンの「第三世界論」のヴィジョンにおける「新たな人間」=*l'homme nouveau*、「全的人間」=*l'homme total*になるための不可避的な「暴力」^{テロル}の段階である「怪物」^{モンスター}になろうと志している。それにもかかわらず、非政治的ないとなみにばかり着手し、不条理な暴力行為に巻き込まれたあげく、「怪物」^{モンスター}という「政治的人間」とは無縁の（「北」アメリカ人のダリウス・セルベゾフと同様に）「疑似」の「性的」な「怪物」^{モンスター}になりさがるのだ。それは、彼らの「第三世界」のヴィジョンの未熟さ、幼稚さに由来するのであるが、このような設定は、サルトルの「ファノン論」における「怪物」^{モンスター}をめぐる上記の構図の異化変形であることが、本章の論点の一つである。

⁴²³ サルトル、ジャン・ポール、「序」、ファノン、フランツ、『地に呪われたる者』、27頁。(傍点は引用者による)

*

大江が『叫び声』においてサルトルの「序」を強く意識していることは、サルトルのテキストの最初の段落における「黄金時代」= *l'âge d'or* という表現を大江が自作の始まりの部分で「僕の黄金の青春の時代」として引用することにより暗示されている。サルトルは、「黄金時代」= *l'âge d'or* を旧植民地主義の最盛期という意味合いで用いた。つまり、ヨーロッパの宗主国中枢のエリートたちが、^{メトロポリタン・センター}アフリカやアジアにおいて一定のエリート=知識人階級を作り上げようと企み、優秀な若者を選抜してヨーロッパに留学させ、彼らにヨーロッパ文化の諸原理を印づけたうえで植民地に帰したその時代のことである。このようにヨーロッパのエリートを模倣した被植民者のエリートたちは、自らの土地の原住民を疎外し、ヨーロッパ人が「投げかける」「パルテノン！友愛」などの「言葉」を（“nous lancions des mots ‘Parthenon! Fraternité!’”）ただ「こだま」のように反響する（“ils résonnaient”）ことしかできないものに還元されていた。サルトルは、こうして、宗主国が、^{イノヴァンティヴ}「非・正真正銘」な「疑似の」知識階級しか持たない原住民から効果的な抵抗を受けずに植民地地域を自由に搾取し支配できた時代をアイロニー的に「黄金時代」= *l'âge d'or* と呼んでいる。そしてこの時代を、（北アフリカでアルジェリア解放戦争が激化しつつある反面）フランスという^{メトロポリタン・センター}宗主国中枢においてのド・ゴールが率いた保守的「強権」（とりわけパリ市警）や、後にテロル組織 *OAS* による「暴力」が台頭するようになった1960年初頭の段階における広義の「暴力の時代」=「恐怖の時代」と対置しているのだ。サルトルが用いた旧植民地時代の最盛期をあらわすこの「黄金時代」= *l'âge d'or* という表現を、大江は『叫び声』の始まりの部分で「新植民地主義の形成期と日本」という歴史的な文脈において自作に転置している。

「ひとつの恐怖の時代を生きたフランスの哲学者の回想によれば、人間みな遅すぎる救助をまちこがれている恐怖の時代には、誰かひとり遙かな救いをもとめて叫び声をあげる時、それを聞く者はみな、その叫びが自分自身の声でなかったかと、わが耳を疑うということだ。（中略）かなり以前のことだが僕もまたその叫び声を聞く者のひとりだった。僕は二十歳で、おなじ年頃の二人の仲間といっしょに、若いアメリカ人の家に同居して暮らしていた。それは僕の《黄金の青春の時代》だった。」

424

424 大江健三郎、『叫び声』、7～8頁。

『叫び声』におけるセルベゾフが主導する共同体は、朝鮮戦争の最中にサンフランシスコ講和条約と同時に結ばれた「日米安全保障条約」＝旧安保条約直後の時代から新安保条約締結直後の時代にかけての新植民地主義体制の形成期を背景にする日米関係を彷彿とさせる。「虎」はサンフランシスコ生まれ、呉鷹男は朝鮮人の「混血児」、セルベゾフは朝鮮戦線の体験を持つ元・米兵、現・実業家として設定されている。三人の青年は、セルベゾフと共同体を作り、一時的に彼と離れ、そしてまた「僕」がフランスでセルベゾフと再会するという循環。これは日本の旧安保、新安保とその間の過渡期といった三段階の循環に照応している。大江は、『叫び声』の冒頭の部分で、「黄金時代」を少し変え「僕の黄金な青春の時代」という表現を使い、経済成長の発端となった旧安保体制＝新植民地主義の形成期の時代をあらわしているのだ。

しかし、新安保の締結を画策する岸政権に対する抵抗運動の時空と化した1959～1960年の時期には、すでに「黄金時代」は終わっていた。『叫び声』において、大江が何にもまして言及する歴史的文脈は、「アルジェリア解放戦争」との関係性におけるこの「安保闘争」前後の時期である。この時期は、同時期のフランスにおける「恐怖の時代」と同様に、日本青年にとっても、強権や極右勢力の「暴力による恐怖」の時代となった。注目すべきは、サルトルのテキストにおける広義の「植民地主義的暴力」をめぐる理論が呉鷹男の物語の流れにおいていかに再構築され、生かされているかということである。

V.4.4 「植民地主義的暴力」の循環と呉鷹男

サルトルの見解によれば、「植民地主義的暴力」の循環は、被植民者^{コロニゼ}に対して行使される第一段階、同一の「暴力」が被植民者^{コロニゼ}によって内面化される第二段階を経て、暴力が最初に発した加害者^{コロニザテュール}＝植民者＝宗主国に「ブーメラン」のように戻りあらゆる形で襲いかかってくる第三段階からなる。そして、『地に呪われたる者』は、このブーメランの段階に焦点を集めるテキストだという。この「植民地主義的暴力」の力学をめぐる理論は、1960年に出版されたサルトルの『弁証法的理性批判』において呈示したものを前提にしている。第一段階において「植民地主義的暴力」は、被植民者の土地の収用、被植民者の従来の伝統的且つ土着な社会構造の粉砕、そして、植民者^{コロニザテュール}が設立した諸機関からの被植民者の排除という過酷な制度的な差別政策として展開する。旧植民地主義の「黄金時代」＝*l'âge d'or*において第一世代に対して惨たらしく行使された「暴力」を目撃し、「恐怖」におののきながら育った第二世代のうちに植民地的圧迫＝*l'agression coloniale*は*Terreur*の形をとり内面化するのだ。ここではサルトルが、

大文字で表記している *Terreur* という単語を、ヨーロッパ人＝「われわれ」の「[行使する]無尽蔵の抑圧手段」[が引き起こす恐怖]＝*la crainte qu'ils éprouvent devant nos inépuisables moyens de répression* という意味においてのみではなく、「かれら自身の激昂がその内心に引き起こす」[恐怖]＝*la crainte que leur inspire leur propre fureur*⁴²⁵の意味においても多義的に用いていることに注目したい。こうした恐怖心にかき立てられた暴力＝*Terreur* が、暴力の第二段階において被植民者自身によって自分自身に向けられるということだ。

サルトルの「暴力」の循環をめぐる構図は、『叫び声』における呉鷹男の物語の流れで、一定の「女家長的」な家族における母・父と息子の権力関係の形式を取らされ、変形して再構築されている。呉鷹男は、母親から朝鮮人の血を持っていることを隠蔽するようにしつけられて育ったゆえに、自己同一性＝「非・正真正銘性」の危機をかかえるようになった青年である。戦前・戦中を体験した朝鮮人の父親は、日本の国家の帝国主義政策を内面化した日本人の妻に他者化され、社会からドロップ・アウトし、日本列島における被差別少数民族の「地」でもある北海道で徘徊している。大日本帝国が1910年から敗戦にかけて「半島」において実質的に行使した植民地主義は、戦後においても、「列島」に暮らす朝鮮人移民を「不可視化」し、「不可聴化」という社会政治的な態度において持続したのであった。これは、ヨーロッパの旧植民地主義体制に共通するような抑圧・同化政策であった——この政策はヨーロッパの帝国主義において、大英帝国、フランス帝国、オランダ、ベルギーなどそれぞれの植民地宗主国によって異なる形で行使された植民地主義とポストコロニアルの状況とも重なり合うものである。『叫び声』では、日本の帝国主義的な差別政策の加害者として母親が、被害者として父と息子が設定されている。『叫び声』で母親が、元宗主国としての日本の植民地主義・差別主義と絡まるという仕掛けの着想を大江はサルトルの「序」から得ている。

「序」の始まりの部分においてサルトルは、ヨーロッパのエリートが、当初、自らと植民地のエリートをはじめとする原住民との関係を「母と子の関係」に準えていたことを指摘する——「植民地では、真実は常に赤裸々な姿を現していた。だが[宗主国]は、この真実を覆いかくしておきたがった。原住民は[宗主国]を愛せよと教えられた。あたかも母を愛するように。」⁴²⁶そしてまた、サ

⁴²⁵ Sartre, Jean-Paul, “Préface”, Fanon, Frantz, *Les damnés de la terre*, La Découverte/Poche, Paris, 2002年、32頁.

⁴²⁶ サルトル、ジャン・ポール、「序」、5頁。“Aux colonies la vérité se montrait nue ; les « métropoles » la préféraient vêtue ; il fallait que l'indigène les aimât. Comme des mères, en quelque sorte.” (Sartre, Jean-Paul, “Préface,” 23頁)

サルトルは、被植民者の第二世代による反植民地主義的な暴力を、第二世代が目撃した父親＝第一世代に対する暴力が、彼らに引き起こした「精神的外傷」として解説する——「第二世代以後になると、息子たちはやっと目のあいた赤ん坊のころから、父親が鞭うたれている光景を見せつけられてきた。」そして、「休む間もなく繰り返されたこの圧迫は、原住民を屈服させるどころか」、かえって、「たえがたい矛盾、ヨーロッパ人が早晩その代償を支払うことになる矛盾の中へ投げ込んだ」のだった。⁴²⁷大江は『叫び声』において、このような「母」＝「宗主国」、「父」＝「被植民者の第一世代」と「子」＝「被植民者の第二世代」という構図を、呉鷹男の日本人の母、呉鷹男の朝鮮人の父と、呉鷹男自身として再構築しているのである。

例えば、暴力が内面化され被植民者自身に向けられるという植民地主義的暴力の第二段階は、呉鷹男が彼の朝鮮名である呉燦としての *authentique* な民族的自己同一性が、母による日本という国民国家の単民族神話に基づくイデオロギーに照応するような差別的な教育によって抑圧されることにおいて見てとれる。呉鷹男は、この母親の「暴力」を内面化し、自分自身に向けるようになる。サルトルは、次のように言っている。

彼ら [=被植民者] は自分らの上に向けられたわれわれの武器と、身のおののくようなあの衝動、心の奥底から湧き昇る、だが自分でも必ずしもよく分からぬあの殺害の欲望の間で、身動きがとれなくなっている。それは初めから彼らの暴力だったのではない、われわれヨーロッパ人の暴力が増大し、彼らの心を引き裂きながらわれわれのほうへ向きを変えたのである。そしてこれらの被抑圧者の最初の行動は、彼らの道徳とわれわれの道徳とがともに非難してやまぬあの怒りを、にもかかわらず彼らの人間性の最後の砦 とりで そのものでもあるあの口にできない怒りを、心中深く埋蔵することなのである。(中略) 自制されたこの狂暴な怒りは、爆発しないままに空しく円を描き、やがては被抑圧者自身を食い荒らす。真の的に堂々と闘いを挑むことができぬために、部族同士が闘いを交える——しかも君たちヨーロッパ人は植民地政策を当てにして、彼らの対立関係を維持することができるのだ。⁴²⁸

「これらの被抑圧者の最初の行動は、彼らの道徳とわれわれの道徳とがともに非難してやまぬあの怒りを」「心中深く埋蔵することなのである」といったサル

⁴²⁷ サルトル、ジャン・ポール、「序」、16～17頁。

⁴²⁸ 同上書、18～19頁。

トルの表現を考慮すると、呉鷹男が、夢で強姦殺人のことばかりを見ている理由が判然とする。彼が「心中深く埋蔵」し、抑圧してきた「暴力」の欲望は、彼の夢で解放されているのだ。

呉鷹男はこの「暴力」を、彼を抑圧してきた母親や単民族の神話によって形成されている社会にはむけずに、自分自身か、仲間に向けるのだ。500 台のラジオを蒐集する計画の最中に呉鷹男は仲間であり、彼のように被抑圧・被差別者でもある「虎」が、音量を高くして幾つものラジオを同時に付けてジャズを聞いていることに腹を立てたため喧嘩をしている。また彼が「虎」を横須賀で見殺しにし、「虎」を殺した広義の新植民地主義の権力手段を代表している米軍白人の憲兵や日本の警察官に異議申し立てすらできなかったことにもこの「暴力への欲望の埋蔵＝内面化」と暴力が自分自身と仲間に向けられるという現象に照応しているのである。

呉鷹男は、「暴力」を自分自身にも向けている。「虎」が自分達の共同生活を性差別的に書いた週刊誌記者に暴力をふるった事件で、呉鷹男は彼の身代わりになっている。呉鷹男が「植民地主義的暴力」を自分自身へ向けるエピソードは、強姦殺人の直前の場面においても登場する。呉鷹男は、彼のかつて通学していた定時制高校の屋上へ枯れたプールを見おろしてみるために登っていったところ、「そこに水槽と同じコンクリートの踏台にこしをかけて」、「途方にくれている小動物のような、ひとりの女子高校生が、偶然、存在してい」るのを見かける。

怪物は鮒^{かな}の形のナイフ⁴²⁹を外套のポケットからとりだして、女子高校

⁴²⁹ 「ナイフ」= *couteau* は、ファノンのテキストにおいて度々登場する単語であるが、サルトルはそれを「序」で、脱植民地化のための最小限のレベルの武器という意味において「こだま」しているのである。

「ファノンはわれわれが代わりの策を持ちあわせていないことを、知りぬいたうえて、われわれの古くさい狡知を摘発してゆくが、それを彼の同胞たちに向かって訴えるのである。彼が次のように語るのも、彼らに対してなのだ。ヨーロッパはわれわれの大陸に足を踏み入れた。その足を引っ込ませるまで切りつけねばならぬ。時はわれわれに幸いしている。エリザベートヴィルで、アルジェリアの奥地でことがおこれば、たちまち全世界に知れわたるだろう。東西両ブロックはそれぞれ異なる方針をとり、互いに牽制し合っている。この麻醉状態を利用しよう。〈歴史〉のなかに入りこもう。〈歴史〉になだれこみ、〈歴史〉をこれまでになく普遍的なものにせねばならぬ。戦おう。他に武器がないならば、辛抱強く [ナイフ] をふるって戦っても十分に間に合うだろう [battons-nous : à défaut d'autres armes, la patience du couteau suffira.]」(サルトル、ジャン・ポール、「序」、11～12 頁、傍点は引用者による)

生の向日葵ひまわりのような丸い頭のそばでユラユラさせてみた。女子高校生はとくにおどろかないで立上ると静かに歩きはじめた。怪物はナイフをもとにもどそうとして自分の左の手の甲をひどく切りつけてしまい、自分の血をコンクリート床にしたたせさせた。ナイフがしたたる血とともに床に葉のようにおちた。怪物はもうなにも持たず裸の手を血に汚して女子高校生とならんで歩いた。⁴³⁰

この場面で、呉鷹男は被差別者＝被圧迫民族として死に、「新たな人間」になるための暴力的な「怪物」^{モンスター}として再生するわけである——「屋上へ上がる階段は産道のように暗く狭かった。」⁴³¹ 呉鷹男は、女子高校生に暴力をふるう前に、まず自分自身に暴力をふるっているのだ。こうして「植民地主義的暴力」の内面化というモチーフが反復されているのである。

大江は、『叫び声』において 1958 年の「小松川女子高生強姦殺人事件」として知られている、16 歳の女子高校生（そして 23 歳の賄い婦）を強姦したうえで殺害した容疑で逮捕され、裁判の判決に従って 1961 年に死刑執行された在日韓国人の李珍宇（朝鮮名）＝「金子鎮男」（日本名）という少年をモデルにした。この暴力事件そのものや、李珍宇が犯罪をおかした時に 18 歳の少年であったのにもかかわらず死刑に処されたことは、戦後の日本社会で忘却されていた日本の「帝国主義的植民地支配の責任」^{インペリアル・リスパンスイビリティ}とも深くかかわっている「在日朝鮮人」に注目を集める契機となった。日本の知識階級はこの事件を「植民地主義差別言説を引きずっている戦後日本の現状を浮き彫りにした思想的な事件」として受け止めたのだ。⁴³²

例えば兪承昌ユスンチャンによると、呉鷹男の構想における着想先である李珍宇は、日本で生まれ、教育を受けたため、母国語や朝鮮の文化から遮断され、自らの「正真正銘」な自己同一性オタンテック アイデンティティから疎外されていた少年であった。しかも朝鮮人であるがゆえに差別的な扱いを受け、安定した職場に採用になっていない。それによって生み出された「内部の人間」は、「内部からみれば外部、外部からみれば内部」という、両極性の本質を持ち、現実と想像の区別がつけられなくなっただのである。彼は、内部の日本人という民族的自己同一性アイデンティティと、外部の朝鮮人という民族的自己同一性アイデンティティに引き裂かれ、「外に向けては他人の顔を示すべく余儀なくされた少年は、同時にその内部においても見も知らぬ他の人の姿を見いだす

⁴³⁰ 大江健三郎、『叫び声』、158 頁。

⁴³¹ 同上書、157 頁。

⁴³² 兪承昌、『小松川事件の《表象》と大江健三郎の『叫び声』、『日本近代文学』、74、2006 年 5 月号、242 頁。

結果に陥った」。⁴³³つまりこの少年は、「金子鎮男」(日本名)としての自己同一性アイデンティティーも、「李珍宇」(朝鮮名)としての自己同一性も拒絶されるという「監禁状態」に置かれていたわけである。大江は、サルトルの「ファノン流の第三世界論」を日本の文脈において再考するうえで、日本の植民地主義の過去と少数民族問題が注目されるポストコロニアルの「現在」とに深く関わったこの事象を媒介にしたわけである。

小説で犠牲になる女子高校生は、朝鮮人に対する戦前・戦中の「植民地主義的暴力」とも、戦後の少数民族としての意味での植民地主義的差別言説を引きずっている日本の現状とも無縁であるかのように見える。女子高校生が、植民地主義的暴力と絡み合わせられていることは、ヨーロッパの自由主義者の一般市民における「帝国主義的植民地支配の責任」インペリアル・リスパンスイビリティを、旧植民地主義という支配形態や入植者のみに擦り付けようとするという日和見主義の趨勢への批判のヴィジョンを中心とするサルトルの「序」との関係で考えるべきだろう。サルトルの「序」は、ヨーロッパの植民地主義的暴力に対する自己否定といってよいほど激しい総括、自己批判の形を取っている。サルトルによれば、フランスの植民地主義的暴力と直接かかわらなくても、それを黙認したヨーロッパの市民の「手も血に汚されて」おり、一人一人に「帝国主義的植民地支配の責任」インペリアル・リスパンスイビリティが問われるべきなのである。ヨーロッパ人の(旧)「植民地主義」という搾取支配形態のやり方は、時代遅れであり、それを(新植民地主義というより)「穏やかな」=自由主義的な経済搾取中心の形で補おうとしても、その戦略では、アルジェリアの解放を遅延することができたとしても、完全に阻止することはできかねるのだ。こう述べたうえで、サルトルは、「植民地主義的暴力」に間接にかかわってきたヨーロッパ人にとって『地に呪われた者』は必読の書だという。ファノンがこの書を、彼らのためにではなく、「第三世界」の被圧迫民族のために書いたにもかかわらずにである。なぜヨーロッパ人がこの書を読まなければならないのか、ということについて挙げている一つの理由は、「ファノンが自分の同胞に「ヨーロッパ人」のことを説明し、ヨーロッパ人の疎外のメカニズムを彼らのために分解してみせているから」だという。サルトルは、次のようにつづける。

この機会を利用したまえ。自分の姿を、その客体としての真実のなかで、君たち自身の前にあばき出すために。われわれの犠牲者は、その[傷跡]てっさと鉄鎖を通じてわれわれを識る。だから彼らの証言に反駁はんぱくの余地もない。われわれが彼らをどんな風にしたか、それを示されただけで、わ

⁴³³ 同上書、241頁。

れわれが自分自身に対して行ったことを知るには十分だ。これは有用なことか？ 然り。なぜならヨーロッパは今や瀕死の状態にあるからだ。君たちはなおも言われるだろう、「だが、おれたちは〈本国〉にいるんだ。行き過ぎを非難しているんだ。」そのとおりだ。君たちはコロンではない。だが似たり寄ったりだ。彼らは君たちの先駆者なのだ。君たちはコロンを海外に送り出し、コロンが君たちを金持ちにした。もっとも君たちは彼らにあらかじめ警告していた、「あんまり血を流すと、お前らを糾弾せざるをえぬ破目におちいるぞ。」(中略) かくも自由主義的で人間的な気持ち、文化への愛を^{プレシオジテ}気取りにまで推し進めている君たちは、ご自分が植民地を持っており、そこでは君たちの名で虐殺の行われていることを忘れたふりをしている。ところがファノンはその同士たちに——なかんずく少々西欧化されすぎている連中に——《本国人》と植民地にいるその手先の連帯をあげて見せる。勇気を出してファノンの著書を読みたまえ。なぜならこの本は君たちを恥じ入らせるだろうし、恥はマルクスが言ったように革命的な感情だからだ。見られるとおり私も主観的な幻想を棄てきれない。私もまたこう言っているわけだ、「いっさいはだめになった。ただ唯一の救いは....」ヨーロッパ人である私が敵の著書を盗み出し、それでヨーロッパを癒そうというのだ。さあ、これを利用したまえ。⁴³⁴

サルトルのこのようなヨーロッパ人の帝国主義・植民地主義政策との暗黙の共犯関係に対する(自己)批判の「叫び声」は、『叫び声』において日本の文脈に転置され、「こだま」となって反響しているのである。大江はこのテキストに呈示されたヴィジョンにおいて、日本の植民地主義の歴史と対決するうえでの手がかりを見いだしたと思われる。⁴³⁵

呉鷹男を「強姦殺人」といった奇怪な犯罪に駆り立てたのは、こうした *authentique* ^{アイデンティティ} な自己同一性の抑圧であったこと、言い換えれば、「呉燦」^{オチャン} と響くはずの *authentique* な固有名を「呉鷹男」^{くれたかお} として「不可聴化」したことであったことが何度も反復されている。彼は強姦殺人の夢を見るのであるが、強姦した日本人の娘は、「強姦されるあいだも、殺される瞬間も、じつにうっとりと自己満

⁴³⁴ サルトル、ジャン・ポール、「序」、12～13頁。

⁴³⁵ このことについて後述するが、(自己)批判を中心にする「第三世界論」のヴィジョンを大江がエッセイのレベルで展開し深化させたテキストは、「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という命題を沖縄問題との関係において扱った『沖縄ノート』である。

足にふけっついて《わたしはこの土地の人間なのよ、ねえ、わたしはこの土地の *authentique* な人間なのよ！》と快樂にたえないように勝ちほこった声をあげているのだった。ここにおいても彼の自己主張の「叫び声」が、マジョリティのそれによって抑圧され、「不可聴化」されているモチーフがある。

夢の次の情景で、呉鷹男は数しれない他人どもに追いかけられ暗い荒野を逃げまどいながら、まったく新しい自己満足を、今こそは自分の心に見出しているようなのだ、《おれはこんな人間なんだぞ、おれはこんな人間なんだぞ、おれは怪物だ》とかれは自己宣言をしながら荒野を逃げてゆき、背後の他人どもはかれのことを、なにか特別な言葉、かれに固有の種族名のような特別な言葉でよびながら追いかけてくる。その言葉がよくきこえているようで、その実、はっきりとらえられていない。

436

上記はマジョリティの「声」が彼の「叫び声」を聞こえなくし、彼の *authenticité* をも、「怪物性」をもただひたすら「無効」にしようとしているという呉鷹男の夢の引用である。夢と同じ内容の抑圧が呉鷹男をおいつめていたことは、戦前・戦中に置かれて、より過酷な差別的な抑圧・「不可視化」・「不可聴化」政策の犠牲となった朝鮮人の父親によっても認められる。新聞記者が植民地主義的な過去の傷跡が深く刻まれている北海道の「地」を放浪している父に、息子がなぜ犯罪をおかしたかと問うと、父は次のように答える。「息子は朝鮮人でもない、日本人でもない、なんでもないものにそだったのやから犯罪人にでもなりたかったんやあ！」⁴³⁷

母の圧迫によって抑圧されてきた呉燦と響く *authentique* な固有名 = 自己同一性を回復しようとする過程において、彼は「暴力」をふるい、日本社会をテロライズする「怪物」にならざるを得なかったわけである。母の差別主義的な「暴力」は、「怪物」に変身した息子の社会に対する「テロル行為」を媒介にブーメランのように彼女に戻って襲いかかり、彼女を徹底的な自己批判に追い込むことになる。ついに彼女は、抑圧してきた息子の *authentique* な固有名 = 自己同一性を認めることになる。

呉鷹男が法廷をでるとき、傍聴席のかれの母親が突然たちあがって、強い震えをおびた硬い声、猛禽の叫びのような声で、

⁴³⁶ 大江健三郎、『叫び声』、145～147頁。

⁴³⁷ 同上書、169頁。

「^{オチャン}呉燦」と呼びかけた。

呉鷹男はそのみじかい言葉の音楽をかつて耳にしたことがなかった。しかし、かれはただちに、それがかれ自身の朝鮮名であることを理解した。

^{オチャン}呉燦・・・・・・・・

その瞬間、呉鷹男は、なぜ自分がこの世界に *authentique* に生きているという安堵感をもつことのできない人間となったかを、なぜこの現実世界の私生児となったかを理解する手掛かりが自分にあたえられたのを感じた。呉燦として生きるかわりに架空の呉鷹男として鷹の生涯を生きることを母親に強制された幼い日から、かれは摘出子の感覚をうしない始めたのだ、この世界にぴったりした正規のメンバーであるという感覚を。⁴³⁸

彼女は、差別的に扱ってきた朝鮮人の夫とも和解し、「半島」へ渡ることになるのだが、それはもはや「手遅れ」なのである。彼女は息子が死刑を宣告された時点において、ようやく彼の朝鮮人としての自己同一性^{アイデンティティ}を認めたのだ。

李珍宇の「怪物」^{イジヌ}的な強姦殺人事件や死刑は、「戦後日本社会における『在日』の差別的な社会環境、および日本人の『在日』認識」を *monstrare* する転機となった。日本における少数民族の問題が「大きい声」で議論されるようになり、状況の改善のために知識人や少数民族の団体が積極的に国家に圧力をかけるようになったのである。しかし、大江がこの小説を書くにあたって、単にフランス植民地の問題をサルトル（やファノン）の反植民地主義理論を媒介に日本の少数民族のケースに当て嵌まることのみを意図していたとは思えない。

「当然、小松川事件に取材している『叫び声』には、『在日』の差別的な地位、および民族的な主体性が生み出してきた『在日』のエスニシティが主人公像に投影されるはずである」が、『叫び声』が問題にしているのはこの少数民族問題ではない。兪承昌は、「主人公の実存を民族的主体性の喪失から捉えながらも、朝鮮民族の主体性を堅持しようとすることで、植民地主義差別言説から『在日』のエスニシティを求め」⁴³⁹て民族中心主義的な帰趨を持つ一連の「在日」の小説と、『叫び声』を比較見当している。しかし、兪承昌の主な論点である「呉鷹男を敢えて」「僕」、ダリウス・セルベゾフ、「虎」という「準ヒーロー達と関係づけることで、『在日』への視点の分散を図」り、「それによって、『叫び声』が描き出す『在日』像は民族的主体性から切り離され、人間の本質的実存を強調

⁴³⁸ 同上書、171頁。

⁴³⁹ 兪承昌、「小松川事件の《表象》と大江健三郎の『叫び声』」、240頁。

するところに傾斜される」⁴⁴⁰という解釈は、的を逸れている。

『叫び声』は、勝利に終わることになったアルジェリア解放戦争という同時代現象と、敗北に終わった安保闘争と「第三世界」の関係、そして「第三世界」の分析からサルトル（やファノン）が醸し出した「第三世界論」という現実世界の理論を背景に持っている。兪の論点と異なり、この小説が扱っている問題を形而上学という非政治的な「普遍性」のレベルに解消することは、不可能なのである。

ここで、兪承昌は、『叫び声』のキーワードの一つである*authentique*を、「人間の本質的実存」を意味するものとして、形而上学の領域に位置づけているが、『叫び声』における*authentique*は、形而上学的＝非政治的なレベルにおいて用いられるどころか、かなり政治的な文脈において動員されているのである。*authentique*は、中心指向的な権力中枢＝*autorité*により抑制されており、その権力から暴力手段によって回復すべき少数民族の土着的・特殊な自己同一性^{アイデンティティー}の意味で使われているが、それだけではない。『叫び声』において*authentique*は、広義の中心指向的な*autorité*に逆らって、エスニシティ・人種・民族・国民的文化^{ナショナル}の制限を越境した国際的な連帯^{ノヴェル}に基づいて建設されつつある、新規の「共同体」^{アイデンティティー}の自己同一性をも意味しているのだ。

V.4.5 『叫び声』における「第三世界」のヴィジョン

大江は、反・新植民地主義的な闘争として始まった1960年安保闘争を「第三世界論」的な観点から捉えた。このようなヴィジョンは、大江の「強権に確執をかもす志」というエッセイからも明白である。それは安保闘争を契機に、日本の市民も、反・植民地主義的な闘争を行っているアルジェリアの民族、彼らを支持する進歩的なフランス人、アジア・アフリカ・中・南アメリカの民族と同様に、抑制されてきた自己同一性^{アイデンティティー}と、「第三世界」との連帯を可能にする「自立」の探求に着手したということなのだ。大江は、1961年に東京で開催されたアジア・アフリカ作家会議に参加するために日本を訪れたアジア・アフリカの文学者に安保闘争の総括を求められ、それにこたえて、安保闘争以後の日本社会における「政治的な離脱」^{デザンガジュマン}や、それによる不毛な社会環境を批判する際に次のように述べた。

日本の青年が安保闘争以後、その敵を確認して、連続的に戦いをすすめており、未来に対する展望を明確にもっていると考えるなら、それは

⁴⁴⁰ 同上書、240頁。

日本の現実に密着していない。サルトルは日本の学生運動を高く評価したが、あの緻密なサルトルさえ、日本の真の左翼の前衛として全学連を評価するとき、かれのやさしい声は現実からかなり離れているのである。たとえば日本の若い芸術家が集まってつくりあげた「若い日本の会」というものがある。それは安保闘争において個性的な役割をはたした。しかしそのメンバーの大半は、アジア・アフリカ作家会議に参加することをあまりに政治的だと考えたのである。安保闘争がアジア・アフリカ・ブロックの一員としての戦いであったという認識のみが、日本の青年を明日の世界へと能動的にむすびつけるのであろうが、残念ながらそのような意識は決して支配的ではない。」⁴⁴¹

大江は、このテキストにおいて、日本青年が安保闘争以後に完全な「政治的離脱」^{デザンガジュマン}の穴ぼこに陥ってしまい、この闘争が、「第三世界」における他の闘争と照応するようなものと見なすことができないという帰趨を表現するにあたって、自分自身の「第三世界と日本」のヴィジョンを呈示したのであった。言うまでもなく、安保闘争は、親・新植民地主義的な岸信介が率いた保守政権、それが動員した機動隊や極右団体の「テロリスト」によって阻止され、「無効」にされたすえ、敗北に終わった。

『叫び声』において呉鷹男が「怪物」^{モンスター}的な暴力によって*authenticité*を回復し、呉燦^{オチャン}になった時点で、死刑判決を宣告されたと同様に、安保闘争によって安保の運動家は、独自で、自立した自己同一性^{アイデンティティー}を回復する力を獲得したと思われた時点で、新安保承認により、この*authentique*な自己同一性^{アイデンティティー}を獲得する機会を奪われたのである。

大江はここで、ある一定の特殊な事象を、広義の「植民地の問題」を表現するうえで題材にしている。つまり、安保闘争をめぐる一連の出来事と、アルジェリア解放戦争をめぐる一連の出来事をアレゴライズするために李珍宇^{イジヌ}による強姦殺人事件を参考にしているのだ。安保闘争をこのようにヨーロッパ・アフリカの地政学的な文脈に再配置し、一定の地図作成を行っているのだ。

しかし、大江は、敗北に終わった安保闘争を、「第三世界」運動の一部として見なしており、「終焉」したものと考えているわけではない。安保闘争を広義の*alternatif*の*authentique*な「世界」探求への最初の歩み、一定の「始まりの現象」として位置づけているのだ。呉鷹男の*alternatif*の*authentique*な「世界」をめぐる

⁴⁴¹ 大江健三郎、「強権に確執をかもす志」、『厳粛な綱渡り』、113～114頁。（傍点は引用者による）

ヴィジョンには、大江による「第三世界」のヴィジョンが部分的に盛り込まれている。

例えば、「十六歳の冬に、アルバイトをしてつみたてた金をおろして、東京、北海道間の、切符を買い、そして根室のノサップ岬から盗んだ伝馬船てんませんに海図も磁石もなく、ひとりぽっちで乗りこんで荒れくるう海に向か」ったすえに失敗に終わった「密航未遂事件」を想起して呉鷹男は、次のように言う。

「自分がゆきたかったのは朝鮮ではなく、自分のこの世界とはちがう世界、それも死とか未来とかの抽象的な世界ではなく、具体的に、自分自身の土地だとかんじられる、しかも地図にはのっていないどこかの世界へ、密航したかったのだとさとった」⁴⁴²

つまり、呉鷹男が夢見ている「世界」は、まだ成立していない、これから「建設」すべき、「友人たち号」というヨットのように「建造中」のものである。また、意味づけの趣味があった呉鷹男は、アフリカへ渡る熱望について話す「虎」に次のようにこたえている。

「いま考えてみれば、虎がアフリカへ行きたいように、おれもどこかへ、ここより他の場所へ行きたかったんだなあ。それというのもおれは自分を、おかしな具合でこの世界にいる流刑された、どこかちがう世界の人間だというふうに感じることもあるんだよ。しかも、それはおそらく朝鮮へうまくたどりつけていたにしてもいやされることのなかった感覚なのさ。おれが属しているのは朝鮮と言う様な地図の上に存在している国ではなくて、この世界でない、別の世界なんだとを感じるんだよ。この世界ときたら、それは他人のもので、おれの本来住む所じゃないと感じる。現にいまだっておれは、他人の国の、他人の夜更けに、他人の言葉でしゃべっている。明日の朝おれは他人の国の他人の朝を歩くだろう。そんな感じは欲求不満にすぎないと思うこともあるんだが、とにかく実感ということをいえば、おれにはこの世界にぴったりして生きているという実感が無いんだよ。そしてそれはこの世界におれが、まちがってはいりこみ、まちがっていつづけているからだと感じるわけだ。どういう理由からにしてもともかくこの呉鷹男、十八歳は、この世界の本当の人

⁴⁴² 大江健三郎、『叫び声』、28頁。

間ではなくなってるんだというわけなのさ！分からないだろう、全然！」

443

「自分がゆきたかったのは朝鮮ではなく、自分のこの世界とはちがう世界、それも死とか未来とかの抽象的な世界ではなく、具体的に、自分自身の土地だと感じられる、しかも地図にはのっていないどこかの世界」というヴィジョンに照らして考えると、『叫び声』で想定されている「第三世界」は「朝鮮」という制限されたものではないと言える。呉鷹男の言葉には、この*authentique*^{アイデンティティ}な自己同一性を、「周辺世界」の被圧迫民族そして脱植民地化された民族が連動して構築すべきエスニシティ・人種・民族・国民的文化の制限を越境した共同体の自己同一性に融合するというユートピア的なヴィジョンが潜在しているのだ。小説では、この*authentique*な連帯の理念が、呉鷹男の死刑が宣告された以後、語り手「僕」の物語の流れにおいて受け継がれることになる。

＊

「僕」は、ダリウス・セルベゾフの招待を受け入れ、彼と会いにフランスへ向かう途中で、「南」ヨーロッパに位置するギリシアとイタリアに立ち寄ることにする——それは善意の交通案内業者が「僕」に強制したことであったが、ダリウス・セルベゾフとの再会を「できるだけ延期したい」「僕」にとってはかえって好都合な話だった。

「僕」は「失業して落胆しているギリシアの市民とおなじ暮らしをアテネの市街で行って」おり、「朝から夕暮れまで、シンタグマトス広場でビールを飲みながら座りこみ、旅行者たちや、子持ちの蟹のように海綿を舐いっぱい背負った無意味なスポンジ売りや物乞いのギリシアの子供たちを眺め、「安い料理店」で食事するという地味な宿泊を続け、頻繁に周りのギリシア人から「毛沢東^{マオツェトン}」と呼びかけられたりする。⁴⁴⁴「僕」がアテネを歩きまわる時「大通りの雑踏には日本人たちもまじっていたが、かれらが僕を避けてとおるのがはっきりわかった」。「三十一ドラグマ」という「破格に安い」「最低の部屋」にしか宿泊できない貧しい「僕」は、日本人同胞を「警戒させ、嫌悪させる雰囲気を獲得してしまったわけだ」。⁴⁴⁵「僕」は彼を他者化する日本人同胞ではなく、彼を「わが毛沢東^{マオツェトン}」と呼び、「美しく若い娘、ジュースにみちた第一級の娘に会いに行こうよ」と誘う「ヒモ」兼タクシー運転手と美しく二十歳の娼婦アルクメーヌに近

⁴⁴³ 同上書、29～30頁。（傍点は引用者による）

⁴⁴⁴ 同上書、191頁。

⁴⁴⁵ 同上書、191頁。

親感を抱く。この挿話では「第三世界」という共同体を築き上げるという共通の夢を中心に、東アジアの民族と「南」ヨーロッパの民族の間における連帯の潜在力が表現されているのである。この連帯において、とりわけ、アジアにおける最初の新植民地主義体制から自立した社会主義国としての中華人民共和国をめぐる記号がグロテスクの形で登場する展開となる。つまり、「性」をめぐるモチーフが、あらためて「第三世界と日本」という問題を表現するための媒介にされているのだ。

「僕」は「アテネの丘陵^{きゅうりょう}へ市街ぐるみ登ってゆく坂になった裏町の（中略）土の家の、歩道になかばかくれた地下の部屋で、アルクメーヌ」と「交接」した後、二人で浴室に移動し、互いの体を洗う。この場面において「黄色」という色が、強調されている——「僕」は、アルクメーヌが、薬缶をとりに台所へは行って行く時、彼女の「下腹部のひとつかみの毛を花かざり⁴⁴⁶のようにつけ」ている姿を眺める。「こうして身を洗いながら僕とアルクメーヌはおなじように暗い黄色の裸の濡れた身を、やはり暗い黄色の裸電球にきらきら光らせながら、イタリア語だけの会話をかわしたのだった」⁴⁴⁷。とりわけ、性交渉後の沐浴の場面は、二人のあいだの一定の調和の色合いを反映する。「下腹部の黄色い毛の房のことは平気で胴までの短い上着を着込んで」いる彼女は、「僕」のようにパリに向かうことになっており、「僕」に、「僕」の名前とパリのホテルの住所を教えさせる。ホテルに帰った「僕」は、アルクメーヌに出会えたその日、「日本を発ってから始めて不幸でなかった」⁴⁴⁸ことに気がつく。

「喝采」と『われらの時代』において、民族的制約を越境した「第三世界」の民族の連帯という理念の東アジアの文脈におけるシンボルとしての役割を担わされていた「黄」という色が特別に強調されていた。それが、アルクメーヌの挿話においても持続されているわけである。

「僕」はイタリア滞在の後、12月にパリに到着する。「僕」がオルリイ空港からダリウス・セルベゾフのホテルに電話をかけたら、彼が一週間の予定でロンドンへ行っていることを知らされる。それにもかかわらず、「僕」は「一週間でも、ダリウス・セルベゾフとの再会がのびること」を「休暇の終わりにその延長の通知を受けとった」怠け者の小学生のように喜ぶ。パリは、OASのテロルとそれに対するフランスの進歩派による抗議デモの現場と化している。アルクメ

⁴⁴⁶ 第三章において、『チャタレイ夫人の恋人』の「陰毛に花かざりをつける」というモチーフが『われらの時代』でいかに脱文脈化され、脱植民地化という同時代現象と絡まされているかという仕掛けについて分析したが、この場面においてもそのモチーフへの言及がある。

⁴⁴⁷ 大江健三郎、『叫び声』、193頁。

⁴⁴⁸ 同上書、194頁。

一ヌは、パリにもやってきて「僕」をホテルで訪ねる。「汚い灰色の袋のような外套をきて」おり「よごれた鼠のよう」⁴⁴⁹に見え「醜く老け込んで、いかにも娼婦そのものだった」アルクメーヌの姿は、「僕」をいささか不機嫌な気分にする。

「僕」は彼女を「支那料理店」へ連れて行く。「支那料理店」において彼女は、醜い灰色の「鼠」から、再び美しい若い娘に変身するのである。

「やがて夕暮れになり夜がきて、僕はアルクメーヌをカフェから見える路地の支那料理店につれて行った。その時になってはじめてアルクメーヌがよごれた鼠のような外套を脱いだ。僕はその瞬間恐怖におそわれたばかりだったが、アルクメーヌが外套のしたに着ていた黄色の服はそれほどひどくなかった。むしろ威厳があった。僕はアルクメーヌがおなじ黄色の毛のひと房を下腹に花かざりのようにつけて歩きまわったとき、もっと威厳があったことを思いだして、いくらか不機嫌な気分から回復した。」⁴⁵⁰

「第三世界」の連帯の潜在力は、「僕」がアルクメーヌや彼女の連れの男と別れる場面においても暗示されている。この場面において、「僕」が、「南」ヨーロッパの人民と連帯を結ぶためには十分に成熟していないこと、このような「政治的な参加」^{アンガジュマン}の責任を受ける心の準備ができていないことを、彼のシニカルで自己嘲弄的な態度に見てとることができる。「僕」は、アルクメーヌが彼を「兄弟」と呼んでいることさえ十分に自覚していないのである。「僕」は、彼女が彼女の連れの男を「わが兄弟」と紹介したと誤解している。

ああ、なんというおかしなギリシアの娘だったことだろう、兄弟フラテロなどと嘘をいってどこかへ消えてしまった、あれはもしかしたら僕に兄弟フラテロ！

⁴⁴⁹ サルトルがヨーロッパ帝国主義は、「奴隷」と「怪物」^{モンスター}のみしか生み出さなかったことに言及している箇所、一般のフランス人の人種差別的意識をあばくためにアルジェリア人を暗示する差別用語 *raton* = 「鼠」を用いていた——「われわれが（中略）、黒んぼめ、ユダヤ人め、アルジェリアの〔鼠〕め、と人種差別的な言葉を弄するのを妨げはしなかった」。大江はここで、ギリシアの若い娼婦の悲惨な身なりを表現するうえでこの単語を用いているが、それには彼女が象徴している「南」ヨーロッパの民族を、アルジェリアの被差別民族と同様な「第三世界」=「南」の民族として強調する意図があったであろう。

⁴⁵⁰ 大江健三郎、『叫び声』、201頁。（傍点は引用者による）

と呼びかけたのだったろうか？ 支那料理店を出てホテルに戻るあいだに僕はとめどなく自己抑制のなくすくす笑いをつづけていた。⁴⁵¹

タクシードライバー兼「ヒモ」や、アルクメーヌが、彼に「共感」を持つのは、彼が「毛沢東」^{マオツェトン}に似ているからであるということを「僕」は認めたくない。「僕」の物語の流れにおいても、「第三世界」を建設する企画に「参加」するという欲望（＝「第三世界論」）と、新植民地主義（＝「アメリカニズム」）との協力という二つの磁力に引きつけられた結果、この「参加」^{シンパシー}を避けて迂回してしまうというモチーフが反復されていると言えよう。

「南」ヨーロッパの若い娘が、片言のイタリア語と英語を媒介にして、「地」に呪われた者としての「周辺世界」＝「南」の被圧迫民族が「安住する」「世界」は、未だにどこにも存在しないことを言おうとしていることは、「僕」の悲観的な屈折した解釈によって読者に伝えられる。例えば、「僕」がパリに来たばかりのアルクメーヌに「あなたのホテルは？」と、どこに宿泊しているかを聞く時彼女は「*In nessun luogo*」と答える。それが、彼女の宿泊所という狭義にとどまらない、より広大な意味合いを帯びていることが、彼女と僕とのコミュニケーションにおいて共通語にしている片言のイタリア語と英語の言葉からなし崩し的に浮き彫りになってくる。

「——Nowhereといった。

僕は理解した、それに新しくひとつのイタリア語の熟語をおぼえたわけだった、*in nessun luogo*どこにもない、どこにもない、われら安住する所、*in nessun luogo*それはどこにもない、虎も呉鷹男もかれら自身の国へ出発しようとしたのだが、それこそかれらは、*nessun luogo*にむかって出発したのだ、*nowhere*にむかって、不可有国、ネヴァ、ネヴァ、ランドにむかって、しかしなんという虚しい響きの言葉だろう、*in nessun luogo*」⁴⁵²

この挿話において、「僕」の「南」ヨーロッパの若い娘の言葉に対する解釈は、既存の体制・構造、つまり、アメリカ合衆国が主導する資本主義体制と、ソ連が主導する社会主義体制両者を否定し、これらの「北」の「東西」が支配する世界には、「南」の民族が安住することができないというヴィジョンが潜在されているのだ。しかし、「これらの既存の体制に取って代わるような*authentique*な

⁴⁵¹ 同上書、203頁。

⁴⁵² 同上書、199～200頁。

ノヴェル

新規の世界を建設すべきだ」という内容が「南」ヨーロッパの若い娘によって暗示されているのにもかかわらず、「僕」の解釈は、建設的な方向には進まないものである。

「僕」のこのような態度は、まさに、大江が定義したところの、安保闘争以後、「安保闘争がアジア・アフリカ・ブロックの一員としての戦いであったという認識のみが、日本の青年を明日の世界へと能動的にむすびつけるのであろうが、残念ながらそのような意識は決して支配的ではない」一般の日本の学生の「第三世界」のヴィジョンの未熟さに相応するものである。

物語言説のレヴェルから、こうした「第三世界」のヴィジョンにおいて大江が、サルトルがファノンの『地に呪われたる者』に付けた「序」で展開した「第三世界」のヴィジョンを意識していることは、明らかなのである。

ひと口に言えば、この声によって〈第三世界〉は自己を発見し、自己に語っている。周知のとおり、この世界は等質な世界ではない。いまだに奴隷民族もあれば、うわべだけの独立を得た民族もある。主権をかち取るために闘いつつある民族もあれば、やっと完全な自由を獲得しながら、帝国主権の侵略の脅威にたえずさらされている民族もある。この相違は、植民地の歴史、すなわち抑圧の歴史から生み出されたものだ。(中略) 植民地主義によって故意に発展を阻まれた国にあっては、立ち上がった農民階級がいち早くラディカルな階級として登場する。彼らはむき出しの抑圧を知っており、都会の労働者よりもはるかにこれに苦しんでいる。農民が餓死するのを防ぐには、社会の構造全体を粉砕する以外に方法はない。農民階級が勝利を占めるなら、〈民族革命〉は社会主義的になるだろう。もしその衝動が抑えられ、原住民のブルジョワジーが権力を握るなら新国家は形式上の主権にもかかわらず、帝国主義者の手中にとどまることになる。(中略) このように、〈第三世界〉の統一はまだ果たされていない。それは進行中の事業であり、独立しているといないにもかかわらず、あらゆる国で、農民階級の指揮下におかれたすべての原住民の団結によって果たされる。ファノンがアフリカ、アジア、ラテンアメリカの兄弟たちに説いているのは、以上のことだ。われわれは、同時に、地上いたるところで革命的社会主義を実現しよう。さもないければ、次々に以前の制圧者に打ち破られてしまうだろう、と彼は言っているのだ。ファノンは何ごとも隠さない。弱点も、内部の反目も、瞞着も。運動は、ここではスタートでつまずいた。あそこでは目覚ましい成功をおさめながらも足ぶみ状態だ。またこちらでは停止してしまった。もし運動を立て直そうとすれば、農民はブルジョワジーを海に抛りこんでし

まわねばならぬ。指導者に対する個人崇拜、西欧文化、さらには遠い過去の遺物となったアフリカ文化の復帰、こうした疎外の危険をもっとも強くはらんだものに対し、読者はきびしい警告をうける。真の文化とは〈革命〉にほかならない。すなわち、文化は〔革命の情熱の〕熱いうちに鍛えられると、ファノンフェノンのは声を高くして語っている。われわれヨーロッパ人も彼の声を聞くことができる。⁴⁵³

大江が『叫び声』において意識しているサルトルのこの「序」の独自性は、サルトルが「第三世界」という用語を初めて用いたテキストであることにある。⁴⁵⁴サルトルの反植民地主義理論・「第三世界論」はこのテキストにおいて始まったわけではない。しかし、「北」の「西側」としての新植民地主義体制のみならず、「北」の「東側」としての既存社会主義体制にも、取って代わるような新たな体制を建設しようとしている「南」の諸民族を指し示すうえでこの用語を用いたのは初めてであったのだ。

この一節では、「第三世界」の民族は、抑圧されてきたアイデンティティauthenticな自己同一性を、「怪物」モンスター的な暴力手段によって回復し、しかしそれにとどまらず、その次の段階として、他の民族と手を組んで、より広大な、新規の統一した、非同盟の国際的な共同体＝「第三世界」の建設に取りかかるという「第三世界」のヴィジョンが呈示されている。

この「第三世界」の建設過程において「農民階級」＝「百姓たち」*la classe paysanne*が主導権を持つべきだという、サルトルのいささかマオツェトン「毛沢東」主義的なアプローチは、先述の「ナセルによる義勇軍の要請」の挿話において反響している。「僕」は、「スエズの闘い」を担ったものが「百姓たち」＝*la classe paysanne*であることを強調していた——「その冬、エジプトでは戦争がおこっていた。アラブ人の百姓たちは敵の飛行機から砂漠の発電所をまもるために、いわば砂袋のように建物の屋根にその軀を横たえた。」さらに、大江は、1967年に発表し世界的な人気を集めた『万延元年のフットボール』において「1960年安保闘争」を遡及的に、1860年に同時多発した「百姓一揆」に照らして再考するという「戦術」をとっている。農民のモチーフを登場させるとき、大江にはサルトル・ファノンの理論が念頭にあったはずである。そしてこれは、「明治百年記念」を準備する体制側の歴史観（サルトルの言葉を借りると「植民地の歴史、すなわ

⁴⁵³ サルトル、ジャン・ポール、「序」、『地に呪われた者』、9～10頁。（傍点は引用者による）

⁴⁵⁴ Lamouchi, Noureddine, “Préface,” *Jean-Paul Sartre et Le Tiers Monde*, Harmattan, Paris, 1996年, 9頁.

ち抑圧の歴史(*l'histoire coloniale, cela veut dire de l'oppression*)に逆らい、それに「周辺」の抑圧された歴史を対置するという「戦術」なのである。

「南」ヨーロッパの若い娘の挿話において焦点化された「兄弟」という言葉も、サルトルの「ファノン論」に登場する。サルトルは、「第三世界」志向の「周辺世界」の民族を、上述した引用文においてファノンの「アフリカ、アジア、ラテンアメリカの兄弟たち [*à ses frères d'Afrique, d'Asie, d'Amérique latine*]

と呼んでいる。「僕が」『叫び声』においてタクシー運転主兼「ヒモ」に「わが毛沢東 = *my Mao Tse Tung*」と呼ばれ、アルクメヌからは「わが兄弟 = *mio fratello*」と呼ばれるという設定は——「僕」はこれらの呼びかけに応答することも、その責任を取ることもできないが——アジア・アフリカ・中南アメリカの民族は「兄弟」として連帯を結ぶべきというサルトルやファノンの「第三世界のヴィジョン」の異化変形であると言えよう。

V.4.6 「強権に確執をかもす志」を抱いている青年の「叫び声」——フランスと日本

ついに、イギリスからフランスに戻ったダリウス・セルベゾフは、「僕」をバステューユ広場のカフェに招待する。おそらくイギリスにいた彼は、バステューユ広場で反 OAS デモが行われることを知らなかっただろう。「僕」は、地下鉄でバステューユ駅に向かうが、駅に着くとパリの市警が駅の出口を封鎖していた。乗客たちが、反 OAS の抗議デモに「参加」することを防ぐためであり、「監禁状態」、「閉ざされた壁のなかにいる状態」という大江の最初期小説のテーマを想起させる場面である。この場面では、地下に監禁されたアジア・アフリカ・中・南アメリカの移民が、フランスの若者たちの地上から聞こえて来る反帝国主義的、反ファシスト的な恐怖に包まれた「叫び声」=スローガンを耳にしながらか、「地上」に出ることを待ちこがれている。

バステューユ駅につくと午後八時だったが乗客たちは駅の地下道から表に出てゆくことを許されなかった。オレンジ色の薄明かりのなかでフランス人たち、黒人たち、ヴィエトナムと中国の黄色人たちにまじって僕はじっとたつたまま扉がひらくときを待たねばならなかった。頭のうえのはるか高みで群衆の駆ける気配、ざわめき、叫喚がきこえた。アルジェリアに平和、OAS 暗殺者！ [*Paix à Algerie, OAS Assassins!*] という叫び声がきわだつききとれることもあった。しかしたいていは数し

れない獣たちがひしめきあって遠方の狭い谷間を駆けぬけているという印象だった。薄暗がりのなかの乗客たちはそのたびに動揺した。(中略) やっと地下鉄の扉がひらかれ広場へのぼってゆくと群衆はすでにさっていたが、警官たちは戦争の終わった直後の戦場の兵士たちのようにそこに残っていた。」⁴⁵⁵

ついに封鎖が解除され、「僕」は、その大半が「周辺世界」からの移民である乗客たちとともに地上に出る。そして機動隊の「暴力」によって抗議者の血が流された惨たらしい場所にゆきあわせてしまう。

歩道を歩いてゆくと、おびただしい血が流されている場所にゆきあわせた。それをさけて人々は広場へ踏みだして迂回していた。誰かが殺されたのだ、それも若い人間が殺されたのだ、と僕はその厩大な量の血を見おろし考えた、それから急にまた虎と呉鷹男の幻影が、あるいは虎の死と呉鷹男のまぬがれがたい約束の死の印象が、僕を離れがたく確固ととらえた。⁴⁵⁶

アルジェリア解放戦争が長引き、泥沼化し、世界の批判を集めるようになっていた1959年頃から *Algerie Française* という帝国のヴィジョンの非現実性に覚醒したド・ゴールは、アルジェリアの「脱植民地化」= *Algerie Algerienne* = 「民族自決」の可能性を示唆せざるを得なくなっていた。このことで、国家機関内部の極右勢力の「内部からの」反発にも曝されるようになっていったのだ。OAS (*Organisation de l'armée secrète*) = 「秘密軍事組織」というテロル組織は、この反発の体現として発足した。極右軍人からなるこの秘密組織は、宗主国や植民地でテロル行為を打ち出していた。サルトルも数回、OAS によるプラスチック爆弾などによる暗殺未遂事件の標的となったが、死を免れている。フランスの *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* のシンパサイザーの「学生」がアルジェリア系移民と手を組んでは、このテロルに対する「デモンストレーション」を行うようになった。

アルジェリアの脱植民地化を考慮するようになっていたド・ゴールの強権の、この「植民地の問題」に対する頑な態度が緩和しても、フランスでのアルジェリア解放を支持するアルジェリア人やフランス人の進歩的なシンパサイザーに対する態度はより過酷になっていた。例えば、「歩道を歩いてゆくと、おびただ

⁴⁵⁵ 大江健三郎、『叫び声』、205頁。(傍点は引用者による)

⁴⁵⁶ 同上書、205～206頁。

しい血が流されている場所にゆきあわせた」という表現をとおして言及されている一つの事件は、大江のフランス訪問より一年後に発生した、「1962年2月8日地下鉄シャロンヌ駅事件」= *Affaire de la station de métro Charonne* として知られる暴力事件である。1962年2月8日に、地下鉄シャロンヌ駅で、フランス人のアルジェリア解放運動のシンパサイザーである8人は、反OAS抗議デモンストレーションを行おうとしていたところ、パリ市警の過剰な暴力行使により惨たらしく殺された。

だが、『叫び声』の反OASをめぐる挿話の射程は、その特殊な暴力事件のみにとどまらない。この挿話を構想するにあたって大江の念頭にあったもうひとつの事件は、「フランス人」に対する暴力事件である「地下鉄シャロンヌ駅事件」= *Affaire de la station de métro Charonne* とは対照的に近年までほぼ忘却されていたアルジェリア移民のデモンストレーターに対して行使されたより一層惨たらしい「1961年10月17日パリ虐殺事件」= *Massacre du 17 octobre 1961* なのである。この事件は、大江の1961年の東西ヨーロッパ訪問中に発生したのであった。アルジェリアの解放のためのデモンストレーションをおこなっていたアルジェリア移民のFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani* のシンパサイザーを、パリ警視庁の治安部隊は、非情な形で鎮圧し、200人以上のデモンストレーター（FLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の説明によると300人以上）を惨殺した——この事件の被害者には、銃殺される者、手を切断するなどの残酷な拷問を行使された者、手を縛られたままセーヌ河に投げつけられた者などがいた。しかし、この虐殺を行った警官は、ただの一人も何らかの処置の対象にすらされなかった。それどころか、当時のパリ警視総監は同年ド・ゴール大統領に *Legion d'Honneur* レジオン・ドヌール勲章を授与されているのだ。そしてこのことは、こうした帝国主義的権力の本国国内における暴力的行使が警察による独断的なものではなかったことを示している。

これらのアルジェリア移民の（犠牲者のなかにはアルジェリア移民だと誤解され、暴力の対象にされた一部の「南」ヨーロッパ人も含まれていたが）「デモンストレーター」の「叫び声」を政権のメディアに対する徹底的な検閲や圧迫を無視して世界に「可聴化」= *monstrare* しようとしたのは、サルトル⁴⁵⁷やクロード・ブルデのようなごく少数の「怪物」^{モンスター}的な知識人にすぎなかった。そのため、これらの「叫び声」は、近年まで、フランスの体制側やメディアによってほぼ完全に（自己）検閲=不可聴化されていたのである。

1990年代にやっとフランスの進歩的な歴史家エイナウディがこの問題をめぐ

⁴⁵⁷ Einaudi, Jean-Luc, *La Bataille de Paris – 17 octobre 1961* (réédition en poche en 2001, postface inédite de l'auteur), Édition SEUIL, Paris, 2001年、はこのことに詳しい。

るコラムなどを公開し、著書 *La Bataille de Paris —17 octobre 1961* を発表した——この書の題名は、事件の翌月サルトルが *Les Temps Modernes* 誌に掲載した論文の題名を捩ったものである。この書で双方の事件の責任者とされているのは——後にヴィシー政権下の高官として1500人以上のユダヤ人虐殺に関与したとして「人道に対する罪」が1980年代から問われるようにもなっていた——当時のパリ警視總監モーリス・パポンであった。先にも述べたとおり虐殺が行われた1961年にド・ゴール大統領にレジオン・ドヌール勲章を贈られたモーリス・パポンはエイナウディに対し名誉毀損裁判を起訴している。エイナウディの勝訴によって、当時まで「不可視化」され「不可聴化」され、検閲されていたこの暴力事件の実相があらためて *monstrare* されることになったのである。しかし、この虐殺事件は、フランスの歴史教科書など公式の歴史に含まれていないままである。大江は『叫び声』においてこの暴力事件に文学的な表象を与え、虐殺されたアルジェリア解放運動のシンパサイザーの「叫び声」を1962年の時点ですでに日本語の読者の耳に「可聴化」していると言える。

『叫び声』の作中作者として設定されている「僕」は、このパリにおける流血事件を日本における「虎」と呉鷹男に対する（新旧）「植民地主義的暴力」の体験と絡ませ、それを媒介にパリの流血事件の犠牲者に共感=*sympathie* を覚えている。言うまでもなく、「僕」は大江のフランス訪問前後に発生した反 OAS やアルジェリア解放運動のシンパサイザー=*sympathisants* の「デモンストレーション」に対する強権の暴力手段としての警察（そして極右団体）が行使した「暴力とそれによる恐怖」の環境を経験したのであった。

『叫び声』におけるこの共感=*sympathie* のモチーフは、フランスの強権の「暴力とそれによる恐怖」の環境を、安保闘争前後における体制側の暴力手段としての機動隊（そして極右団体）の過剰な暴力行使の結果命を落とした女子大生樺美智子の記憶の観点から共感=*sympathie* 的に受け止めたことを読み手に暗示しているのだ。大江は、反 OAS 「デモンストレーション」に対する「暴力」を、このように「共感」=*シンパシー* = 「感情移入」をとおして見ているが、エスニシティ・人種・民族・国民的文化的制限を越境した共感=*sympathie* の感覚は、以下に示すとおり、この小説の主要な要素の一つなのである。

*

小説の題名として設定され、物語の冒頭から終わりにかけて一貫して読み手の聴覚に訴えるこの「叫び声」のイメージの参照先は、サルトルが書いたもう一つの「序」=*Préface* である。大江が、自らの「引用への偏愛」の「始まり」を『叫び声』（1962年11月）として規定し、『叫び声』の冒頭に語り手が述べている内容が、サルトルのスペイン市民戦争のルポルタージュのために書いた解

説からの引用であると説明したことは、第三章で触れたとおりである。しかし、サルトルが「序」を付けたこの書の題名は、大江自身によっても、先行する『叫び声』論の論者たちによっても、明確にされていないままである。サルトルが「序」を付けた、現在ほとんど忘却されているこの幻の書は、スペイン人の反ファシスト運動家 *Juan Hermanos*(ホワン・エルマーノス)がスペインでの自らの体験に基づいて書いたルポルタージュ *La Fin de l'espoir, témoignage* (1950年)である。行方不明になった多くのスペインの反ファシスト運動家の一人である「ゴースト・ライター」の *Juan Hermanos* が、サルトルに送ったこのテキストは、1949年に *Les Temps Modernes* 誌で初めて翻訳掲載され、1年後に書物の形式で出版されたものである。*La Fin de l'espoir, témoignage* は、『希望の終り』という題名のもとで1954年に日本でも翻訳出版されている。『叫び声』の冒頭において大江は、サルトルの「序」への言及をする。⁴⁵⁸

ひとつの恐怖の時代を生きたフランスの哲学者の回想によれば、人間みな遅すぎる救助をまちこがれている恐怖の時代には、誰かひとり遙かな救いをもとめて叫び声をあげる時、それを聞く者はみな、その叫びが自分自身の声でなかったかと、わが耳を疑うということだ。⁴⁵⁹

このフランスの哲学者とは、紛れもなくサルトルである。彼はナチスによる占領、それと協力した極右のヴィシー政権などという強権のもとで、「恐怖」の時代を生きてきた。そして『希望の終り』の「序」は、幻の救いの「叫び声」

⁴⁵⁸ Sartre, Jean-Paul, "La fin de l'espoir: témoignage traduit de l'espagnol," *Les Temps Modernes*, no: 50 Decembre 1949年、1040~1088頁。 *La fin de l'espoir: témoignage traduit de l'espagnol* Preface par Jean-Paul Sartre, Juan Hermanos, Julliard, 1950年、Juan Hermanos、『希望の終り』、松浪信三郎訳、ダヴィッド社、1954。

⁴⁵⁹ 大江が『叫び声』の冒頭において引用した一節のサルトルによる原文は次のようなものだ。

“Une nuit, pendant l’occupation, nous étions réunis quelques amis et moi dans une chambre d’hôtel. Tout à coup une voix inconnue a crié au secours dans la rue . Le son de cette voix était tel que, sans nous concerter, nous sommes descendus en courant: nous avons trouvé la rue déserte, nous avons fait le tour de pâté de maisons et n'avons rencontré personne. Nous sommes retourné à notre travail mais de toute la nuit cette voix n'a cesse de crier dans nos oreilles. Une voix sans visage, sans nom qui criait pour tous: en ces temps de peur nous attendions tous une aide lointaine, un secours qui tardait et chacun se demandait s'il n'avait pas entendu sa propre voix. C'est cette voix qu'il m'a semblé quand j'ai lu pour la première fois "La Fin de l'Espoir"; c'est elle qui, de Madrid, a lancé cet appel à la fin de janvier 1946.” (Sartre, Jean-Paul, *La fin de l'espoir* 7~8頁、下線は引用者による)

の逸話から始まる。何かの作業中のサルトルと友人たちは、占領期のパリのある夜、外からの「救いをもとめての」「叫び声」を聞きつけ、その「叫び声」をあげた人を助けようと思って外へ駆け出す。だが、その人は見当たらず、もう手遅れだったという。

戦中ナチス・ドイツの半植民地のようなものへ^{テロル}転換されていたフランスでは、多くの進歩派=*resistants* やユダヤ人が強権の「暴力」の標的にされ、虐待されたり、強制収容所に監禁されたり、虐殺されたりした。その一方で、スペインの進歩派は、市民戦争（1936～1939年）に敗北し、ヨーロッパがファシズムから解放されることを、ヨーロッパの「兄弟たち」=*hermanos*⁴⁶⁰がスペイン人民をも解放してくれると確信して、「まちこがれていた」。スペインの進歩派の一人としての Juan Hermanos が、「救いをもとめて」書いたこの書は、スペイン市民戦争というより、フランコファシズムによる国家テロルの標的にされた進歩派の悲劇の目撃録なのだ。サルトルは、この書を読んで、占領下のパリでのあの夜に、耳にし、彼をぞっとさせた匿名の「救い」の「叫び声」の記憶を想起する。サルトルの働きによって出版された Juan Hermanos の「叫び声」を読んで共感し、危機感にとらわれたフランス人の「兄弟たち」=*hermanos* は、救助や支援を行おうと望むようになったのだが、もはや手遅れであったのである。ファシズムから解放されたヨーロッパの「南」に位置するスペインでフランコが死んだ1975年まで続いたフランコの独裁政権下において Juan Hermanos は（他の多くの進歩的運動家と同様に）、この書が世に出た時点ですでに行方不明になっているのだ。

『叫び声』では、南ヨーロッパの若くて美しい娘アルクメーヌが、「僕」をもう一つの南ヨーロッパの国の言葉であるイタリア語で *Mio fratello* =「わが兄弟」と呼んでいたが、「僕」は彼女の「南」=「第三世界」の連帯への呼びかけの「叫び声」には鈍感であった。他者の苦悩=恐怖の「叫び声」に対する共感^{シンパシー}／感情移入、つまり他者を「兄弟」=*hermano*=*fratello*=*frère* 同然として思う *sympathie* をめぐるこの一節には、西欧で新左翼が掲げた「第三世界論」の本質に迫るものがある。「周辺世界」の解放闘争に共感して、それを支援するという原則に基づく西欧の「第三世界論」は、主に国際的な^{アンガジュマン}「参加」による動員で注目された「スペイン市民戦争」をモデルにしていた。エスニシティ・人種・民族・国民的^{ナショナル}文化の制限を越境した共感=*sympathie* による^{アンガジュマン}「政治的な参加」の現場となったスペイン市民戦争は、敗北に終わり、その後が発生した第二次世界大戦によって完全に忘却され、大戦が終わってからもフランコファシズムの国家テロルの犠牲にされたスペイン進歩派の「叫び声」にヨーロッパの「兄弟たち」=

⁴⁶⁰ *Hermano* はスペイン語で「兄弟」という意味を指す。

hermanos は耳を傾けようとしなかったのだ。サルトルはこのテキストを *Les Temps Modernes* 誌で掲載させることによって、Juan Hermanos のファシズムに押し殺された「叫び声」を、フランスや世界の他の進歩的な「兄弟」=*hermanos* に「可聴化」=*monstrare* することに貢献したが、スペインに関してはもはや「手遅れ」であったのだ。

スペイン市民戦争に「^{アンガージュ}参加」できなかったことへの「後悔」＝「手遅れ」の感覚は、サルトルの *L'age de raison* などの小説においても登場してくる。（そしてこうした「手遅れ」の感覚は、大江の『われらの時代』をはじめとする初期小説においても強い存在感を放った。）サルトルのようなヨーロッパの知識人は、戦前のスペイン市民戦争での敗北やファシズムの成功が戦後にも継続によりファシズムからスペインの「兄弟」=*hermanos* を解放することに「手遅れだった」という挫折感を償う機会を、西欧植民地体制のファシストによる「国家テロル」に「現在」曝されているアルジェリアなど被圧迫民族を助け、その自立を促進するという「第三世界」への企図の中に見いだしているのである。「第三世界論」を掲げた新左翼の誕生には、このような「共感」=*sympathie* 意識が大きな役割を果たしたのであった。

『われらの時代』における「アラブ人」という作中人物の構想からも明瞭であるように、大江自身は *authentique* な「^{モンスター}怪物」としての表象を付与した *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* やそれが率いるアルジェリア解放戦争に共感=*sympathie* を持っていた。大江がフランスの進歩的青年よりも *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* という *authentique* な「^{モンスター}怪物」にさらにシンパシーを抱いていたことは、大江が1962年に書いた「一九六〇年代の赤毛布」という短いエッセイの冒頭において判明する。

「一九六一年の秋から冬にかけて、ぼくはヨーロッパを旅行した。ぼくは、初めアフリカの北海岸を旅行したいという希望をもっていた。ぼくはとくにアルジェリアの都市を、そして可能ならば、その地方の村々を見たかった。しかし地方だけでなく、その都市も、見ることはできなかった。フランスで公式に、あるいは非公式にぼくのまえにあらわれたのは、アフリカ北海岸に、現在、旅行しようなどと考えること自体が常識を欠いているのではないか、というやわらかな拒絶であった。」⁴⁶¹

大江がぶつかった「公式」「あるいは非公式」の拒絶の壁は、アルジェリアが独立すること、あるいは、「在仏」アルジェリア移民を一人前の市民として認め

⁴⁶¹ 大江健三郎、「一九六〇年代の赤毛布」、『厳粛な綱渡り』、138頁。

ることを「公式」「あるいは非公式」に拒絶する極端な保守主義の壁と重なりあっている。この拒絶の壁にぶち当たった大江には、アルジェリアに行って「アルジェリアの都市を」、そしてFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の拠点となっていた「その地方の村々」を訪問することができなかった。しかしアルジェリアの解放に共感を持ち、それを支援し、フランスを虜にしている極右テロルに抗議する「シンパサイザー」によって行われた「デモンストレーション」には「参加」することができたのである。

大江は、エッセイ「パリの大学生」の「OAS抗議デモ」と題された第二部において、11月末におこなれ、サルトルとドボヴォワールも「参加」したという「反OASのもっとも大規模のデモンストレーション」に、自らも「参加」したことを述べている。このエッセイにおいて大江が重きを置いているのは、OASの「テロリスト」やヴィシー政権の警察官から構成されている警察による「暴力」に対する「恐怖」の感覚である。アルジェリアという植民地の問題において一定のいきづまりに至った1960年代初頭に、暴力は、宗主国フランスにブーメランのように戻ってきた。強権に対して「真実を語ろう」とする反OASのデモンストレーターであるフランスの進歩的青年的恐怖に包まれた「叫び声」と、親新植民地主義的強権に対する反安保闘争を担った日本の青年的恐怖に包まれた「叫び声」の相似性は、『叫び声』の後半の主なテーマである。

サルトルが極右団体OASの標的になったと同様に、「セヴンティーン」の著者である大江自身も反安保闘争の過程において岸政権によるデモンストレーターに対する手段として非合法に動員された極右の「暴力」の余波の標的となっている——逆説的なことにド・ゴールや岸も極右に襲撃されることになった。

大江は、「パリの大学生」にて当時のフランスの青年と日本の青年の間における共通点／相似点の多さを指摘している。この共通性は、日本とフランスの戦中のファシズムと戦後の保守的体制の間における一定の継続性によるものである。日本の反安保デモンストレーションと、フランスの反OASデモンストレーションの共通点は、その主な原動力が戦前戦中のファシズムと帝国主義が、戦後において復帰してくることへの危機意識であったということにある。戦中、ナチス・ドイツに占領され、コラボレーターかつファシストのヴィシー政権が成立したフランスも、東や東南アジアの諸国に対し帝国主義的テロルを行使した過去を持つ日本も、ファシズムと帝国主義の過去の自己批判を十分に行わなかったという点で共通している。例えば、1945年のセティーフ虐殺事件から1961年の「パリ虐殺事件」において象徴的に見てとれるように、フランスの植民地保持政策は、ナチス・ドイツがフランスに対して行使した「暴力」を北アフリカや、フランスで、アルジェリア系移民に対して再現する試みにほかならなかったと言える。

1950～60年代のフランスの植民地問題にかかわる「暴力」は、安保闘争前後の日本のそれと比較にならないほど大規模な破壊性を持つものである。ここで大江が共感していることは、「民主主義を踏み^{モンスター}にじった」自国の強権や極右の「暴力」＝テロルに対し、*authentique*な「怪物」としてのFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*とは異なり、かれらがそれぞれに「テロもおこなわず、嘘もつかず」「勇気をもって自己の怒りと悲しみと不安とを抑制し、ルールをまもっ」て、民主的に自らの「恐怖」に包まれた「叫び」⁴⁶²を届けようとしたことなのである。

以上述べてきたとおり大江は、反安保闘争後の「政治的離脱」に対して批判的ではあるが、安保闘争を完全に貶めているわけではない。例えば、アジア・アフリカ作家会議のときに「第三世界」の作家や知識人と語り合った際に、アフリカのジャーナリストが「安保闘争をつうじてかちえた最低線のところはなにか」という質問をつきつけたとき、それに日本の20世紀初頭の進歩的な詩人石川啄木が死ぬ前に書いたエッセイの一節を援用してこたえる。

石川啄木はこのエッセイにおいて《われわれ日本の青年は、いまだかつてかの強権にたいして何らの確執をかもしたことがない》という批評がある。我々五十年後の日本の青年は、とにかく強権に確執をかもしたのだ、この叛逆精神、抵抗精神は、われわれにとって確かに血肉となっているにちがいないと信じたい。⁴⁶³

ここで、大江は強権に確執をかもそうとして発足した20世紀初頭の進歩派の「抗議の声」が、「大逆事件」などを口実にした強権によって抑圧されたという記憶を引き合いに出して「安保闘争」の「遺産」を考えている。大江が、アルジェリア解放戦争を行っているFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*のように*authentique*な「怪物」^{モンスター}に変身しない日本やフランスの青年に共感を持っているのは、(新)植民地主義と深くかかわったそれぞれの「強権」に、確執をかもそうと恐怖に包まれた「叫び声」をあげつづけ——フランスの文脈では、アルジェリアが解放を得てOASが無効にされ、日本の文脈では岸政権が崩れ、国がより民主的になったことから⁴⁶⁴——抵抗にある程度の成功をおさめたからなの

⁴⁶² 大江健三郎、「民主主義が踏み^{モンスター}にじられた」、『厳粛な綱渡り』、101～102頁。

⁴⁶³ 大江健三郎、「強権に確執をかもす志」、『厳粛な綱渡り』、114頁。

⁴⁶⁴ 例えば、「六〇年安保闘争とは何だったのか」において松井隆志によると、高揚し、岸信介を辞職に追い込むに成功した安保闘争は、新安保条約が成立し、保守政権とともに存続したことを考慮すると敗北に終わった。しかし、安保闘争のもっとも大きい実績は、自民党政権による戦前戦中のファシズムを復帰させるという「復古」路線に大打撃を与え、戦後日本の民主化に貢献

である。

作家として、また人間として大江自身は、「アルジェリア戦争の時代」の最中に勃発した安保闘争のこうした「抵抗精神、叛逆精神」の遺産の延長線上にありつづけた——「ぼく個人にかぎっていえば、ぼくは強権に確執をかもす志が、ぼくにとって現実生活においても文学にも最も重要であると、実感をこめてさとしたということができると思う。」⁴⁶⁵

V.5. おわりに

『われらの時代』、「セヴンティーン」やとりわけ『叫び声』に登場させた一連の作中人物＝準ヒーローを構想するにあたって、大江はサルトルの「黒いオルフェ」や「ファノン論」における「怪物」^{モンスター}というイメージを転用した。そもそも「怪物」^{モンスター}（ないしは「怪獣」）とは、西洋の表象のレヴェルにおける「姿勢と言及の構造」＝*structures of attitude and reference* ^{ヴァリエーション}の一変種なのである。サイドは、『文化と帝国主義』の「抵抗と対立」＝“Resistance and Opposition”と題された第三章において、「怪物」^{モンスター}＝怪獣のような「姿勢と言及の構造」に基づく表象が、いかに、脱植民地化以降の新たな文化的自己同一性^{アイデンティティ}の建設過程において転用されたかということについて論じている。その際サイドは、「キャリバン」というシェクスピアが『テンペスト』(*The Tempest*, 1611年)⁴⁶⁶で、アメリカ大陸の原住民に差別的な表象を付与することで構想した「半獣人」の「かたき役」^{アンタゴニスト}を「第三世界」の作家が反転し転用していることに焦点を当てている。本論文の批評的なカテゴリーに従って言うとこれは『われらの時代』の分析の際に取り上げた「模倣しつつの反転」＝*mimetic reversals*に基づく「脱文脈

したということである。岸の次に自民党政権を担った池田勇人は、「所得倍増計画」を掲げ、「政治の季節」から「経済の季節」への移行をはからざるを得なかったのも安保闘争の働きかけによるものだった。平和憲法の改憲の動きの阻止を可能にしたのも安保闘争の実績だ。

また安保闘争は、以後の日本における多くの闘争の「原点」となった。（松井隆志、「六〇年安保闘争とは何だったのか」、141頁）

⁴⁶⁵ 大江健三郎、「強権に確執をかもす志」、116頁。

⁴⁶⁶ この劇の主人公は、ナポリ王らによって国を奪われ、娘とともに祖国から追放されたミラノ公爵プロスペロである。孤島に流れ着いたプロスペロは、魔女によって監禁されていた空気の妖精エアリエルと半獣人（＝怪物）のキャリバンを解放し、12年間にわたって二人とともに暮らす。12年後に、ナポリ王一行の船が近くまでやってくると、魔法で嵐を起こしてナポリ王の船を孤島に漂着させる。結局プロスペロは、ナポリ王一行を魔法で改心させ、半獣人のキャリバンらによる叛乱を防ぐことで名誉回復をすることに成功する。

化」=*decontextualization* という「方法」の一変種^{ヴァリエーション}であることになる。サイードのこの理論は、『われらの時代』、「セヴンティーン」、とりわけ『叫び声』における「第三世界」と連動する *authentique* と *inauthentique* な「怪物」^{モンストル} のイメージを分析するうえで、きわめて重要な観点を提供しているためここで触れることにする。

サイードによればマルティニークの詩人エメ・セゼールによるシェクスピアの作品に対する再解釈=*reinterpretation*/再記入=*reinscription* としての『ある嵐』(*Une tempête*, 1969年)は、「ルサンチマン」ではなく、「カリブ海世界を表象する権利は誰にあるかをめぐって」「シェクスピアと競いあおうという試み」である。セゼールのこの「競いあい」の「衝動は、これまでの依存的で従属的なアイデンティティと縁を切って、それとは異なる統一のとれたアイデンティティ獲得をめざすなかで、その基盤となるものを発見する大がかりないとなみの一部」⁴⁶⁷となっている。

この「これまでの依存的で従属的なアイデンティティと縁を切って、それとは異なる統一のとれたアイデンティティ獲得」という「第三世界」ナショナリズムのヴィジョンは、本章で呈示してきた、『叫び声』というテキストに孕まれている「第三世界」のヴィジョンと重なり合っている。

しかし、『叫び声』では、それが直接に読み手には呈示されない。アメリカニズムと「第三世界論」の間を揺らいでいる呉鷹男も、「虎」も、「僕」もこのような「アイデンティティ獲得」の認識には到達することができず、それに近づいたとたん、迂回してしまう人物として布置されているのだ。彼らよりは、ギリシアの若い娼婦のアルクメヌと、「僕」を「わが毛沢東」^{マオツエトン}と呼ぶアルクメヌの連れの「南」ヨーロッパ人や、反 *OAS* の抗議者^{マイナー}といった副次的なキャラクターたちの方が、建設中の「第三世界」としての「アイデンティティ獲得」のヴィジョンに接近している。物語に内包される *authentique* で統一された「第三世界」のヴィジョンが、「僕」の屈折し、グロテスクで性的な色合いに染まった語りにおいて断片化されているため、読み手はそれを再構築するという建設的ないとなみに「アンガージュ」しなければならない。つまり、サイードが開示するところのセゼールにおける「アイデンティティ獲得」のいとなみを、『叫び声』の読者は読書行為において経験することになるのだ。

サイードは、同章においてセゼールの次にバルバドス出身の小説家・詩人ジョージ・ラミングの *The Pleasure of Exile* (1984年) で開示した「怪物」=^{モンストル} キャリバンに焦点を当てる『テンペスト』再解釈=再記入を紹介している。ラミングの言葉を借りるならば、キャリバンは、「排除された者、永遠に可能性を奪

⁴⁶⁷ サイード、エドワード、W., 「対抗と対立」、『文化と帝国主義』、40頁。

われた存在であり、「彼とは異なる者たちが育んだ目論見のために横領され搾取されうる奇貨であり、存在状態である」。そのためキャリバンにも、自らの「いとなみの結果として独自性を認識できる歴史」を持っていることを「証明してやらなければならない」。サイドが援用するところのラミングは、そのためにキャリバンがなすべきことを「『言語をあらたに』洗い清めることによって『プロスペロの古き神話を粉碎』」⁴⁶⁸することだと説明している。

ラミングもセゼールも、「キャリバン」という植民者ないしは宗主国中枢の文化が自分自身に押し付けた差別的表象を即座に否定せず、逆に文化的脱植民地化のうえで利用すべきものとして位置づけているわけだ。

「キャリバン」に対する「再解釈」＝「再記入」のいとなみにおいてサイドが同章で紹介しているもうひとりの知識人は、「第三世界」運動の指導者チェ・ゲヴァラやフィデル・カストロの親友でもあるキューバの批評家ロベルト・フェルナンデス・レタマルである。レタマルは *Caliban and Other Essays* (1989年) において近代の中・南アメリカ人やカリブ人にとって、「エアリエルではなくキャリバン自身が、異種交雑性の主たる象徴であり、はたせるかなその数々の属性は、奇妙で予測がつかないかたちで混淆している」と述べている。ここでの「エアリエル」はカリブや中・南アメリカなどで生まれ育ったヨーロッパ人を指すクレオールを、「キャリバン」はインディオとスペイン人との混血である「メスティーソ」を象徴的にあらわす暗喩である、とサイドが解釈をつけている。

つまり、サイドの（レタマルのテキストをめぐる）解釈によれば「キャリバンは異種交雑性の主たる象徴である」という命題をとおして言及しているのは、「メスティーソ」という民族的な異種交雑性を持つ民族であり、「クレオール」という文化的な異種交雑性を持つ民族なのだ。異種交雑性は、「第三世界論」という新規の共同体を建設する企画において民族中心主義を越境するうえでの一定の自己同一性のモデルとなっている。『叫び声』で呉鷹男や「虎」という「混血児」＝メスティーソ的な作中人物を登場させ、「キャリバン」のような「怪物」になろうとする人物として構想したことで大江は、中・南アメリカ＝「第三世界」の作家・文学者の観点を先取りしていると言える。

一方で、サイドによれば、レタマルのこの見解は、脱植民地化過程における文化のレヴェルでの脱植民地化というイデオロギー論争と深く関わっているという点で極めて重要である。大江が『われらの時代』以降の「セヴンティーン」や『叫び声』のような作品で、*authentique* と *inauthentique* な「怪物」という二項対立的なイメージを築いたことにはすでに触れた。この二項対立によって大江が探し求めていたのは、*authentique* な「第三世界」のヴィジョンである。そこにはインターナショナリズムへと拡大すべき一定のナショナリズムの

⁴⁶⁸ 同上書、41頁。

探求も見てとれる。それが民族中心主義ないしは、単民族神話に基づく「第三世界」ナショナリズムではないことは、『われらの時代』におけるキャリバンのキャラクターとしてのアルジェリア人、朝鮮人との連帯の探求、そして、『叫び声』における「メスティーン」的「混血児」や、南ヨーロッパ人が登場させられていることから明瞭である。

大江はこれらの小説を「アルジェリア戦争の時代」に書いていた。当時の世界の進歩的な環境において *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* やナセル主義など「第三世界」ナショナリズムの評判は悪くなかった。だが、連鎖する敗北をとおして「第三世界」という企画が衰え、社会主義が崩壊過程に入り、新自由主義の「グローバルゼーション」という新植民地主義体制の延長線上にある支配形態が台頭するようになった 1980 年代以降、「第三世界」ナショナリズムは徐々に貶められるようになった。「第三世界」＝「南」(=*Global South*) が、「後進国」と同義に地政学用語に還元されたのもこの時期においてである。

サイドは、1950 年代から 1980 年代後半までの原住民＝被植民者が、彼らに押し付けられた「怪物」^{モンスター}の表象からいかに *authentique* な「第三世界」ナショナリズムを紡ぎ出せるかを論じたサルトル、ファノン、セゼール、ラミングやレタマルの理論や、原理主義、国粋主義的独裁政権などの歴史的展開に基づき、*authentique* な「第三世界」ナショナリズムの可能性を 90 年代の時点で探求しはじめている。このような探求に大江が「アルジェリア戦争の時代」においてすでに着手していたことは、『叫び声』の「キャリバン」的な準ヒーロー＝呉鷹男が哲学ノートに付けた言葉からもうかがえる。

呉鷹男はかれの哲学論文ノオトのなかに《*authentique* 真正の、正しい、確かな、間違いない、本物の、間違がなくその土地の》という一節をくわえて、時どきこのフランス語の単語を援用してかれ自身の熱病を追求した。L'homme *authentique* というのが、かれによれば、この現実世界にちゃんと市民権をもって生きている人間のことだった。真正の、その国の人間、本物のその国の人間、間違がなくこの土地の人間。そしてそれがなにに原因したのかはわからないが、かれは *authentique* でない人間なのだ、それがかれの不安と渴望の熱病の根元的なみなもとなのだ。《おれは緊急に、おれ自身の *authentique* な土地にかえりつくことを考えなければならないぞ、緊急に、緊急に！おれはこの他人どもの現実世界に仮の逗留^{とうりゅう}の状態なんだが、欲求不満のオナニストということではなにひとつ有効な解決はみちびきだせやしない。今までのおれの試行錯誤は、みなムダだったわけだ。おれはまったく自滅寸前なんだ。おれは緊急に、緊急に、おれ自身の国、おれ自身の土地へかえるてだてをみつけれ

ばならない。しかもそれは、虎がやったような棄身の攻撃によってみつ
けだすほかないだろう》⁴⁶⁹

「第三世界」を「建設」する過程でいかなる（「第三世界」）ナショナリズム
が有効なのかという問題を論じるうえで、「キャリバン」というイメージを持ち
出すサイドのアプローチと、*authentique* な自己同一性^{アイデンティティ}＝共同体を回復する
うえで「半怪人」＝「虎」を模倣しなければならないと呉鷹男に考えさせた大
江のそれとの間で、両者には時代を超えるような奇妙な対応性がある。もとよ
り同時代的影響受容関係からしてみれば二人の参照先もサルトルやファノンの
ような「第三世界」理論家ではある。それにもかかわらず、このような対応性
は、サルトルのファノン論を反響させた大江が扱ったこの「第三世界論」をめ
ぐる問題が、90年代にまで持続していたことをあらわにしている。ここで、サ
イドの「キャリバン」や「第三世界」ナショナリズムをめぐる理論を引き合
いに出して大江の *authentique* と *inauthentique* な「怪物」^{モンスター} といった二項対立的な
イメージを ^{レトロアクティヴ} 遡及的に考察する作業を続けることにする。

レタマルの理論に依拠するサイドの整理によれば、帝国主義に対して三種
の原住民＝被植民者^{コロニゼ}の態度があり、そのなかの二種は「第三世界」ナショナ
リズムと関わっている。

1. 「エアリエルがするようにすること」=*to do it as Ariel does*: これは、「プロ
スペロの忠実の下僕になることである」。原住民＝被植民者は、その「忠勤
に対する報償としてプロスペロから自由を授けられると、生まれながらの
領分にもどる。」「プロスペロに協力しても不利益をこうむらない」と思い
こんでいる「原住民のブルジョワジーの」態度である。
2. 「キャリバンのごとく行動すること」=*to do it like Caliban*: 自らの雑種的境
遇を意識し受け入れつつも、それにくじけず未来の発展をめざして果敢に
行動する。
3. 「キャリバンの存在であること」=*to be a Caliban*: 「みずからの本質的、植
民地時代以前の自己を発見するプロセスをとおして、これまでの隷属状態
と肉体的歪曲から脱却すること。この第三のキャリバンが属するのはネイ
ティヴィズム的でラディカルな民族主義である。そこから〈ネグリチュー
ド〉や原理主義やアラブ主義などが生まれた。⁴⁷⁰

ここで注目すべきは、この「2」と「3」に定義されたところの二つの側面か

⁴⁶⁹ 大江健三郎、『叫び声』、144～145頁。

⁴⁷⁰ サイド、エドワード、W., 「対抗と対立」、『文化と帝国主義』、41～42頁。

らなる相互補完的な「キャリバン」像である。なぜなら、この二つの「像」は互いに他を育み、互いに他を必要としているからである。「プロスペロ」的なアウトサイダーに弾圧され、搾取された被圧迫民族は「キャリバンの役割を演じた。自らが従属民族であることを認識するようになることが「反帝国主義的ナショナリズムの礎」となるのだ。このような「自覚」から、進歩的な（「第三世界」）「文学」が、「少数者と女性の権利を求める闘争」が、そして「新たな独立を求める闘争」が誕生した。同じナショナリズムの意識は、進歩的なヴィジョンから疎外されることによって、元植民地体制に取って代わるような保守的な愛国主義と外国人差別、宗教的原理主義を生み出す潜在力を持つ。

サイドは、帝国主義的弾圧下におかれた地域（アルジェリア、ギニア、パレスチナ）においてこそ、もっとも進歩的な「少数者と女性の権利を求める闘争」など「解放をもとめる大きな運動」が顕著であることを指摘する。そして、「権威主義的・国粹主義的思想の力を極力抑えようとする思想の領域が（「第三世界」）ナショナリズムには」つねにあったことを、「ポストコロニアルの政治の研究者たち」が無視することを批判し、「第三世界」ナショナリズムを、一連の独裁政権によって定着した悪いイメージにのみ還元することは正当ではないとしている。サイドは、読者に、1950年代後半から70年代にかけての「第三世界」ナショナリズム——言うまでもなくこれは大江が『われらの時代』や『叫び声』のような初期作品において表象を与えたものと同一のものであるが——の知的遺産を回顧することを提唱しているのだ。

帝国主義に対するナショナリストの抵抗は、その最良の段階では、つねに自己批判的であった。このことは〔第三世界ナショナリズムの主要な〕人物たち——C・L・R・ジェームズ、ネルーダ、タゴール、ファノン、カブラルその他——の著作を丁寧に読んでみればわかる。反帝国主義勢力、ナショナリズム勢力のなかにある、仲間割れをおこし政治的覇権をもとめる傾向を彼らは、厳しくいさめていた。⁴⁷¹

つまり、「第三世界」ナショナリズムが*authentique*でありえるのは、反帝国主義と自己批判的な二つの態度を併せ持つ場合のみであるということである。このようなヴィジョンが失われた「第三世界」の地域は、ネイティヴィズム、権威主義、国粹主義や原理主義など*inauthentique*=保守的な方向に帰趨するということだ。『われらの時代』の南靖男やジャズ・トリオも、「セヴンティーン」の「おれ」も、『叫び声』の呉鷹男、「虎」や「僕」も、このような一貫した反帝

⁴⁷¹ 同上書、50頁。

国主義的「第三世界」ナショナリズムと自己批判のヴィジョンを併せ持てないため、保守的なアメリカニズムの穴ぼこに陥ってしまい、プロスペロとしての新植民地主義と協力する植民地ないしは半植民地の国の保守政府のように、「エアリエル」的な立場に漂着する。またそれゆえに『われらの時代』の「キャリバン」＝「怪物」^{モンスター}的な存在として設定されているFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の極東代表部を作るためにアルジェリアから日本にやってきた「アラブ人」のような^{アイデンティティ}*authentique*な自己同一性を獲得することに失敗するのである。

すでに指摘したとおり、大江は、アジア・アフリカの作家らに安保闘争の自己批判に基づく総括を行い、「安保闘争をつうじてかちえた最低線」について報告する際、「石川啄木」という進歩的詩人を援用して、「日本の青年は、とにかく強権に確執をかもしたのだ、この叛逆精神、抵抗精神は、われわれにとって確かに血肉となっているにちがいないと信じたい」と言った。前述の大江作品の登場人物たちはこのような*authenticité*を一時的に獲得したが、「アジア・アフリカ・ブロックの一員としての戦いであった」安保闘争後の日本青年の「政治的離脱」^{デザンガジュマン}により、自ら「を明日の世界へと能動的にむすびつける」というヴィジョンを持てなかった。大江のこうした（自己）批判が「セヴンティーン」や『叫び声』^{モンスター}において小説の形式を取ったと言えよう。こうした批判の色合いは「怪物」＝「キャリバン」に変身することを志したが、それを実現させることができず*inauthentique*な方向に迂回してしまった「メスティーツ」的青年の物語である『叫び声』においてとりわけ濃厚になっている。

*

本章の最後に、『叫び声』の文体のレヴェルにおけるハイブリッド性によるコスモポリタニズムに触れておく必要がある。『叫び声』の文体においても、「見るまえに跳べ」、「喝采」や『われらの時代』のような、「国語」の制限を越境する意図に動機づけられるような、「非日本語」的なコスモポリタニズムの雰囲気を感じとらずにはいられない。これは、「異言語」の単語やフレーズをテキストに取り込み、サルトルやファノンのような「第三世界論」の思想家の理論を引用する形を『叫び声』が取っているからである。この特色は日本の地理的文脈における「第三世界」の民族として定義できる在日朝鮮人の呉鷹男の^{モノローグ}*authenticité*をめぐる独白においてあらわれている。また「非日本語」的な文体は、とりわけ主人公と、ヨーロッパの「南」＝「第三世界」としてのギリシアの若い娼婦との関係を描く部分において採用されている。

呉鷹男がサルトルから引用したフランス語の*authentique*、*l'homme authentique*、ギリシア人の娼婦のアルクメーヌの片言のイタリア語と英語を媒介にした*nowhere*、*nessun luogo*、*mio fratello*といった外国語の単語は、外国語表記のままテ

クストに取り込まれている。また、英語の「ネヴァ・ランド」、毛沢東の固有名のフランス語発音である「マオ・ツエ・トン」、呉鷹男の朝鮮語の「本当」の固有名「オチャン」のような名詞もカタカナ表記の形で登場している。異なるレベルで「第三世界」問題と関わっており、大江の「第三世界と日本」というテーマを支える物語要素として機能しているこれらの単語やフレーズひとつひとつが、小説の文体に多様化と奥行きを付与しているのだ。このような方法を採り入れた作者の意図は、日本語という国語による文体にハイブリッド性を付与し、コスモポリタン化することにあると言える。文体のレベルのハイブリッド性は、呉鷹男＝オチャン、虎やダリウス・セルベゾフといった混血の作中人物のハイブリッド性と相互補完的な仕掛けなのである。

VI. 結論

数多くの言語に翻訳され、国際的に高い評価を受けた大江文学は、世界文学 (*Weltliteratur*) の地図で独自の位置を占めている。そこへ至る筋道をつけた『個人的な体験』や『万延元年のフットボール』は、大江が「アルジェリア戦争の時代」に書いた『われらの時代』周辺の一連の作品の延長線上にある。つまり、『『第三世界』と日本』というテーマを扱った一連の小説が、大江文学の「世界化」に多大に貢献したと言えるのだ。大江文学を「世界文学」たらしめた主要因に、大江の「第三世界」に対する共感ととも^{シンパシー}に同時代としての歴史に、「周辺」の立場から「参加」する^{デンガージュ}という構えがある。

VI.1. 「『第三世界』としての日本」という「意識的誤用」＝「意識的誤配置」——大江の日本をめぐるポストコロニアルのヴィジョン

ノーベル文学賞受賞前後の講演や記者会見などにおいて、自らを日本の作家としてだけではなく、「アジア文学の作家」として定義したように、大江は作家としての職業的^{アイデンティティ}自己同一性を「北」の（西側）の作家らとは異なる「世界」に求めていた。例えば、デューク大学で開催された“The Challenge of Third World Culture”というパネル・ディスカッション（1986年9月25～27日）において行った“Japan’s Dual Identity: A Writer’s Dilemma,”と題された講演で大江は日本を「第三世界」とし、自分自身を『『第三世界』の作家』として位置づけている。

I come to you today as a Japanese writer who feels that Japanese literature may be decaying. A confession like this by a writer from the third world will undoubtedly disappoint an audience that is expecting a genuine “challenge,” given the theme of our discussion: “The Challenge of Third World Culture.”

472

また、この講演で大江は日本を「第三世界」の国として位置づけているが、それは修辞法における「意識的誤用」＝「誤転用」＝*catathresis* という技法に相

⁴⁷² Oe, Kenzaburo, (Translated by Yanagishita, Kunioki,) “Japan’s Dual Identity: A Writer’s Dilemma,” *Japan the Ambiguous and Myself*, Kodansha International, Tokyo, 1995年, 59頁. (斜体強調は引用者による。この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

当するような仕掛けである。本論文の批評的なカテゴリーに従うと、この仕掛けを「意識的誤配置」と呼ぶことができる。大江による『第三世界』としての日本が「意識的誤用」＝「意識的誤配置」であることの一つの理由は、日本の国家と国民が「第三世界」の一員であるという「自己同一性^{アイデンティティー}」を認めることに不本意であるという帰趨である。

There are reasons, however, why I readily accept the part of disappointing clown and these have to do with an element in the Japanese nation and its people that makes them unwilling to accept the fact that they are members of the third world and reluctant to play their role accordingly.⁴⁷³

本論文の第四章で論じたとおり、日本の国家レベルにおける「第一世界」指向の傾向は、GHQの戦前戦中の天皇制を中心に据える旧体制を部分的に温存するという「脱帝国主義」・「民主化」戦略の産物である。また現代の日本人が自らの「第三世界」の一員としての「自己同一性^{アイデンティティー}」を認めることに不本意である帰趨は、国家レベルの「第一世界」指向性とともに、主に日本国民が「脱帝国主義」・「民主化」の過程から遮断されたことに由来していると言える。

さらに、日本の「脱帝国主義化」が軍事的敗北という事実によって他律的に行われ、この過程が「内部の人々の苦痛に満ちた葛藤によってではなく、外部の力によってもたらされた結果、そこに突如もたらされた空白は、日本人の精神構造や自意識に深刻な影響を及ぼさない方向に作用することになった」。このことが、「戦後補償、戦後責任の不十分さに深く繋がるアジア観の歪みの一つの大きな根拠」ともなっている。⁴⁷⁴

日本人が「第三世界」の一員と認めることを不本意と思う理由には、「植民地の問題」をめぐる情報が偏った形で伝達されつづけたということもある。敗戦後において「本国」の日本人に「入ってくる情報は、旧植民地からの引揚げ者たちと復員兵による、一方的なものでしかなかった」。朝鮮半島、中国をはじめとするアジア近隣諸国といった「旧植民地において植民地的支配をされた莫大な数の」「被植民者^{コロニヤル}」の人々の、「体験と経験の声から、まったく遮断されたところに、日本『国内』の人々はおかれたのである」。⁴⁷⁵

『われらの時代』周辺の作品において大江が、「第三世界」運動へ「参加^{アンガージュ}」

⁴⁷³ 同上書、59頁。

⁴⁷⁴ ^{ユンコオンチャ}伊健次、「戦後思想の出発とアジア観」、『戦後思想と社会意識』、引用は、小森陽一「敗戦後の植民地的無意識」、『ポストコロニアル』、岩波書店、東京、2001年、84～85頁より。

⁴⁷⁵ 同上書、84頁。

する志を抱きながら、この問題を自国の帝国主義の歴史＝自国の

「帝国主義的植民地支配の責任」と関わらせることができない作中人物らを登場させた理由は、このような歴史的な背景を意識してのことである。

そして『第三世界』としての日本が「意識的誤用」＝「意識的誤配置」であるもうひとつの理由は、大江によれば、「第三世界」という地政学的カテゴリーの歴史的文脈をめぐるものである。

Japan appeared on the international scene as a third world nation in about 1868.⁴⁷⁶

大江は、日本が国際舞台へ1868年に「第三世界」の国として登場したと言う。しかし、すでに述べたとおり「第三世界」という地政学的なカテゴリーが形成されたのは、第二次世界大戦以降の冷戦体制の時代においてである。冷戦時代にアメリカ合衆国が主導する「北」の「西側」＝「第一世界」と、ソ連が率いた「北」の「東側」＝「第二世界」という二つの「ブロック」は、資本主義＝新植民地主義と社会主義といった経済政治的なモデルの面で、NATO＝「北大西洋条約機構」とワルシャワ条約機構という集団防衛機構として軍事面で対立していた。先にも示したとおり、旧植民地主義という支配形態の下で植民地化され、第二次世界大戦後に「脱植民地化」された一連の「周辺世界」の国々は、新植民地主義体制の「第一世界」のみならず、既成社会主義体制の「第二世界」とも同盟関係を結ばず、「非同盟」の社会主義の「世界」を建設することを目指した。これらの国々は、歴史的に「第三世界」＝「南」と名づけられた。

したがって1868年には、「第三世界」どころか、「第二世界」＝社会主義というカテゴリーすらも存在しなかったわけである。1868年の時空における日本を「第三世界」と位置づけることは、アナクロニズムという意味において「意識的誤用」＝「意識的誤配置」である。大江は、日本を冷戦時代の経済政治的、地政学的な文脈に移転したのである。そして、アナクロニズムとしての「意識的誤用」＝「意識的誤配置」の仕掛けをとおして、1868年前後の日本に、冷戦時代における非同盟の「第三世界」に相似する要素が存在したことを暗示している。もとより、1868年代の日本と1950年代以降の「第三世界」の対比を踏まえてのことである。

歴史地理的時空を越境した大江のこうした対比は、奇妙に見えるかもしれない。なぜなら、19世紀後半における世界の経済政治的、地政学的条件および帝国主義的力関係は、20世紀後半のそれとは、質的に異なっているからだ。しか

⁴⁷⁶ Oe, Kenzaburo, "Japan's Dual Identity: A Writer's Dilemma," 59~60 頁.

し、大江の1950～60年代の作品の展開過程を回顧すると、これはそれほど奇妙な手法ではない。本論文で分析した一連の初期作品において、大江が日本と「第三世界」というカテゴリーの対比を行ったことを指摘した。日本において間歇的に「第三世界」指向の運動が起きたものの、日本がつねにそのカテゴリーから「離脱」^{デザインガージュ}しつづけたことにも、これらの小説で表象を与えている。大江は、これらの作品においてほぼ同時代的でありながら空間的には異なる地理的位置にある地域を引き合いに出すことにより、日本と比べているのである。

作品名	物語の時間設定	物語で言及される「第三世界」の地域
「見るまえに跳べ」	1950年代	アルジェリア・エジプト・ヴィエトナム・朝鮮
「喝采」	1950年代	アルジェリア・ヴィエトナム
『われらの時代』	1950年代	アルジェリア・エジプト・ヴィエトナム・朝鮮・中華人民共和国（など）
「セヴンティーン」	1950年代～1960年代初頭	中華人民共和国
『叫び声』	1950年代～1960年代初頭	アルジェリアエジプト・朝鮮・ヴィエトナム・中華人民共和国・ギリシア

上記の作品において大江は、「比較の基準点」^{リファレンス・ポイント}としての「第三世界」をほぼ同時代的な文脈で、時事的に扱った。大江は、日本が、間歇的に「第三世界」に「参加」^{アンガージュ}し、その一部となる契機をつかんでも、結局、「第三世界」を経済的利益や地政学的戦略のうえで抑圧する新植民地主義体制を主導するアメリカ合衆国、イギリス、フランスや、その中近東におけるエージェントとして機能したイスラエルのような国の位置に落ち着いたことを批判的に表現しつづけた。

一方で大江は、一定の国＝地域の異なる時間的文脈を対比したこともあった。異なる「時間」に位置する二つの「日本」を、「第三世界」という「比較の基準点」^{リファレンス・ポイント}を念頭に置きつつ対比した小説は、(ナセルのエジプトが指導したアラブ連合とイスラエルとの第三次中東戦争が戦われた同年に発表した)『万延元年のフットボール』である。

『万延元年のフットボール』においても、幕府政権が不平等条約を締結する

ことを機に、イギリス主導の旧植民地主義体制下で植民地化される危機への社会的反発として発生した反体制運動（百姓一揆、尊皇攘夷）と、岸信介保守政権が旧安保条約＝不平等条約を改正させながら、アメリカ合衆国主導の新植民地主義体制下において「第一世界」との「同盟関係」を維持しようとしたことが引き起こした大衆的な反体制運動（60年安保闘争）を対比している。この対比によって、双方の反体制運動の間における「ズレ」を含んだ繰り返しや、類似性を露呈した。大江は、前述のデューク大学での講演の冒頭において、幕末・明治維新初期の日本と、冷戦時代における「第三世界」の国の対比を行っている。大江が、異なる「時代」と「地域」の間における類似性を把握し、表現する作家であることから、講演での対比の際に、異なる時空に属する旧植民地主義時代の日本と、冷戦時代の「第三世界」を、越境的に対比するにあたって、『万延元年のフットボール』の方法と、一連の初期作品における方法の双方を念頭においていたと言えるだろう。

また、「日本が国際舞台へ 1868 年に『第三世界』の国として登場した」と発言した時に、大江の主な比較の基準点として念頭にあった「第三世界」の国のひとつは、おそらくナセルのエジプトであったはずだ。ナセルが主導した反帝国主義運動の問題は、本論文で詳述したように『第三世界』と日本」というテーマを扱った一連の初期作品において頻繁に登場している。幕末において薩摩藩と、長州藩それぞれがイギリスと同盟を結び、それを機に相互に同盟するようになった時期から戊辰戦争にかけての期間（1864～69年）と、エジプトで王制が打倒され、ナセル主義のアラブ社会主義が建設されるようになった 1951～56年の過程の間に、一連の類似性を見いだせるからである。

江戸幕府は、アメリカ合衆国からの開港・開国の軍事脅威をとおした要求を、天皇の勅許を得ずに承諾し、日米和親条約（1854年3月）や安政五ヶ国条約（1858年7月～8月）といった不平等条約を欧米列強の（アメリカ・イギリス・フランス・ロシア・オランダ）五ヶ国それぞれと締結した。（その結果、江戸幕府政権下の日本が陥った状態は、保守政権の協力で旧植民地主義の宗主国と不平等な同盟関係を結ばされ、帝国主義と協力するようになった 1940年代のエジプトのような「周辺国」が置かれた半植民地状態と似通っている。）

朝廷の同意を得ずに、幕府単独での条約締結によって国が不平等条約体制下に置かれたこと、半植民地化されたことは「尊皇攘夷」という反発を引き起こす。この排外主義的な運動を主導したのは、日本国内で「西より」の「南」に位置する長州藩、薩摩藩、土佐藩、肥前藩などの下級武士層である。1860年代前半において、倒幕派と佐幕派の敵対化が高まるとともに、幕府の高官、佐幕的藩主や藩士に対するテロリズムが発生した。とりわけ、幕府の開国路線を支持する立場にあった薩摩藩と、尊皇攘夷論を掲げた長州藩は二回にわたって衝

突した。

薩長両陣営は、個々に巻き込まれた欧米列強との武力衝突が不成功に終わったことを契機に⁴⁷⁷、ほぼ同時期に欧米列強の軍事面での圧倒的優位の認識に至る。薩摩藩の尊皇攘夷派への接近は、西郷隆盛ら幕府に批判的な下級武士層の登場によって始まった。イギリスの駐日公使ハリー・パークスや（後に海援隊の形成に貢献した）土佐藩の脱藩浪人坂本龍馬の働きかけもあって、敵対関係にあった薩長は、折衷し、「尊皇攘夷」から「尊皇倒幕」へと方向転換をして、この目標を達成するうえで「薩長同盟」（1866年1月）を結んだ。また薩長は、「倒幕」に向けイギリスと協力するようになった。「倒幕」という企画はイギリスの地政学的、経済政治的戦略とも重なっていた。イギリス公使パークスは、日本を安定した半植民地とするうえで、天皇を頂点に置く中央的且つ統一した王制体制が不可欠だと思っていた。⁴⁷⁸他方、イギリスの支持を失うことになった幕府は、軍事面ではフランスを頼りにせざるを得なくなった。

1867年11月の段階で、将軍徳川慶喜は「大政奉還」を上奏し、政権を朝廷に返上する旨を表明した。しかし、徳川家には、新しい体制においても実権を掌握する意図があった。薩長を始めとする勢力は、徳川中心の新政府の樹立を阻止し、徳川家を新政府から完全に排除するうえで、倒幕派公卿と手を結び、「王政復古のクーデタ」（1868年1月3日）を遂行する。⁴⁷⁹

クーデタは、明治維新による旧体制の解体に反発し、政権を回復することを志した旧将軍徳川慶喜が率いた旧政府勢力と新政権の間に起きた内戦、戊辰戦争（1868年～69年）の引き金となった。戊辰戦争は、「西」よりの「南」の下級武士によって結成された、薩長を始めとする勢力と、旧幕府勢力と奥羽越列藩同盟という「東」よりの「北」の藩の武士によって結成された勢力の間の激しい衝突として展開した。この内戦は、旧植民地主義を主導したイギリスとその競争相手フランスという帝国主義国家の日本列島における地政学的対立でもあった。この内戦で徳川慶喜が率いた旧政府軍は薩長の圧倒的な軍事力に対抗できず、北へと逃亡しつづけた。徳川慶喜が降伏した（1868年5月）後も戦線

⁴⁷⁷ 薩摩藩は、薩英戦争（1863年8月）でイギリスに、長州藩は、下関戦争（1863年5月～6月と1864年7月～8月）でイギリス・フランス・オランダ・アメリカの列強四国に敗北した。

⁴⁷⁸ 言うまでもなく、イギリス公使のこの戦略は、アメリカ合衆国の「戦後日本」の政治体制を形成する政策において「天皇制」を「象徴天皇制」として維持する形式を取ったままで繰り返されることになった。

⁴⁷⁹ このクーデタは、新政府の樹立をめぐる朝議が終わり、公家衆が退出した後、薩長を中心にする倒幕勢力が、宮廷を占領し、「王政復古の大号令」を審議し、決定するという形式で遂行された。

は北進する形で続いた。榎本武揚海軍中佐が率いた幕府側の残党は、北への逃亡を続け、蝦夷地（現在の北海道）に避難し、蝦夷地を侵略した。榎本は、蝦夷地を蝦夷共和国として「植民地化」し、自らの最後の権力拠点にしようと努めた。⁴⁸⁰

1868年前後の日本をめぐる時代区分ペリオディゼーションを呈示したが、これを1950年代のエジプトと対比し、異なる二つの時空の間における類似点を以下のように示すことができる。

「南」の下級武士の「周辺」的な勢力が主導した倒幕運動も、ナセル中佐が主導した下位の将校から構成された自由将校団（*Al-Dubbat al-Ahrar*）による革命も、国を旧植民地主義体制の半植民地状態に陥らせたと言われる政権への叛乱として遂行された。倒幕運動は、イギリスをはじめとする欧米列強と不平等条約を締結した江戸幕府やその支持者を政治運営の場から完全に排除することを意図してのものであった。他方、自由将校団の革命は、イギリスの傀儡政権としての機能しか果たしてこなかったとされたファールク国王の政権を標的とした。

双方の反政権運動とも、当時の軍事経済的に最強の帝国主義国家と協力する形で行われた。薩長は、旧植民地主義体制の指導者のイギリスと同盟関係を結び、自由将校団は、冷戦体制の主役を担っていた米ソに積極的に支持された。

当時最強の帝国主義国家たちが彼らに協力したのは、反政権運動と、彼らの地政学的戦略や経済政治的利益が重なっていたからであった。イギリスは日本を安定した半植民地の国にするうえで、天皇を頂点に置く中心指向的且つ統一した王制体制が不可欠だと思っていた。エジプトの場合、アメリカ合衆国は新植民地主義体制を中近東に普及させるうえで、イギリスのすでに衰微しつつある旧植民地主義的支配を完全に無効にさせたかった。また、アメリカ合衆国はイギリスと同盟関係が緊密なイスラエルを、この中近東戦略に沿って、新植民地主義体制下に配置したかった。そしてソ連は、その影響圏を中近東や北アフリカへと「南下」させ、この地域で親ソの「衛星国」を作りたかったのである。

双方のケースにおいて政権側が、当時の国際政治において二次的な位置にあ

⁴⁸⁰ こうした展開は、中国革命の最終段階において共産党軍に放逐されて台湾島に新たな避難所を求めた蒋介石の撤退の展開と重なり合うところがある。この「共和国」が箱館戦争での敗北を機に崩壊することにより、「尊皇倒幕」を掲げ、新たな秩序を築こうとする倒幕勢力の勝利が決定的なものとなった。当時の帝国主義の大国の支援を受けた蒋介石は台湾を自らの権力拠点＝「国」にすることができたが、イギリスではなく、旧植民地主義体制において二次的な位置にあるフランスの支援を受け、大国イギリスと対立した榎本は、北海道を幕府勢力の「国」にすることに挫折した。

る帝国主義国家に支持されたのだ。幕府側は、戊辰戦争前後の過程においてイギリスの支持を失い、フランスを頼りにせざるを得なくなった。そして、エジプトのファールク国王は、イギリスに支持された。

双方の国において反政権運動は、テロルによって支えられた。そして、このテロルから政権側を防衛する立場にある勢力が反政権の運動家と協力した。そもそも佐幕であった薩摩が長州と同盟関係を結び、エジプトでは警察がイギリス人に対するテロル攻撃を行使する闘士 (*fedayeen*) を保護し、煽動した。

双方の運動における政権打倒はクーデタを皮切りに成就している。日本では、上述した 1868 年 1 月 3 日「王政復古のクーデタ」。一方エジプトでは、1952 年 6 月 23 日の自由将校団によるクーデタ。このクーデタを機に、イギリスの旧植民地主義体制下の傀儡政権となっていたファールク国王の政権を打倒した、ナセル中佐を中心とした自由将校団によるエジプト革命が成就された。

双方とも政権打倒の成果として封建制度が崩壊される過程と、中央集権的近代国民国家の形成過程が、促進されることになった。また、半植民地状態からの解放への道が開いた。明治日本では、封建領主階級は決定的に弱体化し、封建制度の終焉と中央集権的統一国家樹立の機運を飛躍的に増大させた。「幕府の倒壊と新政権の誕生」によって「幕末以来の半植民地化の危機から日本が脱出する可能性を」⁴⁸¹大きくした。他方、革命後のエジプトでは、1954 年に団体内の権力争いに勝利したナセルが大統領に就任してから、国を（半）封建性の停滞から解放することを目指した一連の改革（農地改革や、主力産業及び外資系の銀行システムの国有化）が実行された。この一連の改革は、歴史的にアラブ社会主義 (*Al-Ishtirākīya Al-Arabīya*) と呼ばれた。また、ナセル政権は、国際的には非同盟主義の路線を辿ることになった。⁴⁸²

本論文で焦点をあてた大江の一連の初期作品において、ナセル主義の運動は、主人公および作中人物が「義勇兵」として「参加」^{アンガージュ}することを志しながら、様々な要因によって「参加」^{アンガージュ}する機会を奪われる、正当且つ「正真正銘」^{オタンテイック}な特権的行動として布置されている。また、第四章で論述したとおり『われらの時代』における南靖男の、アルジェリアから来たゲリラ＝アラブ人に対する崇拝は「ナセル」を媒介にしている。この「ナセル」というイマージュおよびアルジェリアから来たアラブ人という作中人物は、大江がケルアックの『路上』における

⁴⁸¹ 「戊辰戦争」、『日本大百科全書』。

⁴⁸² 言うまでもなく、異なる時空に置かれたこの二つの運動には多くの基本的な相違点もあった。そのひとつは、明治維新が「王制復古」という *restoration* の運動である反面、エジプト革命＝ナセル主義は、(1923 年トルコにおけるケマリスト革命や、1949 年の中国におけるマオイスト革命をモデルにしたと思しき)「王制」から「共和制」への移行の運動であったことである。

北アフリカの「アラブ人」に対する差別的な「姿勢と言及の構造」を「模倣しつつ反転」し、「脱文脈化」し再構築したものである。

大江はこの作業にあたって、1950年代後半の「ナセル」をめぐる形成された日本のジャーナリズムの言説（その大半は英仏ジャーナリズムによる報道の引用および翻訳である）を念頭に置いていた。大江は、日本のジャーナリズムにおけるエジプトをめぐる不意の「第三世界論」をパロディー化した。しかしながら同時に、『われらの時代』をはじめとする作品で「ナセル」が何度も登場することは、大江がナセル主義運動に対して強い「共感」を抱いたことの指標でもある。これらの問題についても本論文の第四章で詳述した。

他方、(ナセル主義のエジプトに似たような)「第三世界」の国として1868年に国際舞台に出た日本が、近代化の過程においてなし崩し的にアジア諸国に対して敵対的な態度を取るようになったと、大江は言う。

Ever since, in the process of modernizing, it has been blatantly hostile to its fellow third-world nations in Asia, as evidenced by its annexation of Korea and its war of aggression against China.⁴⁸³

つまり、日本は1868年に「第三世界」の一員になるという潜在能力を持っていた。それにもかかわらず、アジア諸国と連帯関係を持つ路線を取らず、アジア諸国を支配し、搾取する帝国主義国家になる路線を取ることでその潜在能力を徐々に失ったのである。

19世紀後半の日本もナセル主義のエジプトも、自国の自立が、隣国の政治的状況と連動していると判断した。日本は、朝鮮の清国からの独立の必要性を掲げ、エジプトは、アルジェリアやパレスチナといった被圧迫民族の反帝国主義闘争を支持した。しかし、日本の朝鮮「解放論」は、「疑似」^{イノタンティック}の解放論であり、朝鮮半島を清国の支配から解放する過程＝「脱植民地化」の過程と、自らによる再植民地化の過程は、ほぼ同時的に行われた。

日本は、徐々に朝鮮半島の内政に干渉するようになり、また、数十年前に欧米列強が自らに押し付けたような「不平等条約」体制を朝鮮半島に対して押し付けるようになった。⁴⁸⁴王妃＝閔妃^{みんび}一族が率いる政権や日本に反対する兵士と都市貧民の暴動がソウルで起こった壬午軍乱^{じんご}（1882年）を機に、日本はソウル

⁴⁸³ Oe, Kenzaburo, "Japan's Dual Identity: A Writer's Dilemma," 59~60 頁.

⁴⁸⁴ その発端となったのは、日本の軍艦雲揚号が江華島付近で挑発行為をし、江華島砲台と交戦した事件（1875年）である。この工作を機に日本は、以前欧米列強が自らに対してそうしたように、朝鮮に開国を強要し、翌年日朝修好条規という「不平等条約」を結んだ。

に軍隊を駐屯させた。

明治日本は、欧米列強に植民地化されることを回避するうえで近隣地域を植民地化するという戦略を取っていた。新政権は、当時半植民地状態に置かれていた清国の悲劇的な体験に教訓を得たわけである。植民地領有国になるためには、当然「戦争ができる」主権国家になる必要があったが、不平等条約体制下に置かれ植民地化されようとされている日本にはそうした権利がなかった。つまり日本は、イギリスが主導する国際法体制に組み入れられていたが、不平等条約の相手国にもなっていたため、戦時国際法が日本に適用されなかった。

「植民地化されないために植民地化する」という戦略の実践のうえで、明治政権は朝鮮半島を支配することを目ざした。1894年の農民反乱を制圧するために、朝鮮政府の要請を受けて清国が出兵したが、日本も独断で朝鮮半島に出兵した。清国と戦争を遂行するうえで、日本は欧米列強を主導する大国イギリスの許可を必要とした。清国を一層弱体化させることを望んでいたイギリスは、日英通商航海条約を結ぶことに合意した。こうして日本は、不平等条約を一時的に改正させ、イギリスより戦争を起こす「許可」を得て、日清戦争（1894～95年）を起こした。

日本がこの戦争に勝利を収め、下関条約が結ばれた。それにもかかわらず、満州での権益拡大を企画し、遼東半島を日本に奪われることで南満州の海への出口を失うことに危機感を覚えたロシアは、日本の満州進出阻止を目論んでいた。普仏戦争で敵対していたドイツとフランスも、日本の「自立」と「戦争ができる帝国主義国家」への「昇格」を無効にすることに同意し同盟を結んだ。いわゆる「三国干渉」をもって、日本の戦争する権利も、遼東半島や朝鮮半島の植民地化の計画も、失効されることになった。

三国干渉の背景には、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世による日本（やアジア民族）に対する人種差別的、排外主義的「黄禍論」= *gelbe Gefahr* に基づく発言の影響も大きかった。ドイツ皇帝が日本の国際的登場=帝国主義国家化はヨーロッパ文明を脅かすとして、日本を極東に「監禁」すべきだと主張したのであった。ドイツとフランスは、13世紀のモンゴル帝国のヨーロッパ侵略と同じことになるから国境が接しているロシアが責任を持つべきだとして、ロシアに日本との対決を働きかけた。この工作によって日露間の緊張が徐々に高まって行き、日露戦争へと繋がった。

シベリア鉄道を建設中のロシアと、対アジア植民地政策における協力および日本を国際舞台から排除する戦略で一致したドイツ・フランスは日露戦争の段階でもロシアを支持しつづけた。イギリスは日本を支持し、「日英同盟」（1902）をもって日本との不平等条約を改正させ、日本を「戦争ができる」主権国家に

した⁴⁸⁵。イギリスによるこうした支持の根底には、イギリスの対露政策があった。ロシアのバルカン半島や中近東への「南下」を牽制するために、クリミア戦争（1853～56年）や露土戦争でオスマン・トルコ帝国（1877～78年）を支持したイギリスは、東アジアでロシアの南下を阻止して中国市場を防衛するために日本を利用したかったわけである。またアメリカ合衆国もロシアに対し、日本を支持した。

ロシア国内での1905～07年革命（未遂）の影響もあり、日本は日露戦争（1904～05年）でロシアに勝ち、朝鮮における優越権、遼東半島租借権などを獲得した。西洋の帝国主義国家に対する初めての勝利により、朝鮮の保護権を獲得した日本は、第二次日英同盟、桂-タフト協定で朝鮮支配の承認を受け、逐次朝鮮の主権を奪い1910年に併合した。

旧植民地主義体制を主導したイギリスの対露「南下」防止政策は、冷戦時代において新植民地主義のアメリカ合衆国が肩代わりした。イギリスがロシア「南下」防止のうえで、ヨーロッパや中近東ではオスマン・トルコ帝国と東アジアでは日本を動員したように、アメリカ合衆国も、ヨーロッパや中近東ではNATOの加盟国であったトルコやギリシアそして、軍事同盟を結んでいたイスラエルと（1979年のイスラム革命までの）イランを、アジアでは二国軍事同盟を結んだ日本や韓国のような親米保守国家をソ連社会主義の「南下」を牽制するうえで動員した。

大江の初期作品に頻繁に登場するスエズ侵攻（1956～57年）は、このような新たな力関係の時代が形成される最中に勃発した。例えば、ロシア・フランス・ドイツによる日本を日本列島に「監禁」する政策は、エジプトに対するイギリス・フランス・イスラエルの侵攻と重なるところが少なくない。これも一定の「監禁」政策であった。例えば、日本の国際舞台からの排除は、差別主義的論理＝黄禍論によって正当化されたように、ナセル主義のエジプトのスエズ運河の国有化を通じた自立化の失効や半植民地状態の保持政策も、差別主義的論理によって正当化されるようになった。

VI.2. 「^{ア-リ-}初期の仕事」に潜在するパレスチナ問題

大江が「監禁状態」、「閉ざされた壁のなかにいる状態」を主要なテーマにした初期作品のひとつである『芽むしり 仔撃ち』では、「第三世界」としてのエジプトに対する監禁政策の問題に暗示的な言及がなされている。とりわけ、こ

⁴⁸⁵ この条約は、一方の締結国が2国以上と戦争状態に入った時には他方の締結国も参戦することを協約した内容を持つ。

の作品の題名は、スエズ侵攻直前における西ヨーロッパの政治とジャーナリズム上の屈折した「ナセル」の表象への批判的な言及である。

イギリスの首相アンソニー・イーデンやハロルド・マクミラン外務大臣のような保守派は、ナセルをナチス・ドイツのヒトラーの「再生」、ないしは「再萌芽」としてみなし、ナセルによる襲来が、「芽」の段階で前もって「むしられる」べきと主張した——*Nasser's aggression has to be nipped in the bud*⁴⁸⁶。このイギリスのパワーエリートの戦略は、*nip-in-the-bud approach*とも呼ばれた。⁴⁸⁷「芽むしり 仔撃ち」という日本語としてそれほど自然とは言えない表現を、読者に違和感を与えることを厭わずに題名⁴⁸⁸に取り込んだことは、1950年代後半の同時代における「第三世界」問題の背景を踏まえてのことであった。

対外的にはアルジェリアやパレスチナの民族解放運動とも深く関わった、「第三世界」運動としてのナセル主義への大江の「共感」は、彼がスエズ侵攻終結1年後に発表した最初の長編小説『芽むしり 仔撃ち』の題名において暗示されているのだ。また物語内容のレベルにおいても、ナセルが指導者の一人であった「第三世界」運動への大江の「共感」^{シンパシー}が見てとれる。この小説の物語設定は、「大人」たち（感化院の保護教官、村人たちなど）によって社会の「周辺」に追いやられ、差別される15人の感化院の少年が、ペストが流行っている集団疎開先の村で、村の被差別者（朝鮮人、脱走兵、疫病にかかったため差別されている少女）とも連帯して「大人」たちの「不平等」を根拠とした世界とは異なる、「代替の」「世界」の建設を試みるというものである。

『芽むしり 仔撃ち』において「子供たち」はペストが流行る村で新たな「世界」を建設しようとした。この設定においては、西洋の帝国主義によって「主権」＝「主体性」の資格を持たない「子供」＝「少年」と同然の被圧迫民族としての「アラブ人」が、自立し、非同盟の「世界」を建設するという試みがアレゴライズされている。

明治日本も、ナセル主義のエジプトも、「周辺国」の被圧迫民族（朝鮮とアルジェリア・パレスチナ）のありようと深く関わった戦争をとおして半植民地状態を脱した。二国とも、その周辺の民族の解放論を唱えた。だが、この解放論

⁴⁸⁶ “Eden, Macmillan and their Tory cohorts saw Nasser as an ‘Asiatic Mussolini’ or a ‘new Hitler’. They drew parallels with pre-war appeasement of Hitler (alluding to the Chamberlain government’s Munich capitulation) and argued that Nasser’s aggression had to be nipped in the bud.” (Walsh, Lynn, “The Suez fiasco 1956,” *Socialism Today*, issue 104 October 2006)

⁴⁸⁷ Bassil, Mardelli, *Middle East Perspectives: Personal Recollections (1947-1967)*, iUniverse, Bloomington, Indiana, 2010年.

⁴⁸⁸ 作品の英訳の題名は、*Nip the Buds, Shoot the Kids* である。

は、日本の場合逆の方向に進んだ。ナセル主義のエジプトの建国は、フランスの対アルジェリア民族、そしてイスラエルの対パレスチナ民族の帝国主義的支配への脅威だった。フランスとイスラエルがスエズ侵攻に出兵したことには、この新たな国家モデルを無効にすることと、ナセルのアルジェリアとパレスチナの民族に対する支援を阻止するという二つの企みがあった。エジプトは、イスラエル、イギリスやフランスと戦い、エジプトを新植民地主義体制の半植民地にしたいアメリカ合衆国と、ソ連社会主義体制を中近東や北アフリカへと「南下」させたいソ連の支持を受けることで勝利を収めた。

この勝利は、アルジェリア解放運動やパレスチナ解放運動の強化の過程に大いに貢献し、ナセルは双方の運動を支持しつづけた。また、一定の「自立」の「役割モデル」ともなった。反面、イギリスの支持を得て、ロシア、ドイツ、フランスと対立した明治日本は、朝鮮を併合するという方針を取った。エジプトのアルジェリア・パレスチナ解放論は、非同盟「第三世界」運動の形成に貢献したが、日本の朝鮮解放論は、「大東亜共栄圏」の名の元でアジアに対する侵略戦争に基づく対外膨張主義的な帝国主義政策（とりわけ日中戦争）へと繋がった。

軍事力が三国に大いに劣っているエジプトの勝利は、エジプトを旧植民地主義のかわりに築こうとしている新植民地主義体制下の半植民地にしたいアメリカ合衆国と、エジプトを社会主義体制の衛星国にしたいソ連との「同盟」を欠かしては不可能であった。エジプトは、イギリスの直接的な旧植民地主義的支配から解放された段階で、アルジェリアやパレスチナのような被圧迫民族の民族解放運動への支持を一層強めた。

アルジェリアの独立にはナセル主義のエジプトの支持が欠かせないものであった。また、スエズでの勝利は、すでに「病人」＝「病人」状態となっていたイギリス、フランスが部分的に保持しようとした旧植民地主義体制へ決定的な打撃を与えた。この敗北でイギリスはアメリカ合衆国の影響力を実感するようになり、植民地保持政策を放棄し、アメリカ合衆国が主役を担う新植民地主義体制における助役を引き受ける方針を取ったのだ。本論文の第三章に取り上げたとおり、『われらの時代』においてイギリスとフランスに「病人」＝「病人」としてのイメージが与えられたのは、このような同時代性を背景にしている。

1957年以後、こうした旧植民地主義体制から新植民地主義の形成過程への移行において、旧植民地主義的支配を断固とした堅持を旨とするフランスのアルジェリア植民地保持政策としてのアルジェリア戦争は、西洋のメディア空間において全面化され、焦点化されるようになった。日本のジャーナリズムも西洋のメディアにならってこの問題に焦点を絞るようになった。

これは、旧植民地主義を糾弾するというヒューマニズムに依拠する認識を反

映するように見えた。しかし、アルジェリア戦争の焦点化は、新植民地主義体制という支配形態の形成過程とともに、それと深く関わっているイスラエルの体制の中近東における地政学的エージェントとしての国家への形成過程を背景にしりぞけ、隠蔽する役割を果たしたのだ。また新植民地主義の帝国主義的政策、例えば、朝鮮半島やインドシナにおける局地闘争への暴力的な干渉は、西洋や日本のメディアにおけるアルジェリア解放戦争の過剰な強調によって相対化されていったとすら言える。

大江は『われらの時代』において、アルジェリア戦争をつねにナセル主義のエジプトとの関係において物語に登場させた。そうすることによって、大江はイスラエルによる対パレスチナ旧植民地主義型の支配の問題をも暗示的かつ間接的な形で焦点化したと言える。

第一章で取り上げた「見るまえに跳べ」においても、こうした旧植民地主義と新植民地主義の相互補完性をめぐる歴史認識は胚胎されている。それは、「1957年の春」という時間設定でエジプトの義勇軍に「参加」しイギリスに対して、あるいはベトナムに渡ってホー・チ・ミンが指揮する北ベトナム軍に「参加」してフランスに対し、戦うことを志した「ぼく」の時代錯誤的な欲望において見てとることができる。フランスによる第一次インドシナ戦争は、1954年のベトナム人民軍によるディエンブエンフーの勝利で終わっており、スエズ侵攻でも、1956年11月の時点でイギリスとフランスはすでに武力行使を中止している。物語言説レヴェルのこの時代錯誤という「意識的誤用」の設定から想像を進めると、「ぼく」がもしスエズに渡ってナセル義勇軍に参加したとしたら、イスラエルと戦うことになり、もしベトナムに渡ってホー・チ・ミンが指揮する勢力に加わったとしたら、南ベトナムの「同盟国」=alliedであり現行の第二次インドシナ戦争で、植民地保持政策をフランスから肩代わりしていたアメリカ合衆国に対して戦うということになるからだ。

「見るまえに跳べ」や『われらの時代』をはじめとする一連の作品においては、大江のアルジェリア、エジプトやパレスチナ民族による反帝国主義運動への共感を感じとれる。大江の「世界」観や「政治的な参加」が、後に親友になったエジプト生まれのパレスチナ系アメリカ人のポストコロニアル理論家エドワード・サイードの「第三世界」をめぐる「世界」観や「政治的な参加」とは、1950年代後半の時点ですでに重なり合っていたと、言えるだろう。

VI.3. 日本の「植民地の問題」としての「朝鮮」、とフランスの「植民地の問題」としての「アルジェリア」

2013年1月16日～19日、アルジェリアの国営企業と、イギリス、ノルウェーや日本などの外資系企業がアルジェリア最大の液化天然ガスプラントの開発

を進めている東部の地方都市イナメナスの天然ガス関連施設において、過激派武装勢力による人質事件が起きた。この暴力事件は、一時期「第三世界」運動を主導した国として注目されていたアルジェリアを再び焦点化する契機となっている。アルジェリア軍が現場を急襲し、事態は収束したものの、人質にされていた日本、イギリス、ノルウェイ、アメリカ合衆国、フランス国籍の関係者に多くの死傷者が出たため、アルジェリア政権は関係国からの批判の的となっている。

この事件は、おそらく多くの大江文学の読者に、大江が『われらの時代』周辺の「初期の仕事」^{アーリー・ワーク}において、朝鮮半島の問題と関わらせながら取り上げた「アルジェリア」を想起させ、今日のアルジェリアと「アルジェリア戦争の時代」の「アルジェリア」の相違点について考えさせただろう。原理主義のテロル組織がこの行為に至った理由には「ブーテフリカ政権が隣国マリに軍事介入したフランスに領空権使用を容認したこと」⁴⁸⁹があったとされている。アルジェリア民主人民共和国政権が、「第一世界」の、近隣の「周辺国」マリに対する攻撃に協力することが非難されているわけである。アルジェリアが、「第三世界」非同盟運動という路線から脱線し、多国籍企業が「進出」する「周辺国」の「市場」として、グローバル経済体制にもはや組み込まれているという「転機」＝「転向」の現象に直面していることは、大江文学の読者を戸惑わせたことに違いない。

この事件におけるもう一つの「転機」は、「第三世界」非同盟運動を妨害し、無効にするうえで「第一世界」がかつて動員した現地の極右勢力＝イスラム原理主義勢力が、現在「第一世界」と対立しているということである。

本論文で取り上げた「初期の仕事」^{アーリー・ワーク}において、大江は、『『第三世界』と日本』というテーマを扱うにあたって、フランスの「植民地の問題」であった「アルジェリア」と、日本の「帝国主義的植民地支配の責任」^{インペリアル・リスパンスイビリティ}と深く関わっている「朝鮮半島」を相互に連動させた。従って本論文でも、1950年代から2010年代の今日にかけて、日本とフランスそれぞれが、「帝国主義的植民地支配の責任」^{インペリアル・リスパンスイビリティ}にどのように対応してきたかという問題について触れておく必要がある。

*

大江によると、第二次世界大戦における日本の敗戦が、一連の改革に拍車を掛け、その改革は、国内外における「第三世界」指向の解放運動に弾みをつけ

⁴⁸⁹ 「アルジェリア人質事件、長期内戦、対立の歴史、威信失墜強硬策に」、『赤旗新聞』、電子版、2013年1月22日号。

た。⁴⁹⁰「改革」とは、対内的には日本の、GHQによる、他律的な政治、社会的な「民主化」であり、対外的には日本の帝国主義的植民地支配下にあった朝鮮半島をはじめとするアジア近隣諸国の「脱植民地化」というものであった。つまり、朝鮮半島をはじめとする日本が支配した植民地が、後の冷戦の主演となるころの米ソによって「解放」されたことが「第三世界」という新たなカテゴリーの形成過程に大いに貢献したということである。

国外における「第三世界」指向の運動のなかでもっともイニシアルなものは、「第三世界」というカテゴリーの形成過程における「始まりの現象」となった中国革命と、その朝鮮半島への「南下」としての朝鮮戦争である。そして、対内的な「第三世界」指向の運動には、朝鮮戦争時における反戦運動や「喝采」の分析の際に取り上げた学生党员による「山村工作隊」、「遊撃隊」がある。(日本の「インペリアル・リスパンスイビリティ帝国主義的植民地支配の責任」と深く関わっている「在日」朝鮮人による反米・反吉田内閣・反李承晩活動をはじめとする一連の社会運動も日本列島の文脈における「第三世界」指向の運動であった、と言える)

他方、ナチス占領下のヴィシー政権がレジスタンス運動および米軍によって打倒され、フランスが解放されたことは、フランスの植民地地域における民族解放運動に拍車をかけた。しかし、ソ連とともにヨーロッパをファシズムから救ったアメリカ合衆国が、フランスの植民地支配を問題視しなかったため、フランスは、インドシナやアルジェリアの独立を認めず、それらを暴力的に保持する戦略を推進した。そのため、本論文において詳述したように、インドシナとアルジェリアの「脱植民地化」の過程は、植民地主義的暴力と反植民地主義暴力の対立の形式で展開することになった。

大江が、渡辺一夫の指導の下でフランス文学を学ぶために、東京大学文科二類に入学したのは、アルジェリア解放戦争が始まり、その影響もあり、対仏ヴェトナム解放戦争がヴェトナム民主共和国軍の勝利で終わった1954年である。インドシナは、日本とフランスの旧植民地主義的支配政策と、アメリカ合衆国による新植民地主義的支配政策が交叉する地であるといっても過言ではない。日本は、インドシナに対する植民地支配を、1941年から1944年にかけてのファシズムの時代におけるナチス・ドイツの傀儡政権であったヴィシー政権と共同で行った。

1944年6月に、シャルル・ド・ゴールが率いた自由フランスと、アルジェリアにあった旧ヴィシー政権軍が合同して成立したフランス国民解放委員会を前

⁴⁹⁰ “[T]he defeat spurred reform which in turn gave impetus to third-world-oriented liberation movements both within and outside the nation.” (Oe, Kenzaburo, “Japan’s Dual Identity: A Writer’s Dilemma,” 70~71 頁.)

身としたフランス共和国臨時政府が、アルジェで成立したことを機に日本は、フランス軍を攻撃し、インドシナを完全に植民地化した。

1945年8月日本の無条件降伏を伴って、北ヴェトナム軍＝ベトミンはヴェトナム帝国のパオ・ダイを打倒し、臨時ヴェトナム民主共和国政府が成立した。1946～54年の間には、フランスの植民地保持戦争が遂行され、1950年に新植民地主義的局地戦争としての朝鮮戦争に関わるようになったアメリカ合衆国はこの戦争においてフランスを支持した。それに応じてフランスも、朝鮮戦争に派兵した。第一インドシナ戦争での「敗戦」の後、フランスはアメリカ合衆国と役割交代をして、ヴェトナム駐屯の部隊をアルジェリアに移動させ、アルジェリアを保持する軍事作戦に全力を注いだ。

すなわち、日本の元植民地としての朝鮮半島やインドシナ問題のみならず、アルジェリア問題も、日本の植民地主義の歴史と無縁ではなかったわけである。大江がフランスとフランスの「植民地の問題」に特別な関心を示したことには、このような歴史的背景がある。

また、本論文の第四章と第五章で詳述したとおり、大江は『われらの時代』と『叫び声』において、フランスとフランスの主な「植民地の問題」としてのアルジェリアを、日本の主な「植民地の問題」としての朝鮮半島の問題と対比しながら扱った。旧植民地主義枠内における権力を失って以来、異なる形で「第三世界」を弾圧した二国の「インペリアル・リクス・イビリティー帝国主義的植民地支配の責任」の捉え方の展開過程の間における類似性は少なくない。

日本とフランスは、非ヨーロッパの世界帝国の支配下にある領土を近代西洋の旧植民地主義体制下に組み込んだ。朝鮮半島は、かつて「チヤイナ支那」の朝貢外交体制下における植民地であり、アルジェリアもまた、オスマン・トルコ帝国の最も古い植民地のひとつであった。

二国とも植民地化した地域を併合し、自国領土の一部として看做した。日本は、日清戦争と日露戦争を経て1910年に朝鮮を併合した。フランスは、ヨーロッパ人に対する海賊行為と奴隷化を抑えることを言い立てて、すでにイギリスとオランダによるアルジェ砲撃(1816年)で弱まっていたアルジェリアを1830年に侵略し、併合した。

日本は、朝鮮を重要視し、鉄道、ダムなどインフラ建設に力を入れ、また一時期、日本の首都を朝鮮半島に移動させることを考えるほど自らの領土として看做す一方で、現地人に対する教育などによる「同化」政策を行った。日本からの数十万の入植者が朝鮮半島に渡った。

フランスのアルジェリアに対する態度もこれと似通う。フランスも、例えば、北岸に設置したアルジェ県、オラン県、コンスタンティーヌ県をフランス本土と同等に扱い、多数のヨーロッパ人＝コロンを入植させた。フランスは一般の

現地人に対し、「同化」政策というより、むしろ「排除」政策を実施した。現地
のアルジェリア人の土地や肥沃な畑を奪取し、それらをフランス人入植者に分
配し、アルジェリア人を不毛な地域へと移動させたり、低賃金の労働力として
搾取したりした。

二国とも、脱植民地化の時代において、この植民地（朝鮮・アルジェリア）
を優先的に保持しようとした。そしてこうした態度は、植民地地域に深刻な破
壊をもたらすことになった。敗戦後の1945～47年の「脱植民地化」の過程にお
いて、日本が植民地支配していた朝鮮半島をそのまま温存しようとしたことは、
朝鮮半島が南北に分断される大きな理由になった。それは、アメリカ合衆国が
インドシナでフランスを相手に行ったような、新植民地主義と旧植民地主義の
間の役割交代によるものであった。⁴⁹¹

また、政治学者姜尚中によれば、朝鮮戦争の勃発という半島の分断を決定的
にした過程には、日本の朝鮮半島統治機構である朝鮮総督府による日和見主義
的な戦略が大いに関与していたという。右に李承晩、左に金日成が構成する左
右合作的な人民戦線内閣を形成する運動があった。それにもかかわらず、日本
は、半島がソ連の支配下に入ることを恐れ、数十万の入植者を帰還させ、財産
を日本に移送させる時間的余裕を獲得するうえで、ソ連軍が38度線を越える前
に人民委員会の首脳と交渉した。

しかし、アメリカ軍が半島に上陸すると総督府は一方向的に交渉を打ち切り、
アメリカ占領下にはいった。日本は植民地支配を完全に温床とすることができ
なかったものの、アメリカ合衆国は日本の旧体制の官僚機構を利用することにな
った。こうした総督府のつじつまの合わない態度のせいで可能になった、ア
メリカの占領に対する「第三世界」指向の反乱が行われた。この解放運動の熾烈
な弾圧の先頭に立ったのは「親日派」だった。戦中のフランスにおけるナチス

⁴⁹¹ アメリカ合衆国は、朝鮮半島が当初完全にソ連の勢力圏に入ると思っていた。しかし、スター
ーリンがヨーロッパにおける境界線をどこに引くことを優先にし、朝鮮半島では譲歩してもよい
と考えはじめたことや、中国共産党が国民党を駆逐していく動きにより、朝鮮半島は地政学的に
非常に重要だとアメリカ合衆国は判断するようになった。そして、アメリカ合衆国側は、朝鮮半
島についてはまったく知識を持っていなかったため、朝鮮軍と関東軍との仕切り線だと一般的に
言われていた三八度線を、米ソの事実上の占領政策における境界線にした。アメリカ合衆国は、
日本の朝鮮植民地支配をそのまま継承したわけだが、例えば姜尚中によれば、もし日本が半年早
く完全に降伏していたら、朝鮮半島分断はなかったということもあながち否定できないというこ
とである。（姜尚中、小森陽一、「平和国家」の幻影——「戦後日本」の戦争史、『戦後日本は戦
争をしてきた』、96～102頁。）

協力者に喩えることができる、日本の植民地権力と癒着してきた「親日派」は、南北分断に関与したのである。⁴⁹²

一方で、フランスは、モロッコやチュニジアの独立を認めたが、アルジェリアを手放さなかった。*Algerie Française* というスローガンの下、アルジェリアはフランスの「本土」の一部であると、主張しつづけた。このことは、アルジェリア解放戦争の勃発を引き起こし、フランスの植民地保持作戦はアルジェリアを荒廃地に変え、アルジェリア民衆に決定的な分裂をもたらすことになった。アルジェリア解放戦争は、フランス軍に対する解放運動であったのみならず、フランスによって利用され、敢えて言えば「親仏派」としての *Harkis* = 「アルキ」というアルジェリア人に対する内戦の形をも取った。新植民地主義体制下に組み込まれた韓国とは違って、「第三世界」の国になったアルジェリアでは、独立後はアルキが暴力的に追求されることになった。(韓国では、新旧植民地主義と協力した「親日派」問題が問い直されるようになったのが、冷戦が終わってからのことである)

新植民地主義と協力し、過去の「インペリアル・リスパンスイビリティ帝国主義的植民地支配の責任」を忘却しようとした日本やフランスの「第三世界」弾圧の戦略は、独立後の元植民地における政治的不安定や腐敗を促進させた。当初、進歩的な路線を追随し、朝鮮半島の統一を目指した金日成キムイルソンの北朝鮮は、自立を遂げても韓国、日本や欧米の「監禁政策」の結果、徐々に、「第三世界」非同盟主義特有のセキュラーな社会主義の建設の理念から逸脱することになり、国家イデオロギーのレヴェルで「個人崇拜」を中心にする核兵器保有の軍事国家になった。

一方、韓国は、新植民地主義体制下の中・南アメリカにおける半植民地的な国と似たような、言論の自由を弾圧する親米傀儡独裁政権リシウバン(李承晩政権 1948～60年、朴正熙パクチョンヒ政権 1963～79年、全斗煥チョンドファン政権 1980～88)が台頭する国となり、社会的安定を構築することができなかった。

大江は、『われらの時代』や『叫び声』において、「アルジェリア解放戦争」と「朝鮮戦争」を相互に関わらせながら着目した。第二章でも述べたように、日本が関与した朝鮮半島の分断と、日本が関与しフランスが派兵した朝鮮戦争によって朝鮮半島は、1980年代末までに「暴力的な時代」に巻き込まれた。2010年代の現在において、朝鮮半島は世界経済の「中心国」と「周辺国」の間における圧倒的な貧富の差をあらわす地域となっている。G20の国のひとつである韓国＝南朝鮮は、グローバル経済の主要な輸出大国である反面、「北の西側」によってほぼ完全に排除されてきた北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国は、世界でもっとも貧しく、社会的に不安定な国のひとつである。

⁴⁹² 同上書、102～104頁。

『われらの時代』、『叫び声』のような大江文学の作品は、朝鮮戦争とアルジェリア解放戦争との関係において、現在においても鋭い問題意識を投げかけている。なぜなら、「第一世界」によって排除され、「監禁状態」に置かれてきた、北朝鮮やアルジェリアのような「第三世界」の国が現在経験している貧困、社会的不安定と混沌カオス、言論の自由の牽制などは、大江がこの二作に焦点を当てた帝国主義による暴力行使の問題に由来しているからである。

破壊的な植民地保持戦争のため、荒廃地となったアルジェリアに対しフランスが何の賠償もしなかったことは、日本と北朝鮮のケースにも照応する事象である。アルジェリア民主人民共和国の最初の大統領ムハンマド・アフマド・ベン・ベラはキューバと共に非同盟運動と世界革命路線を推進したがこれに失敗し、1965年にウァーリ・ブーメディエンの軍事クーデタで失脚した。ブーメディエンが採用した社会主義政策に基づく国づくりは、経済成長（これは韓国のそれとは質を異にする「第三世界」型のものだった）として萌芽したが、ブーメディエンの死去をもってアルジェリアは「第三世界」路線から逸れるようになった。

1991年の選挙でイスラム原理主義政党のイスラム救国戦線=FISが政権を握った直後の1992年1月に、世俗主義を標榜した軍事クーデタが遂行された。このクーデタへの反発はイスラム原理主義過激派によるテロルの形式を取り、政府の間における悲劇的な内戦（1991～2002年）が勃発し、数万人のアルジェリア人がこの暴力的な時代の犠牲者となった。最近の「アルジェリア人質事件」も、このような「長期化した内戦」という暴力的な時代の延長線上にある。

2000年代におけるフランスと日本の共通の「インペリアル・リスパンスイビリティ帝国主義的植民地支配の責任」にかかわる問題は、教育⁴⁹³、政治⁴⁹⁴、メディアなどといったあらゆるレベル

⁴⁹³ GHQが学校での「日本史」授業の再開を認めたことにより1946年10月に文部省が発行した国民学校用『くにのあゆみ』は、歴史学者井上清をはじめとする日本の専門家によって、朝鮮半島に対する植民地支配の記述に問題がある、「天皇制護持」の教科書として批判された。1940年代後半以来、間歇的に発生し、とりわけ1980年代にアジア近隣諸国と日本の間における外交問題に展開した「歴史教科書問題」は、日本における「歴史修正主義」に関する主な問題であった。この問題は、2000年代にも起きた。

例えば、「新しい教科書をつくる会」主導の中学校社会科の歴史教科書『新しい歴史教科書』（扶桑社）は2001年に文部科学省の検定で100カ所以上の部分に不適当な記述があるとされたにもかかわらず、出版社側による修正の結果、同省の検定に合格した。この教科書は、韓国や中国をはじめとするアジア近隣諸国の抗議を呼んだ。大江健三郎、加藤周一をはじめとする日本の主要な知識人によるこの教科書へのインペリアル・リスパンスイビリティ「帝国主義的植民地支配の責任」に依拠した批判が、『歴史教科書 何が問題か——徹底検証 Q&A』において編成された。

この書で寄せられた批判の主旨は、『新しい歴史教科書』が日本の国家エリートの視点に立ち、歴史の中での被支配者や、差別され侵略された人々（とりわけ朝鮮半島、中国をはじめとするアジア近隣諸国の民族、および「在日」朝鮮人）の視点をほぼ完全に見落としているという点にあった。

大江健三郎が「ここから新しい人は育たない」と題された文章を書いたのは、「地方の教育行政の具体的な担当機関である教育委員会」の委員たちがこの教科書を採択しないよう訴えるためであり、「それでもなお採択されてしまった場合、教師と子供たちの、教科書をもとにしての教室での討論に」「ヒントを呈示したい」という意図に基づいている。（大江健三郎、「ここから新しい人は育たない」、小森陽一、坂本義和、安丸良夫編、『歴史教科書 何が問題か:徹底検証 Q&A』、岩波書店、東京、2001年、175頁。）

小説家であるため、つねに文学テキストの文体や書く方法について考えてきた大江は、この教科書の「文体」に着目する。テキストの文体が、戦前戦中の国家エリートのイデオロギー、その時代の精神を美化し、当のイデオロギーを復活しようとするという「内容」のレヴェルといかに連動しているかを呈示している。大江によると、この教科書を書いた人たちは現行の他の歴史教科書を「自虐的な史観というたぐいの思い込みたっぶりの言い方で批判してきた」保守的なグループである。彼らは、子供たちに自己批判意識をぬきにした自己準拠的な歴史意識を植え込んだ上で、自国に対して誇りと、自信を持たせることを意図している。（同上書、175頁。）

「アジアに大きな歴史的悲慘をもたらした」「超国家主義から侵略戦争にいたった時代」を「日本人が自信をもっていた時代」として肯定的に捉え、美化するというナショナリズムを大江は厳しく批判する。子供たちが自信を持つことが、自己批判意識と歴史認識をぬきにしては不可能であると指摘しているのだ。国家レヴェルの自信と誇りは、人間の個々人の自信と誇り似たようなものである、と言う大江は次のようにつけ加える。（同上書、181頁。）

「自信を持った人間は、それを意識する、しないは別にして、一本の木のように直立しています。それが自然に周囲からの敬意をまねくのです。この人間の内面と生き方をおかすのは恥かしい、その思いを他人に引き起すのです。そのような内にむかう充実を自信としてかちえている人を、誇りのある人間というのです。国についても同じです。それはこの歴史教科書のイデオロギーとして全体に底流している、アジアの国々、特に中国と韓国に対してあらためて「鎖国」するようにして、閉じた内側で根拠のない自己の特権化をもくろむ態度とは対極にあります。私たちは世界に開かれた心^{メンタリティー}性をつねに新しく作り出さねばなりません。」（同上書、183~184頁。）

日本の国民がアジアの一部であることを認識するようになり、朝鮮半島や中国などの近隣諸国と連帯するという期待と、歴史修正主義による子供たちの歴史認識を屈折させることへの危機感が併せて大江のこのテキストに刻印されていると言える。

大江が、子供の読者を相手にし、子供の教育をテーマにした『自分の木の下で』（2001年6月）というエッセイ集をはじめとする数々のエッセイを書いた動機は、^{インベアリアル・リスパンスイビリティ}「帝国主義的植民地支配の責任」に無関心で保守的な世代を育成することを目論む勢力に対抗す

における「歴史修正主義」という保守主義の帰趨である。過去の植民地主義・帝国主義を肯定的に位置づける試みは、日本では敗戦以来、そしてフランスで

ることであったと、言える。

「アルジェリア」をはじめとする「植民地の問題」に対する歴史修正主義と「検閲」が徹底的に行われてきたフランスでは、この戦争をめぐる歴史教科書の記述や教育が問題にされるようになったのは、2000年代のことである。日本と同様に旧植民地主義のみならず、新植民地主義体制にも積極的に関わってきたフランスの歴史教科書における歴史修正主義は、つねに「現状」であったと言える。この点でフランスの歴史教科書問題は、1940年代後半以来、専門家や知識人などによって問題にされ、議論されてきた日本とは相違する。

アルジェリアをはじめとする「植民地の問題」をめぐる歴史教育には、大した進歩がなかった。このことに関してフランスのジャーナリスト、FLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の元闘士モーリス・ターリク・マスキノが“La colonisation telle qu’on l’enseigne—L’histoire expurgée de la guerre d’Algérie”において詳述している。マスキノは、フランスの場合の「植民地の問題」は、アルジェリア解放戦争の時点から「欺瞞」と「検閲」の形で40年以上継続した、と言う。例えば、フランスのリヨネル・ジョスパン首相（社会党所属、任期：1997～2002年）は、アルジェリア人に対する制度的な拷問を行っていた事実を認めることにさえ抵抗したのであった。マスキノは、「1957—2001年」の「44年間」、つまり、「ギー・モレ」（社会党所属、任期：1956～1957年）「からリヨネル・ジョスパンに至るフランス歴代内閣は、欺瞞の文化の中に生きている」と要約している。（Maschino, Maurice T., “La colonisation telle qu’on l’enseigne—L’histoire expurgée de la guerre d’Algérie,” *Le Monde diplomatique*, février 2001. 引用は、「教育的に正しいアルジェリア戦争」、訳・萩谷良、ル・モンド・ディプロマティーク日本語・電子版、2001年2月号を参照。引用文の翻訳は引用者による）

⁴⁹⁴ 日清戦争や日露戦争以降の帝国主義的な戦争で天皇のために死んだ（東京裁判でA級戦犯となった人物をも含む）軍人・軍属を「英霊」として祀る靖国神社へ中曽根首相が行った公式参拝は、日本の帝国主義的侵略と支配の実践を肯定しようとする歴史修正主義的な行為であった。靖国参拝は、2000年代に小泉純一郎元首相によって反復された。

その一方で、2000年代に入ってからフランスの社会と政治は、アルジェリア戦争中におけるフランス軍による拷問という問題を通して、長い眠りから覚醒し、40年前の破壊的な戦争の真実を直視することを迫られた。そのきっかけとなったのは、2000年に数次にわたって『ル・モンド』紙に掲載され大きな反響を巻き起こした、FLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の元女性闘士による、戦争中フランス軍から受けた拷問に関する生々しい証言であった。これを皮切りに戦争の当事者たちが長期間にわたる沈黙を打破して戦場での実体験を証言し始め、拷問に関与した兵士や被害者の手記の出版やドキュメンタリー番組のテレビ放映、あるいは戦争中の「人道に反する罪」の起訴などが相次いだのである。（松沼美穂、「植民地支配の過去と歴史・記憶・法 近年のフランスでの論争から」、『ヨーロッパ研究』第6号、2007年3月、122頁）

は、1960年代以来続く問題である。

最近の人質事件においてからも明瞭であるように、アルジェリアは、2013年の現在まで「暴力的な時代」を生きなければならなかった。これには、何よりも、この国に対して何らの賠償も行わなかったフランスに「責任」がある。

フランスが政治的、社会的なレベルで、^{インベリアル・リスパンスイビリティ}「帝国主義的植民地支配の責任」を果たしていないことは、フランソワ・オランド大統領が、2012年12月にアルジェリアの独立50周年を機にアルジェリア民主人民共和国国会で行った演説においても見てとれる。オランド大統領は、アルジェリアが132年の間、極めて不公正で乱暴なシステムに服従し、植民地主義がアルジェリアの人々に苦痛を与えたことを認めながら、「悔恨や謝罪を表明するために来たわけではない」と明言したのである。⁴⁹⁵フランスのオランド大統領によるこのあいまいな態度は、近年の国民調査で明らかになったフランス国民の「公式謝罪」に対し不本意な態度を反映するものである。

*

アルジェリアの「第三世界」運動からの「^{デザンガシマン}離脱」は、「第三世界」非同盟運動の「敗北」を意味するわけではない。このことは、現在つづいている経済危機において、代替の経済政治的なモデルを探求しているヴェネズエラのような^{ラテン}中・南アメリカの国々のケースを見ても明瞭である。

サイドが指摘するとおり、歴史的に「第三世界」文学と命名されるようになった多くの文学作品のみならず、「数えきれない政党が、一連の他の闘争が、少数者と女性の権利を求める闘争が」、「新たな独立を求める闘争」が、そもそも「反帝国主義的ナショナリズム」という意識から誕生したのである。しかし、「ナショナリストの意識は硬直した厳格さにいとも易々と変化し」て、「白人の士官や官僚を有色人種の士官や官僚におきかえても、ナショナリストの官吏が旧体制を複製」するようになるということを「ファノンが正しくみぬいていたように」新しい政権の保守化や腐敗もこの同じ意識から生まれたわけである。⁴⁹⁶（このことには、第五章にて触れた。）

近年の「アラブの春」という同時代現象からすると、サイドのこの言葉が有意義である。独立後、腐敗し、なし崩し的に、^{コロニザチュール}植民者が率いた旧体制や入植者エリート階級を「複製」し、「民族ブルジョワジー」として「再生」した体制

⁴⁹⁵ “Je ne viens pas ici —ce n'est ni ce qui m'est demandé, ni ce que je veux faire —faire repentance ou excuses.” (Chastand, Jean-Baptiste, “La « paix des mémoires » se construit à deux,” *Le Monde*, 22 décembre 2012. 引用文の翻訳は引用者による)

⁴⁹⁶ サイド、エドワード、W., 「対抗と対立」、『文化と帝国主義』、42頁。

に対する内部レベルの「脱植民地化運動」が、2011年に北アフリカや中近東で始まった。

しかし「アラブの春」は、(1950～1960年にはアルジェリア解放戦争に、1960～70年代にはオタンテイック アンガジュマン ヴィエトナム解放戦争に代表される)「正真正銘」な「政治的な参加」として始まった「第三世界」非同盟運動の企画が挫折したことをあらわしているわけではない。逆にこの現象が指し示しているのは、「南北」問題が経済、政治、文化など異なるレベルで継続している現在の世界においても、新たな「第三世界」の建設の可能性が、「南」の民族によって探求し続けられているということに他ならない。

1950～1960年代に「第三世界」としてのアラブの国々に樹立された体制が保守化し、腐敗し、独裁政権化したことが、「第三世界」非同盟運動の路線からの脱線＝「離脱」であったのだ。そして、それは、「北の西側」の帝国主義政策とは無縁ではない。パキスタンの文学理論家エジャズ・アフマドが指摘するとおり、解放戦争を行ったアルジェリアやヴィエトナムなどの「第三世界」の国が独立した時点では、帝国主義戦争による破壊の結果、下部構造がほぼ完全に粉砕され、「荒廃地」と化されていたため、[非同盟の]社会主義に似たような新体制を建設することが極めて困難であったのだ。ソ連が主導した社会主義体制が衰退し、「北の西側」からネオリベリズムが世界化し、この新たな支配形態が世界各国に拡大していった1970年代末に至って、「第三世界」の「民族ブルジョワジー」が率いたこれらの国は、帝国主義構造に組み込まれたのである。これらの「周辺国」では、いかなる革命的な潜在能力も無効にされ、排除されていたのだ。⁴⁹⁷

本論文で『われらの時代』を中心にする大江の一連の小説の分析をとおして開示したところの、日本で1950年代初頭以降台頭したアメリカニズムとアンティ・コミュニズム（「反共主義」に基づく）保守主義の連動は、1970年代末以降に、「南」＝「第三世界」の国々において根付くようになっていた。また、イスラム原理主義勢力と進歩派の同盟によって遂げられたイラン・イスラム革命（1979年）の結末として「シャリーア」という新たな体制が確立された。西洋の進歩的知識階級によってオタンテイック「正真正銘」な「第三世界」の体制を建設する指導者として高い期待が寄せられていたホメイニーが率いた政権は、新植民地主義的傀儡政権であったパフラヴィー国王体制に対する革命闘争において積極的に闘った進歩派を惨たらしく抑圧し、無効にし、政治運営の領域から排除した。自らを西洋から隔

⁴⁹⁷ Ahmad, Aijaz, "Literature among the Signs of Our Time," *In Theory—Classes, Nations, Literatures*, Verso Books, London, New York, 1992年, 30~34頁。(この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

離したにもかかわらず、極めて保守的な体制のモデルを生み出したイラン・イスラム革命という奇妙な「第三世界」の「保守革命」の顛末や、「第三世界」内部における衝突⁴⁹⁸、多くの「第三世界」の国々におけるアメリカニゼーションや保守化の発現からも明瞭であるように、1970年代末以降「第三世界」の国々は「正真正銘性」を失うようになっている。

先にも述べたとおり、2011年に北アフリカや中近東に起きた「アラブの春」という社会運動は、1950～60年代の「第三世界」運動と似たような「正真正銘性」の探求として始まった。それにもかかわらず、「アラブの春」は、現時点で北アフリカと中近東にさらなる混沌と暴力をもたらすのみにとどまっている。主な理由は、エジプト革命とアルジェリア革命をはじめとして、自立と「周辺国」同士の連帯の探求のモデルとなったアラブ社会主義の欠点を批判しながら、その肯定的な側面を採用せず、旧体制^{アンジャン・レジーム}を徹底的に破壊する方針が主流となったことにある。過去の「第三世界」非同盟運動の延長線上に立つヴィジョンを掲げた進歩派を主流派や新政権が抑圧しようとしている点で、この運動には、イラン・イスラム革命を思い起こすような側面が濃厚である。⁴⁹⁹

⁴⁹⁸ マルクス主義的革命を目指したポル・ポト政権による大量虐殺が明らかになり、ヴェトナム軍がカンボジアに進撃し、これを受け、カンボジアと親交を持つ中国がヴェトナムに侵攻し、革命によって社会主義政権が樹立された直後のアフガニスタンにソ連が軍事介入を行った。このことは、ソ連やソ連が主導した既成の社会主義の崩壊を加速させることになった。北田暁大、小森陽一、成田龍一による座談会「ガイドマップ 80・90年代——北田暁大、小森陽一、成田龍一」、『戦後日本スタディーズ 3 80・90年代』はこのことに詳しい。

⁴⁹⁹ こうした展開の可能性は、すでに「アラブの春」が現在進行形になっていた時点で、指摘されていた。例えば、イギリスの歴史家ペリー・アンダーソンによると、2011年11月にチュニジアに勃発し、エジプト、バーレーン、イエメン、リビア、オマン、ヨルダン、シリアへと拡大していった「アラブの叛乱」は——それぞれが異なる歴史地理的な特殊性を帯びるが——アメリカ大陸における対スペイン独立戦争（1810～1825年）、ヨーロッパ革命（1848～1849年）や社会主義圏における既成社会主義体制の解体運動（1989～1991年）の延長線上に立つ極めて独自の出来事である。この三つの叛乱の中でもっとも急進的なものであった1848年の革命の試みは、決定的な敗北に終わった。そして、残りの二つが勝利を収めたが、この勝利は、その指導者が抱えていたヴィジョンとかなりかけ離れた悲惨なものとなった。それにもかかわらず、今回の「アラブの叛乱」のケースは、そのどちらのケースとも質を異にする独特な（=*sui generis*）ものになるはずである。

この小論においてアンダーソンは、1950～60年代に樹立した非同盟の「第三世界」としてのアラブ諸国の歴史的な展開を批評的に見据えている。毛沢東主義的「第三世界論」とともに、アルジェリア解放戦争の理論のレヴェルにおける原動力となったナセル主義と、バース主義

現時点で、「アラブの春」は、最近ヴェネズエラをはじめとする中・南アメリカに行われている「第三世界」指向の運動とは質を異にしている、と言える。そして、このことには、「北」の「西側」による、経済政治的、地政学的な戦略に基づいた方向付けの作用が大きいのである。⁵⁰⁰

VI.4. 「自己処罰への欲求」のモチーフと「第三世界」

前項で大江作品と深いかかわりのある「朝鮮半島」と「アルジェリア」との関係において、日本とフランスの「帝国主義的植民地支配の責任」をめぐる「歴史」を中心に、「第三世界」というカテゴリーの1950～60年代から現在に至る遷移を俯瞰した。当項では、大江が『『第三世界』と日本』というテーマを、『われらの時代』周辺の一連の作品の後の1960年代に書いた代表的な作品においてどのように扱ったかということに触れたい。

大江は、『『第三世界』と日本』というテーマを扱った一連の小説の最後の作品である『叫び声』（1962年11月）を、アルジェリア解放戦争＝「アルジェリア革命」＝*Davra Jazā'irīya*がFLN=*Jabhat at-Tahrir al-Vatani*の勝利で終結させ、アルジェリアの独立から半年ほど後に出版した。次の長編『日常生活の冒険』（1963年2月～1964年2月）では、アルジェリアのモチーフがかなり後景に退けられ

(Baathism)の腐敗と挫折は取り返しがつかないほどのものであったが、これらの「第三世界論」の根底にある「反帝国主義的」、「反シオニズム」的な動機は復活されるべきである。またこの叛乱の主役を担っているデモンストレーターたちは偏狭な「ナショナリズム」の限界を超え、この叛乱を「インターナショナリズム」の連帯へと展開させるべきであり、これは「叛乱」を「革命」に変質させるために必要である、とアンダーソンは指摘している。

要するに、アンダーソンは、「アラブの春」に、新たな「第三世界」非同盟運動の可能性、新たな「^{オタンテイシテ}正真正銘性」を求めている一方で、それが保守的な方向に傾く危険の可能性をも考慮していたわけである。(Anderson, Perry, “On the Concatenation in the Arab World,” *New Left Review* 68, March-April 2011, 5~11 頁. この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

⁵⁰⁰ エジプトの「第三世界論」理論家サミール・アミンとエジャズ・アフマドが着目していたとおり、これらの一連の運動は政教分離的^{セキユラー}で、反体制的な、進歩的なものとして始まった。しかし徐々に、欧米やその「衛星国」による帝国主義的な介入や、方向付けの影響もあり、欧米との協力を望む保守的な帰趨の潮流も出現してきた。この潮流が支配的になり、主流となる場合は、運動の「^{オタンテイシテ}正真正銘性」が危うくなりかねない。

(<http://newslick.in/international/samir-amin-movement-has-neither-won-nor-lost-egypt> および <http://newslick.in/international/samir-amin-us-imperial-project-destroy-arab-nations-0> を参照。この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

ている。しかし『個人的な体験』（1964年8月）において、主人公鳥のフェティシズムならでの関心の対象となっている「ブラック・アフリカ」は、『われらの時代』周辺の作品において主人公らの「^{オクタンテイク}正真正銘性」の探求のユートピア的な地として設定された「第三世界」としてのアルジェリアの一変種である。

『個人的な体験』の三年後に発表された『万延元年のフットボール』（1967年7月）においては、主人公らの「^{オクタンテイク}正真正銘性」の探求の地は、世界の「周辺」＝アフリカから、日本の「周辺」＝「四国の森の中の谷間の村」へと^{ディスプレイ}転置されている。「第三世界」のイメージを、大江の故郷である四国・愛媛県喜多郡大瀬村（現内子町）をモデルにした「四国の森の中の谷間の村」に^{ディスプレイ}転置することによって物語空間における「アフリカ」の存在感は希薄化するが、完全に消えることはない。

『われらの時代』周辺の作品で「第三世界」の問題が、日本国内における反（親米保守）政権的、反帝国主義的な社会運動と関連づけられてきたことは、すでに論述してきたとおりである。『日常生活の冒険』、『個人的な体験』と『万延元年のフットボール』の場合には、1960年安保闘争が反政権的、反帝国主義的な社会運動として「第三世界」問題と関連づけられている。

*

『日常生活の冒険』は、出世主義や権威主義とは反対の「^{オクタンテイク}正真正銘」な生き方を探し求め、反社会的で、冒険的な生活を国内外で送りつづけたあげくアルジェリアの地方都市で唐突に自殺した齋木犀吉の物語を、親友の若い作家「ぼく」の眼を通して語る小説である。「ぼく」と齋木犀吉の友情の始まり、そしてとその友情の終焉はいずれも、北アフリカの問題と結びつけられている。例えば二人が最初に出会ったのは、「スエズ戦争への義勇軍の会第一回集会」である。また小説の冒頭において齋木犀吉のアルジェリアの地方都市での自殺をめぐって「ぼく」は次のように述べる。

あなたは、時には^{けんか}喧嘩もしたとはいえ結局、永いあいだ心にかけてきたかけがえのない友人が、火星の一共和国かと思えるほど遠い、見しらぬ場所で、確たる理由もない不意の自殺をしたという手紙をうけとったときの^{つら}辛さを空想してみたことがおありですか？ 小さい獣どもの世界なら、たとえば^{おお}巨きい獣に、自分の硬い頭をやわらかい^{みつがし}蜜菓子かなにかのようにかじられる体験といった^{かこく}苛酷な体験があるかもしれないが、人間の世界では、これがもっとも辛い体験だと、いまのぼくは思っている。それというのも、ぼくの少年の友、齋木^{さいきち}犀吉が、北アフリカの独立

したばかりのひとつの国の地方都市ブージー⁵⁰¹で、ホテルの浴室のシャワーの蛇口からつるしたベルトで首を吊って死んでしまったという短い手紙を、パリ経由でうけとったところだからだ。⁵⁰²

この箇所において、まず注目すべきは、大江の他の作品の随所にも見てとれるような「非日本語」的な文体をとおして書かれているという点である。とりわけ第一文において、語り手の友人との親しさ、友人が死んだ国と日本の間における距離の大きさ、その国に対して語り手が抱いている「よそよそしさ」などの二次的なメッセージを、フランス語特有の接続詞、関係代名詞や長い修飾語を日本語化したような翻訳調的、「非日本語的」な文体を醸成しながら介入させている。この方法により「友人の死」という主なメッセージの伝達を遅延させ、非中心化しているのだ。⁵⁰³

また、語り手と友人の「喧嘩」と、被植民者の植民者^{コロニゼ}に対する闘い、自殺という、人が自己に加える暴力による「死」と、革命という権力に向けられた集団的政治的な暴力による旧体制^{アンシャン・レジーム}の「死」＝「新たな体制の誕生」、といった拮抗し合う二項対立のダイナミズムが、この冒頭の段落に緊迫感を付与していることにも注目すべきである。これらの二項対立は、挫折した「安保闘争」と、成功した「アルジェリア革命」という、小説が背景にしている同時代に照応するのである。

語り手が友人に対して抱いている親近感と、アルジェリアに対する距離感や「よそよそしさ」というもう一対の二項対立は、この段落にさらなるダイナミズムを与えている。この距離感と「よそよそしさ」は、「火星の一共和国かと思えるほど遠い」という比喩的な表現によって捉えられている。

そして、この冒頭の段落におけるキーワードのひとつは、「世界」である——（「小さい獣どもの世界」、「人間の世界」）。フランス語の *monde* そして英語の *world* に対応する「世界」という単語と、「地球のすぐ外に軌道をもつ赤い惑星」⁵⁰⁴ という意味を指し示す「別世界」としての「火星」が同じ段落に用いられて

⁵⁰¹ ブージーは、アルジェリアの地中海沿岸にある港湾・工業都市ビジャーヤの旧称である。

⁵⁰² 大江健三郎、『日常生活の冒険』（1964年初版）、新潮社、東京、2002年、5頁。

⁵⁰³ 大江のこうした方法は、この文章をフランス語に翻訳するとさらに浮き彫りになるだろう。

“Est-ce que ca vous est déjà arrivé d’imaginer la douleur ressentie quand on reçoit une lettre apprenant qu’un ami, qui même si l’on s’est parfois disputé avec lui, est quelqu’un d’irremplaçable pour qui l’on s’est longtemps inquiété, s’est suicidé dans un endroit si inconnu et si lointain qu’on pourrait croire que c’est une république sur Mars.”（翻訳は筆者による）

⁵⁰⁴ 『広辞苑』。

いる。

これは、「第三世界」という用語に対する一定の「^{デフォルメ}変形」である。換言すると、ここで大江は、「第三世界」= *tiers monde*=*third world* という新造語が作りだされ、「第三世界」という概念と、「三つの世界論」= *théorie des trois mondes* = *three worlds theory* の「始まり」を刻んだ“Trois mondes, une planète”=「三つの世界、ひとつの惑星」というテキストの文脈に言及しているのだ。本論文の序章でも指摘したとおり、この概念の創始者であるアルフレッド・ソーヴィは、「第三世界」を、同一の「惑星」の中における三つの異なる経済政治的な「世界」= *monde* のひとつとして構想した。彼は、植民地支配下の被圧迫民族およびこの圧迫から独立した民族を指して『第三身分』= [*tiers état*]のごとき不可視化され、搾取され、屈辱を与えられたこの *tiers monde* そのものも、*tiers état* のように大したものになるはずだ」と予言した。そこで、ソーヴィは、反帝国主義闘争によって自己形成をしつつあるこの新たなカテゴリーを、既存の他の二つのカテゴリー（「第一世界」と「第二世界」）とは異質な、「遠い」ものになるだろうと予想し、この「世界」を「第三」の「世界」*tiers monde* と呼んだのであった。

また、周知のとおり、「火星」= *Mars* という惑星名は、ギリシア神話における「戦の神」= マースに由来する。大江が「第三世界」を「火星」に譬えるという仕掛けは、この「地域」=「世界」は「戦火」= 反帝国主義闘争によってしか自己形成できない、暴力的な状況に置かれているという同時代認識による「異化作用」である。

この解放されたばかりの「火星」の「一共和国かと思えるほど遠い」「第三世界」の地方都市での齋木犀吉の自殺は、「自己処罰への欲求」に動機づけられている。彼の「自己処罰への欲求」の根底に潜む「良心の呵責」は、安保闘争における敗北によって日本の新植民地主義を主導する「北の西側」と協力する「同盟国」としての立場がさらに昇格され、「南」=「第三世界」の民族に対する加害者としての立場が強固にされたことと深く関わっている。

『叫び声』において、——とりわけ「ぼく」と呉鷹男のマゾキズムの形式で「自己処罰への欲求」というモチーフの構想にあたって大江が念頭に置いたのは、サルトルの『地に呪われたる者』へつけた「序」におけるマゾキズムの雰囲気だった。ヌレディン・ラムチによれば、サルトルのこのテキストにおけるマゾキズムの色調の濃厚さには、悪化し、泥沼化していくばかりのアルジェリア戦争において、自国による帝国主義的権力の暴力的な行使を阻止し得ぬ進歩的な知識人特有の無力感と罪悪感の働きかけがあったと推察される。⁵⁰⁵

⁵⁰⁵ Lamouchi, Noureddine, “Le radicalisme tiersmondiste,” *Jean-Paul Sartre et Le Tiers-Monde* -

つまり大江は、サルトルのテキストにおける、自国フランスが行使している「汚い戦争」への自己批判の意識に内包されたマゾキズムに共感している。安保闘争の挫折によって自国日本もアジア・アフリカ・中南アメリカの民族に対する「北の西側」の支配搾取政策の共犯となったことへの自己批判の意識が、『叫び声』、『日常生活の冒険』、そして以下に詳述するとおり、『万延元年のフットボール』において「自己処罰への欲求」の形式で異化変形されているのだ。大江が、齋木犀吉をアルジェリアの地方都市で自殺させなければならなかったことの原因もそこにある。この点からすると、『日常生活の冒険』は、『第三世界』と日本」をテーマにする『われらの時代』周辺の一連の作品の延長線上にたつ小説である。

*

『万延元年のフットボール』も、『われらの時代』と同様に喪失した自己同一性アイデンティティーの「正真正銘性」オタンテイシテを回復しようとする兄弟の物語である。⁵⁰⁶『万延元年のフットボール』において根所兄弟は、安保闘争の挫折によって喪失した彼らの「正真正銘性」オタンテイシテを小説のフィナーレまで、遠国＝アフリカではなく、日本列島の「周辺」に位置する彼らの故郷＝「四国の森の中の谷間の村」、また歴史の深淵に求める。（しかし小説のフィナーレでこうした指向性は逆転する。）

大江はこの小説を、明治維新百周年を記念する行事を体制側が準備している最中の1967年に発表した。体制側のこの中心指向的な「ナショナル・ヒストリー国史」としての歴史観に大江が「周辺」的な立場から答えた形である。つまり大江は、この作品において敗戦の1945年を中点に、1860年の万延元年の一揆と、1960年の安保闘争という二つの反体制運動の歴史を、体制側の「明治維新」を祝福する歴史観に対置しているのだ。

一見、相互に繋がりを持たないように見える二つの歴史事象を絡ませる意図をもって書かれた『万延元年のフットボール』においても、「自己処罰への欲求」に駆り立てられた作中人物らが舞台に立つ。小説の語り手の根所蜜三郎、彼の「友人」、そして弟の根所鷹四は、三人とも、安保闘争の敗北の結果、自己同一性アイデンティティーの根拠＝「正真正銘性」オタンテイシテを喪失した日本青年として設定されている。

Rhétorique d'un Discours Anticolonialiste, 125 頁。（この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による）

⁵⁰⁶ 『万延元年のフットボール』の鷹四や、『日常生活の冒険』の齋木犀吉という作中人物らの構想において大江が念頭に置いたのは、紛れもなく『路上』の性急で荒唐無稽な主人公ディーンである。先述したとおり、『われらの時代』の南滋のモデルもディーンであった。この観点からもこの二作は『われらの時代』と内部の繋がりを持っている、と言えよう。

安保闘争に学生運動家として「アンガジユマン政治的な参加」をしたが、機動隊や極右団体の暴力行使により頭を割られて以来、その後遺症のため神経を病むようになった蜜三郎の「友人」は、アメリカ留学を中断し、帰国してからグロテスクな自殺をする——「友人は朱色で頭と顔を塗りつぶし、素裸で肛門に胡瓜をさしこみ、縊死したのである」。⁵⁰⁷

この作品の冒頭で描かれる蜜三郎が捕われた「自己処罰への欲求」は、自殺した「友人」の「晩年」と深く連動している。蜜三郎が「人夫たちが浄化槽をつくるために掘った直方体の穴ぼこ」⁵⁰⁸に自分自身を「監禁」する「自己処罰」の直前の場面が、「非日本語的」な文体をとおして構築されていることに注目したい。

夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする。内臓を燃えあがらせて嚙下されるウイスキーの存在感のように、熱い「期待」の感覚が確実に躰の内奥に回復してきているのを、おちつかぬ気持で望んでいる手さぐりは、いつまでもむなしいままだ。力をうしなった指を閉じる。そして、躰のあらゆる場所で、肉と骨のそれぞれの重みが区別して自覚され、しかもその自覚が鈍い癒みにかわってゆくのを、明るみにむかっているやいやながらあとずさりに進んでゆく意識が認める。そのような、躰の各部分において鈍く痛み、連続性の感じられない重い肉体を、僕自身があきらめの感情において再び引きうける。それがいったいどのようなものの、どのようなときの姿勢であるか思いだすことを、あきらかに自分の望まない、そういう姿勢で、手足をねじまげて僕は眠っていたのである。⁵⁰⁹

上に引用した小説の「始まり」は、その複雑且つ特異な文体で読み手にとって一定のイニシエーション（＝試練）の経験となる。読み手は、この難解な「乗越え点」を通過しなければこの作品を読み始めることができない。この冒頭の段落の複雑さは、アイデンティティ・クライシス極度の自己同一性の危機を経験している蜜三郎の、解体され、断片化されつつある「自己」のありようを文体のレベルにおいても表現しようとする作者の意図に由来する。「自己」が「解体」される過程は、とりわけ「躰の各部分において鈍く痛み、連続性の感じられない重い肉体を、僕自身があきらめの感情において再び引きうける」という表現によってヴィヴィッドに表出

⁵⁰⁷ 大江健三郎、『万延元年のフットボール』（1967年初版）、東京、1992年、11～12頁。

⁵⁰⁸ 同上書、8頁。

⁵⁰⁹ 同上書、7頁。

されている。

この段落の難解さは、主に末尾にいたるまで「主格」＝「僕は」が使われていないことにも由来する。「主格」＝「僕は」の欠如は、例えば第一文において、「に」「の」「を」といった一連の助詞によって構築された述語と、それを修飾したり、その目的語となったりする単語の意味の複数的な揺らぎを惹起する。

夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、[僕は、] 熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする。

例えば、上記のように引用部分に、「目ざめながら」という述部と「もとめて」という述部の間に、「僕は」という「主格」を代入するだけで飛躍的に難解さが緩和する。まず「に」という助詞によって時間指定的意味作用と空間指定的意味作用の間に揺らいでいた「夜明けまえの暗闇に眼ざめながら」という述部が、「僕」が存在する「空間」という意味をなすように固定される。また、「熱い『期待』の感覚」という、この「期待」が誰によって抱かれており、何に向けられているかが理解できなかった読み手に対して、「期待」が僕によって抱かれ」たものであり、その対象が「僕」にとっては既知のものであることが明確となるのだ。⁵¹⁰「主格」＝「僕は」が、もしこの文に挿入されていたとしたら、読み手にとって通過すべき「イニシエーション」となっている冒頭の読書経験がもっとスムーズに済まされたはずである。

先行研究で指摘されたとおり、この冒頭の一文は、主語が不在であることを喚起することによって、主語的統合を拒み、「辞」としての「助詞」の意味を限定しないような、(独立した意味のある構成要素としての) 品詞と品詞の「統合を、述部をまきこむ形で創りだし、その結果としてその述語的統合を拒んでいくことになる」。大江のこうした戦術は、「主語と述語との関係を明確にさせるという規制の下に、英語的な文法意識によって『日本語』を統括しようとした、近代『日本語』文、いわゆる『言文一致』を装う統辞法に抗う営為である。⁵¹¹

大江は主に、「主格」の登場をなるべく遅延させ、抑制することによって、英語というイギリスとアメリカ合衆国の「国語」をモデルに作られた近代「日本語」に対して、言語的な暴力をもって逆らっているのだ。その際に大江は、英語の文体を強く意識していると思われる。「翻訳」・「通訳」が主なモチーフのひとつであるこの小説においても、大江は『われらの時代』周辺の一連の作品においてもそうしたように、「翻訳」という言語現象を新たな、そして、独特な

⁵¹⁰ 小森陽一、「《乗り越え点》の修辞学『万延元年のフットボール』の冒頭分析」164～170頁。

⁵¹¹ 同上書、170～171頁。

文体を追求するうえで利用している。この冒頭の段落における文体は、日本語の喪失された「正真正銘性」の探求に動機づけられたものであると言える。⁵¹²

「初期の仕事」とは異なり、『万延元年のフットボール』で大江は、「世界文学」作品の原文の文体や、その翻訳調の文体を参考にすることのみにとどまらず、文化帝国主義の「共通言語」= *lingua franca* となりつつある英語に翻訳不可能な文体を作り出す試みに着手しているのだ。

それは「主格」=「僕は」=英語の *I* という人称代名詞一人称単数主格を、テクストの空間の「周辺」に追いやり、その登場をなるべく遅延させるという仕掛けである。例えば、冒頭の段落を英訳 *Silent Cry* と対比すると、翻訳文には「僕(は)」= *I* の「主体性」を奪うという仕掛けが、反映されていない。

Awakening in the predawn darkness, I grope among the anguished remnants of dreams that linger in my consciousness in search of some sense of expectation. [夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする] Seeking in the tremulous hope of finding eager expectancy reviving in the innermost recesses of my being [躰の内奥] —unequivocally, with impact of whisky setting one's guts afire as it goes down—still I find an endless nothing [手さぐりは、いつまでもむなしいままだ]. I close fingers that have lost their power. [力をうしなった指を閉じる] And everywhere in each part of my body [そして、躰のあらゆる場所で], the several weights of flesh and bone are experienced independently, as sensations that resolve into a dull pain in my consciousness as it backs reluctantly into the light [明るみにむかっいやいやながらあとずさりに進んでゆく意識が認める]. With a sense of resignation, I take upon me once more the heavy flesh, dully aching in every part and disintegrated though it is. I've been sleeping with arms and legs askew, in the posture of a man reluctant to be reminded either of his nature or of the situation in which he finds himself. ⁵¹³

⁵¹² 例えば、冒頭に構築されたこの文体は、近年の大江論において、『係り結び』をはじめとして、「てにをは」の呼応を法則化し、その正しい用法を規定し、そのことこそが「日本語」の同一性であり、文をつくるうえでの原則であるとした、本居宣長の『てにをは紐鏡』以来の、擬古文的な統辞法に対する抵抗であると位置づけられたのである。(同上書、171頁。)

⁵¹³ Oe, Kenzaburo, *The Silent Cry*, Translated by Bester, John, Kodansha International Tokyo, New York, 1974, 1頁。

Silent Cry において翻訳者ジョン・ベスターは、『万延元年のフットボール』のこうした「仕掛け」を認めていると思われる。彼は、なるべく主格=*I*や、*my* という *I* の所有格を抑制しようとし、*my* を用いなかったり (*I close fingers that have lost their power*)、受動態を採用したりして (*the several weights of flesh and bone are experienced independently*)、この独特な文体を英語空間において「再生」させようと努めている。しかし、*I* という人称代名詞一人称単数主格の使用が不可避的である英語で書かれた *Silent Cry* の冒頭では、原文の冒頭における根所蜜三郎の「自己」を統合することに対する「不能」を英語の読者に伝えるには限界がある。

逆に言うと、主人公兼語り手=蜜三郎の「語り手」としての機能=「権力」が一時的に奪われることによってヴィヴィッドに把握され表現される彼の自己同一性の危機は、*Silent Cry* と比較すると、原文においてのほうが、より明確なのである。

*

先述したとおり自己同一性の危機を経験しつつある蜜三郎は、「自己処罰への欲求」に囚われ、「浄化槽をつくるために掘った直方体の穴ぼこ」に自分自身を「監禁」するに至る。ここで注目すべき点は、蜜三郎に「自己処罰への欲求」をもたせた要因が、友人の「自己処罰」そのものであったことなのだ。すなわち、蜜三郎は、サイドを振って言うと、友人の「晩年のスタイル」において、安保闘争過程における反抗精神および安保闘争の敗北の結末として、その反抗精神の崩壊過程と重複オーバーラップするものを読み込んだわけである。

蜜三郎の友人は「死の一年前」、「コロンビア大学での留学生生活を中断して、帰国し、「スマイル・トレーニング・センター」=「微笑道場」という「軽症の精神異常者のための療養所」に入院する。湘南地方にあるという「海浜寮風の平屋建てで、建物の半分がひとつのサンルームをなしている」この施設に収容された人々は、毎食時に多量の精神安定剤を服用させられる。こうして患者たちは、「この世界のもっともおとなしい家畜のような生き物となって、おたがいになごやかな微笑をかわしあいながら、サンルームや芝生で時を過ごす」。また、「外出は自由であるし、誰ひとり自分が監禁されていると感じるものはないから、逃亡するものもない」⁵¹⁴。当初、友人が蜜三郎に伝えた「スマイル・トレーニング・センター」=「微笑道場」をめぐる感想は、このように肯定的なものであった。

「ところが、三週間たって、もういちど東京にもどってきた友人は、あいか

⁵¹⁴ 大江健三郎、『万延元年のフットボール』、16頁。

わらず微笑してはいるものの、かすかに悲しげ」だったという。友人が妻と蜜三郎に打ち明けた話によれば、「患者たちに精神安定剤と食事を配る看護人が粗暴な男で、精神安定剤を服用して腹をたてることができなくなっている無抵抗な患者たちに、たびたび、ひどいことをする」。⁵¹⁵療養所の権力側の暴力に対抗せんがため、暴力を受けた「日からほんの二、三日後に」、「友人」は「朝食時に服用すべく配給された精神安定剤をのまず、昼の分も同様に、水洗便器へ」流す。そして翌朝、「友人」が腹をたてることができるようになり、「粗暴な看護人を待ち伏せして、かれ自身も相当の被害はこうむったものの、結局は看護人を半殺しにした」。この権力側の暴力に暴力で対抗するという反抗行動の結果、「友人」は「おとなしく微笑した僚友たちから、深く尊敬されたが、院長との話し合いのあと自分はそこを出なければならなかった」。⁵¹⁶

蜜三郎は、「友人」の、湘南に位置する「スマイル・トレーニング・センター」＝「微笑道場」という「軽症の精神異常者のための療養所」の体験をめぐる打ち明け話において、旧安保体制から安保闘争にかけての日本の小史を読み込んでいる。当時逗子・葉山から茅ヶ崎までの湘南海岸一帯に多くの米軍施設が配置されていたことから考慮すると、これは無根拠な発想ではないだろう。

蜜三郎は、新植民地主義体制の支配下に置かれながら、その体制と協力し、経済的利益を得ようとする日本の親米反共保守政権と、日本国民の力関係の拮抗を、看護人と「軽症の精神異常者」の関係において見いだした。

蜜三郎にとって、残酷で権威主義的な看護人は、朝鮮戦争の過程でGHQの指令により1万数千人が公職追放された「赤狩り」^{レッド・パージ}を行った吉田茂政権（1946～47年、1948年～54年）、砂川反米基地拡張に反対する市民運動を暴力的に弾圧した鳩山一郎政権（1954～56年）、そしてとりわけ、安保闘争の過程で強権的専制政権特有の政治を行った岸信介政権（1957～60年）と重なり合うような人物である。また、「軽症の精神異常者」を無抵抗にする「安定剤」は、主に朝鮮特需による高度経済成長期に相応すると彼は示す。

物語言説のレベルから言うと、大江が「初期の仕事」^{アーリー・ワーク}で、「監禁状態」、「閉ざされた壁のなかにいる状態」というイメージを旧安保体制下に置かれた日本社会を描くために活用したことは、本論文ですでに触れたとおりである。『万延元年のフットボール』のこの挿話において、大江は安保闘争前後の日本の政治社会的状況を要約するためこのイメージを再び採用している。

大江は、この最初期小説における「監禁状態」というイメージを、アメリカ文学のケン・キージーのベストセラー小説 *One Flew Over the Cuckoo's Nest*

⁵¹⁵ 同上書、16頁。

⁵¹⁶ 同上書、17頁。

(1962年、『郭公の巢』、『カッコーの巢の上で』)で展開されている病院の権力側による「監禁」、「監視」、「安定剤による患者の主体性の麻痺」と、マック・マーフィーの入院を契機とするこの弾圧に対する反抗運動のイメージをもって補強したと言える。ケン・キージーは、1960年代初頭のアメリカ合衆国を精神病院に譬え、(刑務所から逃れるために詐病を使って)精神病院に入院してきた主人公マック・マーフィーが行う、安定剤などによって患者たちを厳しく抑制しようとする権威主義的な婦長への反抗をとおして、ヒッピー世代の自由の探求を言語化したのであった。スマイル・トレーニング・センターの挿話における大江の主な参照先は、自らの最初期小説とともに、この現代アメリカ文学の作品である。

他方、蜜三郎の弟の根所鷹四は、安保闘争に「参加」した後に、「政治的離脱」をした大学生によって構成され、「革新政党」の右派の婦人議員が率いる「転向劇団」のメンバーとして、アメリカ大統領の訪日妨害をアメリカ合衆国市民に謝罪する内容の《われら自身の恥辱》という芝居を公演するために、アメリカ合衆国に渡った。だが、アメリカ合衆国に到着すると彼は、「転向劇団」をも「離脱」し、アメリカを自由自在に旅行してからアフリカ系アメリカ人の娼婦に梅毒を移され日本に帰る。帰国した後、兄夫婦を説得したうえで、自らの「正真正銘」な「根所」を求めて故郷の「四国の森の中の谷間の村」に帰還する。

*

鷹四は1860年＝「万延元年」の百姓一揆を指導した曾祖父の弟に強く感情移入をし、その百姓一揆を谷間の村で追体験することを試みる。鷹四が曾祖父の弟を英雄視する反面、蜜三郎は裏切者として貶める。また鷹四は、曾祖父の弟とともに、朝鮮人部落の屈強な精鋭たちとの闘いの際、谷間の青年たちの指導者として英雄的に「戦死」したと信じて崇拝しているS兄さんとも同一化しようとする。反面、蜜三郎の解釈によるとS兄さんは、指導力などまったく持たない弱い少年に過ぎなかった。復員兵から構成された無法者グループが谷間の「有力者」の利益を保障するために、米の闇市場を運営しているとして、朝鮮人が居住する部落に対して行使した襲撃の時に、彼は死んだという。

安保闘争の敗北以後、根無し草的な生活に追い込まれた根所兄弟は、自己同一性の根拠を故郷に求め帰郷したにもかかわらず、鷹四は兄と共同の「正真正銘性」の探求を、暴力を取り込んだ形式で推進する反面、他方ではその探求を阻み、無効にしようとする勢力と協力する。例えば、アメリカ合衆国で「スーパー・マーケットの視察にきた日本人旅行団の通訳をした」時、その旅行者の一人は、根所鷹四の「姓」に興味を持った。このビジネスマンは、

かつて「四国の森の中の谷間の村」の居住者であったということだ。現在、四国の「谷間の村」が位置する地域でスーパー・マーケット・チェーンを営んでいる朝鮮人の彼を「谷間の村」の住民は「スーパー・マーケットの天皇」と呼んでいる。そしてこの「スーパー・マーケットの天皇」には、根所兄弟の「生まれた家にある倉屋敷」を買い取り、それを「東京に運搬してきて郷土料理屋を作る」⁵¹⁷という奇妙な計画があった。根所鷹四が「古ぼけた木造の怪物」としか思わなかった「倉屋敷」を東京に運搬し、そのエキゾチックな雰囲気を経営的・金銭的利益獲得のために利用することを「スーパー・マーケットの天皇」は企んでいたわけだ。

国の「周辺」に位置する地域を資本主義的な「市場」に、そこの住民を「消費者」に転換し、「スーパー・マーケット・チェーン」という、当時の都会特有の消費文化をその地域に移植することは、当然その地域特有の「土着」的生活様式、文化を取り壊すことを意味する。さらに鷹四は根所兄弟が探求している「オタンテイック正真正銘」なるものを象徴している倉屋敷を「スーパー・マーケットの天皇」に売り渡して、その売り上げ代金の一部を「四国の森の中の谷間の村」の青年らによって構成されたアメリカン・フットボール・チームの維持費用にあてる。言語、文化、スポーツ、生活様式など様々なレベルにおける「アメリカ」的なるものが、このビジネスマンと鷹四を断続的に相互に接近させ、彼らに「同盟」関係を結ばせている。

また、奇妙なことにこの「チーム」は、トレーニングで鍛えた運動力と、学んだ技をスポーツ試合には生かさない。彼らは、谷間の村が洪水と大雪で他の地域から遮断された時期に、「スーパー・マーケットの天皇」のスーパーを襲い、商品を略奪するという暴力行為に運動力と技を用いるのだ。アメリカン・フットボール・チームの「性的人間」ならではの昂揚感に動機づけられたこの暴力行為＝「想像力の暴動」は、鷹四による村の娘に対する強姦殺人という暴力事件に繋がっていく。やがて、鷹四が村の娘を強姦しようとし殺してしまったという噂が広がり、彼は「チーム」の青年たちや村人からの信用を一気に失い、「暴動」の指導者になろうとするという試みは挫折する。

この奇怪な性暴力事件について話しに来た兄に対して、鷹四は、生涯彼に「良心の呵責」を与えることとなった知的障害者の妹の自殺における自らの責任について告白する。鷹四は妹と近親相姦を結び、換言すると、彼女を性的に「搾取」した。彼に恋心を抱いた妹を鷹四は妊娠させ、人工中絶までさせた。鷹四は、こうした性的搾取という「暴力」の責任を回避し、彼女に対して冷淡になったことにショックを受けた妹を自殺に追い込んだという。この告白の結末と

⁵¹⁷ 同上書、70頁。

して、鷹四は兄の蜜三郎にも背そむかれたあげく、散弾を込めた銃で顔と胸を柘榴のように裂くというきわめて自虐マゾヒスティック的な形で自殺する。

蜜三郎に鷹四に対して嫌悪感を覚えさせたのは、おそらく、自らの「きょうだい」＝妹に対する「搾取」・「暴力」だけではない。想像力を働かせて、ものごとをつねに、周りの人々と異なった、独特な観点から捉えようとし、「個人的な体験」をつねに「社会・政治的な体験」と連結する傾向のある、内向的な知識人蜜三郎は、(友人の自殺の時にもそうしたように)ここでも「歴史」と繋がるような「意味」を読み込んだと言える。⁵¹⁸(蜜三郎は、作中人物として、作中の出来事を「体験」しながら、それらを同時に小説のように読むことによって、「経験」する、敢えて言えば「読む人間」である)

蜜三郎は、鷹四による知的障害者の妹＝「きょうだい」に対する「近親相姦」という性的搾取・性的倒錯行為、同胞の娘に対する性暴力に、安保闘争の最終段階において「警官隊の『反撃』による大規模の暴行」の結果死亡し、安保闘争のために命を捧げた人物として焦点化された樺美智子という女子大生や、機動隊や極右団体の暴力行使によって頭が割られ彼の「友人」に対する残虐行為と同様のものを見いだす。これらの暴力事件には安保闘争を妨害するために岸信介政権が雇ったとされる極右団体も関与した。鷹四は、安保闘争の6月15日の前後に、突然極右に「転向」して、「第三世界」指向の運動を行っているデモ隊を襲う極右団体に加わったのであった。こういう意味で、彼は「セヴンティーン」の「転向右翼」の「おれ」に酷似している。蜜三郎は、樺美智子と「友人」の加害者が『転向右翼』の鷹四であったかもしれないという疑問に捕われたのである。

また彼は、弟のこうした「きょうだい」に対する非対称的な暴力行使と、アメリカン・フットボール・チームによる「想像力の暴動」という略奪行為において、ヴェトナム戦争で日本が「きょうだい」同然のアジア近隣諸国に対する軍事的な暴力に関与したことに照応するものを読み取っている。

つまり蜜三郎は、弟の破壊的な行為において、国内外の「第三世界」指向の運動を妨害し、無効にすることを目論む「新植民地主義」的な暴力手段に照応するようなものを見いだしたのである。蜜三郎の「読み」をより明白にするうえで、安保闘争以降の過程を俯瞰する必要がある。

⁵¹⁸ 例えば、鷹四は、娘を強姦しようとして頭を砕いて殺し、彼女に指を食いちぎられたと供述したが、兄を説得することができない。蜜三郎の解釈の方が、より暴力的であり、自虐マゾヒスティック的な色合いが濃厚だ。車から飛び降りて怪我をした娘の口に指を入れて、片手で持っていた石で、指を食いちぎるほど彼女の頭を激しく打ち砕いたというのは、蜜三郎によるとこの事件をめぐる「本当の」ことである。

*

そもそも日本が、ヴェトナムという当時のアジアの貧しい国に対する非対称的な暴力に間接的に関わることに道筋をつけたのは、韓国と1965年に締結した「日韓基本条約」であった。韓国民衆は、1960年の「4月革命」で李承晩大統領を辞任に追い込んで、国を「第三世界」指向の路線に接近させた。だが、民衆を軍事力で弾圧し、1961年5月16日の軍事クーデタで政権を握った朴正熙は、国を再び新植民地主義体制下に組み込むことに成功した。そもそも、朝鮮戦争以来、国交正常化のための日韓会談は断続的に開催されていたが、植民地に対する賠償問題を中心とする日本帝国主義的植民地支配インペリアル・リスパンスイビリティの責任をめぐる対立が続き、「日本の代表が植民地支配を正当化する発言をし、一時決裂した」。⁵¹⁹ 1960年の「日米安保条約改定＝新安保」の締結が日本人にとって「屈辱」的であったと同様に、韓国民衆にとっての日韓会談も「屈辱」的であった。それゆえ、韓国の学生たちは、「植民地支配に対する反省も謝罪もないまま」⁵²⁰ 推進されている交渉を「対日屈辱外交」と位置づけ、それに反対する一連のデモ（1964年4月）を行ったのである。

この「屈辱」的な条約の締結には、朴正熙大統領やその政府スタッフの大半が植民地時代の日本軍士官学校出身であったことの影響が大きかった。また、日本の過去の植民地支配からすると、「日韓基本条約」の主な二つの問題点は、朝鮮併合条約を無効としたことと、韓国政府を朝鮮半島における唯一の合法政府と認めたことにある。

この条約文には、「朝鮮併合条約」＝「旧条約」が「もはや無効」だといまいな言葉があった。これに関して、韓国政府は、「旧条約は締結時から無効であり日本の植民地支配は不法であるという意味だ」、と韓国国会で説明した。それにもかかわらず、佐藤栄作政権（1964～72年）の「朝鮮併合条約を無効と」するにことに関する解釈は、「両者の完全な意思によって平等な立場で締結された」⁵²¹ という「歴史修正主義」を踏まえたものだった。日本は、こうして帝国主義的植民地支配インペリアル・リスパンスイビリティの責任をあいまいにするのみならず、韓国だけと条約を結び、当時は「第三世界」指向であった「北」朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国を「主権国家」として認めなかったことによって、半島における南北分断をさ

⁵¹⁹ 福井紳一、「ベトナム戦争と七〇年代安保闘争」、『戦後史をよみなおす』、講談社、東京、2011年、210頁。

⁵²⁰ 小森陽一、「敗戦後の植民地的無意識」、『ポストコロニアル』、128頁。

⁵²¹ 引用は、徐京植ソクヨンシク、『分断を生きる——「在日」を超えて』引用は、小森陽一、「百年のみなし子」、『歴史認識と小説』、161頁より。

らに固定化した。

「日韓基本条約」の締結にあたって日本は、韓国に無償供与三億ドル、政府借款二億ドルを支払った。しかし、これを植民地支配に対する「賠償」としては位置づけなかった。⁵²²第一章でエンクルマの「新植民地主義論」を援用して指摘したとおり、日本政府はこの供与活動を、新植民地主義という支配形態の基本的な要素としての「援助」（「独立祝賀金」⁵²³）として位置づけたのである。

「援助」という形で大量の資金が韓国に渡ったことにより日本企業が韓国に「進出」する基盤がつくられた。

つまり、「日韓基本条約」は日本資本の韓国への「新植民地主義的な進出」に道を開いたのだ。日本のアジアに対する新植民地主義的政策を「対韓経済進出は日本の再侵略の第一歩だ」と定義した韓国の学生たち（日本では在日朝鮮人の抗議者）は、「日韓闘争」を起こした。⁵²⁴

日韓基本条約の締結においては、ヴェトナム戦争の影響も大きかった。米駆逐艦が北ヴェトナムの魚雷艇の攻撃を受けたというアメリカ合衆国ジョンソン政権の「でっち上げ」工作によって勃発したヴェトナム戦争を背景に、「日韓基本条約」は、「日韓米でヴェトナムを包囲する目論見」⁵²⁵を持っていたアメリカ合衆国と日本の強い圧力によって1965年6月22日に締結された。1965年「1月8日には、すでに韓国が南ヴェトナム派兵を決定しており、2月7日からアメリカ軍による『北爆』が開始され、佐藤栄作が5月7日に『北爆』支持を表明していた。そして6月4日には、ソ連が北ヴェトナムとの間で援助協定に調印した。「冷戦」が「熱戦」に転換する中で、「日韓基本条約」は国会で強行採決されていったのだ。⁵²⁶

韓国は派兵という形で直接的に、日本は日米安保体制下で軍事要塞化された沖縄の基地を米軍に利用させることによって間接的に、新植民地主義体制による「第三世界」の自己形成過程を妨害し、弾圧する企図としてのヴェトナム戦争に関与した。

蜜三郎にとっては、自らの「きょうだい」を搾取し、村の同胞の娘に暴力をふるう鷹四や、彼が主導した「想像力の暴動」という侵略・略奪行為を行ったアメリカン・フットボール・チームは、国内外の「第三世界」指向の運動（安保闘争、ホーチミンによるヴェトナム民族解放戦争）に対する弾圧的且つ非

⁵²² 同上書、163頁。

⁵²³ 同上書、163頁。

⁵²⁴ 福井伸一、「ベトナム戦争と七〇年代安保闘争」、『戦後史をよみなおす』、211～212頁。

⁵²⁵ 同上書、211～212頁。

⁵²⁶ 小森陽一、「敗戦後の植民地的無意識」、『ポストコロニアル』、127～128頁。

対称的な暴力を体現していると言える。

反面、「谷間の村」にスーパー・マーケット・チェーンを設置し、「倉屋敷」を買い取り、それを「東京に運搬してきて郷土料理屋を作る」ことを企画する「スーパー・マーケットの天皇」は、新植民地主義の経済的な側面を担わされている。

この新植民地主義の二つの側面を象徴的にあらわしている鷹四と、「スーパー・マーケットの天皇」は、利害関係の面で対立しているかのように見える。しかし、鷹四と、「スーパー・マーケットの天皇」それぞれの体験において、蜜三郎が読み込んでいるのは、相互作用性であり、相互補完性である。

「スーパー・マーケットの天皇」が、谷間の村の市場に経済的に進出した投資家としての存在を村の住民や有力者に認めさせるに至ったのは、「想像力の暴動」の過程においてである。「想像力の暴動」が終わり、雪が融けたら、「スーパー・マーケットの天皇」が若い衆を五人つれて村に来ることについての蜜三郎の感想は次のようである。

すでに谷間の民衆の誰ひとりスーパー・マーケットの天皇が暴力団と共に谷間に入ってくると考えてはいない。スーパー・マーケットの天皇は、雪融けがはじまるやいなやその代理人をつうじて、「暴動」の引き起こした複雑な諸問題のすべてをもっとも単純に解決してしまったのである。すなわち、かれは谷間に入ってくる最初の大型トラックに物資を満載して送りこんで、マーケットを再開した。しかも略奪された商品について賠償を請求することはせず、警察に報告することもなかった。若い住職やウニみたいな若者が押しすすめていた、谷間の富裕な人々の共同出資でスーパー・マーケットの権利を損害もろとも買いうけるといふ企画は一蹴された。その申し出自体が、スーパー・マーケットの天皇に対して正式に持ち出されることはなかったという噂もある。鷹四の死の直後、すでに暴動の推進力の中核は崩壊しつくしていたのである。あらためて「暴動」が再開される可能性を匂わせてスーパー・マーケットの天皇に影響を与える力は残っていない。谷間の主婦たちも、「在」の人間も、略奪品が追求されないことに卑屈な感謝とこすっからい満足の念をいだいて「暴動」以前より総じて、二、三、割も値上がりした食品やら日用雑貨やらをおとなしく買っている。⁵²⁷

一定の「周辺」的な地域における「暴動」の過程が、対立しているように見

⁵²⁷ 大江健三郎、『万延元年のフットボール』、412～413頁。

える二つの勢力を同盟に導き入れるという展開である。そしてこの「暴動」が「周辺」的な地域において、新植民地主義的な宗主国中枢の経済的進出を支える。日本と韓国の国交正常化、つまり軍事同盟としての日韓基本条約が、日本と韓国の「きょうだい」同然、「同胞」同然の北ヴィエトナム民衆に対する暴力行使に協力する過程で可能となる。「スーパー・マーケットの天皇」が谷間の村でそうしたように、この「暴動」後の過程における「国交正常化」によって、日本は韓国をはじめとするアジアへの経済的な進出の根拠を固めることができた。「高度経済成長」の日本と韓国の間には経済のレベルにおける非対称的な新植民地主義的な力関係が成立し、「賠償」が問題にされなかったのだ。

「スーパー・マーケットの天皇」は、この「暴動」によって、損するどころか、利潤を上げて愉快である。「スーパー・マーケットの天皇」の愉快的気分は、米軍に爆弾、毒ガス、軍服、死体袋、車両などを売ることによって遂行されたヴィエトナム特需による好況を、「いざなぎ景気」という建国神話に重ねて享受していた佐藤栄作政権下の日本の愉快的気分と重なっている。

また、日本が米軍に補給したもうひとつの特需物質は、「電気製品」であった。この同時代現象を、蜜三郎は、村人が「電気製品など略奪品の代物については、ひそかにスーパー・マーケットへかえしに行く者が続出して、しかも傷ついたそれらが特価販売されると短い時間に売り切れた」ことに読み込んでいる。⁵²⁸米軍に供給された「特需」物質も「特価」で販売されたはずだ。「読む人間」としての蜜三郎が「特需物質」を「略奪品」に譬えることには、ヴィエトナム戦争という「汚い戦争」への自国の関与に対する（自己）批判の意識の作用があると思われる。

1960年安保闘争の一年前に「流通革命」（スーパー・マーケットの小売業への登場によって、小売業全体がドラスティックに変質したこと）をめぐる議論がさかんになり、スーパー・マーケットが全国各地に続々と開店した。日本で最初のスーパー・マーケットは、1953年の朝鮮戦争休戦協定調印の直後にできた東京・青山の「紀ノ国屋」であった。⁵²⁹つまり、スーパー・マーケットの誕生という現象は、日本が朝鮮特需によって獲得した高度経済成長の指標である。ここで、「スーパー・マーケットの天皇」を、「朝鮮人」として設定していることの意義が判明する。物語言説のレベルにおける彼の「朝鮮人」としての設定には、日本の朝鮮半島への経済的な「進出」を捉えるという作者大江の意図があるのだ。

⁵²⁸ 同上書、413頁。

⁵²⁹ 小森陽一、「百年のみなし子」、『歴史認識と小説』、145～146頁。

大江は後に、自国日本を「第三世界を弾圧する勢力のひとつ」⁵³⁰として位置づけたが、安保闘争の敗北を皮切りに、「第三世界」というカテゴリーからの「離脱」^{デザンガージュ}が決定的になった日本は、「日韓基本条約」の相手国であった韓国をはじめとするアジア近隣諸国をも、「援助」供与などの方法によってこのカテゴリーから「離脱」^{デザンガージュ}させるように働きかけつづけた。⁵³¹

『万延元年のフットボール』に漂っている「自己処罰の欲求」のモチーフは、安保闘争の敗北が切り開き、日韓基本条約やヴェトナム戦争によって強固になった、日本型新植民地主義の形成に対する大江健三郎の（自己）批判と深く関わっている。

大江は、彼の文学の世界化においてもっとも重要な作品のひとつである『万延元年のフットボール』を書くにあたって、安保闘争の前後の時期を強く意識していたことを、初版から20年後に書いた後書きで次のように説明している。

まるまる二年、そのように鬱屈した準備期間をへた後、僕はその間に書きためていたノート、草稿、を焼き棄てることから仕事を始めました。それでもあとにのこって自分に固着しているイメージを、すべて押しこむようにして、『万延元年のフットボール』の第一章を書いたのです。学生として作家の仕事始めてから、すでに足かけ十年がすぎ、政治的な課題としては、いわゆる安保闘争を経験していたわけでした。⁵³²

大江が、国内の「第三世界」指向の運動として位置づけた「安保闘争」の問題を、「第一世界」と「第三世界」（ソ連による核実験再開との関係において「第二世界」とも）を相互作用させながら扱ったもうひとつの小説は、『個人的な体

⁵³⁰ Oe, Kenzaburo, "Japan's Dual Identity: A Writer's Dilemma," *Japan the Ambiguous and Myself*, 60 頁. (引用文の翻訳は引用者による)

⁵³¹ 例えば、日韓基本条約締結と同年の1965年には、「インドネシアでのスハルトを中心とした9月30日のクーデタによって、フィリピンではマルコスが大統領になることによって、かつて日本の軍政下におかれていた旧植民地地域において、親米開発型軍事独裁政権」が誕生した。

(このクーデタまでにスカルノ政権のインドネシアは、アジア・アフリカ＝バンドン会議も開催された、「第三世界」非同盟運動の拠点のひとつであった)

これらの国々においては、「共産党への弾圧をはじめとする民主化への暴力的抑圧が行われ、結果として、日本から『経済援助』という名における賠償は、こうした軍事独裁政権を支える役割を果たしたのである。」(小森陽一、「敗戦後の植民地的無意識」、『ポストコロニアル』129～130頁)

⁵³² 大江健三郎、「著者から読者へ——乗越え点として」、『万延元年のフットボール』、454頁。

験』である。

VI.5. 大江文学の「世界性」と「第三世界」文学

『個人的な体験』も、『われらの時代』やその周辺の『『第三世界』と日本』というテーマを扱った一連の作品と深い繋がりを持つ長編である。『個人的な体験』は、妻が「奇形児」を生むことにより、障害者になる可能性のある子供の父になった責任の重さに直面し、精神的危機に陥った大人げない27歳の予備校講師、鳥の「成長」の物語である。鳥が危機に陥った主な理由は、障害児の父になることによって、彼が永い間夢見ていたアフリカ旅行の計画が不可避免的に中止されてしまったことにある。この危機に突入した鳥は、自己救済を、ロシア人を祖母にもつ大学時代の同窓生火見子とのもっとも汚辱にみちたやりかたによる性愛エロスに求める。ついに、鳥は火見子にそそのかされ赤ん坊を墮胎医に連れて行って処置してもらい、彼女とアフリカへ行くという背徳的な計画すら立てる。だが、ふと彼はこの「インファンティサイド 嬰兒殺戮」の計画の邪悪さに覚醒し、アフリカ行きの夢を放棄し、父としての責任を取り赤ん坊を育ててゆく決心をする。言い換えれば、大人の世界へのイニシエーションを結実させるのだ。

大江が安保闘争の四年後に書いた『個人的な体験』には安保闘争への言及があり、この言及は「第三世界」としてのアフリカのモチーフと連動している。例えば、小説の一章において主人公鳥バードがゲームセンターの不良少年たちに因縁をつけられて、喧嘩に巻き込まれてしまう場面は、安保闘争をアレゴリー的に表現する仕掛けとして設定されている。不良少年たちとは明らかに体力が劣っている鳥は、この喧嘩で「闘って」、それに何らかの勝利を収めることをアフリカ旅行の実現の可能性と無媒介に結びつけるのである。

それまでかれは驚愕し、困惑したあげく、ひたすら逃げ出す工夫をしていたのだ。しかしいま、鳥は逃げようとは思わなかった。もし、いま闘わなければ、おれのアフリカ旅行のチャンスは永遠に失われるばかりか、おれの子供は最悪の生涯をすごすためにのみ生まれてくることになるだろう。⁵³³

『われらの時代』の手榴弾による度胸試しの場面を思い起こす鳥バードの挑戦意識は、日本青年が主役を担った安保闘争を暗喩的に示している。もし鳥が「闘わ

⁵³³ 大江健三郎、『個人的な体験』（1964年初版）、新潮社、東京、1994年、22頁。

なければ」、アフリカと繋がることも不可能になるし、彼の「子供は最悪の生涯をすごすためにのみ生まれてくることになる」というヴィジョンは、大江の「安保闘争がアジア・アフリカ・ブロックの一員としての戦いであった」という見解と重なり合っている。

＊

他方、『個人的な体験』における「アフリカ地図」の参照先は、第四章で触れた『われらの時代』における、アフリカの部分が^{ハイライト}強調されていた世界地図である。『個人的な体験』で再登場する「アフリカ地図」は、作品全体を貫く主要なモチーフのひとつとして設定されている。このモチーフは小説の最初の文章において現れる。

^{バード}鳥は、野生の鹿のようにも^{こうぜん}昂然と優雅に陳列棚におさまっている、立派な^{アフリカ}アフリカ地図を見おろして、抑制した小さい嘆息をもらした。⁵³⁴

大江は、同じアフリカ地図のモチーフを第二章の最初の文章においても登場させる。

^{バード}鳥は、泥と鼻血とに汚れている西アフリカ地図を^{がびょう}画鋸でとめた壁の下で、脅かされたワラジムシのように体をまるめて眠っていた。⁵³⁵

^{バード}鳥に「抑制した小さい嘆息をもら」させるのは、彼が「非同盟」の「第三世界」としての「アフリカ」の「^{オタンテイシテ}正真正銘性」に対して抱いている憧憬と、「同盟国」としての自国に対する不満である。これも、南靖男の *FLN=Jabhat at-Tahrir al-Vatani* の極東代表者の「アラブ人」や「アラブ人」の「地図だらけの部屋」の壁にはあってあった「アフリカが真紅にぬられた仰々しい世界地図」そして、「フランス軍のトラックを武装解除している解放軍」を映している一枚の写真に対するフェティシズムとも言える憧れと重なり合っている。さらに、^{バード}鳥の新植民地主義体制下の「同盟国」としての自国に対する暗示的な不満も、南靖男の自国に対する明示的な不満と照応している。物語言説のレヴェルからすると、大江は『われらの時代』における「アフリカが真紅にぬられた仰々しい世界地図」のアフリカの部分を切り取って＝「脱文脈化」したうえで、『個人的な体験』の物語空間に布置したと言えよう。

⁵³⁴ 同上書、5頁。

⁵³⁵ 同上書、24頁。

しかし、『個人的な体験』における「アフリカ地図」が指し示しているのは、「第三世界」という「地政学」的なカテゴリーに限られない。『個人的な体験』における「アフリカ」は、つねに文学やライティング行為という文化のレベルの活動と結び付けられているのだ。例えば、鳥は一時的に火見子の家に滞在することを決心し、そのためにさしあたり必要なものをかき集める場面において「壁からアフリカの地図をはずして丁寧におりたた」んで上着のポケットに入れ、「アフリカ人が英語で書いた小説」⁵³⁶をもバッグに入れるのであるが、後にこの小説が、ナイジェリアの作家エイモス・チュチュオーラの『幽奇の森における我が生活』= *My Life in the Bush of Ghosts* (1954年) であることが明らかになる。⁵³⁷ また鳥は、アフリカを旅行し、その体験に基づいた《アフリカの空》という冒険記⁵³⁸を書くことを望む。

鳥は、眠っている時にサハラ砂漠以南のブラック・アフリカの公用語の一つであるスワヒリ語で叫んだりするほどアフリカの言語に精通している人物として設定されている。鳥の妻は言う——「あなたは、たびたび、アフリカへ出発する夢を見てスワヒリ語で叫ぶのよ」⁵³⁹。

強調されるアフリカ地図のモチーフとアフリカ文学、そして鳥がアフリカに関する本を書く計画を併置するという仕掛けは、自らの文学を世界文学の地図において配置するという大江の意図と深く関わっている。

また、『万延元年のフットボール』のフィナーレの部分で、蜜三郎は、安保闘争の敗北のトラウマに煩わされたあげくに自殺した友人の死により空席になった大学の「英語教師」と、アフリカでの動物採集隊のスワヒリ語通訳という二つの仕事の提案を受ける。蜜三郎が「英語教師」ではなく、「スワヒリ語の通訳」を選択する設定は、大江が自らの文学を世界文学の地図に配置する作業を反復させている。

『個人的な体験』と『万延元年のフットボール』の物語内容のレベルにお

⁵³⁶ 同上書、157頁。

⁵³⁷ チュチュオーラのこの書に含まれている物語は、内戦で破壊された村から逃亡し、幽霊が住まう奇妙且つ危険な森——熱帯林の心中に位置していたこの森は、その周辺が開拓されたのにもかかわらず残存していた——に避難してしまった五歳の少年の眼をとおして語られている。

大江は、この「第三世界」文学の作品における「幽霊」のイメージを（『個人的な体験』と密接に繋がっている）「空の怪物アグイー」における「怪物」の構想において生かし、森のイメージを『万延元年のフットボール』、『同時代ゲーム』や『M/T 不思議な森の物語』に登場する「森」の構想において参考にしたと思われる。

⁵³⁸ 大江健三郎、『個人的な体験』、11頁。

⁵³⁹ 同上書、150頁。

ける「アフリカ」＝「第三世界」指向性と連動するのは、大江がこれらのテキストにおいて意識している広義の「第三世界」文学のテキストである。『個人的な体験』におけるエイモス・チュチュオーラの『幽奇の森における我が生活』にはすでに触れたところだが、『万延元年のフットボール』においては、反体制の、反帝国主義的な「暴力」のイメージの構想において「第三世界論」の文化理論家フランツ・ファノンの『地に呪われたる者』を強く意識していたであろう。

＊

本論文で分析した大江の作品には、1950年代の脱植民地化および「第三世界」非同盟運動の形成期に付随して萌芽した「第三世界」文学という新たなカテゴリーと多くの共通点が存在する。物語言説のレベルでは、第一に、西洋文学としての「世界文学」の主要な作品を「模倣しつつ反転」という「第三世界」文学の「小説の方法」に照応する「脱文脈化法」。第二に、サルトル（やファノン）など「反植民地主義理論家」の概念を物語の言説に取り込むという仕掛け。第三に、「性と政治」をはじめとするアレゴリー法⁵⁴⁰、である。物語内

⁵⁴⁰ この文脈で触れておかなければならないテキストは、「アレゴリー」を「第三世界」文学の主な特徴とするアメリカ合衆国のマルクス主義文芸批評家フレドリック・ジェイムソンによる“Third-World Literature in the Era of Multinational Capitalism” (Social Text, No. 15 Autumn, 1986, 65~88頁, Duke University Press, Durham North Carolina, 1986年)である。この論文は、「第三世界」文学というカテゴリーがアメリカ合衆国の大学のシラバスに入れられ、西洋文学の聖典^{キャン}を中心にするシラバスを「非中心化」することを要求する呼びかけである。中国の魯迅（1881年～1936年）やセネガルのウスマン・センベヌ（1923年～2007年）をはじめとする一連の非西洋地域の作家によるテキストの分析をとおして、作家が属する共同体＝民族＝国民の歴史を政治的ナショナリズムな観点からアレゴライズするリアリズムの文学として、「第三世界」の文学を定義している。

これらのテキストにおいて、西洋では存在しなくなった「ナショナリズム」という政治的イデオロギーと、西洋の文学世界では評価が低い「アレゴリー法」の連動に依拠する「第三世界」文学の主な方法をジェイムソンは「ナショナル・アレゴリー」と呼ぶ。またジェイムソンに言わせば、あらゆる「第三世界」のテキストは、「ナショナル・アレゴリー」という「メタ・テキスト」に属する——“All third-world texts are necessarily, I want to argue, allegorical, and in a very specific way: they are to be read as what I will call national allegories, even when, or perhaps I should say, particularly when their forms develop out of predominantly western machineries of representation, such as the novel.” (Jameson, Fredric, “Third-World Literature in the Era of Multinational Capitalism,” 68頁.)

エジャズ・アフマドは、“Jameson's Rhetoric of Otherness and the ‘National Allegory’”においてそ

のごく一部しか英語に翻訳されていない、敢えて言えば一定の“great unread”=「大きな未読」となっている、非西洋の文学全体を歴史地理的に特定しないまま、「深さを欠いており、内容のレベルではナショナリズムと、形式のレベルでは『アレゴリー』しか方法を持たない未熟なもの」として位置づけるジェイムソンのこうしたアプローチを示した。アフマドによればジェイムソンがアメリカ合衆国文学を活性化するものとして位置づけている「『アレゴリー』という方法がアメリカ合衆国文学内部に存在しない」という論点は誤っている。なぜなら、アメリカ合衆国国内の「周辺」的な共同体であるアフリカ系アメリカ人、そしてフェミニズム文学にはアレゴリーが大いに採用されているからだ。

アフマドは、ヨーロッパに歴史的に存在してきた文化間の活発な翻訳活動を媒介にしたダイナミックな交流に由来する、ある程度の文化的同質性=*homogeneity* に照応するものが、あたかもアジア・アフリカ・中・南アメリカの諸国間の異質的(=*heterogeneous*)文化空間にも存在するかのように対称的な要素として扱うジェイムソンの方法の不適切さをも指摘する。(Ahmad, Aijaz, “Jameson’s Rhetoric of Otherness and the ‘National Allegory,’” *In Theory—Classes, Nations, Literatures*, Verso Books, London, New York, 1992年95~123頁、を参照。この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

アフマドも言うように、「第三世界」の作家を、リアリズムの枠に入る作品しか書くことができず、ナショナリズムのみの政治的なヴィジョンしか掲げることができないものとして限定することは大いに誤っている。しかし進歩的な、「政治的^{アシカ}な参加^{ジュマン}」をした「第三世界」の作家たちが、一定の歴史認識をとおして自国と帝国主義の間における権力関係を、自国が置かれた地域をも視野に入れながら表現するためにアレゴリー法を採用したことは事実である。

ジェイムソンは、大江の『宙返り』(1999年8月)——これは、癌をかかえて「晩年」を過ごす初老の画家木津と、その若い恋人育雄といった「おかしな^{スワード}・カップル^{ブル}」が、以前奇怪なテロル事件を起こした危険な教団に関わって行く過程を描く小説である——の英訳 *Somersault* について書いた“Pseudo-Couples”という大江論において、大江文学を^{レトロアクティヴ}遡及的に高く評価している。この2003年の評論は、英語圏における従来^{レトロ}の大江論のなかで、もっとも独自かつ才気煥発なアプローチのひとつである。

ジェイムソンが大江文学を高く評価することの主な理由は、大江が作品において一貫して「アレゴリー法」を採用しつづけたことにある。ジェイムソンによれば、英語圏の読者は、大江を「知的障害者の子供を持つ父」と「反核運動家」といったステレオタイプに限定する形で大江文学を「誤読」し、そこに濃厚に孕まれている「歴史」と「政治」を見逃してきており、この「誤読」は、英語圏の読者が大規模な反体制運動となった1960年安保闘争や、長期的な三里塚・成田国際空港建設反対闘争など、日本現代の社会政治的状况をめぐる歴史認識を持たなかったことによる。

ジェイムソンはこの文章において、「世界文学」を参照する形で、日本の社会政治的な現状を、世界政治と「歴史」との相互作用において把握し表現しつづけた作家である大江をより政治的に

容のレベルにおいても「大江文学」と「第三世界」文学の間に多くの共通点が見てとれる。第一に、「南北」の地政学的力関係に表象を与えること。第二に、「北」（の西側）の文化に対する感服とその「帝国主義」に対する抵抗からなる非西洋の知識人のジレンマのモチーフ。第三に、作者の自国の国家や国民の保守主義の傾向、腐敗、反民主主義への偏りを批判する姿勢。第四に、「第三世界」ナショナリズムのモチーフ。第五に（サルトル流の）「怪物」のイメージを登場させることである。

大江が、初めて自らの文学が「第三世界」文学というカテゴリーと多くの共通性を有しているということに覚醒した転機は、おそらく安保闘争直後に「参加」した「アジア・アフリカ作家会議」であろう。その後、大江は「第三世界」文学という新たなカテゴリーに強い共感を抱きつづけた。

大江の『『第三世界』と日本』というテーマを扱った『われらの時代』周辺の一連の作品の延長線上にたつ『個人的な体験』や『万延元年のフットボール』は、大江文学をノーベル文学賞受賞へと導いた。大江はノーベル文学賞受賞が発表された直後の記者会見で、自身にこの賞が授与されたことで「アジア文学の発言権が高まると思う」、「アジア文学のために何かできればと思っている」⁵⁴¹と語った。こうした言葉からも明瞭であるように大江は、自らの文学を「アジア文学」という国文学の制限を超えたカテゴリーに位置づけている。また本章の冒頭に示したとおり、大江は1980年代の時点で、自らを『『第三世界』の作家』（*a writer from the third world*）と定義している。大江の「アジア文学」という表現における「アジア」は「第三世界」に取り替え可能なものなのである。⁵⁴²

しかし第四章で指摘したとおり、大江を「第三世界」文学の作家として位置づけることはできない。その主な理由は、日本の経済力などということではなく、ナイジェリア、スーダン、ケニア、マルティニーク、コロンビア、ないしは、エジプトのような「南」の国・地域と異なり、日本が、戦前戦中および戦後に、広義の帝国主義的権力の暴力的行使に関与しつづけたことにある。

それゆえに、大江文学は、つねに「新植民地主義」体制＝帝国主義とともに、自国の中心指向的な権力構造と深く関わった「帝国主義的植民地支配の責任」

読み直すよう英語圏の読者を促している。(Jameson, Fredric, “Pseudo-Couples”, *London Review of Books*, Vol. 25, No.22., 20 November 2003、を参照。この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

⁵⁴¹ 「ノーベル文学賞大江健三郎に——アジア文学のためになれば」、『朝日新聞』（日刊）、1994年10月14日号

⁵⁴² Oe, Kenzaburo, “Japan’s Dual Identity: A Writer’s Dilemma—Duke University 1986,” *Japan the Ambiguous and Myself*, Kodansha International, Tokyo, 1995年, 59頁.

の問題を批判の対象にしつづけたのである。大江が自らに課した主な任務は、1945年に「脱帝国主義化」された以降も、「第三世界」を弾圧することおよび、「周辺国」を新植民地主義やネオリベラリズムなどの「第一世界」の支配下に組み込むことにおいて大きな役割を果たす自国日本を批判しつづけることであった。

広義の世界文学の地図における大江健三郎の実際の位置は、「第三世界」とその文化に深い共感^{シンパシー}を示しながら自国の帝国主義への関与を（自己）批判しつづけたフランスのサルトルやパレスチナ系アメリカ人のエドワード・サイードの位置と重なる^{メトロポリタン・センター}ところにある。

そのため、宗主国^{メトロポリタン・センター}中枢の言語に対する暴力といった文体のレヴェルにおいても、大江の「小説の方法」は、「第三世界」文学の作家らの「方法」と重なりあう部分もあるものの、それとは別のものである。「第三世界」文学の作家らは、言語的暴力を文化帝国主義の手段である新旧植民地主義^{メトロポリタン・センター}の宗主国^{メトロポリタン・センター}中枢の国語＝英語・フランス語などに向けている。（サルトルが分析したように）アフリカやマルティニークの詩人たちは、フランス語という国語を「非フランス化」（＝*défranciser*）した。また、大江が『個人的な体験』で言及しているナイジェリアのエイモス・チュチュオーラは、『幽奇の森における我が生活』＝*My Life in the Bush of Ghosts*（1954年）において、語り手を5歳のアフリカ人の子供として設定し、物語の言語である英語をこの語り手の英語能力の水準に対応させて、文法や単語選択が正確でない英語を使用している。すなわち、チュチュオーラはこの小説で、子供の語り手の不十分且つ誤った「英語」と、自ら保持しているはずの流暢な英語を拮抗させることによって、英語の「権威」を内部から攪乱し、相対化しようとしたわけである。また、「第三世界」文学には、英語やフランス語で書くことを拒絶して土着の母国語で書くようになったケニアのエンギのような作家らもいる。

しかし、旧植民地主義体制や新植民地主義体制において主役を担った日本という国の作家である大江の言語的暴力の対象は、「第三世界」文学の作家らと違い、自国の国語としての日本語である。「英語、フランス語そして他の言語の詩と、その日本語による優れた訳詩とをつきあわせて、その間に聞こえてくる和音、あるいは不協和音を、小説のなかに書き込み、それをつうじて自分の小説の表現するもの、そして当の小説の文体をまでも、より高いものにしよう」と

「試みてきた」「引用法」をはじめとする特異な文体は、その最たる例である。

その一方で、近年「周辺世界」の作家らが「西洋中心主義」、「英語中心主義」に帰趨し、欧米の主流の出版・批評の世界において、この「周辺世界」の文学を一定の異国^{エキゾチック}趣味的な娯楽分野に切り替えられようとするという現象が見られている。この動向は、「第三世界」文学の「正真正銘性^{オタンテイシテ}」を内部と外部両側から

無効にするというものであるが、「周辺世界」の文学の現状という観点からみても、大江文学と1950～60年代以降の「第三世界」文学は共通する特質が少ないのである。

例えば、比較文学者ティム・ブレンナンが指摘するとおり、最近のアメリカ合衆国において、「第三世界」文学は、西欧の文化レベルの大量消費主義に組み込まれ、「グローバルな複数性」(global pluralism)の「経験」を提供する単なる「文化的消費材」に還元されようとしている。⁵⁴³パキスタン系イギリス人の作家ターリキ・アリは、「第三世界」文学が、「非政治化」され、マーケットイズ経済化され、「疑似」の「第三世界」文学に貶められていることを酷評する。この保守的な帰趨においては英米の批評界における西洋中心主義的な選択と聖典化の作業の影響が大きい。⁵⁴⁴

近年多くの「周辺世界」の作家には、自国が位置されている地域というより、むしろ欧米の宗主国メトロポリタン・センター中枢で読まれたいという志向を持ち、西欧読者を想定して書く傾向が強く、そのため、母国語ではなく英語で書き、英語をはじめとする欧米の宗主国メトロポリタン・センター中枢の言語に翻訳しやすい文体で書くと言う「西洋中心主義」的な帰趨が見られる。このような「帰趨」が支配的であるこうした「世界文学」のカテゴリーは、(大江が村上春樹や吉本ばなななどの文学を定義するうえで指摘したように)「世界全体のサブカルチャーがひとつになった時代」の文学である。また、同じカテゴリーをターリキ・アリが「マーケット・リアリズム」として定義している。

大江は、主に「アジア文学」の発展に貢献するために、そして「アジア」の読者を相手に書いたことや、物語内容と物語言説のレベルで、自国と世界の中心指向的な権力に逆らって書くという構えを貫いている。その点で大江文学は、1950～60年代の「第三世界」文学と多くの共通点を持っているが、欧米の読者、とりわけ英語の読者を優先にする昨今の上述したような「周辺世界」の主流文学のカテゴリーとは一線を画している。

大江が「アジア」＝「第三世界」の読者を意識して書いていても、大江の文学は、全世界で多くの読者に読まれてきており、大江文学の作品をめぐる研究も多い。大江文学の世界化の過程は、ジョン・ベスターが「飼育」(1958年)を英語に翻訳したことをもって1959年に始まった。しかしこの世界化は、ほぼその「始まり」の段階から、英語＝「第一世界」中心の過程にならず、「第一世界」

⁵⁴³ Brennan, Tim, "At Home in the World," 203 頁、引用は、Damrosch, David, *What is World Literature?*, 18~19 頁より (この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

⁵⁴⁴ Ali, Tariq, "Literature and Market Realism," *New Left Review*, 199, May-June 1993 年, 147 頁. (この文献から援用された概念および表現の翻訳は引用者による)

と「第二世界」の諸言語への翻訳という形式で展開した。

近年では、非英語圏の作品がまず英語に訳され、ないしは英語で書かれてから、世界の他の言語に翻訳されていくという翻訳出版のレベルにおける中心指向的な傾向が見られる。しかし、大江の作品の翻訳の展開過程を見ると、「第一世界」と「第二世界」において翻訳出版された作品は、一部の共通性は認められるものの、完全に一致しているわけではない。例えば、ノーベル文学賞受賞以前における翻訳の展開過程を概観すると、下図のように多様性が明瞭である。

翻訳出版年	「第一世界」	「第二世界」	「第三世界」
1959年	「飼育」(英語)		
1964年	「飼育」(ドイツ語)		
1965年		「短編小説の可能性」(安部公房と対談)(ロシア語)、「飼育」(ハンガリー語)	
1967年		「飼育」(ウクライナ語)	
1968年	「空の怪物アグイー」(英語)、『個人的な体験』(英語)	「人間の羊」(ハンガリー語)、「奇妙な仕事」(ロシア語)	
1969年	「死者の奢り」(ドイツ語)、『個人的な体験』(スウェーデン語)		
1970年	「人間の羊」(英語)	「アトミックエイジの守護神」(ポーランド語)	
1971年	『個人的な体験』(フランス語、スペイン語)		
1972年	「飼育」(英語)、『個人的な体験』(ドイツ語、ポルトガル語)「みずから我が涙をぬ	「飼育」(ポーランド語)、『万延元年のフットボール』(ロシア語)「敬老週刊」(ロシア	

	ぐいたまう日」(英語)	語)、「アトミックエイジの守護神」(ロシア語)	
1973年		「人間の羊」(ロシア語)、『遅れてきた青年』(ロシア語)、「空の怪物アグイー」(ブルガリア語、スロヴェニア語)	
1974年	『万延元年のフットボール』(英語)	『個人的な体験』(ポーランド語)	
1975年	「不意の唾」(ドイツ語)	『遅れてきた青年』(リトアニア語)	
1976年	「飼育」(スペイン語)		
1977年	「みずから我が涙をぬぐいたまう日」(オランダ語)、「みずから我が涙をぬぐいたまう日」／「われらの狂気を生き延びる道を教えよう」／「飼育」／『空の怪物アグイー』(短編集=英語)	『厳粛な綱渡り』(ロシア語)	
1978年	「空の怪物アグイー」(英語)	「飼育」(ロシア語)、「敬老週間」(ロシア語)、『洪水はわが魂に及び』(ロシア語)、『遅れてきた青年』(チェコ語)	
1979年	『個人的な体験』(オランダ語、ノルウェー語、デンマーク語)	「死者の奢り」(ポーランド語)、『万延元年のフットボール』(ポーランド語)	

1980年	「奇妙な仕事」(英語)、 『万延元年のフットボール』(ドイツ語)	「飼育」(ロシア語)	
1981年	『個人的な体験』(ドイツ語)、 「空の怪物アグイー」(ドイツ語、フランス語)	『ピンチランナー調書』(ロシア語)	
1982年	「奇妙な仕事」(英語) 「飼育」(フランス語)、 『ヒロシマ・ノート』(英語)、 「みずから我が涙をぬぐいたまう日」(フランス語)、 「他人の足」(英語)、 「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」(フランス語)	「敬老週間」(ブルガリア語)	
1983年	『芽むしり 仔撃ち』(オランダ語)、 『万延元年のフットボール』(ポルトガル語)	『万延元年のフットボール』(ロシア語)	
1984年	「飼育」(スペイン語)、 『壊れものとしての人間』(スペイン語)、 『新しい人よ眼ざめよ』(英語)	「空の怪物アグイー」(ブルガリア語)	
1985年	「奇妙な仕事」(イタリア語)、 「死者の奢り」(イタリア語)、 「勇敢な兵士の弟」(イタリア語)、 『個人的な体験』(フランス語)、 『ヒロシマ・ノート』(ドイツ)、 『万延元年のフットボール』(フランス語)、 「頭のいい『雨の	「他人の足」(ブルガリア語)、 『遅れてきた青年』(グルジア語)	

	木』(英語)		
1986年	『万延元年のフットボール』(イタリア語)、 『雨の木』を聴く女たち』(英語)	『死者の奢り』(ポーランド語)、 『遅れてきた青年』(グルジア語)	
1987年	『人間の羊』(フランス語)	『同時代ゲーム』(ロシア語)	
1988年	「ここより他の場所」(フランス)、 『万延元年のフットボール』(オランダ語)、 「みずから我が涙をぬぐいたまう日」 ／「われらの狂気を生き延びる道を教えよう」 ／「飼育」 ／「空の怪物アグイー」(短編集＝ノルウェー語、デンマーク語)	『遅れてきた青年』(ブルガリア語)	『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』(アラビア語＝レバノン)
1989年	『死者の奢り』(オランダ語)、 「不意の唾」(英語、オランダ語)、 「他人の足」(オランダ語)、 「飼育」(オランダ語)、 「人間の羊」(オランダ語)、 『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』(スウェーデン語) 『M/T と森のフシギの物語』(フランス語)		
1991年			『個人的な体験』(フィリピン語)
翻訳出版年	「第一世界」	(1991年のソ連主導の「第二世界」の崩壊によって(ロシア以外の)「第二世界」諸国は「第	「第三世界」

		「三世界」の 카테고리 に入るようになった)	
1992年	『M/T と森のフシギの物語』(英語、スウェーデン語)、「みずから我が涙をぬぐいたまう日」(イタリア語)、『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』(イタリア語)		
1993年	『ピンチランナー調書』(英語)、『懐かしい年への手紙』(フランス語)		『遅れてきた青年』(ブルガリア語)
1994年	『個人的な体験』(スペイン語、ポルトガル語、ノルウェー語、スウェーデン語)、『みずから我が涙をぬぐいたまう日』(オランダ語)、『頭のいい「雨の木」』(短編集——ドイツ語)、『静かな生活』(ドイツ語)、『人生の親戚』(ドイツ語)		『死者の奢り・飼育』(韓国語)、『芽むしり 仔撃ち』(韓国語)、『われらの時代』(韓国語)、「セヴンティーン」(韓国語)、『叫び声』(韓国語)、『日常生活の冒険』(韓国語)、『個人的な体験』(韓国語、エジプト=アラビア語、ギリシア語、トルコ語)、『万延元年のフットボール』(韓国語、ギリシア語、マケドニア語)、『飼育』(短編集)(セルビア語)、『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』(短編集)(トルコ語)

上記の図表は、大江文学の「世界化」の展開を「第一世界」、「第二世界」と「第三世界」という三つのカテゴリーに区分し、最初に外国語へ翻訳された1959年からノーベル文学賞受賞の1994年までを呈示したものである。図表からも明瞭であるように、大江文学の外国語への翻訳は、1980年代までは「第一世界」で、英語中心の路線で推進されている。つまり、英語に翻訳されたものが一定の選択の基準になり、そして他のヨーロッパの言語で紹介されている。しかし、1980年代からはこの方針が非中心化し、英語に翻訳されていない作品がフランス語、スペイン語などの言語に翻訳されているのだ。

一方で、「第一世界」より前に「第二世界」で翻訳された作品もすくなくない。例えば、後に大江が国際的に注目される作品となった『万延元年のフットボール』は、英訳より二年前にロシア語に翻訳されている。また、未だに西洋の言語に翻訳されていない『遅れてきた青年』、『厳粛な綱渡り』や『同時代ゲーム』は、「第二世界」で翻訳され、読まれているのだ。「第一世界」における大江文学の翻訳実践と「第二世界」のそれとにおける主な相違点は、「第二世界」では、ソ連の国語であるロシア語中心の路線が取られていなかったということである。ハンガリー語、ポーランド語、ブルガリア語への翻訳など他の言語への翻訳は、ロシア語翻訳と並行して積極的に行われた。

大江が、「アジア」文学に貢献したいという意図をもって書いてきたのにもかかわらず、ノーベル文学賞受賞直前までに、「第三世界」ではアラビア語（レバノン）とフィリピン語でしか紹介されていなかった。つまり大江文学は、1991年にソ連主導の「第二世界」が解体するまでには、「第一世界」と「第二世界」といった地域においてのみ「世界化」していたわけである。大江のノーベル文学賞受賞は、大江文学の翻訳のレヴェルにおける「第三世界化」を可能にすることに大きく貢献したのだ。大江文学の「第三世界」への拡大という「始まりの現象」は、上記の図表の1994年の部分においても明白である。

1990年代半ばから、大江の主要な作品は、「周辺世界」の読者に届くようになった。そのなかで、大江文学の翻訳をもっとも積極的に行った国は、韓国、中華人民共和国、台湾である。韓国をはじめとするこの近隣諸国は、大江文学の翻訳において主導権を握るようになり、大江の欧米諸国で紹介されていない多くの作品を紹介するようになった。この翻訳作品のなかには、本論文で取り上げた『第三世界』と日本』というテーマを扱う『われらの時代』周辺の一連の作品も含まれていることをここで注目すべきである——『われらの時代』（韓国語訳1994年、中国語訳1999年）、「セヴンティーン」（韓国語訳1994年、中国語訳2012年）、『政治少年之死』（「セヴンティーン」と日本で出版されていない続編の「政治少年死す」から編成／台湾＝中国語2010年）、『叫び声』（韓国語訳1994年）、『日常生活の冒険』（韓国語訳1994年、中国語訳1996年）、『個人

的な体験』(韓国語訳 1994 年、中国訳 1995 年)、『万延元年のフットボール』(韓国語訳 1994 年、中国訳 1995 年)。

大江が 2000 年代に出版した作品、例えば、『臆たしアナベル・レイ 総毛立ちつ身まかりつ』(2007 年) や『水死』(2009 年) は、日本での出版直後というタイミングで、海外で出版されていることも、大江健三郎がアジアの文学に貢献するようになったことをあらわしている。(『臆たしアナベル・レイ 総毛立ちつ身まかりつ』韓国語訳 2009 年、台湾＝中国語訳 2009 年、中国語訳 2013 年、『水死』中国語訳 2009 年、台湾＝中国語訳 2012 年)

*

先にも述べたとおり、「第三世界」の一員であることを拒否し、むしろ「第三世界」を弾圧しようとする勢力と手を結び続けた、日本出身である大江を「第三世界」文学の作家として位置づけることはできない。しかし、大江が西洋ではなく、アジア＝「第三世界」で生まれ、その文化に貢献することを望みながら、全世界の読者によって読まれるようになったという点で、「第三世界」文学の作者と照応する。中・南アメリカのスペイン語の読者を相手に書いたガブリエル・ガルシア＝マルケスや、北アフリカと中近東のアラビア語の読者を念頭においたナギーブ・マフフーズも、「第三世界」のみならず、世界各国の、異なる言語と文化に属する読者の作家となった。例えば、エドワード・サイードは、保守的文化理論家サミュエル・ハンティントンの「文明の衝突論」を批判する講演で、大江を中南アメリカのガブリエル・ガルシア＝マルケスや北アフリカのナギーブ・マフフーズと並ぶような世界文学の作家として位置づけている。

What culture today, whether Japanese, Arab, European, Korean, Chinese, Indian, has not had long intimate and extraordinarily rich contacts with other cultures? There is no exception to this exchange at all. Much the same is true of literature where readers for example of Garcia Marquez, Naguib Mahfuz⁵⁴⁵,

⁵⁴⁵ 大江のようにノーベル文学賞受賞者であるナギーブ・マフフーズ(ノーベル文学賞受賞は 1988 年)とガルシア＝マルケス(ノーベル文学賞受賞は 1982 年)は二人とも、民族解放運動や非同盟運動としての「第三世界」運動に深い共感^{シンパシー}を抱き、「第三世界」を語った「第三世界」文学の作家である。

マフフーズは、まだ幼年時代に経験したエジプトを独立へと導いた対イギリス民族解放戦争(1919～22)に感銘を覚えた。1940～50 年の革命運動をも支持したが、その後成立したナセル政権に幻滅し、それを批判しつつきた。しかしマフフーズは、対外的には自立し、他の「第三世界」諸国と連帯した、対内的には民主主義、女性の自由、政教分離^{セキュラリズム}に基づいた「エジプト」を

建設する夢を放棄したことはなかった。

例えば、傑作『カイロ三部作』= *Al-Thulāthīya* (『張り出し窓の街』= *Bayna al-Qaṣrayn*, 1956年; 『欲望の裏通り』= *Qaṣr a-Shawq*, 1957年; 『夜明け』= *Al-Sukkariya*, 1957年) は、アフマド・アブダル・ガワード家三代の物語を、1919 の対英民族解放運動から第二次世界大戦の終結直前にかけてのエジプトの歴史を背景に語るリアリストの大河小説である。マフフーズは、この作品を 1956~57 年のスエズ侵攻とそれに対する反帝国主義闘争が行われた時期に書いた。この小説ではアフマド・アブダル・ガワードの息子カマル——この作中人物とマフフーズの間には多くの共通点がある——の物語が描かれている。カマルが宗教、恋愛、民族的な伝統に対する信仰を完全に失い、社会から疎外され、絶望感に包まれたまま「自身の人生の意味の探求」に着手した末に、革命家になることを決心するというフィナーレで小説は終わる。

言うまでもなく、カマルの探求と志向は、自国エジプトをはじめとする「第三世界」の自立と連帯のための「探求」と重なっている。30 年間に渡るムバラクによる強権を閉幕させた「アラブの春」の発生を機に、エジプトが 1950~60 年代ナセル主義の時代以来初めて日本において注目されるようになったつい最近まで、「第三世界」文学の主要な作品である『カイロ三部作』は日本語に翻訳されていなかった。

その一方で、大江とほぼ同世代の作家であるマルケスは、反新植民地主義的なキューバ革命 (1959~61 年) や——新植民地主義が仕掛けたピノチェット 1973 年 9 月 11 日の軍事クーデタによって中断されることになった——非同盟社会主義へ平和的移動を試みたサルバドル・アジェンデ大統領による運動 (1970~73 年) などをはじめとする「第三世界」運動に強い共感を示した。

マルケスの傑作『百年の孤独』= *Cien Años de Soledad* (1967 年) は、ブエンディア一家 7 世代が建設した蜃気楼の村=マコンドが、創設期を経て、最盛期を迎えながらも、やがて滅亡するまでの 100 年を描く長編である。超現実的な情景をリアリズムでもって描写することによってつねに、通常の・現実的な物事と、異常な・空想的な物事を相互に連動させる方法である「魔術的リアリズム」(*realismo mágico*) を用いて書かれたこの作品では、コロンビアを中心に中・南アメリカの歴史が周辺の視点から、架空のマコンド村を舞台にアレゴリー的に語られている。また、マルケスが「第三世界」運動が高揚しつつある時期に書いたこの小説の主要なモチーフは、「北の西側」=「第一世界」と同盟関係を結ぶ保守勢力=体制側と、中・南アメリカ最大の反政府武装組織であり、周辺国においても影響力を持つコロンビア革命軍= *Fuerzas Armadas Revolucionarias de Colombia* (1964 年に結成) のような「第三世界」指向の勢力の間における、変遷しつつ反復する対立と拮抗である。

『百年の孤独』は、歴史を「神話化」する一方で、神話を「歴史化」という方法をとおし読者の想像力を全的に活性化し、読者自身を現行の「歴史」に「参加」させることを意図したものである。他方、中心指向的且つ帝国主義的な国家=「中心」と、その国家の権力の暴力的行使に逆らう「四国」の谷間の村に設定された「周辺」を、つねに日本の帝国主義の歴史に言及

Kenzaburo Oe exist far beyond the national or cultural boundaries imposed by language and nation.⁵⁴⁶

この「第三世界」文学の二人の作家が、「周辺」的な立場から国内外の中心指向的な権力に逆らって書きつづけたことが、かえって「言語と国家が押し付ける国民的および文化的な境界を越境した」⁵⁴⁷読者たちによって読まれるようになったと大江は言っている。

VI.6. 大江文学の世界化と渡辺一夫

大江は、「世界文学は日本文学たりうるか？」において大岡昇平、安部公房と自らが属している文学ラインを、「フランス文学やドイツ文学や英文学から、あるいはロシア文学」といった「世界の文学から学んだ」うえで、「独自の経験に立って日本文学を作った」作家たちの文学と定義している。⁵⁴⁸自ら定義するように大江が「世界文学」に学びつづけたことは、大江文学の「世界化」に大い

し、神話的な要素と連動させながら扱った『同時代ゲーム』（1979年1月）で、大江は『百年の孤独』を強く意識している。『同時代ゲーム』は、メキシコに大学の教師として教えに行っている「僕」が、双子の妹へ、二人が共有する「個人史」を交えつつ綴った故郷の村＝国家＝小宇宙の歴史を六通の手紙を送るという形式の長編小説である。『同時代ゲーム』における歴史と神話を、個人史と故郷＝国家＝地域の歴史を相互に絡み合わせ、「周辺」的な歴史を体制側の歴史＝国史に対置するといった設定は、『百年の孤独』の小説の構造と重なり合っている。

大江が、「ラテンアメリカの文学が世界の中心にあったような特異な時代」、具体的には1976年に、コレヒオ・デ・メヒコという大学で、英語で「日本戦後文化論」を教えるためにメキシコへ渡った（大江健三郎、尾崎真理子、「メキシコ滞在の刺激」、『大江健三郎 作家自身を語る』、125頁）ことは、大江が以前から抱えてきた「第三世界」の文化に対する深い共感シンパシーに動機づけられた選択であった。

マフフーズとガルシア＝マルケスは、北アフリカと中・南アメリカとしての「第三世界」に、リアリズムの表現法における新たな表現の可能性を探求しつつ表象を与え続けた、「第三世界」文学の作家である。大江は、盛んに日本語に翻訳されたマルケス文学を愛読した。（確認するすべはないが、「北アフリカ」の問題について初期作品以来関心シンパシーを抱いていた大江はおそらく、ごく一部の作品しか日本語に翻訳されていないマフフーズの作品を英語ないしはフランス語で読んだだろう）。

⁵⁴⁶ Said, Edward, W., *The Myth of "Clash of Civilizations,"* DVD Directed by. Sut Jully Northampton, M A: Media Education Foundation, Transcript, 1998年, 8頁. (引用文の翻訳は引用者による)

⁵⁴⁷ 引用文の翻訳は引用者による.

⁵⁴⁸ 大江健三郎、「世界文学は日本文学たりうるか?」、『あいまいな日本の私』、208～209頁.

に貢献した。「世界文学」に学びながら小説を書くというこの過程において、大江の指導者かつ「役割モデル」となったのは、恩師渡辺一夫である。

加藤周一が着目しているように、日本における西洋文学研究が、国際的な水準に達したのは、おそらく渡辺一夫のフランス文学の研究によって始まる。⁵⁴⁹大江が独特の文体を醸し出すうえで、「翻訳」を一種の方法にしたことに本論文で触れたが、これには、渡辺がフランス文学の研究者や教師であり、かつフランス文学の様々な作品を日本語で紹介した翻訳者であることの影響があったことを見逃してはならない。例えば、加藤周一によれば、渡辺による——「翻訳不可能」と言われた⁵⁵⁰——『ガルガンチュア物語・パンタグリユール物語』の翻訳は、現代フランス語訳を含めて、現代日本語の散文の表現の能力をほとんど極限まで拡大し、日本文学にまったく新しい要素をつけ加えた。さらに、加藤によると、渡辺の「西洋文学の翻訳は」、「日本語の散文を崩すように作用したばかりでなく、ラブレールの渡辺訳の場合に典型的なように、かえってそれを豊富にするためにも役に立ったのである」。⁵⁵¹

本論文で論述した、大江文学におけるハイブリッド且つコスモポリタンで「非日本語的」な文体の手掛かりとなったのは、「翻訳で、日本語の散文を崩す」ことによって、「かえってそれを豊富にする」という渡辺の特異の翻訳調であったと言える。

また三年にわたって、一人の（「世界文学」の）作家の作品全体や当の作家を対象にするあらゆる研究書を集中的に読み、それを自作の物語内容や物語言説の多様化のために活用するという、本論文でも紹介した「集中精読法」に基づく「引用法」を大江に教示したのも渡辺であった。第三章で詳述したとおり、大江は「引用法」を『叫び声』で初めて採用し、のちに「空の怪物アグイー」や『個人的な体験』でも活用した。「引用法」が、「見るまえに跳べ」、「喝采」、

⁵⁴⁹ 加藤周一、「工業化の時代」、『日本文学史序説——下』、ちくま学芸文庫、2012年、東京、479頁。

⁵⁵⁰ 例えば、大江は、ノーベル文学賞受賞講演「あいまいな日本の私」においてラブレールの「翻訳不可能性」=*intraduisibilité* について次のように語っている。

「若い渡辺が、大戦前に留学したパリで、研究の指導者にラブレールを日本語に訳す決意を打ちあけた時、老成したフランス人は、野望にもえる若い日本人にこういう評価をあたえました。

“L'entreprise inouïe de la traduction de l'intraduisible Rabelais” つまり、翻訳不可能なるラブレールを日本語に翻訳するという、前代未聞の企て、と。またもうひとりの助言者は、さらに率直に、“Belle entreprise Pantagrueline” つまり、パンタグリユールの見事な企て、と驚きを表したということです。」、大江健三郎、「あいまいな日本の私」、『あいまいな日本の私』、13～14頁。

⁵⁵¹ 加藤周一、「工業化の時代」、『日本文学史序説——下』、479～480頁。

『われらの時代』といった『叫び声』以前の小説において、物語言説のレヴェルにおけるもっとも根本的な技法であることも本論文で明確にした。

「引用法」は、渡辺が初めて戦前・戦中のエッセイにおいて積極的に採用した技法である。この「引用法」は、レトリックのレヴェルの仕掛けであるとともに、ある必然性から生じたものでもあった。日本がドイツ・イタリアと同盟関係（枢軸国）を結び、対内的にはファシズム、対外的には膨張主義的な帝国主義を遂行するという当時の現状を批判するうえで、「世界文学」のテキストからの引用に頼らざるを得なかったのである。例えば、戦時中に「自分の学生たちが学徒出陣してしまう」ことになり、やむなく「学生たちを送って行く」が、言論自由が牽制されているため「何もいうことができないということを感じ、絶望している」時に「びいどろ学士」という文章を書いた。大江が『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』にて解説したとおり、渡辺はこの文章においてこの事態の責任者である「軍部・財閥」を「呪詛」したのだが、それはセルヴァンテスの言葉を援用することによって行われた。⁵⁵²

短編の主人公であるトーマスという学士が、彼をひっかけようとした一人の女性に過量の「惚れ薬」を飲まされたため、その副作用で一時的に「正気」を失う。狂気に陥った期間において頭がどンドン冴えて、あらゆる問題を解決することができ、「いろいろな人の相談にのりも」した。しかし薬の効き目が薄れ、正気になると、「いままで通り皆のために働こうとすると、誰も相手にしてくれな」くなる。トーマスは「狂人の言動には寛大だが、正気な人間に対しては寛大じゃない」⁵⁵³と激怒し、死を覚悟して戦乱の巷ちまたになっているフランドルに旅立つ。

大江によれば、渡辺がこの短編に感情移入した理由は、そのプロットが「当時学問していて、それから学徒動員ということになって、根こそぎ引抜かれて戦地に行ってしまうをえぬ」渡辺の若い教え子たちと、「そのまま重なるから」である。「学徒出陣して行く若い人たちは、公的に何もいい残すことができない」から、彼らに代わって渡辺は、このトーマスという学士が絶望して出発する前にいった言葉を、およそ万感をこめて「翻訳」＝「引用」しているのだ。

「《おお首府よ、お前は無謀な乱暴者の希望を伸すくせに、臆病な有徳な士の希望を断つのか！無知な賭博者どもを豊かに養うのに、恥を知

⁵⁵² 大江健三郎、「戦前エッセイと『敗戦日記』について」、『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』、岩波書店、東京、1984年、30～32頁。

⁵⁵³ 同上書、31頁。

る真面目な人々を餓死させて顧ないのか! 》」⁵⁵⁴

渡辺はこのセルヴァンテスの言葉を媒介に、日本の「軍部・財閥」による強権を「呪詛」したかったのである。本論文の批評的なカテゴリーに従って言い直すと、極東における新たな枢軸国=*Achsenmächte*=*Potenze dell'Asse* 型帝国主義体制の宗主国中枢のひとつである日本の「帝都」が渡辺の憤りの対象となっている。

おお、東京よ、と先生はいいたかったでしょう。お前は無謀な乱暴者を大切にす。無知な賭博者を大切にす。しかし、臆病だけれども、有徳の士、あるいは恥を知る真面目な人びと、つまりは真面目な学生のような人びとを、絶望させて死地に赴かしめる。無謀な乱暴者というのは、軍部ということで、無知な賭博者どもというのは、すなわち当時の財閥ということにほかならないでしょう。戦争に向かって押し進めている、軍部と財閥に対して利益になることをしながら、有徳の、そして臆病な、心の柔らかい、優しい人びとに対しては、彼らを戦場に送るのかという抗議の叫びを、渡辺一夫は書きつけているのです。⁵⁵⁵

大江が解説しているとおり、渡辺がこうした「呪詛」を「そのまま自分の言葉として書いてしまえば」、逮捕されてしまうはずだが、「それを」16～17世紀の「セルヴァンテスの言葉をかりることによって免れ」ることができたのである。セルヴァンテスがスペインの作家であり、当時フランコの国であったスペインは、枢軸国の敵国ではないため、「スペインの古典を引用することは比較的安全」であったのだ。⁵⁵⁶

渡辺が、「軍部・財閥への呪詛」によるファシズムと帝国主義政策を批判するうえで取り込んだ「世界文学」のテキストからの「引用」は、強権に抵抗し反抗する唯一の武器であり、彼を強権の「暴力」から守る鎧でもあったわけである。

渡辺は、心をなくして「国家に奉仕する精神を持った人間、ロボットのような人間」の国になっているナチス・ドイツと日本が罹っていた「時代全体の病」への解毒剤を「精神の自由、繊細な文化の魂というものを持った人たち」と看

⁵⁵⁴ 大江健三郎、「戦前エッセイと『敗戦日記について』、『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』、岩波書店、東京、1984年、30～32頁。

⁵⁵⁵ 同上書、32頁。

⁵⁵⁶ 同上書、32～33頁。

做したフランスに求めた。また渡辺は、フランスがドイツの占領下に入ったことに動揺した時も、フランスがこの「自由と文化の危機」を乗り越え、よみがえることへの信仰を失わなかった。⁵⁵⁷

渡辺がフランスを「精神の自由」と「繊細な文化の魂」のモデルとして考慮したことは、彼の16世紀のルネッサンス時代の文学に関する研究と無縁ではない。渡辺は、ルネッサンス時代において、戦前・戦中の「時代全体の病」からの突破口を見いだした。渡辺の十六世紀フランス思想の研究は、彼自身の「思想的立場——生活上の原則にまで貫徹したところのそれ——と密接不可分に結びついていた」。「フランスの十六世紀は、宗教戦争と『ユマニスム』の時代であった。加藤周一は、このことについて次のように解釈する。

[渡辺] がそこに見たのは、不寛容に対する寛容、狂信主義に対する相対主義であった。エラスムスや、モンテーニュやラブレーの、また多くのフランスの「ユマニスト」たちの、狂信的な不寛容に対する戦いを詳しく具体的に追跡しながら、著者が自分自身を語っていたのは確かであろう（中略）。彼が生きてきたのは、日本における思想的鎖国と狂信主義の時代であった。⁵⁵⁸

渡辺がこの時代に抵抗するために備えていた手段は、16世紀フランスのユマニスムであった。渡辺のフランス・ルネサンス研究の結実のひとつである『フランス・ルネサンスの断章』（1950年）を、大江は16歳の時に読んで、この書が孕んでいるユマニスムに深い感銘を抱き、渡辺教授の指導でフランス文学を学ぶことを望むようになった。⁵⁵⁹戦前・戦中という暗闇において、フランスをユマニスム、民主主義と自由を象徴する国として看做した渡辺のフランスに対する共感^{シンパシー}は、彼のフランス語に対する高い評価と照応する。渡辺は、フランス語の特徴を次のように記述する。

フランス語は明快で、的確で、優雅な言葉だといわれておりますが、フランスの文学者たち、いや、文学者だけでなく、国民の大部分が、自分の国の言語を、美しく正確なものにしようと、不断な努力を積み重ねてきました。いかなる国民でも、自国語に無関心であるはずはないでしょうが、フランス人ほど意識的・意欲的に、その国語を美しく豊かにし、

⁵⁵⁷ 同上書、33～39頁。

⁵⁵⁸ 加藤周一、「工業化の時代」、『日本文学史序説——下』、480頁。

⁵⁵⁹ 大江健三郎、尾崎真理子、「伊丹十三との出会い」、『大江健三郎作家自身を語る』、27頁。

文章の格調を正しく陰影づけようと努めてきた国民は、おそらくほかにありますまい。⁵⁶⁰

大江には、フランスの現代文学の文体を手掛かりにして、自らのテキストに比喩的な表現を多く取り込み、それをより書き言葉的なものにするという「意図」があったことに第一章で触れた。大江も、渡辺のようにフランス語の文体につよい感銘を抱いていたと言える。

しかし、大江が文壇デビューをした時期は、インドシナ戦争直後に、アルジェリア戦争を激化させたフランス帝国主義が国際的な非難の的にされていた最中であったため、大江は恩師のようにフランスを「自由」とユマニズムの政治的なモデルとして見ることができない。大江の共感^{シンパシー}は、「第三世界」の被圧迫民族に向けられるようになるのだ。

その反面、大江はノーベル文学賞受賞講演において、第二次世界大戦中にラブレールの翻訳や16世紀におけるフランスの「ユマニズム」を日本社会に教え込むことを自らに課した渡辺一夫が、文化のレベルで日本社会を内部から「民主化」し、「脱帝国主義化」することを目ざしていたことを暗示している。⁵⁶¹

(前略) 渡辺一夫は、大戦中と占領下の窮乏のなかで、この大事業をやりとげたのみならず、ラブレールの先行者の・またラブレールと肩をならべる・そしてラブレールに続いた、多様なユマニストたちの生き方と思想とを、混乱期の日本に移し植えるべく努めたのでした。

大江の「第三世界」に対する共感^{シンパシー}の背景には、以上を呈示した渡辺一夫のフランス・ユマニズムのヴィジョンの作用が大きかったことは想像に難くないだろう。

VI.7. 「^{アーリー・ワーク}初期の仕事」から「^{レイト・ワーク}晩年の仕事」へ「第三世界」のイメージ

最後に触れておかねばならないのは、大江健三郎が「アルジェリア戦争の時代」に書いた「^{アーリー・ワーク}初期の仕事」における「第三世界」のイメージが、いかなる形式を取って「^{レイト・ワーク}晩年の仕事」の現在に繋がったか、という主題論的問題である。大江の深い「共感^{シンパシー}」の対象となった「^{アンガージュマン}政治的な参加」のテーマとの関係において「^{アーリー・ワーク}初期の仕事」に頻繁に取り上げられた「第三世界」のイメージに取って

⁵⁶⁰ 渡辺一夫、鈴木力衛、「概観」、『フランス文学案内』、15頁。

⁵⁶¹ 大江健三郎、「あいまいな日本の私」、『あいまいな日本の私』、13～14頁。

代えられた物語要素は、作中人物のレベルにおけるものと、物語の舞台＝場所^{トボス}のレベルにおけるものの二つであると考えられる。

作中人物のレベルにおける物語要素は、「アルジェリア戦争の時代」が終わった翌年に生まれ、後に作曲家として名声を得ることになった大江の息子、大江^{ひかり}光をモデルにした、主人公＝語り手の知的障害を持つ息子「光」（作品によってはアグイー、ジン、森、イーヨー、アカリ）である。そして場所^{トボス}のレベルでの物語要素は日本列島の地理的文脈における「アルジェリア問題」としての「沖縄」や大江の故郷、四国の愛媛県喜多郡大瀬村（現在の内子町）をモデルにする「四国の森の中の谷間の村」である。ここでは大江文学におけるこの「パラダイム・シフト」の媒介となったものが、「文学」をとおした「政治的な参加^{アングージュマン}」の営為と定義することができる、『ヒロシマ・ノート』と『沖縄ノート』の二冊の書⁵⁶²であることを呈示する。

加藤周一が指摘するとおり、大江は「疎外された被爆者や、戦争とアメリカ軍基地が破壊した地域社会、すなわち日本のなかの『第三地域』 [= 『第三世界』] を語りながら、それを生みだした権力に抗議し続けた。」⁵⁶³日本が置かれた地理的文脈における「第三地域」＝「第三世界」問題を反体制的、反帝国主義的な観点から扱ったこの二冊のエッセイは、主に二つの文学作品と深い繋がりを持っている。

大江がノーベル文学賞を受賞した直後に、『ヒロシマ・ノート』の取材のために広島へ一緒に向かった『世界』誌の編集者安江良介と1995年1月に行った対談では、日本の「周辺」としての「四国の森の中の谷間の村」において主人公の弟によって起こされた叛乱をテーマにする『万延元年のフットボール』と『沖縄ノート』、そして光の誕生と広島問題という個人的、普遍的な問題を相互に絡ませながら扱った『個人的な体験』と『ヒロシマ・ノート』が、相互補完的なテキストとして位置づけられている。

大江は、『万延元年のフットボール』と『沖縄ノート』の繋がりに関して次のように述べている。

⁵⁶² 菊地昌典、「想像力における政治——『ヒロシマ・ノート』『沖縄ノート』を中心に——大江健三郎——方法化した想像力」、『国文学 解釈と教材の研究』、24(2)、1979年2月号、102頁。

菊地昌典によれば、この二冊は、単なるエッセイないしはノンフィクションの範疇で整理することのできない、文学と政治が交叉点に位置するような内容のテキストである。

「(前略) この二冊のノートは、現代史と文学を止揚した次元に位置しうる記念碑的な行動の文学の典型、あるいは言葉の純粹の意味での政治的文学作品といてよいであろう。」(同上書、109頁。)

⁵⁶³ 加藤周一、「戦後の状況」、『日本文学序説——下』、528頁。

(前略) ある雑誌社の講演会で施政権返還前の沖縄に行った際、『世界』に報告を書くということで残らせてもらって、沖縄の若い知識人たちからいろいろ教わった。その沖縄で学んだことも、『万延元年のフットボール』という小説に直接に反映して行ったわけです。⁵⁶⁴

そして、安江は、『個人的な体験』を『ヒロシマ・ノート』の題材となった「広島の体験がそのまま反映した」テキストとして位置づける。

私自身にも迷いがあった苦しんでいたときでしたが、大江さんにとっては一九六四年から「ヒロシマ・ノート」を連載されて、その広島の体験がそのまま反映した『個人的な体験』を書かれ [た]。⁵⁶⁵

本論文において『個人的な体験』と『万延元年のフットボール』を大江文学が世界文学の地図で独自の位置へ至る筋道をつけた作品として定義したが、それらと相互作用するこの『ヒロシマ・ノート』と『沖縄ノート』という二つのエッセイも、大江文学の世界化において重大な役割を果たしたと言えよう。

『ヒロシマ・ノート』は、1963年から1965年にかけての、原水爆禁止世界大会を取材するための大江の数回にわたる広島訪問を基にしたエッセイ集である。1963年の原水爆禁止世界大会は、外部のレベルでは極右団体による原水爆禁止運動を中断し無効にしようとする妨害活動に曝される一方で、内部では、1961年8月のソ連による核実験の再開以来、ソ連に批判的な日本社会党と総評、ソ連を支持する共産党との対立による分裂の危機のなか開催された。この対立は、「『国際的には中ソの対立』を反映して」いた。大江が編集者の安江良介とともに参加することになった第九回原水爆禁止世界大会が東京ではなく、「聖地広島」で行われることになったのは、「『聖地広島』でやれば運動はなんとか分裂しないで済むだろうという判断だった」。⁵⁶⁶ (しかし、この対立の結果、日本社会党と総評が原水爆禁止日本協議会＝原水協から離脱し、1965年に原水爆禁止日本国民会議＝原水禁を結成した。原水禁が親ソ・親中の傾向を強めるようになった反面、共産党が中ソに批判的になり核兵器全面禁止を主張するようになった) 当時「最初の息子が瀕死の状態でガラス箱のなかに横たわったまま快復のみこ

⁵⁶⁴ 大江健三郎、安江良介、「初心から逃れられずにきた——対談 大江健三郎、安江良介」、『世界』、(603)、1995年1月号、33頁。

⁵⁶⁵ 同上書、45頁。

⁵⁶⁶ 同上書、23頁。

みはまったくたたない始末であった」という「個人的な内部の奥底にかかわっている」⁵⁶⁷ 苦悩を抱えていた大江は、取材を続けるうちに「もっとも[オカンティック正統的]な原爆後の日本人」と定義する広島の人々のなかに、彼自身のみならず人類の「救済」に繋がるようなものを見いだすことになる。

他方、本論文において度々言及してきた『沖縄ノート』は、1965～70年に沖縄返還運動で注目されるようになった沖縄情勢に関する大江の考察を伝えるルポルタージュである。沖縄は第二次世界大戦の最終段階で多くの非戦闘員を巻き込んだ決戦の場となり、戦後は日本政府によってアメリカ合衆国に渡され、アメリカ合衆国の軍事的な植民地として新植民地主義体制下に組み込まれ、内部と外部のレヴェルにおいて帝国主義的権力の暴力的行使の対象にされてきていた。『ヒロシマ・ノート』の延長線上にあるこの書において、大江は、戦中に国の安全降伏上の「贖罪の山羊」スケープ・ゴートにされたヒロシマ・ナガサキや沖縄に対する暴力行使を忘却させようとしつつある保守政権や、これらの問題に対して無関心な「本土」の一般市民を徹底的な（自己）批判の対象にしている。

ここで着目すべき点は、「ヴィエトナム戦争の時代」に書かれたこの二冊において、大江が——暗示的な形でありながら——「ヒロシマ」と沖縄を、帝国主義戦争による破壊の結果、下部構造がほぼ完全に粉砕され、「荒廃地」と化したアルジェリアやヴィエトナムなどのような「第三世界」の国に喩えていることである。第四章において、『われらの時代』における解放戦争が行われている「アルジェリア」というイメージの役割の一つが、「沖縄」の過去（戦中）と現在（戦後）を暗喩的に表現することであると指摘した。大江は『沖縄ノート』を書く際、アルジェリアに対するフランスによる帝国主義的な支配からの解放を支持し、言論のレヴェルで推進するサルトルの反植民地主義的な「政治的な参加」アンガジュマンを念頭においていた。『沖縄ノート』における大江の、沖縄は「本土」に属するのではなく、「本土」が沖縄に属するという、「本土」と沖縄の権力関係を反転させるようなヴィジョンには、サルトル流の「反植民地主義理論」的な「第三世界論」の影響があると言えよう。

また「アルジェリア」のイメージは、『ヒロシマ・ノート』においても手掛かりにされている。多くの死傷者を出し、都市を荒廃地と化したのみならず、生き残った被爆者にも白血病などの重病をもたらした原爆投下後の過酷な状況と闘っている広島を表現するうえでの参照先のひとつは、アルベール・カミュが『ペスト』で描写したところの北アフリカ＝アルジェリアである。大江がヒロシマにヴィヴィッドな表象を与えるうえで、カミュの小説の場所として設定されているアルジェリアの地方都市のオランを念頭においていることが次の一

⁵⁶⁷ 大江健三郎、「プロローグ 広島へ……」、『ヒロシマ・ノート』、2頁。

節において明瞭である。

二十世紀文学は、様々な限界状況発明をくりひろげてきた。しかし、たいていの限界状況は、人間あるいは宇宙の悪の意志にかかわっている。悪という言葉がモラリッシュな連想をよびおこすなら、不条理という言葉におきかえてもいい。戦争、嵐、洪水、ペスト、それに癌。そして暗示的にもそれらのすべての場合に、希望や快復の兆候は、すなわち善の意志、秩序や条理の兆候は、限界状況のおどろおどろしい形ではなく、日常生活の微光をおびてあらわれる。例えば、北アフリカのひとつの都市に猛威をふるうペストは、異常な限界状況として出現し、この都市をみたしてしまうが、それとたたかう市民たちは、みんな日常生活的な平常さ、まだるっこい感じ、平凡さ、そしてほとんど退屈にさえおもわれる機械的なくりかえし、などという、いかにも人間らしい諸性格にたすけられてはじめてペストに対抗しうるのである。⁵⁶⁸

*

「光」が最初に登場した作品である「空の怪物アグイー」や、それと有機的に繋がっている長編『個人的な体験』は、「アルジェリア戦争の時代」から「ヴェトナム戦争の時代」への移行期の1964年に世に出た。『個人的な体験』の主人公「鳥」が、障害児になると診断されたため「ブラック・アフリカ」行きの夢を中止させる要因となる赤ん坊を、腐敗した医師に殺戮させるといった奇怪な計画を立てたが、最後には父としての責任を取って、赤ん坊を育ててゆく決心をしたことにはすでに触れたところである。小説をこのようなフィナーレでしめくくるという大江の選択は、楽観的で非現実的という理由で、三島由紀夫をはじめとする多くの文学者の批判的になったが、大江がこのような批判を予想しながら小説を敢えてそのようにしめくくったことは周知のとおりである。

このフィナーレは、1970年代から現在にかけての一連の自伝的な要素を濃厚に持つ小説の主要なテーマに、大江健三郎の長男光との共生なることを予告したものであった。二十歳を迎えた光をモデルにした息子イーヨーとの共生における家族の関係の危機と、それをイギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの詩の世界を媒介に乗り越え、快復して行く過程を小説家の父＝「僕」の眼をとおして描いた『新しい人眼ざめよ』（1982年7月～1983年6月）と題した連作短編集は、光が大江を癒し、「救済」する存在として大江文学世界へ反映された「始まり」となった。

⁵⁶⁸ 大江健三郎、「屈服しない人々」、『ヒロシマ・ノート』、121頁。（傍点は引用者による）

大江が「光」を一連の小説に登場させた「意図」は、国文学＝日本近代文学における「私小説」の伝統に沿うような形で、彼固有の「個人的な体験」を語ることは決してなかったことは言うまでもない⁵⁶⁹——そういう意味で、『個人的な体験』という題名は、アイロニー的な仕掛けである。「光」は、単なる作家の息子をモデルにした作中人物であるだけではなく、日本列島が位置する地理的文脈における広義の「第三世界」問題とつねに深くかかわっている「ヒロシマ・ナガサキ」問題と対応させられる多義的な物語装置でもあるのだ。

大江は、「光」の無垢な無防備さを、一連の作品において核実験や、核戦争が勃発した場合の人間の無防備さ、「壊れやすさ」といった普遍的な問題と連動させている。例えば大江は、『個人的な体験』において、フルシチョフのソ連が核実験を再開することによって核戦争の危険に曝された人類と、障害児との間に感情移入をしていた。さらに、核戦争の危機や環境破壊といった終末論的な状況の下で、障害を持つ子供の責任を取り、守り育てて行くというテーマを『洪水はわが魂に及び』（1973年9月）で扱った。次の作品である『ピンチランナー調書』（1976年8月～10月）という長編は、反核運動における党派的対立の問題、この分裂の推進に関与する保守派、核エネルギーの私有化と核テロルに対する恐怖と、障害を持つ子供の安全を確保しようとする献身的な父親のストーリーであった。

とりわけ、『洪水はわが魂に及び』と『ピンチランナー調書』で大江は、核兵器保有がもはや「北」＝米ソとその衛星国の特権ではなくなり、東西の「北」からの「自立」を目指す中華人民共和国（初の核実験は1964年10月）やインド（「微笑むブッダ」＝「Smiling Buddha」という奇妙なコードネームが与えられた初の核実験は1974年5月）のような「第三世界」の主要な国も核武装し、核実験をするようになった1960～70年代の新たな「核の危機の時代」の「暗黒」を把握し表現している。

大江文学におけるこのようなテーマ意識の根底にあるテキストは『ヒロシマ・ノート』である。大江は、『ヒロシマ・ノート』を次のように始める。

⁵⁶⁹ 篠原茂も指摘するとおり、『新しい人眼ざめよ』の「中に大江の作品が《僕》の作品名として出て来ること、そして息子の二十歳の誕生日にむけて作品が書かれていること」「などから素材は《私小説》とほぼ同じ基盤の上に成立している」。だがこの作品は、「ウィリアム・ブレイクの詩的世界（そこには当然神秘的、宗教的、革新的指向が含まれることはいうまでもないのだが）とイーヨーを中心とした《僕》一家の精神的世界との深い部分での交流を考えるなら、日本近代文学の伝統的な意味での《私小説》とは異なる文学世界」である。（篠原茂、『大江健三郎事典』、森田出版、東京、1998年、221頁。）

このような本を、個人的な話から書きはじめるのは、妥当ではないかもしれない。しかし、ここにおさめた広島をめぐるエッセイのすべては、僕自身にとっても、また、終始一緒にこの仕事をした編集者の安江良介君にとっても、おのおののきわめて個人的な内部の奥底にかかわっているものである。したがって僕は、1963年夏の広島にわれわれがはじめて一緒に旅行したときの、ふたりの個人的な事情について書きとめておきたいのである。僕については、最初の息子が瀕死の状態でガラス箱のなかに横たわったまま快復のみこみはまったくたたない始末であったし、安江君は、かれの最初の娘を亡くしたところだった。⁵⁷⁰

本論文で、「北」（の西側）によって搾取と支配の対象にされ、文化・表象のレベルではつねに不可視化され、（その「叫び声」が）不可聴化されている「周辺世界」＝「南」の「被圧迫民族」に対する態度を「共感^{シンパシー}」として位置づけた。このヒューマニズム的であり、政治的でもある「共感^{シンパシー}」というイマージュは、「愛」というものに置き換えることも可能である。

大江健三郎が生前深く交流した作家井上ひさしは、25歳の時に書いた未公開のノートにおいて、大江の小説に「愛」が存在しないことを批判し、そのため大江が長編を書くことができないのではないかと危惧したと言う。⁵⁷¹この批判を受け、大江は「光との共生」を中心にする長編小説において「愛」を書こうと努め、この批判を手掛かりに「いま」書きつつある彼「の最後の小説ともいうべきもの」においてもこの「愛」をより完璧に表現したいと言う。

いま、私の最後の小説というべきものを書いています。そこで私は、アカリを総合的に見直したい。いままで書いてきたものを検討するようにしてあたらしい小説を書き、そこで自分も、本当のことを書いた小説と言えるようにしたいんですね。向こうの世界の井上さんに、「私は、アカリにたいしての愛というものを書きました。つまりこれは長編小説となっているのじゃないでしょうか」ということを呼びかけたい、その気持ちをもって仕事をしています。⁵⁷²

⁵⁷⁰ 大江健三郎、「プロローグ 広島へ……」、『ヒロシマ・ノート』、2頁。

⁵⁷¹ 大江健三郎「九条を文学の言葉として」、大江健三郎、内橋克人、なだ・いなだ、小森陽一、『取り返しをつかないものを、取り返すために——大震災と井上ひさし』、岩波書店、東京、2011年、41～42頁。

⁵⁷² 同上書、43頁。

このような観点からすると、大江の「光」に対する「愛」は、「アルジェリア戦争の時代」に書いた『われらの時代』を中心にする一連の作品およびエッセイにおける「被圧迫民族」、ファノン^{ヴァリエーション}を振って言う「地に呪われた者」への「共感」^{シンパシー}の延長線上にあり、その一変種であると言える。

本論文の批評的なカテゴリーに従って言うと、大江は光に独自の「正真正銘性」＝「正統性」＝*authenticité* を見いだしている。この「正真正銘性」＝「正統性」＝*authenticité* を大江は、帝国主義が国を巻き込んだ戦争の犠牲となったヒロシマ・ナガサキや沖縄の過去を忘却し、現在では無関心の保守主義に傾斜する日本社会の大半の「偽善」＝*inauthenticité* とは正反対の、ヒロシマ・ナガサキや沖縄の人々の「正真正銘性」＝「正統性」＝*authenticité* と照応するようなものとして受け止めているのだ。

『ヒロシマ・ノート』では、こうした「正真正銘性」＝「正統性」＝*authenticité* への「共感」^{シンパシー}＝「愛」は、日本列島の地理的な文脈における「第三世界」問題としての「ヒロシマ・ナガサキ」の被爆者に対する、また『沖縄ノート』では沖縄の住民、彼らの「正真正銘性」＝「正統性」＝*authenticité* に対する、彼らの純粹且つ正当な「政治的な参加」＝*engagement* に対するヒューマニズム的、政治的そして文学的な「共感」^{シンパシー}＝「愛」へと置き換えられる。

大江が、「広島」や「広島のなる人々」を一定の「正真正銘」^{オタンテイック}な自己同一性^{アイデンティティ}のモデルとして想定していることは、『ヒロシマ・ノート』の次の箇所において見てとることができる。

僕は、広島の、まさに広島の間人らしい人々の生き方と思想とに深い印象を受けていた。僕は直接かれらに勇気づけられたし、逆に、いま僕自身が、ガラス箱の自分の息子の相関においておちこみつある一種の神経症の種子、頽廢の根を深奥からえぐりだされる痛みの感覚をもあじわっていた。そして僕は、広島とこれらの真に広島のなる人々をヤスリとして、自分自身の内部の硬度を点検してみたいとねがいはじめたのである。(中略)僕は(中略)自分が所持しているはずの自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島のヤスリにかけ、広島のレンズをとおして再検討することを望んだのである。⁵⁷³

なおかつ、沖縄の住民の「正真正銘性」^{オタンテイシテ}は、大江に「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないのか」

⁵⁷³ 大江健三郎、「プロローグ 広島へ……」、『ヒロシマ・ノート』、3頁。

574 という、現在の自己同一性アイデンティティの「疑似性」イノタンティシテの全面的な検討、そして新たな自己同一性アイデンティティ——これをファノンが考案したところの「新たな人間」=*homme nouveau* というヴィジョンに置き換えることもできるが——の探求を促したのである。

『ヒロシマ・ノート』と『沖縄ノート』はともに、「アルジェリア戦争の時代」、そしてこの時代の主要な思想家としてのサルトルと密接不可分の関係にある。第二章でサルトルによる *authenticité* と *engagement* の概念が、大江の「喝采」においていかなる形式で転用されたかについて論述した際に「文脈化」したように、*authenticité* という概念は、第二世界大戦時、ヴィシー政権下のフランスにおいて暴力的な人種差別の対象にされたユダヤ人の体験に深く根ざしている。サルトルによると、権力行使による支配は主体を客体に還元する。主体性を奪われ、客体に還元された被差別者を「非・正真正銘」=*inauthentique*、彼／彼女の「正真正銘性」=*authenticité* を回復しようとして、差別の対象となっている自らの自己同一性(=*identité*)を全的に生きる被差別者にとって *authentique* な人間として位置づけている。

本論文で呈示したとおり、サルトルはこの *authenticité* をアルジェリアやヴェトナムのような、「北」(の西側)の帝国主義に対して闘う「第三世界」において再発見した。菊池昌典は、この二冊「をつらぬくモチーフ」を「原爆の被害と加害の双方に眼と心をくばりながら、作者自身が、いやおうなく加害の立場に立たざるをえなかったとの自覚」⁵⁷⁵であると規定するが、大江が加害者の立場から暴力的な批判を自分自身に向けるという姿勢にもサルトルの作用がある。先に『叫び声』、『日常生活の冒険』や『万延元年のフットボール』における「自己処罰の欲求」というモチーフにあたって大江が念頭に置いたのが、サルトルの『地に呪われたる者』へつけた「序」におけるマゾキズムの雰囲気だったことに言及した。サルトルのこのテキストにおけるマゾキズムの色調の濃厚さには、アルジェリア戦争において、自国による帝国主義的権力の暴力的行使を阻止することができない進歩的な知識人特有の無力感と罪悪感の働きかけがあったことも指摘した。サルトルのこのような自己批判の意識は、『ヒロシマ・ノート』や『沖縄ノート』においても生かされたと言えよう。

「ヴェトナム戦争の時代」に書いた『沖縄ノート』において大江が沖縄の人間に対して抱えている罪悪感に包まれた責任には、サルトルがファノンの『地に呪われたる者』に付けた「序」における自己批判の雰囲気が漂っている。こ

⁵⁷⁴ 大江健三郎、「日本が沖縄に属する」、『沖縄ノート』、15頁。

⁵⁷⁵ 菊池昌典、「想像力における政治——『ヒロシマ・ノート』『沖縄ノート』を中心に——大江健三郎——方法化した想像力」、102頁。

のことは、『沖縄ノート』に収録されているエッセイ「『本土』は実在しない」の次の部分においてももっとも明瞭に表されている——『戦後』の二十五年、米軍の核兵器を含む前進基地として、莫大な毒ガスと同居し、原子力潜水艦によって港と魚たちを汚染され、朝鮮戦争からヴェトナム戦争にいたる、ずっと持続した戦争の現場に、日本および日本人から放置されてきた」。⁵⁷⁶

『沖縄ノート』と『ヒロシマ・ノート』の間における連続性は、沖縄市民も核兵器や化学兵器などに曝されることによってヒロシマの「被爆者」と同様に過酷な体験をし、被爆者の立場になりうるという可能性への大江の懸念である。大江は、『ヒロシマ・ノート』でそうしたように、『沖縄ノート』においても「本土」の人びとの「沖縄」に対する無責任な態度——とりわけ「核兵器のみならず、毒ガス兵器、細菌兵器などありとあらゆる広島悲劇の拡大再生産を秘めた兵器の堆積場としての沖縄、そこに住む人々のはげしい反戦平和の闘争、それを眺める『本土』の人々の無感動さ」⁵⁷⁷——を（自己）批判しているのだ。

この人類全体を威嚇する広義の核兵器の問題は、アルジェリアという「第三世界」の問題と無縁ではない。フランスという国家がアルジェリアという「周辺世界」の国に、植民地時代にも解放後にも行使した帝国主義的権力の暴力は、核実験であったからである。1962年7月にアルジェリアは独立したが、独立後15年間はフランス軍の駐留が認められていた。フランスは、1961年から1966年にかけて、アルジェリア国内のサハラ砂漠に位置するエッカー実験場で地下核実験を遂行しつづけたのである。

大江が『ヒロシマ・ノート』においてとりあげた、光が誕生したのと同時期に「核戦争についてヒステリックなほど恐怖感とともに生き、そのあげくパリで自殺した」⁵⁷⁸友人についてここで言及することにする。この身元が明らかにされない友人が自殺した場所が、アルジェリアにおいて核実験を遂行しつづけたフランスの首都パリであることは注目すべきところである。この友人は生前、核兵器の破壊手段が人類に対する危険性になみなみならぬ危機感を抱いていたことが推測できる。彼の自殺の動機には、沖縄がヴェトナムという「第三世界」の国に対する——核兵器を使用する危険性も十分にある——帝国主義的暴力の基地となっており、滞在先のフランス国家が、アルジェリアを原水爆の実験場として利用するという状況に置かれたことへの自責の念や抵抗が含まれていたのではないであろうか。換言すると、この自殺は、新植民地主義体制

⁵⁷⁶ 大江健三郎、「『本土』は実在しない」、『沖縄ノート』、220～221頁。

⁵⁷⁷ 菊地昌典、「想像力における政治——『ヒロシマ・ノート』『沖縄ノート』を中心に——大江健三郎——方法化した想像力」、109頁。

⁵⁷⁸ 大江健三郎、「広島への最初の旅」、『ヒロシマ・ノート』42頁。

の「周辺世界」に対するあらゆる形式の「核のテロル」への——これにおいて自国の責任もあるため——自己批判をも含む自己破壊的な抗議行動であったのだ。

「^{オタンテイック}正真正銘」な生き方を探し求め、反社会的で、冒険的な生活を国内外で送り続けた若い作家の「ぼく」の物語のなかで、親友齋木犀吉が「アルジェリアの地方都市」で唐突に自殺するという『日常生活の冒険』の中の挿話に先に触れた。安保闘争における敗北によって、日本の新植民地主義を主導する「北」（の西側）と協力する「同盟国」としての立場がさらに昇格され、「南」の民族に対する加害者としての立場が強固になったことによる自己処罰の欲求に基づいた、「小説のレヴェル」の——「南」＝「第三世界」における——この自殺と、大江の友人の「現実のレヴェル」での——「北」（の西側）における——自殺は相互補完的であると言える。

*

大江が「^{レイト・ワーク}晩年の仕事」と呼んでいる『^{らふ}臆たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』（2007年）や『水死』（2009年）などの近年の小説もまた、書くこと^{ライティング}をとおした「^{アンガジュマン}政治的な参加」の営為である『ヒロシマ・ノート』と『沖縄ノート』と有機的に繋がっており、それらの延長線上に立っている。これらの小説には主要な作中人物として「光」に照応するものが登場していることと、国の「中心」と対置されている「周辺」としての「四国の森の中の谷間の村」において、芸術をとおした「^{アンガジュマン}政治的な参加」の営為というモチーフを使っていることが共通している。この芸術をとおした「^{アンガジュマン}政治的な参加」の営為は、東京と「四国の森の中の谷間の村」との地政学的対立という緊張関係を支えるものとして設定されている。

『^{らふ}臆たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』は、主人公・語り手である小説家コギーと、映画プロデューサーの^{こもりたもつ}木守有、そして国際派女優のサクラが、ドイツの18世紀末、19世紀初頭の小説家ハインリヒ・フォン・クライストの『ミヒャエル・コールハースの運命——或る古記録より』のアジア版を映画化する計画＝「M計画」に30年越しに二度にわたって挑戦するストーリーである。コギーは、クライストの作品を明治維新前後の四国という時空における百姓一揆の物語に翻案し、映画の台本を作成することを依頼される。映画の中の百姓一揆は「メイスケさん」と、獄死してから再生するその「メイスケさんの生まれ変わり」や、「メイスケ母」というまだ幼い「メイスケさんの生まれ変わり」の母の役割を果たす指導者ら登場人物による。ミヒャエル・コールハース

という「都市ゲリラ」の叛乱の物語を、「メイスケさん」のゲリラ活動⁵⁷⁹の物語に置き換えて、日本の「周辺」としての「四国の森の中の谷間の村」の文脈において「再生」させる「M 計画」であったが、一度目の試みは、その試みが四国の歴史の歪曲であるとの、保守的なメディアや県会議員や歴史研究者による批判という障害が発生し、さらにカナダ人のカメラマンフィリップが撮影したバレエ教室の少女たちの写真が、チャイルド・ポルノの国際的追放にかかわっているスウェーデン総領事の日本人の夫人の手に渡り、スキャンダル化したことが決定打となり失敗する。

一度目の「M 計画」の失敗には、サクラが激しい精神的ショックを受けた影響もあった。後にサクラの夫になる当時米兵であったマガーシャックによって、サクラが少女時代にチャイルド・ポルノという性暴力の対象にされ、当時幼少であったため自覚していなかったこの映像の無削除版に曝されるという事件が発生したのである。しかし30年後に「M 計画」を復活したのはそのサクラとコギーの妹アサである。四国の谷間で、母親が死んだ後ひとり自立して暮らしているアサは、30年にわたってサクラと連絡をとりつづけており、またこの30年間——コギーの「M 計画」の着想先であった——コギーの母親がかつて上演した『「メイスケ母」出陣』という芝居についての「村の生き残りの聞き書き」⁵⁸⁰を続けていた。30年後にサクラとアサによって復活することになった「M 計画」の台本では、男性の主人公「メイスケさん」が背景に退けられ、女性の登場人物「メイスケ母」が前景に位置づけられている。コギーと木守はこの計画から排除され、この「都市ゲリラ」のストーリーを、四国の文脈で再構築されたアジア版として実現するために二人の女性が、コギーの息子と妻をも動員した形で、四国に向かう段階で物語は閉幕する。

第二章の脚注でも触れた『水死』において、大江は、主人公である作家長江古義人が敗戦の夏に洪水の川に船出し水死した父をめぐる小説を書こうと苦闘し、この「計画」に失敗する前後の過程をストーリーの中軸に据えている。主人公である作家長江古義人は、四国の森の谷間の村にいる妹アサから、母が自らの死から十年間それを彼に渡すのを禁じていた「赤革のトランク」の解禁の時がやってきたことを知らされる。古義人は父の水死をめぐる「水死小説」を書くために必要な資料が「赤革のトランク」に入っていると確信しているため四国の村に向かう。それを受け彼の作品を演劇化してきた劇団「穴居人」^{ザ・ケイヴ・マン}は、まだ書かれていない古義人の「水死小説」を題材とした演劇を計画し、主人公

⁵⁷⁹ 大江健三郎、『^{らふ}臆たしアナベル・レイ 総毛立ちつ身まかりつ』、新潮社、東京、2007年、151頁。

⁵⁸⁰ 同上書、188頁。

と共同行動をするようになる。彼らの意図は、創作の過程をインタビューし、演劇化の過程と創作過程をダイナミックに連動させることにある。しかし、結局この「赤革のトランク」には古義人が期待していた父の謎に関する資料が入っていなかったため、「水死小説の計画」は挫折する。

「水死小説の計画」を実現させることができなかつたことに幻滅して東京に戻った古義人が、生前深くかかわった友人のサイドが彼に贈った楽譜にボールペンで書き込みをしたアカリを「キミは、バカだ」と叱ったことから、二人の関係が一時的に断たれるという危機が発生する。この危機を乗り越えるために古義人とアカリは再び四国に行き、故郷の家で共同生活をすることを決心する。古義人は父の弟子であった右翼の大黃と遭遇し、二人で論争する形で父の「水死」の真相を追求していく。

古義人の「水死小説の計画」の失敗を機に、看板女優のウナイコは劇団から独立し、アサの支持を受け、フェミニストの色合いが濃厚で前衛的な「政治的に参加」をした演劇を四国の森の中の谷間の村で上演する企画に着手する。「死んだ犬を投げる芝居」というこの前衛的な演劇は役者らが論争的な形式で芝居を演じ、観客は自分が認めない内容の発言をする役者に自分で作った縫いぐるみの犬を投げかける、というものである。

どちらの小説においても「光」に照応する作中人物は、映画ないしは演劇の音楽関係の仕事を担当する作中人物として設定され、作中の計画に関わっている。

*

大江がこの二作や、現在執筆中の最新作（「の最後の小説ともいうべきもの」）を「晩年の仕事」として位置づけることにあたって、サイドが、*On Late Style: Music and Literature against the Grain* / 『晩年のスタイル』において展開した「晩年のスタイル」の理論を強く意識している。サイドが考案したところの「晩年のスタイル」は、「歳をとれば知恵もつき、こうした「知恵」に基づいて「稀少な成熟や、新たな和解と平穩の精神」を反映し、「ありふれた現実」を「奇跡的な変貌というかたちで表現」⁵⁸¹する作品とは質を異にするものである。サイドが言う「晩年のスタイル」とは、歳とともに成熟することではなく、むしろこのような成熟を拒絶し、時代精神に反逆し、それと和解を求めず抵抗する姿勢を持続することである。サイドの言葉を借りると、「和解と達成感のみなきることのない」、「芸術家の妥協を拒み、気難しく、和解しえない矛盾をかか

⁵⁸¹ サイド、エドワード、W.、「時宜を得ていることと遅延していること」、『晩年のスタイル』、大橋洋一訳、岩波書店、東京、2007年、27頁。

えた」、「不調和、不穏までの緊張、またとりわけ、逆らいつづける、ある種の意図的に非生産的な生産性」こそが「晩年のスタイル」の下地を作る「晩年の経験」⁵⁸²なのである。

ドイツの哲学者テオドール・W・アドルノ、フランスの小説家・劇作家ジャン・ジュネなど一連の世界的に著名な作家の晩年に創作された作品に焦点を集め、それぞれの「スタイル」を分析することによって、「晩年のスタイル」論を展開させているサイドのこの未完の書は、同時にサイド自身の「晩年性」を發揮するものでもある。大江はこの理論的アプローチを、自らの作品の物語言説や物語内容のレベルにおける根本的な「小説の方法」にしているのだ。

また『臆たしアナベル・ライ 総毛立ちつ身まかりつ』と『水死』において、「サイド」を主人公の友人として物語に登場させることで、ロシア・フォルマリズムの概念で言えば、大江はこれらの「晩年」の作品に取り込んでいる「方法」を「露呈」している。例えば、『臆たしアナベル・ライ 総毛立ちつ身まかりつ』での、主人公・語り手コギーが書いた詩からサクラが引用したとされる「ある種の芸術家が死を前に選び取る／表現と生き方のスタイル」⁵⁸³という言葉遣いや、サクラと木守が30年前に失敗した「M計画」に、コギーをあらためて着手させようとする設定は、この概念への明示的な言及なのである。なお、「サイド」がコギーに楽譜を贈ったという挿話は、『水死』における、この「露呈」の仕掛けの一例である。⁵⁸⁴

『臆たしアナベル・ライ 総毛立ちつ身まかりつ』における「M計画」も、『水死』における「死んだ犬を投げる芝居」も、「周辺」的な立場に置かれ、抑圧されている「他者たち」による「中心指向的な権力」に対する「叛乱」として構想されている。こうした叛乱のモチーフの「始まり」は、「アルジェリア解放戦争」といった「第三世界」解放運動のパーспекティブから、日本の地政学的な再配置が試みられた『われらの時代』に見ることができる。『われらの時代』において、南靖男の「アルジェリア解放戦争」への「政治的な参加」の計画は、ジャズ・トリオによる天皇や元米兵を対象にする一連の反社会的なテロル行動の試みがもたらした破滅の結果失敗している。この点から大江の「晩年の仕事」は『われらの時代』の延長線上にあることが判明する。

⁵⁸² 同上書、28～29頁。

⁵⁸³ 大江健三郎、『臆たしアナベル・ライ 総毛立ちつ身まかりつ』、新潮社、東京、2007年、16頁。

⁵⁸⁴ 『水死』という小説がいくつもの異なった方法でサイドの「晩年のスタイル」論を実現化する試みであることは先行研究において論じられている。小森陽一、「拮抗する言葉の力——大江健三郎『水死』を読む」、『世界』(803)、2010年4月号、を参照。

しかし、^{レイト・ワーク}「晩年の仕事」としての二作は、「叛乱」と^{アンガジュマン}「政治的な参加」が、芸術的表象空間における、芸術表象を手段とする行動として設定されていることで、『われらの時代』とは相違している。そしてこの二作でのこうした「叛乱」と^{アンガジュマン}「政治的な参加」の主体は、日本社会において抑圧され、^{マナー}社会の主流から取り残された=周縁化されている（主に女性の）「他者」＝「異邦人」なのである——幼年時代に性暴力の対象にされ、そのトラウマを未だに抱えている被害者のサクラ、「田舎」として周縁化されている「四国の森の中の谷間の村」の住民（とりわけ女性たち）、障害のため社会の一部によって差別的に扱われているアカリのような障害者など。

社会の主流から取り残された=周縁化された「他者」＝「異邦人」たちが、彼らの芸術表象における、またそれを手段とする「叛乱」を遂行する舞台は、日本の地理的な文脈における「第三世界」的＝「^{トボス}周辺」的な場所としての「四国の森の中の谷間の村」であり、「他者」＝「異邦人」たちは異なるレベルにおける中心指向的な権力、保守主義、男性中心主義に逆らうことを試みている。この「晩年」の二作においても、物語内部の作者や主人公としてのコギーと長江古義人の持つ権威、「中心」的な立場が、これらの「他者」＝「異邦人」たちに奪い取られ、非中心化されているのだ。

サイドは『晩年のスタイル』の第四章「ジャン・ジュネについて」においてジャン・ジュネの「晩年性」の独自性が^{シンパシー}「共感」や「愛」をとおした^{アンガジュマン}「政治的な参加」の雰囲気によるものであることを呈示している。その雰囲気をおおきく大江は自らの「晩年」の二作のこのような設定において強く意識している。反社会的、反権力的であり、マーギナルかつ権力的なライフスタイル、および労働者や移民という^{マナー}社会の主流から取り残された=周縁化された人々、とりわけ「第三世界」の被圧迫民族と結んだ連帯関係がジュネの「晩年のスタイル」に奥行きを与え、豊かにしたということが、サイドの主な論点である。

ジュネが最初にかかわった「第三世界」解放運動が『われらの時代』の物語背景として布置されているアルジェリア解放戦争であることにも注目すべきである。ジュネが、アルジェリアを離れ、パレスチナ解放運動への^{アンガジュマン}「政治的な参加」をした主な理由は、アルジェリアがフランスによる植民地支配から独立した後、新政権が柔軟性を失い、権威化し、保守化したことに、言い換えればアルジェリアの^{デザンガジュマン}「政治的離脱」に対し彼が抱いた不満である。そして、ジュネのパレスチナ解放運動への^{アンガジュマン}「政治的な参加」は死ぬまで続いた。サイドが言うように、「アルジェリアにおいて革命が忘れ去られた後に彼をパレスチナへと結びつけたものは」、「パレスチナ闘争において革命はつづいているということだった」。

サイドの指摘するジュネのこの「共感」や「愛」をとおした「政治的な参加」の雰囲気^{シンパシー}を濃厚に醸し出している作品は、「晩年の仕事」^{レイト・ワーク}としての、芝居の『屏風』= *Les Paravents*, 1961年と、ジュネの死後に出版された長編小説『恋する虜』= *Un captif amoureux*, 1986年である。

そう彼はアラブ人を愛していた（中略）。そしてまさにこうした彼特有の情が、彼の晩年の大作に刻印されているのだ。この二作はともに支援活動として書かれたことを隠していない。『屏風』 [= *Les Paravents*, 1961] は、[反] 植民地闘争盛んなりし頃のアルジェリア抵抗運動を支援するものであり、『恋する虜』 [= *Un captif amoureux*, 1986] は一九六〇年代後半から一九八六年その死にいたるまでパレスチナ抵抗運動を支援するものである。そのためジュネの立場について疑念をいだく者はいない。フランスに対する彼の怒りと嫌悪は、自伝的なルーツがある。それゆえあらゆるレベルでは『屏風』でフランスを攻撃することは、彼に判決を下シラメトレーのような場所に彼を収監したフランス政府に対する彼なりの侵犯行為である。しかし別のレベルでは、フランスは、あらゆる社会運動がひとたび成功をおさめたあと判で押したように柔軟性を失い、そのあげく権威化する、そのなれのはての姿を代表するものだった。⁵⁸⁶

例えば、大江の『水死』と『臍^{らふ}たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』で「四国」における「叛乱」や「政治的な参加」^{アンガジュマン}をめぐる小説と芝居の台本双方の創作の計画が主要なテーマになっていることは、サイドが分析するジュネの「晩年の二作」のジャンルと無縁ではない。大江のこの二作において、社会の主流から取り残された=周縁化されている、主に女性の「他者」=「異邦人」が、「周辺」的な空間=「四国の森の中の谷間の村」において、芸術レベルの、そして芸術による「叛乱」に着手することも、ジュネの「第三世界」の解放運動への「政治的な参加」^{アンガジュマン}、また「第三世界」との結託をめぐるサイドの分析の「異化変形」であると言えよう。

（前略）ジュネの挑戦的なところは、その苛烈な反唯名論なのである。

「他者」を愛する男、彼自身も漂流者にして異邦人であり、パレスチナ

⁵⁸⁵ サイド、エドワード、W.、「ジャン・ジュネについて」、『晩年のスタイル』、136頁。

⁵⁸⁶ 同上書、135頁。

革命を漂流者や異邦人たちの「形而上的」蜂起とみなし、それに深い共感を寄せるのだが——「わたしの体はそこにあった。わたしの精神もそこにあった」——けれども、「彼の信念すべて」が、「わたし自身の総体」が、そこにあるはずもない男なのだ (UCA125/90 [一四〇])。⁵⁸⁷

なお、先述した大江の「晩年」の二作における物語内部の作者や主人公として設定されているユギーと長江古義人の権威、中心的な立場が、「他者」＝「異邦人」たちに奪い取られ、非中心化されるという仕掛けにおいて、ジュネの自らのフランス人としての自己同一性アイデンティティに対する暴力的と言ってよいほどの自己批判意識の働きかけを見逃してはならない。ジュネによると、自己同一性アイデンティティのあるべき姿はつねに、自らを破壊し、再構築していくという革命的でダイナミックな運動である。ジュネの自己同一性アイデンティティのレヴェルにおける「脱帝国主義」と再定義できるこのようなアプローチは、彼のあらゆるレヴェルの中心指向的な権力構造に対して「叛乱」を起こしつづけるという見解見識と相互補完的である。帝国主義が「周辺世界」に「アイデンティティを輸出」するものである以上、ジュネの「叛乱」は、なによりもまして自分自身の自己同一性アイデンティティに向けられなければならない。このことについて、サイドは次のように述べている。

ジュネのように、みずからの非行と孤立、犯罪の才能と喜びによって、望まぬアイデンティティを押し付けられた、アイデンティティの犠牲者にとって、アイデンティティは、なんとしても抵抗すべきとなる。またとりわけジュネが選んだアルジェリアとかパレスチナといった場所では、アイデンティティとは、より強力な文化、またより発達した社会が、暴力的にみずからを特定の民族に押し付けるときに利用する手法そのものであり、いっぽうその特定の民族は、同じアイデンティティのプロセスによって劣等民族の烙印を押されるのである。帝国主義は、アイデンティティを輸出する。⁵⁸⁸

サイドによるジュネの「アイデンティティ観」に関するこの一節は、サイドが、大江を「言語と国家が押し付ける国民的および文化的な境界を越境した」読者たちによって読まれるようになった「世界」(文学)の作家として位置づける発言と呼応する。『われらの時代』のテキストにおいて作成される地政学的な世界地図の「第三世界」部分から日本を消去し、『ヒロシマ・ノート』や『沖

⁵⁸⁷ 同上書、140頁。

⁵⁸⁸ 同上書、140～141頁。

縄ノート』において広島や沖縄の人々の「^{オタンテイシテ}正真正銘性」を引き合いに出し、「日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないのか」と自らの自己同一性^{アイデンティティー}を全面的な検討＝自己批判の対象にした大江の見解見識は、サイドやジュネのそれと重なり合うような懐疑心を含意している。

*

——1975年の『始まりの現象』が、パレスチナ解放運動という「第三世界」運動における新たな「始まりの現象」のアレゴリーであったと同様に——サイドの『晩年のスタイル』は、サイドのパレスチナ解放運動への彼の生涯にわたる積極的な「^{アンガジュマン}政治的な参加」の「晩年のスタイル」のアレゴリーである。それは何よりもまして、アルジェリア解放戦争やパレスチナ解放運動に「^{シンパシー}共感」や「愛」をもって「^{アンガジュマン}政治的な参加」をしたジャン・ジュネの「晩年のスタイル」に対する章においてももっとも強く感じとられる。サイドのこの分析を自らの「^{レイト・ワーク}晩年の仕事」の文脈に取り込んだ形で書き上げた『^{らふ}臆たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』と『水死』は、大江の「晩年」における、原水爆禁止運動、「九条の会」、東日本大震災に起因した福島第一原子力発電所事故以後の「脱原発運動」、「大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判」といった「^{アンガジュマン}政治的な参加」のアレゴリーなのである。

*

本論文で取り上げた、「アルジェリア戦争の時代」に書いた『われらの時代』周辺の一連の小説において、大江は大日本帝国が戦前・戦中のみならず、戦後日本が平和の時代と思われた戦後においても、中国、朝鮮半島、ヴィエトナムをはじめとするアジア近隣諸国に直接的ないしは間接的にもたらした破壊を問題にした。これらの小説において大江は、アジア近隣諸国に対する自国の攻撃性を批判し、この国々における「第三世界」指向の運動につねに^{シンパシー}共感を持っている。また大江は同様に、帝国主義的暴力の被害を受けながら、この暴力に抵抗した遠国の「第三世界」指向の民族解放運動、とりわけアルジェリア解放戦争、ナセルによる反帝国主義運動、パレスチナ民族解放運動を、自国が関与してきた帝国主義的暴力に対抗するものとして見ている。大江のこのような被^{シンパシー}圧迫民族に対する共感においては、ヒロシマ・ナガサキ・沖縄をはじめとする自国の民族が対象にされた惨たらしい帝国主義的破壊の体験の影響が大きい。戦後、自国が間接的に関わった朝鮮戦争やヴィエトナム戦争、遠国のアルジェリア戦争、またアルジェリアとパレスチナ問題とは密接不可分の、スエズ侵攻における被^{シンパシー}圧迫民族について、大江にはヒロシマ・ナガサキ・沖縄の体験の再

発に感じているといっても過言ではないだろう。

国内と国外の被圧迫民族に対する「共感」に基づく「同時代」の「モデル」を作ることによって、大江はその国内外の読者に現在進行形の「歴史」を「明視」させ、読者の「歴史認識」を鋭くし、読者にその「歴史」への参加を可能にすることを目ざした。先にも引用した、サイード流のポストコロニアルな色合いが濃厚な講演において、大江は次のように述べる。

人間は歴史的な存在である以上、文学の役割は、過去と未来をも包摂するような「同時代」のモデルを、そしてその「同時代」に生きている人々のモデルを作り上げることである。（“The role of literature—so far as man is obviously a historical being—is to create a model of a contemporary age which encompasses past and future, a model of the people living in that age as well.”）⁵⁸⁹

朝鮮半島をはじめとするアジア近隣諸国とともに、アルジェリアをはじめとする「第三世界」指向の運動が行われる「周辺世界」の「地図」が作成されている小説として本論文で規定した『われらの時代』は、「同時代」のモデルを作るという仕掛けに照応するものである。『われらの時代』における「地図作成」という運動は、作者が同時代の地政学的な力関係の「モデル」を「周辺」＝「南」＝「第三世界」に共感する形で作成するという作業として位置づけ直すことができる。

本論文で、「第三世界」の部分が強調される「世界地図」の「地図作成」として定義した、この「同時代」のモデルを作るという作業は、「アレゴリー法」の一例である。またとりわけ、「第三世界」問題、日本の「帝国主義的植民地支配の責任」の問題を扱った大江文学の作品における「共感」と「アレゴリー法」は相互補完的な要素である。

他方、序章で言及したように大英帝国から帝国主義的植民地支配を受けた結果、その文化が大きな破壊を被ったアイルランドの詩人・劇作家ウィリアム・バトラー・イェイツはアイルランドの文芸復興に貢献することを目ざした。反面、大江が「アジア」の文化の復興、発展に貢献しようという努力を続けてきた理由は、「近い過去において、その破壊への狂信が、国内と〔近隣〕諸国の人間の正気を踏みにじった歴史を持つ国」にもかかわらず、自国日本が近隣諸国に対し、経済的なレベルにおいても、文化的なレベルにおいて十分に「賠

⁵⁸⁹ Oe, Kenzaburo, “Japan’s Dual Identity: A Writer’s Dilemma,” 66 頁. (引用文の翻訳は引用者による)

償」を行わなかったことにある。

先に呈示したとおり、大江文学がアジアで盛んに翻訳され、広く読まれ、議論されるようになった2000年代の現在の視点からすると、その文化の復興や発展に貢献することに成功したと言える。

*

本論文の最後に、大江の最後の、未完成の仕事について触れる必要がある。この小説においては、サイドやその理論に対する大江の深い共感^{シンパシー}が読み取れる。

私が書き続けてゆくこの文章が本となるなら、それらのノートを一括するタイトルを使用してもらいたい。白血病と闘いながら大きい仕事をして（書くことにとどまらなかった。亡くなった友人の論文集が出たが、病床を見舞うたび私はかれの予定している本の構想、その全体のタイトルを聞かされていた。私は、——きみが死後の出版に備えているのなら、同年生まれの自分がきみより生き延びている見込みも五分五分、だから、きみの表題をモジッタタイトルで、最後の仕事をしたい。かれは暗くもイタズラっぽクもある微笑を浮かべてこう言い返したものだ。

——いや、きみの仕事はもっと早くやり終えてもらいたい、おれの本の終章はきみの晩年の仕事を主題としたものにするつもりだ。

予告されたタイトルでまとめられた友人の最終の本がニューヨークの地味な書店から出た時（その本のうしろカヴァーに私の短文がある）、私は長編小説を書いていた。そしてそのまま続けてきたが、「三・一一後」それに興味を失った。

（中略）私は三・一一で崩壊した書庫をノロノロ整頓しながら見つけていた、十数年前に何らかの腹案があって相当の量を求めたが、いつの間にか書棚の奥の埋没させていた「丸善のダックノート」を膝に載せて（中略）どうにも切実な徒然なるひまに、思い立つことを書き始めた。友人の遺著は“On Late Style”つまり「晩年の様式について」だが、私の方は「晩年の様式に生きるなかで」書き記す文章となるので、“In Late Style”それもゆっくり方針を立ててではないから、幾つものスタイルの間を動いてのものになるだろう。そこで、「晩年様式集」としてルビをふることにした。⁵⁹⁰

⁵⁹⁰ 大江健三郎、^{イン・レイト・スタイル}「晩年様式集」(1)、『群像』、2012年1月号、8頁。

大江は、この新しい小説「^{イン・レイト・スタイル}晩年様式集」の冒頭において、筆者が本論文で「引用法」と「翻訳法」と命名した方法を採用している。大江は、例えば「見るまえに跳べ」において、オーデンの詩を翻訳しなおしていたが、ここでもサイドの書の題名の日本語訳『晩年のスタイル』を「晩年の様式について」として翻訳しなおし登場させている。東日本大震災に起因した福島第一原子力発電所事故以後の放射能汚染の「大惨事」＝カタストロフィーの時代の日本の「同時代」という「晩年の様式」の「中で生きること」を、自らの作家としての「晩年の様式」と重ね、内部から書き記すことを意図していると思われる。大江が、小説の作中作者の「私」に *On Late Style* というサイドの作品の原文の題名における前置詞の *on* (について) を、*in* (の中で) に替え「私」が書くことになっている小説の題名 *In Late Style* として作り直おさせる理由はそこにあるのだ。

大江がサイドを振って近年の自らの仕事を「^{レイト・ワーク}晩年の仕事」(＝「^{レイト・ワーク}後期の仕事」)と呼んだことにはすでに触れた。大江は、本論文において詳述したとおり、「世界文学」の主要な詩人や小説家を精読し、その精読経験による「引用」を、自らの新しい小説の文体や内容に奥行きを与え、多様化するうえで生かすつづけた。これが、大江特有の小説の方法であることにもすでに触れたとおりである。しかし、現在執筆中の「^{イン・レイト・スタイル}晩年様式集」に関しては事態が以前の大江文学とは異なる。

大江はパリのブックフェア(2012年3月16～19日)次のように発言している——「福島原発事故後、自分の最後の作品だと思って8年来書きつづけていた小説を放棄し、自分の最後の文章・仕事として、『実況放送のように』今起きている事態、見たもの、福島によって時代について発見するものを書き始めた」。また、生前深く関わった友人サイドの遺著『晩年のスタイル』を受け継いで、「個人的なカタストロフィーを書いて死ぬつもりだったが、社会(国、世界)全体が今、カタストロフィーの中にあるという事態にいたったがゆえ、この新しい仕事を始めた」⁵⁹¹とも述べている。

この発言は、上に引用した、「^{イン・レイト・スタイル}晩年の様式集」の冒頭と重なり合うようなものである。大江は、以前のように「世界文学」の作家・理論家のテキストから単に「引用」するのではなく、その「^{ワーク}仕事」を受け継ぎ、続けているのである。サイドの「第三世界」に共感的な「^{アンガージュマン}政治的な参加」の意識をこの「最後の小説」において受け継ぎ、「アジアと世界中に歴大な量の放射性物質をふりまいても原発政策を改めず、日本全体を覆うカタストロフィーについてまじめに考え

⁵⁹¹ ^{たかはた ゆうき}飛幡祐規、「原発を止める力と人間の威厳—大江健三郎さんと鎌田慧さんがパリで語ったこと」、<http://www.labornetjp.org/news/2012/1332477237183staff01>、2012年3月22日。

ない」⁵⁹²という「日本」の暗い「同時代」のモデルを作成し、読者に問題提起しつづけているのだ。

こうした「同時代」を生きている読者は、強いて言えば「環境テロリズム」に対する「脱原発」運動こそが、1950～60年代の反帝国主義の「第三世界」指向の運動の精神を受け継いだ運動になりうることを、「晩年の様式集」の読書経験をとおして読み取るだろう。

⁵⁹² 同上書。

参考文献

一次資料——大江健三郎の作品

1. 大江健三郎、『新しい人よ眼ざめよ』、講談社、東京、1983年。
2. 大江健三郎、『個人的な体験』(1964年初版)、新潮社、東京、1994年。
3. 大江健三郎、『叫び声』(1962年初版)、講談社文芸文庫、東京、1990年。
4. 大江健三郎、『死者の奢り・飼育』(1959年初版)、新潮社、東京、2004年。
5. 大江健三郎、『水死』、講談社、東京、2009年。
6. 大江健三郎、『性的人間』(1968年初版)、新潮社、東京、1998年。
7. 大江健三郎、『空の怪物アグイー』(1972年初版)、新潮社、東京、2002年。
8. 大江健三郎、『同時代ゲーム』(1979年初版)、新潮社、東京、1994年。
9. 大江健三郎、『日常生活の冒険』(1964年初版)、新潮社、東京、2002年。
10. 大江健三郎、『万延元年のフットボール』(1967年初版)、東京、1992年。
11. 大江健三郎、『見るまえに跳べ』(1964年初版)、新潮文庫、東京、2001年。
12. 大江健三郎、『芽むしり 仔撃ち』(1958年初版)、新潮社、東京、2004年。
13. 大江健三郎、『燃え上がる緑の木』(1993～95年)年初版)、新潮社、東京、1997年。
14. 大江健三郎、『臍たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』、新潮社、東京、2007年。
15. 大江健三郎、『「レイン・ツリー雨の木」を聴く女たち』、新潮社、東京、1982年。
16. 大江健三郎、『われらの時代』(1959年初版)、新潮文庫、東京、2002年。

一次資料——大江健三郎の文芸誌などに掲載された作品

1. 大江健三郎、『イン・レイト・スタイル晩年様式集』(1)、『群像』、2012年1月号。
2. 大江健三郎、『喝采』、『文芸春秋編集』『文学界』、12(9)、1958年9月号。
3. 大江健三郎、『政治少年死す』、『文学界』、1961年2月号。

大江健三郎のエッセイ、評論など

1. 大江健三郎、『あいまいな日本の私』(1995年初版)、岩波書店、東京、2005年。
2. 大江健三郎、尾崎真理子、『大江健三郎作家自身を語る』、新潮社、東京、2007年。
3. 大江健三郎、『沖縄ノート』(1970年初版)、岩波書店、東京、2011年。
4. 大江健三郎、『厳粛な綱渡り』(1965年初版)、講談社文庫、東京、1991年。

5. 大江健三郎、『小説の方法』(1978年初版)、岩波書店、東京、1998年。
6. 大江健三郎、『世界の若者たち』(1962年初版)新潮社、東京、2007年。
7. 大江健三郎、内橋克人、なだ・いなだ、小森陽一、『取り返しのつかないものを、取り返すために——大震災と井上ひさし』、岩波書店、東京、2011年。
8. 大江健三郎、『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』、岩波書店、東京、1984年。
9. 大江健三郎、『「話して考える(シンク・トーク)」と「書いて考える(シンク・ライト)」』、集英社、東京、2007年。
10. 大江健三郎、『ヒロシマ・ノート』(1964年)、岩波書店、東京、2005年。
11. 大江健三郎、『暴力に逆らって書く』、朝日新聞社、朝日文庫、東京、2003年。
12. 大江健三郎、『読む人間: 読書講義』、集英社、東京、2007年。
13. 大江健三郎、『私という小説家の作り方』、新潮社、東京、1998年。
14. Oe, Kenzaburo, *Japan the Ambiguous and Myself*, Kodansha International, Tokyo, 1995年。

*

1. 大江健三郎他、「大江健三郎、『^{レイト・ワーク}後期の仕事』の現場から——国際視野における大江文学」(シンポジウム)、国際視野中的大江健三郎文学學術研討會論文集、中央研究院、中國文哲研究所、臺北、2009年。
2. 大江健三郎・江藤淳の対談「現代をどう生きるか」、『群像』、23(1)、1968年1月号。
3. 大江健三郎、「叫ぶ全学連とふるえる学生——全国三十万の学生に背を向けられないために——」(『文芸春秋』、1958年11月号)。
4. 大江健三郎、安江良介、「初心から逃れられずにきた——対談 大江健三郎、安江良介」、『世界』、(603)、1995年1月号。

二次資料 (日本語文献)

1. 李榮薫、『大韓民国の物語: 韓国の「国史」教科書を書き換えよ』、永島広紀訳、文藝春秋、東京、2009年。
2. 石原千秋、木股知史、小森陽一、島村輝、高橋修、高橋世織、『読むための理論: 文学・思想・批評』、世織書房、横浜、1991年。
3. 一條孝夫著『大江健三郎—その文学世界と背景』、和泉書院、大阪、1997年。
4. 岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 1 40・50年代』、紀伊國屋書店、東京、2009年。
5. 岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 2 60・70年代』、紀伊國屋書店、東京、2009年。
6. 岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大、小森陽一、成田龍一編、『戦後日本スタディーズ 3 80・90年代』、紀伊國屋書店、東京、2009年。
7. 江藤淳、『崩壊からの創造』、勁草書房、東京、1969年。

8. 王新新、『再啓蒙から文化批評へ：大江健三郎の一九五七～一九六七』、東北大学出版会、仙台、2007年。
9. 大嶽秀夫、『新左翼の遺産』、東京大学出版会、東京、2007年。
10. 加藤周一、『日本文学史序説——下』、ちくま学芸文庫、東京、2012年。
11. 柄谷行人、『終焉をめぐる』、講談社、東京、1995年。
12. 川村湊、『戦後文学を問う——その体験と理念』、岩波書店、東京、1995年。
13. 姜尚中、小森陽一、『戦後日本は戦争をしてきた』、角川書店、東京、2007年。
14. 小島亮、『ハンガリー事件と日本：一九五六年・思想史的考察』、東京、現代思潮新社、2003年。
15. 小森陽一、『ことばの力平和の力：近代日本文学と日本国憲法』、かもがわ出版、京都、2006年。
16. 小森陽一、『小説と批評』、世織書房、横浜、1999年。
17. 小森陽一、『ポストコロニアル』、岩波書店、東京、2001年。
18. 小森陽一、『レイシズム』、岩波書店、東京、2006年。
19. 小森陽一、坂本義和、安丸良夫編、『歴史教科書 何が問題か:徹底検証 Q&A』、岩波書店、東京、2001年。
20. 小森陽一、『歴史認識と小説：大江健三郎論』、講談社、東京、2002年。
21. 坂本徳松、『第三世界論』、東方書店、東京、1976年。
22. サルトル、ジャン・ポール、『シチュアシオンⅢ』、海老坂武、鈴木道彦訳、人文書院、京都、1964年。
23. 篠原茂、『大江健三郎事典』、森田出版、東京、1998年。
24. 篠原茂、『大江健三郎論』、東邦出版社、東京、1973年。
25. 絳秀実、『革命的な、あまりに革命的な——「1968年の革命」史論』、作品社、東京、2003年。
26. 絳秀実、『吉本隆明の時代』、作品社、東京、2008年。
27. 日本社会党、『資料日本社会党四十年史』、日本社会党中央本部、東京、1985年。
28. 沼野充義みつよし、『W文学の世紀へ：境界を越える日本語文学』、五柳書院、東京、2001年。
29. 松原新一、『大江健三郎の世界』、講談社、東京、1967年。
30. 文芸研究プロジェ、『よくわかる大江健三郎』、改訂新版、ジャパン・ミックス、東京、1998年。
31. 山田盟子、『占領軍慰安婦——国策売春の女たちの悲劇』、光人社、東京、1992年。

二次資料（外国語文献）

1. Ahmad, Aijaz, *In Theory—Classes, Nations, Literatures*, Verso Books, London, New York, 1992年。

2. Alteras, Isaac, *Eisenhower and Israel: U.S.-Israeli relations, 1953-1960*, University Press of Florida, Gainesville, 1993 年.
3. Auden, W.H., *Collected Poems*, edited by Mendelson, Edward, Modern Library, New York, 2007 年／オーデン、W.H.、深瀬基寛訳、『オーデン詩集』、筑摩書房、東京、1955 年.
4. Balzac, Honoré de, *Oeuvres de H. de Balzac*, Tome Deuxième, Méline, Cans et Cie Bruxelles, 1871 年.
5. Bassil, Mardelli, *Middle East Perspectives: Personal Recollections*, (1947-1967), iUniverse, Bloomington, Indiana, 2010 年.
6. Damrosch, David, *What is World Literature ?*, Princeton University Press, Princeton, 2003 年.
7. Dowsey, Stuart, J. (editor), *Zengakuren: Japan's Revolutionary Students*, The Ishi Press, Berkeley, 1970 年.
8. Eagleton, Terry, *Marxism and Literary Criticism*, University of California Press New Jersey, 1976 年.
9. Eckermann, Johann, Peter, *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*, Berlin : Aufbau-Verlag, Berlin, 1982 年／エッカーマン・ヨハン・P.、『ゲーテとの対話』、山下肇訳、岩波書店、東京、1968～1969 年.
10. Einaudi, Jean-Luc, *La Bataille de Paris – 17 octobre 1961* (réédition en poche en 2001, postface inédite de l'auteur), Édition SEUIL, Paris, 2001 年.
11. Eradam, Yusuf, *Vaniyalı İdeoloji—Küresel Bellek Üzerine Denemeler* (『バニラがかかったイデオロギー、グローバルの記憶をめぐるエッセイ集』) Aykırı Yayıncılık, İstanbul, 2004 年.
12. Fanon, Frantz, *Les damnés de la terre*, préface de Jean-Paul Sartre (1961), préface de Alice Cherki et postface de Mohammed Harbi (2002), La Découverte/Poche, Paris, 2002 年／ファノン、フランツ、『地に呪われたる者』、みすず書房、東京、1996 年.
13. Forest, Philippe, *Oe Kenzaburo Legendes d'un Romancier Japonais*, Editions Pleins Feux, Nantes, 2001 年.
14. Gascar, Pierre, *Les Bêtes*, Editions Gallimard, Paris, 1978 年／ガスカール・ピエール、『けものたち 死者の時』、渡辺一夫、佐藤朔、二宮敬訳、岩波書店、東京、1955 年.
15. Hermanos, Juan *La fin de l'espoir: témoignage traduit de l'espagnol*, Préface par Jean-Paul Sartre, Julliard, 1950 年／ヘルマノス、フアン、『希望の終り』、松浪信三郎訳、ダヴィッド社、1954 年.
16. Kahin, George McTurnan, *The Asian-African Conference Bandung, Indonesia, April 1955*, Cornell University Press, Oxford University Press, Ithaca, 1956 年.

17. Kerouac, Jack, *On the Road*, Penguin Books, London, 2000 年／ケルアック、ジャック、『路上』、福田実訳、河出書房新社、東京、1977 年.
18. Kesey, Ken, *One Flew over the Cuckoo's Nest*, Viking Press, New York, 1962 年.
19. Lamouchi, Noureddine, *Jean-Paul Sartre et le tiers monde : rhétorique d'un discours anticolonialiste*, Harmattan, Paris, 1996 年.
20. Lang, Anthony, F., *Agency and Ethics: the Politics of Military Intervention*, State University of New York Press, New York, 2001 年.
21. Lawrence, D.H., *Lady Chatterley's Lover*, Penguin Twentieth Century Classics, London, 1994 年／ローレンス、D.H., 『チャタレイ夫人の戀人』、伊藤整譯、小山書店、1950 年.
22. Leak, Andrew, N., *Jean Paul Sartre*, Reaktion Books - Critical Lives, London, 2006 年.
23. Marx, Karl; Engels, Friedrich, *Manifesto of the Communist Party* (1848) authorized English translation edited and annotated by Friedrich Engels, Rand School of Social Science, New York, 1919 年.
24. Miller, Henry, *The Air-conditioned Nightmare*, New Directions, New York, 1945 年／ミラー、ヘンリー、『冷房装置の悪夢』、大久保康雄訳、新潮社、東京、1954 年.
25. Mudimbe, V.Y., *The Invention of Africa: Gnosis, Philosophy, and the Order of Knowledge*, Indiana University Press, Bloomington, 1988 年.
26. Murray, Stephen, O., *Homosexualities—Worlds of Desire: The Chicago Series on Sexuality, Gender, and Culture*, University of Chicago Press, Chicago, 2000 年
27. Napier, Susan, J., *Escape from the wasteland: romanticism and realism in the fiction of Mishima Yukio and Oe Kenzaburo*, Harvard University Press, Cambridge, 1995 年.
28. Nkrumah, Kwame *Neo-Colonialism, The Last Stage of Imperialism*, Thomas Nelson & Sons, Ltd., London, 1965 年／エンクルマ・クワメ、『新植民地主義』、家正治、松井芳郎共訳、理論社、東京、1971 年.
29. Paulhan, Jean, *Petite préface à toute critique*, Éditions de Minuit, Paris, 1951 年.
30. Pollack, David, *Reading Against Culture: Ideology and Narrative in the Japanese Novel*, Cornell University Press, Ithaca, N.Y., 1992 年.
31. Prendergast, Christopher; Anderson, Benedict; Richard O'Gorman, *Debating World Literature*, Verso Books, London, New York, 2004 年.
32. Said, Edward W., *Beginnings: Intention and Method*, Granta Books, London, 1997 年／サイド、エドワード・W., 『始まりの現象——意図と方法』、山形和美、小林昌夫訳、法政大学出版局、東京、1992 年.
33. Said, Edward W., *Culture and Imperialism*, Vintage Books, New York, 1994 年／サイド、エドワード・W., 『文化と帝国主義』、大橋洋一訳、みすず書房、1998 年～2001 年.

34. Said, Edward W., *On Late Style: Music and Literature against the Grain*, foreword by Mariam C. Said; introduction by Michael Wood, Pantheon Books, New York, 2006 年／サイド、エドワード・W.、『晩年のスタイル』、大橋洋一訳、岩波書店、東京、2007 年.
35. Said, Edward W., *Orientalism*, Penguin Books, London, 2003 年.
36. Said, Edward W., *Representations of the Intellectual: The 1993 Reith Lectures* Vintage Books ed., New York, 1994 年／サイド、エドワード・W.、『知識人とは何か』、大橋洋一訳、平凡社、東京、1998 年.
37. Sartre, Jean-Paul, *Colonialisme et néo-colonialisme, Situations V*, Editions Gallimard, Paris, 1964 年／サルトル、ジャン・ポール、『植民地の問題』、渡辺淳、鈴木道彦、海老坂武、浦野衣子、加藤晴久訳、人文書院、京都、2000 年.
38. Sartre, Jean-Paul, *Colonialism and Neocolonialism*, Translation by Azzedine Haddour, Steve Brewer and Terry Mc Williams, With a preface by Robert Young and a new introduction by Azzedine Haddour, Routledge Classics, Oxon, 2006 年.
39. Sartre, Jean-Paul, *Critique de la Raison dialectique, tome 2 : L'Intelligibilité de l'Histoire* (sous la direction de) Arlette Elkaïm-Sartre, Editions Gallimard, Paris, 1985 年.
40. Sartre, Jean-Paul, *Le Mur*, Editions Gallimard, Barcelone, 2006 年／サルトル、ジャン・ポール、『壁：短篇集』、伊吹武彦訳者代表、人文書院、京都：1950 年.
41. Sartre, Jean-Paul, *La Nausée*, Jacques Deguy présente, Gallimard, Paris, 1993 年.
42. Sartre, Jean-Paul, “Orphée noir,” Senghor, Léopold Sédar, *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache*, Presses Universitaires de France, Paris, 1948 年／サルトル、ジャン・ポール、「黒いオルフェ」、『シチュアション』、海老坂武、鈴木道彦訳、人文書院、京都、1964 年.
43. Sartre, Jean-Paul, *Qu'est-ce que la littérature?*, Editions Gallimard, Paris, 1948 年／サルトル、ジャン・ポール、『文学とは何か』、(『シチュアション II』所収)、加藤周一、白井健三郎訳、改訂版、人文書院、京都、1952 年.
44. Sartre, Jean-Paul, *Réflexions sur la question juive*, présentation par Arlette Elkaïm-Sartre, Editions Gallimard, Paris, 1954 年／サルトル、ジャン・ポール、『ユダヤ人』、東京、岩波書店、1956 年.
45. Sedgwick, Eve, Kosofsky, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press, New York, 1985 年／セジウィック、イヴ、K.、『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、原早苗、亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、名古屋、2001 年.
46. Todorov, Tzvetan, (éditeur), *Théorie de la littérature, textes des formalistes russes*, Seuil, Paris, 1965 年／ツヴェタン、トドロフ、『文学の理論：ロシア・フォルマリスト論集』、野村英夫訳、理想社、東京、1971 年.

47. Tutuola, Amos, *The Palm Wine Drinkard and My Life in the Bush of Ghosts*, Grove Press, New York, 1984 年.
48. Wilson, Michiko, *The Mariginal World of Oe—A Study in Themes and Techniques*, M.E. Sharpe Inc., New York, 1986 年.
49. Žižek, Slavoj, *Violence: Six Sideways Reflections*, 1st Picador ed. Picador, New York, 2008 年／ジジェク、スラヴォイ、『暴力：6つの斜めからの省察』、中山徹訳、青土社、東京、2010 年.

雑誌論文など（日本語文献）

1. 饗庭孝男、^{あいば}「大江・江藤における人間存在の凝視——その実存と認識者の眼」、「江藤淳と大江健三郎——特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971 年 1 月号.
2. 秋山駿、「大江健三郎論——ベンチの上の感想」、(江藤淳と大江健三郎《特集》)、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971 年 1 月号.
3. 石田一真、「大江健三郎とジャック・ケルアック：『われらの時代』と *On the Road* (『路上』) についての考察」、『人文学論叢』、(4)、愛媛大学人文学会、2002 年.
4. 石原千秋、「『叫び声』『個人的な体験』——反転する帝国」、「いま大江健三郎の小説を読む——大江健三郎の小説を読む」、『国文学 解釈と教材の研究』、42(3)、1997 年 2 月号.
5. 伊豆利彦、「万延元年のフットボール」、「江藤淳と大江健三郎——特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971 年 1 月号.
6. 磯貝英夫、^{いそがい}「芽むしり仔撃ち」、「江藤淳と大江健三郎——特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971 年 1 月号.
7. 江藤淳、平野謙、山本健吉、「座談会——1965 年文壇総決算」、『文學界』、19(12)、1965 年 12 月号.
8. 江藤淳、篠田一士、澁澤龍彦、「座談会——大江健三郎の文学」、『新潮』、55(11)、1958 年 11 月号.
9. エンクルーマ、クワメ、「アフリカは目覚めた」、『世界』、(137)、1957 年 5 月号.
10. 大河内昭爾、^{おおこうちしょうじ}「大江健三郎と石原慎太郎」、「70 年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・主要作品の分析」、『国文学 解釈と鑑賞』、36(8)、1971 年 7 月号.
11. 小笠原克、^{おがさわら}「中期、『個人的な体験』への道」、「戦後世代の文学——安部公房・大江健三郎・吉本隆明(特集)」、『国文学』、34(10)、1969 年 9 月号.
12. 小笠原克、^{おがさわら}「芽むしり 仔撃ち」、「70 年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・主要作品の分析」、『国文学 解釈と鑑賞』、36(8)、1971 年 7 月号.
13. 加藤周一、「サルトルと共産主義」、『世界』、(137)、1957 年 5 月号.

14. 柄谷行人、「読者としての他者——大江・江藤論争」、「江藤淳と大江健三郎——特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971年1月号。
15. 菊地昌典、「想像力における政治——『ヒロシマ・ノート』『沖縄ノート』を中心に——大江健三郎——方法化した想像力」、『国文学 解釈と教材の研究』、24(2)、1979年2月号。
16. ギュヴェン、デヴリム、C.、「大江健三郎の『下降生活者』における「ホモソーシャル」な力関係」、『言語情報科学』 (6)、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2008年。
17. ギュヴェン、デヴリム、C.、「大江健三郎の最初期小説における「政治的な参加」の問題——『喝采』を中心に——」、『言語情報科学』 (9)、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2011年。
18. 栗坪良樹、「『個人的な体験』——堅穴式から、抜け道のある洞穴式へ」、「江藤淳と大江健三郎——特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971年1月号。
19. 栗坪良樹、「日常生活の冒険」、「70年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・主要作品の分析」『国文学 解釈と鑑賞』 36(8)、1971年7月号。
20. 紅野謙介、「『われらの時代』——クリーシェの森」、『国文学 解釈と教材の研究』、42(3)、1997年2月号。
21. 小久保実、「われらの時代」、「70年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・主要作品の分析」、『国文学 解釈と鑑賞』、36(8)、1971年7月号。
22. 小島信夫、「《自殺の危機》——『われらの時代』大江健三郎」、『新潮』、56(9)、1960年9月号。
23. 小島亮、『ハンカリー事件と日本：一九五六年・思想史的考察』、東京、現代思潮新社、2003年。
24. 小森陽一、「拮抗する言葉の力——大江健三郎『水死』を読む」、『世界』、(803)、2010年4月号。
25. 佐々木俊次、「サルトルと政治——現代思想の動き」、『理想』、(296)、1958年1月号。
26. サルトル、ジャン・ポール、「王位をねらうもの」、内山 敏訳、『中央公論』、73(7)、1958年7月号。
27. サルトル、ジャン・ポール、「ひとつの勝利」、『中央公論』、73(5)、1958年5月号。
28. サルトル、ジャン・ポール、「フランスの左翼再建のために」、『世界』、(135)、1957年3月号。
29. サルトル、ジャン・ポール、「私は弾劾する サルトル」、『世界』、(133)、1957年1月号。
30. 清水幾太郎、「歴史の中の人間——サルトルについて」、『思想』、(395)、1957年5月号。

31. 鈴木道彦、「第四共和国の運命——ド・ゴールの神話をめぐって」、『中央公論』、73(7)、1958年7月号。
32. 助川徳是、「後期『万延元年のフットボール』を中心に」、「戦後世代の文学——安部公房・大江健三郎・吉本隆明——特集」、『国文学』、34(10)、1969年9月号。
33. 助川徳是、「『見るまえに跳べ』——にがい静寂」、「70年代の政治と性・大江健三郎特集——大江健三郎・主要作品の分析」、『国文学解釈と鑑賞』、36(8)、1971年7月号。
34. 関井光男、「大江健三郎と江藤淳」、「70年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・主要作品の分析」『国文学 解釈と鑑賞』、36(8)、1971年7月号。
35. 宋仁善、「ベトナム戦争の現実と架空——大江健三郎《生け贄男は必要か》」、『日本文学』、55(9)、2006年9月号。
36. 高山鉄男、「文芸批評のモチーフと位相」、「江藤淳と大江健三郎——特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971年1月号。
37. 拓植光彦、「大江健三郎」、「戦後世代の文学——安部公房・大江健三郎・吉本隆明——特集」、『国文学』、34(10)、1969年9月号。
38. 竹内芳郎、「サルトル」、『悲劇喜劇』、12(1)、1958年1月号。
39. 田中英道、「文学的想像力と成熟——或いは水源の「幼児」」、「江藤淳と大江健三郎——特集」、『国文学 解釈と教材の研究』、16(1)、1971年1月号。
40. 中上哲夫、「保守主義——コンサーバティズム ジャック・ケルアックのもうひとつの顔」、『現代詩手帖』、31(2)、1988年1月号。
41. 沼野充義、「世界（文学）とは何か?」、『UP』、東京大学出版会、東京、2005年。
42. 長谷川泉、「戦後世代の新しい文学論理」、「戦後世代の文学——安部公房・大江健三郎・吉本隆明——特集」、『国文学』、34(10)、1969年9月号。
43. 平井啓之、「サルトルの提起した問題」、『中央公論』、73(2)、1958年2月号。
44. 藤島宇内、「沖縄とアルジェリア」、『中央公論』、73(5)、1958年5月号。
45. 松沼美穂、「植民地支配の過去と歴史・記憶・法 近年のフランスでの論争から」、『ヨーロッパ研究』、6、2007年3月号。
46. 薬師寺章明、「大江健三郎と開高健」、「70年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・主要作品の分析」『国文学 解釈と鑑賞』、36(8)、1971年7月号。
47. 保昌正夫、「大江健三郎と横光利一」、「70年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・文学と位置」、『国文学 解釈と鑑賞』、36(8)、1971年7月号。
48. 山田博光、「個人的な体験」、「70年代の政治と性・大江健三郎（特集）——大江健三郎・主要作品の分析」『国文学 解釈と鑑賞』、36(8)、1971年7月号。
49. 兪承昌、「小松川事件の《表象》と大江健三郎の『叫び声』」、『日本近代文学』、74、2006年5月号。
50. 渡辺広士、「大江健三郎における政治と性」、「戦後世代の文学——安部公房・大江

健三郎・吉本隆明——特集』、『国文学』、34(10)、1969年9月号。

雑誌論文など（外国語文献）

1. Ali, Tariq, “Literature and Market Realism,” *New Left Review*, 199, May-June, 1993 年.
2. Anderson, Perry, “On the Concatenation in the Arab World,” *New Left Review* 68, March-April, 2011 年.
3. Dirlik, Arif, “Global South: Predicament and Promise,” *The Global South*, Volume 1, Numbers 1 & 2, 2007 年.
4. Güven, Devrim, Çetin, “Başka Bir ‘Dünya Edebiyatı’nın İzinde—Oe Kenzaburo’nun ‘Roman Yöntemi’”（「別の《世界文学》を求めて——大江健三郎の《小説の方法》について」）227～247 頁,”（「大江健三郎の《小説の方法》の独自性の背景」）、*I. Türkiye’de Japonya Çalışmaları*,（『トルコにおける第一回日本学学会』）、Boğaziçi Üniversitesi Yayınevi、Araştırma - İnceleme Dizisi、İstanbul, 2012 年.
5. Hasegawa, Kenji, “In Search of a New Radical Left: The Rise and Fall of the Anpo Bund—1955~1960,” *Stanford Journal of East Asian Affairs*, Volume 3, Number 1, Spring 2003.
6. Isherwood, Christopher, “Beyond Boundaries: Centre/Periphery Discourse in Oe Kenzaburo’s *Dojidai Gemu* & Witi Ihimaera’s *The Matriarch*,” *New Zealand Journal of Asian Studies*, 5, 2 December, 2003 年.
7. Komori, Yôichi, “21. Yüzyılda Japon Edebiyatını Yeniden Okumak,”（「21 世紀に日本文学を読みなおす」）、*I. Türkiye’de Japonya Çalışmaları*,（『トルコにおける第一回日本学学会』）、Boğaziçi Üniversitesi Yayınevi、Araştırma - İnceleme Dizisi、İstanbul, 2012 年.
8. Moretti, Franco, “Conjectures on World Literature,” *New Left Review* 1, January-February 2000 年.
9. Said, Edward, W., “Preface to *Orientalism*,” *Al Ahrām Weekly*, 7 - 13 August 2003.
10. Sartre, Jean-Paul, “La fin de l'espoir: témoignage traduit de l'espagnol,” *Les Temps Modernes*, no : 50, 1040~1088 頁, Decembre 1949.
11. Sauvy, Alfred, “Trois mondes, une planète,” *L'Observateur*, n°118 14 août 1952.
12. Walsh, Lynn, “The Suez fiasco 1956,” *Socialism Today*, issue 104 October 2006.

映像資料

1. Said, Edward, W., *The Myth of “Clash of Civilizations,”* DVD Directed by. Sut Jully Northampton, M A: Media Education Foundation, 1998 年.

新聞記事

1. 「朝鮮戦争時の韓国軍にも慰安婦制度 韓国の研究者発表」、『朝日新聞』、2002年2月23日号。
2. 「ノーベル文学賞大江健三郎に——アジア文学のためになれば」、『朝日新聞』（日刊）、1994年10月14日号。
3. Chastand, Jean-Baptiste, “La « paix des mémoires » se construit à deux,” *Le Monde*, 22 décembre 2012.

オンライン資料

1. 飛幡祐規たかはた ゆうき、「原発を止める力と人間の威厳—大江健三郎さんと鎌田慧さんがパリで語ったこと」、<http://www.labornetjp.org/news/2012/1332477237183staff01>、2012年3月22日。
2. Aijaz, Ahmad; Amin, Samir,
<http://newsclick.in/international/samir-amin-movement-has-neither-won-nor-lost-egypt>, 17 Apr 2012.
3. Aijaz, Ahmad; Amin, Samir,
<http://newsclick.in/international/samir-amin-us-imperial-project-destroy-arab-nations-0>, 17 Apr 2012.
4. "Algiers History," <http://algierspoint.org/AHS/history.html> algierspoint.org
5. Hungerford, Amy, “Lecture 9 - Jack Kerouac, *On the Road*,”
<http://oyc.yale.edu/english/american-novel-since-1945/content/sessions/session-9-jack-kerouac-on-the-road>, April 8, 2011.
6. Wilson, Michiko, Niikuni, “Kenzaburo Oe: Laughing Prophet and Soulful Healer,”
http://nobelprize.org/nobel_prizes/literature/articles/oe/index.html)
7. Woods, Alan “The Chinese Revolution of 1949,”
<http://www.marxist.com/chinese-revolution-1949-one.htm>, 01 October 2009.

辞典、百科事典など

1. 磯田光一（他 編集）、『新潮日本文学辞典』、増補改訂新潮社、東京、1988年。
2. 『広辞苑 第五版』、岩波書店、東京、2003年。

3. 『ジーニアス英和大辞典』、大修館、東京、2001~2002年.
4. 『日本大百科全書』、『日本大百科全書』+『国語大辞典—スーパー・ニッポニカ』
5. 『プチ・ロワイヤル仏和辞典』、第三版、旺文社、東京、2003年.
6. CD-ROM Windows版」、小学館、東京、1998年.
7. Quinn, Edward, *Dictionary of Literary and Thematic Terms*, Facts on File, New York, 2006年.
8. *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*, Unabridged, G. & C. Merriam Company, Springfield, 1981年.

謝辞

本研究は東京大学大学院総合文化研究科博士課程に在学中に、同研究科、小森陽一教授のご指導のもと行いました。

本論文を纏めるにあたり長きにわたり、温かいご指導・ご鞭撻を賜った小森陽一教授をはじめ、執筆資格審査以来ご指導頂く機会に恵まれ、貴重なご助言と建設的なフィードバックなどを数多く頂きました副査の先生方、山田広昭教授、島村輝教授、田尻芳樹准教授、武田将明准教授に、心から感謝致します。

また、本論文のネイティブ・チェックに際し、大変お世話になりました、三浦友起子さん、小島史明さんおよび小島龍一さんにも厚く御礼申し上げます。

本研究の完成に様々な形でご支援下さった皆様へこの謝辞を捧げます。ありがとうございました。